大阪府埋蔵文化財調査報告2011－9

府中遺跡･豊中遺跡･板原遺跡

－都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う調査－

大阪府教育委員会

府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡
大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一一―九
大阪府教育委員会

府中遺跡･豊中遺跡･板原遺跡

－都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う調査－

大阪府教育委員会

序　　文

大阪府教育委員会では国道26号線穴田交差点から府道大阪和泉泉南線市役所北交差点までの拡幅とＪＲ阪和線との立体交差を目的として計画された、都市計画道路和泉中央線の整備事業に伴い、平成14年から平成21年まで８年間にわたり発掘調査を実施してきました。

この区間には府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の３遺跡が含まれています。３遺跡はそれぞれ縄文時代から近世までの各時代の遺構･遺物が出土する複合遺跡として知られてきました。

先に刊行しました『府中遺跡』、『府中遺跡Ⅱ』ではＪＲ阪和線から市役所北交差点までの区間の調査成果を報告しましたが、本書ではＪＲ阪和線から穴田交差点までの区間に所在する府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の調査成果をまとめました。

今回の調査では、縄文時代前期に遡る土器が出土し、中期から後期の遺構を検出しました。また、弥生時代の土坑や古墳時代の建物跡、鎌倉・室町時代の建物跡や井戸など各時代の多様な遺構・遺物が検出されました。これらの調査成果は、和泉国の国府所在地として栄えてきましたこの地域の歴史を理解し、豊かな文化を育むための貴重な資料になるものと思います。

今回の発掘調査は、近辺に代替道路がないため、迂回路の設置やバス停の移動を伴うもので､地元の皆様や関係各機関には格段のご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府が取り組んでおります文化財保護行政にご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成24年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　　言

1．　本書は大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した、都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の発掘調査のうち、平成15年度から平成21年度まで実施した府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は文化財保護課調査第二グループの課長補佐高島徹(平成20年度まで)、大野薫(平成21年度）の指示のもと、平成15年度、平成16年度が主査亀島重則、平成17年度が主査藤澤眞依、平成18年度が副主査関真一、平成19年度が技師阿部幸一、平成20年度が主査三木弘、同竹原伸次、副主査土屋みづほ、技師阿部幸一、平成21年度が主査三木弘、技師阿部幸一がそれぞれ担当した。遺物整理は平成15年度から平成23年度まで調査管理グループ主査三宅正浩、副主査林日佐子、同藤田道子が担当した。

3．　本調査の調査番号は平成15年度が03020、平成16年度が04017、平成17年度が05037、平成18年度が06017、平成19年度が07001、平成20年度が08002、平成21年度が09004である。本書中では各調査区ごとに年度と調査番号を組み合わせ、03－１区、04－３－２区、06－２区のように年度を２桁で記した。平成17年度は１調査区であるが既に報告した府中遺跡でも調査区が存在することから05－２区とした。

4．　本調査の写真測量は、平成15年度が株式会社ウエスコ、平成16年度、平成17年度が写測エンジニアリング株式会社、平成18年度が株式会社日建技術コンサルタント、平成19年度が有限会社エムズ、平成20年度が株式会社フオックス、株式会社エムズ、平成21年度が株式会社エムズにそれぞれ委託した。

5．本書に掲載した遺物の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。

6．　平成15年度、平成16年度に土壌の花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を掲載した。

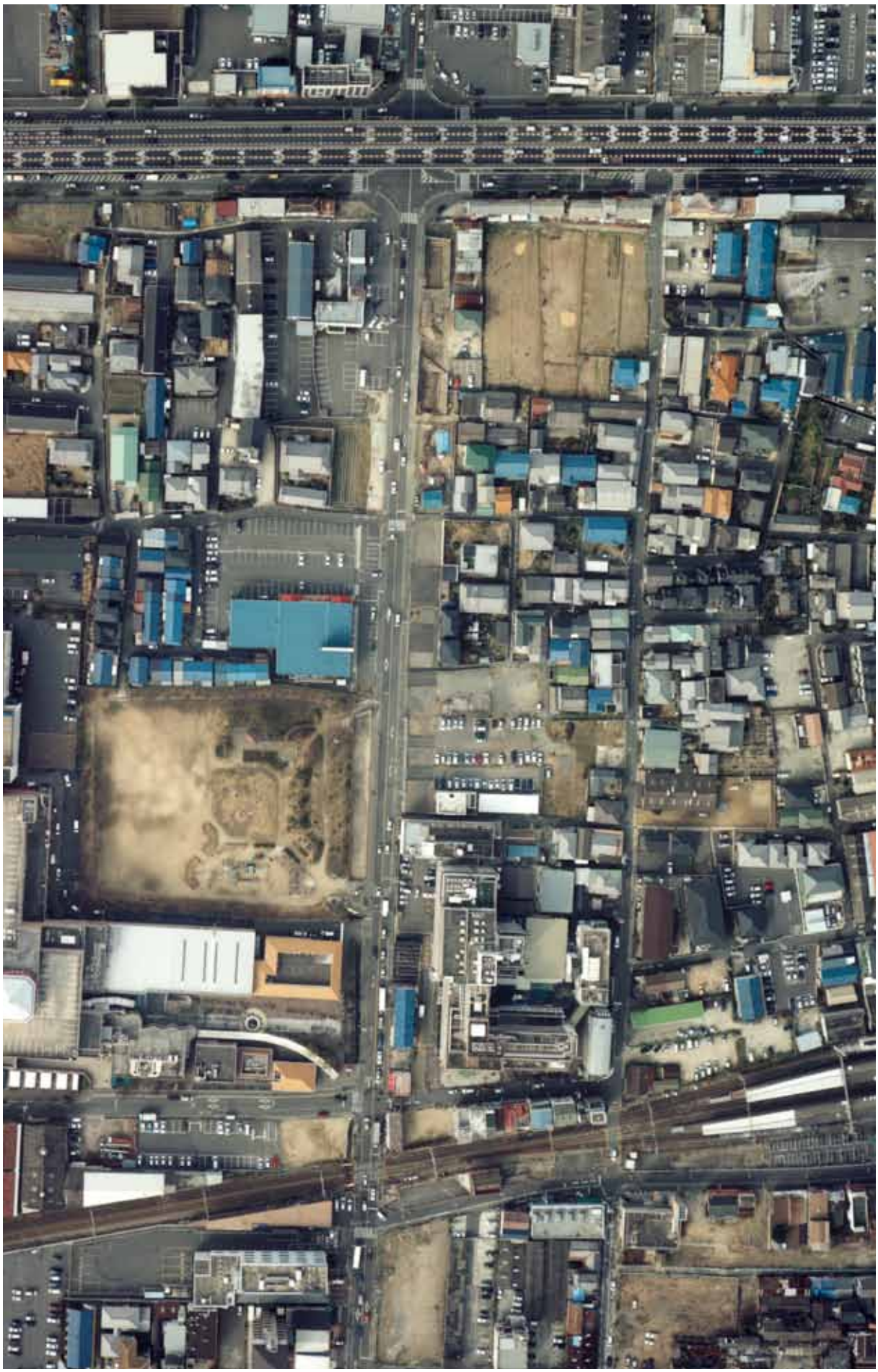
7．　調査で作成した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会が保管している。

8．　発掘調査、遺物整理に当たっては和泉市教育委員会文化財振興課の白石耕治、乾哲也、千葉太朗の各氏、京都大学文学部考古学研究室の方々などの助言を得た。記して感謝いたします。

9．　本書の編集は阿部幸一が担当し、執筆は阿部幸一、三木弘、関真一が担当した。また縄文土器は大野薫が執筆した。

10.　発掘調査、遺物整理並びに本書の作成に要した費用は大阪府都市整備部が負担した。

11.　本報告書は300部作成し、１部当たりの印刷単価は3,262円である。



調査地全景（上が北西　2005年1月撮影）

09-1 区（南東から　2009 年 6 月撮影）

目　　次

序文
例言
巻頭図版１　調査地全景（上が北西　2005年1月撮影）
巻頭図版２　09-1区（南東から　2009年6月撮影）
第１章　調査の経緯と方法 …… 1
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の方法 …… 2
第２章　立地と環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査結果 …… 8
第１節　基本層序 …… 8
第２節　各調査区の遺構と遺物 …… 10
１．03区 …… 10
２．04区 …… 53
３．05-2区 …… 82
４．06-2区 …… 83
５．07区 …… 92
６．08区 …… 112
７．09区 …… 126
第３節　縄文土器 …… 143
第４節　縄文時代のまとめ …… 151
第５節　石製品 …… 161
第４章　理化学分析 …… 165
第１節　豊中遺跡、板原遺跡の花粉分析 …… 165
１．板原遺跡03-3-2区の花粉分析 …… 165
２．豊中遺跡04-1区、板原遺跡04-3区の花粉分析 …… 185
第５章　まとめ …… 197

表　目　次

表１　縄文土器観察表（1～3） …… 148～150
表２　縄文土器編年表 …… 151
表３　和泉中央線関係調査区一覧表 …… 152
表４　1地点・2地点の花粉分析結果 …… 168
表５　3地点・4地点の花粉分析結果 …… 169
表６　井戸曲物内・04SK・09SDの花粉分析結果 …… 170
表７　04区　分析試料一覧 …… 192
表８　04区　花粉分析結果 …… 193

挿　図　目　次

第 1図　調査区位置図 …… 2
第 2図　大阪府南部地域の地質図（「泉大津市史」より転載）… 3
第 3図　府中遺跡周辺の主な遺跡 …… 5
第 4図　04-1区・04-3-1区柱状図、08-9区、09-1区断面図 … 9
第 5図　03-1区第1面平面図（S=1/200）…… 11
第 6図　03-1区第2面平面図（S=1/200）…… 11
第 7図　03-1区第3面石集積部 …… 12
第 8図　03-1区4面各遺構平面･断面図（S=1/40）…… 14
第 9図　03-1区4面･5面平面図 …… 15･16
第 10図　03-1区88ＳＫ平面図、438ＳＫ平面･断面図…… 17
第 11図　03-1区88ＳＫ出土遺物実測図１ …… 19
第 12図　03-1区88ＳＫ出土遺物実測図２ …… 20
第 13図　03-1区88ＳＫ出土遺物実測図３ …… 21
第 14図　03-1区1ＳＲ出土遺物実測図 …… 22
第 15図　03-1区95ＳＫ出土遺物実測図 …… 22
第 16図　03-1区105、106, 119, 130, 155、158、201, 203、115、101の各遺構出土遺物実測図 …… 22
第 17図　03-1区各遺構出土遺物実測図 …… 23
第 18図　03-1区各遺構 91SD(197,198)、92SD(199,200), 94SK(201)、57SK(202)出土遺物実測図…… 24
第 19図　03-1区包含層出土遺物実測図 …… 25
第 20図　03-2-1区第1面、第2面遺構平面図(1/200) …… 27
第 21図　03-2-1区25ＳＫ出土遺物実測図 …… 28
第 22図　03-2-1区80ＳＫ出土遺物実測図 …… 28
第 23図　03-2-2区平面図1ＳＫ、37ＳＫ平面・断面図 …… 29
第 24図　03-2-2区15ＳＥ平面･断面図 …… 30
第 25図　03-2-2区、03-3-1区第4面平面図 …… 31
第 26図　03-2-2区1ＳＫ出土遺物実測図 …… 32
第 27図　03-2-2区37ＳＫ出土遺物実測図 …… 33
第 28図　03-2-2区包含層出土遺物実測図１ …… 34
第 29図　03-2-2区5ＳＫ、12ＳＫ、15ＳＫ包含層出土遺物実測図 34
第 30図　03-3-1区平面図 …… 35
第 31図　03-3-2区1ＳＥ平面･断面図 …… 36
第 32図　03-3-2区平面図4ＳＫ平面･断面図 …… 37
第 33図　03-3-3区平面図、土器列遺物出土状況図（S=1/40）…… 38
第 34図　03-3区6ＳＲ平面図 …… 39
第 35図　03-3-1区2ＳＫ出土遺物実測図 …… 40
第 36図　03-3-1区3、9ＳＫ、6ＳＲ出土遺物実測図 …… 40
第 37図　03-3-1区10ＳＫ出土遺物実測図 …… 41
第 38図　03-3-1区6ＳＲ出土遺物実測図 …… 42
第 39図　03-3-1区6ＳＲ下層出土遺物実測図 …… 42
第 40図　03-3-1区501ＳＲ出土遺物実測図 …… 43
第 41図　03-2-2区中世土坑出土遺物実測図 …… 44
第 42図　03-3-2区1ＳＥ出土遺物実測図 …… 44

第 43図　03-3-2区1ＳＥ出土遺物実測図２ …… 45
第 44図　03-3-2区35ＳＤ出土遺物実測図 …… 46
第 45図　03-3-2区4ＳＫ他出土遺物実測図 …… 47
第 46図　03-3-3区2ＳＤ出土遺物実測図 …… 48
第 47図　03-3-3区3ＳＤ出土遺物実測図 …… 49
第 48図　03-3-1区包含層出土遺物実測図 …… 50
第 49図　03-3-2区包含層出土遺物実測図 …… 51
第 50図　03-3-3区包含層出土遺物実測図 …… 51
第 51図　04-1区第１遺構面平面図（Ｓ＝１/100） …… 54
第 52図　04-1区1ＳＢ、2ＳＢ平面・断面図（Ｓ＝1/50） …… 55
第 53図　04-2区2ＳＡ（上）、
04-1区2ＳＡ（中）、3ＳＡ（下）平面･断面図 …… 56
第 54図　04-1区201ＳＤ断面図 …… 56
第 55図　04-1区202ＳＫ平面･断面図 …… 57
第 56図　04-1区１ＳＡ平面･断面図 …… 57
第 57図　04-1区第2面平面図（1/100） …… 58
第 58図　04-1区第2面 501ＳＫ､502ＳＫ平面図､503ＳＫ平面･断面図 58
第 59図　04-2区第1面平面図 …… 60
第 60図　04-2区第1面１ＳＢ平面･断面図 …… 61
第 61図　04-2区第2面平面図 …… 62
第 62図　04-2区第3面平面図､501ＳＫ､502ＳＰ､503ＳＰ断面図 63
第 63図　04-1区1ＳＤ出土遺物実測図 …… 64
第 64図　04-1区４ＳＤ出土遺物実測図 …… 65
第 65図　04-1区10ＳＤ出土遺物実測図 …… 65
第 66図　04-1区3ＳＤ出土遺物実測図 …… 65
第 67図　04-1区2ＳＫ、8ＳＰ、11ＳＤ、6ＳＫ、19ＳＫ
出土遺物実測図 …… 66
第 68図　04-1区包含層出土遺物実測図 …… 66
第 69図　04-2区出土遺物 …… 67
第 70図　04-3-1区　第1面、第2面、第3面平面図（S=1/100）… 68
第 71図　04-3-1区1ＳＢ、2ＳＢ平面･断面図 …… 69
第 72図　04-3-2区第1面平面図、01ＳＢ、02ＳＢ
平面･断面図 …… 71・72
第 73図　04-3-2区第2面平面図 …… 73・74
第 74図　04-3-1区35ＳＰ、04-3-2区67、68ＳＰ平面･断面図 … 75
第 75図　04-3-3区第1面平面図 …… 76
第 76図　04-3-3区第2面、第3面平面図 …… 76
第 77図　04-3-3区１ＳＡ、１ＳＢ平面･断面図
3001ＳＤ、3002ＳＤ断面図 …… 77
第 78図　04-3-2区1ＳＫ、13ＳＤ出土遺物実測図 …… 78
第 79図　04-3-2区165ＳＤ、2ＳＫ出土遺物実測図 …… 78
第 80図　04-3-3区15ＳＫ、24ＳＫ出土遺物実測図 …… 79
第 81図　04-3-3区第4面3001ＳＤ出土遺物実測図 …… 79
第 82図　04-3-3区3002ＳＤ出土遺物実測図 …… 80
第 83図　04-3-3区包含層出土遺物実測図 …… 81
第 84図　05-2区平面図 …… 82
第 85図　06-2区調査区平面図 …… 83
第 86図　06-2区東壁断面図 …… 84
第 87図　06-2区北壁断面図 …… 84
第 88図　06-2区17・18・19ＳＫ平面･断面図 …… 85
第 89図　06-2区第2面平面図 …… 86
第 90図　06-2区各遺構断面図 …… 87
第 91図　06-2区第3面平面図 …… 88
第 92図　06-2区出土遺物実測図１ …… 89
第 93図　06-2区出土遺物実測図２ …… 91
第 94図　07-3区平面図 …… 92
第 95図　07-9区第1面平面図 …… 93
第 96図　07-8区、07-19区平面図 …… 93
第 97図　07-3区出土遺物実測図 …… 94
第 98図　07-11区第1面平面図 …… 95
第 99図　07-11ｂ区101、102、123ＳＤ断面図 …… 96
第100図　07-11区第2面平面図 …… 97･98
第101図　07-11ｂ区 103ＳＥ、104ＳＥ平面･断面図 …… 99
第102図　07-11ｂ区136ＳＥ、137ＳＥ、
138ＳＥ平面、断面図（Ｓ＝1/20 ） …… 100
第103図　07-11区遺構断面図 …… 101
第104図　07-11区33ＳＫ平面・断面図 …… 102
第105図　07-11区33ＳＫ出土遺物実測図 …… 103
第106図　07-11区12ＳＤ出土遺物実測図 …… 104
第107図　07-11ｂ区101、102、123ＳＤ出土遺物実測図 …… 105
第108図　07-11ｂ区103ＳＥ出土遺物実測図 …… 105
第109図　07-11ｂ区104、138ＳＥ出土遺物実測図 …… 106
第110図　07-11ｂ区119ＳＫ出土遺物実測図 …… 106
第111図　07-11ｂ区136、137ＳＥ出土遺物実測図 …… 107
第112図　07-11ｂ区135ＳＲ出土遺物実測図 …… 108
第113図　07-11区出土遺物実測図１ …… 109
第114図　07-11区出土遺物実測図２ …… 110
第115図　08-17区第1面平面図 …… 112
第116図　08-17区、10区、13区、15区平面図 …… 113
第117図　08-15区、9区、12区平面図（Ｓ＝1/100） …… 114
第118図　08-17区、10区第2面平面図、51ＳＤ断面図 …… 115
第119図　08-17区第3面平面図 …… 116
第120図　08-17区第3面１ＳＢ平面･断面図 …… 117
第121図　08-13区第3面平面図 …… 118
第122図　08-15区、12区第3面平面図 …… 119
第123図　08-16区第3面平面図、11ＳＤ断面図 …… 120
第124図　08-17区第4面平面図、71ＳＲ断面図 …… 121
第125図　08-13区､15区､9区､12区 第3･4面平面図 101ＳＲ断面図 122
第126図　08-16区第4面平面図 12ＳＤ断面図 …… 123
第127図　08-9区出土遺物実測図 …… 123
第128図　08-12区、15区、16区出土遺物実測図 …… 124
第129図　08-17区出土遺物実測図 …… 124
第130図　09-1区第2面・03-3区平面図 …… 127・128
第131図　09-1区第1面平面図 …… 129
第132図　09-1区21ＳＥ平面・断面図 …… 130
第133図　09-1区各遺構断面図（Ｓ＝1/40） …… 131
第134図　09-1区21ＳＥ、22ＳＤ、24ＳＰ出土遺物実測図 …… 132
第135図　09-1区包含層出土遺物実測図 …… 133
第136図　09-1区近世井戸出土遺物実測図 …… 134
第137図　09-2区出土遺物１ …… 137
第138図　09-2区出土遺物２ …… 138
第139図　09-2区第3面・第5面平面図 …… 139・140
第140図　09-2区出土遺物実測図3 …… 141
第141図　03区出土縄文土器実測図 …… 143
第142図　04区出土縄文土器実測図 …… 145
第143図　07-11区出土縄文土器 …… 145
第144図　09区出土縄文土器実測図 …… 146
第145図　時期別遺構分布図 …… 153
第146図　北白川下層Ⅱa式土器 …… 154
第147図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器 …… 154
第148図　中期後葉の主要な遺構 …… 155
第149図　北白川Ｃ式土器 …… 156
第150図　元住吉山Ⅰ式・宮滝式土器 …… 157
第151図　晩期前葉・中葉土器 …… 158
第152図　08区出土子持ち勾玉(S1)、紡錘車(S2)実測図 …… 161
第153図　03・04・09区出土石製品実測図１ …… 162
第154図　03・04・09区出土石製品実測図２ …… 163
第155図　03-3-2区の層序と分析層準採取位置 …… 167

第156図　基本土層１地点における主要花粉群集の層位分布 …… 171
第157図　基本層序2地点における主要花粉群集の層位分布 …… 172
第158図　基本層序3地点における主要花粉群集の層位分布 …… 173
第159図　基本層序4地点における主要花粉群集の層位分布 …… 174
第160図　各遺構における主要花粉化石群集の層位分布 …… 175
第161図　分析試料採取層準 …… 190
第162図　花粉化石群集の層位分布 …… 191

写真図版目次

写真図版１　花粉化石（１）…… 181
写真図版２　花粉化石（２）…… 183
写真図版３　花粉化石（３）…… 195

図　版　目　次

図版１　上　03-1区　第2面全景
　　下　03-1区　第3面全景（北西から）
図版２　上　03-1区　第3面溝501ＳＤ
　　下　03-1区　第2面井戸158SE
図版３　上　03-1区　井戸158SE断面
　　下　03-1区　河道5001ＳＲ北西部（南東から）
図版４　上　03-1区　80SK遺物出土状況
　　下　03-1区　1区2面南東部（北から）
図版５　上　03-1区　88ＳＫ（北東から）
　　下　03-1区　88ＳＫ遺物出土状況
図版６　上　03-2-2区　全景（北西から）
　　下　03-2-2区　南東部（北から）
図版７　上　03-2-2区　37ＳＫ遺物出土状況
　　下　03-2-2区　弥生土坑遺物出土状況
図版８　上　03-3-2区　全景（北西から）
図版９　上　03-3-2区　1SE検出状況
　　下　03-2-2区　1SE遺物出土状況
図版10　上　03-3-3区　全景（北西から）
図版11　上　03-3-3区　6ＳＲ遺物出土状況
　　下　03-3-3区　遺物（甑）出土状況
図版12　上　04-1区　北半部全景（南から）
　　下　04-1区　北半部全景（東から）
図版13　上　04-1区　北半部2面
　　下　04-1区　下層（縄文期）遺構検出状況
図版14　上　04-1区　南半部全景（北から）
　　下　04-1区　土坑（16SK）検出状況
図版15　上　04-1区　2面中央部（南半分北部）
　　下　04-1区　2面土坑検出状況
図版16　上　04-2区　南部全景（北から）
　　下　04-2区　南部全景（南西から）
図版17　上　04-2区　北半部全景（西から）
　　下　04-2区　北半部全景（南から）
図版18　上　04-2区　第2面（中央部）遺構検出状況
　　下　04-2区　北半部2面
図版19　上　04-2区　北半部3面
　　下　04-3-1区　2面全景（北西から）
図版20　上　04-3-1区　3面全景
　　下　04-3-1区　4面全景
図版21　上　04-3-2区　第1面全景（北西から）
　　下　04-3-2区　第1面全景（南東から）
図版22　上　04-3-2区　第1面
　　下　04-3-2区　165ＳＤ
図版23　上　04-3-3区　2面（南東から）
　　下　04-3-3区　2面南東部（西から）
図版24　上　04-3-3区　3面全景
　　下　04-3-3区　3面下層河川
図版25　上　04-3-3区　弥生土器出土状況
　　下　04-3-3区　縄文土器出土状況
図版26　上　05-2区　第1面全景（東北から）
　　下　05-2区　第3面全景（東北から）
図版27　上　06-2区　1面（南西から）
　　下　06-2区　22・23SD（北東から）
図版28　上　06-2区　25SK（南から）
　　下　06-2区　28SK（南から）
図版29　上　06-2区　34SR土器出土状況（北から）
　　下　06-2区　34SR完掘時状況（北から）
図版30　上　07-3区　北西部1面（南西から）
　　下　07-3区　北西部2面（東から）
図版31　上　07-3区　北西部3面（東から）
　　下　07-3区　中央部1面（東から）
図版32　上　07-7区　1面（北西から）
　　下　07-8区　1面（南東から）
図版33　上　07-11a区　上層遺構1ＳＤ（南東から）
　　下　07-11a区　下層全景（北西から）
図版34　上　07-11a区　下層南東部（南東から）
　　下　07-11a区　33SK(東から）
図版35　上　07-11b区　全景（北西から）
　　下　07-11b区　全景（南東から）
図版36　上　07-11b区　103SE（西から）
　　下　07-11b区　103SE下段（西から）
図版37　上　07-11b区　北西ピット群
　　下　07-11b区　136SE、137SE、138SE
図版38　上　07-11b区　137SE
　　下　07-11b区　138SE
図版39　上　07-11b区　136SE
　　下　07-11b区　104SE（南東から）
図版40　上　07-11b区　135SR（南東から）
　　下　07-11b区　135SR（東から）
図版41　上　08-9区　第1面（北西から）
　　下　08-9b区　第1面（北東から）
図版42　上　08-10区　第1面（北西から）
　　下　08-10区　勾玉出土状況
図版43　上　08-10区　第3面（南東から）
　　下　08-10区　第3面（西から）
図版44　上　08-13区　第1面（南東から）
　　下　08-13区　第3面（南東から）
図版45　上　08-13区　第4面（南東から）
　　下　08-15区　第3面（南東から）
図版46　上　08-15区　第4面（北西から）
　　下　08-16区　第3面（北西から）
図版47　上　08-16区　第4面（南東から）
　　下　08-17区　第1面（南東から）

図版48　上　08-17区　第2面（南東から）
　　下　08-17区　第4面（南東から）
図版49　上　09-1区　上層第1面(肥子池堤体が残る)(南東から)
　　下　09-1区　下層第2面全景（北西から）
図版50　上　09-1ｂ区　下層全景（南東から）
　　下　09-1ｂ区　北西部遺構検出状況（南西から）
図版51　上　09-1ｂ区　21SE
　　下　09-1ｂ区　21SE（下段曲物）
図版52　上　09-1a区　縄文土坑
　　下　09-1a区　縄文土器出土状況
図版53　上　09-2a区　第3面全景（上が北東）
　　下　09-2a区　第3面（北西から）
図版54　上　09-2a区　全景（南東から）
　　下　09-2ｂ区　全景（上が北東）
図版55　上　09-2ｂ区　全景（南東から）
　　下　09-2ｂ区　全景（北西から）
図版56　縄文時代の遺物１
図版57　縄文時代の遺物２
図版58　縄文時代の遺物３
図版59　縄文時代の遺物４
図版60　弥生時代の遺物１
図版61　弥生時代の遺物２
図版62　弥生時代の遺物３
図版63　古墳時代の遺物１
図版64　古墳時代の遺物２
図版65　古墳時代の遺物３
図版66　古墳時代の遺物４
図版67　古墳時代の遺物５
図版68　古墳時代の遺物６
図版69　古墳時代の遺物７
図版70　古墳時代の遺物８
図版71　古墳時代の遺物９
図版72　中世の遺物１
図版73　中世の遺物2
図版74　中世の遺物３
図版75　中世の遺物４
図版76　中世の遺物５
図版77　中世の遺物６

付　　図

付図１　04-3区平面図（1/100）
付図２　03-1区･09-2区平面図（1/100）
付図３　03-2区・03-2-2区･07-11区平面図（1/100）
付図４　03-3区・08-17区・09-1区平面図（1/100）
付図５　07-3区・07-8区･07-9区･07-19区・08-9区・08-10区･
　　08-12区･08-13区・08-15区平面図（1/100）
付図６　04-1区・04-2区・05-2区・06-2区・08-16区平面図（1/100）

第１章　調査の経緯と方法

第１節　調査の経緯

府中遺跡は和泉市府中町から肥子町にかけて所在する遺跡で、５町四方と推定されている和泉国府跡の北、東、南側に国府跡を含めて東西0.9㎞、南北約1.2㎞が遺跡範囲とされる。

豊中遺跡は泉大津市豊中町１～３丁目、東豊中町１～３丁目、北豊中町２、３丁目、和泉市肥子町１～２丁目にまたがる地域を周知の範囲としている。この遺跡も古くから耕作土中に土師器や須恵器、瓦質土器が散布することは知られていたが、1960年（昭和35年）頃、道路工事現場で泉大津高校地歴部員が土器を採集したことで、豊中遺跡として周知された。その後国道26号線の工事や周辺の区画整理事業、開発事業に伴って調査が進められて和泉市肥子町にも広がり、現在では南北1.5㎞、東西0.5㎞を遺跡範囲とする。

板原遺跡は国道26号建設に先立って実施された試掘調査で見つかった遺跡で、泉大津市板原から和泉市肥子町にかけて、東西0.7㎞、南北0.65㎞の円形に括られた地域とを遺跡範囲としている。

この３遺跡を通過する都市計画道路泉中央線（国道480号線）整備事業の経緯については前書（「府中遺跡」）で記したように、昭和41年に都市計画決定されており、府道大阪和泉泉南線市役所北交差点から和泉市民病院前までの約100ｍについては昭和59年（1984）と昭和61年に発掘調査を実施している。

市役所北交差点の北西側、国道26号線穴田交差点までの約630ｍについては市街地で、事業所や民家が密集していたこともあり、事業は進展しなかったが、平成12年（2000）、大阪府土木部（現都市整備部）より当該区間の遺跡の有無について問い合わせがあり、周知の府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡が含まれるため協議を行い、遺構の遺存状況や埋没深度を把握するため試掘調査を実施することとなった。翌平成13年に実施した試掘調査では全区間で遺構・遺物が検出され、事業予定地全域で発掘調査が必要と判断された。

発掘調査は平成14年度（2002）から平成21年まで実施した。2002年から2007年までは拡幅部とＪＲ阪和線をアンダーパスで交差する工事箇所、2008年、2009年は主に現道路部分の調査を実施した。

「府中遺跡」、「府中遺跡Ⅱ」ではＪＲ阪和線から市役所北交差点間調査結果を報告した。

本書では平成17年から平成21年まで実施したＲ阪和線から国道26号線穴田交差点までの調査結果について報告する 。

第２節　調査の方法

今回の調査は、慢性的に渋滞している都市計画道路和泉中央線（現国道480号）の穴田交差点（国道26号線）～市役所北交差点（府道大阪和泉泉南線）間を拡幅し、ＪＲ阪和線とアンダーパスで立体交差化する道路整備事業に伴うものである。この道路は泉大津と山間部や河内長野を結ぶ幹線道路で、昭和30年代に整備され未調査であることから、アンダーパス化で切り通しとなる箇所も調査対象となったため、車両や歩行者の通行を確保しつつ調査を進めることとなり、事業者の大阪府都市整備部や施工業者と意見を交換しながら、発掘調査を実施した。

調査区名

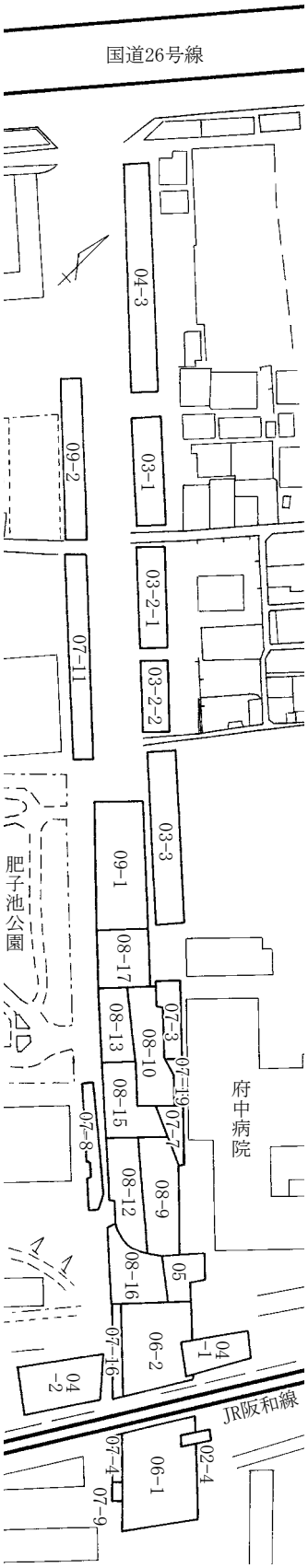
調査は2003年から2009年まで実施した。2003年、2004年は道路北側の拡幅予定地。2004、2005、2007年度はＪＲ阪和線アンダーパス化予定地の両側、及び拡幅・迂回路用地。2006年はＪＲ阪和線に接するアンダーパス工事用地。2007年は道路両側の拡幅用地。2008年・2009年は現道路部分で、2008年は迂回路を確保するため小さく分割して調査を実施した。

調査区名は生活道路や迂回路で調査区が分断されたことから、年度と調査区を組み合わせ03－１区のように表示した。また、一つの調査区を分割した時は04－３－３区や09－２ｂ区のように枝番をつけて調査区を表示した。本文中では記述に支障がないものは枝番号を省略している。遺構番号は調査時に各調査区毎に１番からつけて作業を行ったので極力この番号を踏襲したが、重複を避けるため新たな番号を付した調査区もある。

遺構記号は『発掘調査の手引き』（平成22年　文化庁文化財記念物課発行）で紹介されている遺構記号に準拠した。

本書で使用した記号はＳＡ（柵）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑）、ＳＰ（ピット、柱穴）、ＳＵ（遺物集積）、ＳＸ（その他）、ＳＲ（河川『手引』ではＮＲ）などである。

遺構番号は03－１－１区01ＳＫのように標記した。



第１図　調査区位置図

第２章　　立地と環境

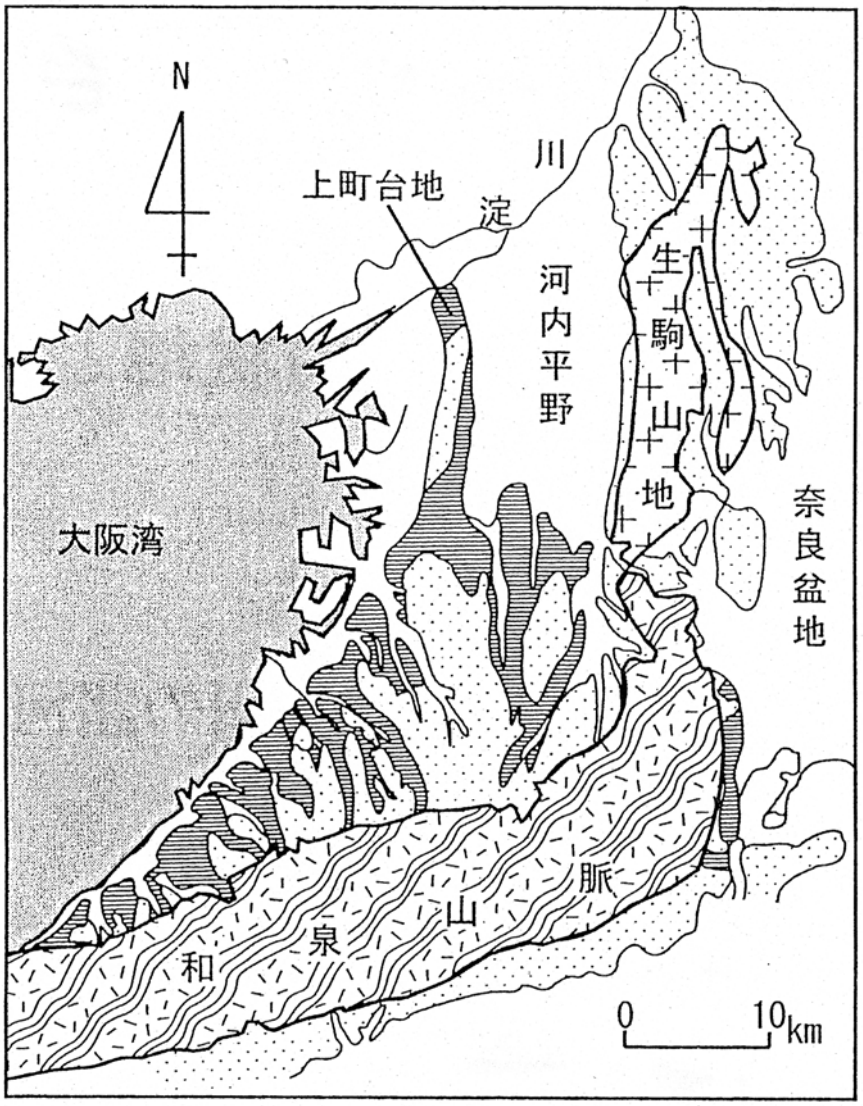
第１節　地理的環境

和泉地域は、標高886ｍの三国山を最高峰とする和泉山脈が、858ｍの和泉葛城山、625ｍの高城山と北東から高度を下げながら南西に連なり、大阪府と和歌山県を分ける行政界となっている。この山脈は白亜紀（6500万～14500万年前）頃に礫岩や砂岩、泥岩等が交互に堆積して形成された堆積岩からなる和泉層群と呼ばれる地層からなり、大阪府側は標高200～300ｍの山々からなる前山を造り出している。前山の大阪湾側は標高50～60ｍの丘陵地帯で、鮮新統から更新統（約500万～１万年前）に堆積した大阪層群と呼ばれる粘土や砂礫が交互の堆積した地層で構成されており、槙尾川や父鬼川など、和泉山脈に源流を持つ河川が小谷を刻んでいる。

府中遺跡が所在する地域は、標高30ｍ付近を頂部とする低位段丘面で、槙尾川や牛滝川などの河川が形成した扇状地が段丘化したものと認識されており、和泉山脈や信太山丘陵を供給源とする砂岩や泥岩で形成されている。

低位段丘面の前面にある沖積平野の発達は弱く、槙尾川や男里川の河口部にみられる程度である。

海岸平野の前面には上町台地の基部から加太まで約50㎞の海岸線に沿って狭い砂堆面が形成されていたが、浜寺や二色浜に代表される砂浜は、昭和30年代後半からの沿岸部開発で埋め立てられ、大阪湾沿岸で自然の砂浜が残るのは数％といわれている。



第２図　大阪府南部地域の地質図（「泉大津市史」より転載）

第２節　歴史的環境

府中遺跡が立地する標高40～10ｍまでの中位～低位段丘面は、海岸線に向かってなだらかに傾斜している。和泉山脈やその前庭部の山丘部を源流とする河川は、現代では流路を固定され、段丘を深く浸食しているが、元々は段丘面を縦横に流れて大阪湾に注いでおり、その河川沿いや伏流水が噴出するような所に多くの集落が立地している。

和泉市内で旧石器時代の遺跡は少なく、石津川流域にある野々井遺跡で国府型より古い要素を持つ石核が出土しているほか、和泉市の観音寺山遺跡、大床（父鬼）遺跡、高石市の大園遺跡や岸和田市の山直北遺跡、和泉葛城山山頂付近でも国府型ナイフが採集されている。

旧石器時代末から縄文時代早期にかけてのものとしては、大園遺跡で12点の有舌尖頭器が出土しているほか、10箇所以上で有舌尖頭器の出土が報告されている。

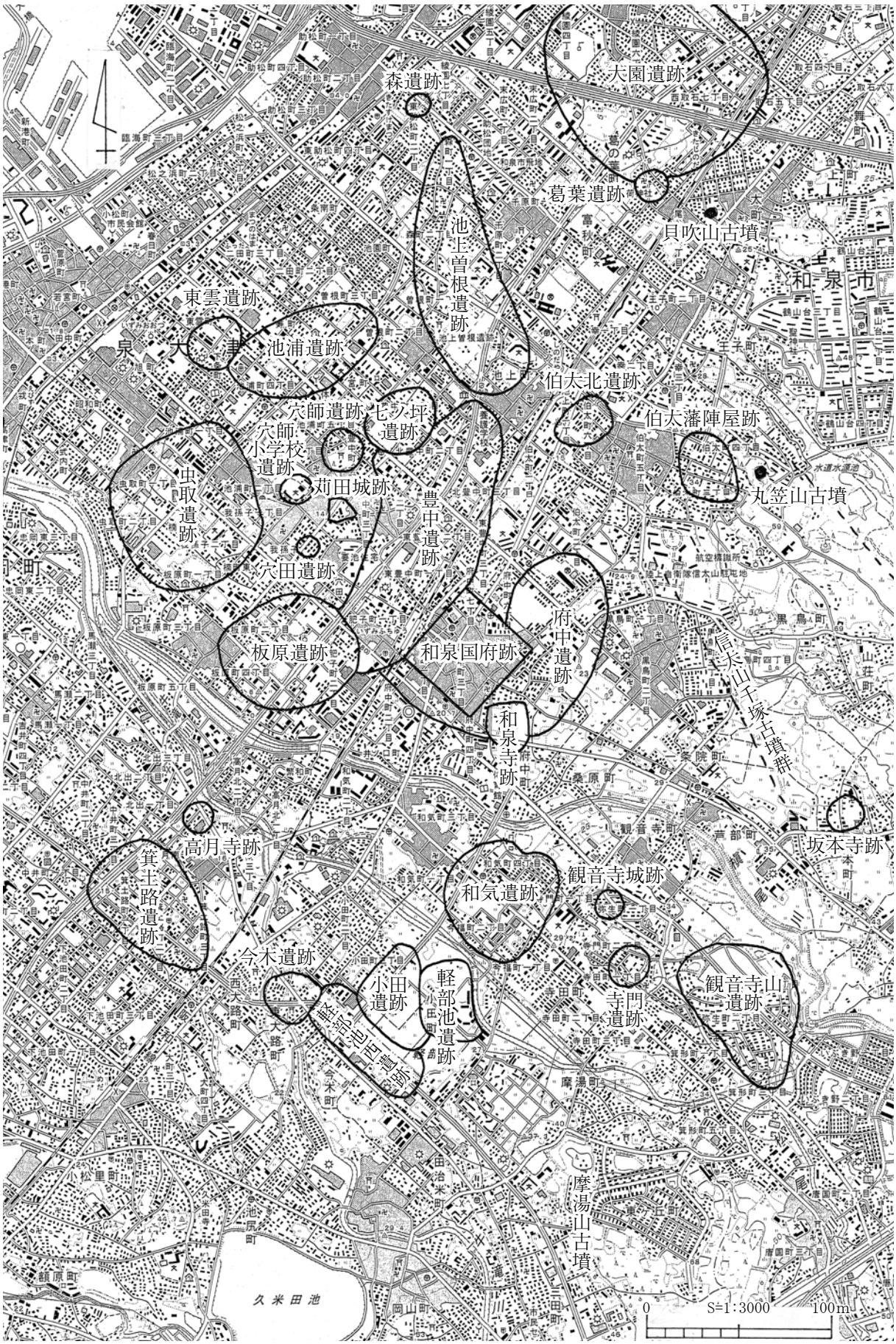
縄文時代早期として、和泉市域では府中遺跡と同じ槇尾川水系の低位段丘面上に立地する池田寺遺跡で押形文土器、山間部に近い中位段丘山上に立地する仏並遺跡でも条痕調整を施す早期末から前期初めに位置づけられる土器が出土している。堺市域でも小阪遺跡、太平寺遺跡で土器が出土している。

縄文時代前期では、北白川下層式の土器が太平寺遺跡や小阪遺跡、大歳山式土器が平井遺跡、小阪遺跡などで出土しているが、和泉地域では縄文時代早期から前期の遺物が出土する遺跡は少ない。中期以降、遺物が出土する遺跡は増加する。泉州北部では、平井遺跡、小阪遺跡、太平寺遺跡で引き続き中期の土器が出土している。泉州中央部の府中遺跡や隣接する板原遺跡、豊中遺跡で中期の土器が出土しているほか、春木川河口近くの砂州上に立地する春木八幡山遺跡は中期から晩期までの土器が出土しており和泉地域の縄文遺跡として著名である。牛滝川沿いに立地する箕土路遺跡では鷹島式土器、和泉葛城山山頂部でも船元式土器が出土している。

中期末以降、土器を出土する遺跡は急激に増加する。府中遺跡では中期末に位置づけられる北白川Ｃ式土器が多数出土しているほか、後期や晩期の土器が出土しており、中期以降集落が継続して営まれていた。また、槇尾川流域の池田寺遺跡や万町北遺跡、牛滝川流域の軽部池西遺跡、小田遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡などで後期の土器が出土している。先に挙げた仏並遺跡では中期末から後期にかけて５棟の竪穴住居跡や土坑などの遺構と多数の土器と共に土製仮面が出土している。一方泉南地域でも向田遺跡や淡輪遺跡で竪穴住居跡が検出されているほか、泉州北部の四ツ池遺跡でもこの時期の竪穴住居が出土している。

縄文時代晩期前半の土器が出土する遺跡は少ないが、府中遺跡でこの時期の土器を多量に含む河道が検出されている。晩期後半になると府中遺跡をはじめ、万町北遺跡、春木八幡山、四ツ池遺跡、小阪遺跡、西浦橋遺跡、鈴の宮遺跡などで突帯文土器が出土しているが、大津川に流入する和田川流域の西浦橋遺跡では土坑墓群が検出されている。

弥生時代に入ると、堺市の四ツ池遺跡や泉佐野市の船岡山遺跡で縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の土器が共伴する遺跡が見られる。本遺跡の西に位置する泉大津市の虫取遺跡や泉南市の男



第３図　府中遺跡周辺の主な遺跡

里遺跡では晩期の突帯文土器と前期後葉の土器が出土しているが、時期的な隔たりが大きく、評価が難しい。池浦遺跡では前期中葉の土器や溝が確認されているが、中期には続かず、短期間で廃絶したと考えられている。しかし、北隣の池浦遺跡では前期中葉の土器が出土し、同時期の溝が見つかっており、新しい米作りの文化を持って、移動してきた人の定住と交流の点から注目される。この他にも、岸和田市の春木八幡山遺跡でも前期前半から中頃の土器が出土している。前期後葉後頃には池浦遺跡の直ぐ東に池上遺跡が立地し、南北250ｍ、東西180ｍの環濠で囲まれた面積約30000㎡の集落を形成する。

中期にはいると、池上遺跡では、南北約310ｍ、東西約250ｍの環濠が掘削され、面積約56000㎡の和泉地域中央部の拠点的な集落に発展し、後期後半まで盛行する。池上遺跡の周辺でも、中期には槇尾川下流の低湿地を開発して府中遺跡でも集落が成立し、数ヶ所で竪穴住居跡が検出されている。また、府中遺跡の近辺では虫取遺跡、槇尾川中流では和気遺跡、池田寺遺跡や万町北遺跡、軽部池遺跡、池田下遺跡、などで竪穴住居跡などの遺構が検出されている。 一方、北の石津川流域の台地に立地するの四ツ池遺跡でも環濠が確認されている。

南の槇尾川の支流で南から北西流して大津川（槇尾川）に合流する松尾川や牛滝川流域では田治米遺跡や下池田遺跡、大町遺跡のほか、春木八幡山遺跡、栄の池遺跡、田治米菅原神社遺跡、箕土路遺跡、春木八幡山遺跡、軽部池西遺跡等で遺構や遺物が見つかっており、低位段丘面の小河川沿いに多数の集落が立地している。

弥生時代後期に入ると池上遺跡は衰退し、環濠は維持されなくなるが、槇尾川を見下ろす標高50～70ｍの丘陵上に観音寺遺跡や惣ヶ池遺跡などの高地性集落と呼ばれる村が形成されるが、府中遺跡や万町北遺跡では後期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、中期から継続して集落が営まれていた。しかし、中期の拠点的な集落である池上遺跡は、後期にはいると環濠は維持されなくなり、大規模な建物も廃絶する。

古墳時代では、前期に本遺跡の南西約３キロ、松尾川の支流である牛滝川を見下ろす久米田丘陵に築造された墳丘長約130ｍの前方後円墳である久米田貝吹山古墳、北東約4.5キロの信太山丘陵の西北端に墳丘長約94ｍの和泉黄金塚古墳や丸笠山古墳、牛滝川と松尾川に挟まれた東山丘陵の先端近くに墳丘長約200ｍの摩湯山古墳や墳長径約43ｍの方墳である馬子塚が築造される。なかでも和泉黄金塚古墳は３基の粘土槨が検出され、その１基から「景初三年」銘の神獣鏡が出土したことで著名である。

古墳時代中期以降は信太山丘陵には信太貝吹山古墳やカニヤ塚古墳、鍋塚古墳、玉塚古墳、狐塚古墳といった円墳や帆立貝形古墳屋80基以上の古墳からなる信太山古墳群が６世紀まで続いて築造される。一方牛滝川左岸の久米田丘陵でも久米田古墳群として括られる風吹山古墳や無名塚古墳、光明塚古墳、長坂古墳など10数基の古墳が相次いで築造される。

集落に目を移すと、府中遺跡や北に接する豊中遺跡、板原遺跡、和気遺跡では弥生時代後期から古墳時代を通じて集落が営まれる。本遺跡の北西に接する豊中遺跡では古墳時代の竪穴住居や

掘立柱建物、溝が検出されている。

槇尾川右岸の低位段丘末端部に立地する七ノ坪遺跡では古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物、木棺墓や水田跡が検出されている。貝吹山古墳に近い大園遺跡は古墳時代中期の掘立柱建物のみで構成される集落として著名である。万町北遺跡では古墳時代の竪穴式住居90棟、掘立柱建物が約30棟見つかっており、槇尾川中流を支配した豪族の集落と考えられている。

奈良時代に入ると、霊亀２年（716）に和泉監が置かれ、大鳥、和泉、日根の３郡がこの配下にはいるが、天平２年（730）には再び河内国に統合される。その後、天平宝字元年（757）にあらためて和泉国が設置され、国府は国名の謂われとされる「和泉の清水」を祀る泉井上神社を含む和泉府中駅南東に置かれたと考えられている。

古代寺院は、国分寺建立の詔が発布された時期は河内国に含まれており、国分寺は建立されず、平安時代になって、和泉郡の安楽寺が国分寺に指定される。この他和泉国で約30ヶ寺が知られているが、槇尾川流域では、茅渟県主が建立氏族と考えられる和泉寺跡、坂本臣の氏寺とされる坂本郷に所在する坂本寺跡、池田郷に所在し池田首が建立氏族とされる池田寺跡の４か寺が知られている。この他、和泉郡内には、信太郷に所在する信太首の信太寺跡のほか木嶋郷（現貝塚市）の秦廃寺、八木郷（岸和田市）の小松里廃寺、神守郷掃守郷（同）の春木廃寺、別所廃寺、山直郷の田治米廃寺などがある。このほか、行基が関わったとされる49院のうち、和泉国に10院が所在している。また、和泉国では網曳御厨が置かれ、内膳司に魚介類を貢納していた。所在地は詳らかではないが、府中に近い泉大津市の我孫子付近が有力とされている。

和泉地域の条里に目を移すと、大鳥郡内では、石津川の中下流で、河道方向に沿った条里地割りが観察できるが、和泉郡では大津川（槇尾川）下流で海岸線を基線とする条里地割りが槇尾川や松尾側の中流まで観察できる。

平安時代後期頃からの荘園公領制下でも和泉国では国衙領が広い面積を占め、領域型の荘園は王家領の宇多庄、摂関家領の大泉庄、春日社領の春木庄、石清水領の蜂田庄が知られる程度である。これは、和泉国府内に熊野街道（小栗街道）が通過することから、皇臣の熊野詣でを支える諸役を課せられていたことから、国衙領が多く残り、荘園が分散して所在し、領域型荘園が発達しなかったためと考えられる。

室町時代の和泉国は応永年間（1408年）に細川氏の２氏が守護職を上下に分割して支配する両守護体制となり、守護所は地勢的に優位な堺に置かれたことから、都市としての府中は衰退して行ったと考えられる。

参考文献

泉大津市史第１巻上　本文篇１泉大津市史篇さん委員会　2004

弥生創世記　－検証縄文から弥生へ－　大阪府立弥生文化博物館　2003

第３章　調査結果

第１節　基本層序

今回の調査区は国道26号線穴田交差点からＪＲ阪和線府中第２踏切まで約300ｍであるが、市街地の既設道路を拡幅する工事で、人車の通行を確保するため大小様々な規模の調査区を設定して調査を実施した。調査地は事業所や家屋が密集していた所で、攪乱も多いので３カ所の柱状図を示して基本的な土層を説明する。

第４図下の04－３区は、今回の調査で最も北西（国道26号線寄り）の04－３－１区西壁断面図である。地表面はT.P.16.6ｍで、約630ｍ南東の市役所北交差点とは約３ｍ以上低くなっている。２層は耕土、３層は床土である。１面は４層上面で、中世後半から近世の耕作溝が検出される。遺構密度は08－９区、08－12区などと比較すると疎らである。２面は４層、５層、６層を除去した７層灰黄褐色砂質土上面で、中世の溝や土坑、ピットが検出される。３面はT.P.15.2ｍ前後に堆積する灰色粘土上面で、弥生時代頃の遺構面となっている。

第４図２番目は、ＪＲ阪和線から約150ｍ西北、肥子池公園北側09－１区の断面図である。現地表面はT.P18ｍ前後を測る。調査時、舗装と砕石は除去されていた。１～６層は肥子池の堤体である。外側に土を足して構築、補修していたことが分かる。７層は道路築造時の盛土である。堤体内でも土師器や須恵器、磁器の細片が出土しているが、堤体の下で検出した２箇所の野井戸から近世後期頃の陶磁器類が出土しており、肥子池は18, 9世紀頃築造されたと考えられる。

この断面では耕作土は残っておらず、T.P.16.85ｍ前後の９層、16層上面で中世後期から近世の耕作溝が検出される。

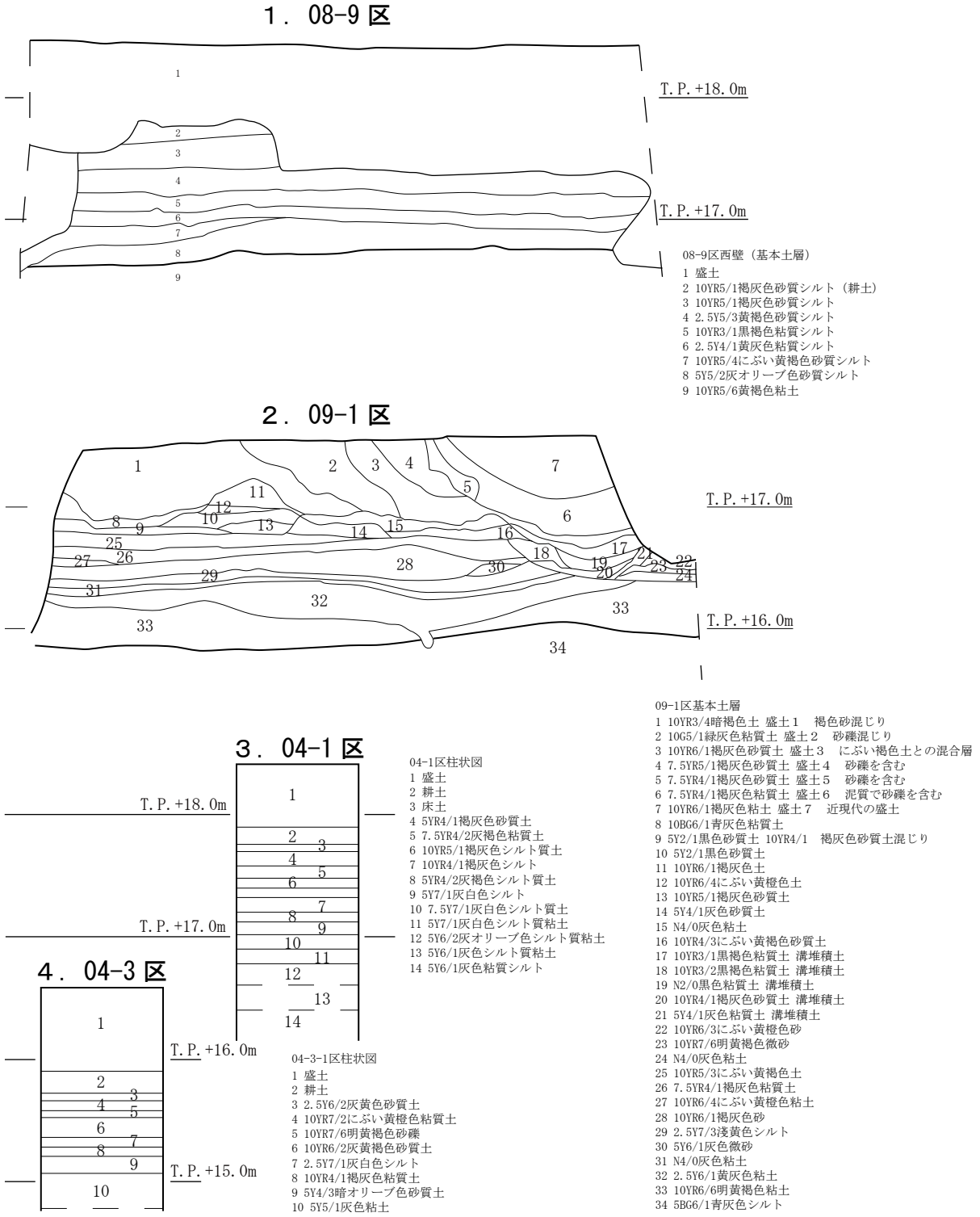
第２面はT.P.16.75ｍ前後に堆積する25層のにぶい黄褐色土や26層の褐灰色粘質土を検出面とする遺構で、弥生時代から鎌倉、室町時代頃までの遺構が同一面で検出される。これは南西の07－11区でも同様であった。遺構埋土は弥生、古墳時代が黒褐色か褐灰色色土、中世が褐灰色から黄灰色土である。

25層以下は弥生時代前期以前の堆積層で､縄文時代の土器は33層までの各層で出土しているが、量は少ない。29層上面では遺物は伴っていないが、遺構が確認されている。晩期頃のものであろう。『府中遺跡Ⅱ』で報告した縄文時代晩期の深鉢（211）は31層灰色粘土層から出土している。34層青灰色シルト層から遺物は出土しなかった。

第４図上は阪和線の西約50ｍの08－９区西北壁断面図である。地表面はT.P.18.4ｍ前後である。３層は中近世の耕作土で、弥生～中世の土器細片が出土する。４層は古墳時代から中世の遺物包含層である。この地区では４面で遺構を確認した。１面は４層黄褐色砂質シルト上面で、中世後期以降の耕作溝で構成される。２面は４層を除去した５層黒褐色粘質シルト層上面で、古墳時代後期頃の遺構面である。３面は６層黄灰色粘質シルト砂質シルト層上面で、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が検出されている。４面は縄文時代後期頃の生活面で河道が検出されている。

７層、８層で縄文時代の遺物は殆ど出土しなかった。06区より湿地化していたであろうか。

第４図３番目は南東端のＪＲ線路際の04－１区の柱状図である。細かく分層したが、４，５層は弥生時代までに堆積した土壌である。６層上面で弥生時代から中世13，４世紀頃までの遺構が検出される。７層から13層は弥生時代前期以前に形成された土壌で、量は少なく、細片が多かったが各層で縄文時代中期末頃の土器が出土している。T.P.17.0ｍ付近の11層上面では縄文時代中期末ころの焼土坑や不定型土坑が観察される。



第４図　04－１区・04－３－１区柱状図、08－９区、09－１区断面図

第２節　各調査区の遺構と遺物

１．03区

03年度は府中病院西北側の道路拡幅部の全長約150ｍ、幅10ｍを調査対象としたが、住民の通路を確保したため未調査区がある。また、掘削土置き場を確保するため、２区は２分割、３区は３分割して調査を実施した。調査区は西北から調査区名は03－１区、03－２－１区、03－２－２区、03－３－１区、03－３－２区、03－３－３区とした。本文でも遺物や作成図との整合性をもたせるため、同一呼称で記すこととする。

大津川の右岸側は海岸線を基線とする条里区画が残っているが、この条里は真北に対しほぼ43°西に振っている。調査地も条里区画に従った道路を拡幅するため、北西－南東の配置となっている。調査区の座標位置は03－１区西北端は、Ｘ＝－167575ｍ、Ｙ＝－53230ｍ、03－３区南東端はＸ＝－167673ｍ、Ｙ＝－53124ｍであった。

03－１区

03年調査で最も北西の調査区で、Ｘ＝－167575ｍ、Ｙ＝－53230ｍ、Ｘ＝－167586ｍ、Ｙ＝－53207ｍ点を結ぶ、長さ約30ｍ、幅約８ｍの調査区である。

調査区の地表面は16.8～16.9ｍで、盛土が0.5～0.7ｍ、旧耕作土（耕土･床土）下面はT.P.15.95～16.0ｍであった。床土直下を含め、４面で遺構を検出した。

第１面

床土直下のT.P.16.00ｍ前後の黄灰色シルト質土上面で浅い溝とピット列を検出した。幅0.7～0.9ｍ、深さは0.1ｍであった。埋土は灰黄色土であった。幅が広いことから里道に沿った近世の用水路跡と考えられる。

ピット列は調査区に直行する方向に２列確認した。１列は、0.45ｍ×0.5～0.7ｍを測る方形ピットで、約１ｍ間隔で並ぶ。２列はいびつで、方形と楕円形のものが混在し、長径は0.5～0.7ｍを測る。ピット間隔は0.6～0.9ｍである。深さはともに0.1ｍ前後であった。

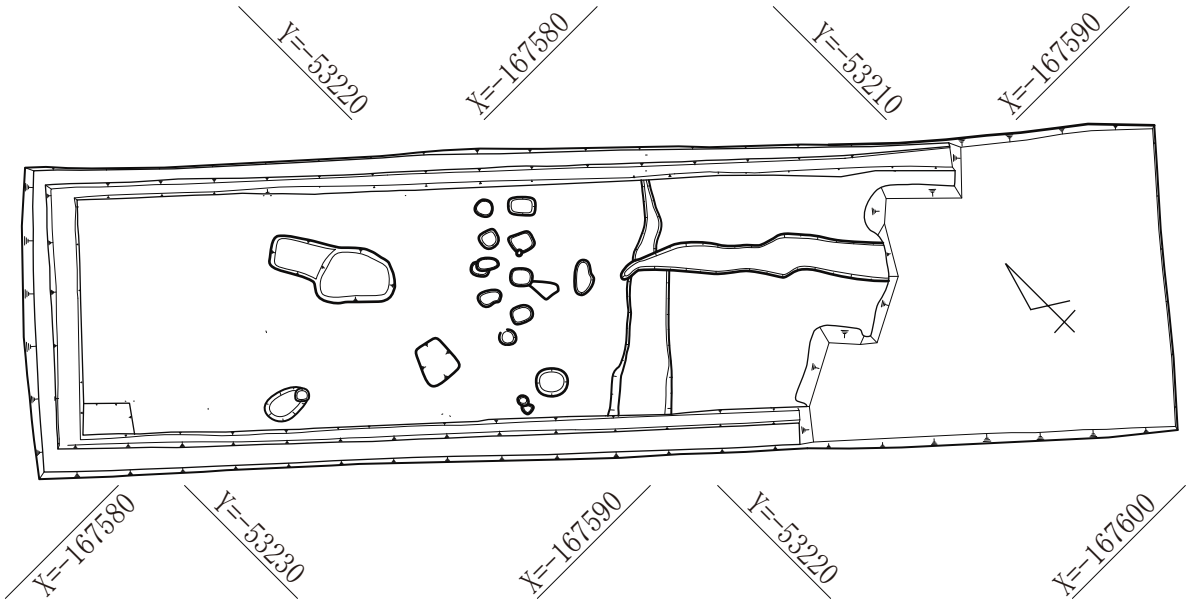
第２面

第１面の黄灰色土を0.1ｍ掘り下げたT.P.15.9ｍ前後で、里道（11ＳＸ）と溝（12ＳＤ）、土坑、ピットなどを検出した。

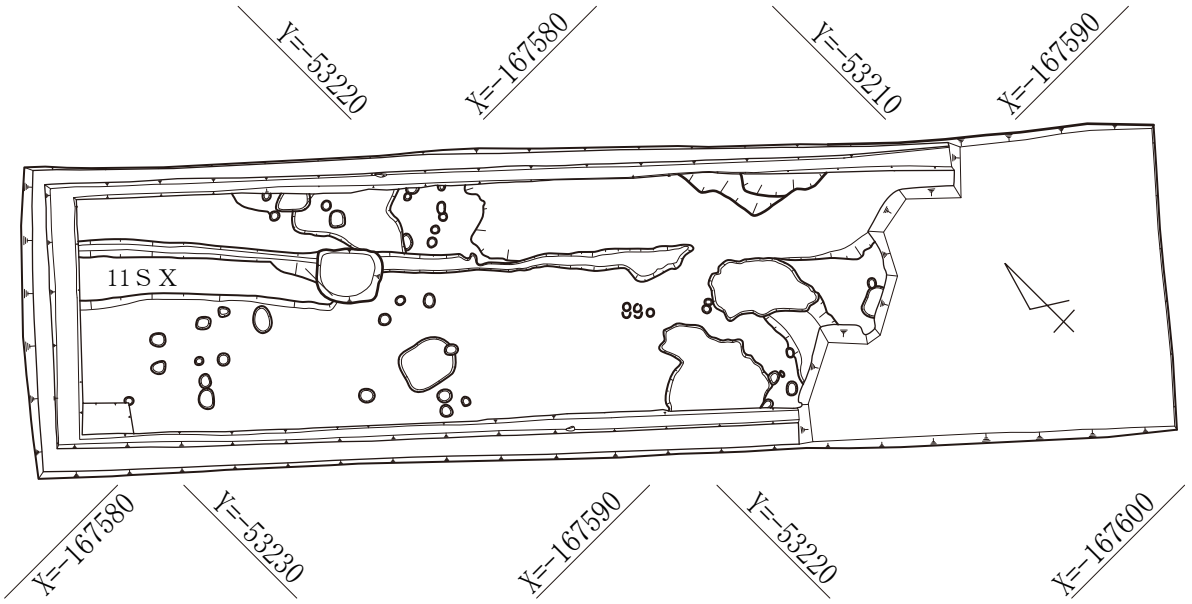
11ＳＸは、調査区南東端から北西方向へ約６ｍに渡って検出された。上幅１ｍ、高さは0.08ｍ前後、下幅は1.25ｍであった。

12ＳＤは11ＳＸの北西側に沿って掘られた溝で、幅0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。里道西北端から８ｍ以上延びており、里道も北西に延びていたと考えられる。

里道の周囲で20箇所以上の土坑、ピットを検出した。ピットはいびつな楕円形が多く、直径0.30～0.5ｍ、深さは0.2ｍまでで、0.1ｍ前後のものが多い。



第５図　03－１区第１面平面図（Ｓ=1/200）



第６図　03－１区第２面平面図（Ｓ=1/200）

13ＳＲは調査区の北西にあり、底面は凸凹しているが、この地域の地形から北流すると考えられる。砂礫と粘土が複雑に堆積しているが、深さは最深部でも0.25ｍであり、槇尾川の溢水による短期間の流路と考えている。

調査区の中央、Ｘ＝－167587ｍ、Ｙ＝－53225ｍ付近で、親指程度から人頭大までの川原石を集めて配置した遺構を確認した。住居域や東側の河道内の岩石を集め、配置したと考えられる。

第３面（第７図）

第２面を約10㎝掘り下げた、T.P.15.8ｍ前後の褐灰色シルト質土内で、調査区に直行する大型土坑と、その内外に３ブロックに纏められる集石遺構やピットを検出した。

土坑は幅2.2ｍ～2.8ｍで、深さは0.1ｍであった。この溝の北西肩の２箇所で人頭大までの川原石が集まっていた。北西端では溝に沿って２～３列に意図的に並べたと見られるが、他の２箇所ではかためて置いた状態であった。耕作地化されたときに邪魔な石を埋めたものであろう。

第７図　03－１区第３面石集積部

第４面（付図３）

第３面の約0.1ｍ下、T.P.15.7ｍ前後の褐灰色粘質シルト面で、鎌倉時代から室町時代の土坑や井戸、ピットを検出した。北西側は、古墳時代の河道の影響で中世まで湿地化していたのか、遺構は南東部に偏って分布していた。

301ＳＫは調査区北東端にある瓢箪形の小土坑で、長径0.8ｍ、短径0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は主に褐灰色土で、土師器や瓦器が出土している。302～304ＳＫは301ＳＫの西側にあり、調査区に平行して0.2ｍ間隔で並ぶ楕円形の小土坑である。302ＳＫは長径1.0ｍ、短径0.5ｍ、深さ0.2ｍ、303ＳＫは長径1.0ｍ、短径0.4ｍ、深さ0.2ｍ、304ＳＫは長径1.25ｍ、短径0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土はいずれも主に褐灰色土で、瓦器や土師器片が出土している。

305ＳＫ､307ＳＫは304ＳＫの北１ｍにある小土坑である。305ＳＫは隅丸方形で0.5ｍ×0.4ｍ、深さ0.3ｍ、307ＳＫは西側が攪乱されているが、楕円形になり、長径0.55ｍ、短径0.4ｍ前後、深さの0.2ｍを測る。埋土は褐灰色土で、瓦器や土師器片が出土している。

155ＳＫは302ＳＫの南0.2ｍにあり、東は調査区外に広がっているが、平面は楕円形で、長径３ｍ以上、短径1.2ｍ、深さは0.4ｍを測る。埋土は主に褐灰色土で、土師器や瓦器に混ざって人頭大までの川原石が多く含まれていた。

156ＳＫは155ＳＫの西側にある土坑で、平面は歪な楕円形で、長径1.8ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は主に黄灰色土で、川原石や瓦器、土師器片が出土している。

157ＳＫは東側を156ＳＫに切られるが、歪な楕円形の土坑で長径1.2ｍ以上、短径0.75ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黄灰色土であった。

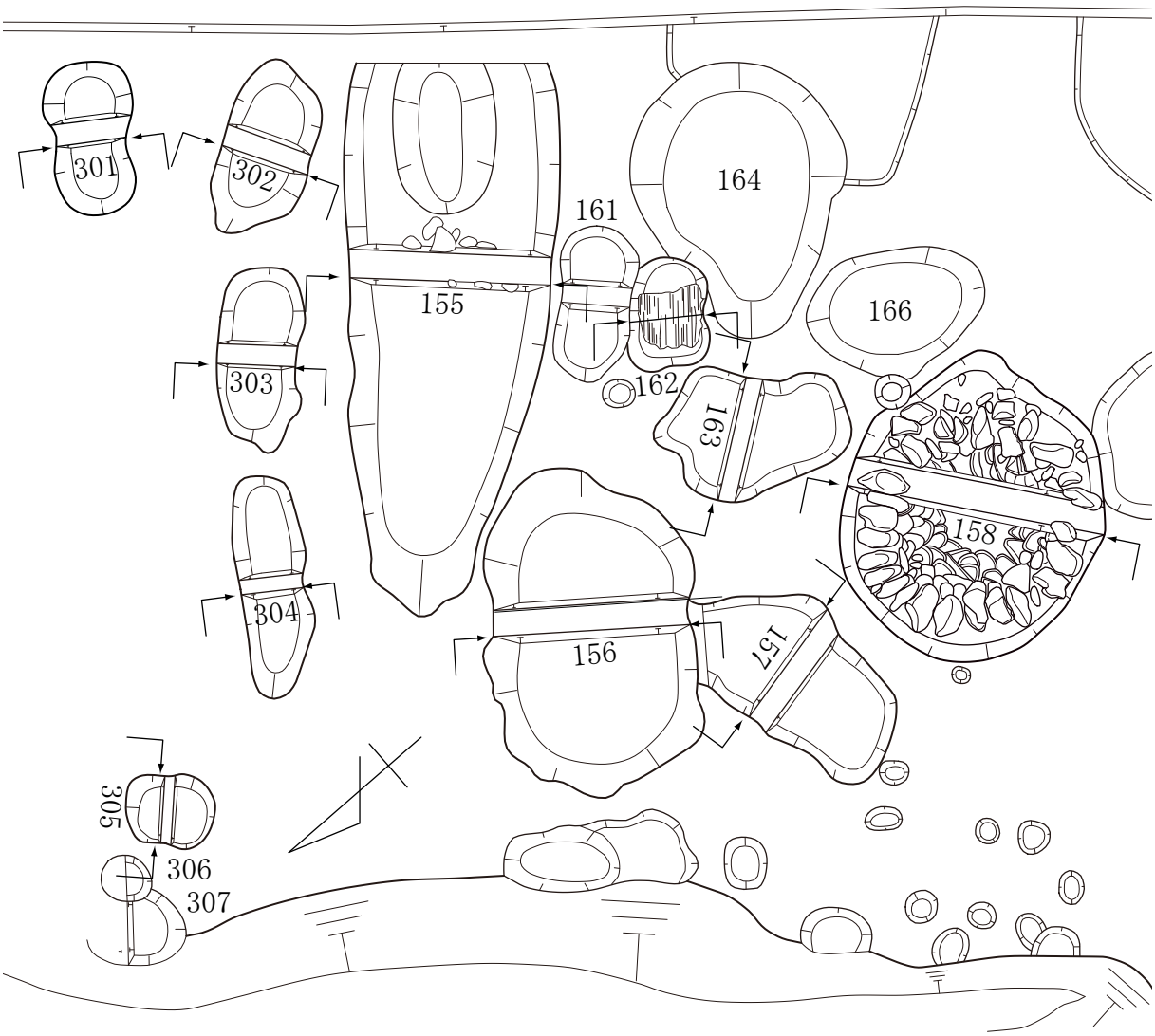
161ＳＫは155ＳＫより古い楕円形の小土坑で、長径0.85ｍ、短径約0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る埋土は主に黄灰色土であった。

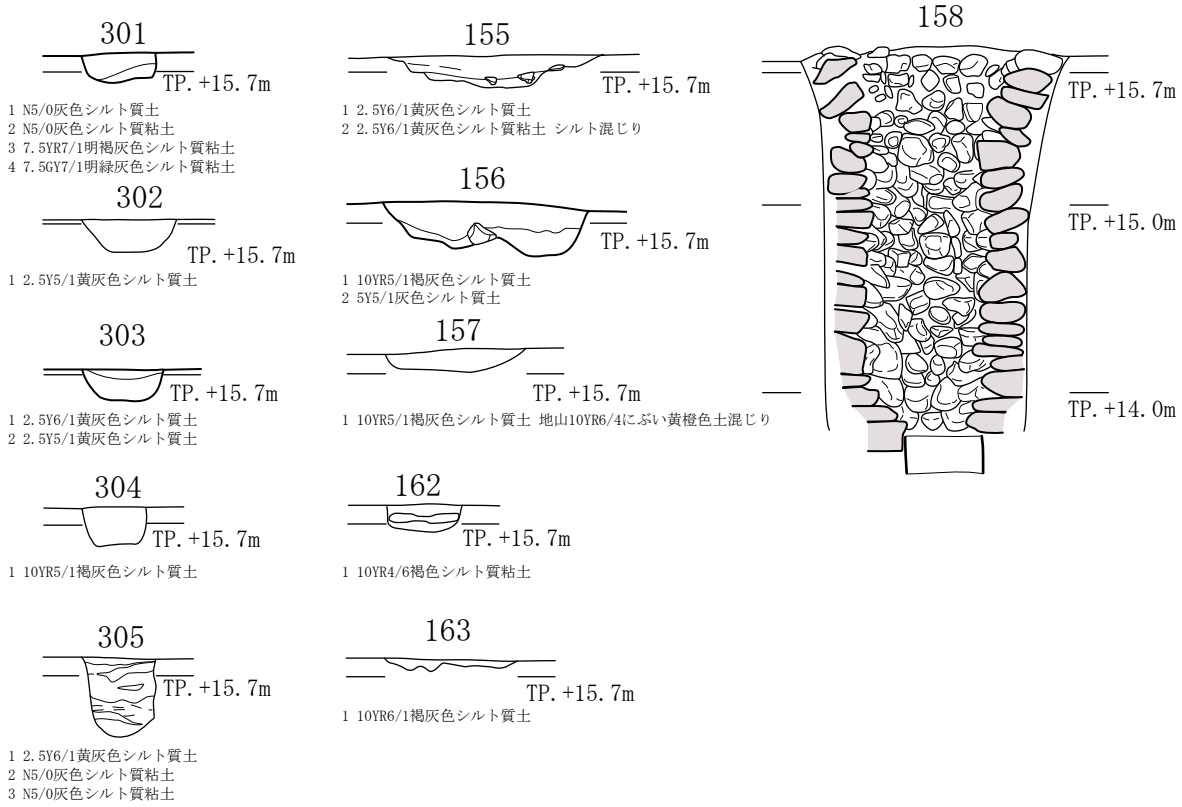
162ＳＫは161ＳＫ、164ＳＫより古い楕円形土坑で、坑内中央でやや朽ちているが0.35ｍ四方、厚さ0.05ｍの板が出土している。板の上面は遺構検出面とほぼ同じ高さであるが、礎盤の可能性がある。しかし、周囲に対応するピットや土坑は見当たらなかった。

164ＳＫは下膨れの楕円形土坑で、長径1.55ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は褐灰色土や黄灰色土で瓦器や土師器片が出土している。

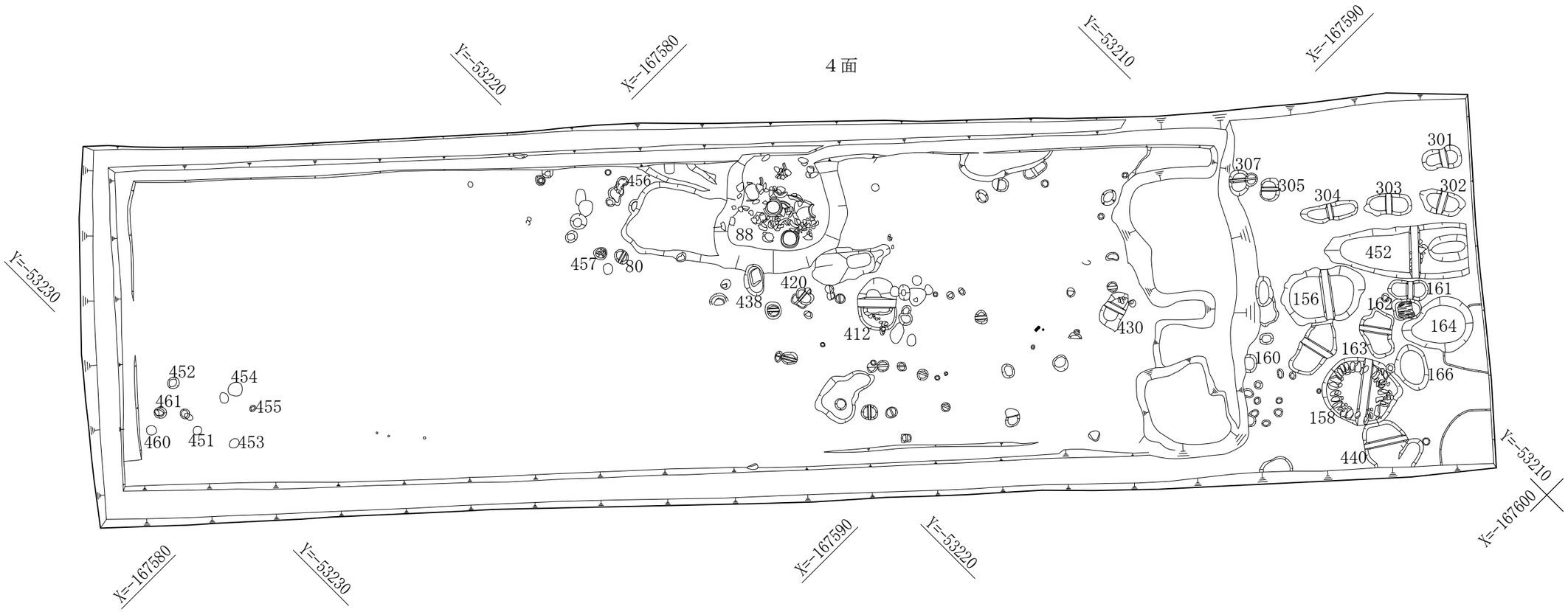
158ＳＥはＸ＝－167596ｍ、Ｙ＝－53211ｍで検出した石組み井戸である。平面は長径1.35ｍ、短径1.2ｍを測る円に近い楕円形で、深さは2.3ｍを測った。井戸底面中央を掘り窪めて直径約40㎝、高さ20㎝の曲物を据え、底面から壁面に沿って数㎝から25㎝位の川原石をほぼ垂直に積み上げ、上面近くは漏斗状に広げている。井戸内の泥土から瓦器や土師器が出土している。石を積み上げる井戸は、この地域では中世以降に造られるようになり、底面に底板を外した曲物や土製羽釜を据えるものが多い。近世以降は桶や樽を据えるものが出て来る。今回の調査でも約300ｍ南東の府中遺跡08－14区で樽を底に据えた近世の石組み井戸が検出されている。

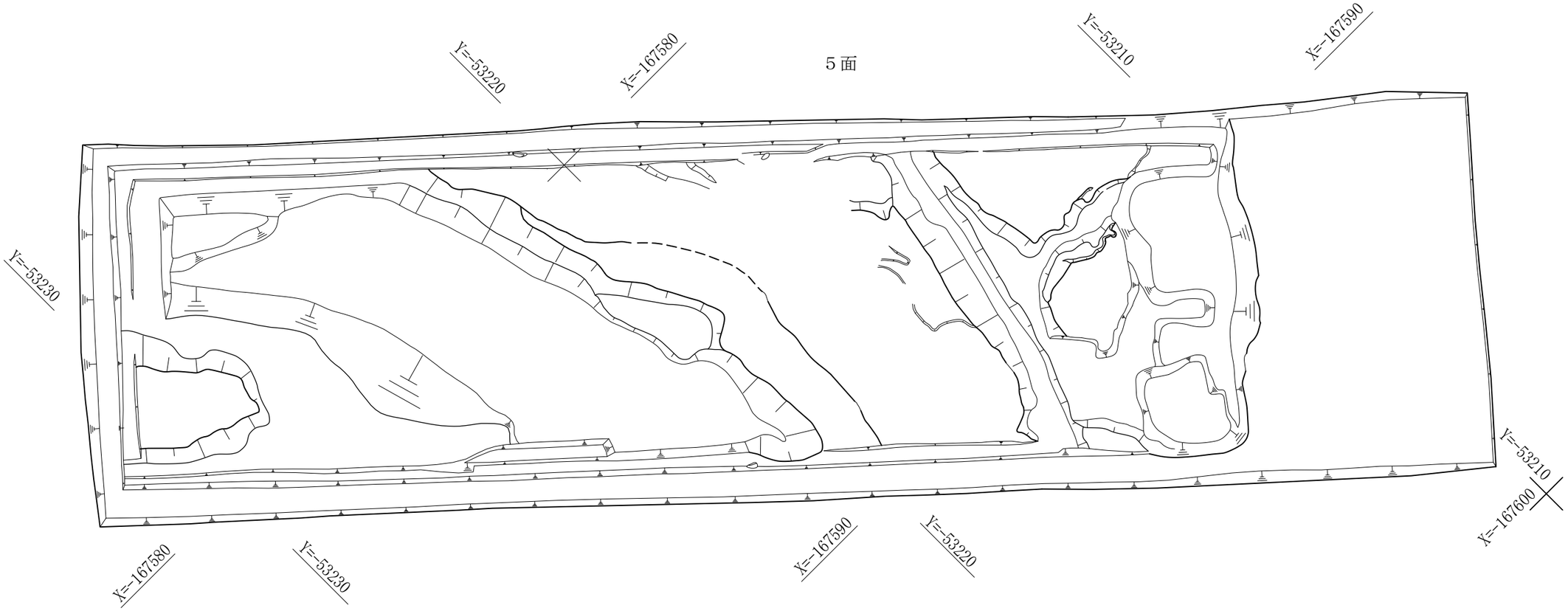
430ＳＫはＸ＝－167591ｍ、Ｙ＝－53213.5ｍで検出した隅丸方形か楕円形の土坑で、南東が攪





第８図　03－１区４面各遺構平面・断面図（S=1/40）



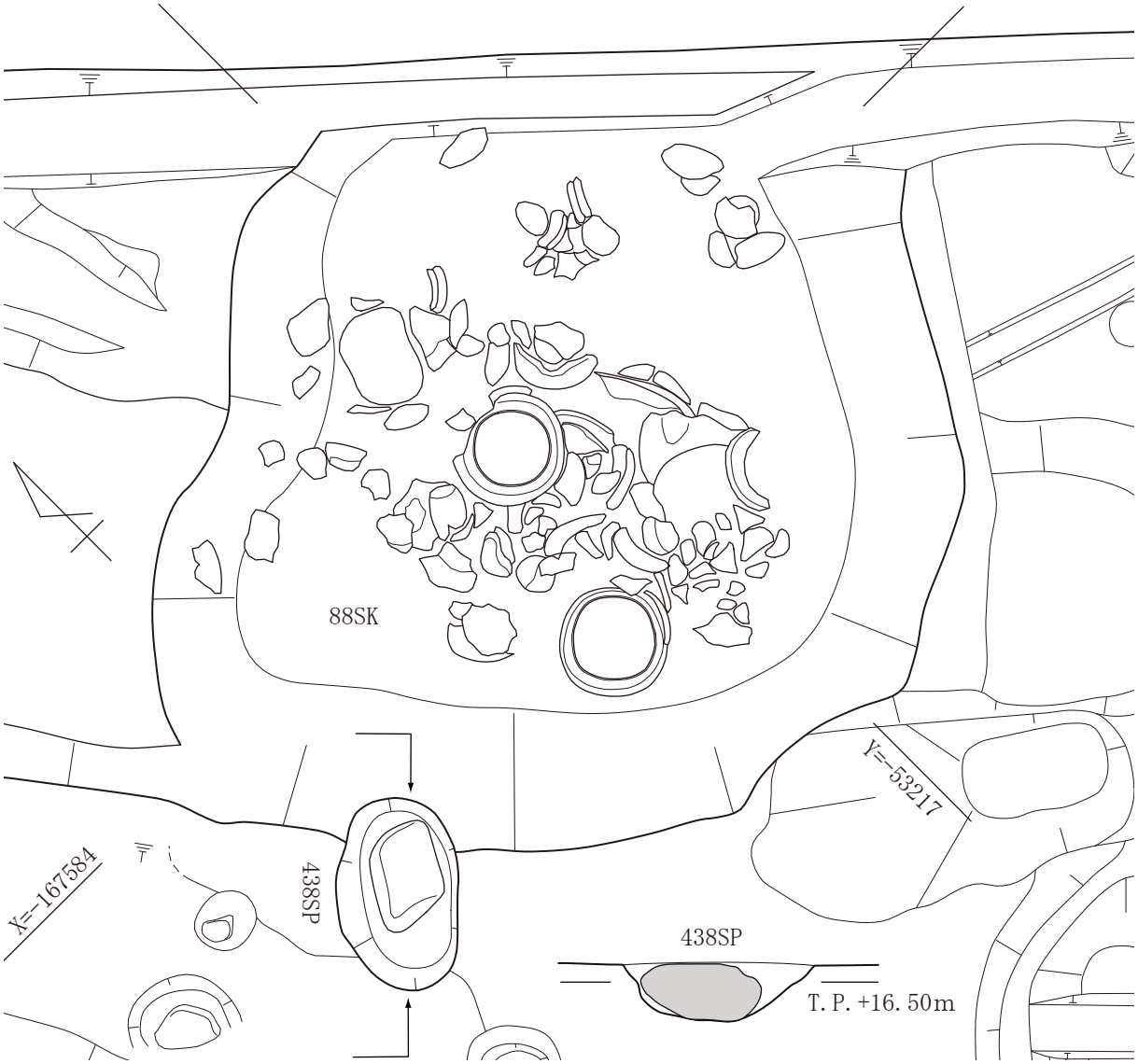


第９図　03-1区　4面・5面平面図

乱されているが、径は0.85ｍ×0.45ｍ以上、深さは0.4ｍを測る。北側肩部で川原石が３こ出土している。土坑の廃棄時に投入されたものであろう。

412ＳＫは古墳時代の溝2001ＳＤの西北側、Ｘ＝－167587ｍ、Ｙ＝－53217ｍで検出した楕円形の土坑で、長径1.1ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は黄灰色土、褐灰色土で、土師器や瓦器片が出土している。

88ＳＫはＸ＝－167585ｍ、Ｙ＝－53217ｍにある大きな土坑で、第２面で羽釜や瓦器などが見えていた。北側は調査区外に広がるが、現況で東西2.8ｍ、南北2.2ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。坑内から大量の瓦質や土師質の羽釜、瓦器椀、瓦器皿、土師器小皿、土師質鍋、石鍋などが、人頭大までの川原石とともに出土した。瓦器椀や皿は完形のものもあるが、羽釜は、口頸部は全周するものもあるが､胴部は壊れたものばかりで､胴部破片は外面に煤が付着したものが殆どであった。壊れた土釜類や、食器を棄てた廃棄坑と考えられる。埋土は主に黄灰色土、灰色土で、炭化物を含んでいた。



第10図　03－１区88ＳＫ平面図、438ＳＫ平面・断面図

438ＳＫは88ＳＫの南側にあり、88ＳＫより新しい楕円形の土坑で、長径0.7ｍ、短径0.25ｍを測る。土坑内に0.25ｍ×0.2ｍの表面が平らな石が据えられていた。１ｍ西のピットでも0.2×0.1ｍの石を据えたピットが検出されており、礎盤の可能性がある。

80ＳＰはＸ＝－167582.5ｍ、Ｙ＝－53220.5ｍにあるピットで、第３面で見えていたので、中世末に下るかもしれない。ピットは円形に近く直径は0.3ｍを測る。ピット内から大量の土師器皿が出土した。何らかの祭祀で使用された後、小穴を掘って投棄されたのであろう。

456ＳＰは80ＳＰの北西0.3ｍで検出した径0.3ｍ×0.25ｍを測る楕円形のピットで、坑内に拳大までの小石が埋められていた。柱の沈下を防ぐ根石か柱の後抜き取り後に詰めたことも考えられるが、柱を建てるには浅くて安定しない。

第５面（付図）

T.P.15.65ｍから15.7ｍを上面としたにぶい黄橙色土をベースとする遺構である。古墳時代頃の溝と河川を検出した。

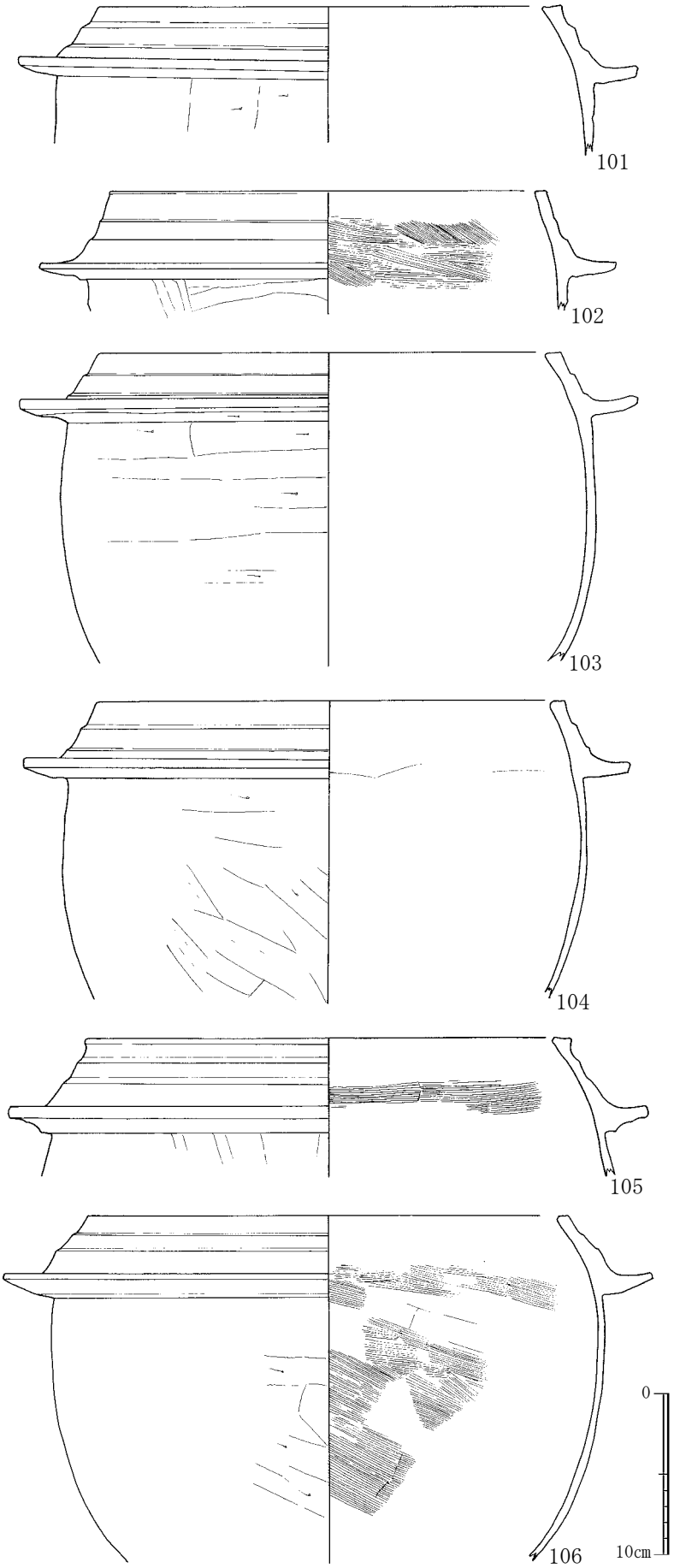
5001ＳＤは調査区南東部を横断するように、南から北へ走る溝で、幅1.4～1.7ｍ、深さは0.3ｍを測る。埋土は上層が黄灰色シルト質土、下層が灰黄色砂礫混じり土であった。

5002ＳＲは調査区北西部を南から北西へ流れる河川である。幅は６ｍ以上、深さ１ｍ以上を測るが、中世の遺構を残して掘削したため、川底まで掘削することはできなかった。埋土は上層の0.2ｍが砂礫を多く含む褐灰色シルト質土、その下は灰黄褐色や黄灰色、灰白色の砂礫層で、１ｍ以上の深さを測った。

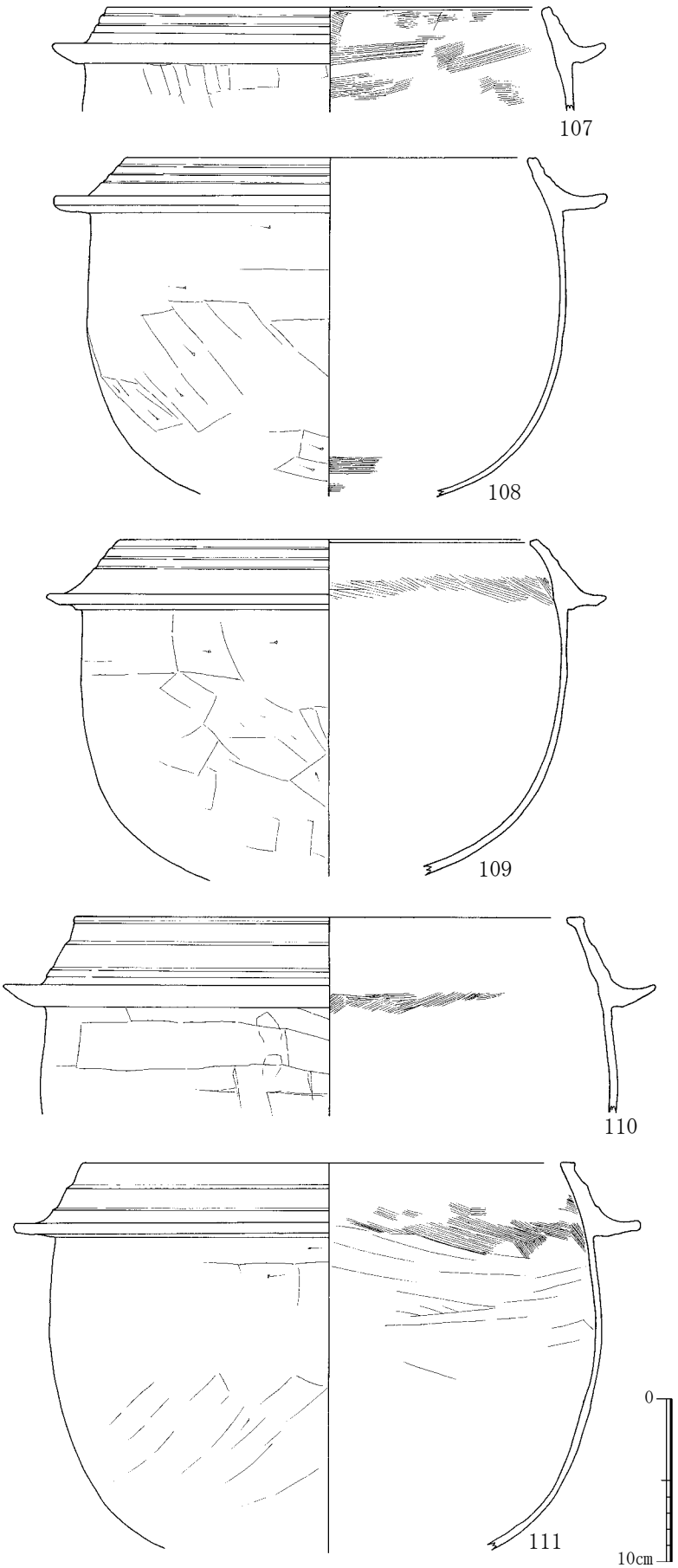
03－１区出土遺物（第11～13図）

03－１区88ＳＫ出土遺物

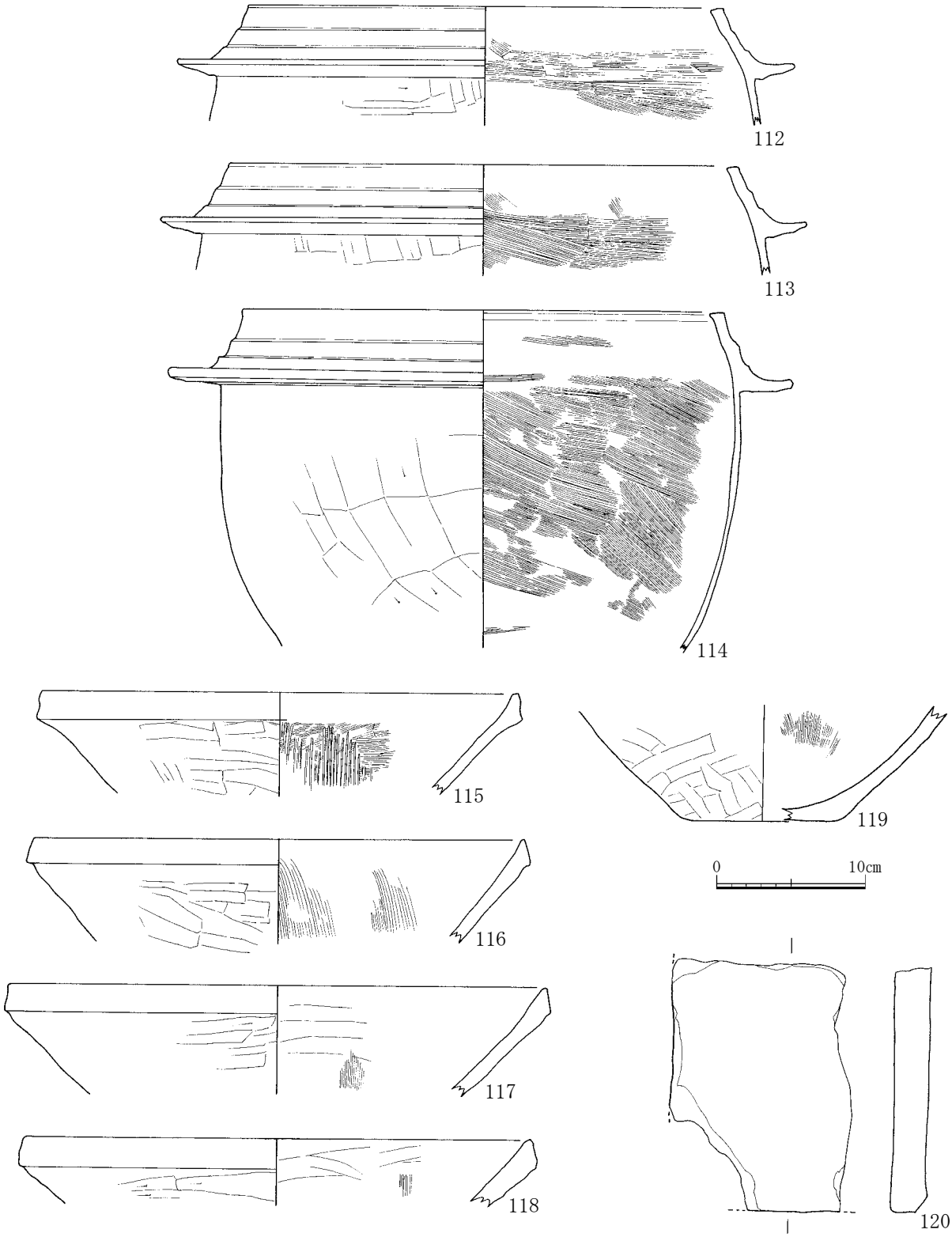
101～114は瓦質羽釜で、101～106、110は球形の胴部に、水平か僅かに上へ開く鍔から内弯して立ち上がる口縁部をつくる。口縁端部は水平な面をなす102、104、106と肥厚させて水平な面をつくる101、103、105、110がある。口縁部外面の段は１段の103と２段のものがある。胴部外面はヘラケズリ、内面はナデのものとハケメの102、104～106がある。107、108、110、111は内傾して立ち上がる口縁部をつくる。口縁端部はそのまま水平な面をつくる107、108、109と、口縁端部を肥厚させて水平な面をつくる111がある。口縁部外面は２～３段の段を作る。胴部外面はヘラケズリ、内面はナデのものとハケメをナデで消す108、板状工具でナデ調整する110、111がある。112、113はやや上に開く鍔から口縁部は内傾し、外面に２ヵ所の段をつくる。口縁端部はほぼ水平である口縁端部周辺はヨコナデ、口縁部内面はハケメで仕上げる。鍔から下の胴部はヘラケズリで器壁を薄く作る。114は膨らみの小さな長胴形の胴部に水平に開く鍔をつけ、口縁部は内弯気味に立ち上がる。115～118は瓦質の擂鉢である。開いて立ち上がる胴部に、115は口縁端部を摘みあげて僅かに外傾する面をつくる。116～118は口縁端部を僅かに肥厚させ、外傾する面をつくる。胴部外面はヘラケズリである。119は瓦質擂鉢の底部で、外面は上方向にヘラケズリ、内面はハケメ調整である。120は平瓦である。



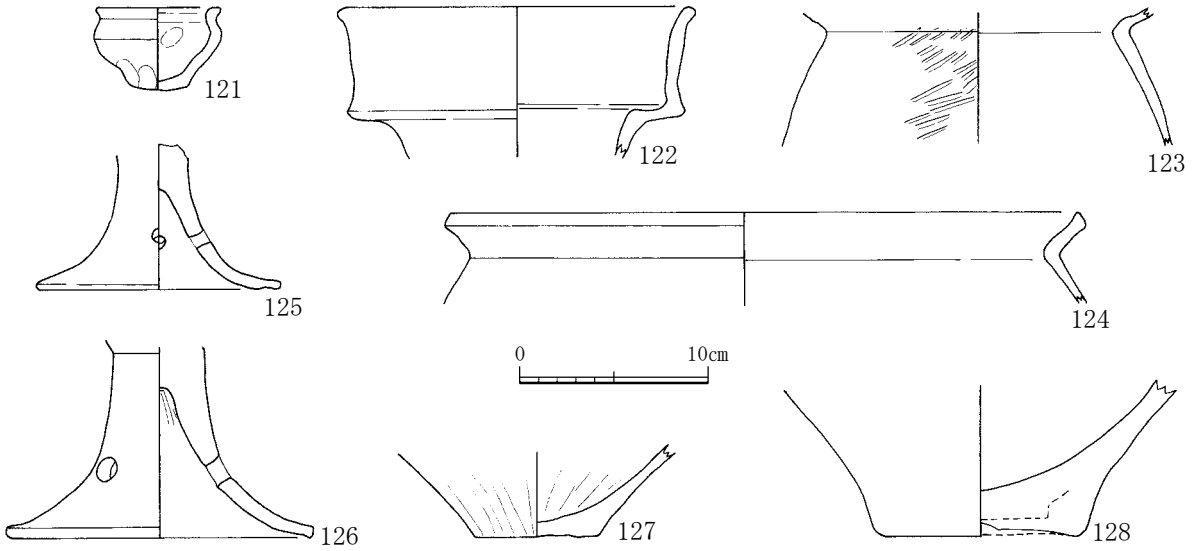
第11図　03－１区88ＳＫ出土遺物実測図１



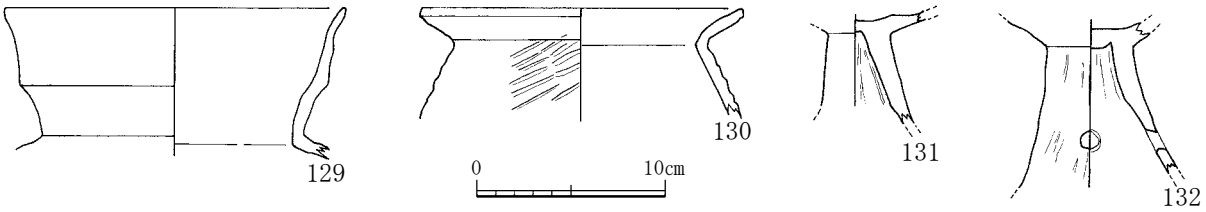
第12図　03－１区88ＳＫ出土遺物実測図２



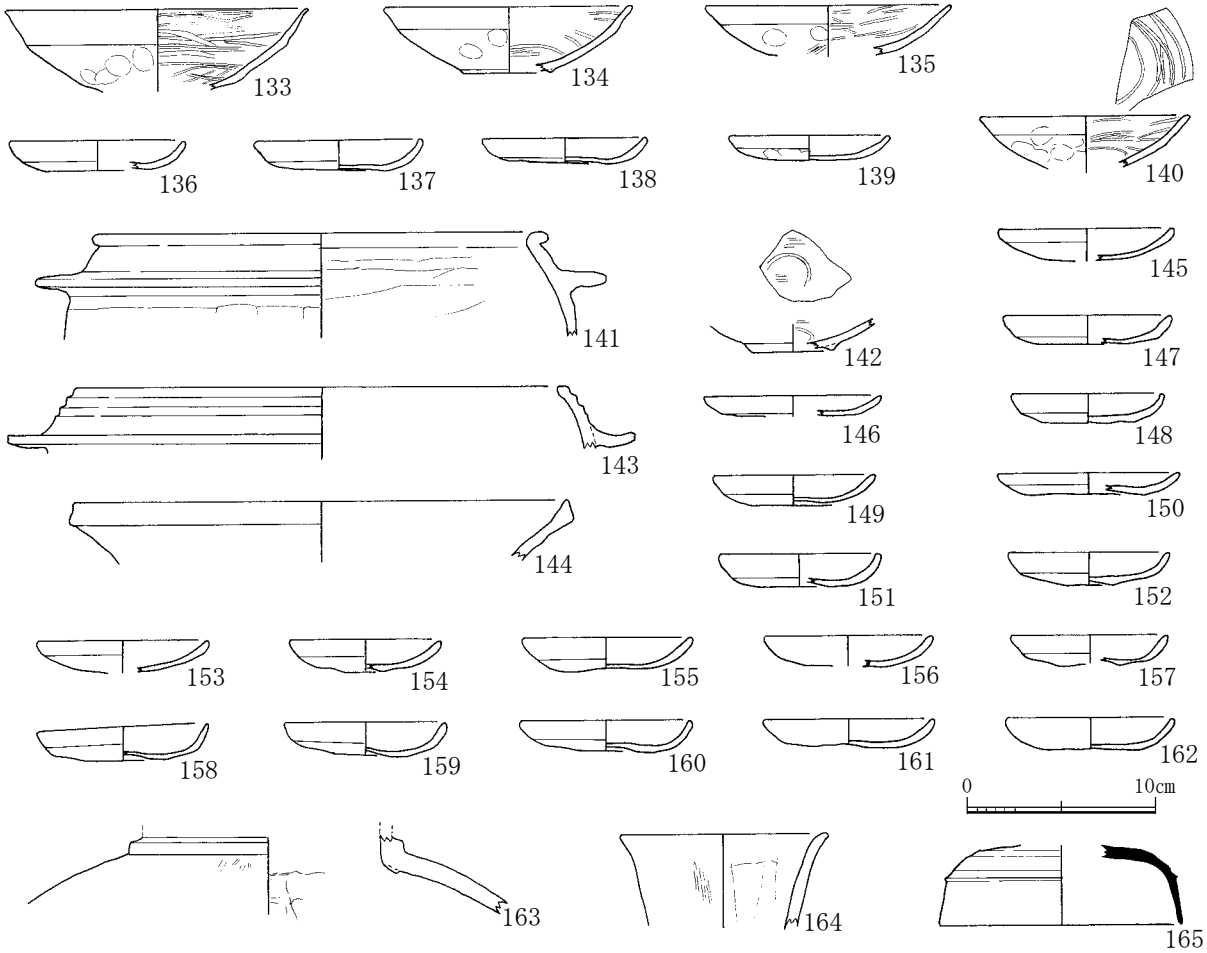
第13図　03－１区88ＳＫ出土遺物実測図３



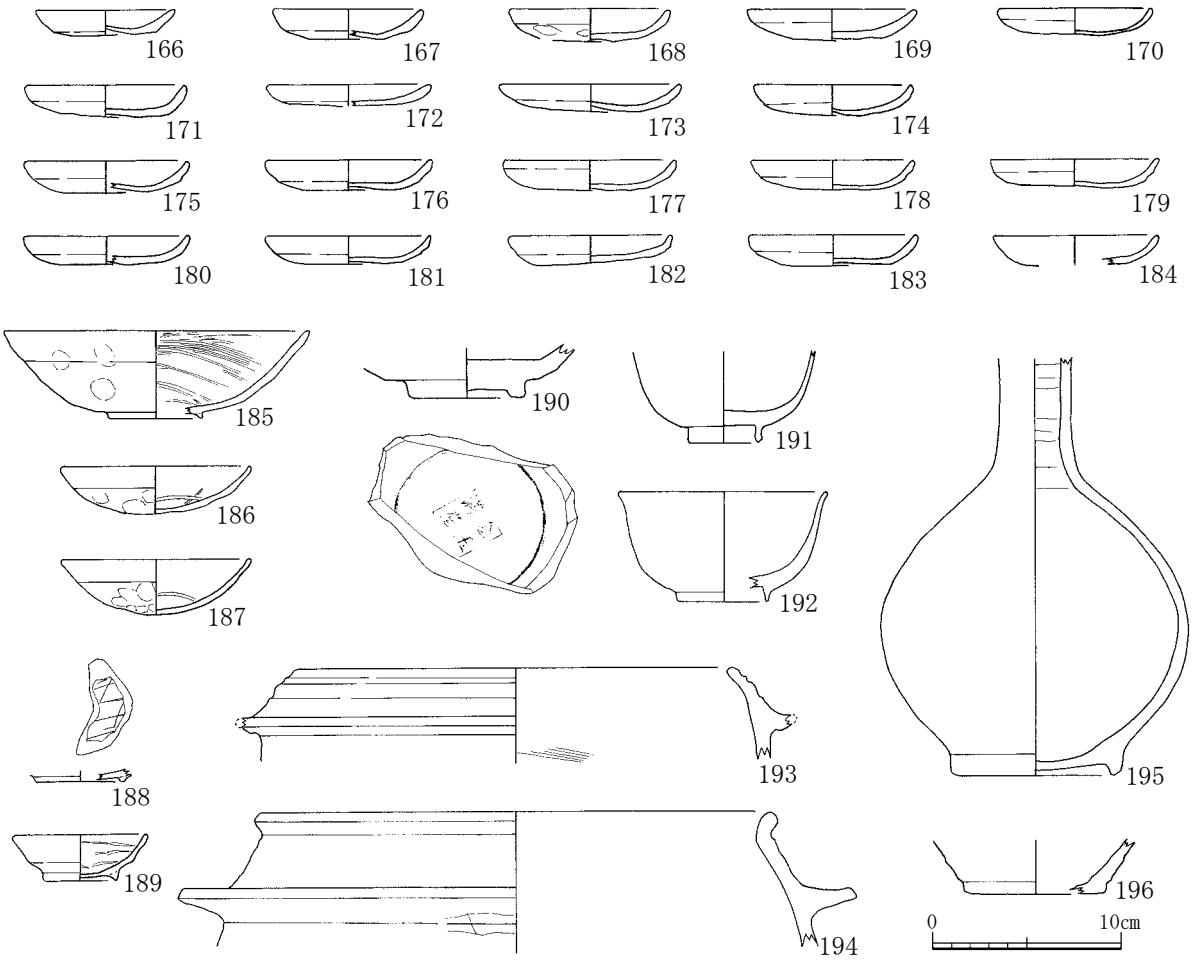
第14図　03－１区１ＳＲ出土遺物実測図



第15図　03－１区95ＳＫ出土遺物実測図



第16図　03－１区105、106、119、130、155、158、201、203、115、101の各遺構出土遺物実測図



第17図　03－１区各遺構出土遺物実測図　ニSP(166,167),チSP(168～174),リSP(175～183)
34SP(185),61SP(186,187),71SP(188),１SE(189,193),85SP(190),66SK(191,192,195),444SP(196)

03－１区１ＳＲ出土遺物（第14図）

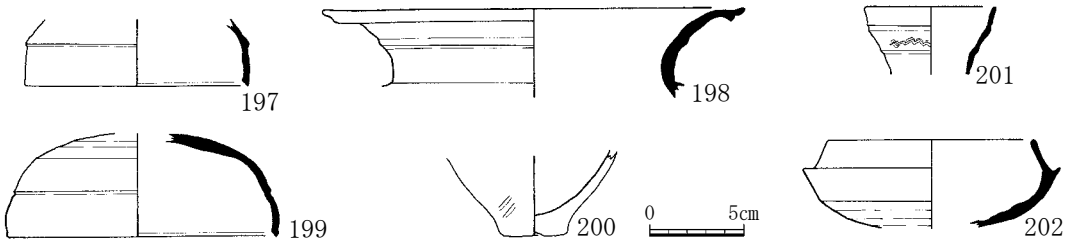
121は小型の手捏ねの壺で、歪な胴部から僅かに外反する口縁部をつくり、口縁端部は丸く収める。古墳時代前期頃のものか。122は二重口縁の壺。外反して開く頸部から垂直に立ち上がる口縁の端部を僅かに外反させ、端部は丸く収める。123、124は甕。123は膨らみの小さな胴部から水平近くまで折り曲げる口縁部をつくる。口縁端部は欠けている。胴部外面はハケメ調整、内面は板ナデの痕がかすかに残る。124は「く」字形に外反する口縁の端部は外傾する面をつくる。口径33.3㎝。125、126は高坏脚部。125は裾部に４孔、５は３孔の透かしをあける。127、128は弥生中期の底部。127は壺か鉢、128は甕か。

03－１区95ＳＫ出土遺物（第15図）

129は二重口縁の壺の口頸部。開いて立ち上がる頸部から屈曲して僅かに外彎する口縁の端部を細くおさめる。130は甕で体部にタタキメが残る。131、132は高坏の脚部で、132は２孔の透かしをあける。

03－１区　106、119、130、155、158、201、203、115、101ＳＫ出土遺物（第16図）

133～135は瓦器埦、133～135の体部外面は指オサエが残り、ミガキは観察されず、口縁部はヨ



第18図　03－１区各遺構 91SD(197,198)、92SD(199,200)、94SK(201)、57SK(202) 出土遺物実測図

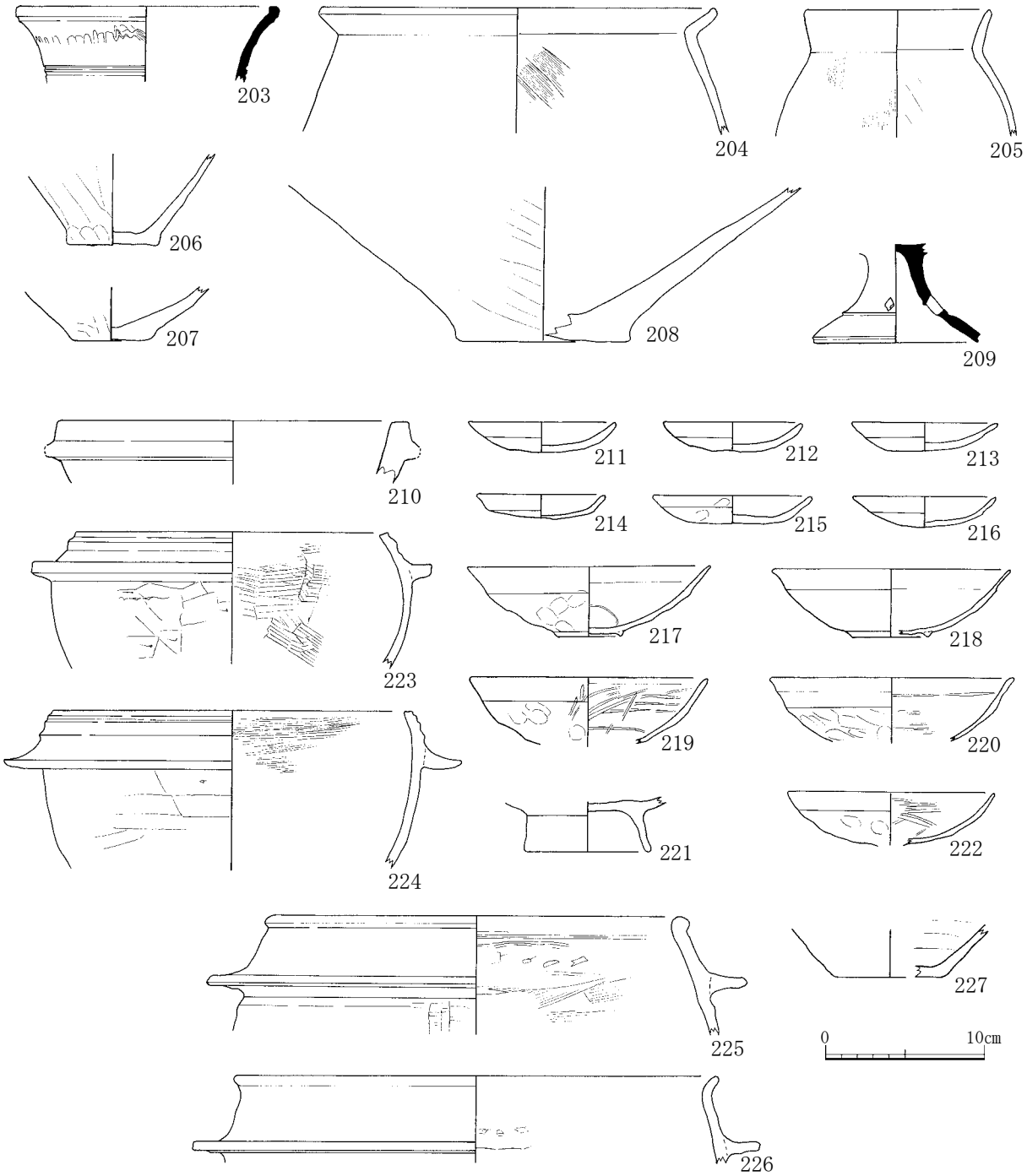
コナデ。内面は133が格子状、134は平行線の暗文である。体部内面は133がやや密なヘラミガキ、134は螺旋状のミガキ、135は粗い螺旋から放射状のミガキである。133は口径16㎝。105ＳＫ出土。134、135は口径13㎝。135は小さな三角形の高台をつける。134、135は106ＳＰ出土、136～139は、土師器小皿で底部外面にユビオサエが残る。口縁部内面はヨコナデで仕上げる。119ＳＰ出土。140は瓦器埦で、体部外面は規則的な指オサエ。内面は螺旋状のミガキが観察される。141は土師質羽釜で、水平に開く鍔に内傾する口縁の端部を僅かに折り曲げ、丸くおさめる。口縁端部はヨコナデ、内面はナデで仕上げている。155ＳＫ出土。142は小さな三角形の高台をつける瓦器埦の底部。見込みに螺旋状の暗文が観察される。143は瓦質の羽釜で、上がり気味に開く鍔に内傾して立ち上がる口縁部に段を作る。144は須恵質の鉢口縁部で、端部はわずかに外傾する面をつくる。145～162は土師器小皿で、底面中央は僅かに浮くものが多い。口縁部はヨコナデ、底部は内外面ともナデで仕上げている。145～148は201ＳＰ、149～162は203ＳＰ出土。163は壺の頚部で凸帯を貼り付け段をつくる。115ＳＰ出土。164は開き気味に立ち上がる壺口縁部。口径11.0㎝。弥生後期頃のもの。101ＳＤ出土。165は須恵器蓋坏で、稜は鋭い。101ＳＤ出土。

03－１区　各遺構出土遺物（第17図）

166～184は土師器小皿。底面は平らな169、170と僅かに浮かせるものがある。底面に指頭痕の残るものが多い。口縁部はヨコナデし、内面はナデで仕上げる。口径8.5～10㎝、器高は1.5～1.8㎝の範囲に収まる。185～189は瓦器埦。185～187は外面のへらミガキを施さない。185は内面を見込みから口縁部まで螺旋状のヘラミガキで調整する。高台は小さな三角形である。186、187は高台が無くなり、小型化した時期のもの。口縁部は内外面をヨコナデ。体部外面は不規則なユビオサエが残る。見込みに螺旋状のヘラミガキを施す。188は底部で、高台は退化した三角形で、見込みに平行線の暗紋をつける。189は小型の瓦器埦で、外面はナデ、口縁部はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキで調整する。190は青磁碗の底部で、底面を削りだし、低い高台を作る。見込みに「金玉満堂」の印がある。191、192は染付の碗である。193は瓦質羽釜で、口縁部は内傾し、外面に段をつくる、194は土師質羽釜で、内傾して立ち上がる口縁端部を「く」字形に折り曲げ、端部は外傾する面をつくる。195は白磁の瓶で、球形に膨らむ胴部に細く伸びる頸部をつける。196は須恵質の鉢底部である。遺構図に遺構位置は明示していない。

03－１区　91ＳＤ、92ＳＤ、94ＳＫ、88ＳＫ出土遺物（第18図）

197、199は須恵器蓋坏。197は天井部下端の稜が緩く、口縁端部は内傾する段をつくる。199は



第19図　03－１区包含層出土遺物実測図

天井部が膨らみ、稜は退化して沈線を巡らせる時期のもの。198は須恵器甕の口縁部で端部を屈曲させ外面に段をつくる。201は開いて立ち上がる壺か瓿の口頸部で、頸部に突起と沈線を巡らせ、その間に波状文を描く。202は坏で、口縁部は内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部の回転ヘラケズリは2/3程度である。200は弥生時代後期の甕底部である。

03－１区　包含層出土遺物

203は須恵器で、壺の口縁部。口縁部に１条、頸部に２条の沈線を巡らせる。204は弥生時代中期の甕口頸部。頸部は「く」字形に外反し、口縁端部は外傾する面をつくる。203は古墳時代の壺で、膨らんだ胴部に短く開いて立ち上がる口縁部をつくる。206～208は平底の底部で、弥生中

期のもの。209は須恵器で、高坏の脚部。210は肥前産の石鍋で、外傾する胴部に短い鍔がつく。211～216は土師器小皿で、平らな底部の215と丸味を持つ211～214、216がある。口縁部はヨコナデ、見込みはナデで仕上げる。

217～220、222は瓦器埦で、胴部外面にユビオサエが残り、口縁部内外面はヨコナデ、内面は粗いヘラミガキで仕上げる。高台は小さな三角形の217, 218と粘土紐の痕跡が残る222がある。221は土師器で、短く開く台付皿の脚部。223、224は瓦質の羽釜で、内傾する口縁部に223は２段、224は３段の段をつくる。225、226は土師質の羽釜で、225は内傾して立ち上がる口縁の端部を外折させ丸くおさめ、226は細く外反させて丸くおさめる。　227は須恵質の鉢底部である。

03－２－１区

03－２区は03－１区の南東側に位置する調査区で、通路を確保するため２カ所に分けて調査を実施し、西側を03－２－１区、東側を03－２－２区とした。

03－２－１区は、西北端がＸ＝－167598ｍ、Ｙ＝－53200ｍ、西南端が、Ｘ＝－167604ｍ、Ｙ＝－53206ｍ、東北端がＸ＝－167618ｍ、Ｙ＝－53178ｍ、南東端がＸ＝－167624ｍ、Ｙ＝－53184ｍに区切られた31ｍ×８ｍの調査区である。２面で遺構を検出した。

第１面

耕土、床土を除去したT.P.16.3ｍ前後検出した遺構面である。遺構は２面で検出したが、時期はともに近世であり、遺物から時期差は確認できないので、１面に纏めて記述する。 この時期の遺構は溝とピット、大型土坑から成る。

調査区中央の南北溝（近代以降）の両側で検出したピット群で、方形にまとまらないが、数棟の掘立柱建物が考えられる。しかし、近世には、家屋は礎石建物になっているので、納屋か簡易な建物であろう。

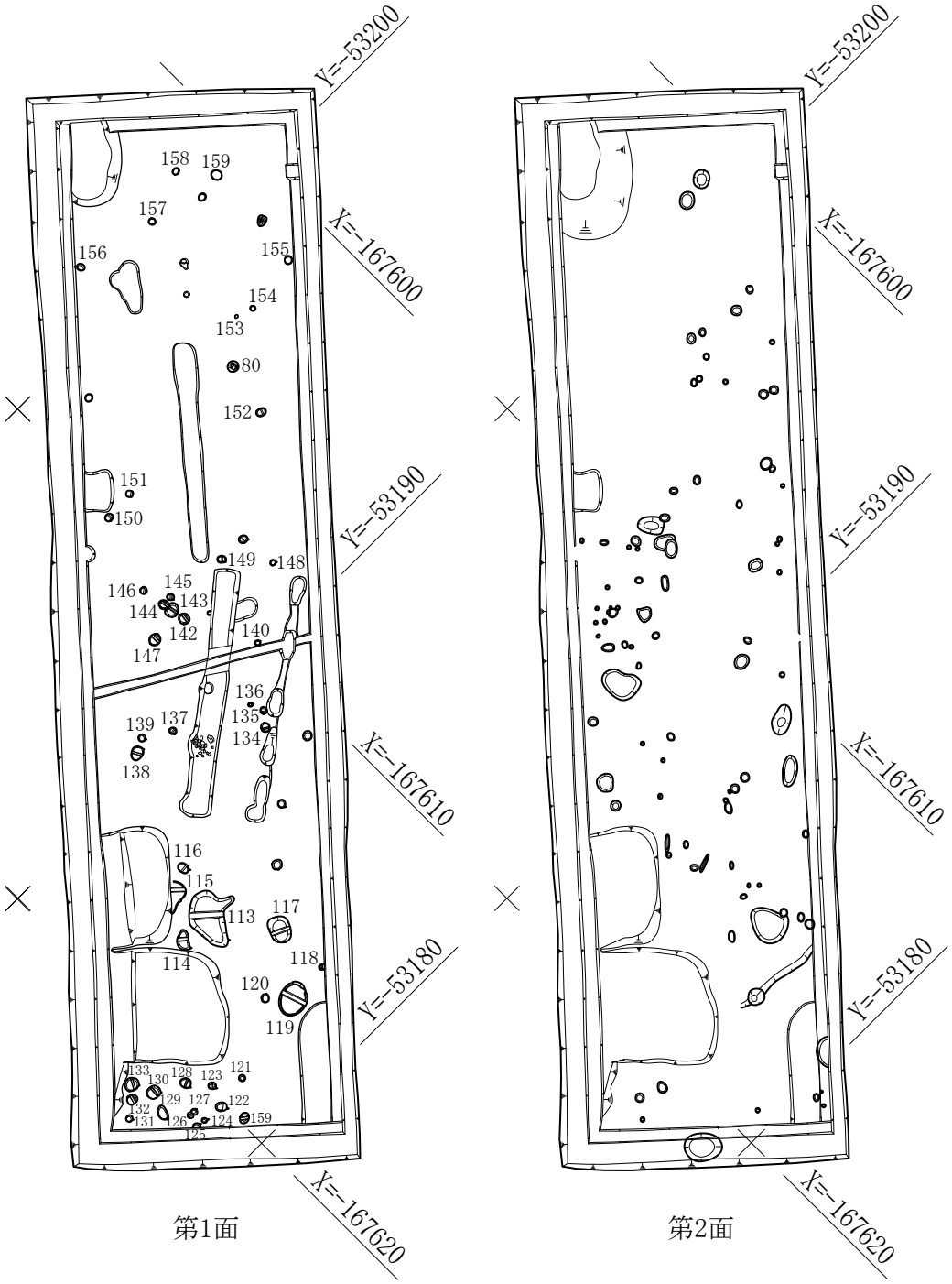
78ＳＤはと65ＳＤは平行する溝で、それぞれ幅0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。両者の間隔は約１ｍであり、近代の溝と重複する箇所もあるが、現地割りに沿っており、03－１区で検出した里道か、何らかの構造物の基礎を造るための布掘りであろう。

１ＳＫ、２ＳＫ、５ＳＫは深さが0.1ｍ前後である。

第２面

北西部でT.P.16.0ｍ、南東部はやや高く、16.2ｍ前後で確認した遺構面で、弥生時代、古墳時代、中世の遺構を検出した。弥生時代から中世の遺構が同じ面で検出される状況は、南側の07－11区、09－１区でも同様である。

検出した遺構は主にピットや土坑である。北西部で検出したピット群は柱痕が確認できるものもあり、掘立柱建物を想定できるものもあるが、間隔が区々であり、平面形が台形になることから無理に復元しなかった。



第20図　03－２－１区第１面、第２面遺構平面図（1/200）

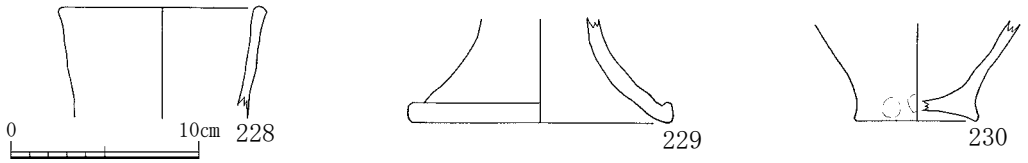
03－２－１区出土遺物

25ＳＫ出土遺物（第21図）

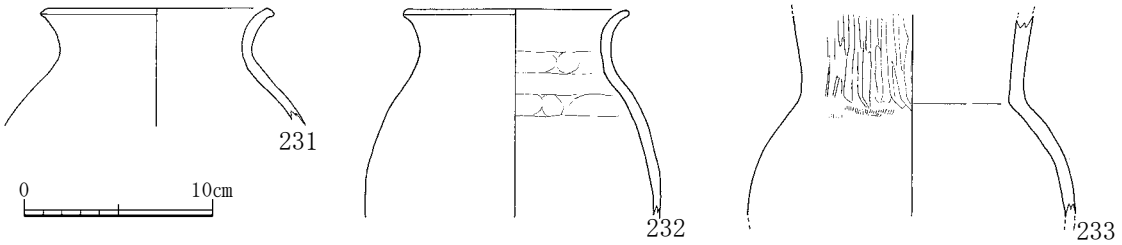
弥生時代中期の土器が出土した。228は僅かに開いて立ち上がる壺の口縁部で端部は水平な面をつくる。229は脚部で端部を上に拡張する。３は甕底部である。

80ＳＰ出土遺物（第22図）

231、232は頸部から外弯して開く口縁の端部に外傾する面をつくる壺の口頸部。232は胴部の膨らみが小さい。和泉地域に多いタイプの土器である。233は長頸壺の胴頸部で、球形に近い胴



第21図　03－２－１区25ＳＫ出土遺物実測図



第22図　03－２－１区80ＳＫ出土遺物実測図

部から僅かに開いて立ち上がる頸部をつくる。

03－２－２区

03－２－１区と幅1.5ｍの里道を隔てた南東側の調査区で、広さは18ｍ×６ｍである。

第１面

03－２－１区より高いT.P.16.8ｍ前後で遺構を検出した。主に調査区東南部のＸ＝－167631ｍ、Ｙ＝－53169ｍ付近で直径0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍ前後のピットを数個検出した。３箇所は道路に直交し、間隔は1.5ｍ、２ｍであった。両側ではピットは見つからなかったので柵か塀であろうか。

第２面（第23図　付図３）

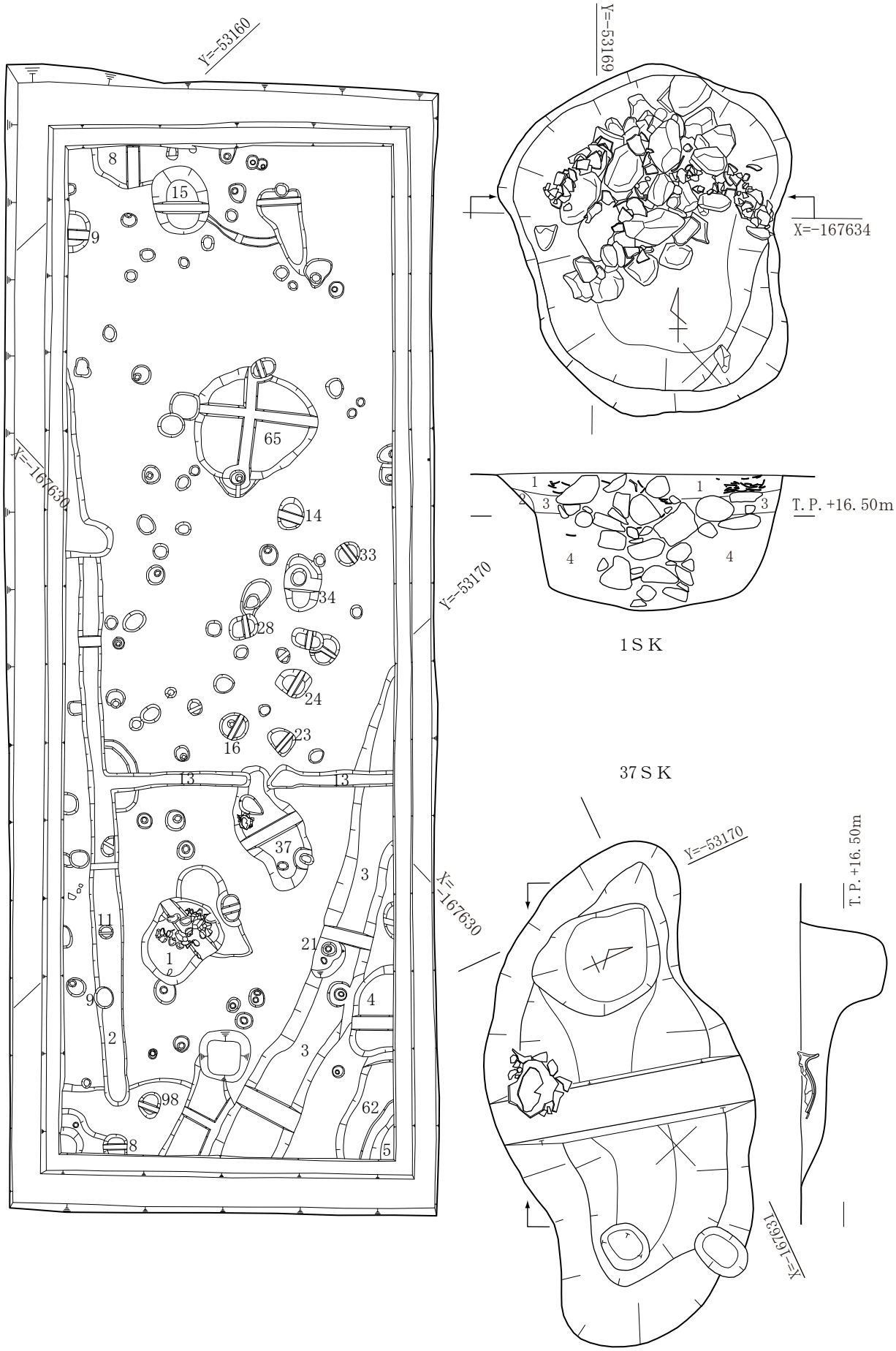
南東端でT.P.16.7ｍ、北西端では0.15ｍ低いT.P.16.55ｍで弥生時代から中世までの遺構を検出した。

１ＳＫは調査区の東部にある歪な楕円形土坑で、長径1.55ｍ、短径1.35ｍ、深さ0.6ｍを測る。掘形は逆台形で、主に土坑北西部に人頭大までの川原石と瓦質や土師質の羽釜、瓦器椀、土師器皿等が投棄されていた。礫石は底面から上層まで埋め尽くすように充填されていたが、土器は上層に多く、石とともに投棄されたのか、小さく砕けたものが多かった。

２、７、８ＳＤは調査区の南端に沿って、わずかに西へ振りながら流れる溝で、幅0.5ｍ、深さ0.15ｍを測る。８ＳＤは２ＳＤの仕切り畦から南東に続く溝であろう。７ＳＤは２ＳＤより新しくなるが、２ＳＤ埋没後に、掘り直されたのであろう。

13ＳＤは２ＳＤ南東端から６ｍ、Ｘ＝－167634ｍ、Ｙ＝－53172ｍから北東へ調査区に直行する溝で、南西端から2.1ｍの所で幅0.35ｍの仕切り畦を設ける。

以上の溝は、07－11区でも同様の溝が検出されており、この地域の地割に沿って屋敷地の小区画をつくる溝と考えられる。

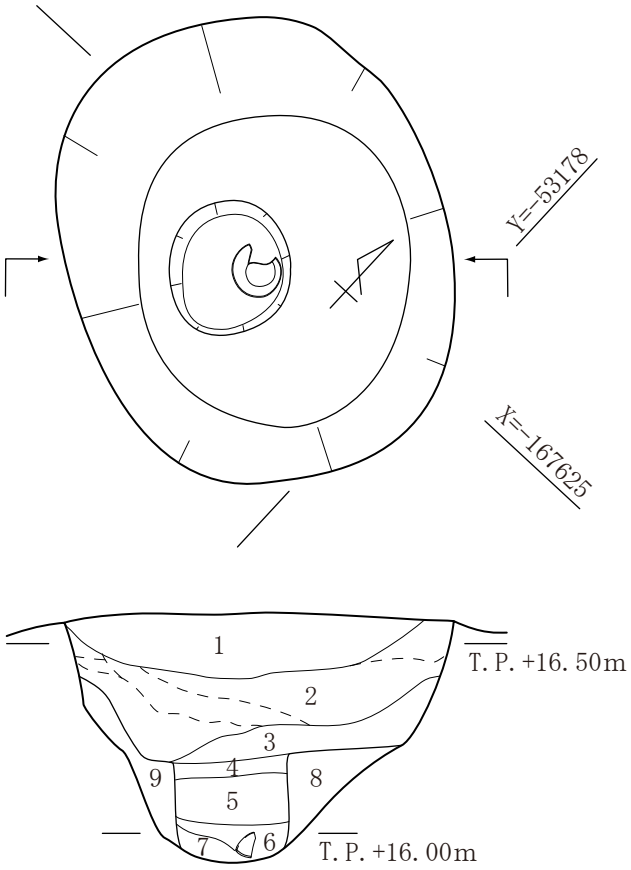


第23図　03－２－２区平面図１ＳＫ、37ＳＫ平面・断面図

３ＳＤは調査区南東部で検出した、南南東から北北西にわずかに屈曲しながら流れる溝である。幅は0.9ｍ～1.25ｍ、深さは0.5ｍ～0.7ｍを測る。掘削断面は水流による侵食の影響もあるが、場所によって異なり、逆台形から幅広の「Ｖ」字形であった。埋土は黒褐色シルトや灰褐色から灰黄褐色の粘質シルトで各層とも砂礫を多く含んでいる。各層内から弥生時代中期の土器が出土している。

37ＳＫは１ＳＫの北1.5ｍで検出した歪な土坑である。北西は13ＳＤの仕切り畦と重なっていたが、溝が浅かったこともあり、ほぼ全形が遺存していた。長径2.0ｍ、短径1.15ｍ、深さは0.4ｍを測る。埋土は黒色に近い暗赤灰色シルト質土であった。最上層で弥生時代中期の壺が横に寝かされた状態で出土した。下半分はほぼ遺存していたが、上半分は削られたのか、土圧で落ちた腹部以外は残っていなかった。弥生時代の遺構は黒褐色系土を埋土としており、この土坑は、弥生時代のものと推定される。

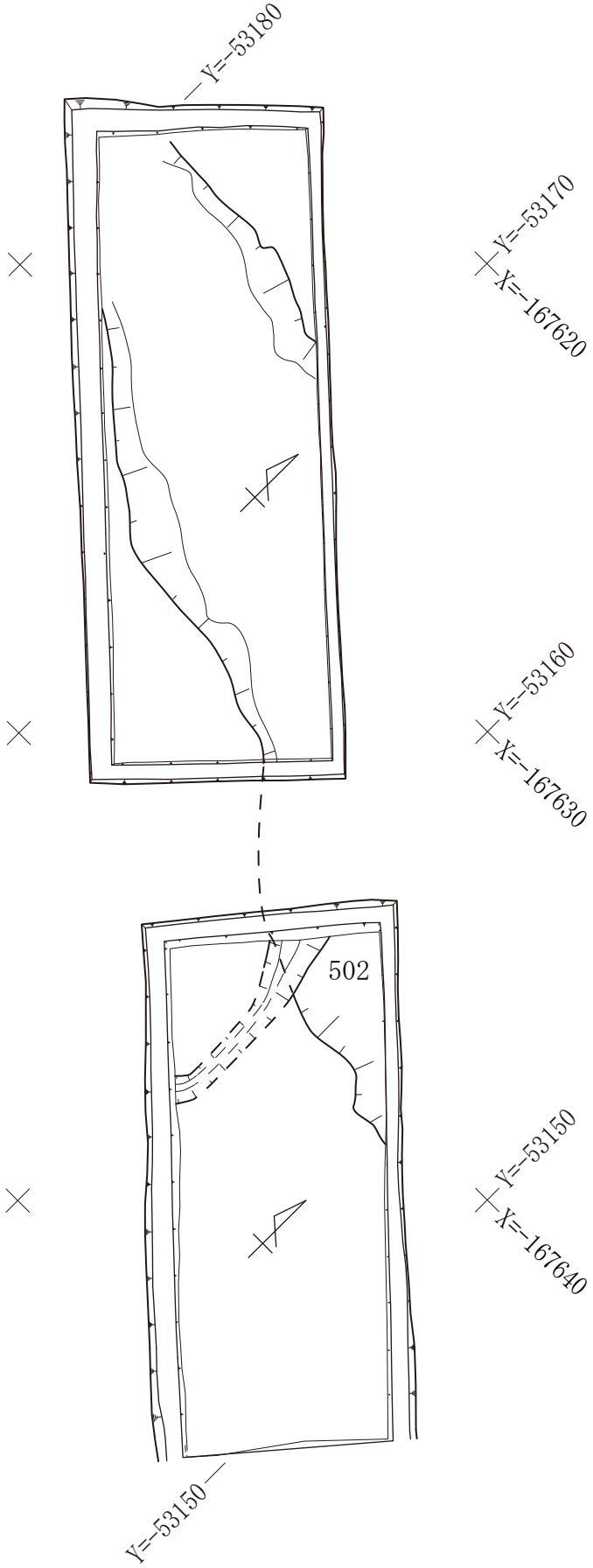
15ＳＥは調査区西南端近くで検出した中世の井戸である。弥生時代以前の河道跡の砂礫層をベースにして掘削されている。掘形は大きく、長径1.2ｍ、短径1.0ｍの楕円形を測るが、深さは、0.6ｍと浅い。底部に直径0.30ｍ、高さ0.2ｍの曲物等を井戸側にしていたとみられ、井戸側の外には肩口の砂礫が流れ込んでいたが、井戸側内は砂礫混じりのシルト層が堆積していた。曲物は腐ったのか、残っていなかった。また、井戸底で口縁部の欠けた瓦器椀が出土している。



1 2.5Y6/1黄灰色シルト質土
2 2.5Y6/2灰黄色シルト質土
3 2.5Y7/1灰白色粘質シルト
4 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
5 2.5Y7/1灰白色シルト 砂礫混
6 2.5Y6/1黄灰色シルト
7 2.5Y5/1黄灰色砂
8 5YR4/1褐灰色砂
9 2.5Y6/2灰黄色砂礫

第24図　03－２－２区15ＳＥ平面・断面図

14ＳＫは調査区の西北寄り、Ｘ＝－167627.5ｍ、Ｙ＝－53173ｍにある浅い楕円形土坑で、長径0.6ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は上層が灰色砂質土、下層は灰黄褐色砂質土であった。中世の土坑である。65ＳＫは14ＳＫの西にある円形に近い形の不定形土坑で、長径2.15ｍ、短径1.85ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は褐灰色土で中世の土坑である。74ＳＫは14ＳＫの東１ｍにある歪な楕円形土坑で、長径1.05ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は黄灰色砂質土で、中世の土坑である。９ＳＫは約１/２が調査区外にあると考えられるが、長径0.8ｍ前後の楕円形になると思われる。



第25図　03－２－２区、03－３－１区第４面平面図

深さは0.4ｍ以上で、埋土は灰色シルト、灰褐色砂質土であった。15ＳＫや07－11区例から井戸と考えられる。４ＳＫは調査区東南端近くにある土坑で、北側は調査区外にあるが、現況で東西1.55ｍ、南北0.75ｍ以上、深さは0.45ｍを測る。埋土は灰色シルト、褐灰色砂質土であった。中世の土坑である。18ＳＫは調査区西北端にある土坑で、西北側は調査区外に広がっているが、南北1.55ｍ、東西0.75ｍ以上、深さは0.15ｍを測る。埋土は灰黄色シルト質土であった。15ＳＥより古いが、埋土から中世の遺構で、時期差は殆ど無い。23ＳＫは0.5ｍ×0.45ｍの歪んだ楕円形土坑で、深さは0.1ｍであった。埋土は褐灰色シルトから砂質土で２、３㎝までの砂礫を多く含んでいた。中世の土坑である。この面では多数のピットを検出した。柱痕を観察できるものもあるが、建物を復元することはできなかった。

第４面

第３面を0.4～0.5ｍ掘り下げたT.P.16.2ｍの面で、調査区を対角線状に東から西北西流する河道を検状出した。隣接する03－３－１区のＹ＝－53152ｍ付近から左岸側が確認できる河道で、幅約3.4ｍ、深さ0.8ｍ以上で、砂礫が堆積していた。縄文時代後期頃の土器が出土した。

03－２－１区出土遺物

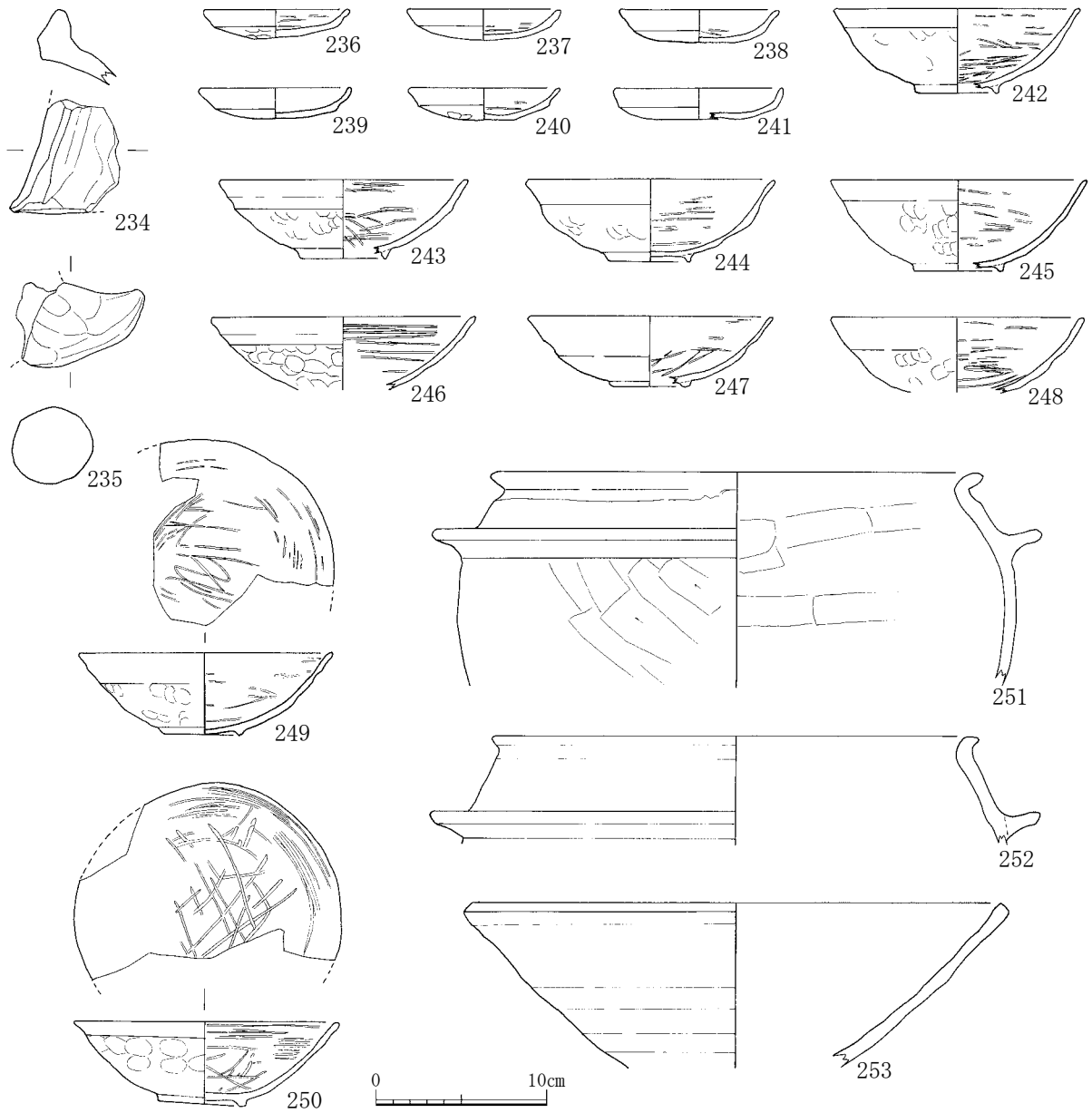
この調査区では近世以降の陶磁器類と弥生土器、古墳時代の土器が出土している。近世の遺物は割愛した。

03－２－１区25ＳＫ出土遺物（第21図）

弥生土器が出土している。228は僅かに開いて立ち上がる壺の口縁部で口縁端部は水平な面をつくる。229は脚部で端部を上に拡張する。230は底部。

03－２－１区80ＳＰ出土遺物（第22図）

弥生土器が出土している。231、232は頸部から外弯して開く口縁の端部に外傾する面をつくる壺の口頸部。232は胴部の膨らみが小さい。和泉地域に多いタイプの土器である。233は長頸壺の



第26図　03－２－２区１ＳＫ出土遺物実測図

胴頸部で、球形に近い胴部に僅かに開いて立ち上がる頸部をつくる。

03－２－２区出土遺物１ＳＫ出土遺物（第26図）

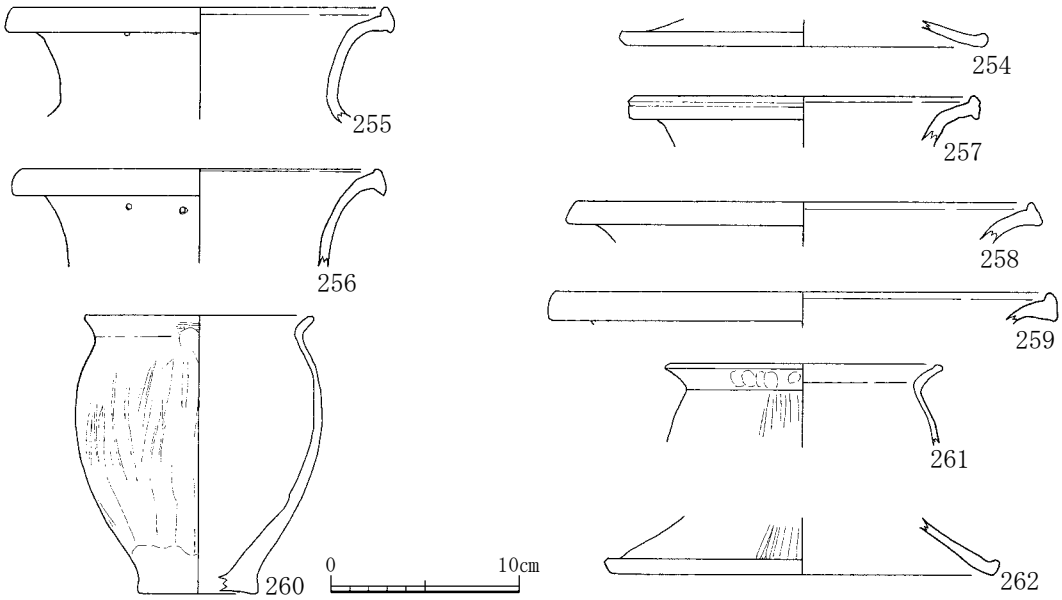
１ＳＫからは中世の瓦器や土師皿、羽釜、鉢などが出土したが、古墳時代の土器も混入している。234は竈の破片で、混入か。235は甑の把手である。236、237、240は瓦器小皿で、見込みに粗いミガキで調整する。236､240は口縁部を強くヨコナデする。241は口縁部を僅かに外弯させる。242～250は瓦器埦で、胴部外面は成形時の規則的なユビオサエが残る。口縁部はヨコナデで、243、244、247はヨコナデの口縁部と胴部の境が明良である。内面は不規則な粗いヘラミガキのものが多い。高台は小さな三角形の243～245、249と、僅かに逆台形の247、250がある。249は口径14.8㎝、器高4.7㎝、17は口径15.6㎝、器高5.0㎝。251、252は土師質の羽釜で水平近くに開く鍔に内弯して立ち上がる口縁の端部を外折させ端部は丸くおさめる。253は須恵質の鉢で口縁端部は外傾する面をつくる。

03－２－２区37ＳＫ出土遺物（第27図）

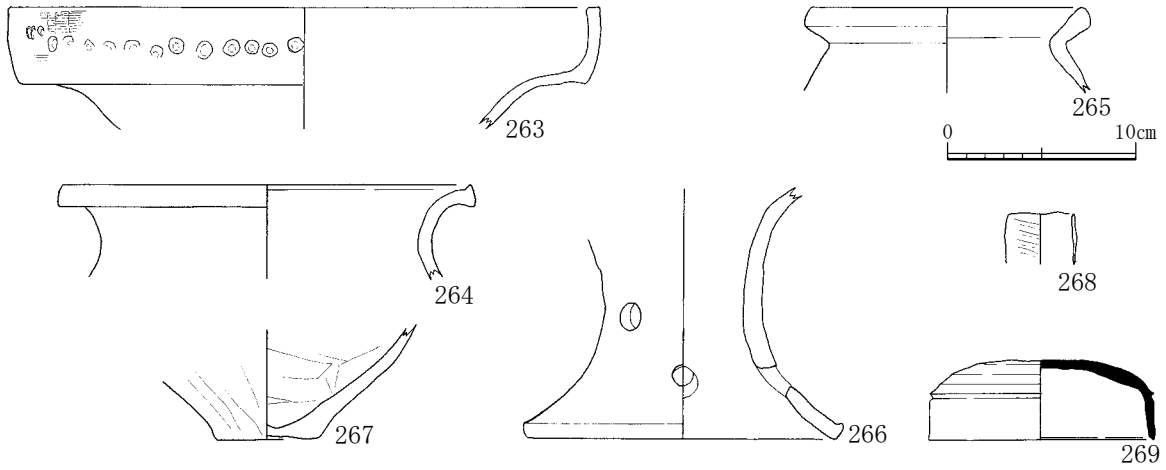
弥生土器が出土した。254は壺蓋の裾部破片である。255～259は広口壺。255、256は開いて立ち上がる頸部から外反する口縁端部を上下拡張させ、255は外傾する面をつくる。257～259は上下に拡張する口縁端部で、255は端部に凹線を１条巡らせる。260、261は甕で、260は口縁径より膨らむ胴部に大きめの底を作る。口縁部はく字形に外反し、端部は小さな面をつくる。261は胴部の膨らみが小さく、口縁端部より内側にある。262は高坏の脚端部であろう。

03－２－２区　包含層出土遺物（第28図）

263、264は壺。263は外反して開く頸部から垂直立ち上がる口縁部をつける受け口壺で、口縁部は摩耗しているが、簾状文と竹管文が観察できる。264は広口壺で口縁端部を上下に拡張して



第27図　03－２－２区37ＳＫ出土遺物実測図

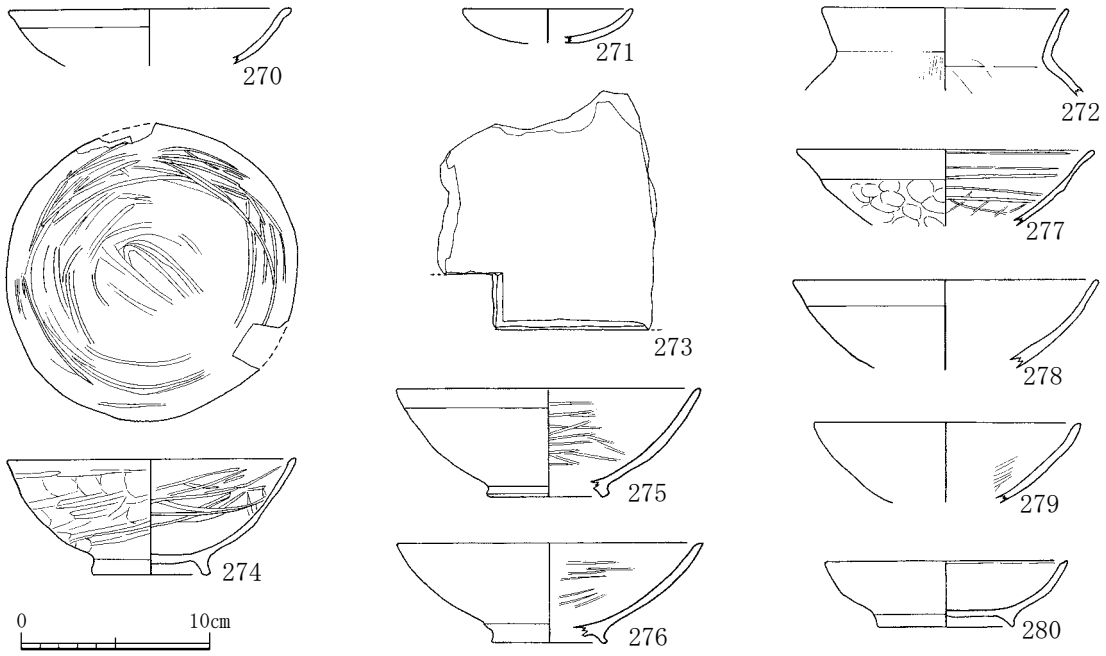


第28図　03－２－２区包含層出土遺物実測図１

おさめる。265はく字形に外反する甕の口縁部。266は鼓状に上下に開く器台で、裾部は内傾する面をつくり、裾部に４カ所の透し孔を２段位置をずらせてあけている。261は壺の底部。268は古墳時代の製塩土器。269は須恵器蓋坏。天井部下端の稜は鋭く、口縁との境に沈線を巡らせる。口縁端部は内傾する段をつくる。

３－２－２区　包含層出土遺物２（第29図）

270は土師器の椀で、内弯する胴部から僅かに外反する口縁部をつくる。271は土師器の皿で、口径11.0cm、器高1.8cm。272は甕の口頸部で、古墳時代のもの。273は軒平瓦。275～280は瓦器椀。274は胴部外面にユビオサエの後、粗いヘラミガキを施す。見込みは平行線状の暗文、胴部内面は口縁端部近くまで螺旋状にヘラミガキする。275～280は全体に摩耗している。275は内面を横方向のヘラミガキ、276の内面は、底部が放射状、口縁部は横方向のヘラミガキが観察される。



第29図　03－２－２区５ＳＫ、12ＳＫ、15ＳＫ包含層出土遺物実測図

280は口径11.8㎝、器高3.5㎝、高台径7.2㎝で、低く、高台径が大きい土師埦である。

03－３区

03年調査で最東南、府中病院の西北側の調査区である。掘削土を仮り置きするスペースを確保するため３区に分けて調査を実施した。北西から03－３－１区、03－３－２区、03－３－３区であるが、各区に跨がる遺構があり、遺構数が少ないので纏めて記述する。

西北端の03－３－１区の現地表はT.P.17.9ｍ前後で、0.6～0.9ｍの盛土、0.2ｍの旧耕作土、0.1ｍの黄灰色土と続く。床土の下、T.P.16.8ｍに堆積する灰オリーブ色は中世包含層で0.1ｍ～0.15ｍの厚さがある。03－３－２区、03－３－３区では中世の包含層は観察されず、耕作土を除去したにぶい黄褐色砂まじりの砂質土で中世の遺構が検出される。この下は河川氾濫による砂礫層を挟んで灰白色シルト質土や灰色シルト質土となっている。

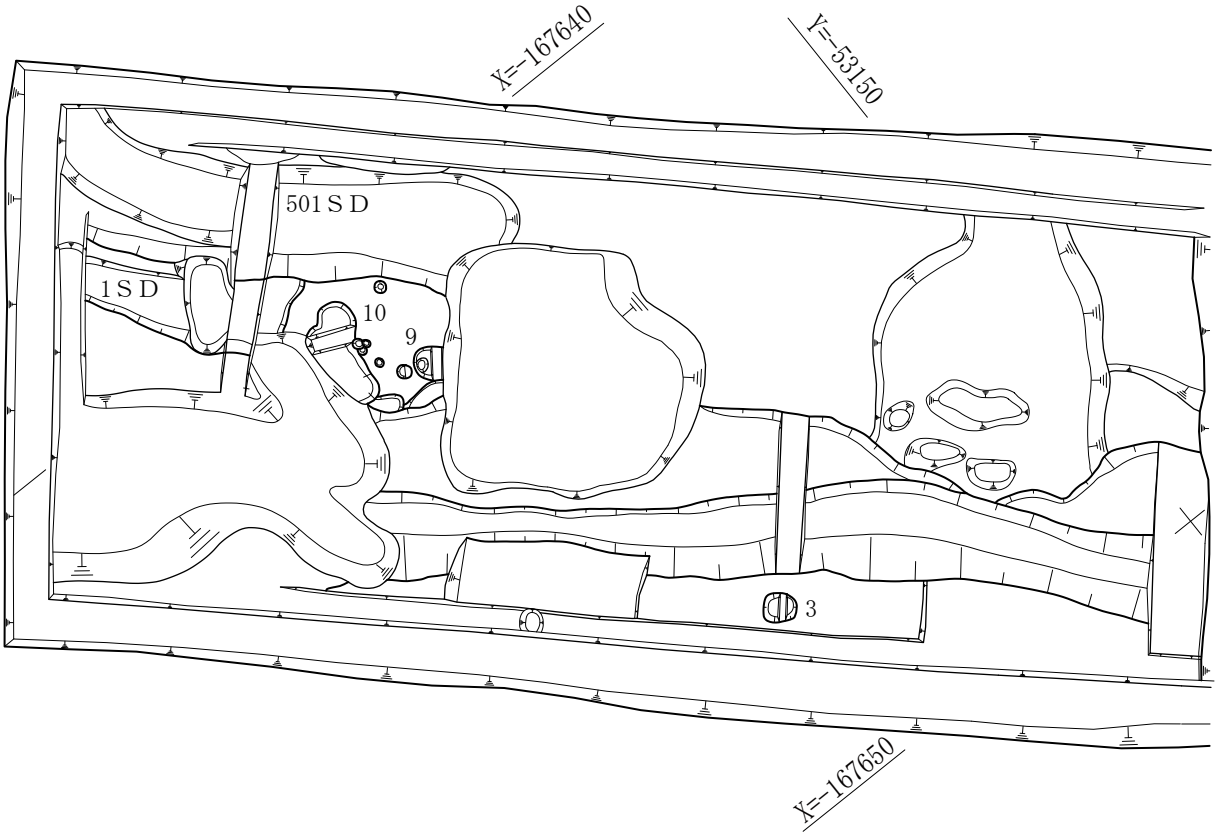
03－３－３区ではT.P.16.8ｍ付近で中世の遺構、T.P.16.6ｍ前後で古墳時代の遺構が観察された。

中世の遺構

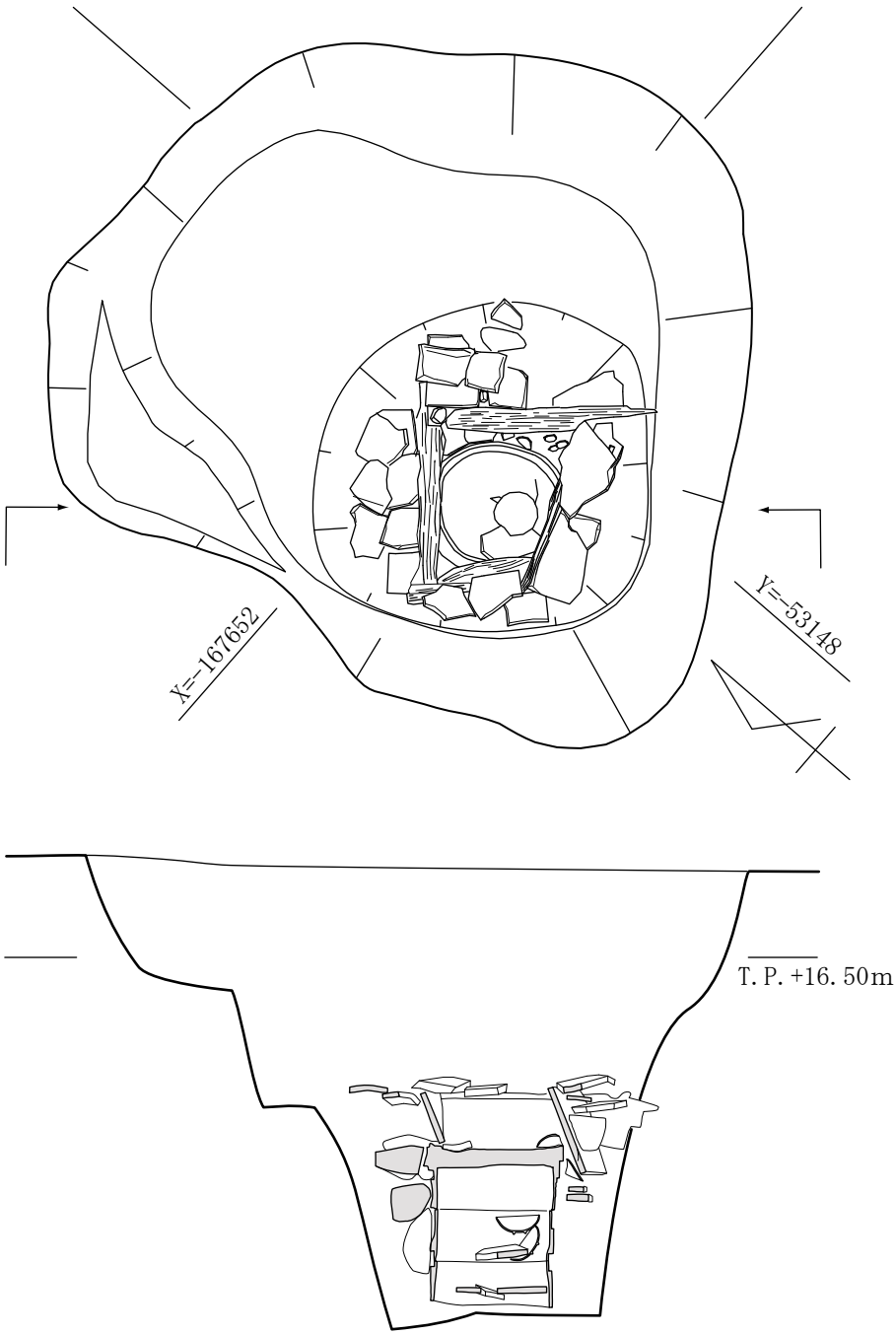
この調査区は弥生時代から古墳時代の河道跡で、周囲よりやや低くて湿地化していたのか遺構は少なく、03－３－１区で溝、03－３－２区で井戸やピットを検出した程度である。

１ＳＤは03－３－１区西端で検出した。幅0.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰白色シルトである。

１ＳＥは03－３－２区の西部、弥生時代の埋没河川跡で検出した大きな井戸で、井戸側に曲物と板材を使用する。井戸は南東に脹らむ丸味を持った方形に掘られており、長径2.35ｍ、短径2.2ｍを測る。掘形は急角度の逆台形で、底までの深さは1.5ｍを測る。南東側は地表から0.8ｍ下がった南



第30図　03－３－１区平面図



第31図　03－３－２区１ＳＥ平面・断面図

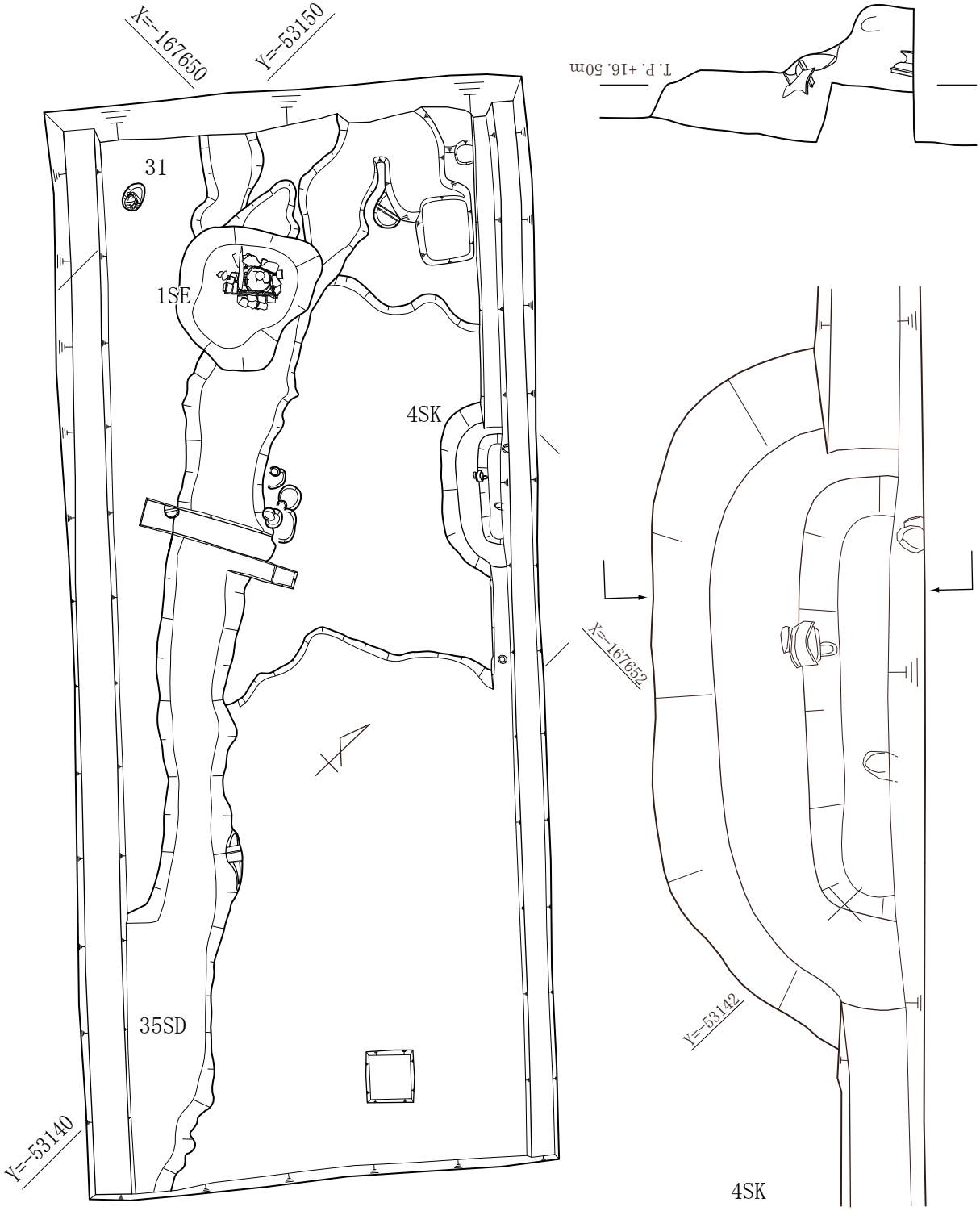
東側に１ｍ×0.8ｍの半円形のテラスを造る。井戸本体は北側に置かれ、テラスから長径1.0ｍ、短径0.8ｍの楕円形に、検出面からは1.5ｍの深さまで掘られている。底面は直径0.7ｍの円形で、中心に直径0.4ｍ、高さ0.15ｍの底板を外した曲物を３段重ね、周囲に0.1～0.3ｍまでの川原石を詰めて曲物を固定し、壁面崩落を防いでいる。また、曲物の上には長さ0.4～0.7ｍ、幅0.2～0.3ｍ、厚さ0.05ｍ前後の板材を４枚方形に組んで井戸側とし、その周囲には、川原石と平瓦片を積み重ね補強している。上面はテラスよりやや高い。

曲物内や井戸側内から瓦器埦や瓦片が出土している。

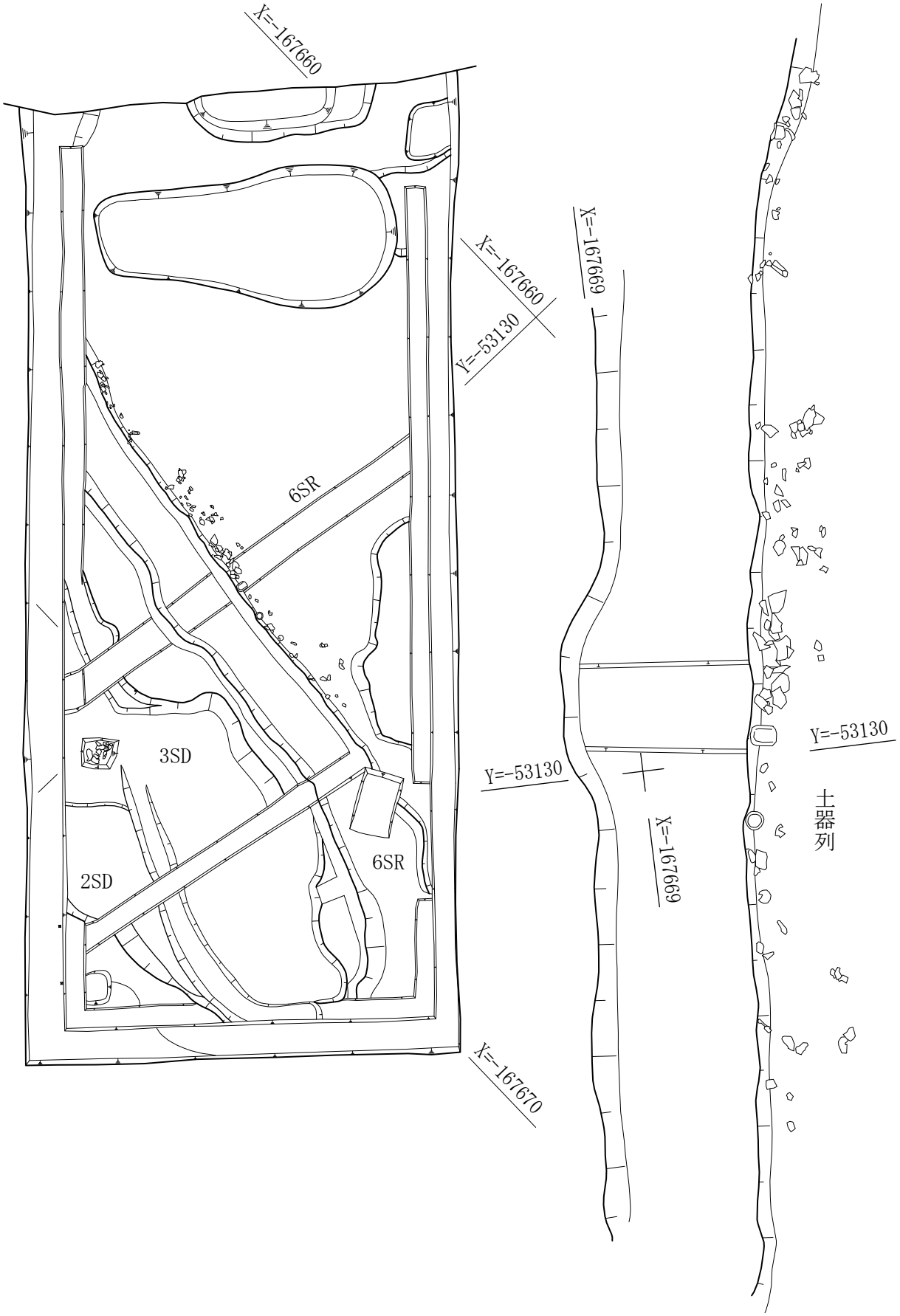
31ＳＰは北西隅近くにある0.4×0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る歪んだ楕円形ピットで、直径20㎝の石が埋められていた。礎盤と考えられるが、調査区内で対応するピットを確認できなかった。

この他、03－３－１区、03－３－２区では多数のピットを検出した。直径0.15ｍ～0.3ｍ、深さ0.05～0.2ｍを測った。ピットは散在しており、建物跡を復元することはできなかった。

03－３－３区で中世の遺構は確認できなかった。



第32図　03－３－２区平面図４ＳＫ平面・断面図



第33図　03－３－３区平面図、土器列遺物出土状況図（Ｓ=1/40）

古墳時代

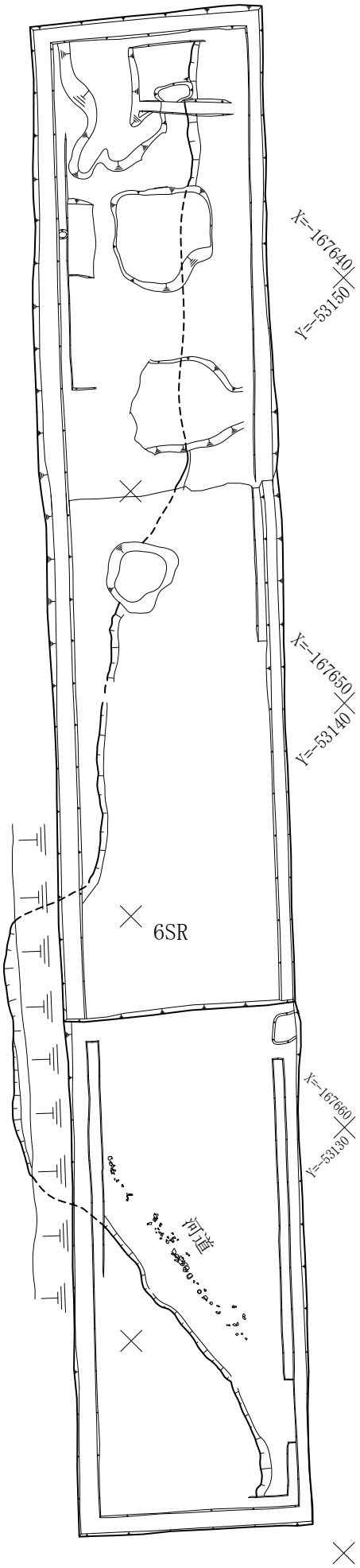
03－３－１～３区でも奈良時代や平安時代の遺構は確認できない。03－３－１区、03－３－２区で古墳時代の溝と土坑を検出した。03－３－３区ではこの時期の遺構は確認できなかったが、古墳時代前期から後期の土器が弥生時代の河道最上層から河道に沿って帯状に出土している。

４ＳＫは03－３－２区の中央部の北側で検出した土坑である。楕円形か隅丸方形になると思われる。現況で、長径1.2ｍ×0.3ｍ以上、深さ0.6ｍ以上を測る。掘形は段状で検出面から深皿状に0.3ｍ掘り下げて幅0.3～0.4ｍのテラスを作り、さらに緩傾斜で0.3ｍ以上掘り下げている。井戸の可能性が高い。テラスの下部分で須恵器甕片、壁面で高坏などが出土している。

35ＳＤは03－３－２区の南西隅から西北西に向かい、03－３－１区のＸ＝－167648ｍ付近でやや北に振り、攪乱で途切れるが、Ｘ＝－167642ｍ付近で再び北西流する。溝幅は03－３－２区で1.0～1.2ｍ、深さ0.9ｍを測る。埋土は上層が灰白色から黄灰色砂質土、中層が褐灰色砂混シルト、下層は褐灰色粘土で、各層に砂礫が混ざっている。

土器列　03－３－３区では河道６ＳＲの北西側肩口で、砂礫層に沿って古墳時代後期頃の須恵器や土師器が数カ所で纏まりをみせて帯状に出土した。断面観察で、河道跡は古墳時代後期頃には周囲より低く滞水状態で、肩口から約0.15ｍ下まで土砂が堆積した頃に土器を河道に沿って並べ置いたと推察された。この土器列の埋土は暗い灰褐色粘土混じりシルト質土であった。また、この土器列の南約４ｍのＸ＝－167761ｍ、Ｙ＝－53129.8ｍで古墳時代後期の甑形須恵器が約1/2個体分出土した。

６ＳＲは03－３－３区北東隅から西流しＸ＝－167665ｍ、Ｙ＝54137ｍで北西方向へ緩く曲がり調査区南側に沿って北西流する。03－３－１区西北端は攪乱され



第34図　03－３区６ＳＲ平面図

ていた。川幅は左岸肩が徐々に浅くなり、不明瞭であるが、1.0～2.8ｍ、深さは0.3～0.6ｍを測る。埋土は上層が灰色からオリーブ灰色シルト質土、中層は黄灰色砂礫、下層は灰色の粘質土混じりの砂層であった。

501ＳＲは03－３－１区で検出した。03－２－２・３区の６ＳＲに繋がる川で、35ＳＤに切られ上層は削平されていたが、南端はＸ＝－167644ｍ、Ｙ＝－53158ｍ付近で掘形が確認され、北に延びることから攪乱の北側で検出した川と繋がると判断し、501ＳＲとした。Ｙ西北端で幅1.5ｍ、深さ0.5ｍで、埋土は主に黄灰褐色砂質土であった。

縄文時代の遺構

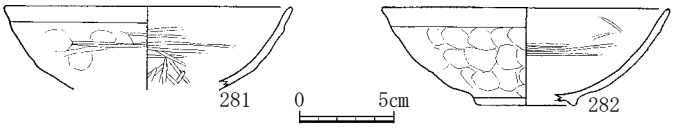
03－３－１～３区では縄文時代の遺構は乏しかったが、03－３－１区北端で、03－２－２区に繋がる河道の肩部を検出した。

502ＳＲ（第25図）はT.P.16.2ｍ前後の褐灰色内で検出した溝で、調査区北端を掠めて西流する河道である。深さは0.5ｍ以上である。埋土は灰白色の砂礫で、底面には鉄分が沈着している。隣接する03－２－２区で検出した河道の続きで、縄文時代後期であろう。

03－３区出土遺物

03－３－１区　２ＳＫ出土遺物（第35図）

281、282は瓦器埦で、281は胴部外面に粗いヘラミガキを施す。内面は見込みが不定方向、胴部は横方向の粗いヘラミガキ調整である。

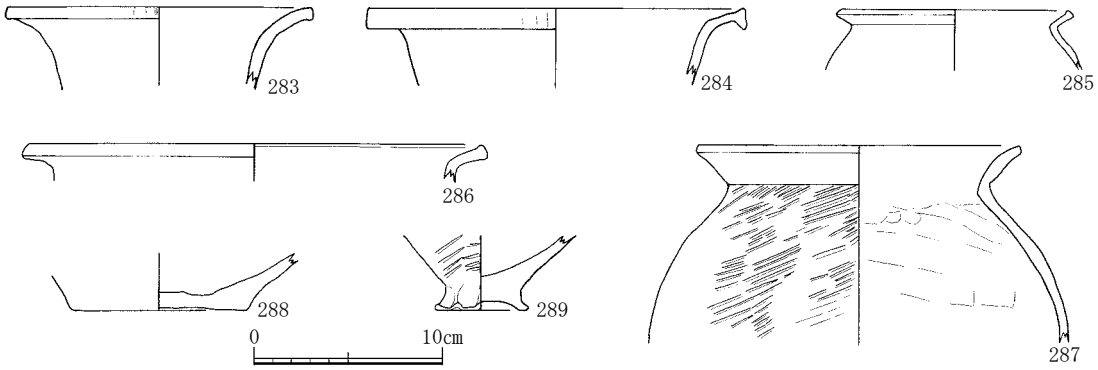


第35図　03－３－１区２ＳＫ出土遺物実測図

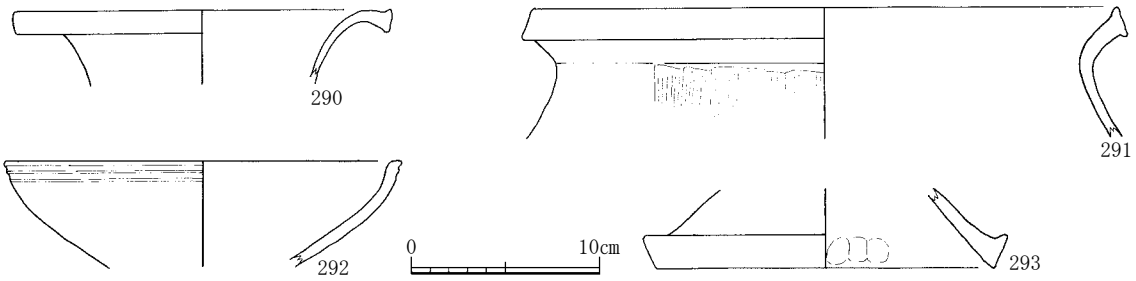
282は断面三角形の低い高台がつく。胴部外面は規則的なユビオサエで形を整え、口縁部はヨコナデである。内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。

03－３－１区　３、９ＳＫ、６ＳＲ遺物（第36図）

弥生土器をとりあげた。283，284は広口壺で、283は短く立ち上がる頸部から外反する口縁をつくり、口縁端部は外傾する面をつくる。284は開いて立ち上がる頸部に外反する口縁端部を上下に拡張させ、外傾する面をつくる。285～287は甕で、285は肩部から膨らみ、口縁部は「く」



第36図　03－３－１区３、９ＳＫ、６ＳＲ出土遺物実測図



第37図　03－３－１区10ＳＫ出土遺物実測図

字形に外反する。286は口縁部破片で、端部は摘み上げて面をつくる。287は球形に近い胴部に外反する口縁部をつくる。胴部はタタキで成形する。288は壺、289は甕の底部である。

03－３－１区　10ＳＫ出土遺物（第37図）

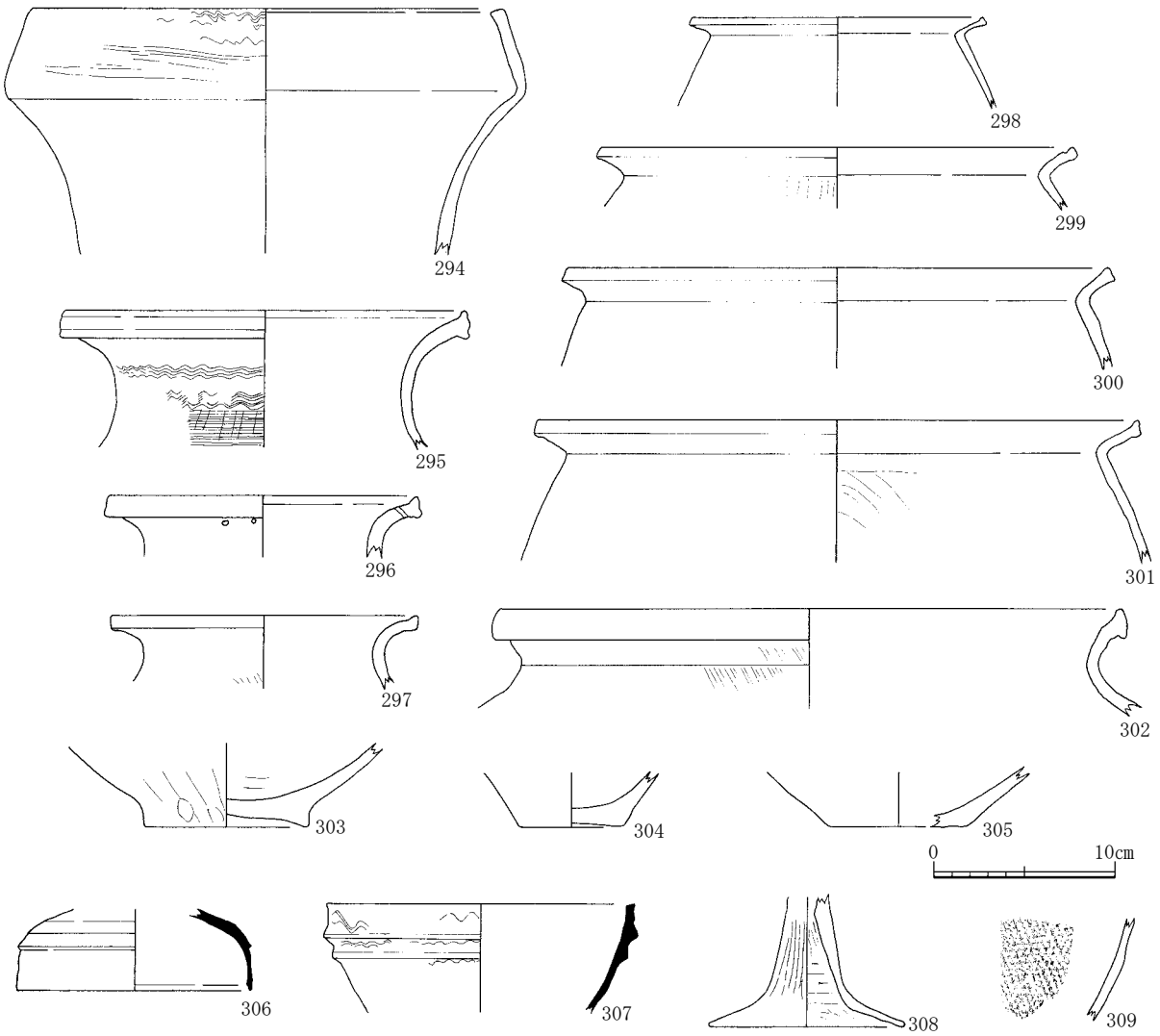
弥生土器が出土している。290は広口壺の口頸部で、開いて立ち上がる頸部から水平まで外反する口縁の端部を上下に拡張させ、垂直な面をつくる。291は甕の口頸部で、内傾する肩頸部から短く外反する口縁の端部を上に摘みあげ､外傾する面をつくる。肩部に縦方向のハケメを施す。292は開いて立ち上がる胴部に内弯する口縁部を持つ鉢の口縁部で、外面に２条の凹線を巡らせる。293は高坏の脚部で、端部を上に拡張させ内傾する面をつくる。裾部内面に指頭痕がある。

03－３－１区６ＳＲ出土遺物（第38図）

弥生土器と須恵器、土師器が出土している。294～297は壺である。294は受け口の壺で外反気味に開いて立ち上がる頸部から内傾する口縁の端部は水平な面をつくる。全体に摩耗が進んでいるが、口縁部外面に波状文が観察される。295は胴部から口頸部に滑らかに外反し、口縁端部は僅かに拡張し、凹線文を２条巡らせる。頸部に波状文を２条、肩部に簾状文を施文する。296は短く立ち上がる頸部から外反する口縁の端部を上下に拡張させるもの。297は窄まった肩部から外反する口縁部をつくる。298～302は甕である。298～300は「く」字形に外折する口縁の端部を上に僅かに拡張させ、外傾する面をつくるもの。302は滑らかに外反する口縁の端部を上下に拡張させるもの。303～305は底部で、303、305は壺か鉢、304は甕である。306、307は須恵器。306は蓋杯で、天井部下端の稜は鋭い。垂下する口縁の端部は内傾する凹面をなす。307は瓶か壺の口頸部で、２条の凸線と波状文を施す。308は土師器の高坏脚部で、裾部は外折気味に開き、端部を丸くおさめる。309は韓式土器の胴部破片である。

03－３－１区　６ＳＲ下層出土遺物（第39図）

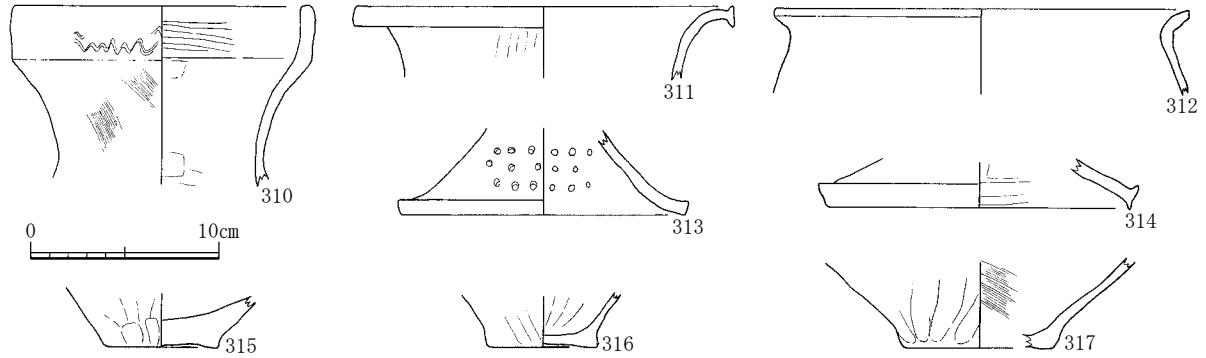
310は壺の受け口壺の口頸部。開きながら立ち上がる頸部から口縁部はわずかに内傾して立ち、口縁端部は面を作る。口縁部外面は波状文を施す。頸部外面にかすかにハケメが観察される。311は壺口頸部で、開いて立ち上がる頸部から大きく外反する口縁部を作り、口縁端部は上下に拡張する。312は甕。すぼまる頸部から口縁部は「く」字形に短く外反し、端部は垂直な面をつくる。313、314は「ハ」字形に開く高坏の脚部。313は裾部に円形の刺突文を施す。314は脚端部を上下に拡張する。内面はヘラケズリ調整である。315～317は底部。315.317は壺、316は甕。



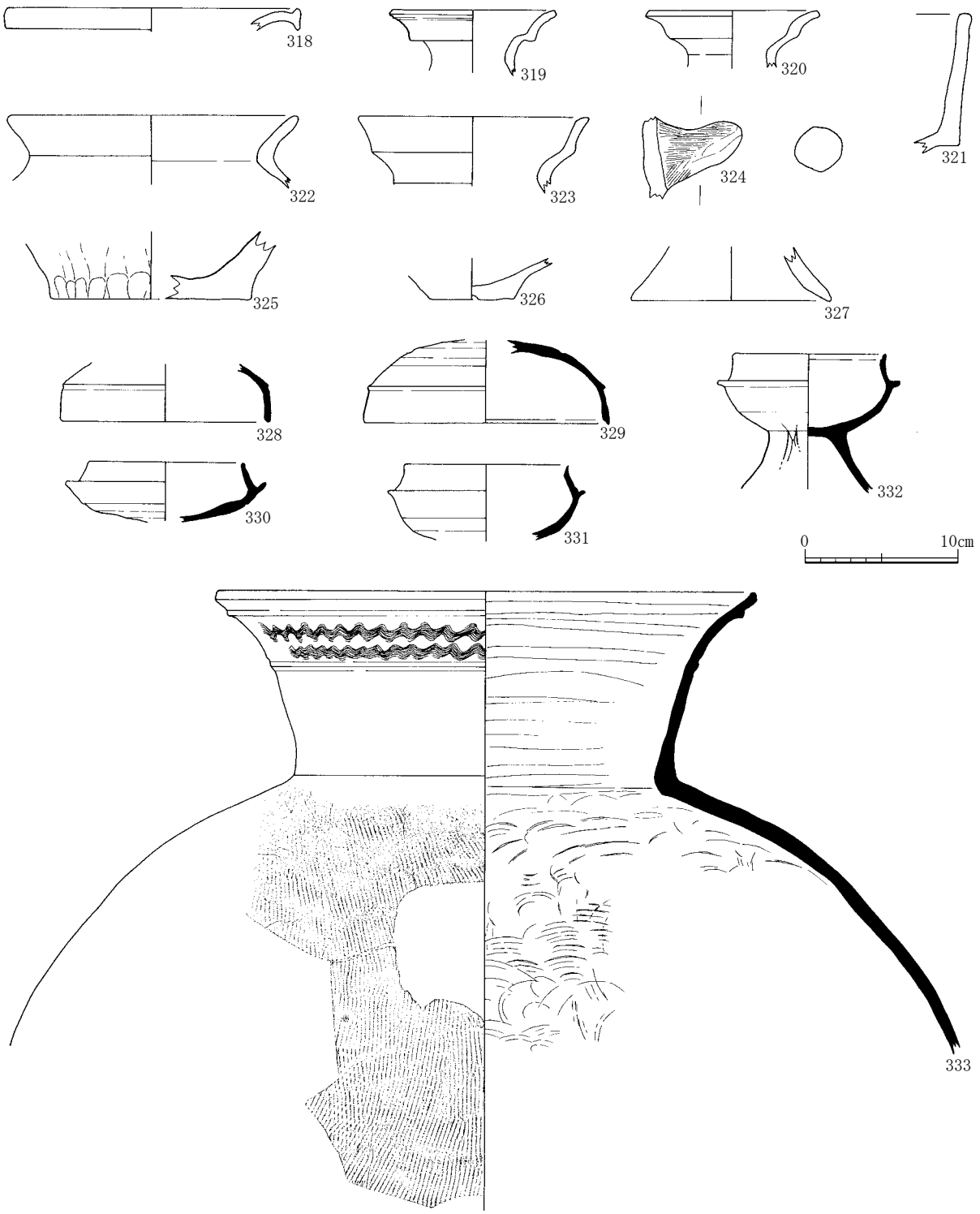
第38図　03－３－１区６ＳＲ出土遺物実測図

03－３区501ＳＲ出土遺物

501ＳＲは03－３－１区で検出した河道で、６ＳＲにつながる。弥生時代から古墳時代の土器が出土している。318は弥生中期の広口壺口縁部。外反する口縁の端部を上下に拡張し、面を作る。319、320、323は二重口縁の壺。319，320は短く立ち上がる頸部から２段に大きく外反する口縁部を作る。323は口縁部が開いて立ち上がる。321はほぼ垂直に立ち上がる口縁部をつくる壺。

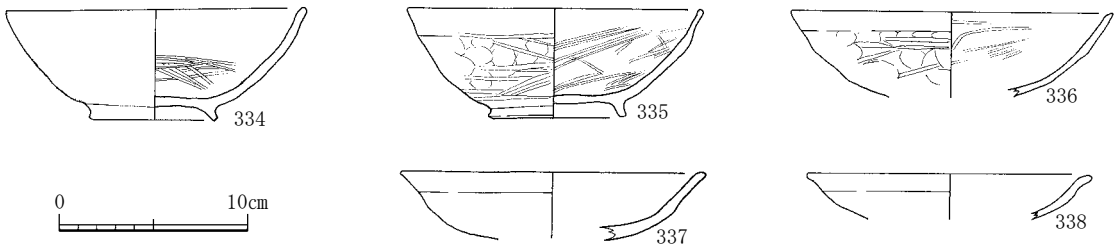


第39図　03－３－１区６ＳＲ下層出土遺物実測図



第40図　03－３－１区501ＳＲ出土遺物実測図

322は甕の口縁部。324は甑の把手で、ナデの後にハケメ調整する。 325、326は底部。325は端部をヘラで調整する。327は脚部破片。 328～333は須恵器。328、329は蓋杯で、稜は鋭く口縁端部は内傾する。天井部のヘラケズリは１/２程度である。330、331は杯身で、口縁部は内傾して立ち上がる。330は端部を丸くおさめ、331は内傾する面をつくる。332は有蓋の高坏で、口縁部は内傾して立ち上が端部は内傾する凹面をつくる。脚部上端に長方形の透かし孔をあける。333は甕で、開いて立ち上がる頸部から口縁部は滑らかに外反する。頸部に凸線を１条、波状文を２条



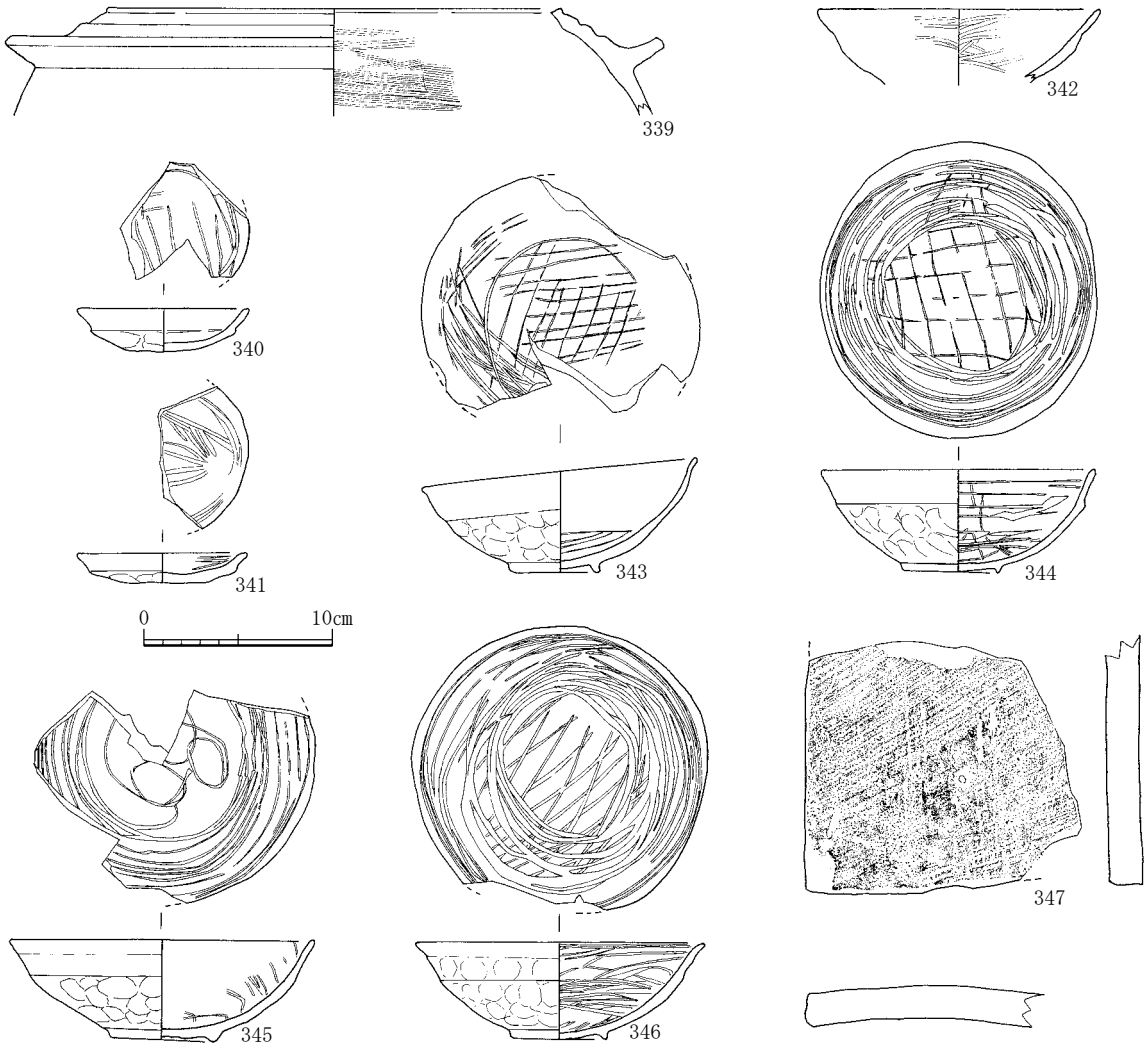
第41図　03－２－２区中世土坑出土遺物実測図

施文する。胴部は縦方向の平行線タタキで成形する。

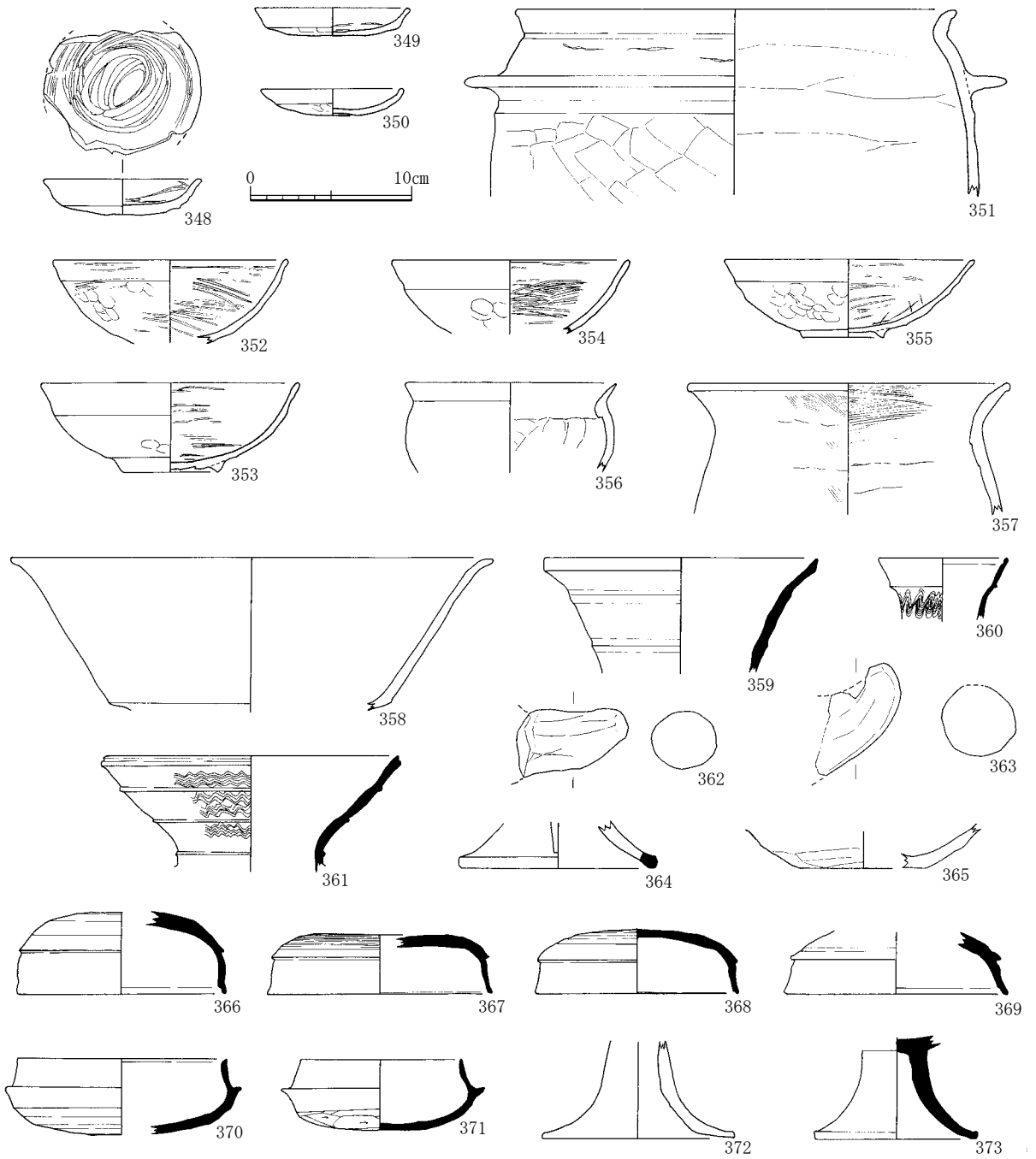
３－２－２区　中世土坑（第41図）

紙面の都合でここで掲載する。334～336は瓦器埦で、334，335はハの字形踏ん張る台形の高台がつく。334は胴部は摩耗しているが内面は密なヘラミガキが観察される。335は規則的な指オサエ成形の後、粗いヘラミガキを施す。内面は粗いヘラミガキである。336は高台を欠くが、内外面に粗いヘラミガキが観察できる。337，338は土師器の皿で、口縁端部を僅かに外反させる。

03－３－２区１ＳＥ出土遺物（第42図）



第42図　03－３－２区１ＳＥ出土遺物実測図



第43図　03－３－２区１ＳＥ出土遺物実測図２

339は瓦質の羽釜で、短く上方に開く鍔から内傾して立ち上がる口縁部をつける。口縁に３つの段をつくる。340、341は瓦器小皿で、内面は粗いヘラミガキである。340は丸底に近い。341は平底で､底部に指頭痕が残る。342～346は瓦器埦。342は胴部片で内外面に粗いヘラミガキを施す。343～346は胴部外面に成形時の規則的なユビオサエが残り、口縁部は342，343は２段、344，346は１段のヨコナデである。343、344は見込みに格子状、345は螺旋状、346はジグザグに折れる暗文を描く。体部内面は器壁に沿って横方向の粗いヘラミガキを施す。高台は小さな台形の343と、三角形の344～346がある。

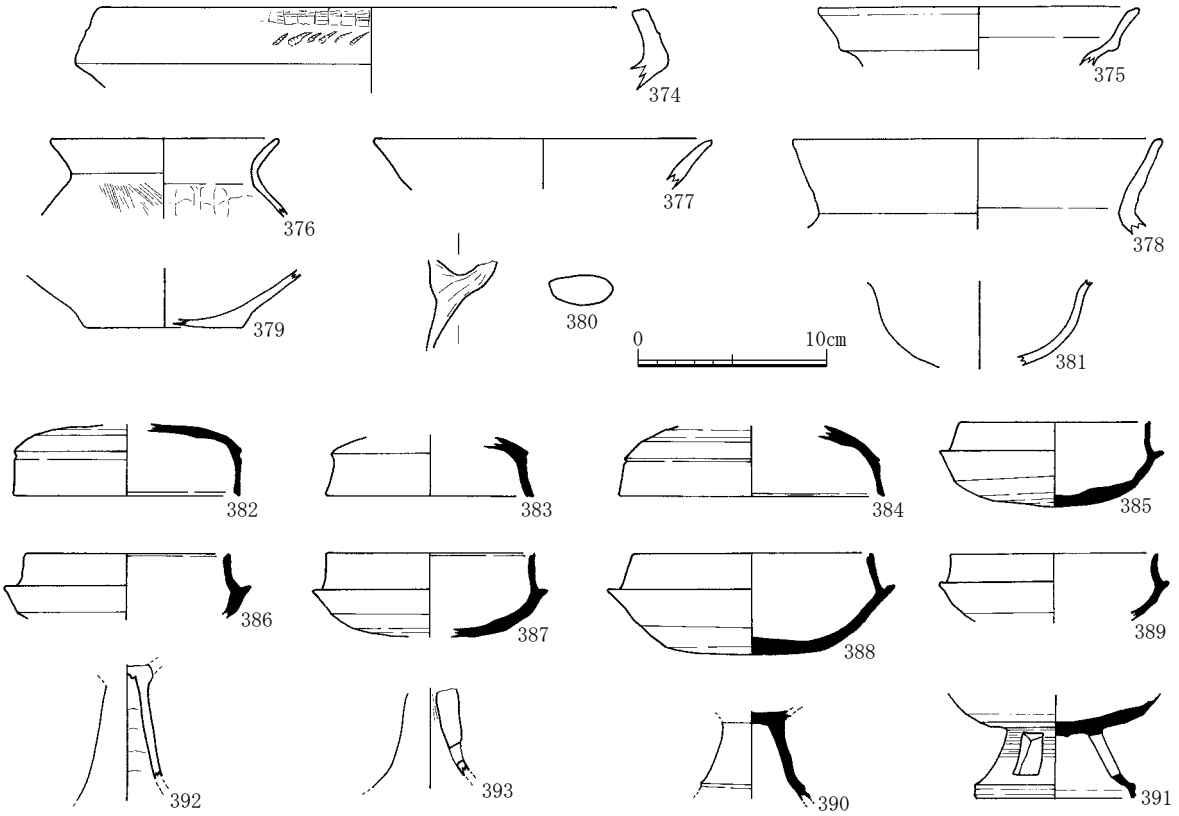
347は平瓦で、井戸側の板材を支えるため数十枚積み重ねられていた。

03－３－２区１ＳＥ（第43図）

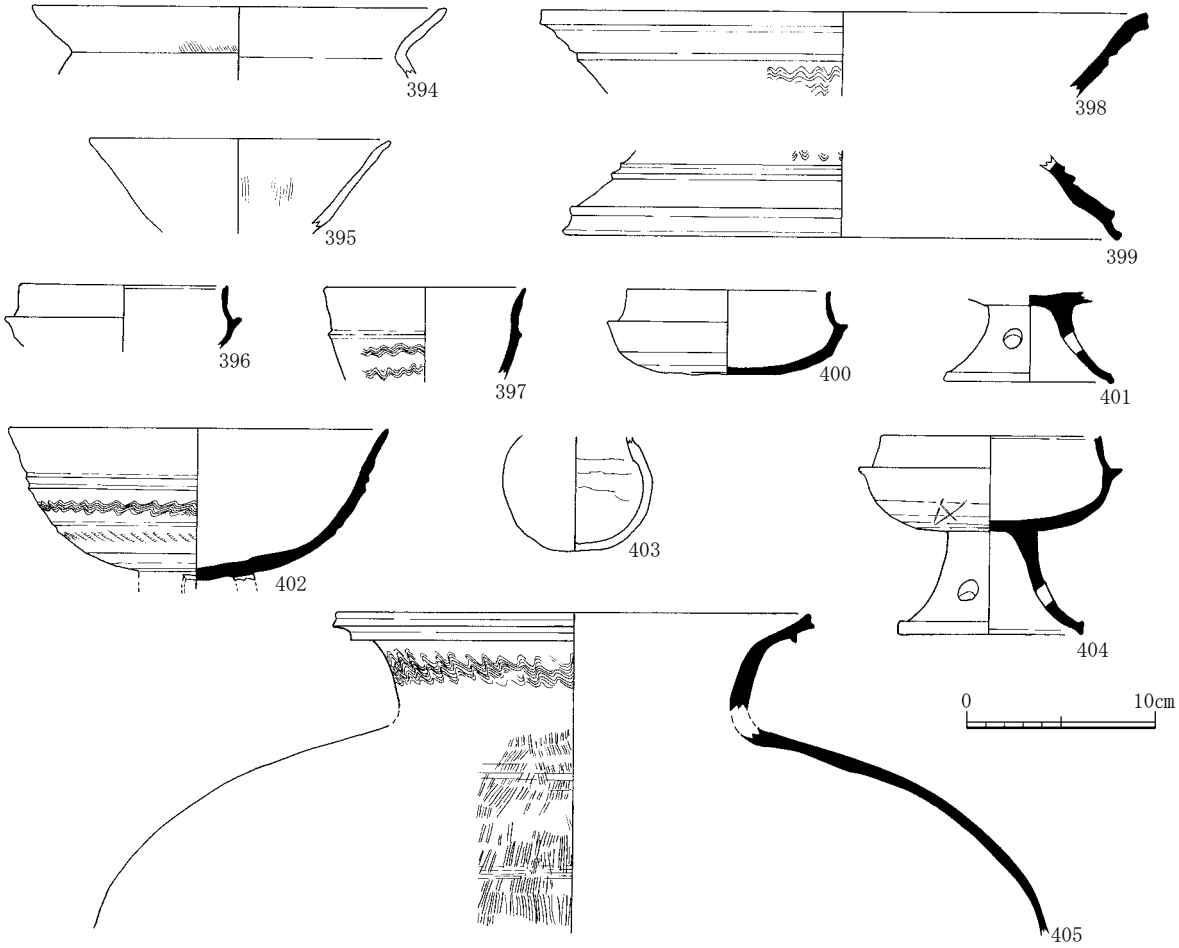
348、349は瓦器小皿で、348は内面に渦巻き状の暗文を施す。349は口縁部を強くヨコナデする。350は土師器小皿で、底部から滑らかに内弯する口縁をつくる。351は土師質の羽釜で、胴部は膨らみが小さく鍔は水平に開く。口縁は僅かに内弯して立ち上がり、端部を「く」字形に外反させて丸くおさめる。352～355は瓦器埦。352は内外面に口縁端部近くまで粗いヘラミガキを施す。353は全体に摩耗しているが、内面に粗いヘラミガキが観察される。354の内面は口縁端部近くまで密なヘラミガキを施す。355は体部外面に指頭痕が残り、内面は粗いヘラミガキで仕上げる。356は古墳時代の小型壺で、胴部内面はヘラケズリの後ユビオサエで成形し、口縁端部は短く外反して細く仕上げる。357は甕で、締まりの弱い頸部から滑らかに外反する口縁の端部は外傾する面をつくる。358は古墳時代の高坏で、開いて立ち上がる口縁の端部を僅かに外反させる。359～361は須恵器の口頸部で、359、360は壺か瓶。360は頸部に波状文を巡らせる。361は僅かに直立する頸部に、開立ち上がる口縁の端部は外傾する面をつくる。口頸部に３条の凸線をつけ、凸線間に波状文を巡らせる。提瓶の口頸部か。362、363は甑の把手である。364は須恵器脚部、365は鉢底部である。366～369は須恵器蓋杯で、天井部の２/３以上に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は内傾し、段をつくる366、平面の367、内傾する凹面をなす369がある。
と370, 371は杯身で、立ち上がりは内傾し端部を丸くおさめる。372は土師器の脚部、373は須恵器高坏の脚部である。古墳時代以前のものは、６ＳＲの混入であろう。

03－３－２区　35ＳＤ出土遺物（第44図）

374は内傾して立ち上がる受け口状の口縁部で、外面に櫛描の簾状文と列点文を施文する。



第44図　03－３－２区35ＳＤ出土遺物実測図

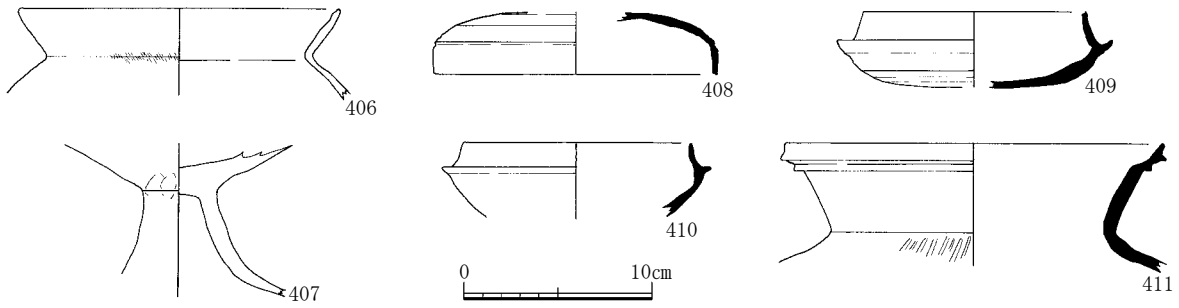


第45図　03－３－２区、４ＳＫ他出土遺物実測図

375は段をつくって開く二重口縁の壺である。376～378は外反して開く甕の口縁部。379は壺の底部。380は鉢か曽瓦の把手か。381は外弯して開く鉢の口縁部である。382～384は須恵器蓋杯で、382は天井部から口縁に滑らかに移行する。383はかすかな稜が残り、口縁部は外反気味に開く。384は天井部下端に沈線を付し、稜をつくる。385～389は杯身。385、387、388は口縁端部は内傾する凹面をつくる。385～387、389は底部の回転ヘラケズリは２/３に施している。392、393は土師器高坏の脚部である。390、391は須恵器高坏の脚部で、391は脚部にカキメを残し、方形の透かしをあける。

03－３－２区、４ＳＫ他出土遺物（第45図）

394、395、403は土師器。394は甕の口頸部で「く」の字形に外反する口縁端部を丸くおさめる。395は高坏の口縁部で端部を僅かに外反させる。403は小型壺の胴部である。396～402、404、405は須恵器。396、400は杯身で、396は受部に沈線がみられる。397はジョッキ形の埦で、胴部に波状文を施文する。胴部と口縁部の境に凸帯を１条つくる。398は器台の口縁部で、沈線の下に波状文を施す。399は脚部で、端部を屈曲して垂下させる。401、404は高坏で、外弯気味に開く脚部に円形の透かし孔を３カ所穿つ。405は甕で、短く開いて立ち上がる頸部から外反する口縁部に１条の凸線をつくり、口縁端部は外傾する面をなす。胴部はタタキで、内面は擦消しナデ。



第46図　03－３－３区２ＳＤ出土遺物実測図

03－３－３区　２ＳＤ出土遺物（第46図）

406は土師器の甕口頸部。口縁端部は僅かに内面肥厚する。頸部にハケメが残る。407は高坏で、脚部上端に接合時の指頭痕が残る。408～411は須恵器で、408は杯蓋。口縁端部は内傾する段をつくる。天井部下端の稜はにぶい。409、410は杯身で、409は口縁端部に段をつくる。底部は膨らみが小さく、回転ヘラケズリは底部の２/３に及ぶ。410は口縁部が内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。411は甕の口頸部で、なめらかに外反する口縁の端部を屈曲させて摘み上げ、強くヨコナデし凹ませている。

03－３－３区　３ＳＤ出土遺物（第47図）

412～414は土師器の壺。412､413は小型の壺で､412は口縁端部を僅かに外弯させ丸くおさめる。胴部外面はハケメ調整である。器高8.7㎝、口径6.5㎝。413は胴部で、外面は胴部板ナデ、肩部はヨコナデである。414は開いて立ち上がる口縁部で、内面は横方向のヘラミガキである。

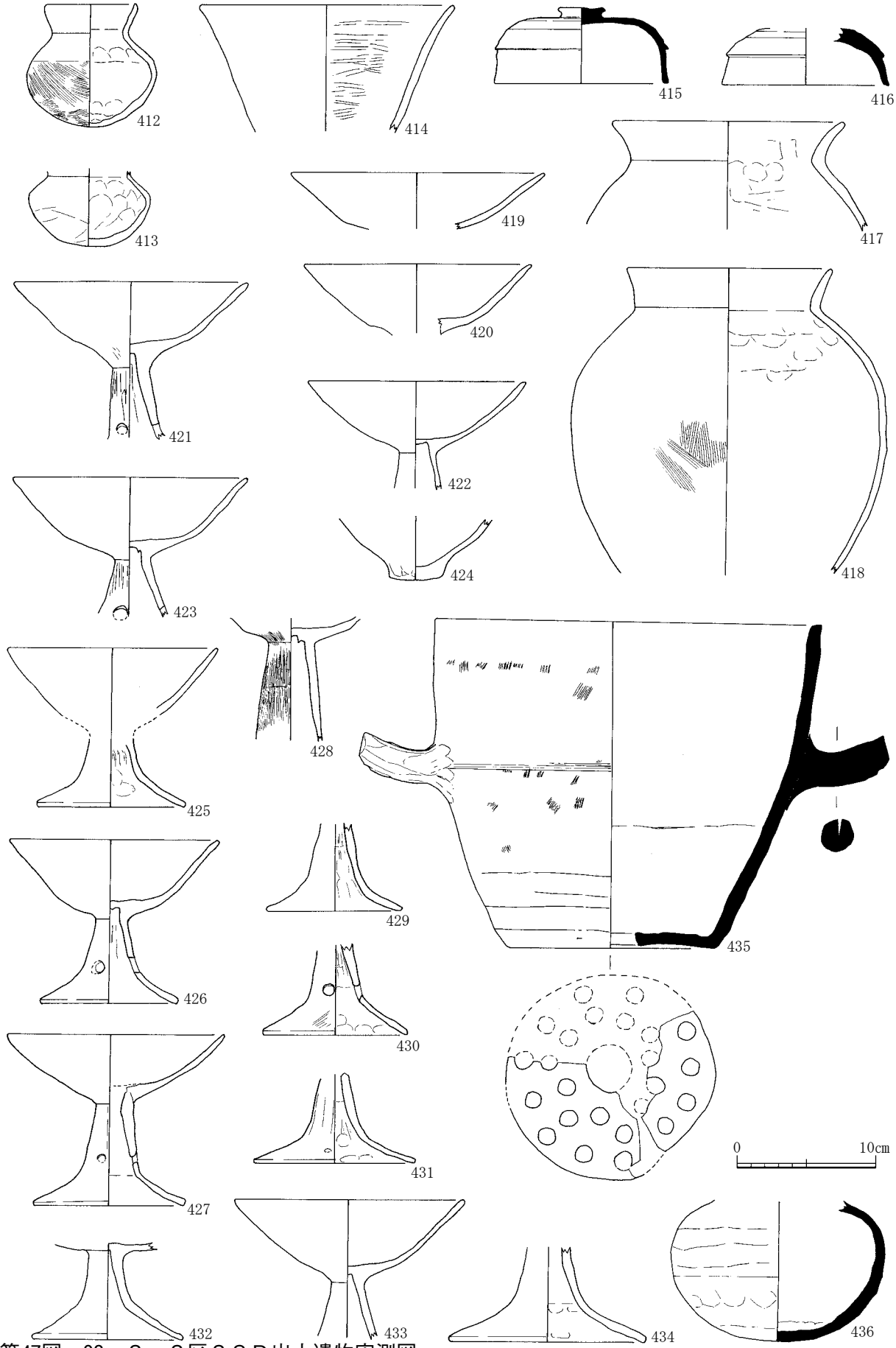
415、416は須恵器杯蓋で、天井部下端の稜は鋭く、416は口縁端部に内傾する凹面をつくる。

417、418は土師器の甕で、開いて立ち上がる口縁端部を丸くおさめる。417は胴部内面をヘラケズリ、418は胴部内面をナデで仕上げている。419～423、4254～434は高坏。419～423、425～427、433は小さな杯部から開いて立ち上がる口縁の端部を丸くおさめる。425～427はほぼ完形である。脚部は小さな円錐状の脚部から屈曲気味に開く裾部をつくる。428は杯から筒状に開く脚部をつくるもの。脚外面は細かいハケメで仕上げている。429～432、434は脚部で、429、431、432、434は、外反して開く裾部をつくる。裾端部は内傾するあまい面をつくるものが多い。

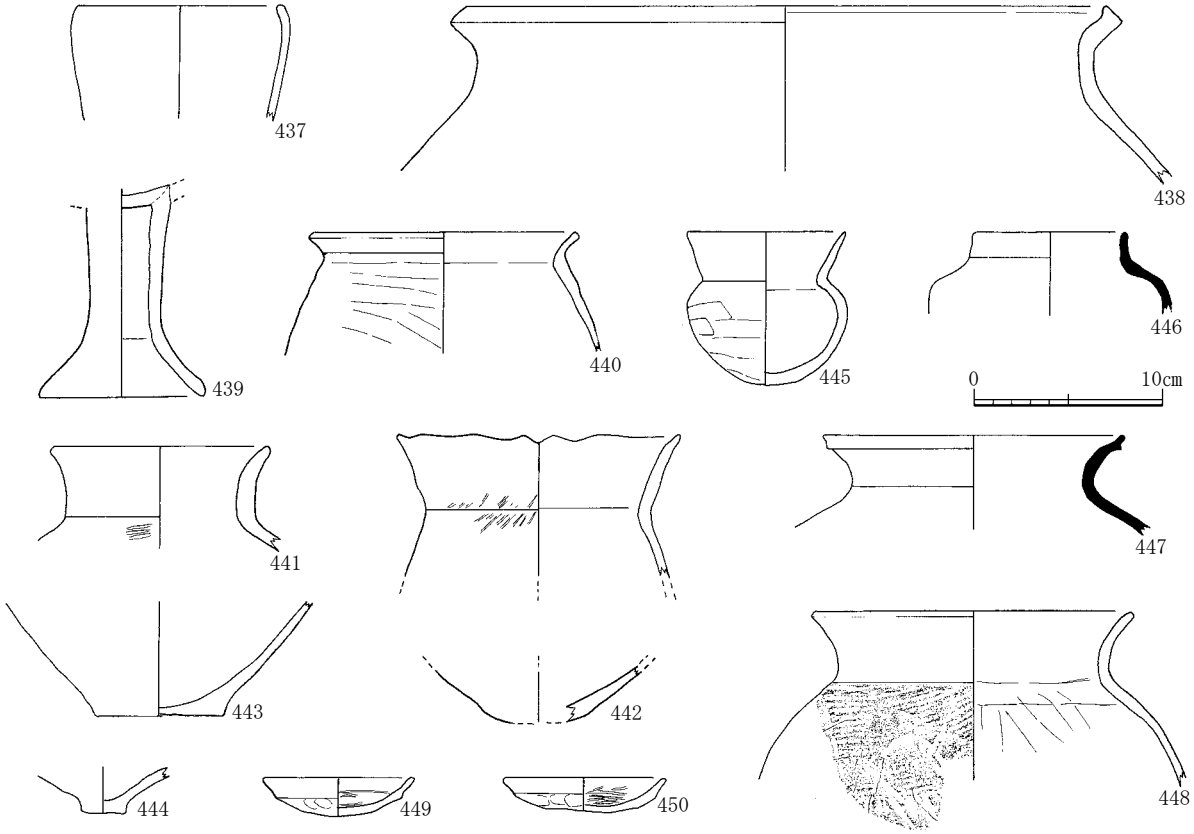
435は須恵器の甑で、平らな底部に内弯気味に開いて立ち上がる胴部の中程から口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は水平な面をつくる。胴部と口縁部の境に２条の沈線を巡らせ、その上に把手を貼り付ける。体部はタタキの後ナデで調整する。底面は中央に3.3㎝､その周囲に1.4～1.8㎝径の透し孔をあける。口径27.8㎝、器高23.4㎝。436は須恵器の壺で、外面はナデで調整する。腹径15.4㎝

03－３－１区　包含層出土遺物（第48図）

437～440は弥生土器。437は長頸壺の口縁部で､端部を内弯させ丸くおさめる。438,440は甕で、438は内傾して立ち上がる頸部から外反する口縁端部を拡張させ、外傾する面をつくる。440は肩



第47図　03－３－３区３ＳＤ出土遺物実測図



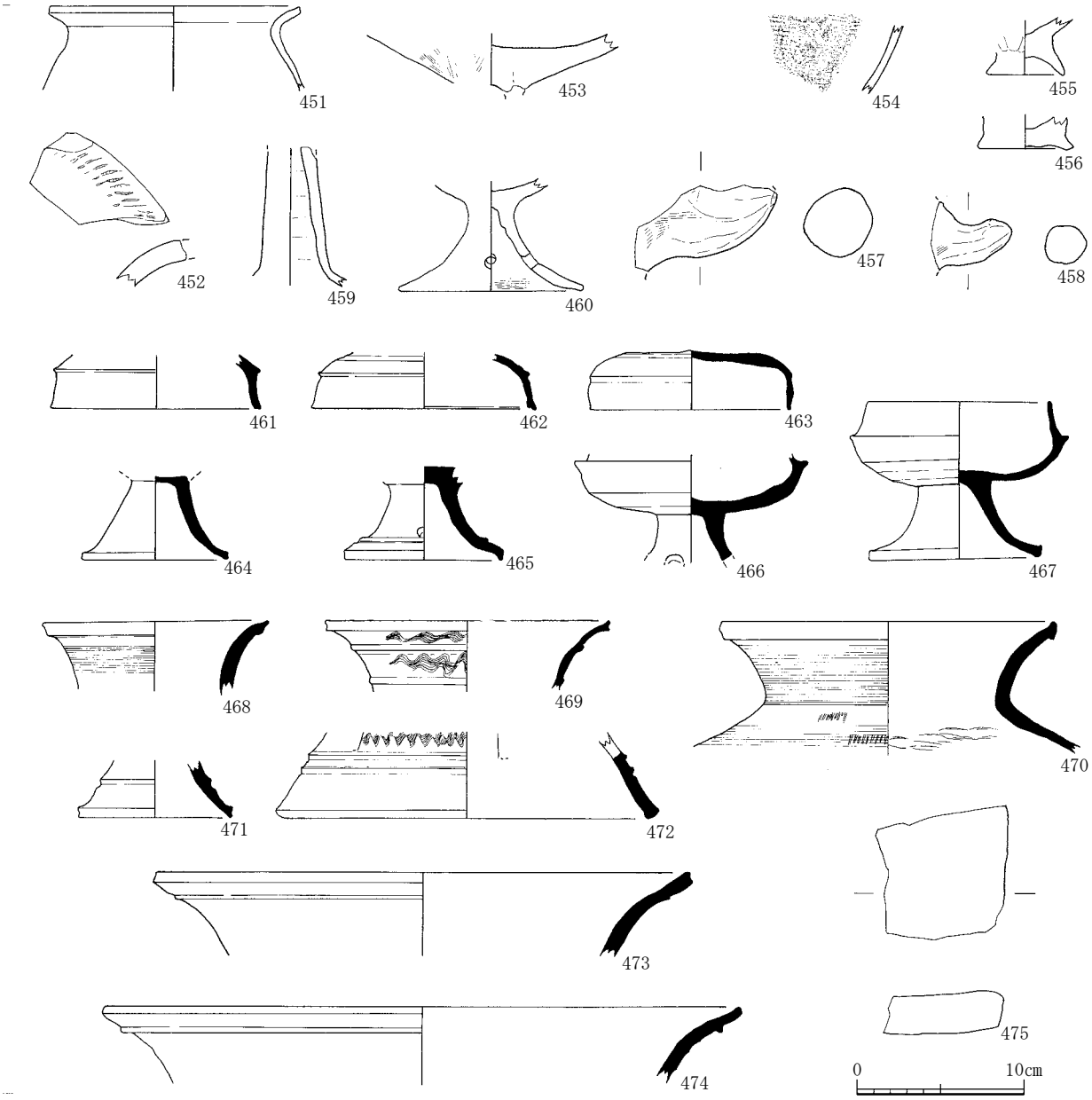
第48図　03－３－１区包含層出土遺物実測図

部の膨らみが小さい。439は高坏の脚部で坏部は円盤充填、裾部は「ハ」字形に短く開く。441は短頸壺で口縁部が緩く外反する。442は甕で、頸部の締まりは弱く開いて立ち上がる口縁の端部は細く終り波をうつ。底部は平底で小さい。443, 444は弥生土器の底部である。445は小型丸底壺。446は須恵器壺で、肩部が張り口縁部は内傾気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。447は須恵器の甕で口縁端部は細く端部外面は凹面つくる。448は韓式土器の甕で、口頸部は滑らかに外反し口縁端部は外傾する面をつくる。体部は格子タタキである。449、450は瓦器小皿である。

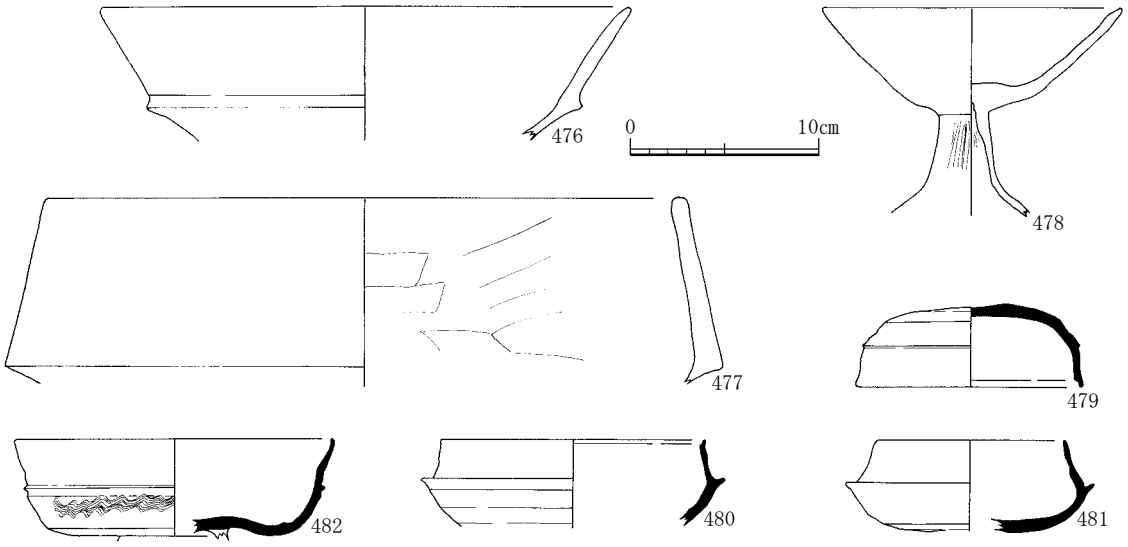
03－３－２区　包含層出土遺物（第49図）

451は甕の口頸部。452は壺の口縁端部で、内面に列点文を施文する。453は高坏の坏下端部。454は韓式土器の胴部破片である。455、456は底部で、455は手捏ねで端部をひねり出す。457、458は甑の把手であろう。459. 460は高坏の脚部で、459は細長い脚部に屈折して開く裾部をつくる。460は短く外反して開き、端部を丸くおさめる。裾部に２孔を穿つ。

461～474は須恵器。461～463は蓋杯で、回転ヘラケズリを天井部の２/３以上に施している。天井部下端の稜はやや鋭い。464～467は高坏。464、465は外反して開く脚部で、465は円形の透かしを３カ所穿つ。466、467は有蓋の高坏で、466は円形の透かしを３カ所あける。467は口縁部が内傾して高く立ち上がる。468, 469は口頸部で、468は頸部にカキメが残る。469は凸帯の間を波状文で飾る。470、473、474は甕の口縁部で、470は外反して開く口縁の端部を上下に拡張する。口縁部と胴部はカキメを施し、胴部内面に青海波が残る。473、474は口縁部をわずかに屈曲させ凸線を巡らせる。471、472は脚部で、471は高坏、472は器台で凸線と波状文を巡らせる。



第49図　03－３－２区包含層出土遺物実測図



第50図　03－３－３区包含層出土遺物実測図

475は平瓦片で、凹面は布目、凸面は縄目のタタキで成形する。

03－３－３区包含層出土遺物（第50図）

476は開いて立ち上がる高坏の口縁部。477は二重口縁の壺口縁部である。478は高坏で、小さな杯部から開いて立ち上がる口縁部をつくり、口縁端部を丸く収める。479～481は須恵器。479は杯蓋で口縁と天井部境目の稜は鈍い。480、481は杯身で、480は口縁端部が内傾する段をつくる。481の口縁部は反り気味に内傾して立ち上がり、端部を細く仕上げる。杯部は膨らみが小さく平らである。482は無蓋の高坏で、杯部外面に波状文を描き、中央に凸線を巡らせ口縁との境をなす。外傾気味に立ち上がる口縁部は端部を丸くおさめる。

２．04区

04区は、ＪＲ阪和線の北西に隣接する04－１区、04－２区と約300ｍ離れた国道26号線穴田交差点の北東側拡幅予定地（04－３区）の３箇所で調査を実施した。04－１区はアンダーパス化工事用地を確保するための踏切迂回路用地、04－２区は道路拡幅用地である。04－２区は周知の遺跡外であったが、試掘調査で遺構が確認されたことから都市整備部と協議のうえ、遺跡範囲を拡大し、調査対象とした。04－３区は和泉市と泉大津市の市境が水田ごとに複雑に出入りする線上にある。道路に接して住居が並んでいるため、周辺住民の通路確保のため３地区分割して調査を実施した。地区名は枝番号を付し西北から04－３－１区、04－３－２区、04－３－３区とした。

04－１区

４－１区はＪＲ阪和線西側の府中駅寄りの調査区で、調査面積は約155㎡である。

現地表面はT.P.18.6ｍ前後、旧耕土下面はT.P.17.8ｍ、床土は約0.05ｍで、灰色シルト質土である。この下は土器小片を含む黄灰色～褐灰色のシルト質土が0.1～0.15ｍの厚さで堆積する。

この調査区では２面で遺構を検出した。第１面は褐灰色土の下に堆積する灰色土層中T.P.17.45ｍ前後で、古墳時代と中世の遺構を同一面で確認した。第２面はT.P.16.9ｍ付近で、縄文時代の遺構を検出した。

第１面では調査区北東側で多数の柱穴を検出し、掘立柱建物跡や柵列などを復元した。

建物跡

１ＳＢは調査区中央で復元した、梁間２間×桁行３間以上、３ｍ×5.8ｍ以上の掘立柱建物跡で、主軸はＮ－56°－Ｗを示す。北隅の柱跡を確認できなかったが柱間寸法は、北東列が２ｍ、1.2ｍ、2.2ｍ、北西列が2.2ｍ、1.3ｍ、2.5ｍを測る。柱穴はいびつでな楕円形や方形で、直径0.25ｍ～0.50ｍの範囲内にある。

２ＳＢ　建物１と同じ場所で検出した。１間×３間以上、２ｍ×4.5ｍ以上の規模で、主軸はＮ－51°－Ｗを示す。柱間寸法は北東側が１ｍ、1.7ｍ、1.7ｍを測る。

２棟の建物はこの地域の条里（Ｎ－43°－Ｗ）とは10°近く西に振っており、柱穴の形状から古墳時代後期 頃の建物と考えられる。

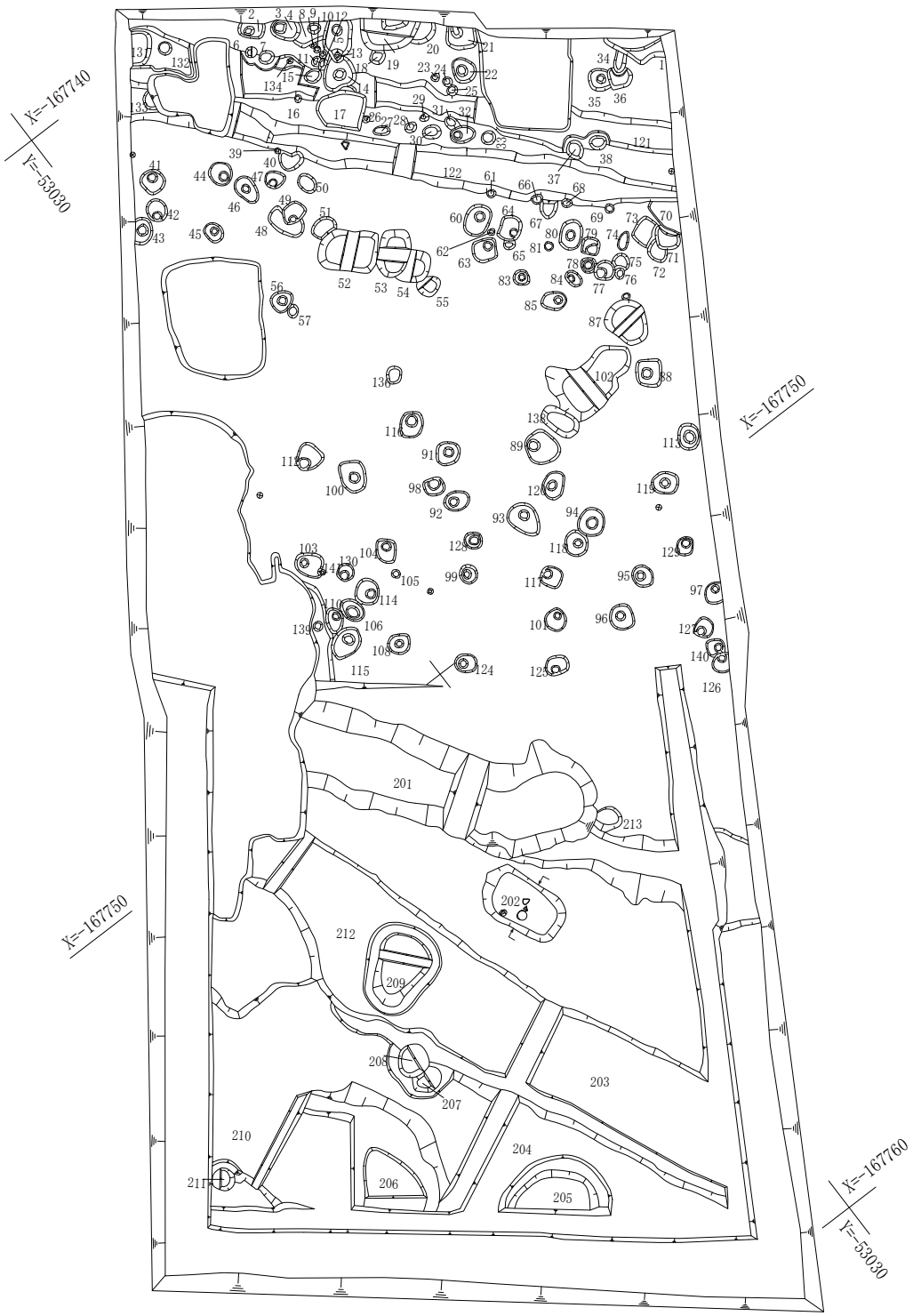
柵列

１ＳＡはＹ＝－53030ｍの東で復元した。６箇所（41、45、56、116、93、96ＳＰ）の柱穴からなる柵列で、長さは約９ｍ、軸はＮ－９°－Ｗである。

２ＳＡは調査区中央で復元した、調査区に直行する柵列である。130、99、117、95ＳＰを利用するもので、柱間隔は1.8ｍ、1.2ｍ、1.3ｍの4.3ｍで軸はＮ－52°－Ｗである。

建物１，２と重複した位置にあるが、前後関係は不明である。

３ＳＡは２ＳＡの東0.7ｍで復元した。104、128、118、129ＳＰを利用するもので、柱間寸法

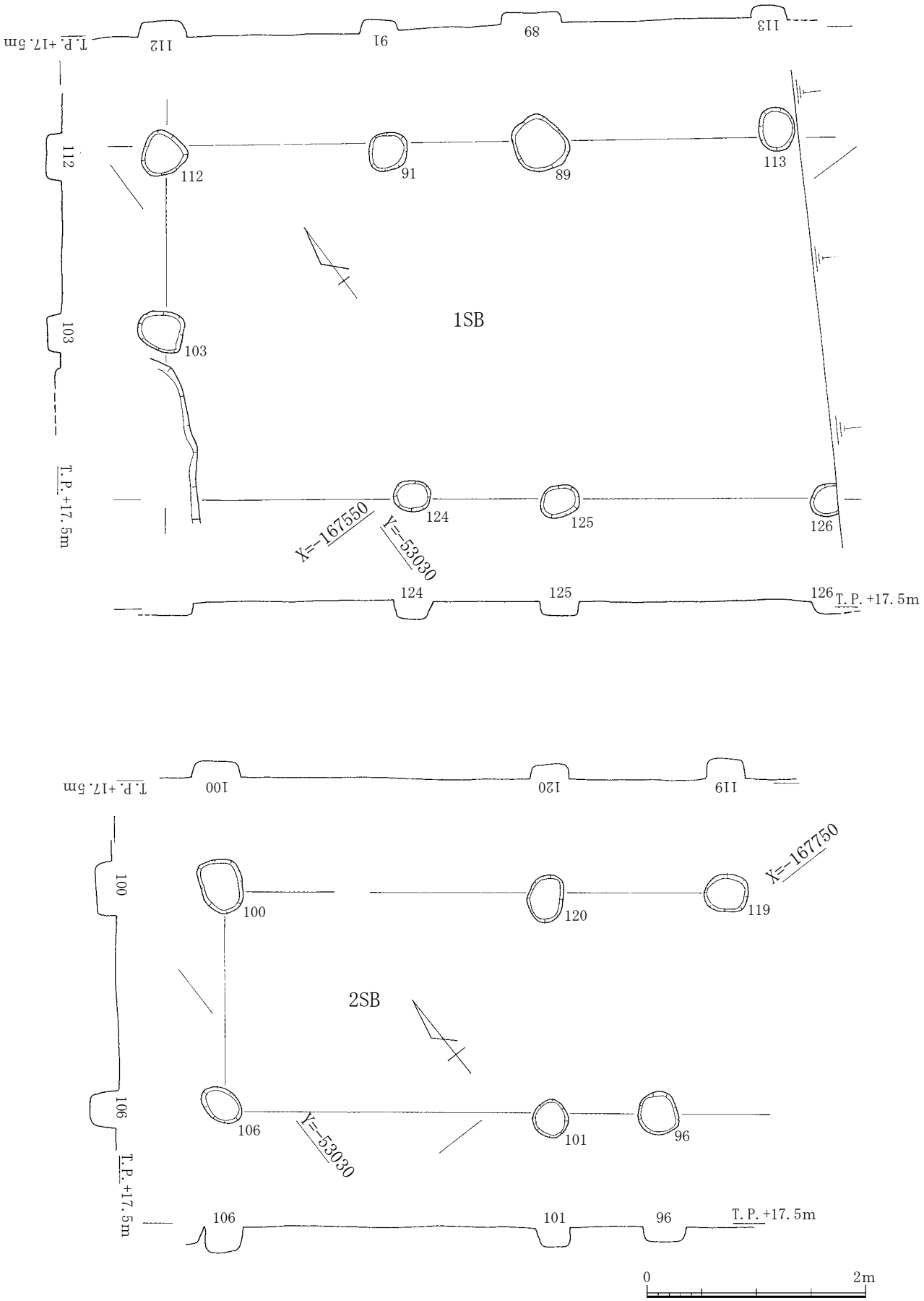


第51図　04－１区第１遺構面平面図（Ｓ＝1/100）

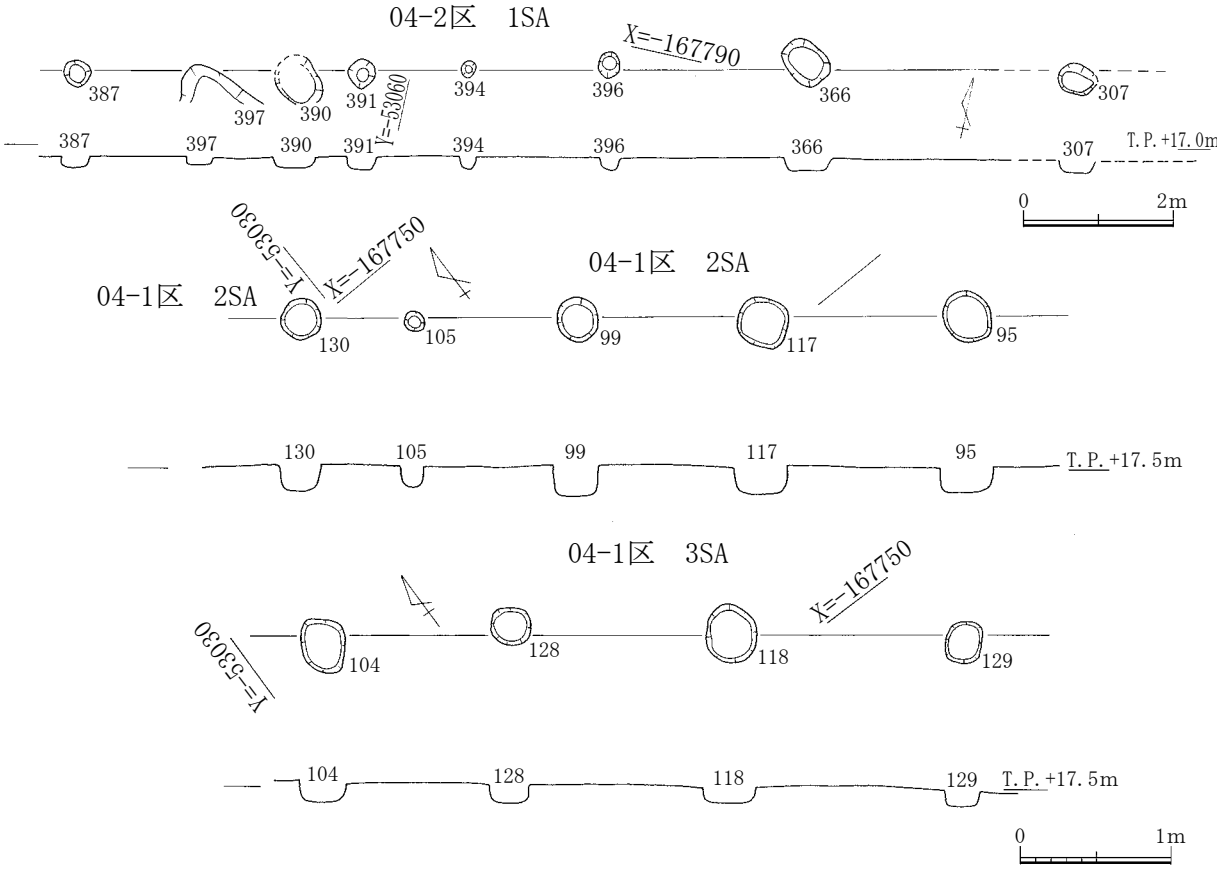
は2.5ｍ、３ｍ、３ｍで２ＳＡとほぼ平行し、主軸はＮ－51°－Ｗである。柵列２、３は主軸方向から当地域に条里地割が施行された以降の柵であるが掘立柱建物との前後関係は不明である。

溝・土坑

121ＳＤは調査区南東部のピット群内で検出した北東から南西に走る溝で、ピット群より古い。幅0.35～0.4ｍ、深さは0.05ｍ前後を測る。埋土は黄灰色砂質土であった。　122ＳＤは121ＳＤ



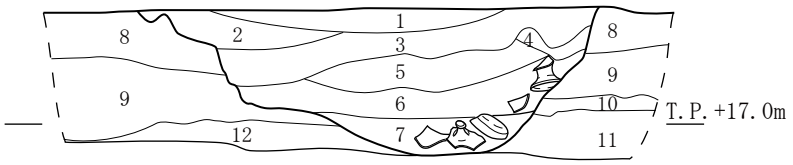
第52図　04－１区１ＳＢ、２ＳＢ平面・断面図（Ｓ＝1/50）



第53図　04－２区１ＳＡ（上）、04－１区２ＳＡ（中）、３ＳＡ（下）平面・断面図

の西北側にある、121ＳＤと平行して流れる溝で、幅0.5～0.7ｍ、深さ0.05ｍを測る。浅い溝であるが、07－11区でも２条の平行する浅い溝が検出されている。屋敷地を区画する溝あろう。

201ＳＤは調査区中央から南寄りにある北西に走る溝で、幅1.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。北側は攪乱により破壊されており検出長は約４ｍであった。202ＳＫは201ＳＤの南側にある歪な楕円形土坑で、長径1.35ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黄灰色土であった。中世の土坑である。203ＳＤは西肩を204ＳＤに切られるが、南流する浅い流路で、幅1.1ｍ以上、深さ0.2ｍを測る。底部は平坦で、洪水で浅く削平された水路であろう。埋土は主に黄灰色砂質土であった。



1 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫
2 10YR5/2灰黄褐色砂礫
3 10YR5/2灰黄褐色砂質土
4 5Y7/2灰白色シルト
5 5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト
6 2.5Y5/2暗灰黄色砂
7 5Y5/2灰オリーブ色砂礫
8 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
9 7.5Y8/2灰白色粘質シルト
10 2.5Y6/1黄灰色シルト質土
11 2.5Y7/1灰白色シルト
12 2.5Y7/1灰白色シルト

第54図　04－１区201ＳＤ断面図

209ＳＫは203ＳＤ内の北部で検出した歪な楕円形土坑で、長径1.15ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。204ＳＤは203ＳＤより新しい流路で、南東肩は調査区あるが、現況で幅1.15ｍ、深さは0.15ｍを測る。埋土は灰黄褐色砂質土であった。

205ＳＫは南東隅近くにある土坑で、西側は調査区外に広がるが、現況は半円形で、直径1.35ｍを測る。206ＳＫは205ＳＫの西２ｍにある浅い土坑で、南側は調査区外に延びるが、現状は三角形状で、0.9ｍ×0.9ｍ、深さ0.05ｍを測る。

52ＳＫは楕円形の土坑で、長径0.9ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は褐灰色土であった。53ＳＫは52ＳＫの南にある長径0.7ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.25ｍを測る小土坑である。埋土は褐灰色土であった。87ＳＫはＸ＝－167747.5ｍ、Ｙ＝－53025.5ｍにある歪な五角形状の土坑で、長径0.7ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る。102ＳＫは87ＳＫの西にある不定型な土坑で、長径約1.4ｍ、短径１ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐灰色土であった。

第55図　04－１区202ＳＫ平面・断面図

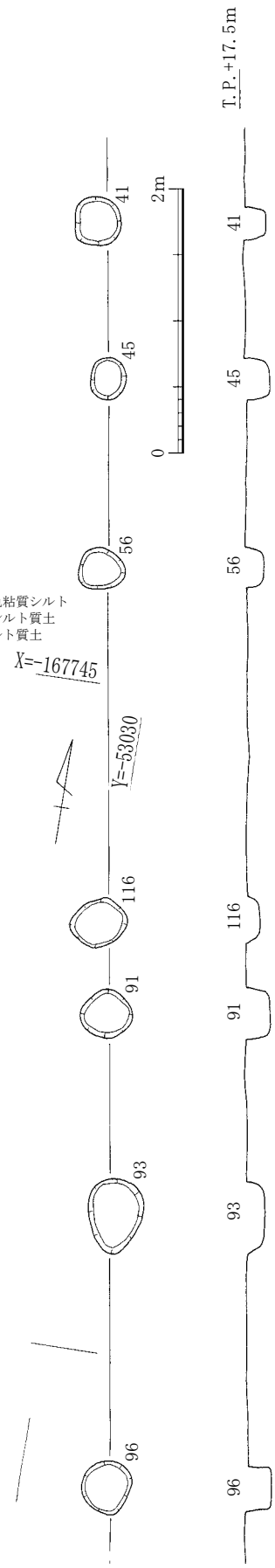
04－１区では東部で多数の柱穴を検出した。柵列１ＳＡの主軸は北に近いが、その他の掘立柱建物、柵列は、条里地割の約43°振ったに近い主軸をもつ。殆どは中世に属すると考えている。

第２面の遺構

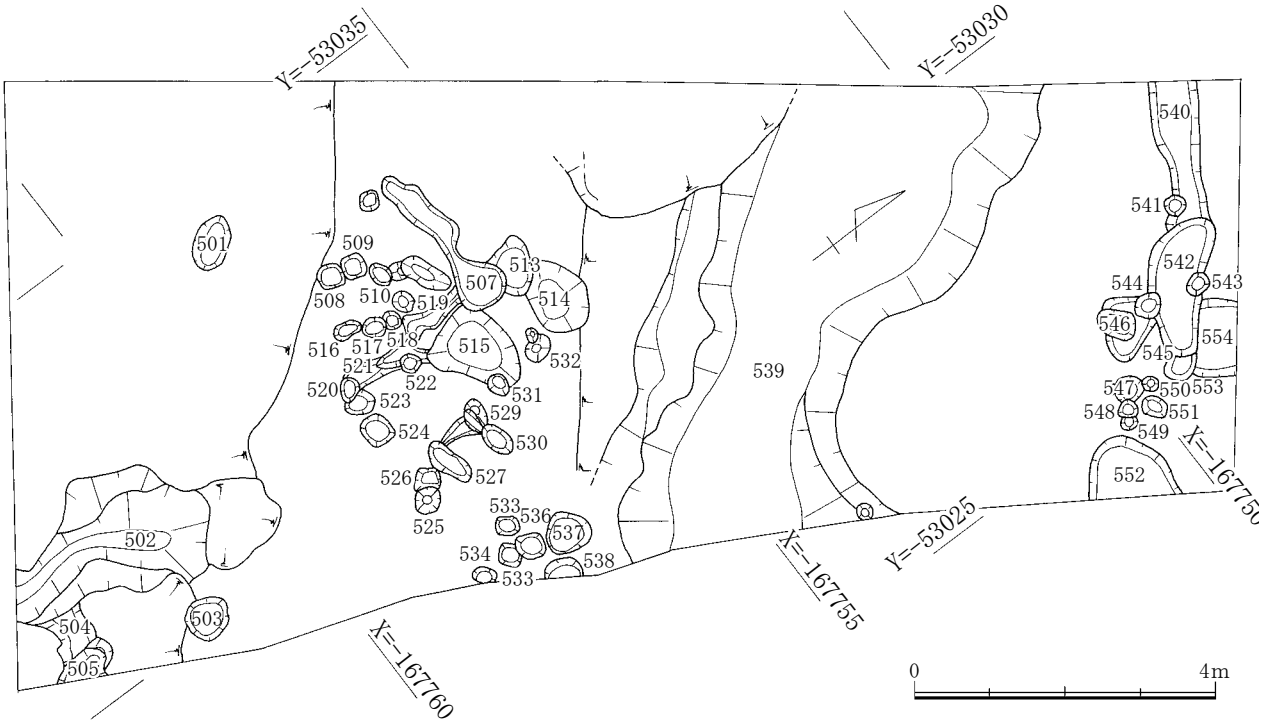
第２面は、第１面から約0.6ｍ下がったT.P.16.85～16.9ｍの灰白色土で溝や土坑、ピットを検出した。量は少ないが縄文時代中期末頃の土器が出土した。隣接する06－１区、２区などの調査でもこの時期の遺構・遺物が検出されている。

501ＳＫは楕円形で、0.7ｍ×0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。　502ＳＤは調査区内に始まり、南流する溝状の遺構で、幅、0.7～1.45ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は灰白色から灰色のシルト質土で、中層は炭化物粒を多く含んでいる。

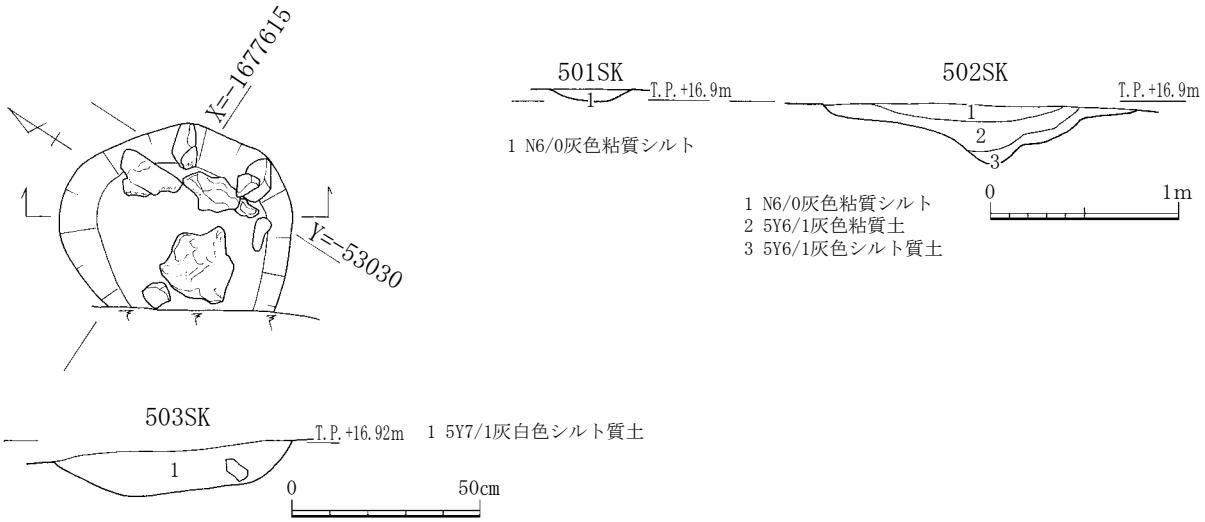
503ＳＫは南側が攪乱されているが、直径0.6ｍを測る歪んだ円形土



第56図　04－１区１ＳＡ平面・断面図



第57図　04－１区第２面平面図（1/100）



第58図　04－１区第２面　501ＳＫ、502ＳＫ平面図、503ＳＫ平面・断面図

坑である。深い皿状の掘形で、深さは0.15ｍを測った。坑内から拳大まで礫石や焼土塊が出土している。

507ＳＫは溝状に長い土坑で、長径2.15ｍ、最大幅0.8ｍを測る。508から512ＳＫは北西から南東に並ぶピットや小土坑で、508ＳＰ、509ＳＰは0.3ｍ×0.3ｍの隅丸方形である。513ＳＫは507ＳＫより古い土坑である。角の円い三角形状の平面で、底辺、長さとも0.8ｍ前後を測る。514ＳＫは513ＳＫより古い土坑で、歪んだ楕円形を呈し、長径1.1ｍ、短径0.8ｍを測る。515ＳＫも507ＳＫより古い土坑で、歪んだ三角形状で長さ1.2ｍ、底辺0.95ｍを測る。坑内から板状の礫が出土している。

521ＳＤは細長い溝で、507ＳＤと同じように「Ｌ」字状に曲がる溝であった可能性がある。縄

文土器が出土している。539ＳＤは北西から南東に走る河道で幅3.7ｍ、深さ0.5ｍを測る。斜面はなだらかに傾斜し、場所によっては部分的にテラス状の平坦面が形成され、２段構造になっている。埋土は灰白色砂、灰白色シルトであった。 埋土から短期間の河道と考えられる。河道の北東側は地山が粘質で、流水の侵食や足跡と見られる窪みが観察される。540ＳＤは北西－南東方向の溝で幅0.6ｍを測る。552ＳＫは歪な円形土坑で南東は調査区外に広がるが、長径1.2ｍ、短径0.9ｍ以上を測る。

524ＳＰは0.4ｍ四方のピットで、526、533、538と１ｍ間隔、また、523、526、536とは1.4ｍ間隔で並ぶことから柱列状の遺構が想定される。

04－２区

04－１区と06－２区を挟んで南西側に位置する調査区である。現地表面はT.P.18.4ｍ、旧耕作土（耕土・床土)、褐灰色砂礫層、灰白色シルト、灰白色シルト質土の順に堆積している。この地区ではT.P.17.2～17.5ｍの床土の下の褐灰色砂礫層を除去した灰白色シルト質土面、T.P.16.7～16.9ｍの黄灰色粘質シルト面、T.P.16.5ｍの灰白色シルト質粘土層の３面で遺構を検出した。

第１面

第１面は、南半分が床土の下に中世から近世頃と考えられる褐灰色砂礫層が、厚い所では0.5ｍ堆積し、その上に客土して水田を開発している。遺構はこの砂礫層を除去した面で検出した。検出面の高さは北西端で17.6ｍ、南東端で17.5ｍ前後であった。

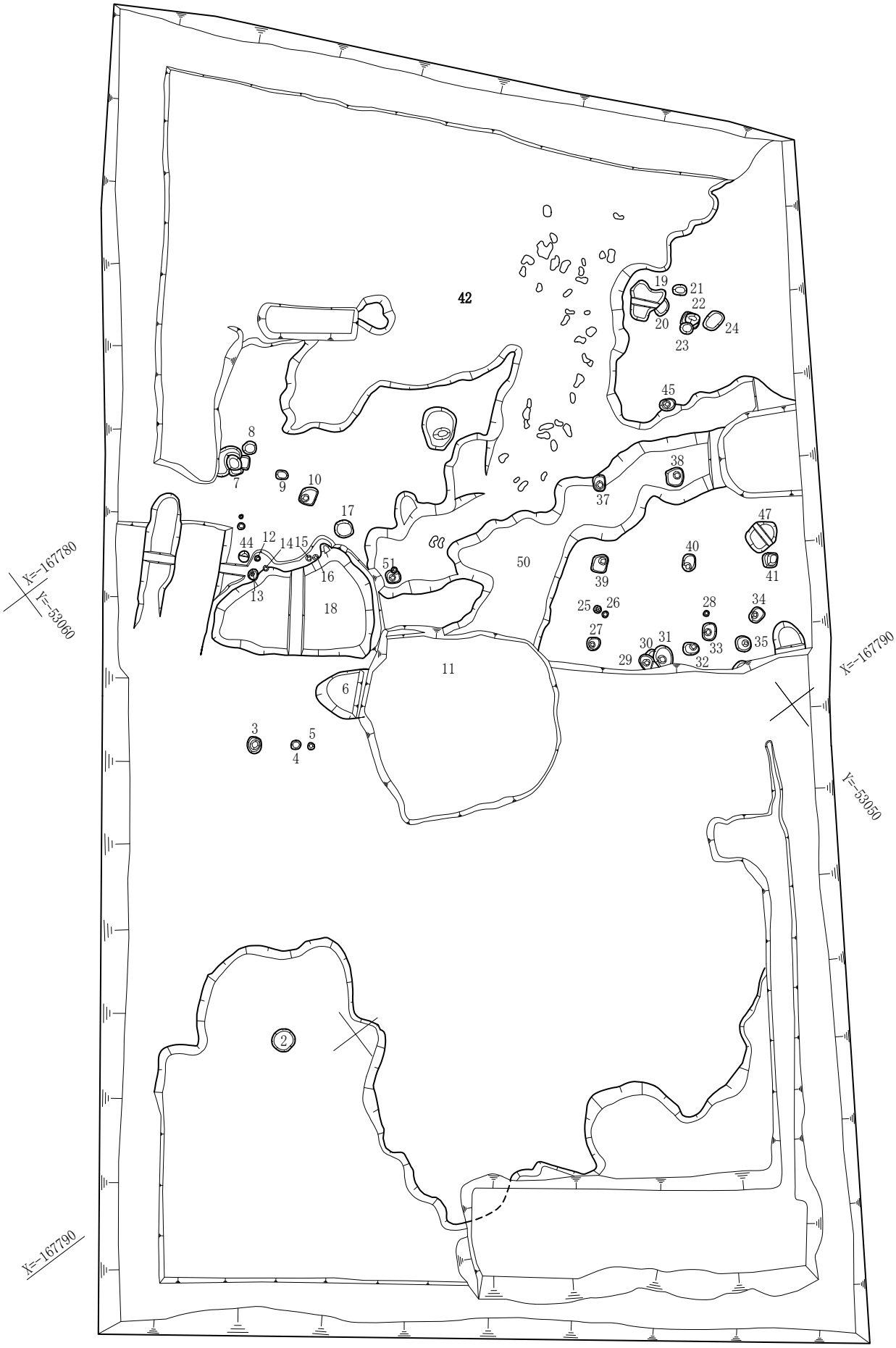
検出した遺構は、掘立柱建物跡、土坑、そして河道となっていた時期の足跡等である。特に砂礫が厚く堆積していた南西半分は河道により遺構が削平され、ピットの痕跡が数カ所残っていただけであった。

１ＳＢは調査区中央の東側で復元した掘立柱建物である。流路50ＳＲの埋没後に建てられた掘立柱建物で、１間×２間以上で北西側に副屋がつくものを想定した。規模は梁行きが1.6ｍ、桁行は3.2ｍ以上で柱間隔は、北側が1.6ｍ、1.6ｍ、南側は1.8ｍ、１ｍを測る。副屋は歪んでいるが１間四方で、柱間隔は梁側が1.8ｍ、桁側は1.5ｍを測る。副屋の南側は攪乱されており、総柱建物の可能性もある。

１ＳＤはＸ＝－167780ｍ、Ｙ＝－53058ｍ付近にある幅0.6ｍ、深さ0.1ｍの溝で、検出長は2.1ｍであった。50ＳＤは１ＳＢより古い河道で、幅1.2ｍ～2.0ｍ、深さ0.2ｍを測る。

18ＳＫは１ＳＤの東側にある不定形土坑で、長辺３ｍ、短辺1.9ｍ、深さ0.25ｍを測る。

52ＳＫはＸ＝－167782ｍ、Ｙ＝－53052ｍにある小土坑で、長径0.8ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は主に灰黄色土である。

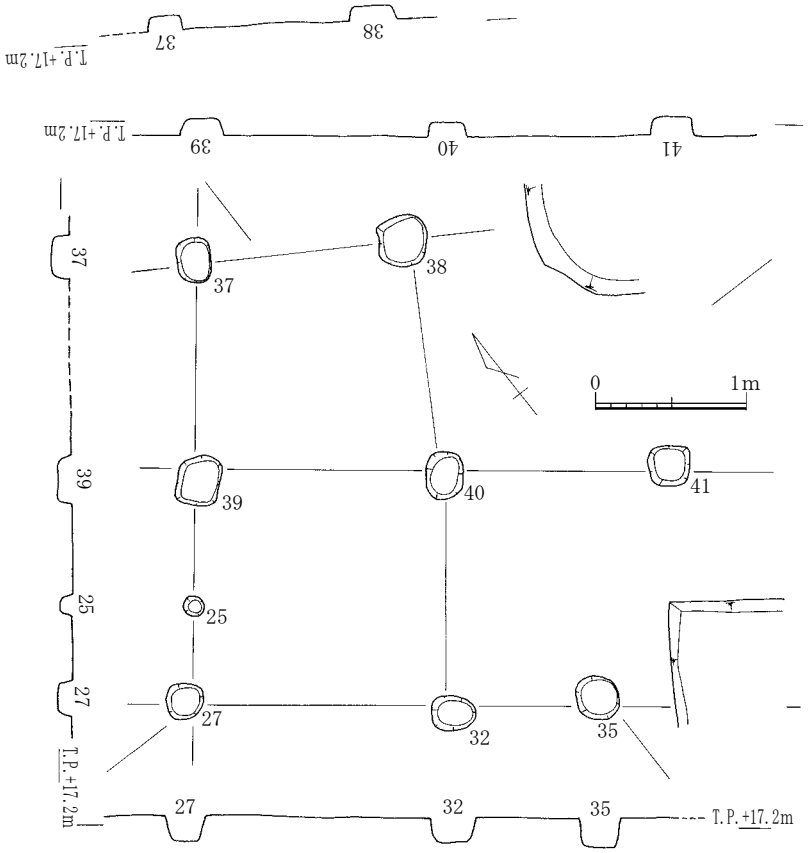


第59図　04－２区第１面平面図

19ＳＫは北東隅近くにある歪な三形の小土坑で.長径0.7ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。足跡は１ＳＢの北側で検出した。水田に開発される前に一時期河道があり、完全に没せず上面が泥土で湿地状態であったのであろう。

71ＳＲは調査区南東から南西に蛇行する河道で、深さは0.15ｍ～0.2ｍを測った。埋土は褐灰色砂礫である。

この面では鎌倉から室町時代頃の土器が出土している。



第60図　04－２区第１面１ＳＢ平面・断面図

第２面

第１面の灰白色シルト質土、灰黄色粘質シルト、黄灰色シルトを掘削し、T.P.16.8ｍ前後の灰白色シルト質粘土面で検出した遺構である。

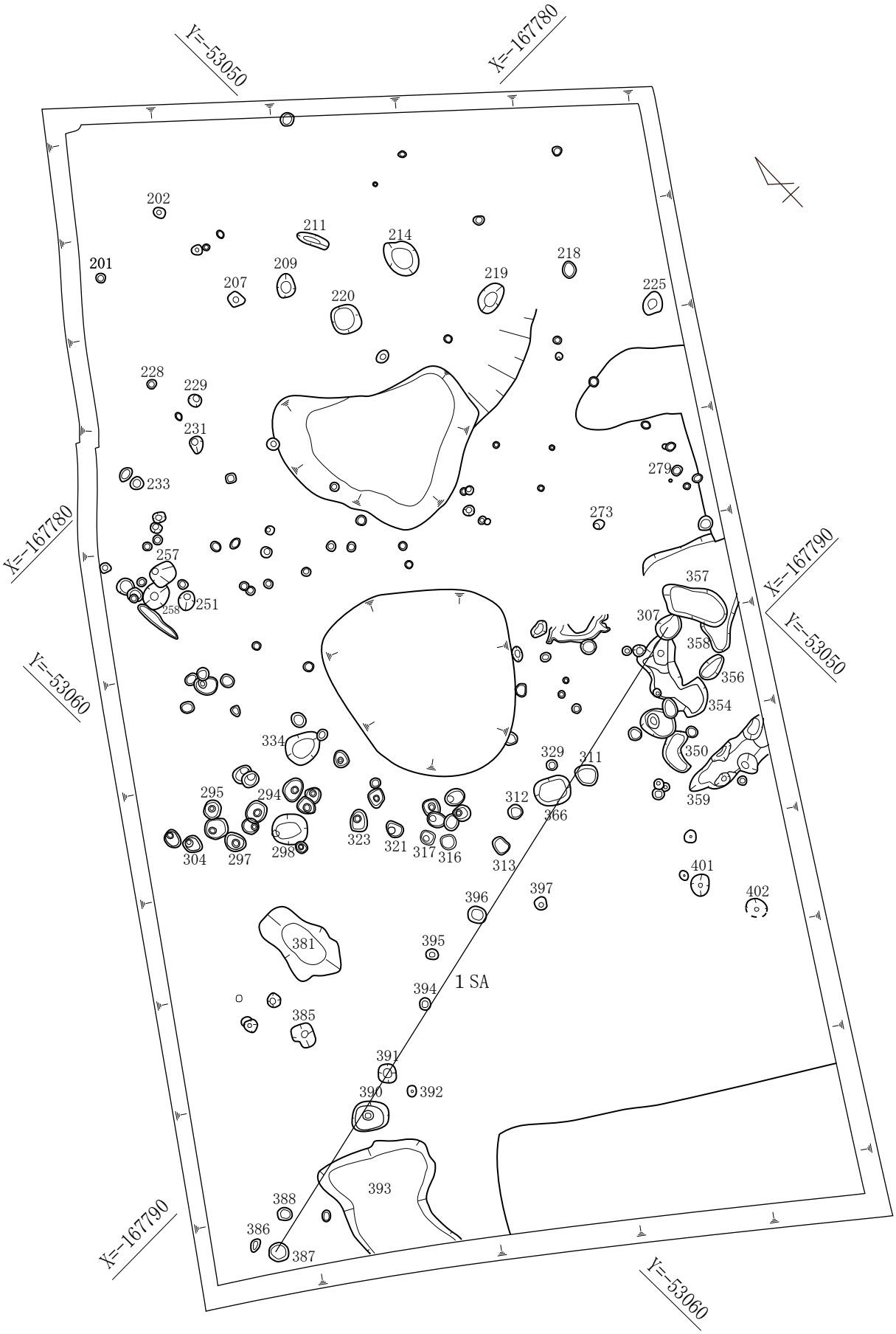
多数のピット、土坑を検出したが、ピットは調査区中央に纏まり、建物を復元できず、柵跡を１基復元したのみであった。

１ＳＡは調査区中央から西南西に走る柵列で、387、390、394、396、366、307ＳＰの書くピットを結ぶ13ｍ以上の柵である。支柱の間隔は南西側から３ｍ、2.2ｍ、1.8ｍ、2.25ｍ、4.0ｍを測る。366ＳＰと307ＳＰは離れているので、北方向に曲がっていたかもしれない。

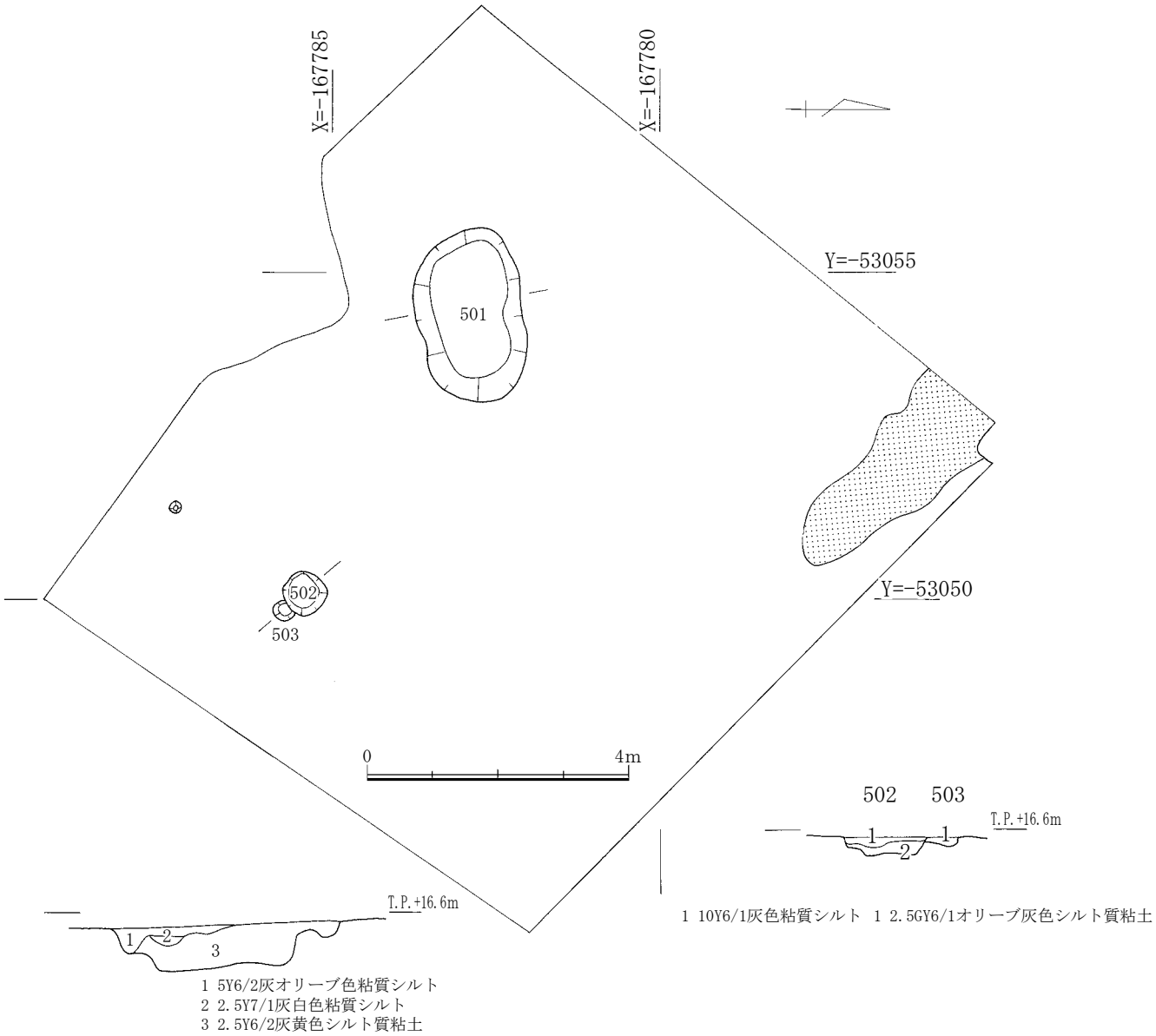
土坑

381ＳＫは長径1.65ｍ、短径0.85ｍを測る歪な土坑である。393ＳＫは長径２ｍ以上、短径２ｍの方形に近い土坑で、深さ0.2ｍを測る。359ＳＫは東側が調査区外に広がるが、長径1.65ｍ、短径0.75ｍの歪な楕円状の土坑で、深さは0.1ｍを測った。350ＳＫは359ＳＫの北にあるＬ字形の小土坑で長径0.75ｍ、短径0.55ｍ、深さ0.05ｍを測る。349ＳＫは切り合いから350ＳＫより新しい土坑で、長径0.75ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.1ｍを測った。354ＳＫはＬ字状の歪な形状の土坑で、長径1.4ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.15ｍを測った。357ＳＫは長径1.2ｍ、短径0.6ｍを測る平面が楕円形の土坑で、深さ0.15ｍを測る。

この面では約200箇の土坑、ピットを検出した。特に中央部でピットが群在するが、位置や向



第61図　04－２区第２面平面図



第62図　04－２区第３面平面図、501ＳＫ、502ＳＰ、503ＳＰ断面図

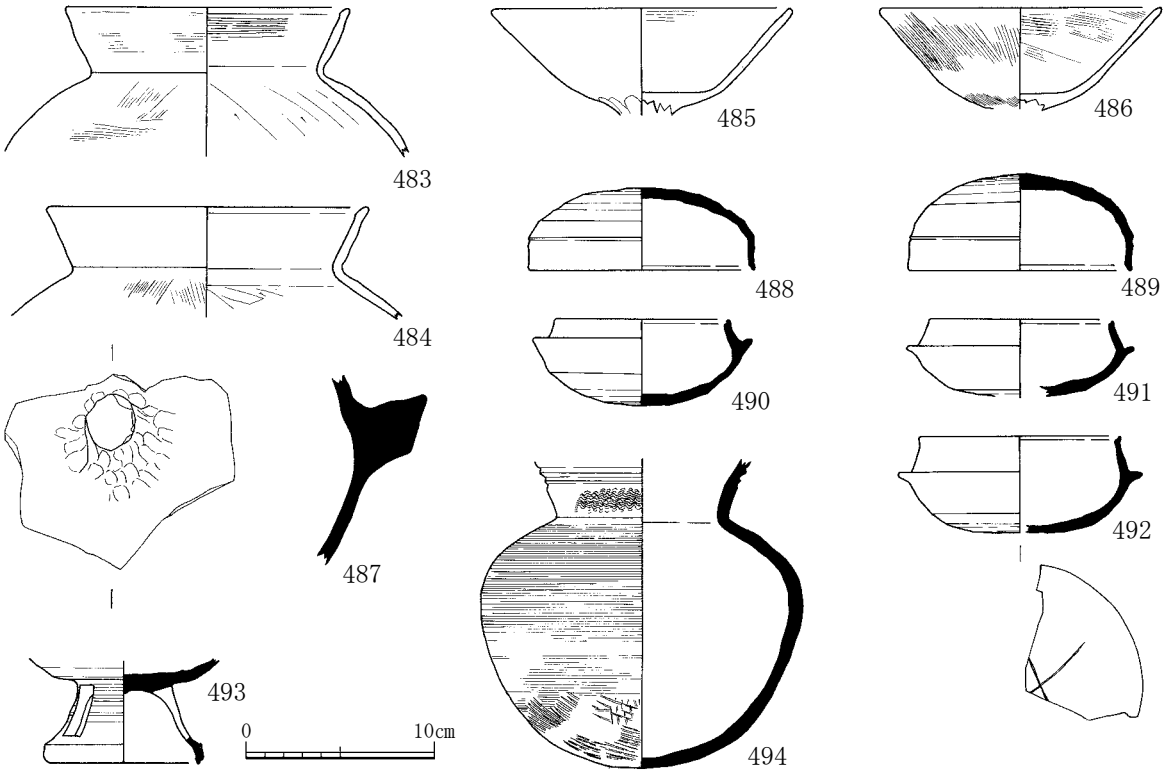
きを変えて何度も建て替えられたのか、建物跡を復元することはできなかった。出土遺物から、大半は古墳時代に属する遺構と考えている。

第３面

第３面は第２面を約0.3ｍ掘り下げた灰白色シルト質土上面で、土坑とピットを検出した。

501ＳＫは調査区中央の北寄り、Ｘ＝－167783ｍ、Ｙ＝－53055ｍで検出した土坑である。長径2.65ｍ、短径1.60ｍを測る歪な楕円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。埋土は３層に別れ、上層から灰オリーブ色粘質シルト、灰白色粘質シルト、灰黄色シルト質土で、１，２層は炭化物粒を多く含んでいる。第２層は地山の灰白色粘質シルトに近く、掘形の輪郭は不明瞭で、炭化物の含有差で輪郭をとらえた。遺物は出土しなかったが縄文時代のものと考えられる。

502ＳＫは隅丸方形の土坑で0.6ｍ×0.65ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は灰色シルト質土、をブロックで含む灰色粘質シルトであった。遺物は出土していない。503ＳＰは502ＳＫより古いピットで0.35ｍ×0.25ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土はオリーブ灰色シルト質粘土であった。



第63図　04－１区１ＳＤ出土遺物実測図

他にピットは検出できなかった。この調査区では第３面の灰白色シルト質土で縄文時代中期末頃の土器が出土しているが、各遺構から遺物は出土しなかった。北隅では炭化物がまとまって観察されたが、炉跡等は確認できなかった。

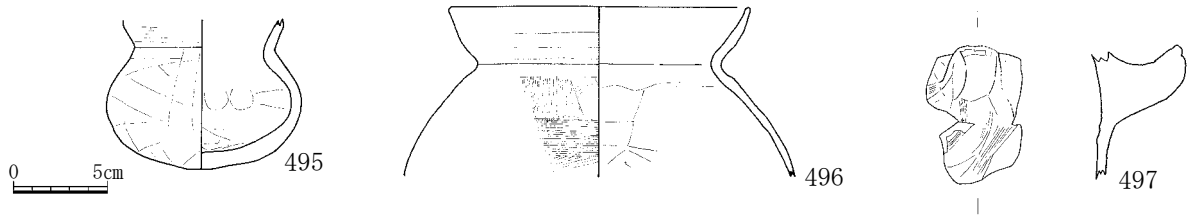
04－１区、04－２区出土遺物

04－１区１ＳＤ出土遺物（第63図）

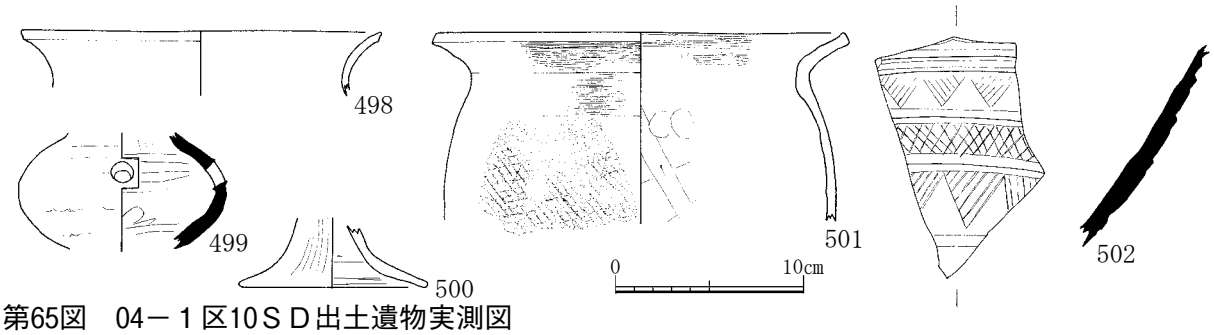
483、484は土師器甕の口頸部で、口縁端部は内径して肥厚する。485, 486は高坏の杯部で、小さな杯部から開いて立ちあがる口縁部をつくる。485は口縁部を内画面ともナデ、486は外面部をハケメ、内面はハケメの後、ナデで仕上げている。487～494は須恵器。488、489は杯蓋で、488は内傾する口縁端部に微かな段をつくる。天井部のヘラケズリは広く、３/４程度である。489は口縁端部が内傾する。天井部のケズリは１/２前後である。稜は鈍く僅かに沈線をつくる。490～492は杯身。口縁端部は内傾する段をつくる。491、492は受部が水平に開く。杯部外面のヘラケズリは490、491が１/２前後、492は１/３前後で幅が狭い。492は底部外面にヘラ記号を持つ。493は高坏の脚部で「ハ」字形に開き、脚端部は曲げて垂下させる。494は壺の胴頸部で、頸部下端に波状文を描く。胴部最大径は肩部にあり、カキメで調整する。底部はタタキ調整が残る。487は壺の把手であろう。

04－１区４ＳＤ出土遺物（第64図）

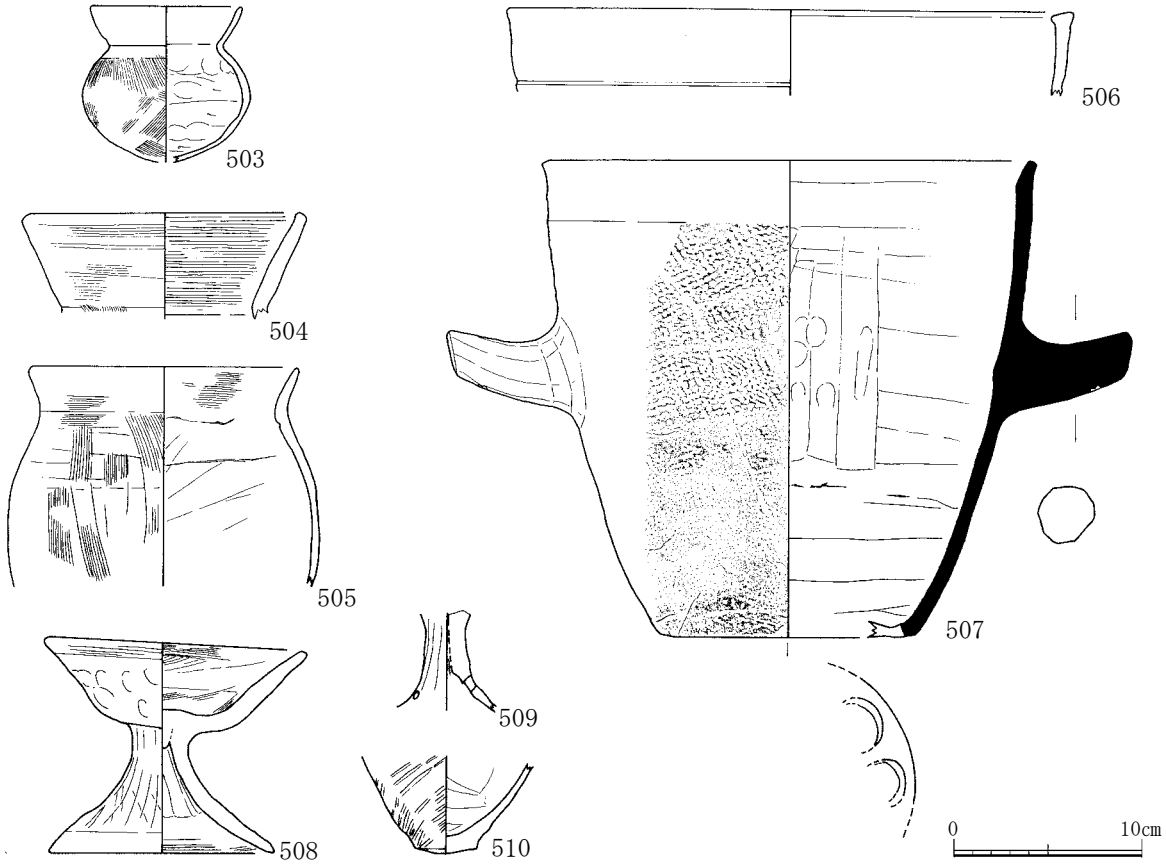
495は小型丸底壺。口縁端部を欠く。胴部はナデ､内面に指オサエが残る。496は甕の口頸部で、



第64図　04－１区４ＳＤ出土遺物実測図



第65図　04－１区10ＳＤ出土遺物実測図

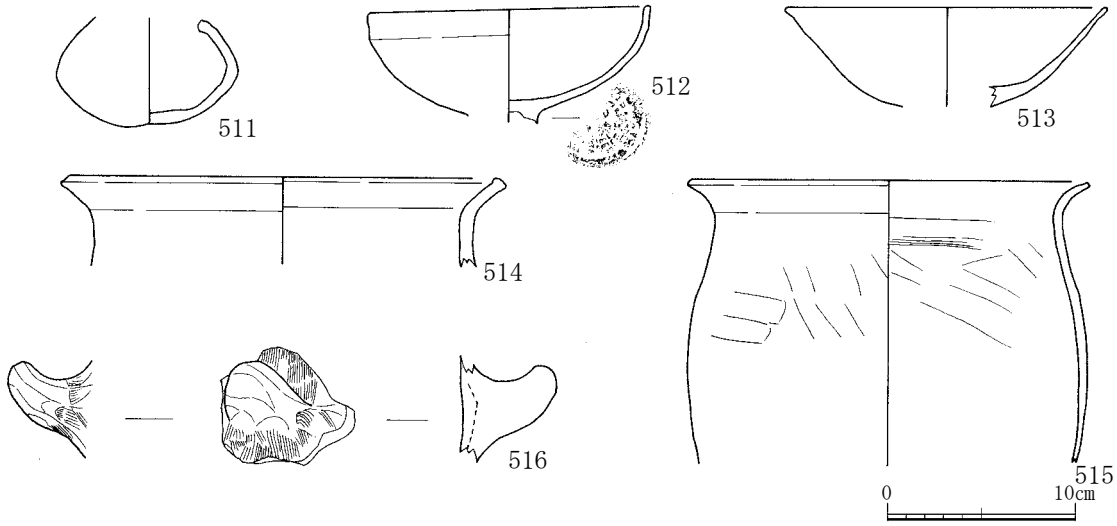


第66図　04－１区３ＳＤ出土遺物実測図

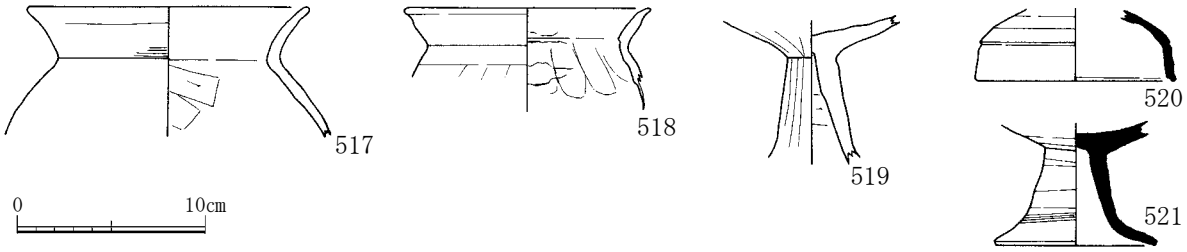
内弯気味に立ち上がる口縁端部は丸く収める。胴部はハケメ調整。内面はヘラケズリである。497は土師質の把手である。

04－１区10ＳＤ出土遺物（第65図）

498、501は韓式土器の甕で、498は口縁部破片。外反して立ち上がる口縁の端部は垂下する面をつくる。501は外反して開く口縁部で、端部は外傾する面をつくる。頸部は横方向のハケメ、胴部は格子目タタキで調整する。499は瓶の胴部。500は高坏の脚部、502は須恵器器台で、外面



第67図　04－１区２ＳＫ、８ＳＰ、11ＳＤ、６ＳＫ、19ＳＫ出土遺物実測図



第68図　04－１区包含層出土遺物実測図

を多条沈線と鋸歯文、格子目文で飾る。

04－１区３ＳＤ出土遺物（第66図）

503は小型壺。口縁部は内弯気味に立ち上がり口縁端部を丸く収める。504は開いて立ち上がる壺の口縁部で、内外面ともハケメ調整である。505は甕で、頸部の絞りは緩く口縁部は愛敬して立ち上がり、端部を丸く収める。胴部の膨らみは小さくハケメ調整である。506は弥生時代中期の鉢口縁部。507は韓式土器の甑である。胴部は平らな底部から僅かに開いて立ち上がり、口縁端部は微かに外反させ、口縁端部は外傾する面をつくる。口縁部はヨコナデ、胴部は格子目のタタキで、胴部下半はタタキの後ナデで調整する。底面を欠くが、円形孔は10箇所程度か。508、509は高坏で、508は小さな杯部から開いてたち上がる口縁の端部を外反気味に丸く収める。脚部は外反気味に開く。509は筒状の脚部から開く脚部をつくる。510は弥生時代後期の鉢。外面は螺旋状のタタキ調整である。

04－１区２ＳＫ、８ＳＰ、11ＳＤ、６ＳＫ、19ＳＫ出土遺物（第67図）

511は小型の無頸壺。球形に近い胴部で、胴部最大径4.7㎝。口縁端部は内傾する。512、513は高坏杯部。512は半円形の口縁端部に面をつくる。口縁部に凹線をつける。513は開いて立ち上がる口縁部をもつ古墳時代のもの。514、515は甕の口縁部。膨らみのない胴部から外反する口縁部の端部を僅かに摘み上げ外傾する面をつくる。515は僅かに膨らむ胴部に外反する口縁部をつく

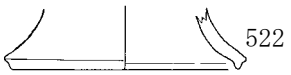
る弥生時代中期のもの。516は甑の把手である。 511、512は２ＳＫ、513は６ＳＫ、514は８ＳＰ、515は19ＳＫ、516は11ＳＤ出土。

04－１区包含層出土遺物（第68図）

517、518は甕口頸部。517は外反する口縁の端部を円くおさめる。口縁部外面はヨコナデの条痕を残す。胴部内面はヘラケズリで調整する。518は手捏ねのもので、肩部内面に成形時の指痕が残る。519は高坏脚部。520、521は須恵器で、520は杯蓋で、天井部の膨らみは小さく、稜は鈍い。521は高坏で、ハ字形に開く脚の裾部を外折させる。

04－２区出土遺物（第69図）

04－２区は第１面が湿地状であったためか出土遺物は少ない。弥生時代以降の遺物で実測図を掲載できたのは１ 点である。522は土師器の脚部である。脚端部をわずかに摘んで屈曲させている。



第69図　04－２区出土遺物

04－３－１～３区

04－３区は今回の調査で最も北西の国道26号線穴田交差点の南東側に位置する調査区である。

周辺住民の通路を確保するため、３区に分け、それぞれの調査区を２回に分けて調査を実施した。調査区は西から04－３－１区、04－３－２区、04－３－３区とした。遺構番号は各小区毎に１から付した。調査面積は約400㎡である。

層序

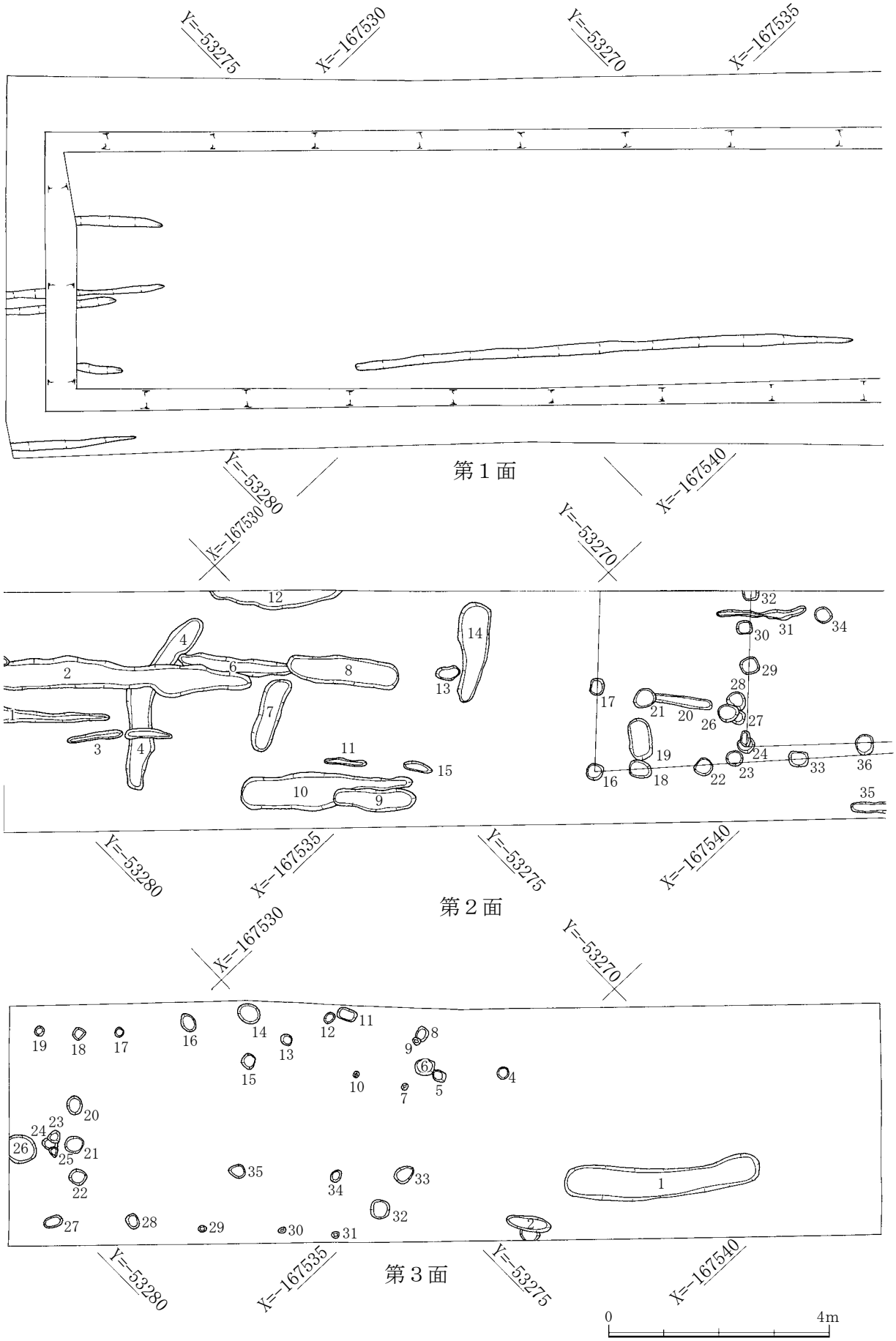
調査地は大阪湾方向に緩く傾斜しており、04－３区はT.P.16.8ｍで、約300ｍ東南端の04－１区より２ｍ以上低くなっている。

基本層序で記したように、第１面は0.7ｍの盛土、0.2ｍの耕土、床土の灰黄色砂質土を除去した、T.P15.7ｍ前後に堆積するにぶい黄橙色粘質土上面である。検出したのは耕作溝である。第２面は明黄褐色砂質土上面で、溝や掘立柱建物跡を構成するピットを検出した。中世の遺構である。第３面は灰黄褐色土層を除去した灰黄褐色砂質土上面である。弥生時代から古墳時代の遺構面である。第４面は灰黄褐色砂質土、オリーブ褐色砂礫、灰白色シルトを除去した、暗オリーブ砂質土から灰色粘土面で検出した遺構で、河道を検出している。

04－３－１区

第１面

第１面は耕作土を除去し黄橙色粘質土面で検出した耕作溝である。溝はこの地域の地割に沿い南東～北西方向で、幅0.2～0.3ｍ、深さは0.05ｍ前後である。調査区内で５条検出したが、07－７区や08－12区、15区などと比べると、検出数は少ない。04－３－２区、04－３－３区ではこの面を図化していない。また、田畠を区画する里道や壺境の溝は確認できなかった。

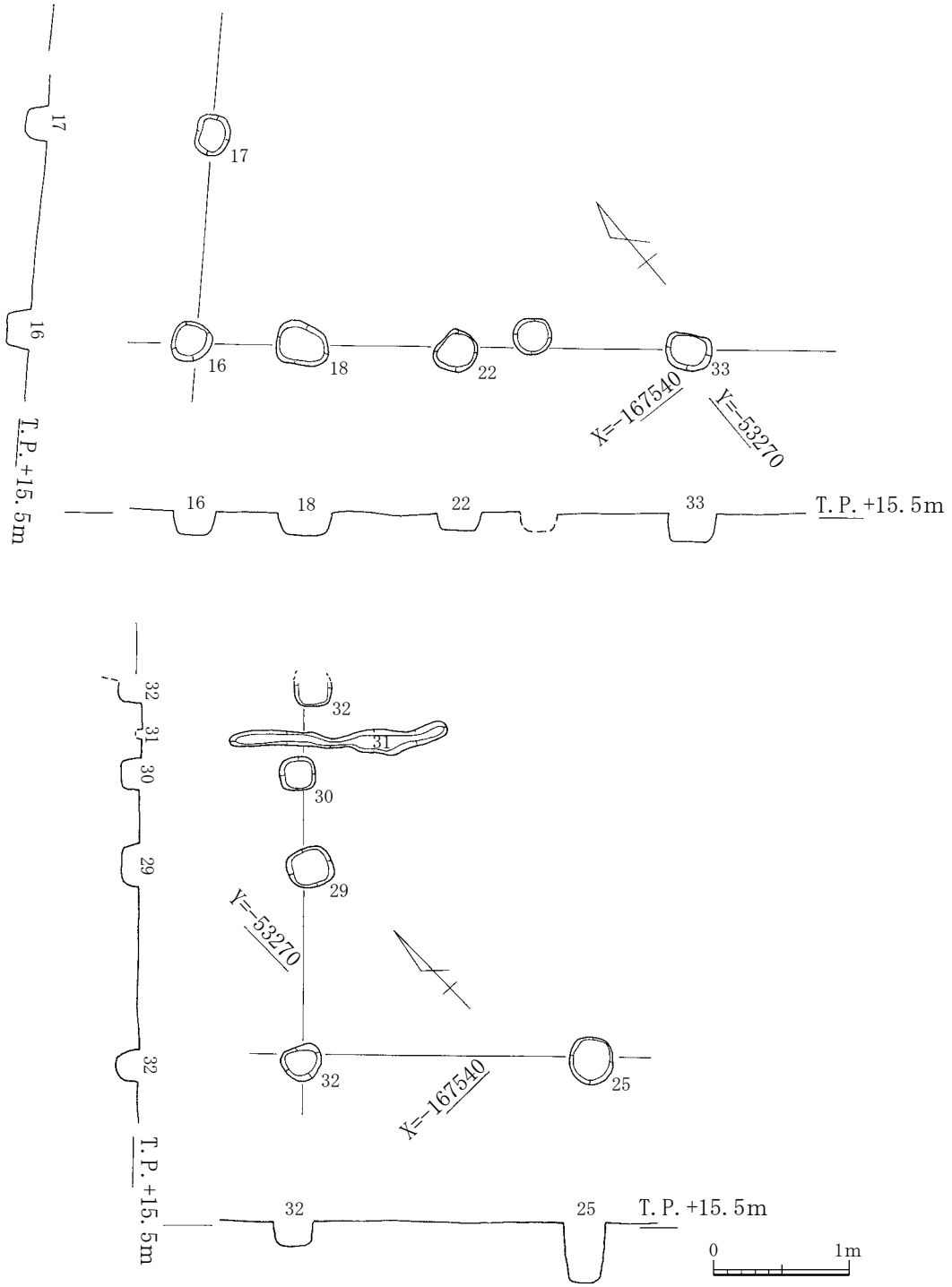


第70図　04－３－１区　第１面、第２面、第３面平面図（S=1/100）

第２面

T.P.15.5ｍ付近に堆積する明黄褐色層上面で検出した遺構で、北西部では溝や土坑、南東部で柱穴等がある。

この地域の地割りに沿って南東から北西方向に掘られた２、６、８、10ＳＤと、これに直行する４、７、14ＳＤがある。南東～北西に走る溝では、１ＳＤは検出長２ｍで幅0.25ｍ、深さ0.03ｍを測る。２ＳＤは検出長4.5ｍで、幅0.5ｍ、深さ0.04ｍ、６ＳＤは幅0.3ｍ、深さ0.02ｍ、８ＳＤは長さ2.0ｍ、幅0.556ｍ、深さ0.06ｍ、９ＳＤは全長1.5ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.07ｍ、10ＳＤ



第71図　04－３－１区１ＳＢ、２ＳＢ平面・断面図

は延長3.2ｍ、深さ0.1ｍで、2009ＳＤより古い。地割りに直行する４ＳＤは地割りに平行する溝より前に掘削されており、全長４ｍ、幅0.5ｍ深さ0.05ｍを測る。各溝の埋土は褐灰色から黄灰色のシルト質土である。

建物跡

南東部のＸ＝-167535ｍ以南で10数カ所の柱穴を検出し、地割に則った建物跡を２棟復元した。１ＳＢは建物で東西（北西－南東）２間（3.6ｍ）以上、南北１間（1.7ｍ）以上の規模の建物である。東西の柱間寸法は1.9ｍ、1.7ｍを測る。主軸はＮ－49°－Ｗを示す。２ＳＢは１ＳＢに接する位置で復元した。東西１間（2.2ｍ）×南北２間（2.8ｍ）以上の建物である。東西軸はＮ－45°－Ｗで、南北梁の柱間寸法は1.4ｍを測る。南西隅の柱穴に抜き取り穴が観察された。

第３面

第３面では溝状の土坑とピットを検出した。１ＳＫは調査区南東部にあり、長さ3.3ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は褐灰色土であった。遺物は出土していない。ピットは北西部で30カ所検出したが、形状は円形か隅丸方形で、長径0.10ｍ～0.5ｍ、深さ0.1～0.25ｍの範囲内にあるが、直径0.2～0.3ｍのものが多い。埋土は黄灰色や褐灰色、灰黄褐色、オリーブ褐色の粘質土である。3012ＳＰは直径0.15ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黄灰色粘土であった。3026ＳＰは径0.5ｍの円形で深さは0.05ｍで、埋土はオリーブ褐色粘質土であった。

第４面

第３面から0.3ｍ下がったT.P.15.2ｍ前後の灰色粘土面で検出した遺構で、２条の河道を検出した。１ＳＲは南東から北へ流れる河道で幅5.0ｍ、深さ１.０ｍを測る。砂礫層が堆積していた。

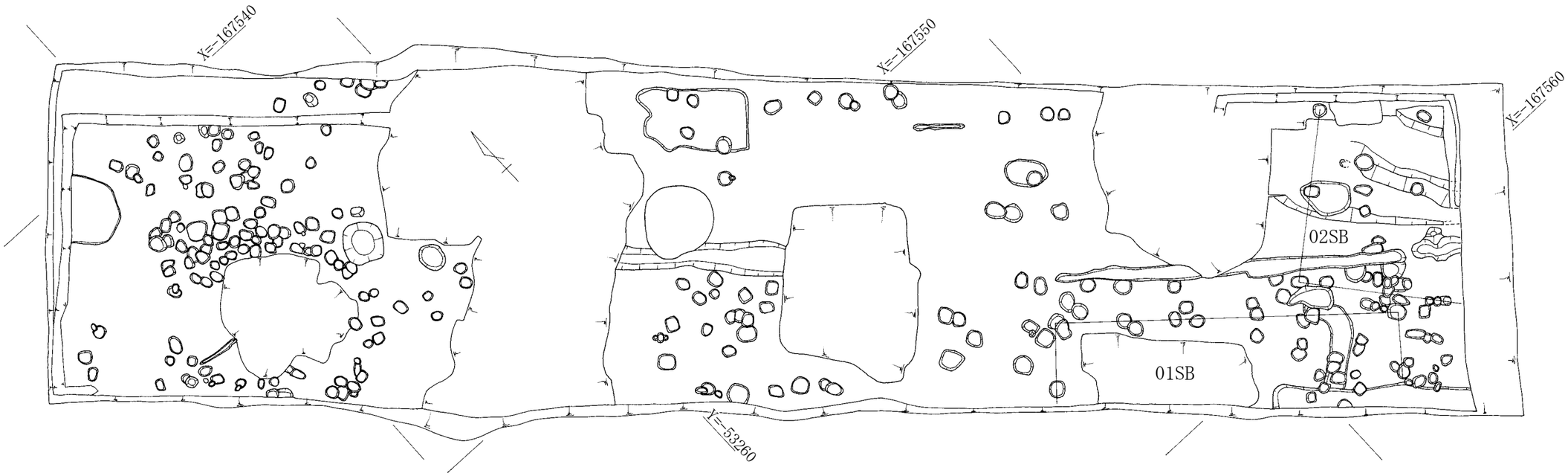
04－３－２区

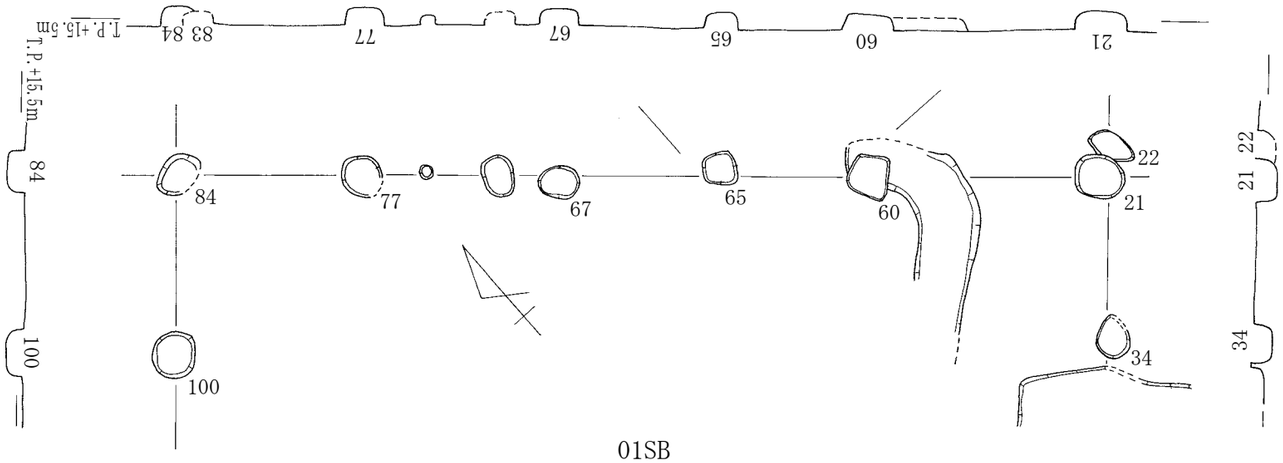
この調査区は長さ30ｍ、幅７～８ｍ、面積約220㎡を測る。３面で遺構を検出した。第１面は耕土、床土を除去し、T.P.15.6ｍ付近に堆積する灰黄褐色砂質土を約0.1ｍ掘り下げた所で遺構の掘形が観察されたので精査を行い遺構を検出した。検出面の高さは南東部で15.55ｍ、北西部で15.45ｍであった。第２面は１面の灰黄褐色砂質土全体に0.1ｍ掘り下げたやや暗い灰黄褐色砂質土層で検出した。

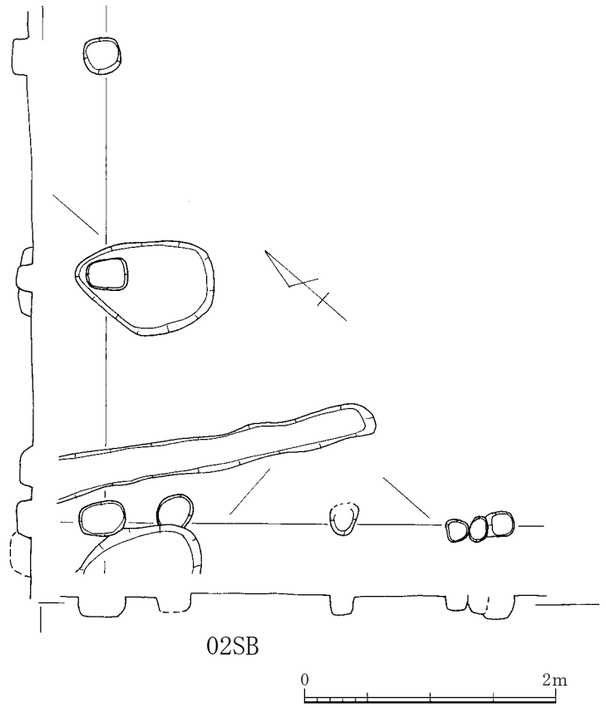
第１面

この面では多数の柱穴と土坑、溝を検出した。検出した遺構数は約350箇所で、特にピットは300箇以上検出した。形状は歪な方形や楕円形に近いものが多く、径は0.2～0.5ｍの範囲内にあり、深さは0.1～0.2ｍを測るものが多い。深さは0.1～0.2ｍを測るものが多い。東南部では２棟の建物を復元した。01ＳＢは５間×２間以上、7.4ｍ×1.4ｍを測る。桁側の柱間隔は1.4～1.5ｍであった。02ＳＢは２間×２間、3.8×3.2ｍ以上の建物で、柱間隔は1.6ｍ～2.0ｍを測った。

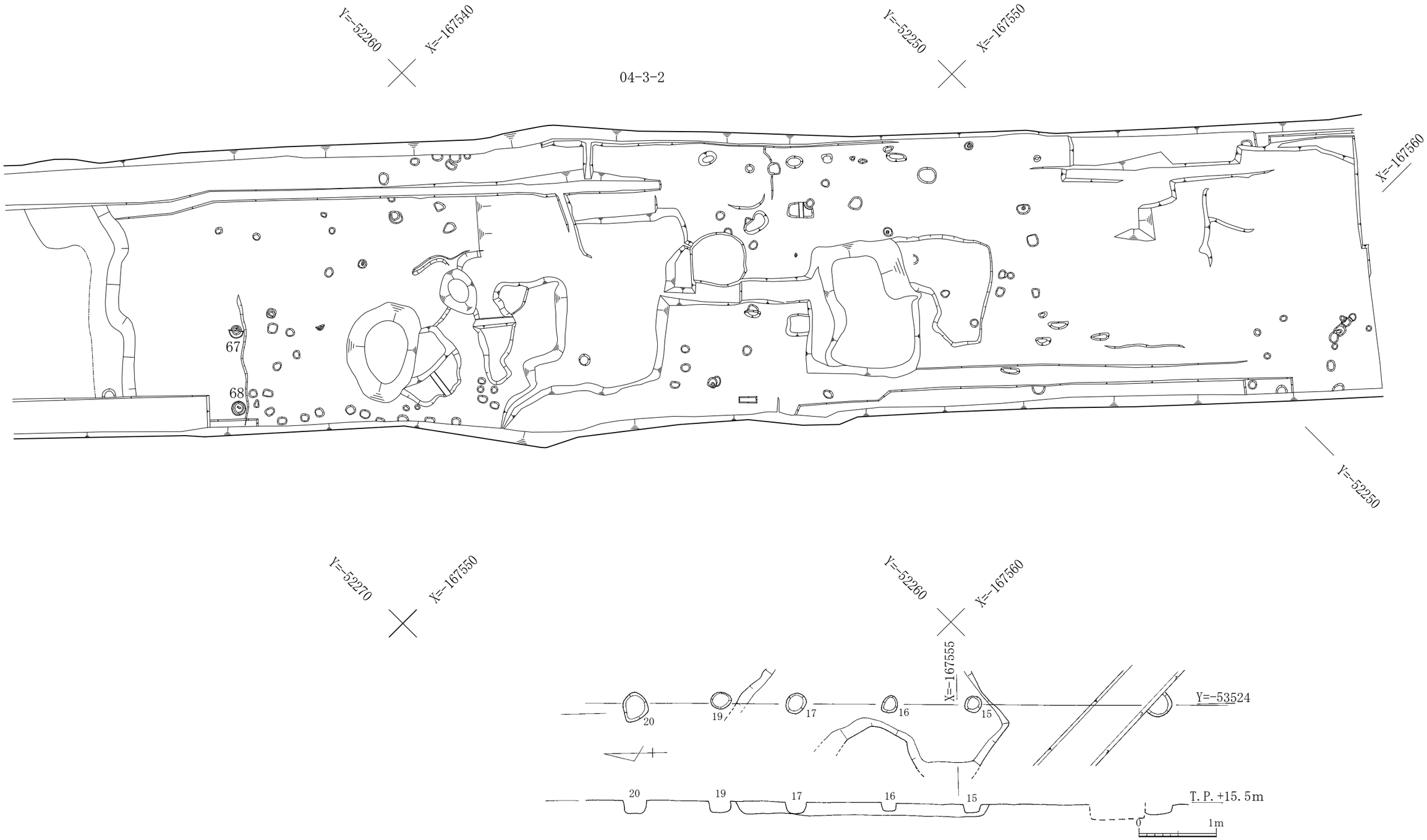
305ＳＰは径0.25×0.2ｍ、深さ0.2ｍを測る楕円形ピットでり、内部に20×８×５㎝礫と10㎝以下の川原石５箇が詰められていた。230ＳＫは0.9ｍ×0.8ｍ、深さ0.3ｍを測る楕円形土坑で、





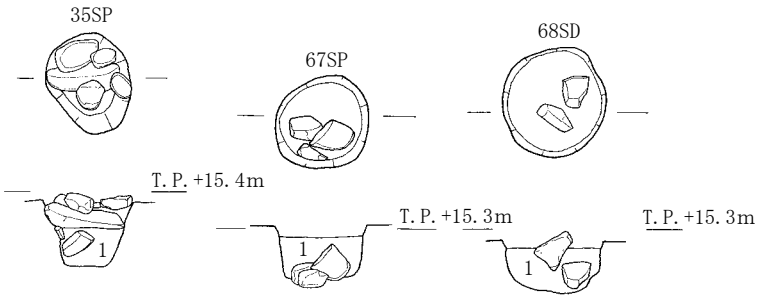


第 72 図　04-3-2 区第 1 面平面図、01 ＳＢ、02 ＳＢ平面・断面図



第 73 図　04-3-2 区第 2 面平面図（S=1/100）

埋土は褐灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。140ＳＤは0.65ｍ、深さ0.4ｍを測る垂直に近いコ字形に掘られた溝で、埋土はにぶい黄褐色粘質土、灰黄色粘質土、暗灰黄色粘質土であった。検出長は約４ｍで遺物は出土しなかった。



第74図　04－３－１区35ＳＰ、04－３－２区67、68ＳＰ平面・断面図

第２面

第１面を約0.1ｍ掘り下げた東南端で15.5ｍ、西北端でT.P.15.2ｍで検出した遺構で、不定形の土坑と約70箇所のピットを検出し、１箇所で柵列を復元した。

04－３－２区１ＳＡは調査区中央で復元した５ヶ所のピット、15、16、17、19、20ＳＰからなる。このピット列と直角になるライン上にピットを確認できなかったので柵列とした。柵は長さ4.4ｍで柱間隔は各1.1ｍを測る。この周囲にピットは少なく、建物を復元できなかった。

一方、北西部では約40箇所のピットを検出したが、間隔がまちまちで、建物の主軸も地割や南北の方位軸にのらないものが多く、無理な復元をしなかった。ピットは隅丸方形か円形で、径0.15～0.35ｍ、深さは0.05～30ｍで、0.2ｍ前後のものが多い。36ＳＫは攪乱を受けているが長径3.5ｍ、短径1.1ｍを測る。埋土は灰白色シルト質粘土で下層は炭化物粒を含んでいた。86ＳＫは0.75ｍ×0.4ｍ、深さ0.15ｍを測る方形の土坑で、埋土は灰色粘質土であった。67ＳＰ、68ＳＰはピット内に川原石が検出面まで詰められて状態で検出した。川原石に使用痕や擦痕はなかった。子供の遊びであろうか。

この面では遺構内から遺物は殆ど出土しなかった。古墳時代の遺構であろう。

２面の灰黄褐色砂質土より下の層では遺物は殆ど出土せず、灰白色粘質土をベースに弥生時代の河道がこの層を侵食して北に流下しており、遺構は検出できなかった。

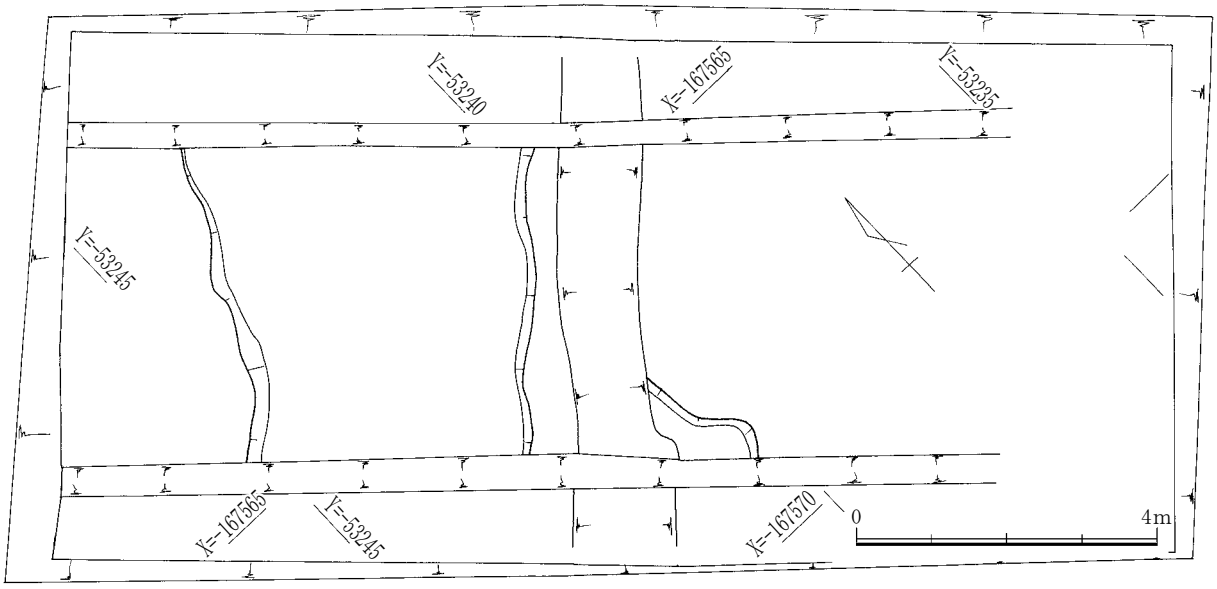
04－３－３区

第１面

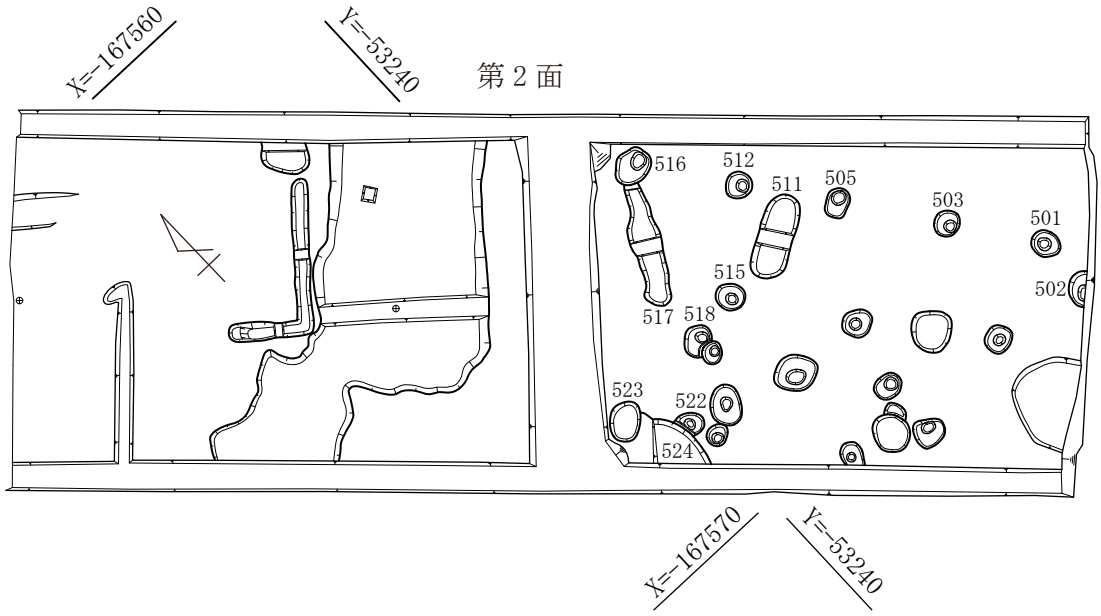
第１面は耕作土、床土を除去した面で浅い溝状の落ち込みを検出した。落ち込みは幅３ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰白色砂質土であった。条理を画する溝としては幅が広い。苗加の庭崎などにある小さな池のようなものかもしれない。

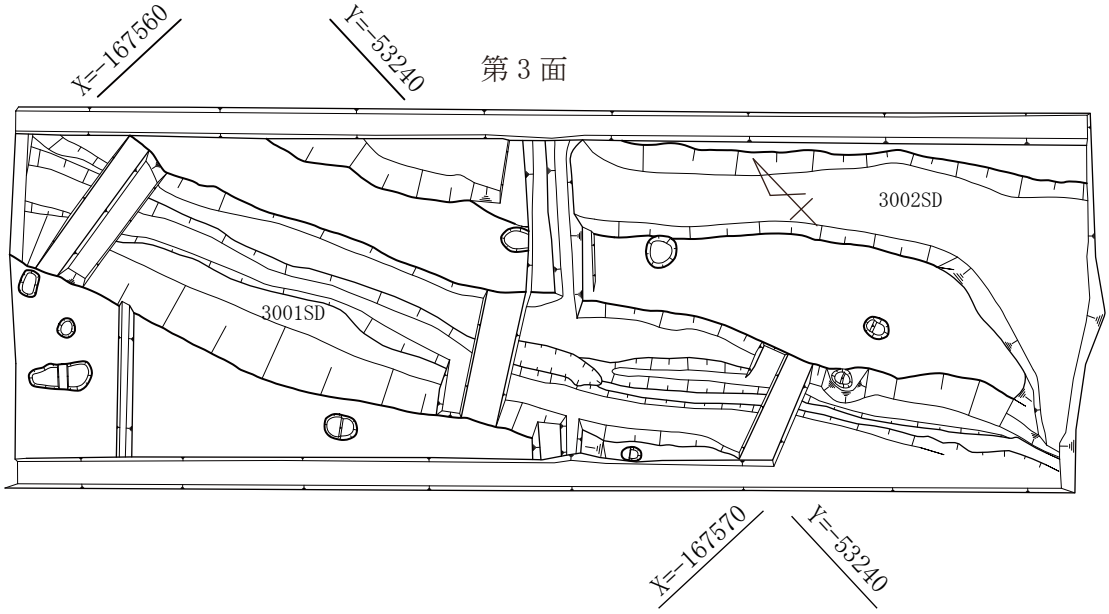
第２面

第２面では掘立柱建物と柵列を各１基検出した。１ＳＢは南西端近くで検出した２間×１間、3.5ｍ×1.8ｍ以上の建物で、柱間寸法は1.7ｍ、1.8ｍを測る。１ＳＡは１ＳＢの北側にある４間以上の柵列で、柱間寸法は1.5ｍ、1.3ｍ、1.5ｍ、1.3ｍを測る。１ＳＢに伴う柵であろう。

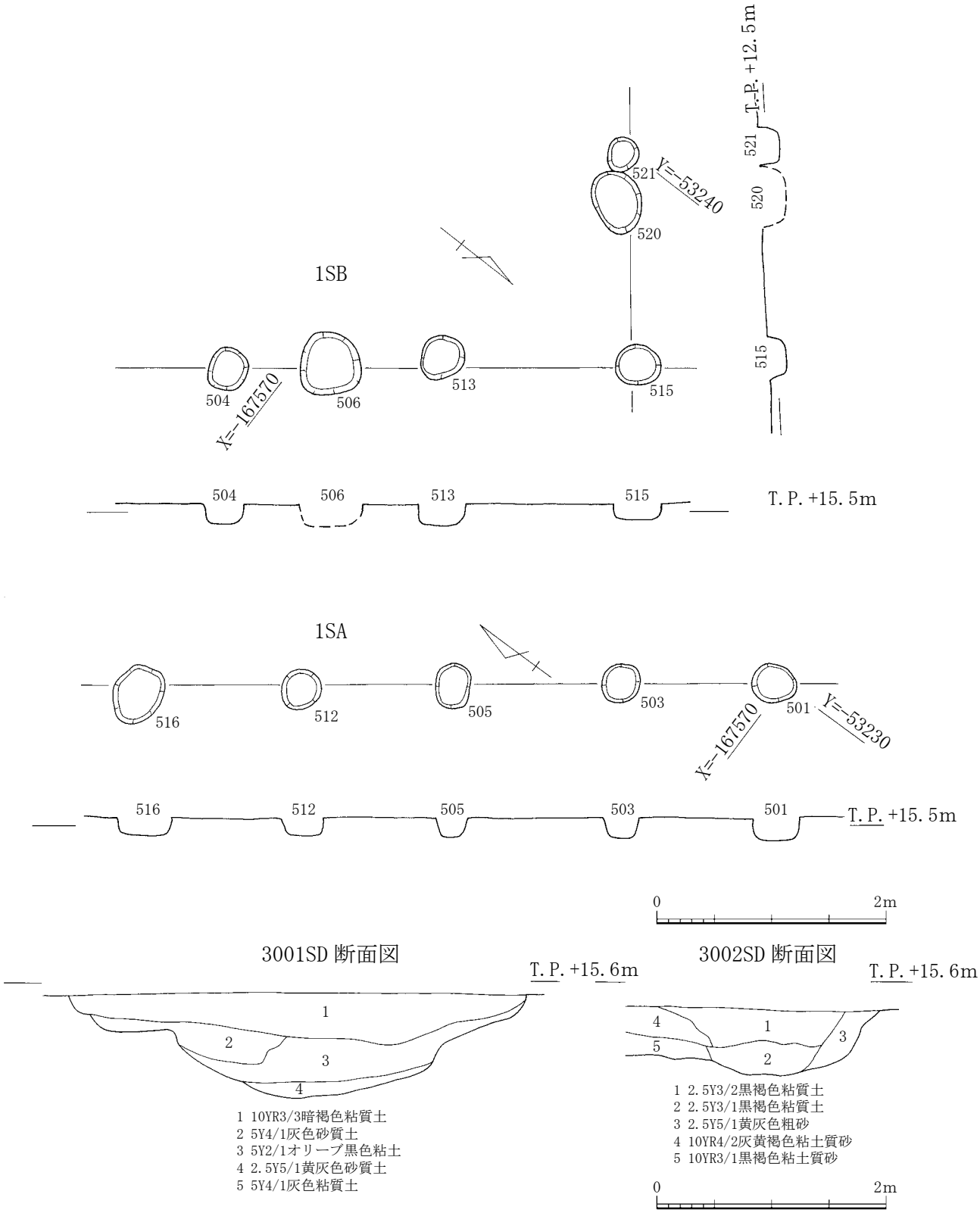


第75図　04－３－３区第１面平面図





第76図　04－３－３区第２面、第３面平面図



第77図　04－３－３区１ＳＡ、１ＳＢ平面・断面図、3001ＳＤ、3002ＳＤ断面図

第３面

第３面はT.P.15.4ｍ前後に堆積する黄灰色から褐灰色粘質土面で検出した遺構で、２条の溝と９カ所で土坑、ピットを検出した。

3001ＳＤは南東から北西へ走る溝で、幅２～2.2ｍ、深さは0.35～0.45ｍを測る。掘削断面は底面が広い皿形で、部分的に検出面から0.15～0.25ｍの深さで段を造り、２段掘りなっている。

埋土は、上層が暗褐色粘質土、中層が灰色砂質土から黒色粘土、下層が砂礫を置く含む黄灰色砂質土で、上層と中層に明確な差があり、浚渫されたと考えられる。各層から弥生土器が出土している。

3002ＳＤは3001ＳＤの西側に平行して掘られた溝で、幅約1.0～1.2ｍ、深さ0.55ｍを測る。埋土は上層が炭化物を含んだ中央が黒褐色粘質土、両側は黄灰色砂混じり粘土であった。溝内から弥生土器が出土している。

3003ＳＰは北東端にある0.35ｍ×0.25ｍ、深さ0.15ｍを測るピットで、埋土は灰色粘土であった。3005ＳＫはＸ＝－167562.5ｍ、Ｙ＝－53246ｍで検出した楕円形土坑で、長径0.85ｍ、短径0.4ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は灰色砂質土とオリーブ黒色粘土であった。3006ＳＰは0.45ｍ×0.3ｍ、深さ0.2ｍを測るピットで、埋土は黄灰色砂質土、オリーブ黒色砂質土などであった。3010ＳＰは3001ＳＤ埋没後に掘られたピットで、0.3ｍ×0.25ｍ、深さ0.25ｍを測った。埋土は暗褐色土で砂礫を多く含んでいた。3009ＳＰは3002ＳＤの肩口で検出した直径0.35ｍを測る円形ピットで、深さは0.15ｍ、埋土は灰オリーブ色砂質土であった。

04－３区出土遺物

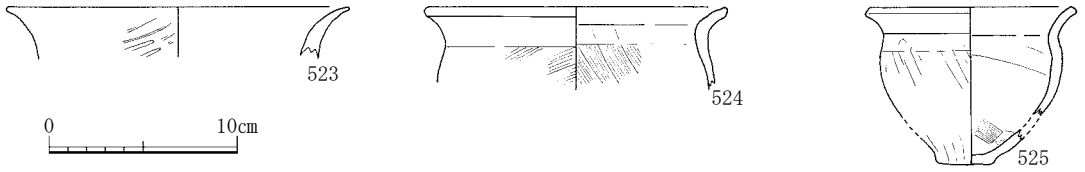
04－３－１区から実測できる土器が殆ど出土しなかった。04－３－２区、04－３－３区で出土した土器について記す。

04－３－２区１ＳＫ、13ＳＤ出土遺物（第78図）

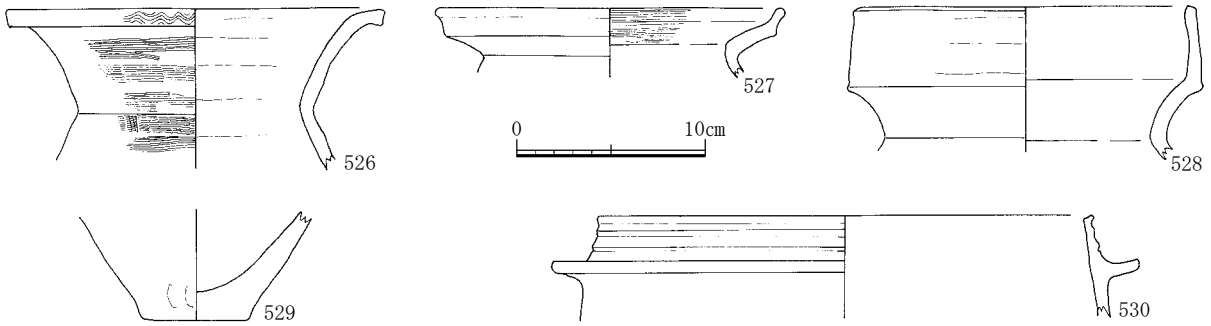
523～525は甕。523は外反する口縁の端部を小さく丸める。524は口縁部をく字形に水平近くまで短く外反させる。525は膨らみの小さな胴部に頸部の絞りは弱く口縁部を外弯する口縁の端部は外傾する面をつくる。胴部外面はハケメである。523は１ＳＫ，524，525は13ＳＤ出土。

04－３－２区165ＳＤ、２ＳＫ出土遺物（第79図）

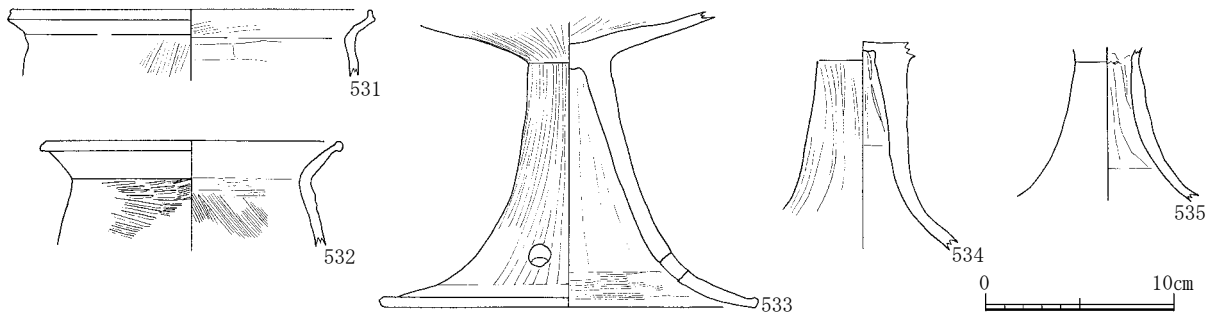
526は壺の口頸部で開いて立ち上がる口頸部に口縁端部は水平近くまで外反し、端部は垂下す



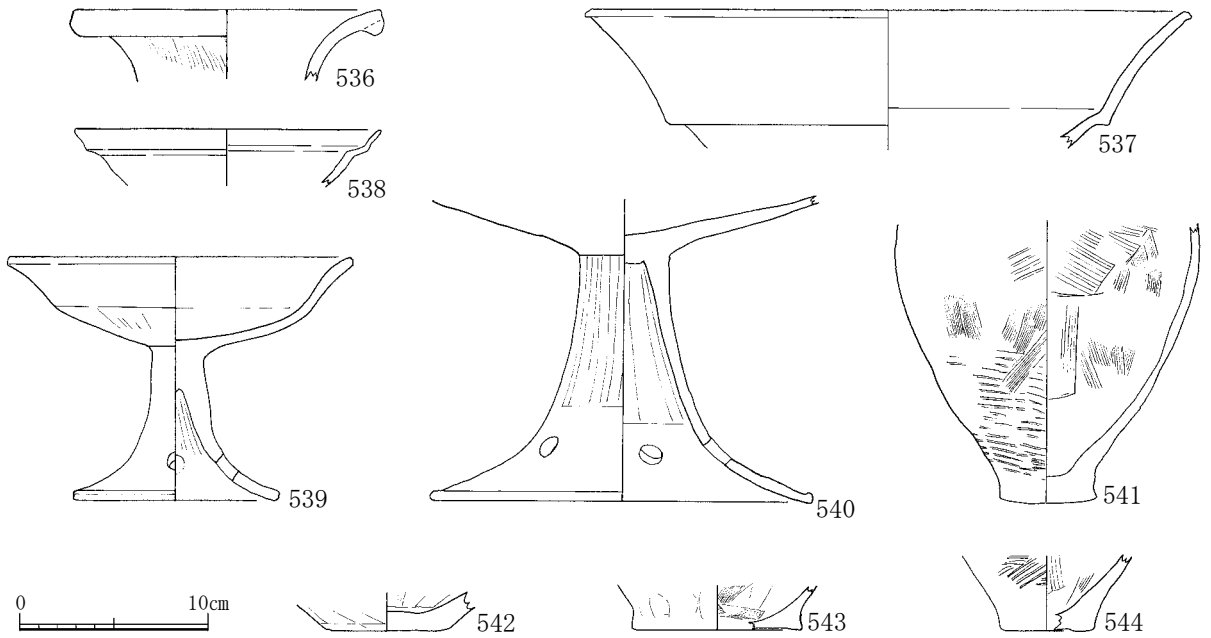
第78図　04－３－２区１ＳＫ、13ＳＤ出土遺物実測図



第79図　04－３－２区165ＳＤ、２ＳＫ出土遺物実測図



第80図　04－３－３区15ＳＫ、24ＳＫ出土遺物実測図



第81図　04－３－３区第４面3001ＳＤ出土遺物実測図

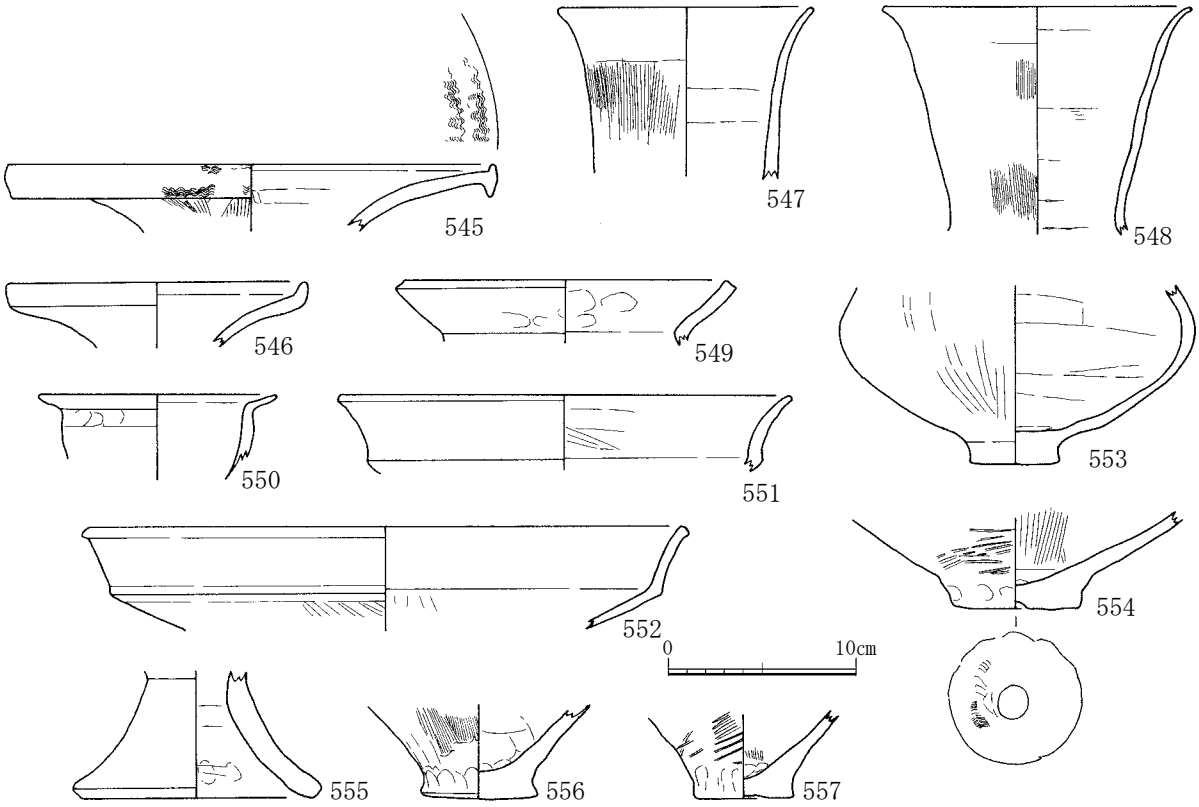
る面をつくる。口縁端部は波状文、頸部は直線文、頸部下端に簾状文を描く。527は甕口縁部で、口縁部を斜めに摘み上げ、端部を丸く収める。口縁端部外面は強くヨコナデする。内面にハケメが残る。528は壺口縁部で二重口縁のもの。外反する口縁部を僅かに内傾気味に立ち上げる。口縁端部は水平な面をつくる。529は甕底部。530は瓦質羽釜の鍔から口縁部。短く開く鍔に口縁部は内傾気味に立ち上がり、微かな段をつくる。526～529は165ＳＤ、530は２ SK出土。

04－３－３区15ＳＫ、24ＳＫ 出土遺物（第80図）

531、532は甕の口頸部。531は口縁端部を摘み上げ、外傾する面を強くヨコナデする。532は口縁端部を垂下させ、外傾する面をつくる。533～535は高坏脚部で、「ハ」字形の脚部から外反して開く裾部をつくる。

04－３－３区3001ＳＤ出土遺物（第81図）

536は外反して開く壺口縁部で、口縁端部は垂下する面をつくる。537、539、540は高坏。537は外反気味に開く高坏の口縁部で、端部は外傾する面をつくる。内外面ともヨコナデで仕上げている。539は斜めに開く杯部から外弯して立ち上がる口縁部をつけ、口縁端部は丸みを持つ面をつくる。脚部は円錐形の筒部から「ハ」字形に開く裾部をつくり、裾上端に透孔を４ヶ所あける。



第82図　04－３－３区3002ＳＤ出土遺物実測図

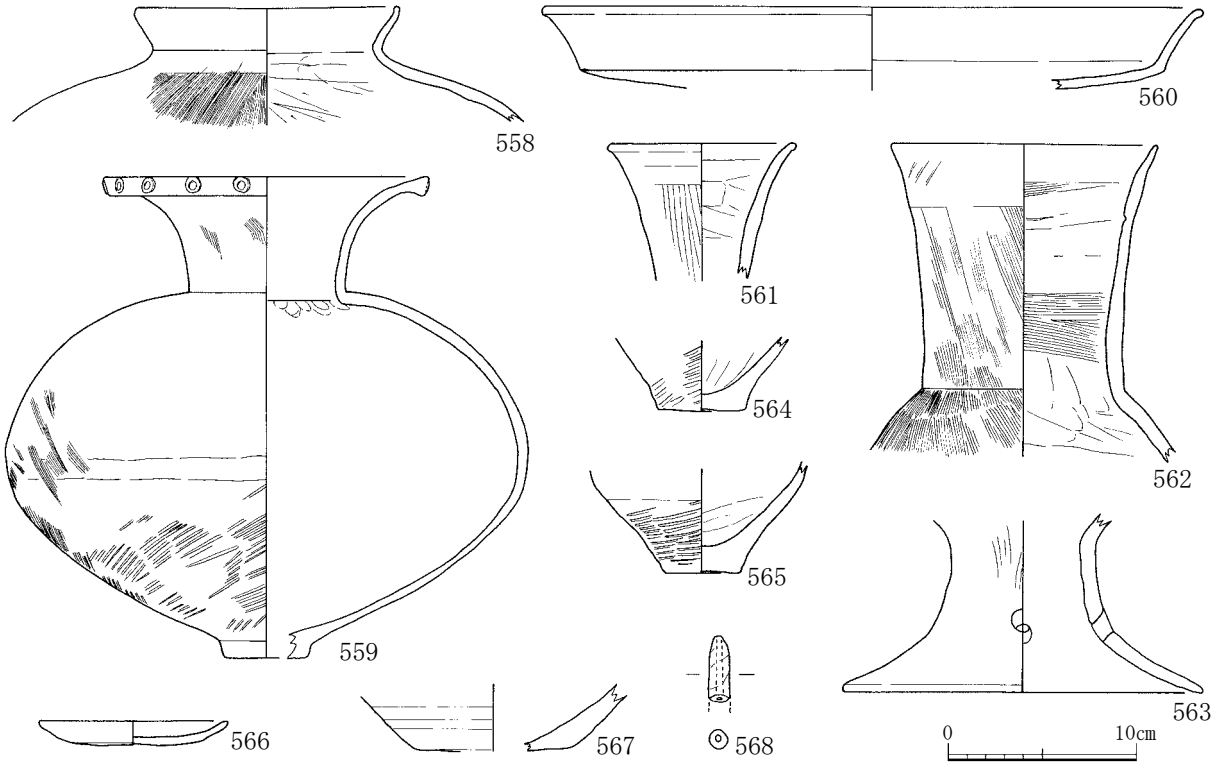
540は筒型の脚部でなだらかに開く裾部をつくり、透し孔３孔をあける。538は口縁部が屈曲して立ち上がる鉢の口縁部である。口径16.2㎝。541は甕胴部で、膨らみは小さい。体部はタタキの後部分的にハケメで調整する。内面はハケメの後ナデで調整する。542～544は底部である。

04－３－３区3002ＳＤ出土遺物（第82図）

弥生時代後期の土器が出土している。545～548は壺の口縁部。545は大きく外反する広口壺の口縁部で端部を上下に拡張させ、外面に波状文を描く。546は受口状の口縁部。外弯気味に水平近くまで開く口縁端部を摘み上げ、丸くおさめる。547，548は長頸壺の口縁部で、端部を僅かに外反させ、547は外傾する面をつくる。外面はハケメ調整である。549、550は甕で、549はく字形に開く口縁部破片。550は頸部が括れず、「く」字形に折れる口縁部をつくり、端部は丸くおさめる。551、552は高坏の杯部で、斜め上に開く杯部に外反気味に立ち上がる口縁部をつくる。552は口縁端部に外傾する面をつくる。553、554は壺同底部。553は球形に近い胴部で、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメの後ナデ調整。554は粘土紐で底面をつくるもので、底面中央に窪みがあり、ハケメの痕跡がある。555は短く外反して開く脚部。556、557は底部破片である。

04－３－３区包含層出土遺物（第83図）

558、559は壺。558は大きく膨らむ胴部に短く開く口縁部をつけるもの。頸部内面はナデ、胴部内面はヘラケズリする。559は玉葱形の胴部に、短く立ち上がる頸部から大きく外反する口縁の端部を下に拡張させるもの。口縁端部は垂下する面をつくり、二重円形浮文を貼る。胴部はハケメ、底部はタタキで調整する。560は高坏で、水平に開く杯部から外反して立ち上がる口縁部



第83図　04－３－３区包含層出土遺物実測図

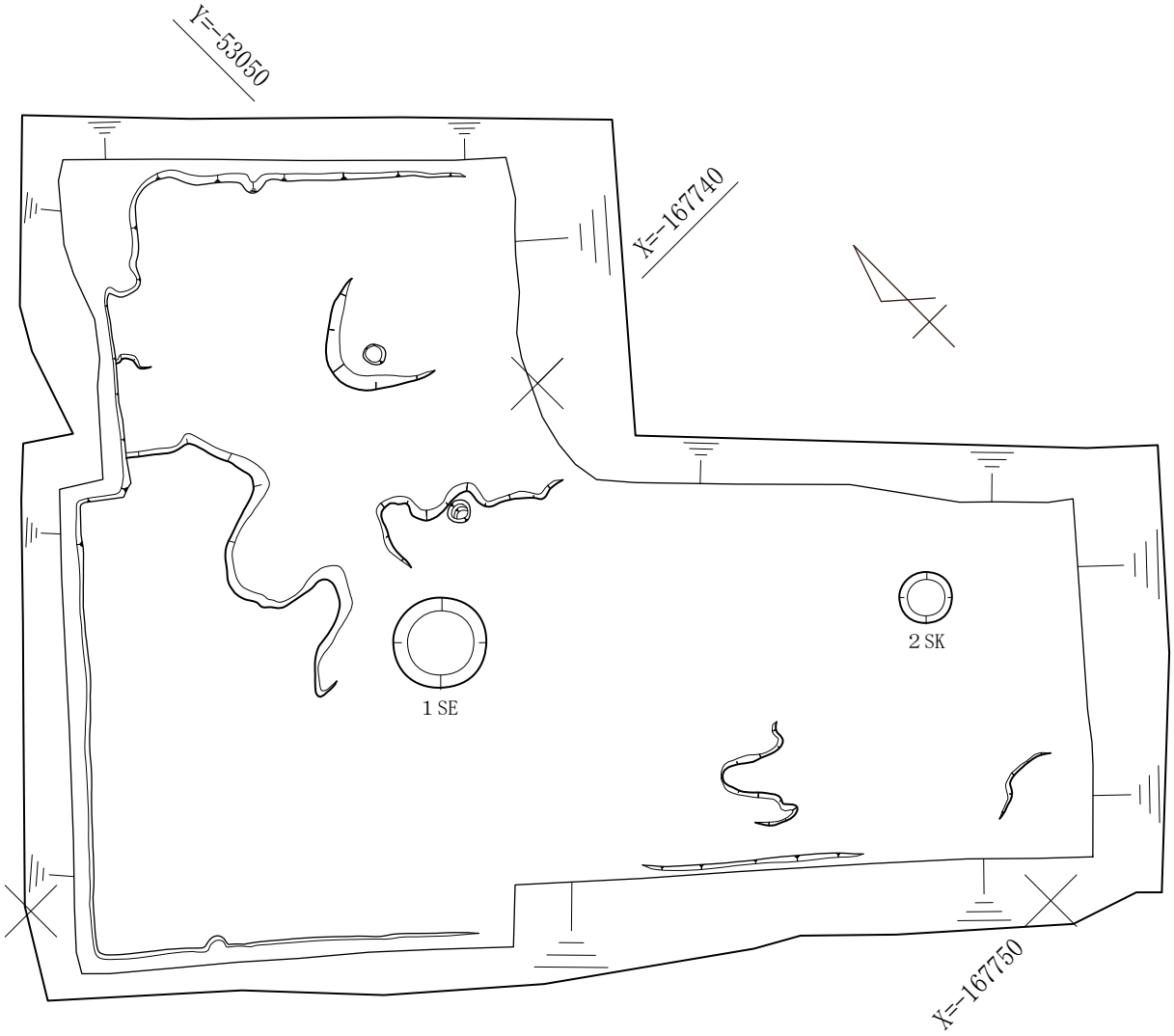
をつける。561、562は長頸壺の口縁部である。561は外反気味に開いて立ち上がる。口縁部はヨコナデ､頸部外面はヘラミガキ､内面はナデで調整する。562は僅かに開いて立ち上がる口頸部で、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、頸部から肩部はハケメで仕上げる。563は器台。筒部から外反して開く裾部をつくる。裾上端に透し孔を４カ所あける。底径19㎝。　564、565は甕の底部である。566は土師器小皿で口径10㎝。567は須恵質の鉢底部である。568は土錘で、腹径1.1㎝。

３．05－２区

調査地は府中病院南西隅の西に隣接する。調査区が12ｍ×16ｍと狭小であるため、土砂搬出用トラックの駐車範囲をとりあえず調査範囲から除外した。調査地の標高はT.P.18.6ｍを測る。

基本層序は現代の盛土が1.0ｍ、黒色土が0.2ｍ、灰黄色土が0.2ｍ、黄灰色土が0.1ｍ、灰色砂が0.1ｍ、茶灰色砂が0.2ｍで灰黄色粘土となる。灰黄色粘土上面はT.P.16.8ｍを測る。黒色土は近現代の耕作土である。灰黄色土・黄灰色土からは染付や瓦器等の小破片が少量出土した。灰色砂は遺物が殆ど出土しなかった。茶灰色砂は古墳時代の土師器の破片を少量出土した。灰黄色粘土からは遺物が出土しなかった。

遺構は灰黄色土上面で井戸と土坑､灰黄色粘土上面で窪みや段差を検出した。１ＳＥは直径1.2ｍの円形で、深さは1.0ｍ以上を測る。埋土最上層でコンクリートの井戸枠の破片が出土したため単独での掘削はしなかった。井戸枠は抜き取られたようで灰黄色粘土上面までには認められなかった。２ＳＫは直径0.7ｍの円形で、深さは0.2ｍを測る。埋土は黒色土１層で、水田耕作時に掘削されたと考えられるが詳細は不明である。灰黄色粘土上面で検出した窪みや段差は水の流れによると考えられ、茶灰色砂は古墳時代の自然流路内の堆積砂と考えられる。



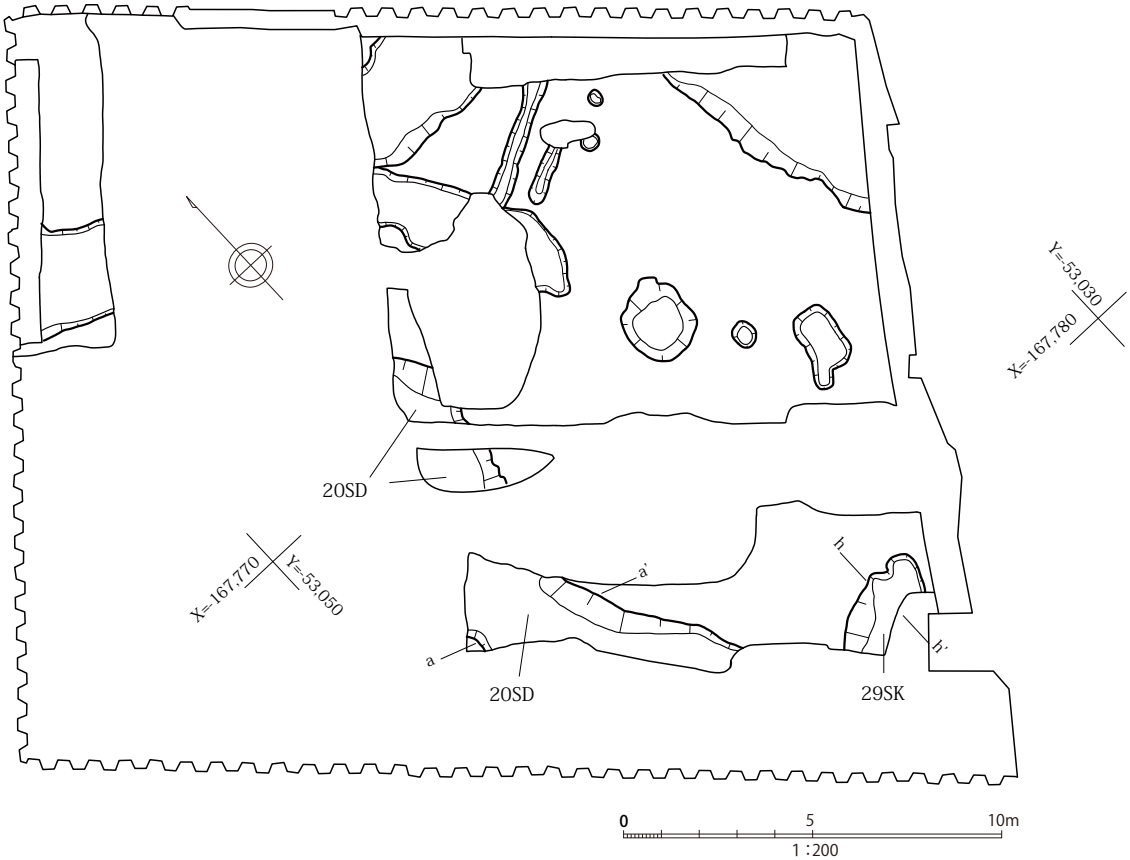
第84図　05－２区平面図

４．06－２区

調査区の位置と土層

当調査区はJR阪和線に接した北西側に位置し、調査面積は約450㎡である。下水道管やガス管の埋設による撹乱が著しく、調査区北東部でのみ遺構検出や土層観察が可能であった。

調査時における標高は約T.P.18.7ｍであり、道路アスファルト及び盛土など約1.0ｍを機械掘削で除去した後、発掘調査に着手した。



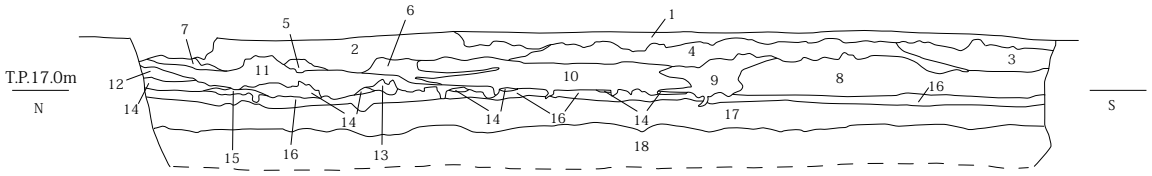
第85図　06－２区調査区平面図

土層図は、比較的残りの良い東壁と北壁において作成した。なお、地表面よりT.P.17.6ｍまでは近現代の盛土であった。

近現代の盛土を除去したT.P.17.6ｍを精査すると灰黄褐色土と黒褐色土が調査区のほぼ全面に広がるのを確認できた。土層観察によると、黒褐色土が凹凸を有して堆積し、その凹部に灰黄褐色土が堆積していた。灰黄褐色土と黒褐色土の上面で遺構を検出しており、それぞれ第１遺構面、第２遺構面としている。

黒褐色土は0.2～0.4ｍの厚さで堆積しており、層中からは土師器や須恵器が出土している。

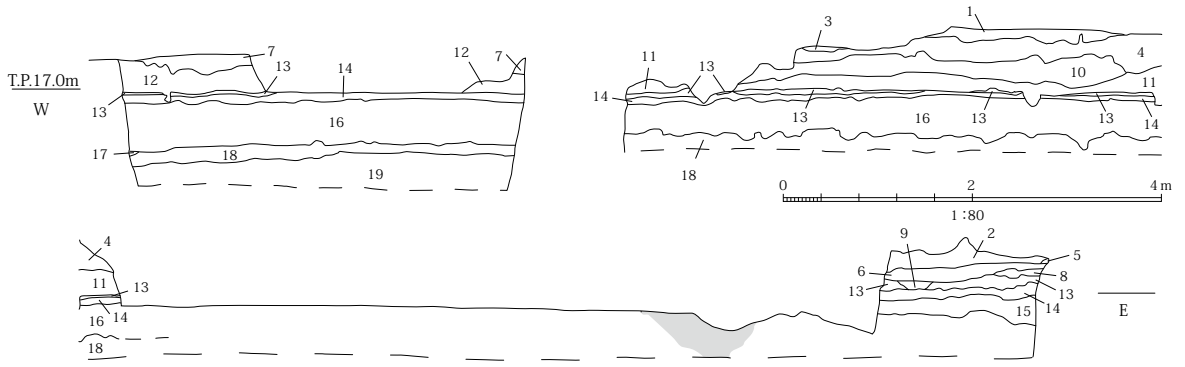
黒褐色土の下には厚さ約0.8ｍ程度の砂礫層が堆積しており、調査区全域を覆っていた。層中には土器片が多数含まれていた。砂礫層を除去すると、南北方向と東西方向の流路跡を確認できた



1.10YR5/2灰黄褐色砂混じり土層
2.10YR3/1黒褐色土(26SD)
3.10Y6/1灰色砂礫層
4.10YR3/1黒褐色土
5.10YR3/2黒褐色粘質シルト(遺構34SD)
6.10YR3/2黒褐色微砂層(34SD)
7.10YR4/2灰黄褐色砂質土
8.10Y6/1灰色砂礫層
9.2.5Y6/1黄灰色砂層(34SD)
10.10YR5/1褐灰色砂礫層(34SD)
11.10YR4/2灰黄褐色シルト混じり砂層(34SD)
12.10YR6/1褐灰色砂礫層(34SD)
13.10YR5/1褐灰色砂混じりシルト
14.2.56/4にぶい黄色粘質シルト
15.10Y5/1灰色砂礫層
16.10YR4/1褐灰色砂質シルト
17.10YR5/2灰黄褐色シルト
18.2.5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト

0 2 4m
1:80

第86図　06－２区東壁断面図



1.10YR5/2灰黄褐色砂混じり土
2.10YR3/1黒褐色土(26SD)
3.7.5Y6/1灰色砂質土
4.10YR3/1黒褐色土層
5.10YR4/2灰黄褐色シルト混じり砂礫層(遺構34SD)
6.10YR6/1褐灰色砂礫層(34SD)
7.10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルト
8.10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト(34SD)
9.2.5Y6/4にぶい黄色砂混じりシルト(34SD)
10.10YR5/1褐灰色砂礫層
11.10YR5/2灰黄褐色砂礫層
12.7.5YR5/2灰褐色砂礫層
13.2.5Yにぶい黄色粘質シルト
14.10YR 4 /1褐灰色砂質シルト
15.10YR5/2灰黄褐色シルト
16.10YR5/2灰黄褐色粘質シルト
17.5GY5/1暗オリーブ灰色粘質シルト
18.2.5GY5/1オリーブ灰色シルト
19.2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂層
※トーン部分は炭化材集中箇所

第87図　06－２区北壁断面図

(34ＳＲ・35ＳＲ)。

砂礫層の下層には、にぶい黄色の粘質シルト層と褐色砂質シルトが各々約0.1ｍの厚さで堆積しており、これらもほぼ調査区全体に認められた。

これより下層のT.P.16.0ｍ付近までシルトや砂礫が堆積している様子を確認したが、明確な遺構は検出されなかった。

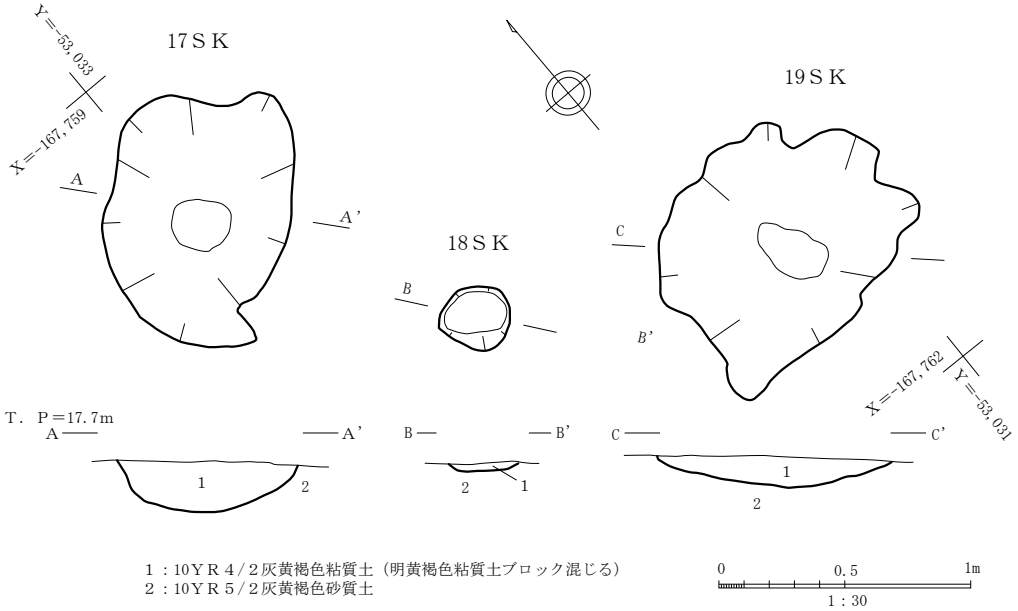
第１遺構面

T.P.17.6ｍ付近の灰黄褐色土層上面で遺構が検出されており、これを第１遺構面とした。

遺構は調査区東部で検出された３基の土坑である。17ＳＫは長径0.9ｍ短径0.3ｍ深さ0.2ｍ、18ＳＫは直径0.2ｍ深さ５cmと非常に浅く、19ＳＫは長径1.2ｍ短径0.9ｍ深さ0.15ｍで不定形を呈していた。

埋土はいずれも灰黄褐色の粘質土である。これら３基の遺構は全て灰黄褐色土層上面から掘削されていること、埋土が共通していることから同一時期の遺構と考えている。各遺構から土器の小片が出土しているのみで、時期を確定するには至らない。

灰黄褐色土層中からは、布留甕の口縁部から肩部にかけての個体（597）が１点出土している。直上は近現代の盛土などであり、直下の黒褐色土層中から須恵器片や土師器片が出土してい



第88図　06－２区17・18・19ＳＫ平面・断面図

ることから、古墳時代以降の遺構面であると考えられるものの、詳細な時期は確定できない。

第２遺構面

黒褐色土層上面で複数の土坑及び溝が検出されたため、これを第２遺構面とした。遺構が検出されたのは撹乱を免れた調査区北東部分である。

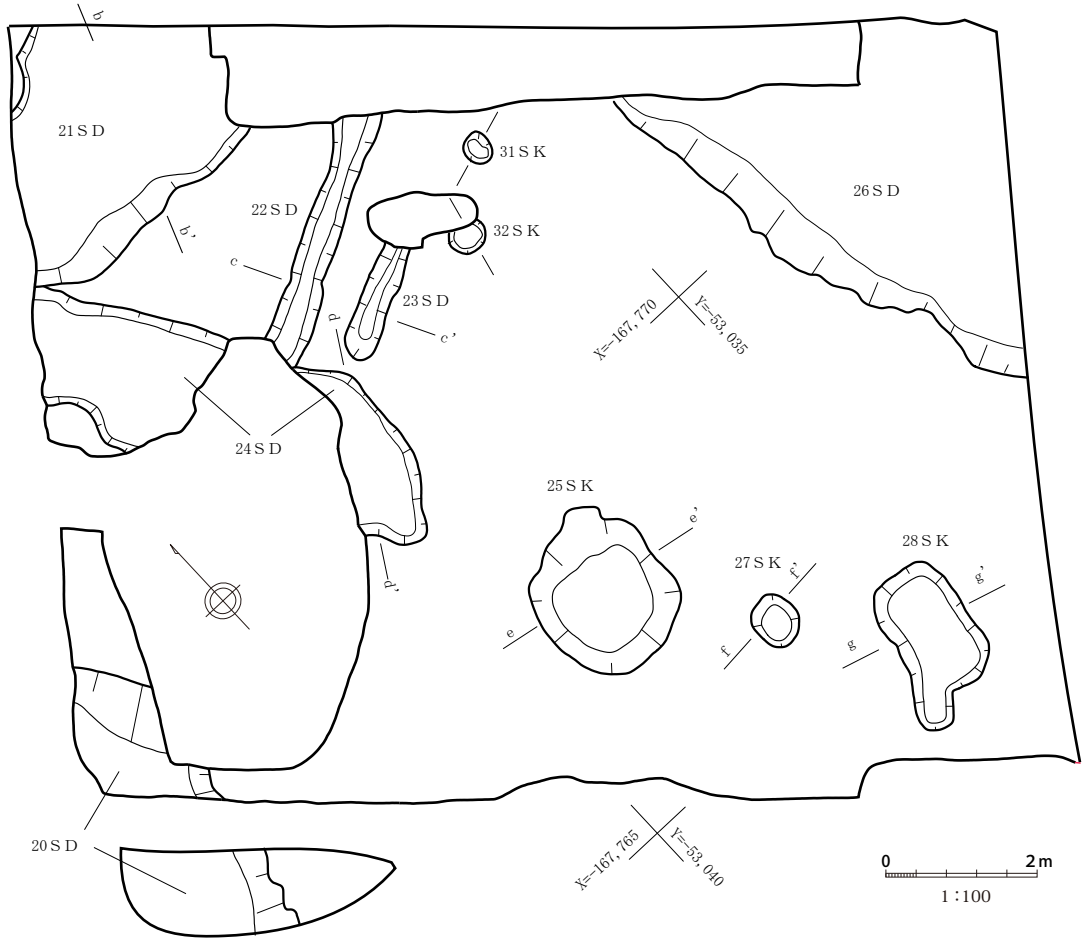
20ＳＤはそのほとんどを撹乱により破壊され、当初一連の遺構と捉えられなかった。しかし、埋土がほぼ同じ砂混じりシルトであり、その断面形状も似ていることから同一の遺構と考え報告する。結果、調査区の南から北西方向に蛇行する、幅約３ｍ深さ0.1～0.2ｍの流路と考える。埋土から遺物は出土しなかった。

21ＳＤは調査区北側で検出された幅約2.6ｍで深さ0.1ｍの浅い遺構である。東側は調査区外に、西側は撹乱により破壊されている。土師器の小破片が出土している。

22ＳＤは調査区北東部で検出された幅0.4ｍ～0.6ｍで深さ0.1ｍの遺構である。検出した長さは3.4ｍで南北端は撹乱により破壊されている。埋土からは土師器と須恵器が出土しているものの小片であり詳細な時期はわからない。

23ＳＤは22ＳＤの南側に0.5ｍほど離れて検出された。幅0.4ｍ深さ0.1ｍで22ＳＤと平行し、ほぼ同じ規模であるため互いに関連のある遺構と思われる。遺構北東端は撹乱で破壊されており、全長は不明である。遺物は土師器の小片が出土している。

24ＳＤは検出した長さ6.0ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.3ｍの遺構である。遺構北西端は撹乱で破壊されており全形は不明である。埋土から土師器小片が出土している。



第89図　06－２区第２面平面図

なお、調査区北西部分でも流路と思われる遺構の一部を検出しており、20ＳＤ・21ＳＤ・24ＳＤのどれかに該当する可能性が高いと思われる。

25ＳＫは調査区中央やや東側で検出された深さ0.2ｍで径１ｍの土坑である。埋土は２層に分かれ上層は暗灰黄色シルト、下層は黒褐色シルトであり、そこから土師器高杯の脚部（584）が出土している。

26ＳＤは調査区東端で検出された溝状遺構で、西側の肩部しか確認できていない。深さは0.3～0.4ｍで、埋土は砂混じりの黒褐色土である。埋土からは、叩きが施された甕の胴部（586）や弥生時代の鉢の口縁部（587）などが出土している。

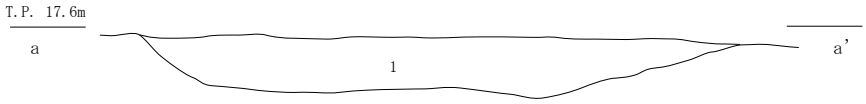
27ＳＫは25ＳＫと28ＳＫの間で検出された径0.7ｍ、深さ0.2ｍの土坑である。遺物は土器小片が出土している。

28ＳＫは調査区東で検出された土坑である。長辺1.8ｍ、短片1.1ｍ、深さ0.1ｍと浅く、埋土は砂質土で遺物は土器の小片が出土している。

29ＳＫは調査区南側で検出された長さ2.7ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.2ｍの土坑であるが、破壊部分が多く、埋土からも遺物は出土していない。

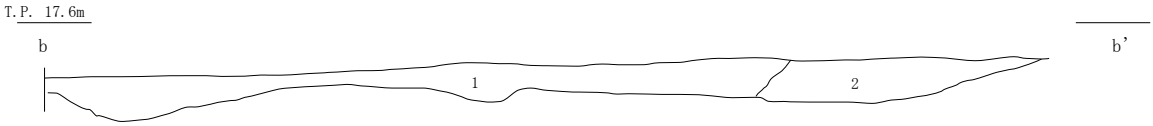
第２遺構面のベースとなる黒褐色土からは、土師器の小形丸底壺（589）や高杯の口縁部（590、591）、脚部（592）のほか、小型の壺と思われる須恵器胴部（603）が出土している。これは、肩

20ＳＤ



1:2.5Y4/1暗灰黄色砂礫混じり土

21ＳＤ

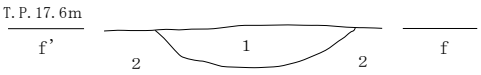


1:2.5Y4/1暗灰黄色砂礫混じり土　2:2.5Y3/1黒褐色砂混じり土

22ＳＤ　23ＳＤ

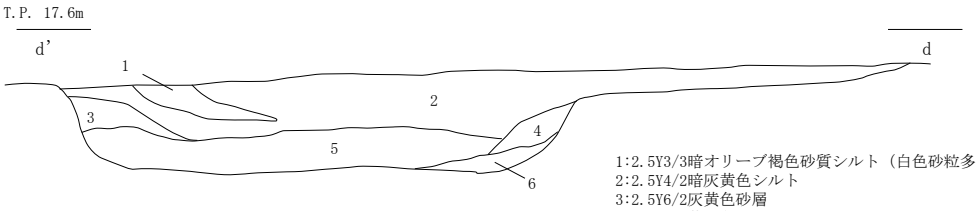
1:2.5Y4/1暗灰黄色砂質土

27ＳＫ



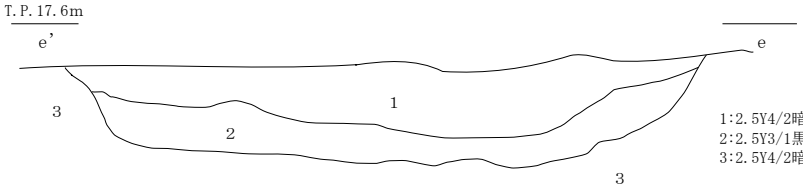
1:2.5Y3/1黒褐色砂混じり土
2:2.5Y4/2暗灰黄色砂層（粗砂）

24ＳＤ



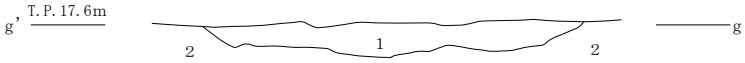
1:2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト（白色砂粒多く含む）
2:2.5Y4/2暗灰黄色シルト
3:2.5Y6/2灰黄色砂層
4:2.5Y5/1黄灰色砂礫土層（径1～5mmの礫混じる）
5:2.5Y3/2黒褐色粘質シルト
6:2.5Y3/2黒褐色粘質シルト（炭入る。砂礫混じる）

25ＳＫ



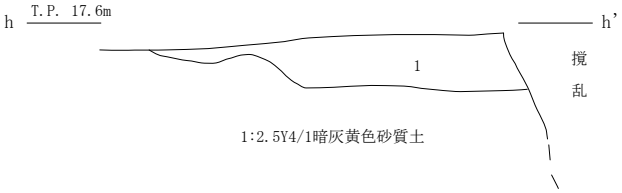
1:2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（砂礫混じる）
2:2.5Y3/1黒褐色砂礫混じりシルト(炭少量混ざる)
3:2.5Y4/2暗灰黄色砂層

28ＳＫ

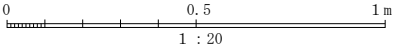


1:2.5Y4/1黄灰色砂混じり土
2:2.5Y4/2暗灰黄色砂層（粗砂）

29ＳＫ



1:2.5Y4/1暗灰黄色砂質土



第90図　06－２区各遺構断面図

部に２段の文様帯を設け、上段を刻目状の、下段に波状文の文様を施している。断面は赤紫色を呈し、外面は全面にナデが施され、全体的に薄くシャープな作りである印象を受ける。おそらくTK208 ～216型式に該当するものであろう。

以上のことから第２遺構面は古墳時代中期後半を上限とすると考えられる。

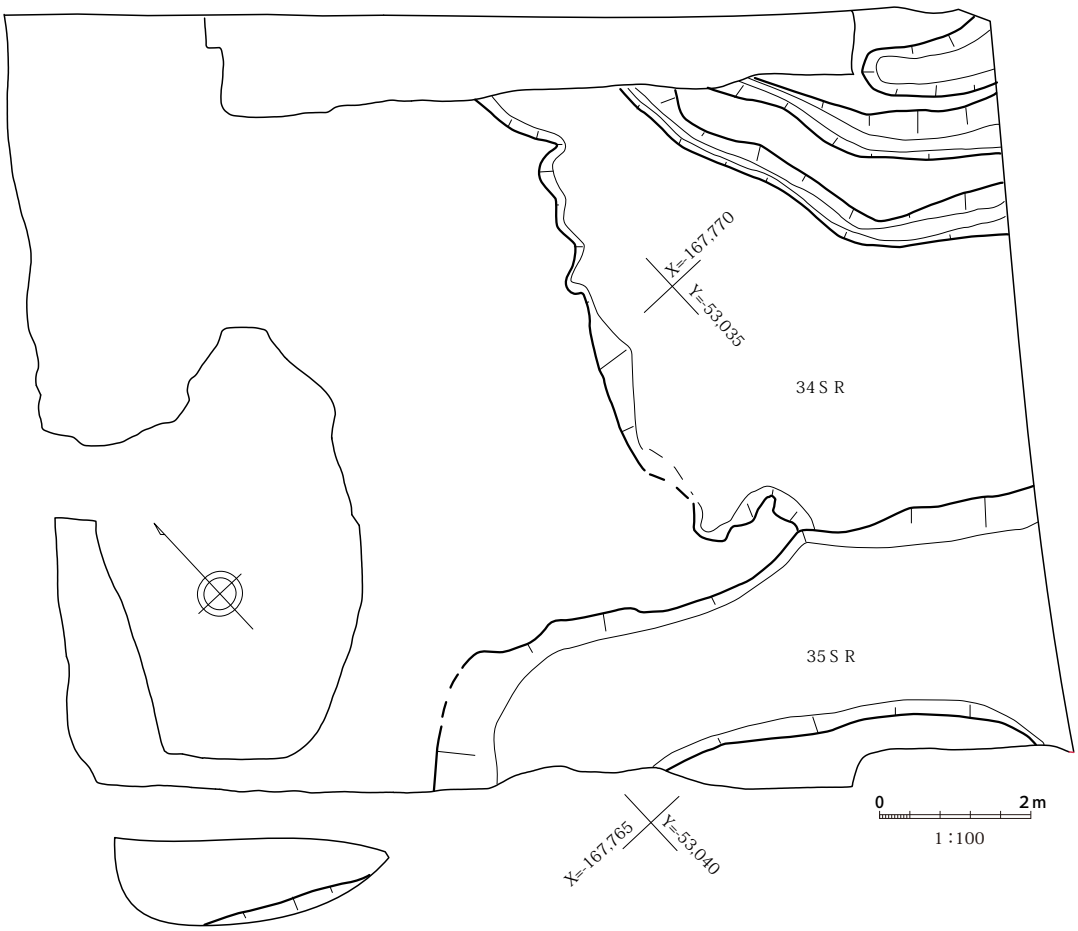
砂礫層と34ＳＲ、35ＳＲ

第２遺構面のベースとなる黒褐色土層の下層には約0.8ｍの厚さで砂礫層が調査区全体を覆っており、この砂礫層が堆積した後、一定の時間をかけて黒褐色層が形成されたと思われる。

調査区全体を覆っていた砂礫層を掘削すると、南北方向と東西方向の流路跡を確認することができた。

これらの流路はいずれも近似した様相の砂礫が埋土であり、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。ただ、埋土である砂礫の平面観察によって、南北方向の流路が先行し、東西方向の流路は後から生じていることがわかり、南北方向の流路を34ＳＲ、東西方向の流路を35ＳＲとした。

なお、34ＳＲを掘削した結果、調査区東端で複数の流路跡を確認している。これらは、埋土や検出状況から34ＳＲと一連のものと考えられる。

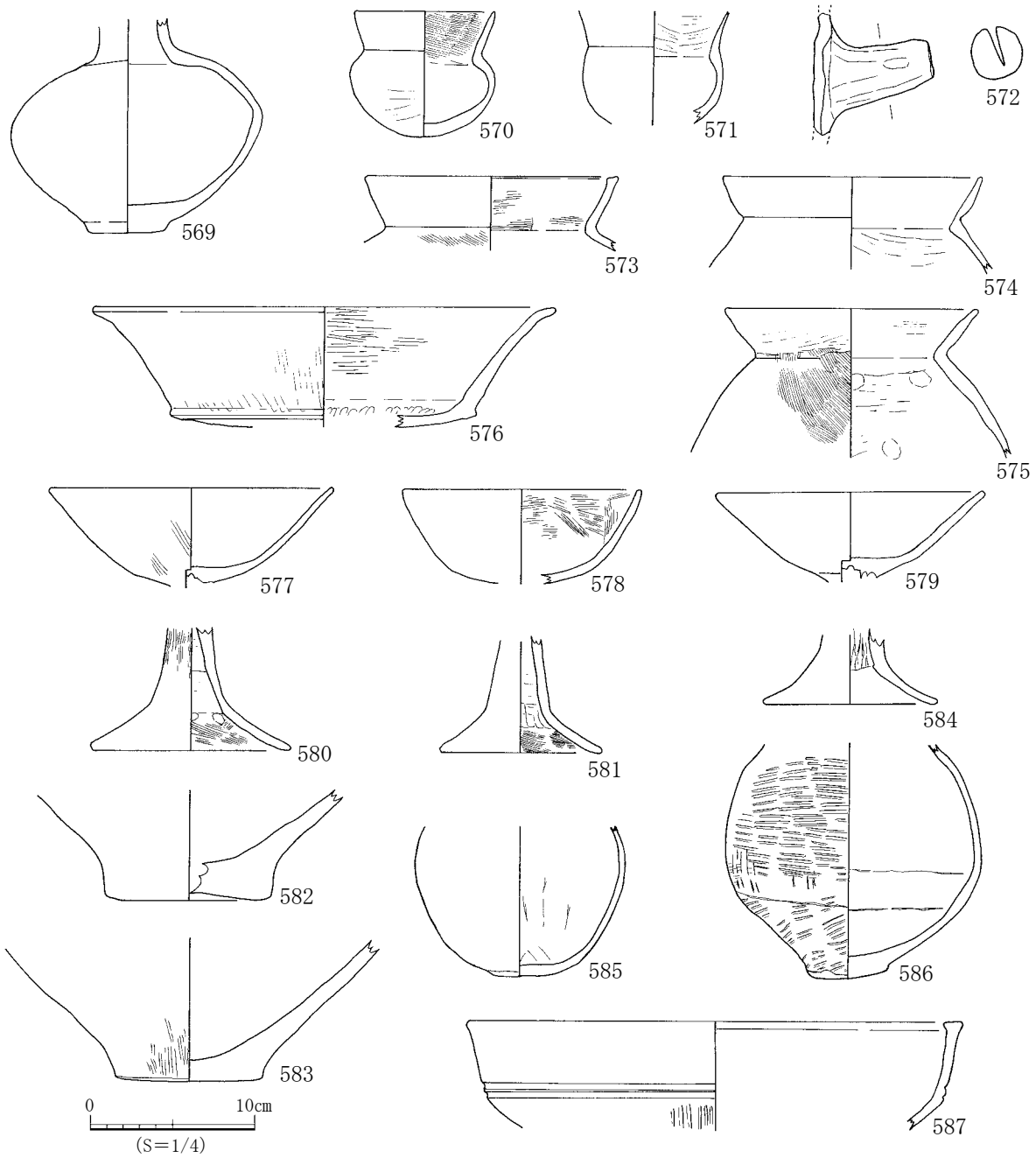


第91図　06－２区第３面平面図

34ＳＲの砂礫層中から細片となった土師器が多く出土したが、底面に近いT.P.17.1ｍでは甕、小型丸底壷、高坏、甑の把手など、図化が可能な土師器が出土した（569～583）。一方、それらの中には磨耗が著しく残りも悪いものの、弥生時代の壷の胴部（569）や底部（582、583）も含まれている。

土師器が多く含まれている34ＳＲに対し、35ＳＲから図化できる遺物は出土しておらず、この様相の差異が何に起因するのか判然としない。

砂礫層からは他にも遺物が出土している（588、594、598、601、602）。その多くが34ＳＲと同じ小型丸底壺（588）や高坏（594）であるが、格子目タタキが施される個体（598）や平底の土



第92図　06－２区出土遺物実測図１　569～583：34ＳＲ、584：25ＳＫ、585～587：26SD

器（601）のように特徴を有するものも出土している。

34ＳＲ、35ＳＲ及び砂礫層から出土した土師器は器壁の磨耗の程度には差があるとはいえ、図化できる個体が一定数存在した。特に、588はほとんど損傷しておらず、比較的近い場所から流されてきたものであろう。

一方、須恵器については図化できる遺物がほとんど見当たらず、出土した量も土師器に比べ非常に少ないことが印象的である。

これが単なる偶然なのか、当該地域周辺の集落における土師器と須恵器のあり方を反映しているのか、今後の調査の進展を待ちたい。

593、595、596、600は、撹乱を除去中に出土したものであり、第１遺構面ベース土である灰黄褐色土あるいは第２遺構面ベース土の黒褐色土層のいずれかより出土したものである。ここでも須恵器は見あたらず、土師器高杯などが主である。

砂礫層より下の層について

砂礫層を除去すると、にぶい黄色粘質シルト及び褐灰色シルト層が各々0.1～0.2ｍの厚さで調査区全体に広がることを確認できた。ここでは、遺構は一切確認できず、また層中からも遺物は出土しなかった。

さらに下層では、厚さ約0.4ｍのシルト層が堆積しており、調査区東側においてT.P.16.2ｍ付近まで掘削したが、遺構は確認できなかった。

一方、調査区北側ではT.P.15.9ｍ付近まで掘削し、シルト層の下に砂礫層が堆積しているのを確認した。

遺構検出は、T.P.15.9ｍ付近で断念したが、当調査区はガス管や下水道管などによる撹乱が縦横無尽にあり、その撹乱壁面を利用して、より下層の確認を行うことができた。最も深く、土層確認を行うことができたのは、下水道管埋設により生じた撹乱壁面を利用したものであり、調査区北側で実施した。

その結果、T.P.15.7ｍ付近で厚さ0.2ｍの粘質シルト層を確認し、T.P.15.5ｍ以下は砂礫層であった。T.P.14.9ｍで湧水が生じたため、掘削を中止し土層観察を断念した。

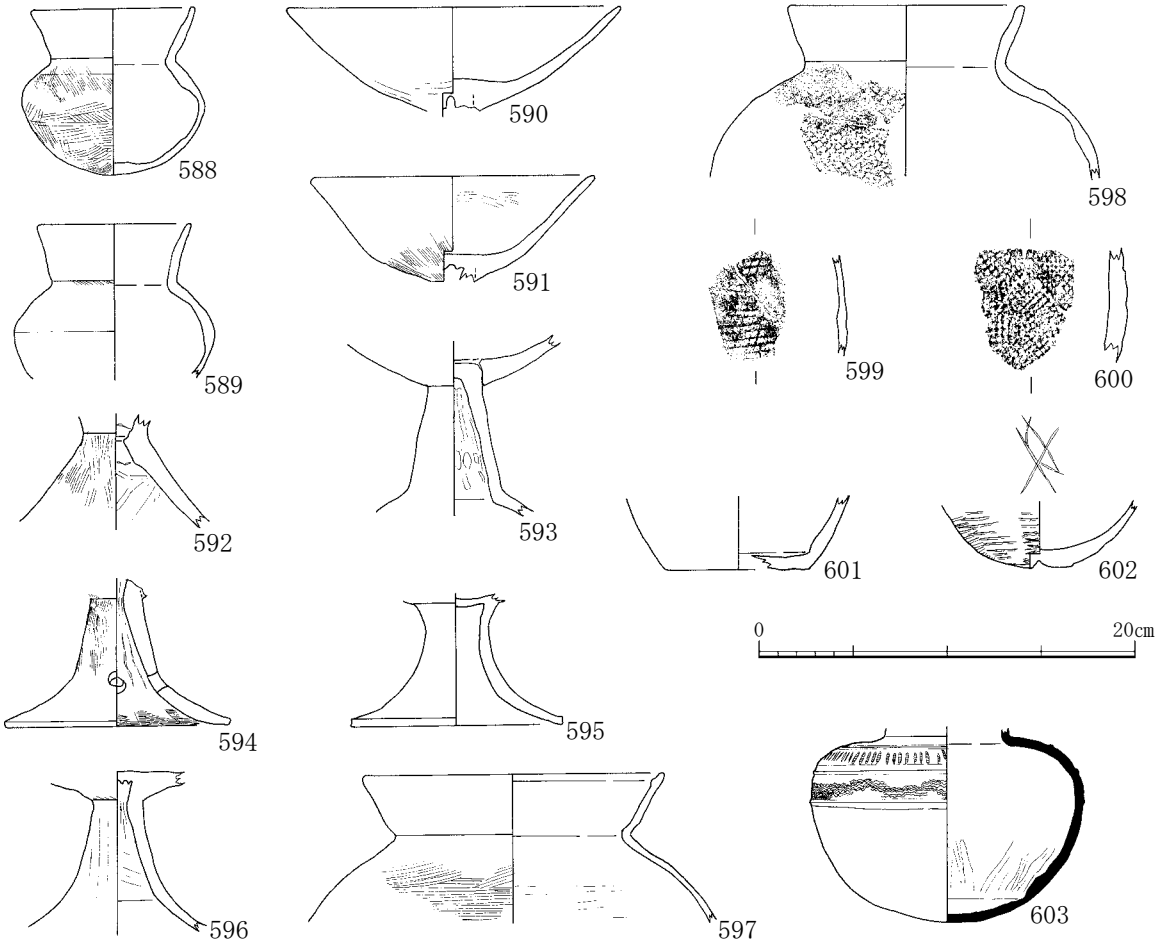
掘削途中に２点の土器片が出土したがいずれも小片で調整も観察できないものであった。ただし、胎土は非常に粗く色調も暗茶褐色を呈するなど、周辺の調査で出土した縄文土器片に似ている。

なお、調査区北東側（第87図北壁土層トーン部分）において炭化材が集積している地点を図示した。平面検出時において、炭化材が分布する様相から土坑あるいは流路状の遺構の存在を予想し、平面精査を繰返しつつ掘削を行なったが、遺構の存在を明らかにすることはできなかった。

この炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、縄文時代後期後半の年代に該当する3345±30のC14年代を示した。

一方、T.P.15.7ｍ付近の粘質シルト層にも炭化材が少量含まれていたため、同じく放射性炭素年代測定を行ったところ、縄文時代中期に該当する4390±30というC14年代の分析結果を得ることができた。

今後、これらの層からどのような遺物、遺構が発見されるか注意を要する。

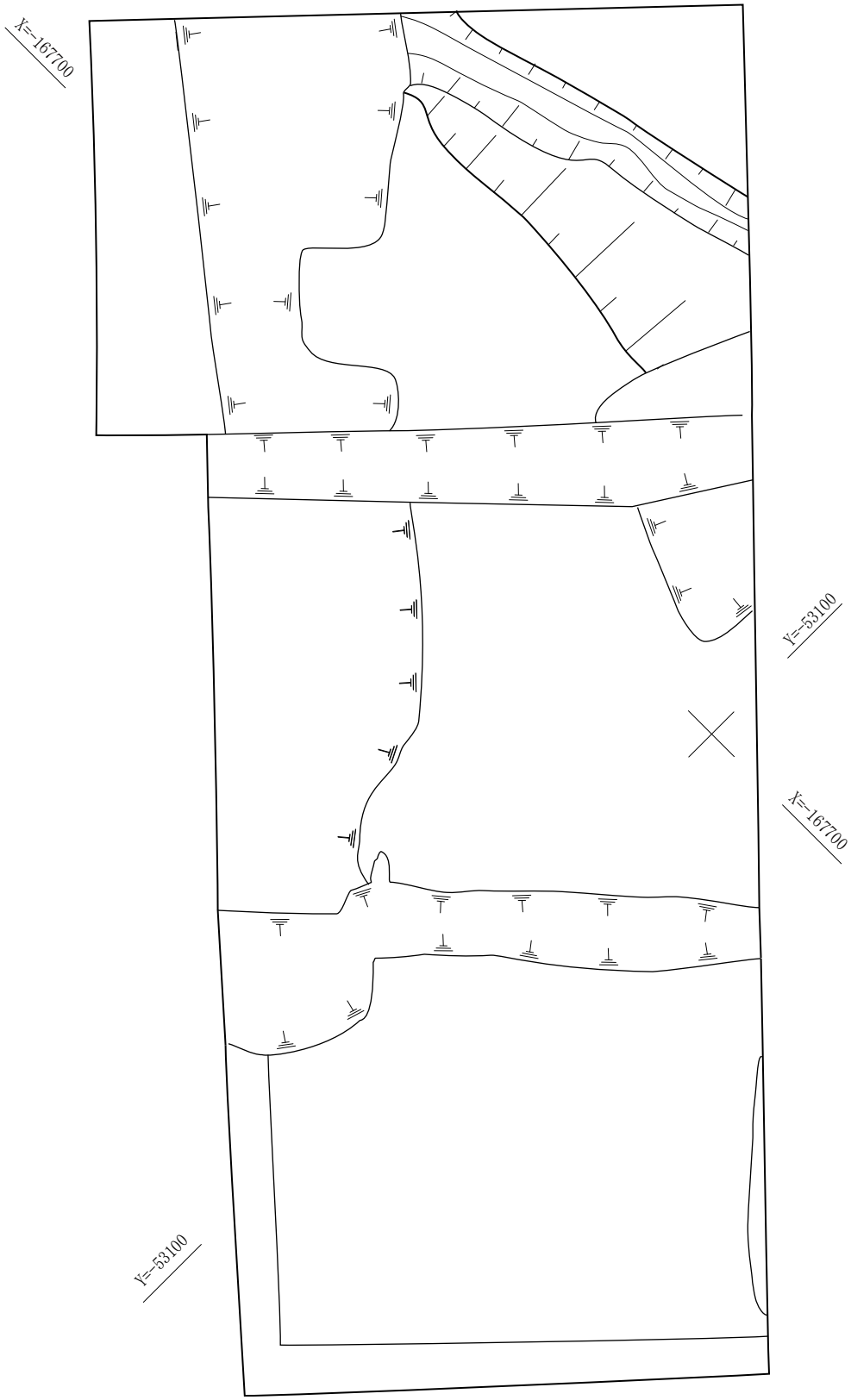


588、594、598、601、602砂礫層、597：灰黄褐色色上層、589ー592、599、603黒褐色土層、593、59546600：不詳

第93図　06－２区出土遺物実測図２

５．07区

07年度は、府中病院付近の道路拡幅予定地で調査を実施した。07－３、07－８、07－19区は府中病院南西側、07－９区は肥子池公園の東側、07－11区は肥子池公園の西北側である。



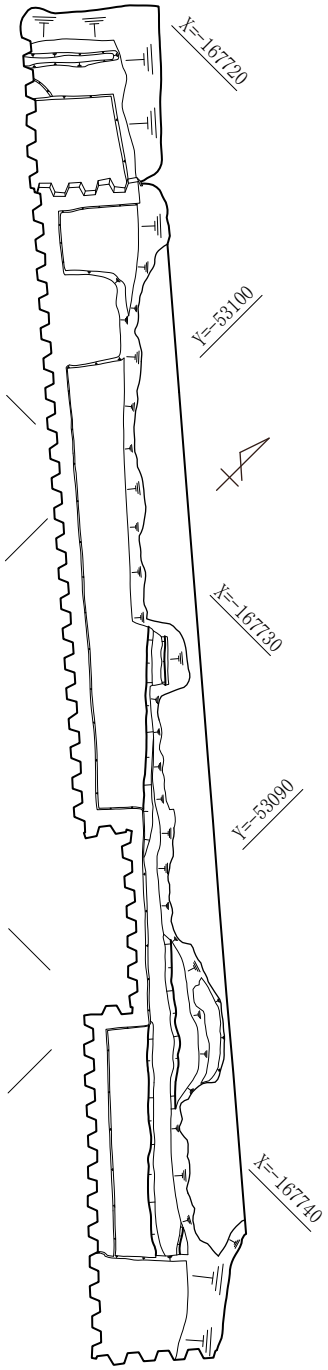
第94図　07－３区平面図

07－３区

府中病院南側の調査区である。

第１面

T.P.18.6ｍ前後にある厚さ0.25ｍの耕土（灰黄褐色土）、0.05ｍの床土（黄色土）が堆積する。この下のT.P.17.25ｍ～17.3ｍに堆積する灰黄色砂混土の上面で、当地の地割に則り、座標北から約43°振った、北西から南東へ走る耕作溝群を検出した。耕作溝は巾0.2～0.5ｍ、深さは0.05ｍ前後で、灰白色土が充填していた。溝内から古墳時代から中世頃の土器細片が出土している。中世後期以降のものであろう。



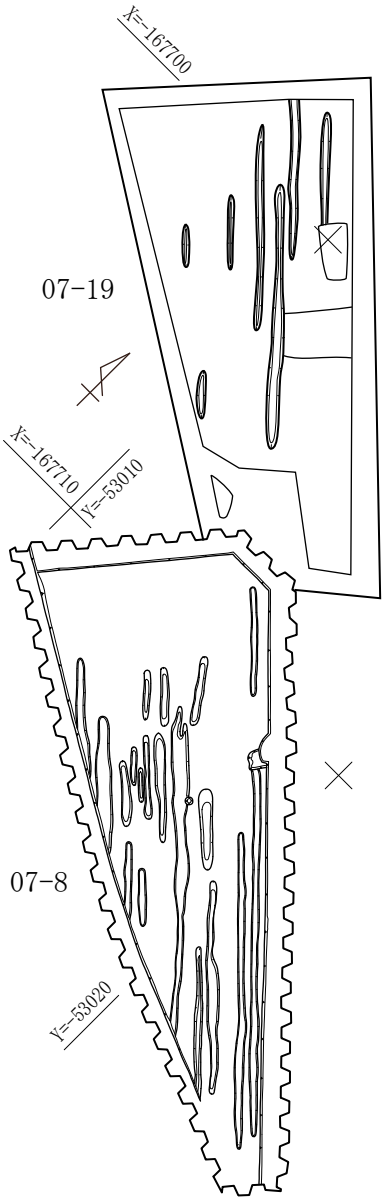
第95図　07－９区第１面平面図（Ｓ＝1/100）

第２面

中近世の遺構面調査後、３層の灰黄色砂混土を掘削し、T.P.17.2ｍ付近の褐灰色粘質土上で面古墳時代の溝を検出した。４層上面調査区北部がなだらかに傾斜しており、北端ではT.P.16.75ｍ以下であった。この面で古墳時代の溝を検出した。

11ＳＤは、傾斜面の肩部で傾斜とほぼ平行するように掘削されていた。溝の巾は1.0～1.0ｍ、深さは0.6ｍを測る。埋土は主に黄灰色粗砂、黒～灰色粘土、灰黄褐色土、灰色シルトであった。溝内から甑や製塩土器、須恵器の高坏などが出土した。

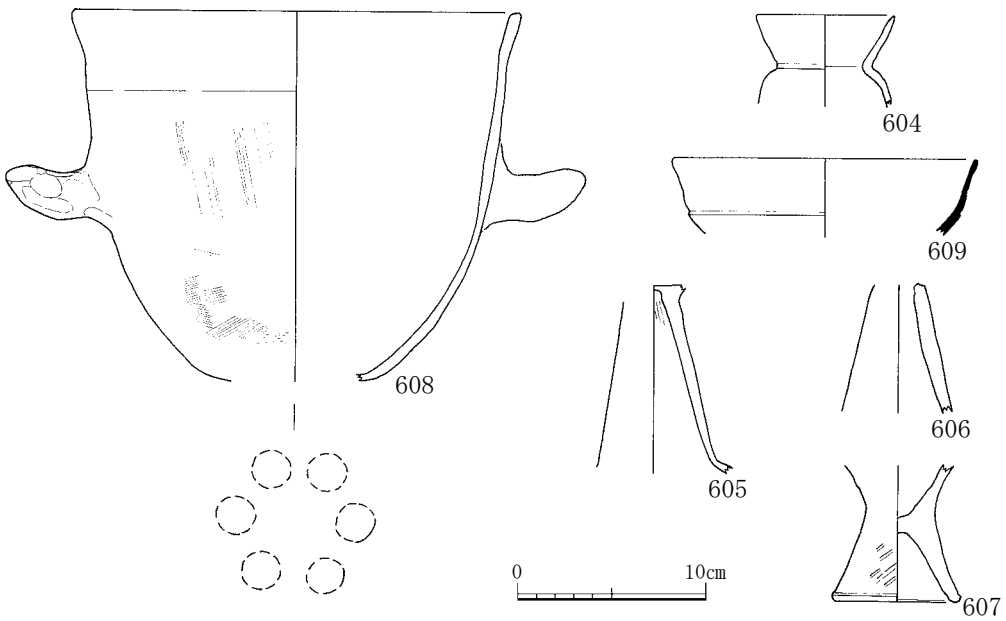
古墳時代面から約0.2ｍ下がったT.P.16.7～16.6ｍ付近の面で、２条の河道を確認した。実測図は掲載しなかったが層位や、08年調査結果から縄文時代の遺構である。



第96図　07－８区、07－19区平面図（Ｓ＝1/100）

07－３区出土遺物（第97図）

604は小型丸底壺で、頸部を強くヨコナデして括れさせる。口径7.3㎝。605、606は高坏の脚部で、裾部は屈折して開く。607は製塩土器の底部で、底径6.6㎝。608は甑。６孔を穿つ小さな底面に、底部は内弯して立ち上がり、胴部はやや開き気味で、中程に把手が付く。口縁部は僅かに外反させ、口縁端部は水平な面をなす。全体に摩耗が進んでいるが、口縁部はヨコナデ、胴部はハケメで調整する。609は須恵器の高坏である。



第97図　07－３区出土遺物実測図

07－７区

府中病院南東側の調査区である。旧耕土面は17.6ｍ前後を測る。床土を除去したT.P.17.35～17.45ｍで北西から南東へ条里地割り則った方向に通る耕作溝を検出した。溝の巾は0.2～0.45ｍ、深さは0.02～0.05ｍであった。耕作溝の間隔は輪郭が明確なものを選択して掘削したこともあり、一定しない。

07－８区

道路南西側拡張部の調査区で、既存構造物の関係で巾1.2ｍ～2.2ｍ、長さ約35ｍの細長い調査区となった。

この地区の土層は、旧耕土下面がT.P.17.5ｍ付近にある。この下は青灰色粘土と灰黄褐色粘質土が0.2ｍ前後の厚さで堆積する。この下の灰色から黄色の砂層は中世の溝の堆積土である。溝のベースは明黄褐色粘土である。

１ＳＤは、T.P.17.2ｍ付近で検出した溝で、この地域の条里に沿って南東から北西方向に走るが、X＝－167732ｍ、Y＝－53096ｍ付近で僅かに北に振っており、調査区外に延びる。幅は0.7～0.8ｍ、深さ0.05～0.12ｍで、埋土は主に灰白色粘土であった。埋土から土師器や須恵器の小片が出土している。後述する07－11区で検出した１ＳＤと規模が似ており、この地域の条里に沿った里道の側溝と考えている。

07－19区

07－３区と８区の間の調査区である。旧耕作土を除去したT.P.17.3ｍ前後と、約0.2ｍ下のT.P.17.3ｍ前後で条里に則った耕作溝を検出した。上面の溝は巾0.25ｍ～0.5ｍ、深さは0.05ｍ前後で、６条を検出した。２層は幅が広くて短く、深さも浅いものが多かった。また、幅が広いのは度々鋤かれていたためで、埋土の色調差で、前後関係が観察できるものもあった。

07－11区

肥子池公園西北側の道路拡幅部で、土砂搬出のスペースを確保するため２回に分け、11区と11ｂ区とした。

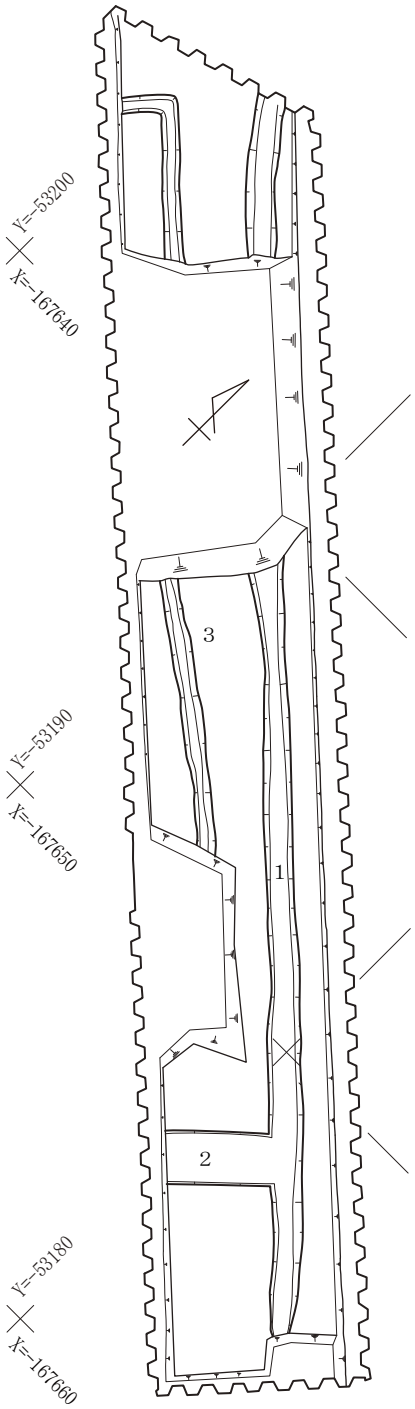
第１面

耕土、床土を除去した、T.P.16.55ｍ付近に堆積する黄褐色粘質土上面で２条の溝を検出した。溝は南東から北西方向へこの地域の条里地割りに対応する。

１ＳＤは調査区の北側にある溝で、幅0.6ｍ～0.9ｍ、深さ0.05ｍ～0.1ｍを測る。土は灰白色砂礫である。肥子池築造時に攪乱されているが、形状から07－９区の01ＳＤと同一溝と考えられる。土師器や瓦器の細片が出土している。

２ＳＤは１ＳＤのＸ＝－167652ｍ、Ｙ＝－53178ｍ付近から直角に南西方向へ延びる溝で、幅1.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。検出長は約３ｍであった。埋土は１ＳＤと同じ灰白色砂礫で、瓦器や土師器の細片が出土している。

３ＳＤは１ＳＤの約1.5ｍ南側に並行する溝で、攪乱により分断されているが、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰白色砂礫である。土師器や瓦器の細片が出土している。北西のＸ＝－167645ｍ、Ｙ＝－53200ｍ付近で直角に南折している。２ＳＤと直接繋がらないが、２、３ＳＤにより１/３町程度の小区画を造っている。溝の両側で畦畔や耕作溝は確認されない。また、染付けが出土していないので、近世初頭以前の屋敷地を囲む溝であろう。



第98図　07－11区第１面平面図

07－11ｂ区ではこの面が削平されたのか確認することがで

きなかった。

第２面

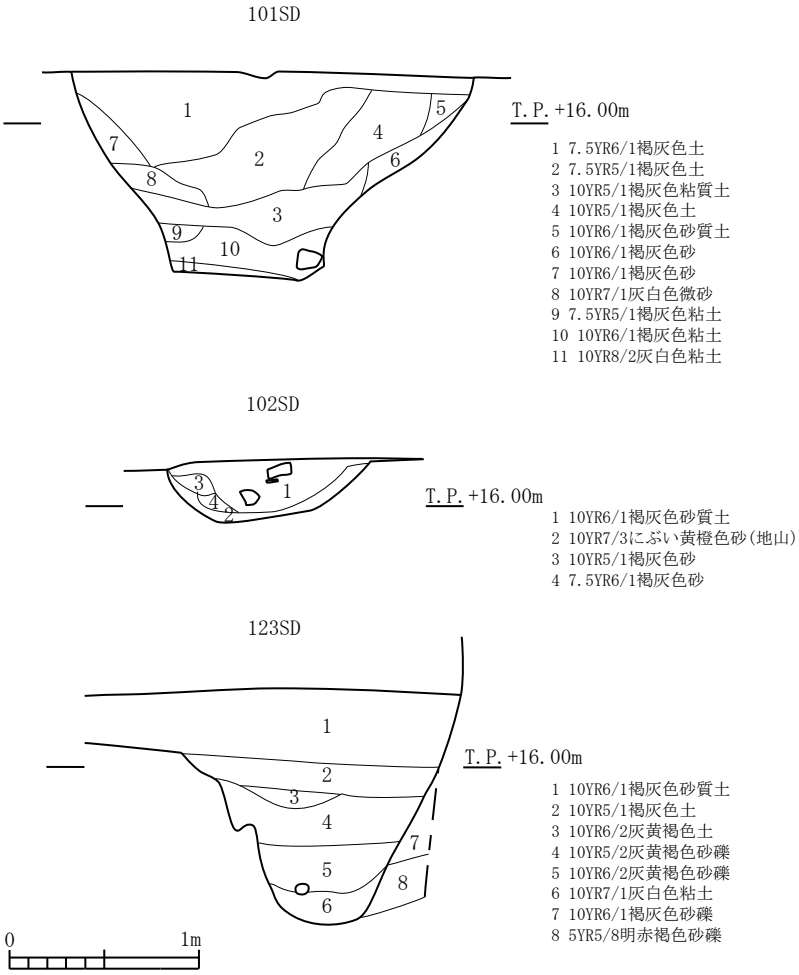
中世上層遺構の下、約0.1ｍ掘り下げたT.P.16.45ｍ付近で、中世の遺構と弥生時代の遺構を同じ面で検出した。西側の07－11ｂ区では第１面を確認できなかった。

11ＳＤは調査区南東端にあり、この地域の地割りと同方向の南東から北西に方向を持つ溝で、X＝－167650ｍ、Y＝－53185ｍ付近でほぼ直角に南西方向に曲がる溝である。幅は1.8ｍ～2.6ｍ、深さは砂礫層を切る南西端で0.3ｍ、北西側では0.2～0.25ｍを測る。埋土は灰褐色土や灰黄色砂礫、明黄褐色粘土で、瓦器や土師器が出土している。

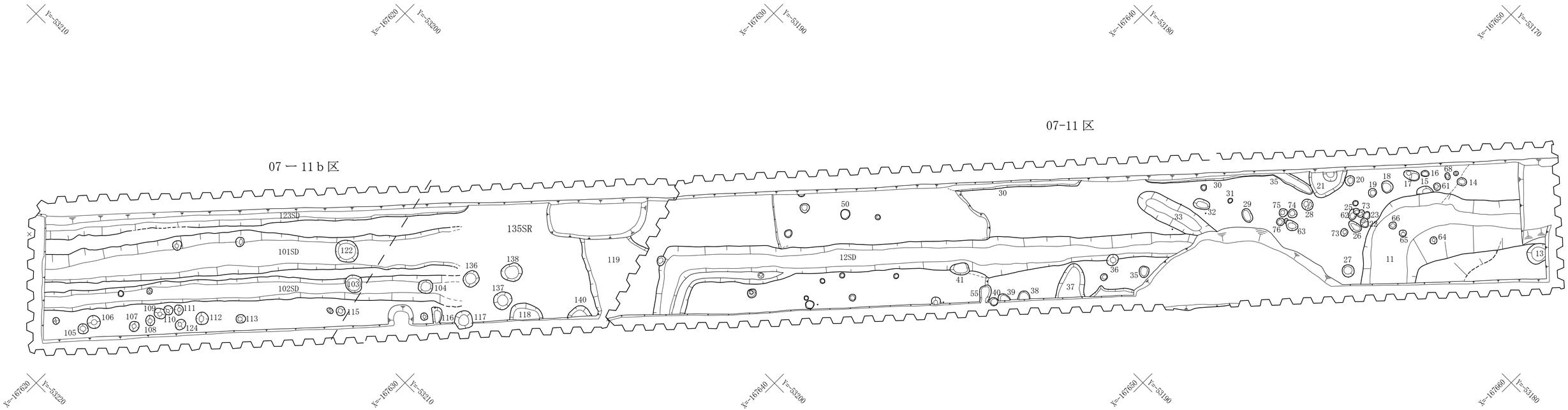
12ＳＤは南東側が攪乱されており、基点は不明である。北西側はＸ＝－167634ｍ、Ｙ＝－53199ｍ付近で南西方向に曲がる。

南東－北西長は21ｍ以上、11ＳＤとは切り合っていないので27ｍ以下である。幅は0.95～1.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍを測る。

101、102、123ＳＤは北西側の07－11ｂ区で検出した。南東部は河道135ＳＲの砂礫層が厚く堆積していて輪郭を追跡出来なかった。溝を掘らなかったのか、掘形が崩れたのか、判断できなかった。101ＳＤは３条並ぶ中央の溝で、幅1.2～1.6ｍ、深さ0.55ｍ前後を測る。埋土は褐灰色土や褐灰色粘土で、瓦器や土師器片が出土している。102ＳＤは101ＳＤの西南に平行する溝で幅0.7～0.9ｍ、深さ0.2ｍ前後を測る。掘削断面は半円形で、埋土は主に褐灰色土や同色砂混り粘土であった。123ＳＤは南西肩のみを検出した。幅1.2ｍ以上、深さ0.4ｍ以上を測る。埋土は褐灰色土、灰黄褐色砂礫、灰白色粘土



第99図　07－11ｂ区101、102、123ＳＤ断面図



第 100 図　07 － 11 区第２面平面図（S ＝ 1/100）

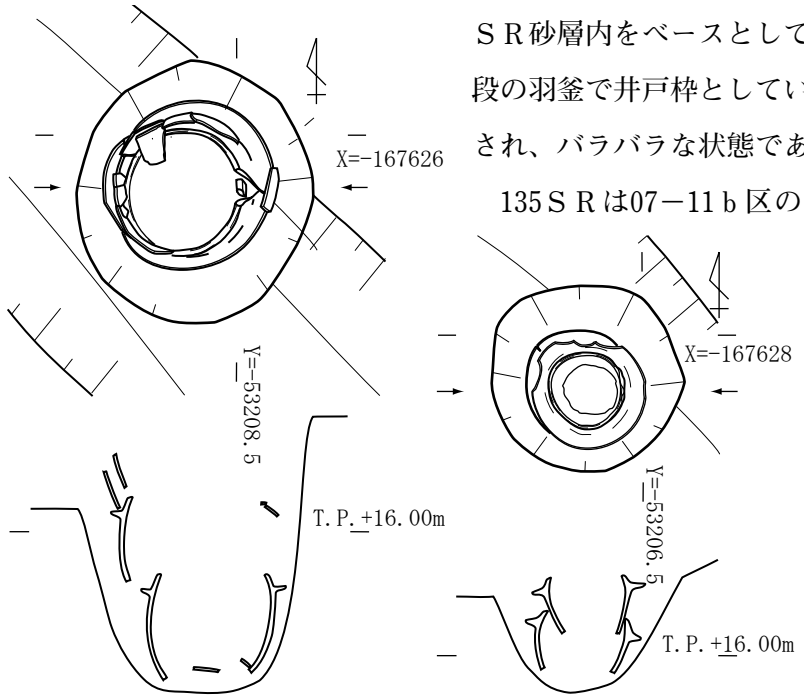
等である。101、102ＳＤより深く、砂礫も厚く堆積していた。101、102の２溝は屋敷地の区画溝と考えられるが、123ＳＤは機能が異なり、集落の濠の可能性も考えられる。３溝からは13～14世紀頃の瓦器や瓦質羽釜片、土師質羽釜、小皿などが出土している。遺物からは各溝の前後関係は判断できない。

103ＳＥは102ＳＤの南東部で検出した､溝埋没後に掘られた井戸である。平面は歪な楕円形で、長径0.68ｍ、短径0.62ｍ、深さ0.75ｍを測る。この井戸は底部を打ち欠いた口径約0.3ｍの土師質羽釜を口縁を正立で２段重ねて井戸枠としている。

104ＳＥは103ＳＥの南東にある。平面は歪な円形で直径0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。この井戸も底部を打ち欠いた、口径0.24ｍと0.18ｍの土師質羽釜を２段正立で重ね、井戸枠としている。上段羽釜は下段より二回り小さい。

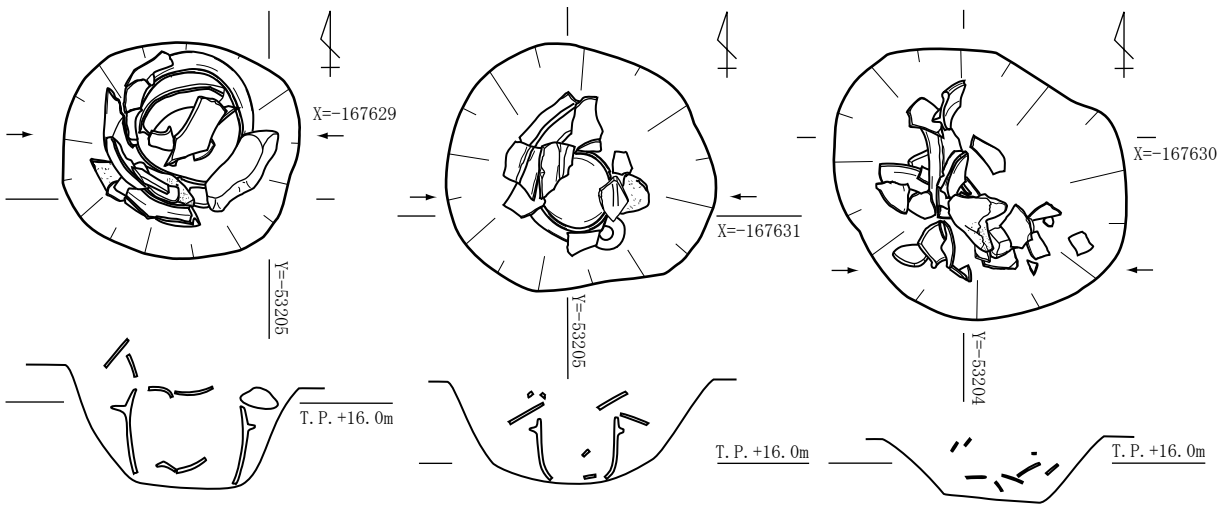
136ＳＥは調査区の中央、101ＳＤが砂礫層で確認できなくなる、Ｘ＝－167976ｍ、Ｙ＝－53205ｍで検出した。平面形は楕円形で、長径0.65ｍ、短径0.55ｍ、深さ0.55ｍを測る。掘形の中央北寄りに底を抜いた土師質羽釜を２段重ねた井戸枠とし、下段の鍔上に川原石を置いて上段を固定したと考えられるが、上段は壊れて井戸枠内や西側に転落していた。上段の出土状態から羽釜設置後土砂で埋めなかったかもしれない。濁りを押さえるためであろうか。

137ＳＥは136ＳＥの南1.5ｍにある。平面形は歪な楕円形で､長径0.72ｍ､短径0.65ｍ､深さ0.42ｍを測る｡この井戸も底部を抜いた口縁径24㎝の土師質羽釜を２段正立に重ねて井戸枠とするが、上段は体部を鍔近くまで打ち欠いていたと思われるが、検出時には壊れて下段羽釜の上に乗っていた。内部から瓦器埦が出土している。138ＳＥは137ＳＥの北東１ｍ、Ｘ＝－167630ｍ、Ｙ＝－53204ｍ付近で検出した。0.8ｍ×0.65ｍを測るいびつな楕円形で、深さは0.15ｍであった。135ＳＲ砂層内をベースとしており、湧水層が浅かったのか１段の羽釜で井戸枠としていたと思われるが、廃棄時に破壊され、バラバラな状態であった。



第101図　07－11ｂ区　103ＳＥ、104ＳＥ平面・断面図

135ＳＲは07－11ｂ区の南東端、Ｘ＝－167630ｍ、Ｙ＝－53200ｍ付近で検出した河道で、幅7.5ｍ前後、深さ1.2ｍを測る。調査範囲が狭く、ほぼ東西方向の河道であるが調査範囲では流水方向は確定できなかった。埋土は主に砂礫層で103、104、136～138ＳＥから出土したものとほぼ同時期の土師質や瓦質の羽釜や瓦器埦片、須恵器、弥生土器



第102図　07－11ｂ区136ＳＥ、137ＳＥ、138ＳＥ平面、断面図（Ｓ＝1/20）

などが出土している。洪水で侵食され短期間機能した河道で、土砂で埋没後まもなく屋敷地が復元されたと考えられる。なお、最上層に暗灰色の砂層があり、遺物が固まっていたため119ＳＫとして取り上げたが、135ＳＲ埋没後の整地層と考えられる。

ピット

区画溝の屋敷地側になる12ＳＤの南西側（屋敷地１）で約10箇所、102ＳＤの南西側（屋敷地２）で約20箇所のピットを検出した。ピットは直径0.2～0.5ｍ、深さ0.2～0.5ｍのものが多い。屋敷地１では40、42、44、47、49ＳＰが1.8～3.1ｍの間隔で並ぶ、また、屋敷地２では109、112、113がほぼ1.8ｍ間隔で並ぶ。

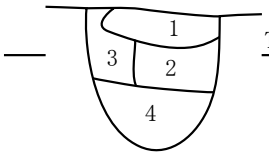
この07－11区を含め、今回の調査では中世の浅いピットが目立った。中世の遺構は井戸も羽釜や曲物を１、２段重ねた程度で、深さ0.5～0.6ｍ前後のものが多いが、礎盤や根石を置くピットも0.1～0.3ｍまでのものが多く、0.5ｍ前後まで掘削して柱を建てるものはきわめて少なかった。地下水位が高く、根腐れしやすかったためと考えている。

弥生時代の遺構

この調査区では、中世の遺構と同一面で弥生時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構埋土は主に褐灰色から黒褐色系で、中世遺構とは異なるので、平面精査時に区別できた。

33ＳＫは南東部で検出した。南側は12ＳＤに切られているが、平面は長楕円形で長径2.7ｍ以上、短径0.9ｍ、深さ0.35ｍを測る。掘削断面は半円形に近い。埋土は黒褐色の砂質土や微砂であった。坑内から中期の壺や水差し、甕や川原石が出土した。土器は南西側に偏っているが完形に近いものはなく、破片ばかりであった。同じような土坑を約300ｍ南東の07－１区でも検出している。13ＳＫは調査区南東端、11ＳＤの南側肩部にある楕円形土坑で、南東側は調査区外に広がる。0.7ｍ×0.7ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂質土で、弥生中期の土器が出土している。21ＳＫは調査区南東部、Ｘ＝－167650ｍ、Ｙ＝－53179ｍ付近にある浅い土坑で、東側は調査区外に広がるが、1.4ｍ×1.0ｍ以上を測る平面は歪な方形で、中央部は円形に深い２段掘になってい

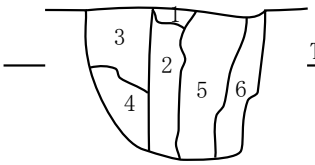
105SP



T.P. +16.00m

1 10YR7/3にぶい黄橙色土
2 10YR5/1褐灰色土
3 10YR6/1褐灰色砂
4 10YR5/1褐灰色微砂

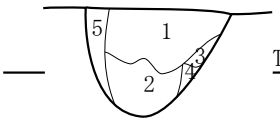
106SP



T.P. +16.00m

1 10YR7/3にぶい黄橙色土
2 10YR5/1褐灰色土
3 10YR7/1灰白色土
4 10YR7/2にぶい黄橙色土
5 10YR6/1褐灰色土
6 10YR7/1灰白色土

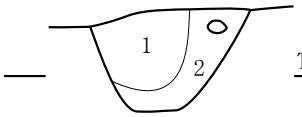
107SP



T.P. +16.00m

1 10YR6/1褐灰色土
2 10YR6/1褐灰色砂質土
3 2.5Y7/1灰白色微砂
4 2.5Y6/1黄灰色微砂
5 2.5Y7/1灰白色微砂

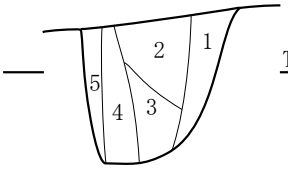
108SP



T.P. +16.00m

1 10YR6/1褐灰色砂質土
2 10YR7/1灰白色砂質土

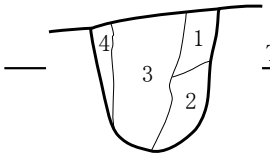
109SP



T.P. +16.00m

1 10YR6/1褐灰色砂質土
2 10YR5/1褐灰色砂質土
3 10YR5/1褐灰色粘質シルト
4 10YR5/1褐灰色砂
5 7.5YR6/1褐灰色砂質土

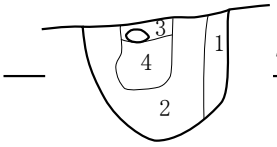
110SP



T.P. +16.00m

1 10YR7/1灰白色砂
2 10YR6/1褐灰色粘質土
3 7.5YR4/4褐色粘土
4 10YR6/1褐灰色砂

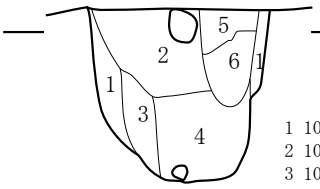
111SP



T.P. +16.00m

1 10YR6/1褐灰色砂
2 10YR5/1褐灰色砂質土
3 10YR6/2灰黄褐色砂質土
4 10YR5/1褐灰色微砂

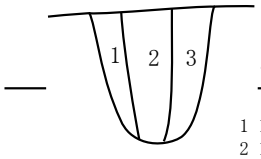
112SP



T.P. +16.00m

1 10YR7/1灰白色微砂
2 10YR6/1褐灰色砂質土
3 10YR5/1褐灰色粘質土
4 10YR4/1褐灰色粘質土
5 10YR5/1褐灰色砂
6 10YR4/1褐灰色粘土

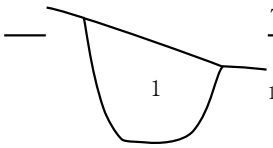
113SP



T.P. +16.00m

1 10YR6/1褐灰色土
2 10YR5/1褐灰色土
3 10YR6/1褐灰色土

120SP



T.P. +16.00m

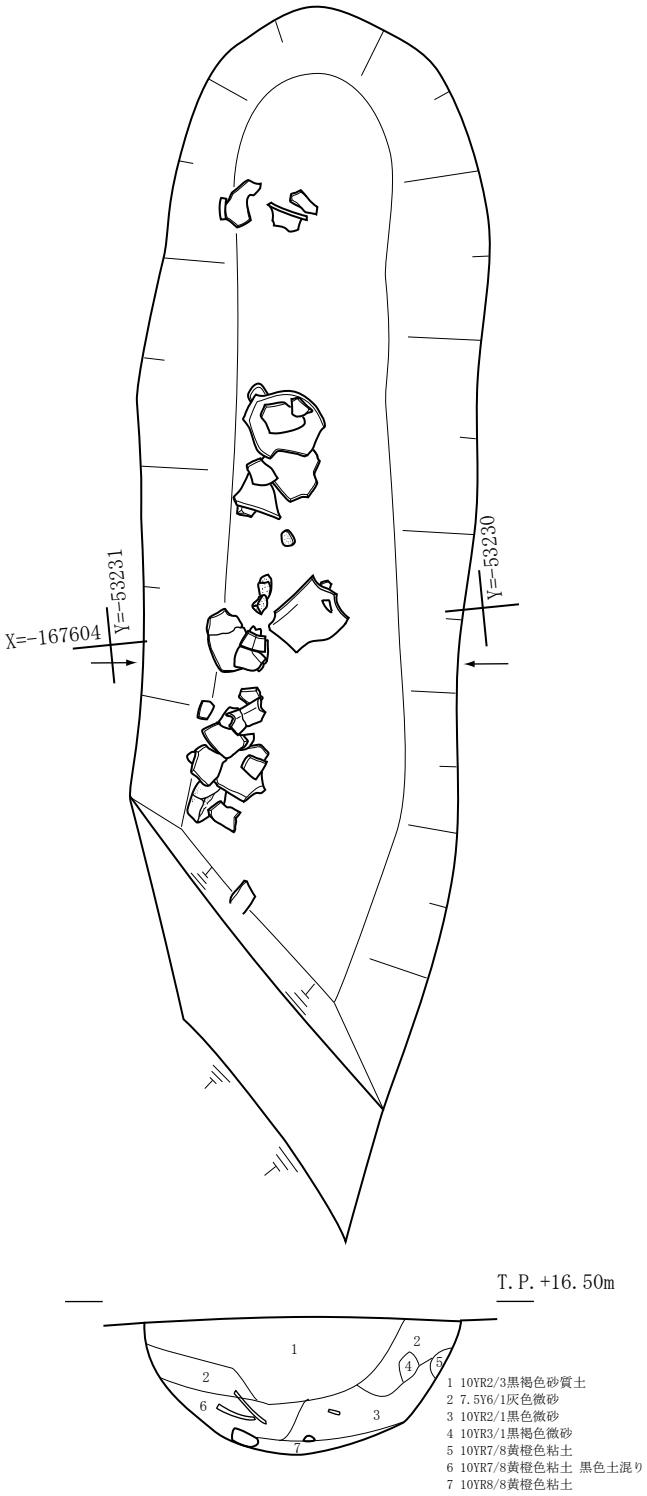
1 N2/0黒色微砂

第103図　07－11区遺構断面図

0　1m

る。深さは最深部で0.25ｍを測る。埋土は黒褐色砂質土であった。遺物は出土しなかったが、弥生時代の遺構である。37ＳＫは12ＳＤの南側、Ｘ＝－167646ｍ、Ｙ＝－53189ｍにある土坑で、南側は調査区外に伸びているが、現況で1.3ｍ以上×1.1ｍを測る楕円形で、深さは0.15ｍを測る。埋土は黒褐色～灰色砂質土であった。弥生時代中期の土坑である。

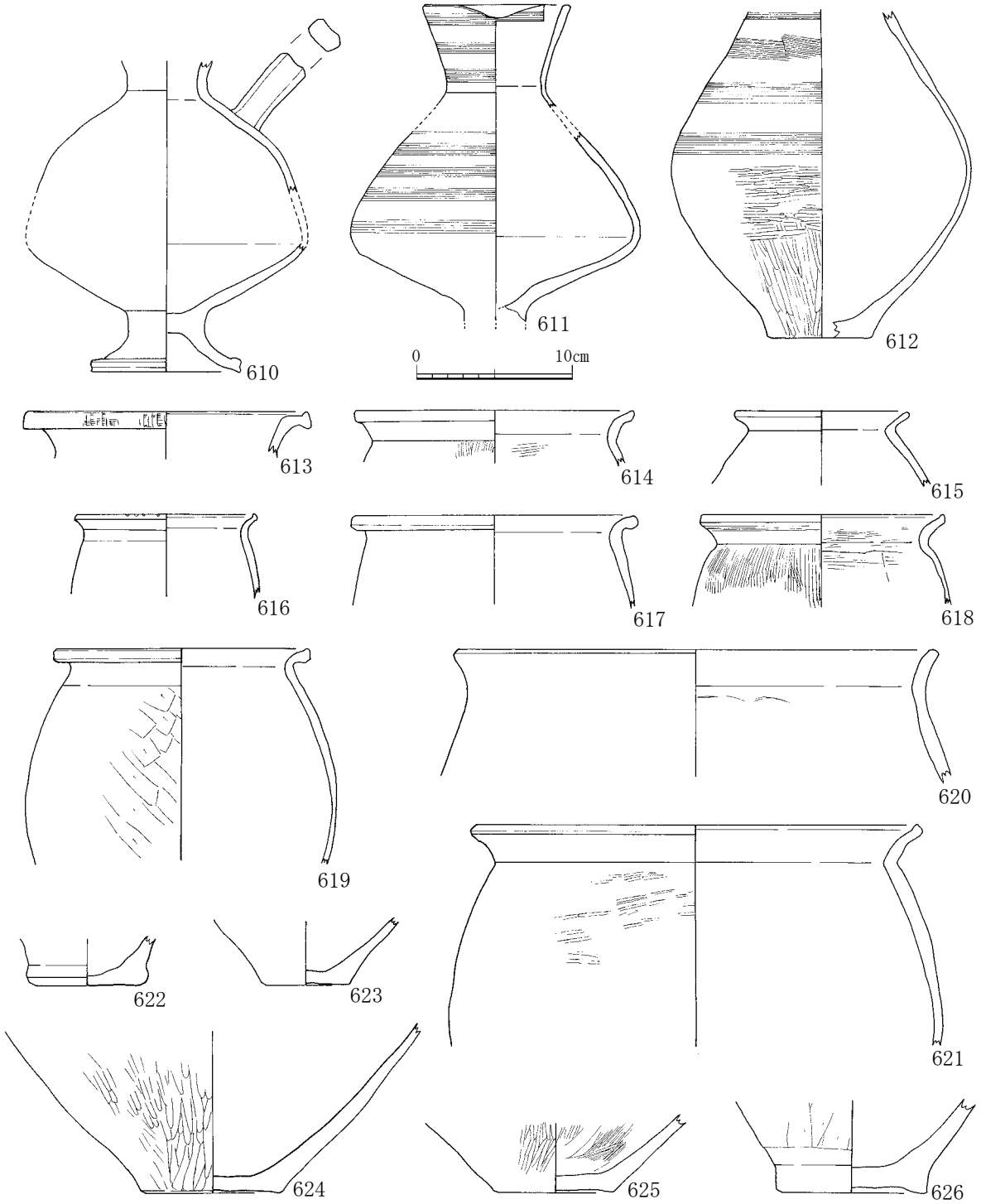
弥生時代の遺構は黒褐色や暗灰色土を埋土としており、14、16、17、28、29、31、32、36、41、47、52、53、61～68、70、71、73～76ＳＰをあげることができ、Ｘ＝－167636ｍより北には広がらない。60ＳＰ～76ＳＰは中世の生活面から５～６cm掘り下げて検出した。調査区内のピット配置からは建物を復元できなかった。



第104図　07－11区33ＳＫ平面・断面図

07－１区　33ＳＫ出土遺物土器（第105図）

610、611は脚付き水差しである。610は肩部から張り出し、最大径は胴部下半にある。躰部は摩耗しており、櫛描文が微かに観察できる。脚部は「ハ」字形に開き、裾端部は垂直な面をつくり、強くヨコナデしている。611は把手を欠く。胴部は算盤玉形で、下半に最大径がある。口縁から胴部に櫛描の直線文を巡らせる。底部を欠くが、割れ方から脚が付くと思われる。612壺胴部である、胴部中央に最大径を持ち、膨らみは小さい。胴部上半に櫛描直線文を巡らせる。胴部中央は横、底部は上下方向のヘラミガキ調整である。613は水平まで外反する広口壺の口縁部で、口縁端部を上下に拡張し、簾状文で飾る。614～621は甕、614は、外弯する口縁の端部をわずかに摘み上げて内傾する面をつくる。615は「く」字形に短く折り曲げて口縁部をつくるもの。胴部は大きく脹らむ。616、617、619、621は胴部が口縁端部よりわずかに膨らむもの。619は胴部外面に粗いヘラケズリが観察される。621は口縁端部をわずかに摘みあげて外傾する面をつくる。胴部は横方向のヘラミガキである。618は頸部を強いナデで屈曲させるもの。胴部外面をハケメ調整、口縁部内面は強くヨコナデする。620は短く外湾する

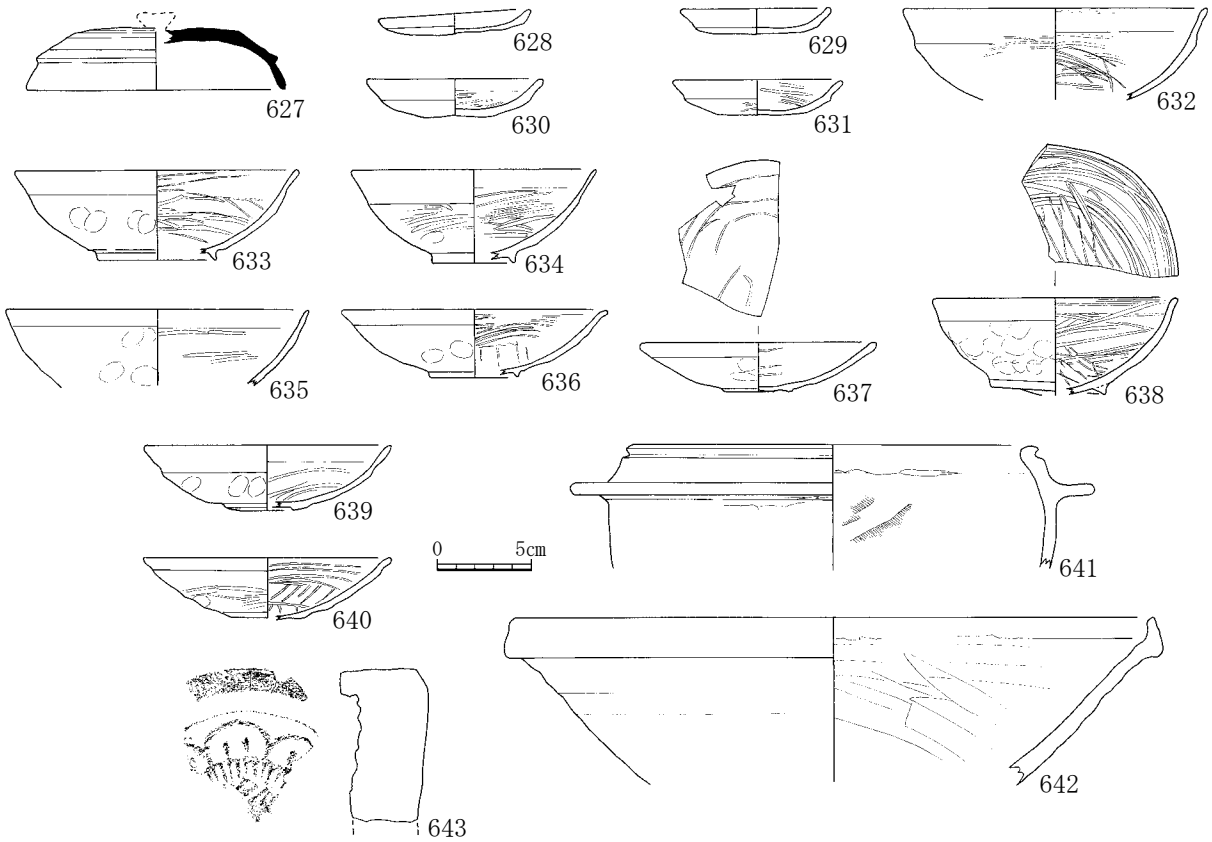


第105図　07－11区33ＳＫ出土遺物実測図

口縁部をつくるもの。中期前半のものか。622～626は底部である。

07－11区　12ＳＤ出土遺物（第106図）

627は須恵器蓋杯で、６世紀頃のもの。628、629は土師器小皿で口縁部はヨコナデ、底部はナデ調整。630、631は瓦器小皿で、口縁部はヨコナデ調整、見込みはヘラミガキで調整する。632～640は瓦器埦である。633、634は断面三角形の高台がつくもの。633の外面は無調整、634は粗いヘラミガキが残る。636は断面三角形の低い高台がつくもので、器高3.6㎝で、浅い。637、639、640は粘土紐を貼った高台がつくもの。640は埦底の方が低いが外面に粗いヘラミガキ、見



第106図　07－11区12ＳＤ出土遺物実測図

込みに暗文、躰部内面にヘラミガキが観察される。641は土師質の羽釜で口縁端部直下を折り曲げたふうに見せるためか強くナデてている。642は東播系の須恵質の鉢口縁端部を摘み上げて、外傾する面をつくる。643は蓮花文文軒丸瓦の瓦当である。

07－11ｂ区　101、102、123ＳＤ出土遺物　（第107図）

644は瓦質の小皿、平らな底部から短く開く口縁部を付ける。見込みから口縁部内面は放射状の暗文と横方向のヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデである。645～647は瓦器埦で645、647は高台が無くなり、体部内面もヘラミガキも省略される時期のもの。646は体部内面に粗いヘラミガキが残る。648～650は東播系の鉢である。648は小破片で口縁径は復元できなかったが、口縁端部を拡張させず丸くおさめる。649は水平近くまで外傾させた口縁の端部を摘み上げて拡張し面をつくる。650は口縁端部をナデて垂直な面をつくるもの。651、652は瓦質の羽釜で、水平に開く鍔から内弯して立ち上がる口縁部をつくる。口縁部外面は３段の段をつける。

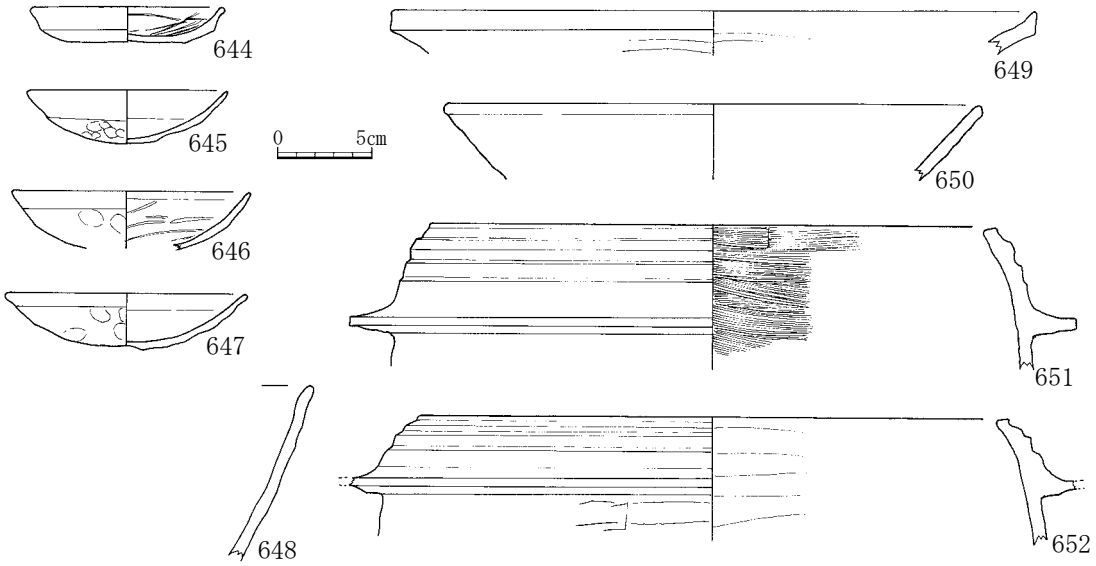
644～646、650～652は101ＳＤ，648、649は102ＳＤ、647は123ＳＤ出土。

07－11ｂ区　103ＳＥ出土遺物（第108図）

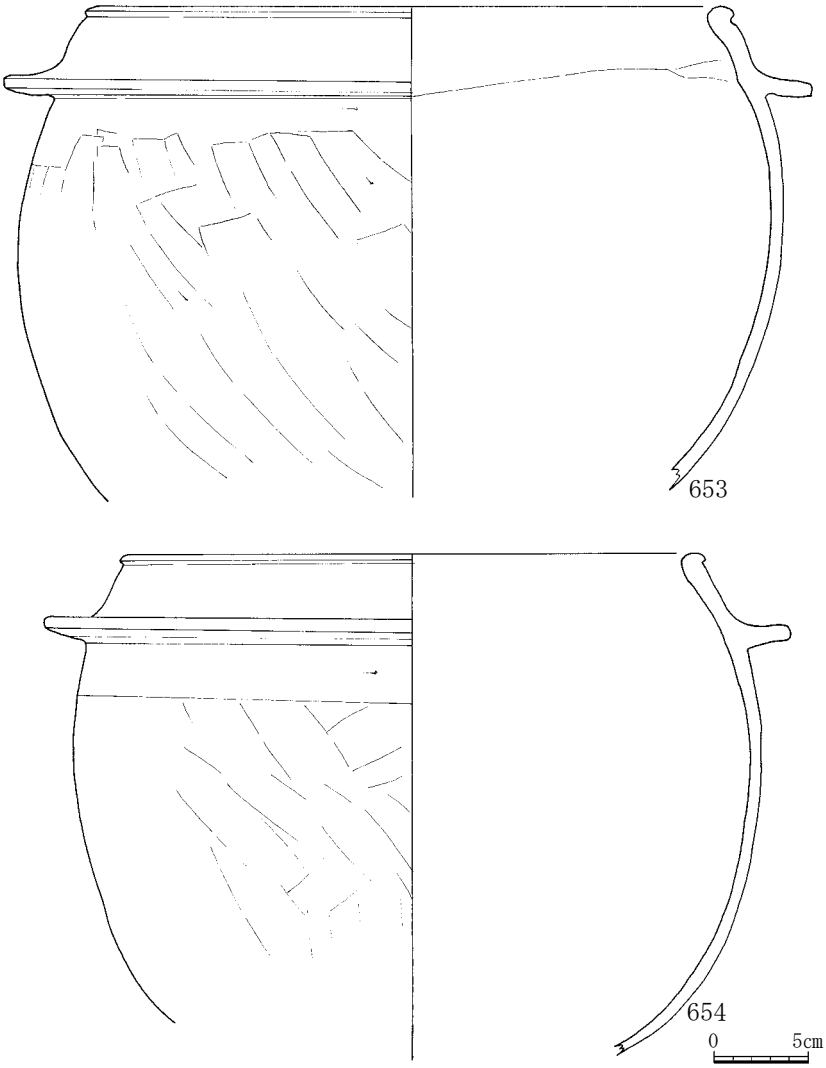
653、654は土師質の羽釜。球形の胴部に、653は水平、654は上がり気味にのびる鍔をつける。653は口縁部が屈曲し、654は内弯して立ち上がる。口縁端部は外反させておさめる。胴部外面はヘラケズリ、内面を653はナデ、654は板ナデ調整である。

07－11ｂ区　104、138ＳＥ出土遺物（第109図）

655は土師質羽釜。鍔は水平に短く延びる。内弯して短く立ち上がり、端部をわずかに摘んで



第107図　07－11ｂ区101、102、123ＳＤ出土遺物実測図

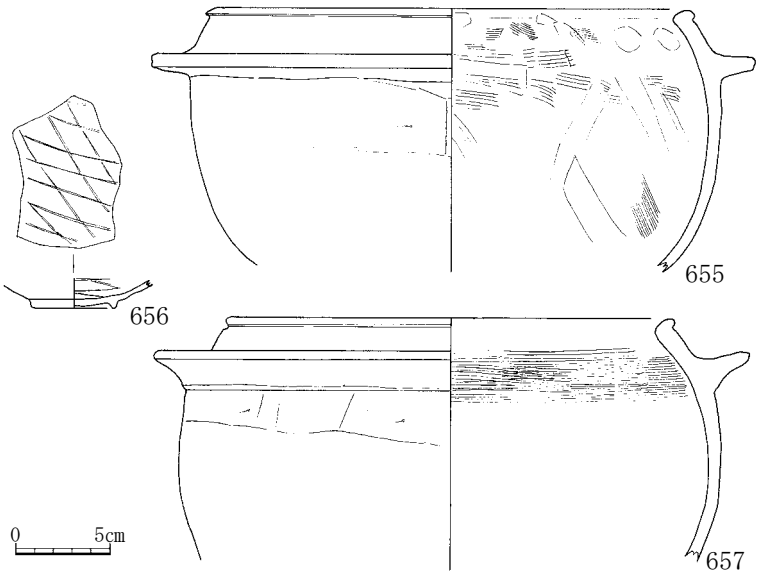


第108図　07－11ｂ区103ＳＥ出土遺物実測図

外反させる。656は瓦器埦の底部。見込みに格子状の暗文が残る。高台は逆三角形である。657は土師質羽釜で鍔は体部との接合部がやや厚く、斜め上に延びる。口縁部は内弯し、口縁端部を小さく外反させる。口縁部内面はハケメ、胴部内面はナデ調整である。胴部外面は鍔直下が横方向、胴部は縦方向のヘラケズリである。

07－11ｂ区　136、137ＳＥ出土遺物（第111図）

665は瓦器埦で、高台が無くなる時期のもので、底部は船底状である。体部は内外面ともナデ、口縁部は約１㎝幅でヨコナデ。666、667、668は土師質の羽釜で



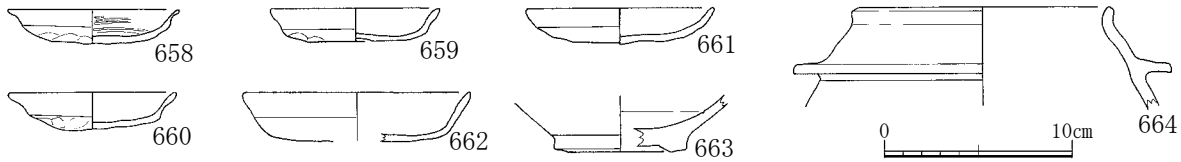
第109図　07－11ｂ区104、138ＳＥ出土遺物実測図

ある。666は球形の胴部に短くやや上に開く鍔は厚い。口縁は短く内弯して立ち上がり、端部外反させておさめる。胴部外面はヘラケズリ、内面は口縁部直下から板ナデ。667は、口縁部が肥厚気味に短く立ち上がり、わずかに外反させる。胴部外面はヘラケズリ、胴部内面はハケメ調整である。668は鍔が水平に開き、内弯して短く立ち上がる口縁部外面が屈曲気味になる。口縁部内面に指頭痕が残る。鍔と胴の接合部を強くヨコナデし段がつく。口径31.0㎝。

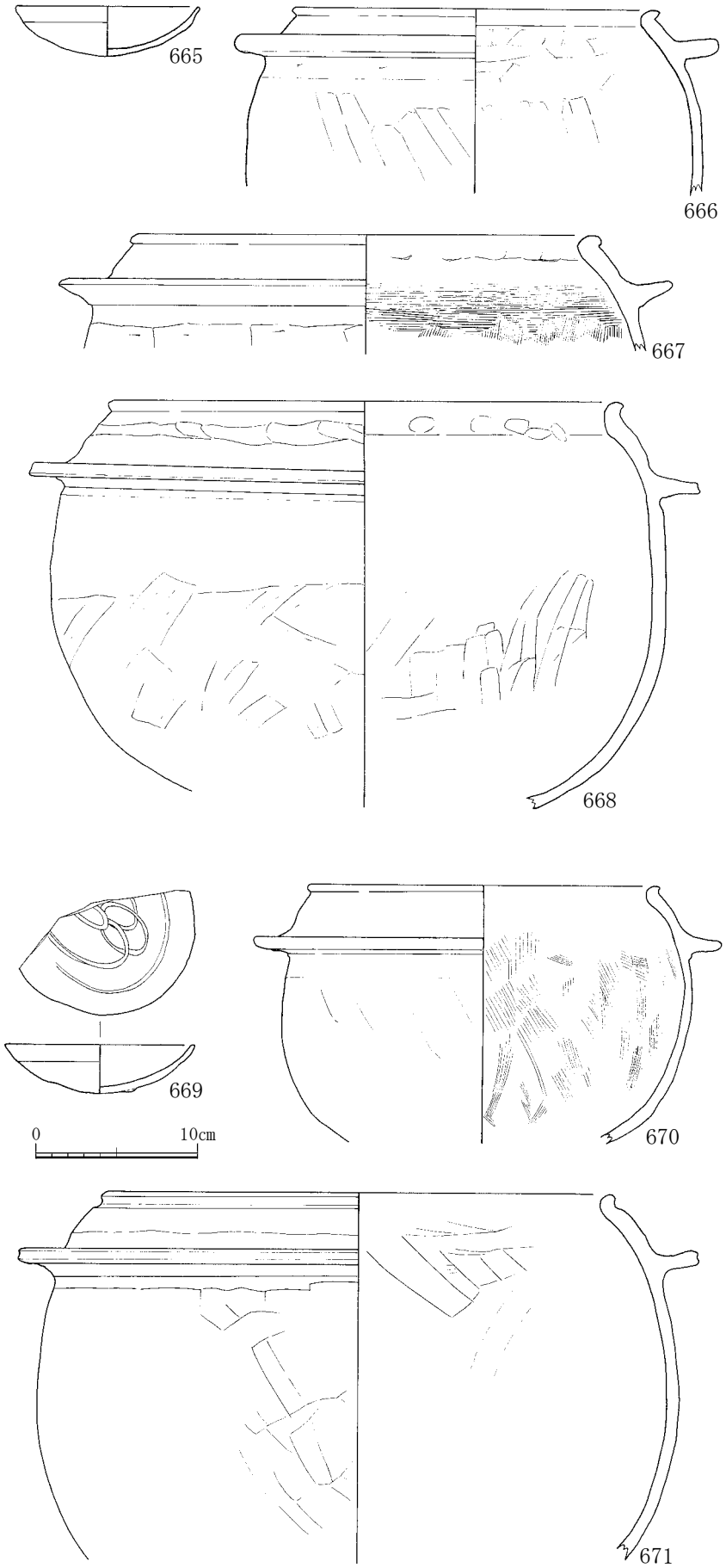
669は瓦器埦で､粘土紐ｗ貼った高台がつく。見込みは螺旋状の暗文､体部はヘラミガキを施す。670は瓦質羽釜で、球形の胴部に短く開く鍔から、内弯して立ち上がる口縁部をつけ、体部は小さく外反させて丸くおさめる。体部外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整である。671は土師質羽釜で、口縁端部外面を外反気味に摘み上げる。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は板ナデ。６は口径21.0㎝。665～668は136ＳＥ，669～671は137ＳＥ出土。

119ＳＫ（135最上層）出土遺物（第110図）

658～660は瓦器小皿。658は口縁部内面にヘラミガキが観察される。659，660はヨコナデ。見込みはナデ調整である。661、662は土師器小皿である。口縁部は２段のヨコナデ調整。底部に指頭痕が残る。662は浅黄色を発する小皿で、口縁部をヨコナデ、底部をナデで調整するが丁寧な作りである。復元口径12㎝、器高2.6㎝。663は白磁碗で見込みに圏線を巡らせる。高台部は無釉である。高台径７㎝。664は土師質の小型羽釜である。口縁部は内傾して屈曲気味に立ち上がり、口縁端部は上に摘み上げて丸くおさめる。復元口径13.3㎝。



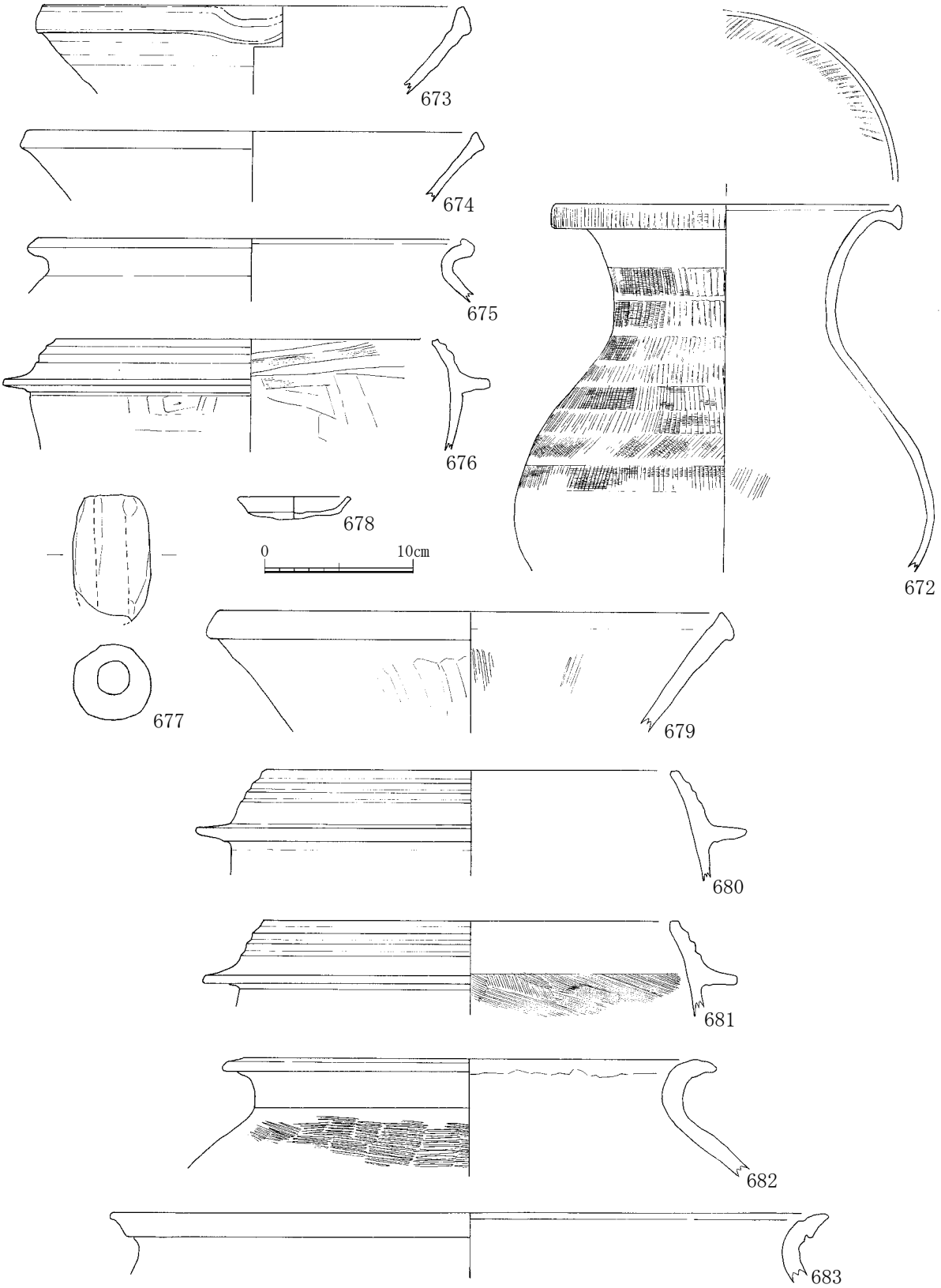
第110図　07－11ｂ区119ＳＫ出土遺物実測図



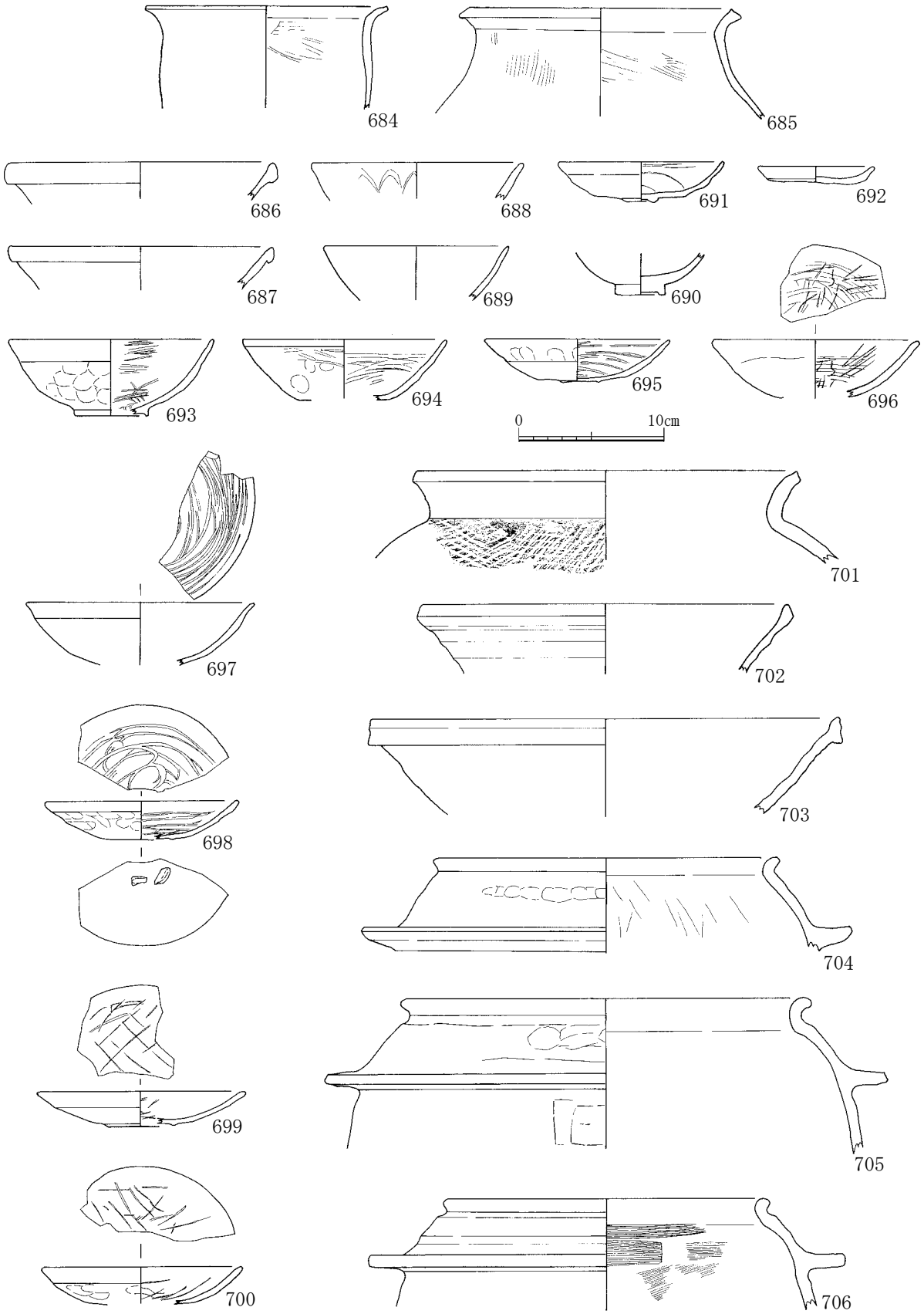
第111図　07－11ｂ区136、137ＳＥ出土遺物実測図

07－11b区　135ＳＲ出土遺物（第112図）

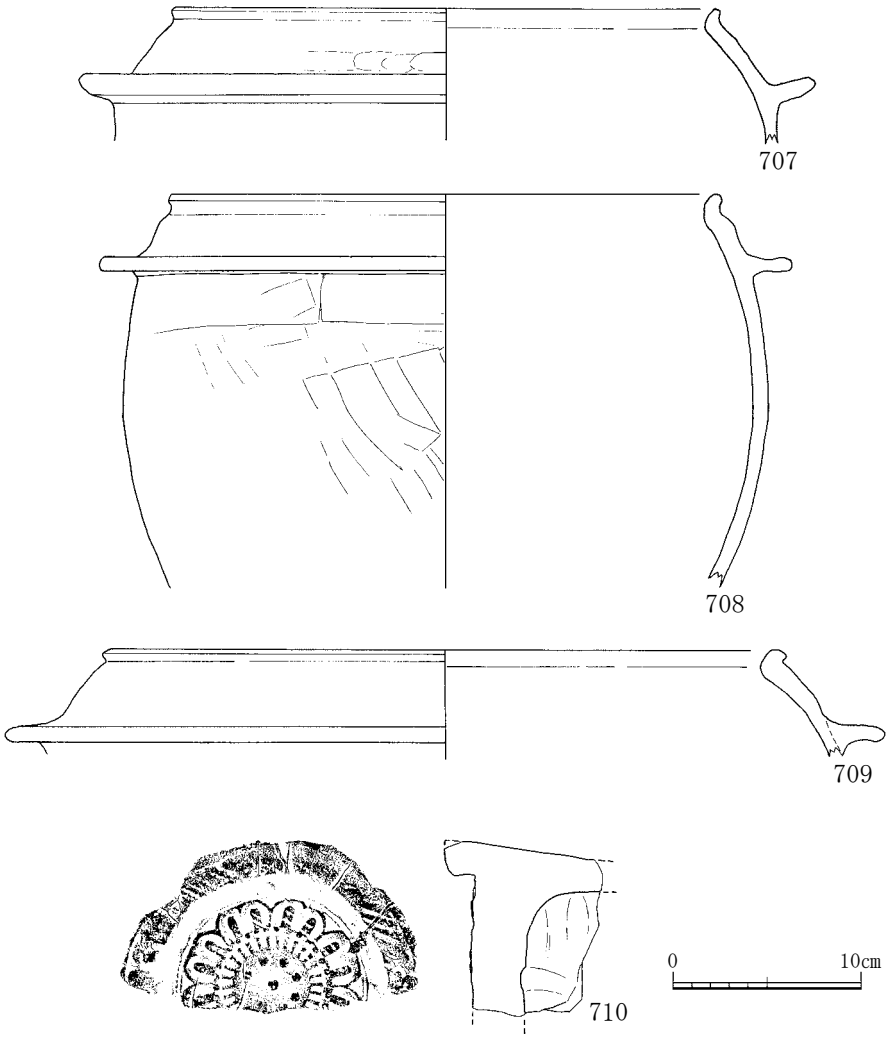
135ＳＲからは、弥生土器や古墳時代の須恵器、土師器、中世の土師器羽釜や皿、瓦器椀、小皿、瓦質の羽釜等が大量に出土した。同じような遺物ばかりであるので、12点を取り上げた。672は



第112図　07－11ｂ区135ＳＲ出土遺物実測図



第113図　07－11区出土遺物実測図１



第114図　07－11区出土遺物実測図２

弥生土器。胴部中央のやや下に最大径をもち、なだらかに内傾する肩部から開き気味に立ち上がる口頸部から水平まで外反する口縁端部を上下に拡張させ、簾状文をつける。口縁部内面にキザミメ文を巡らせる頸部から胴部は幅1.8㎝の簾状文８条で飾る。胴部内面はハケメ、外面はヘラミガキと思われるが摩耗が進んでいる。673、674は東播系の片口鉢で、673は口縁端部を断面三角形状に上に摘み上げる。674は口縁端部をわずかに拡張させ、外傾する面をつくる。675は土師器の甕口縁部で、短く外反する口縁端部をわずかに摘み上げ、外傾する面をつくる。676は瓦質の羽釜で、内弯して短く立ち上がる口縁部外面に３の段を作る。678は土師器小皿である。底部は中央に厚みがありやや不安定である。677は土錘で、最大径5.1㎝、器高８㎝。調査地は現海岸線から約３㎞内陸であるが、1985年度調査では弥生時代の蛸壺も出土している。

07－11区出土遺物（第113図）

684、685は弥生土器、684は甕で、膨らみの小さな胴部から短く外彎して丸くおさめる口縁部を作る中期前半のもの。685はなだらかに内傾して立ち上がる肩部から短く外彎して開く口縁端部を拡張させて外傾する面を作る。686、687は白磁碗。口縁部は玉縁である。688は体部外面に蓮弁をもつもの。鎬はない。689は無文の青磁碗で内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。690は白磁碗の高台で、外面は無釉である。

692は土師器小皿。開いて立ち上がる口縁部はヨコナデで薄く仕上げている。691、693～700は瓦器埦。691、695、698、699は高台が退化し、粘土紐を貼り付けただけもの。体部外面は無調整で、695は規則的な指押さえが残る。体部内面は粗いヘラミガキ。693は小さい断面三角形の高台がつく。外面はユビオサエが残り、口縁部のヨコナデの範囲が広い。内面は口縁端部近くまでヘラミガキ調整。698の内面は粗い螺旋状のヘラミガキが残る。699は内面に粗い格子状のヘラミガキを施す。器高2.4㎝、復元口径14.4㎝。694は外面を粗いヘラミガキで調整する。698は体部やや密なヘラミガキが残る。胴部外面は指押さえが残り、無調整。 694、697、700は底部を欠くが内面は粗いヘラミガキ調整が残る。

701は須恵器甕の口頸部。702、703は東播系の鉢。702は口縁部を徐々に肥厚させ、端部は外傾する面を作るもの。703は口縁部を上下に拡張して面を作る。体部も強くヨコナデする。備前の影響を受けたものか。704、705は土師質の羽釜。内弯して立ち上がる口縁端部を、704は斜め上につまみ上げて丸くおさめ、705は外反させて丸くおさめる。706は瓦質の羽釜で、口縁部は内弯して立ち上がり、口縁端部は短く外反させて丸くおさめる。口縁部外面の段は甘く２段である。

07－11区出土遺物２（第114図）

707、709は土師質の羽釜で、水平からやや上向きに伸びる鍔に内傾する口縁の端部を僅かに外反させ丸くおさめる。708は瓦質の羽釜で、胴部の膨らみが小さい。内傾する口縁部の段は１段で、口縁端部を摘み上げて丸くおさめている。710は複弁蓮花文軒丸瓦の破片である。

６．08区

06－２区西北側の現道路部で、迂回路設置とアンダーパス工事のため７回に分けて調査を実施した。08－９・10・12・13・15・16・17区としたが、調査区が接しているため纏めて既述する。

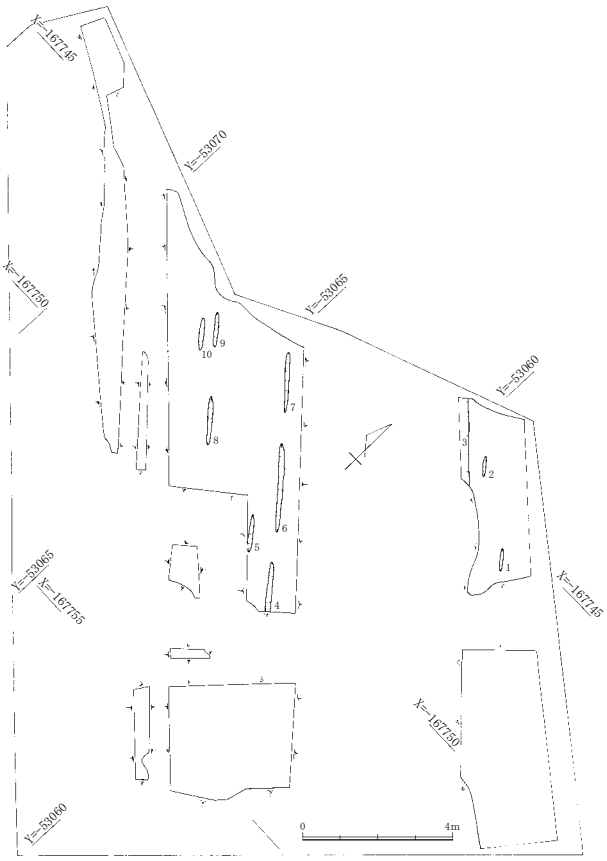
層序

08区は現道路部分で、高さはT.P.18.1ｍ～18.5ｍを測る。埋管等による攪乱が各所にあり、土層も部分的に残るに過ぎないが、各地区とも似た堆積状況を示す。

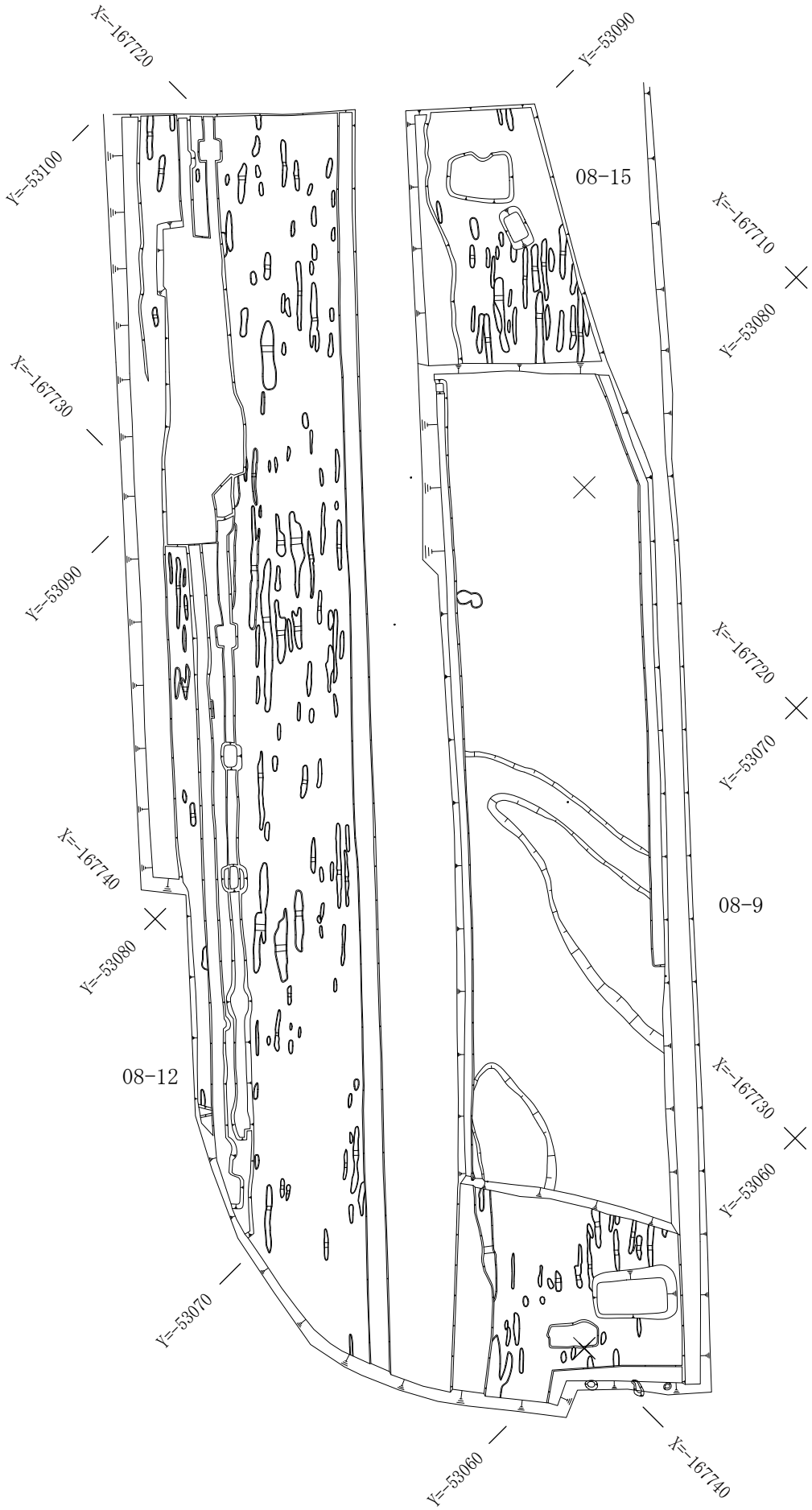
層序は基本土層（第4図）で記したように、現地表面は17.3ｍで、１層は盛土、２層は旧耕土、３は中近世頃の耕作土で２層より明るい褐灰色土である。４層は黄褐色砂質シルトで、古墳時代から中世の遺物を包含している。量は少ない。上面は遺構検出面（第１面）で、地割に則った方向の耕作溝が観察される。５層は黒褐色粘質シルトは弥生時代中期以前の遺物包含層である。出土量は少ない。上面は古墳時代の遺構検出面である。６層は黄灰色粘質シルトで弥生時代から古墳時代の遺物包含層であるが出土量は少ない。７層は縄文時代の遺物を含んでいる。生活面を層位で把握できないが、９層（黄褐色年度）上面では河道が検出された。

近世の遺構（第１面）

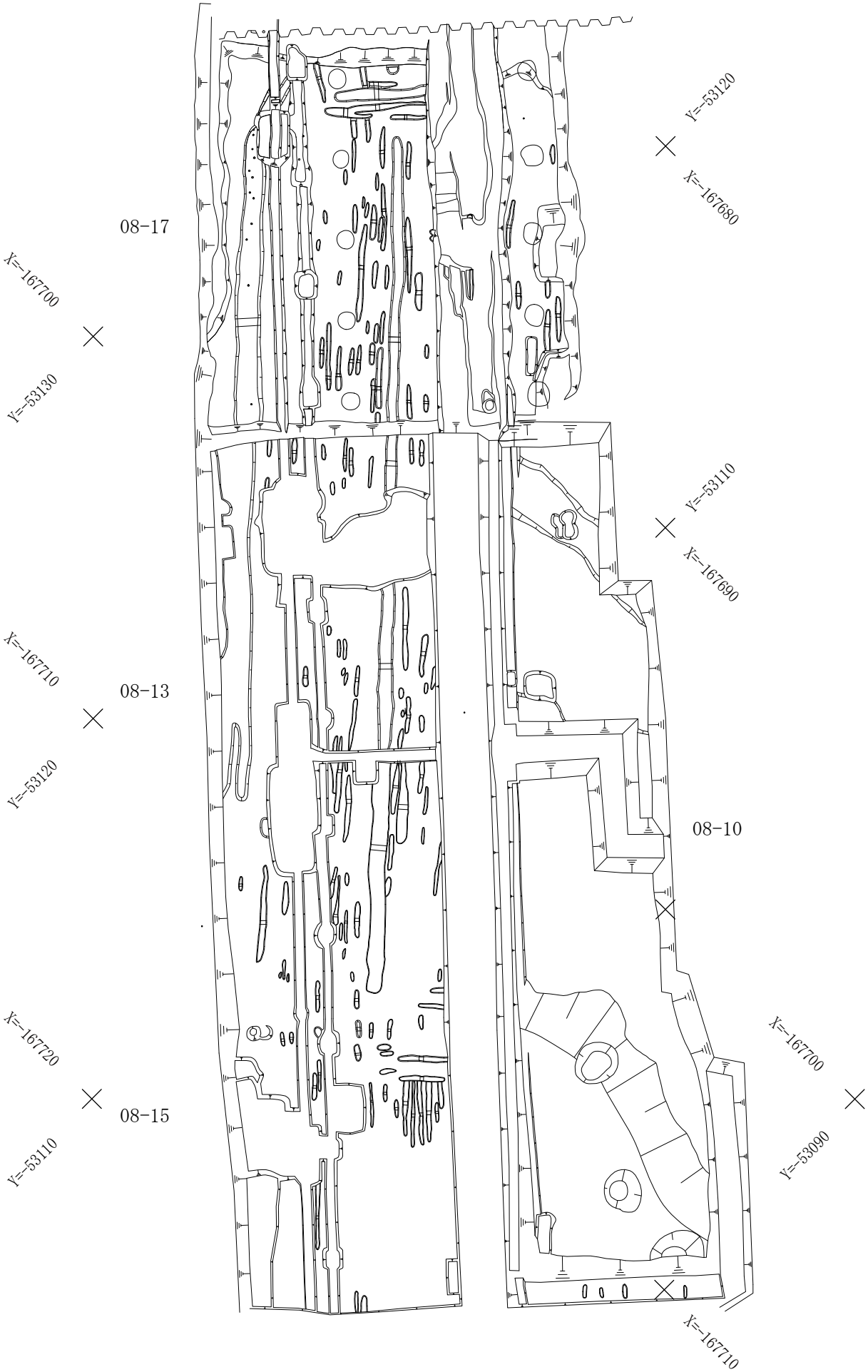
08－16区、９区、12区、15区、17区のT.P.17.15ｍ～17.35ｍの耕作土を除去した面で検出した。耕作溝や耕作溝より広い溝で構成される遺構面である。耕作溝は地割に沿って南東～北西に走るものが殆どで、08－15区、08－17区でこれに直行する北東～南西方向に走る溝を検出している。溝の幅は0.15～0.3ｍ、深さ0.02～0.05ｍを測るものが殆どで、埋土は黄灰色の砂質土やシルトである。08－15区で検出した１ＳＤは幅0.6ｍ、深さ0.05～0.08ｍを測り、08－17区まで延長約32ｍを測った。里境の溝と推定され、08－15区では南西側に幅約１ｍの無遺構帯があり、道の存在を推定されるが、08－17区では溝のすぐ傍でも耕作溝が観察される。09－１区では肥子池堤体の外裾側の溝とほぼ同位置であり、里境を構成する溝が肥子池築造に伴い里道の位置が移動したものと推察している。



第115図　08－17区第１面平面図



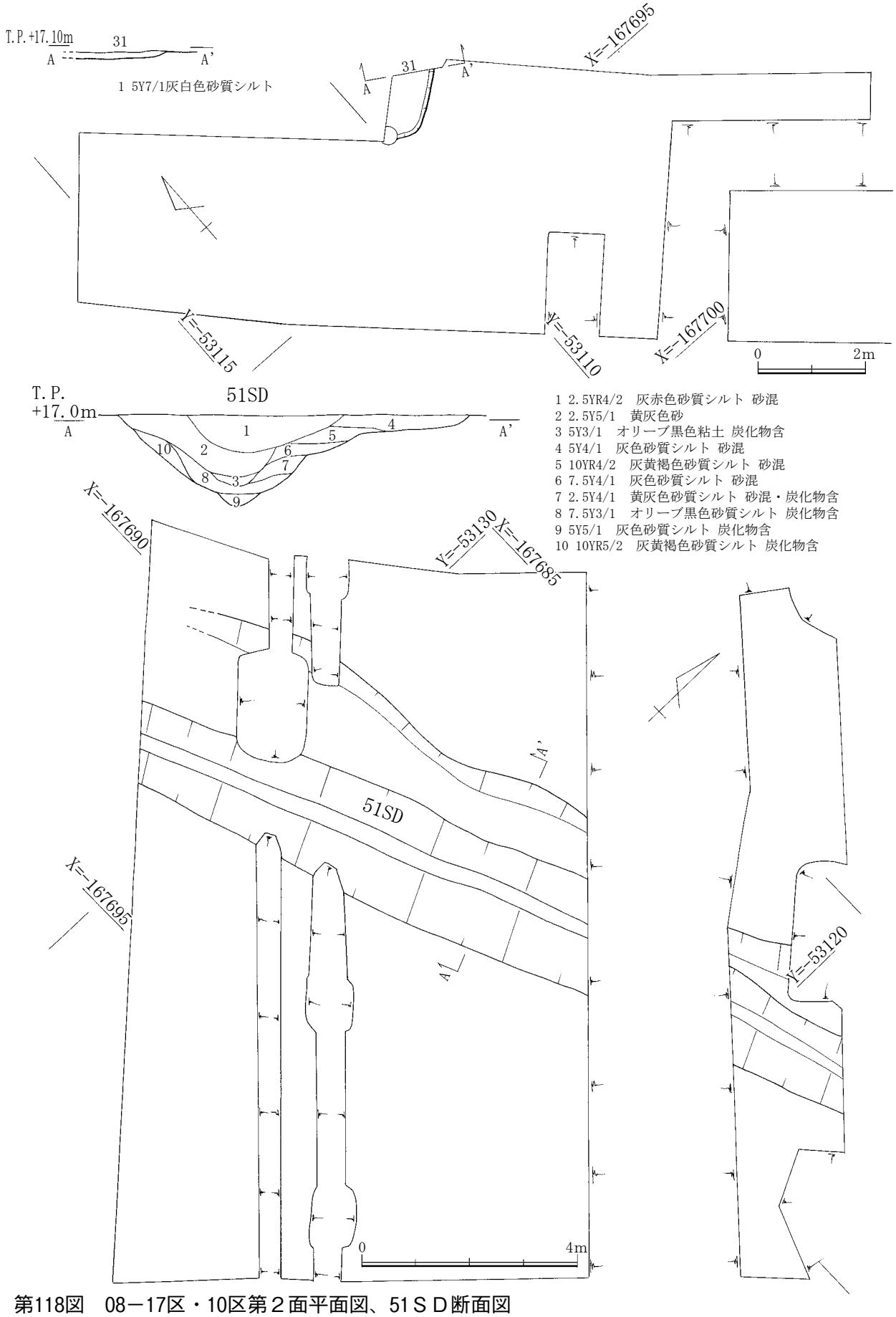
第116図　08－17区、10区、13区、15区平面図



第117図　08－15区、９区、12区平面図（Ｓ＝1/100）

古墳時代の遺構（第２面）

第４層の黄褐色砂質シルトを除去した黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。08－10区で

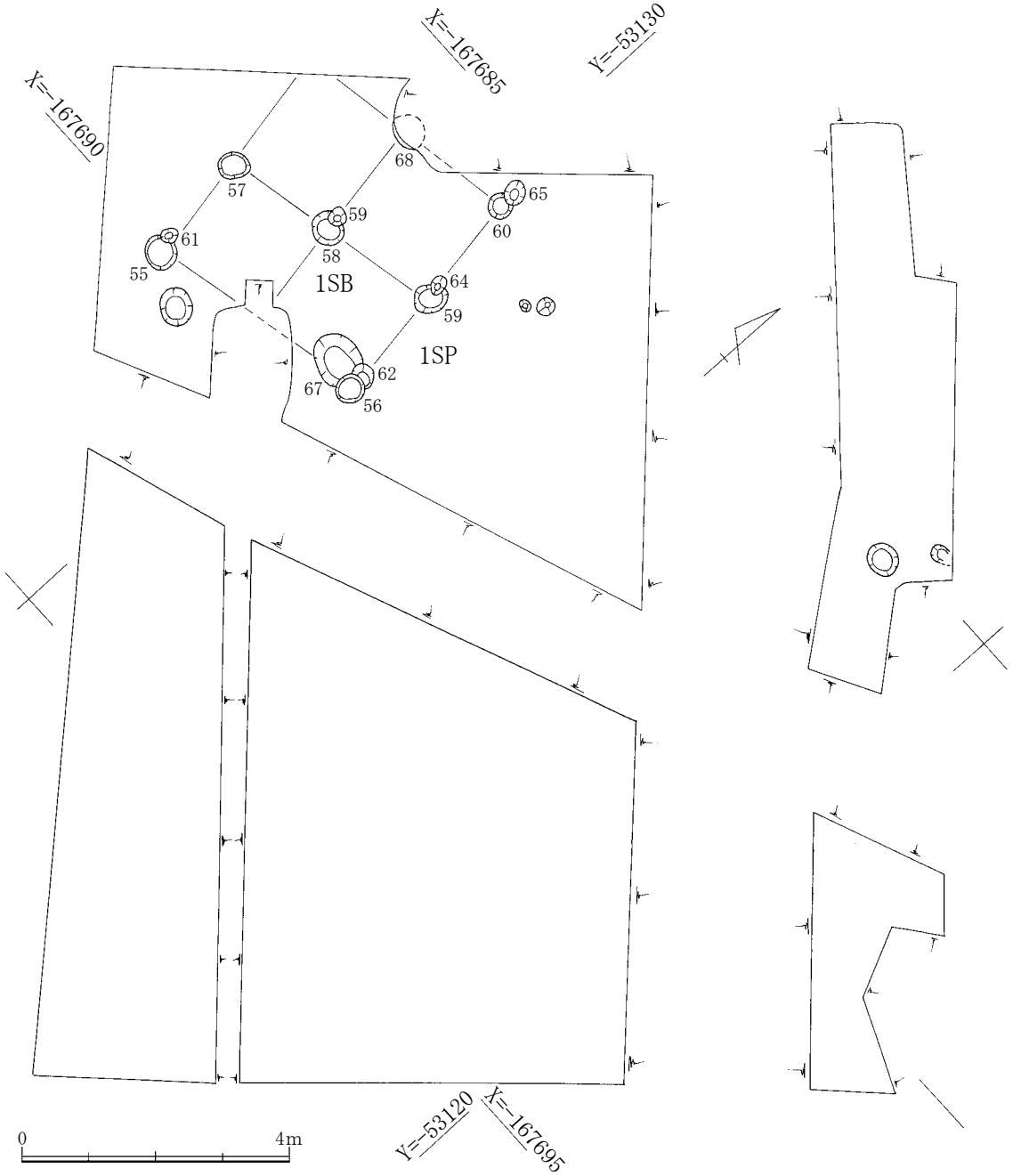


第118図　08－17区・10区第２面平面図、51ＳＤ断面図

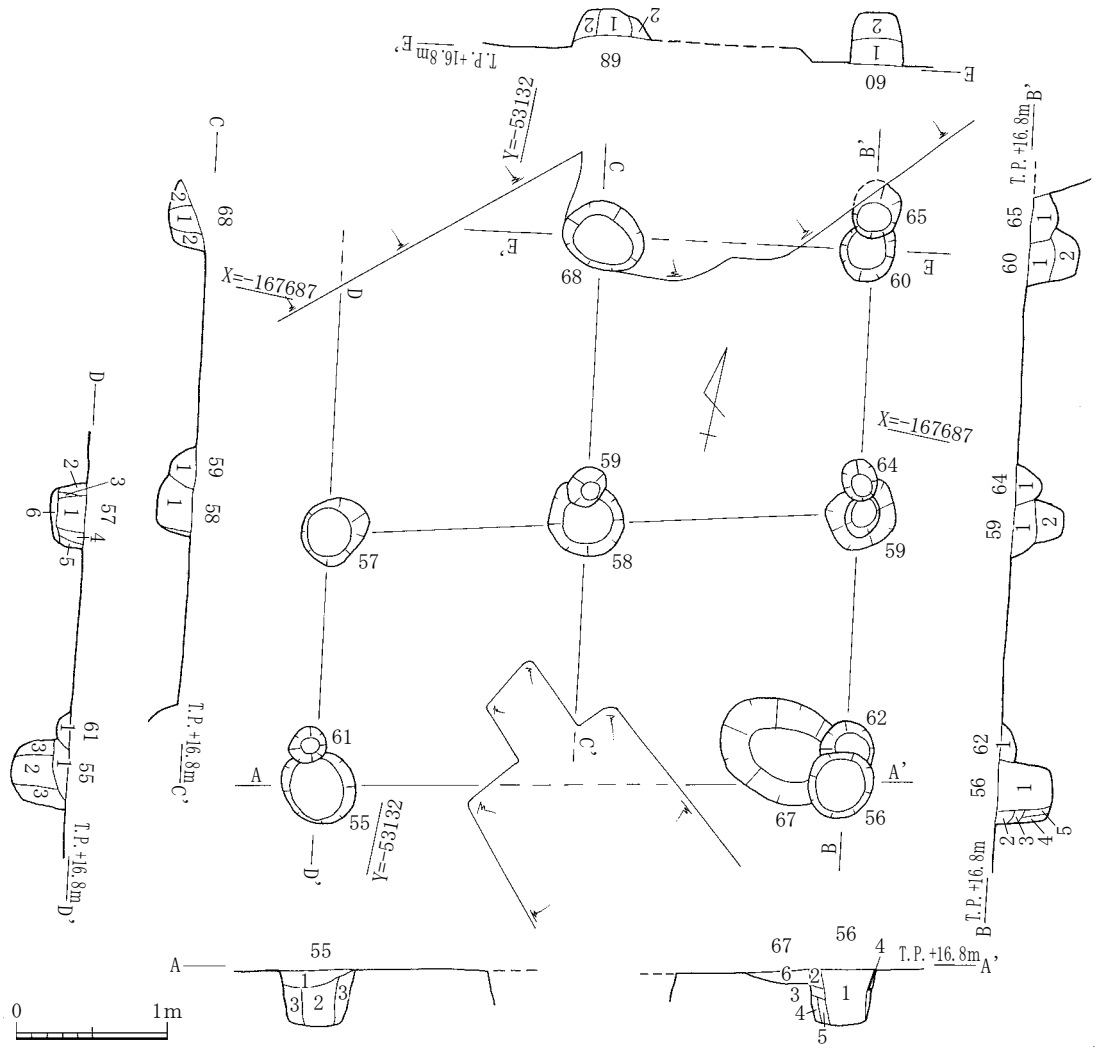
土坑、08－17区で溝を１条検出したが、他の地区では遺構を確認できなかった。検出高は無遺構の08－９区がT.P.17.35ｍ、08－10区・08－17区が17.05ｍ前後であった。

08－10区の31ＳＫは北西コーナー付近のＸ＝－167693ｍ、Ｙ＝－53109ｍで検出した浅い土坑で、形状は楕円形と思われ、長径1.2ｍ以上、短径0.8ｍ以上、深さは0.1ｍを測った。埋土は粗砂を含む灰白色砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

08－17区51ＳＤは幅3.1～3.5ｍ、深さ0.85ｍを測る。流路は北東から南西方向で、この地域の地形に沿っている。掘形は北西側が２段堀で、検出面から約0.15ｍ掘り下げた所で、幅約１ｍの踊り場を造る。この下は幅約２ｍ、深さ0.7ｍの「Ｖ」字形に掘削されている。埋土は１が暗灰黄色砂混じりシルト質で、北東端の壁面でも観察されることから、埋没前後に幅１～1.4ｍ、深



第119図　08－17区第３面平面図



第120図　08－17区第３面１ＳＢ平面・断面図

さ0.3ｍ前後まで浚渫されたと思われる。この下は各層とも砂混じりの砂質シルト層であるが、３、７～９層は炭化物を多く含んでいた。

この面では土坑を除いて他に遺構を確認できなかった。樹木痕なども確認できなかったたことから集落に隣接した野原であったと考えられる。

弥生時代から古墳時代の遺構（第３面）

第３面は東南端の08－16区で17.4ｍ、08－12区でT.P.17.2ｍ、北西の08－17区では16.85ｍ前後で、100ｍの間に0.4ｍ近く傾斜している。この面では08－17区で掘立柱建物跡、08－16～12区、08－13区、08－15区では溝を検出した。

08－17区１ＳＢは17区の西北端で検出した２間四方の総柱建物である。北側列中央柱はほぼ半

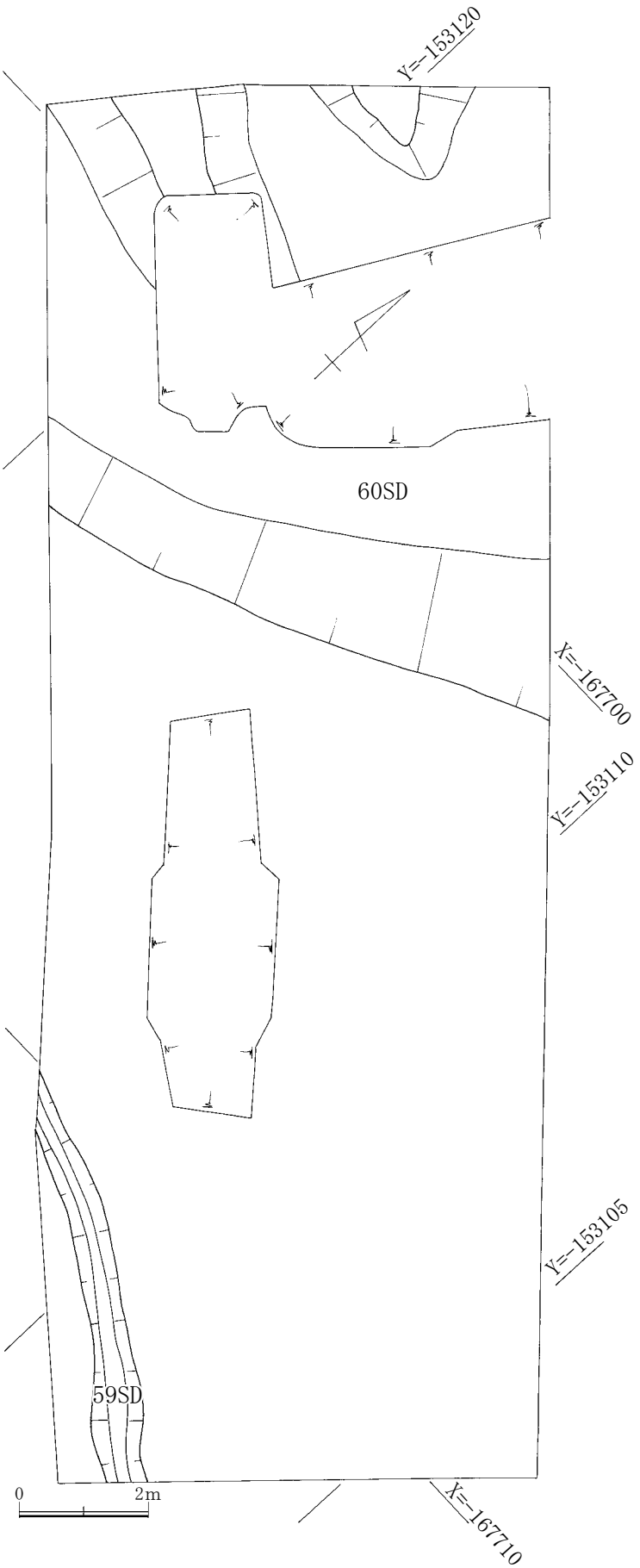
分、北西隅と南側列中間柱は攪乱されていた。主軸はＮ－９°―Ｗである。規模は東側南側とも桁行3.6ｍで、柱間1.8ｍ、中央の束柱もほぼ中央に建てられている。柱穴は直径0.45～0.5ｍ、深さ0.4～0.45ｍで、東列の３本と、中央、南西隅には径0.15～0.2ｍ、深さ0.15ｍ前後の抜取り穴が観察された。柱穴から遺物は出土しなかったが、古墳時代前期頃と考えている。

また、１ＳＢの東６ｍでも１ヵ所であるが柱穴を確認している。

08－17区67ＳＫは57ＳＰの西側で検出した長径0.8ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る楕円形の土坑で、埋土は黄褐色砂質シルトであった。建物より古い土坑で、遺物は出土しなかた。

11ＳＤは08－16区、９区で検出した南東から北北西へ掘られた溝である。種々の埋設物のため上部が攪乱されているが、断面から、掘形は半円形で、中央部は「コ」字形に四角く掘り下げられている。溝の幅は1.1～1.3ｍ、深さは0.5ｍでコ字形の底部は幅0.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は底部が灰色粗砂、半円形の下層が灰色シルト、上層は灰黄褐色～黄灰色砂礫であった。08－13区59ＳＤ（08－15区94ＳＤ）は調査区の南西部で検出した小溝で、南東から西北西に流れる。幅は0.5～１ｍ、深さは0.05ｍ～0.30ｍを測った。埋土は上層が黒褐色から灰褐色の粘質シルトで、下層は主に砂層であった。

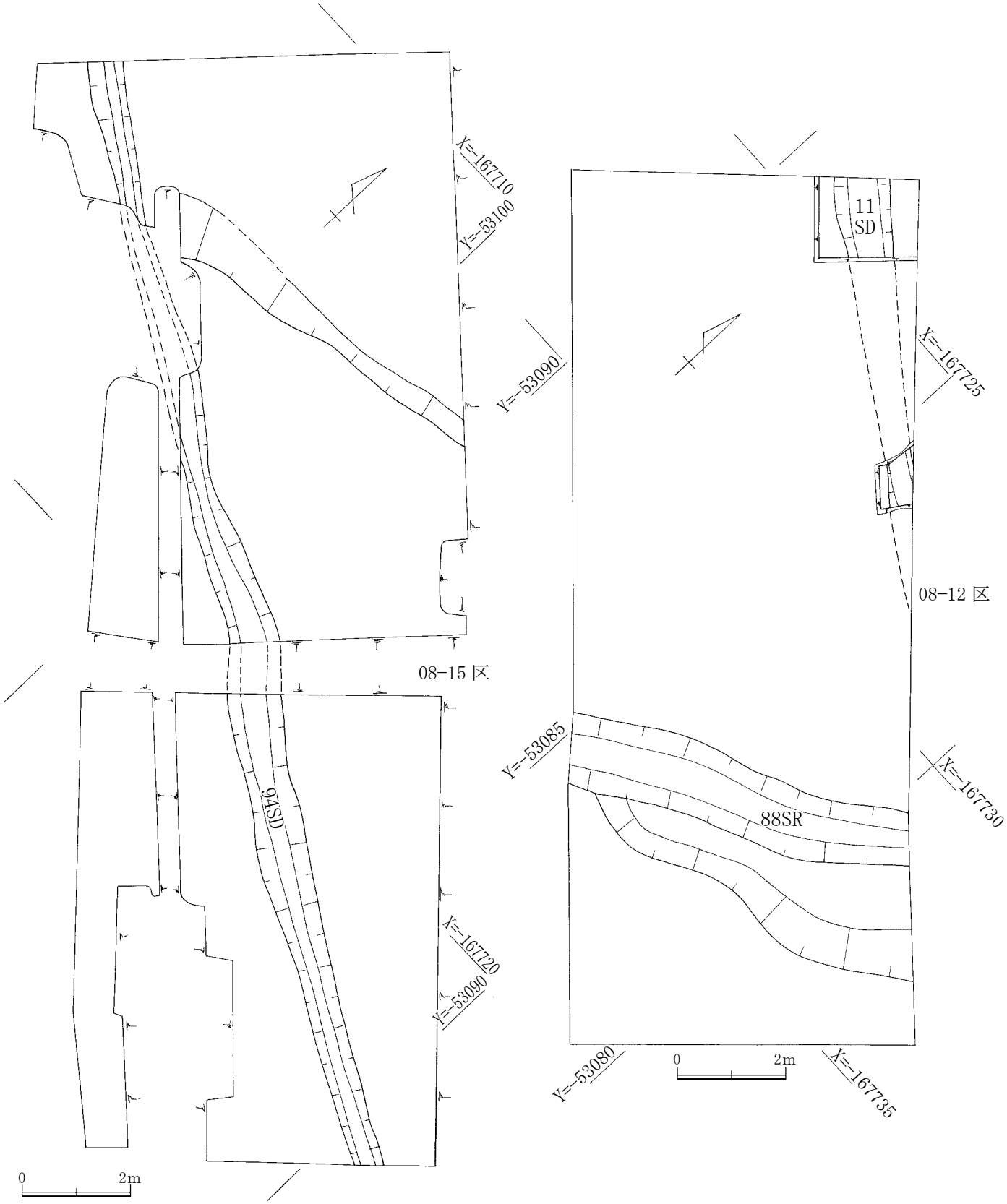
断面の形状がやや異なり、3.5～４



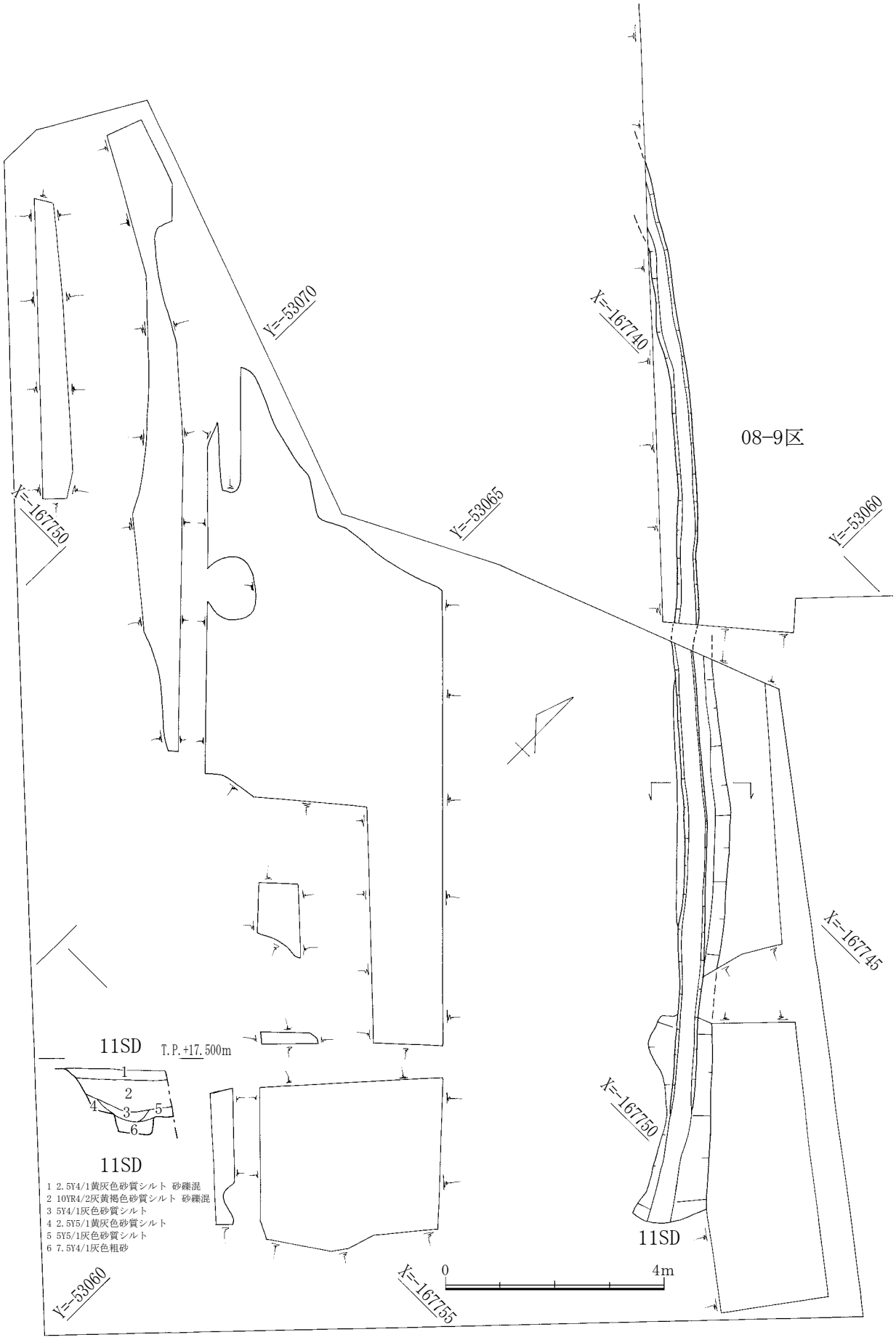
第121図　08－13区第３面平面図

m幅の攪乱（公共下水）が９区と13区の間にあるが、08－９区11ＳＤと13区59ＳＤ（15区94SD）は同一の溝と考えられる。

30・88ＳＲは08－９、12区で検出した東南東方向から西南西へ蛇行、分流する河道で、地山を



第122図　08－15区、12区第３面平面図



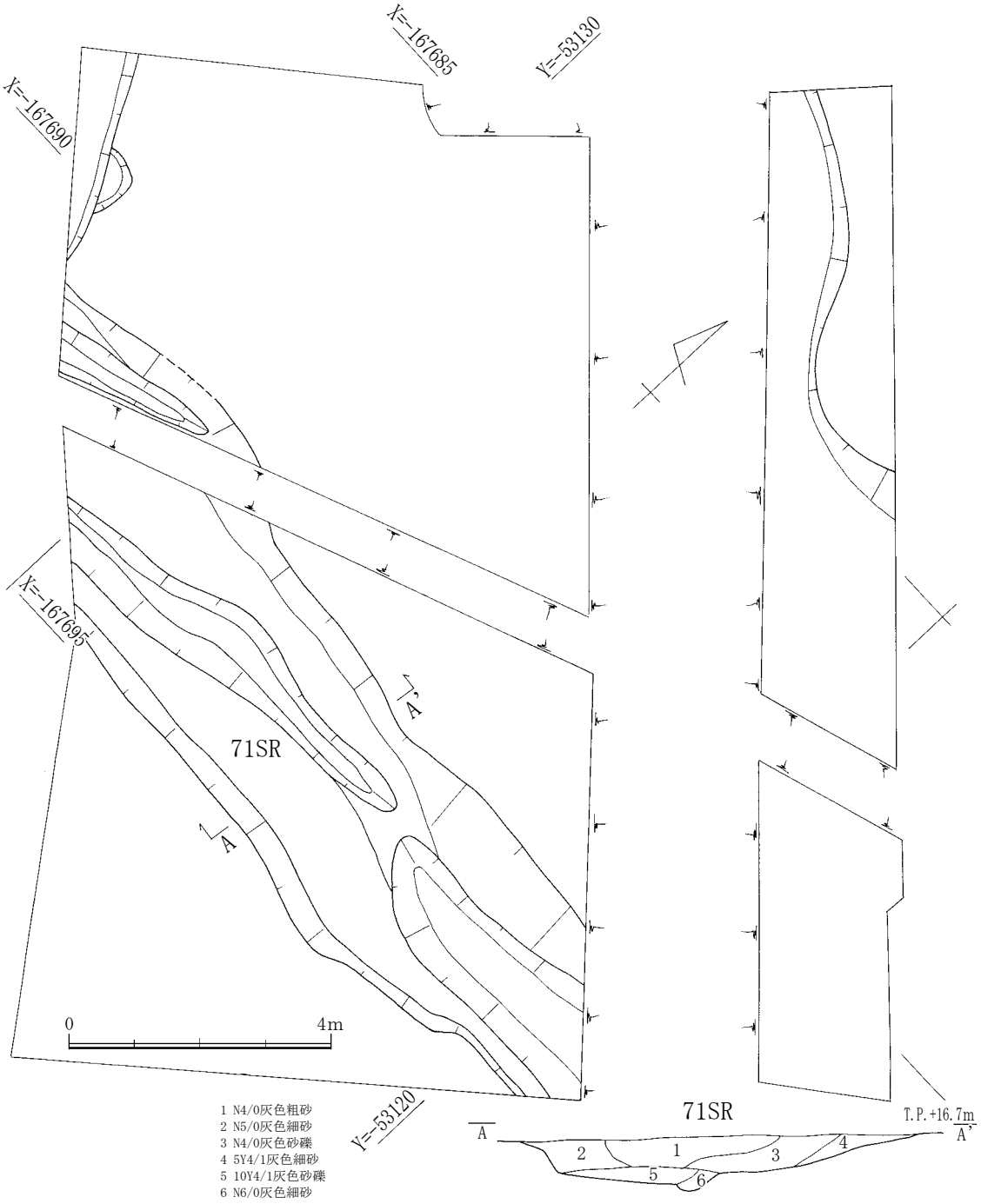
第123図　08－16区第３面平面図　11ＳＤ断面図

複雑に浸食しながら流下している。幅は88ＳＲが1.2ｍ、30ＳＲは３ｍ～７ｍ以上、深さは0.1～0.2ｍを測る。埋土は灰色粗砂～砂礫であった。遺物は出土しなかった。08－９区11ＳＤより古い河道と考えている。

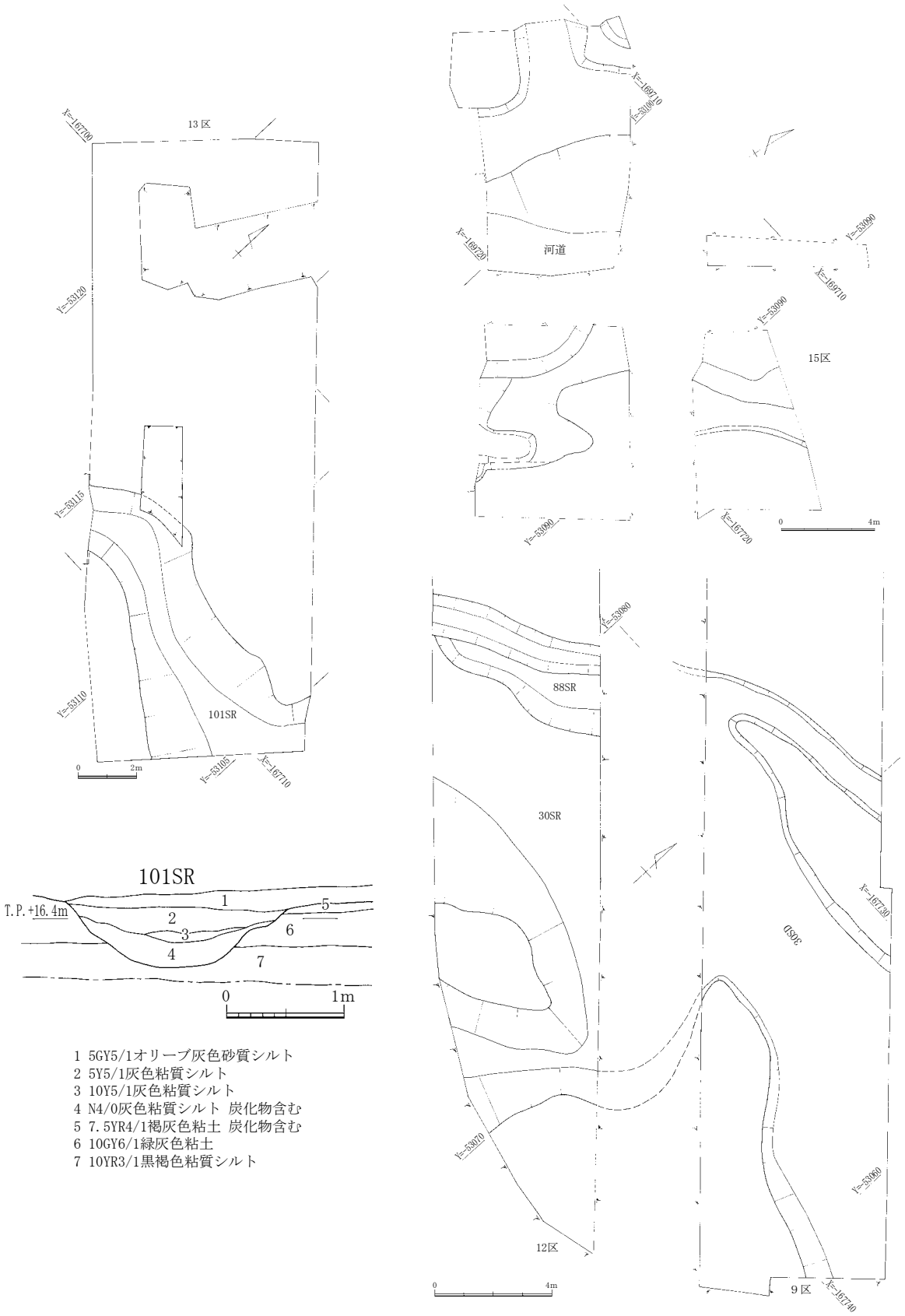
第４面（縄文時代）の遺構

第４面は08－９区でT.P.16.9ｍ、08－17区ではT.P.16.6ｍ前後にある遺構面である。調査区北西部の08－13、15、17区、南東端の16区で河道、08－17区で小土坑を検出している。

08－17区の71ＳＲはほぼ東西に走る河道で、幅3.0ｍ、深さ0.3～0.4ｍを測り、灰色の細砂か



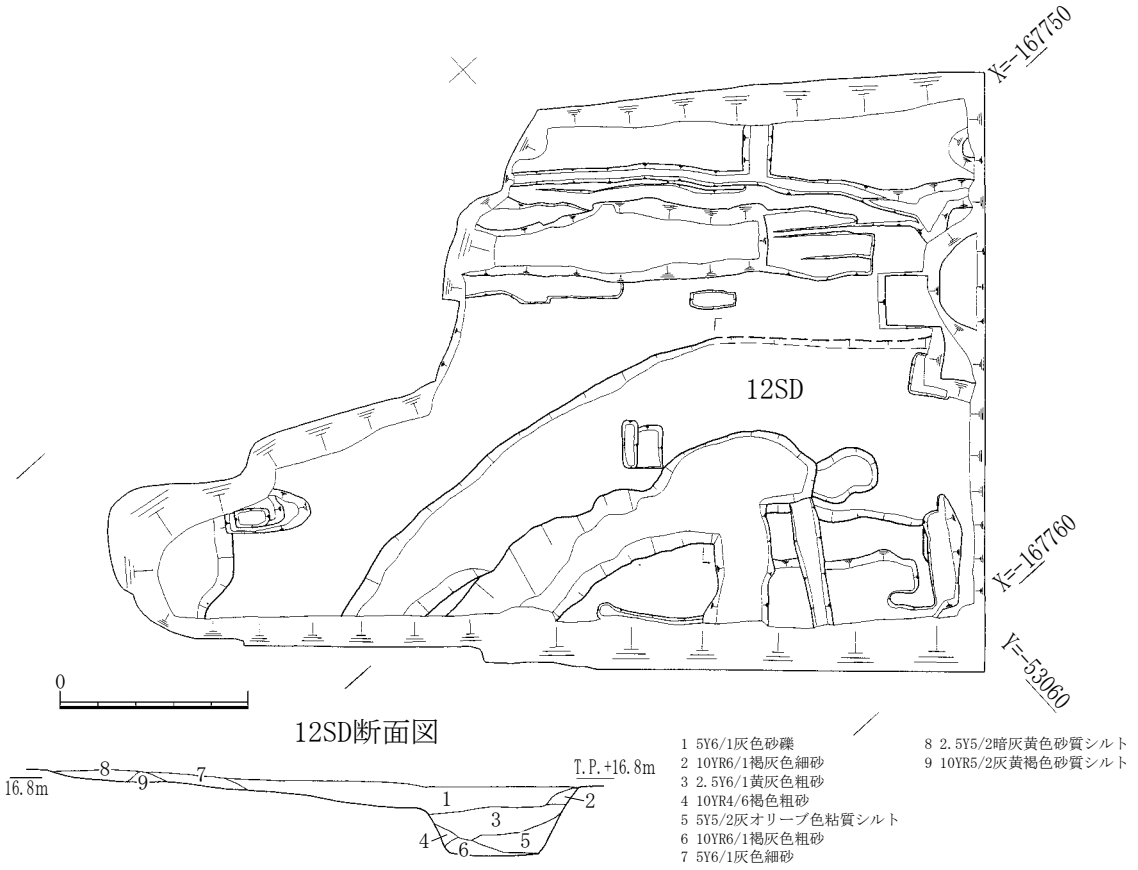
第124図　08－17区第４面平面図　71ＳＲ断面図



第125図　08－13区、15区、９区、12区　第３・４面平面図・101ＳＲ断面図

ら径１㎝までの砂礫が堆積していた。この層から遺物は出土していない。

08－13、15区でも河道を検出している。15区の河道は攪乱が大きく、寸断されているが、北東から南西方向に流れ、幅約13ｍ、深さ約1.6ｍを測る。砂礫が厚く堆積していた。13区の河道60ＳＲは15区から分岐したもので、幅2.5ｍ～4.5ｍ、深さ0.4ｍ前後を測り、砂礫層により充填さ



第126図　08－16区第４面平面図　12ＳＤ断面図

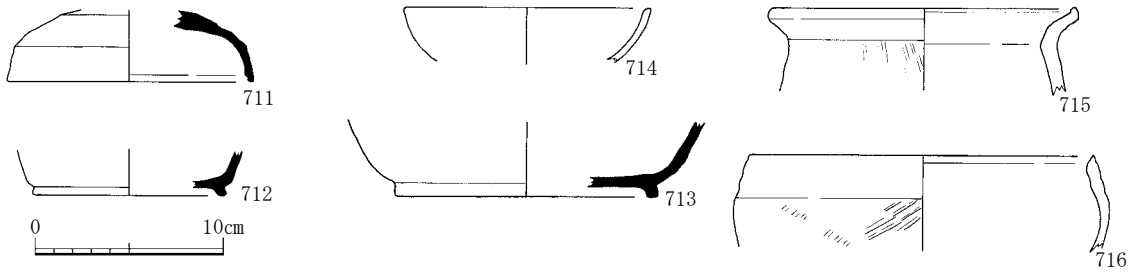
れていた。これらの河道から量は少ないが縄文時代中期末から後期の土器が出土している。

08－16区12ＳＤは南東から西に緩く曲がる河道で、幅45～5.5ｍ、深さ0.9ｍを測った。埋土は灰色砂礫、黄灰色粗砂、灰黄色砂質シルト等であった。わずかではあるが縄文時代後期頃の土器片が出土している。

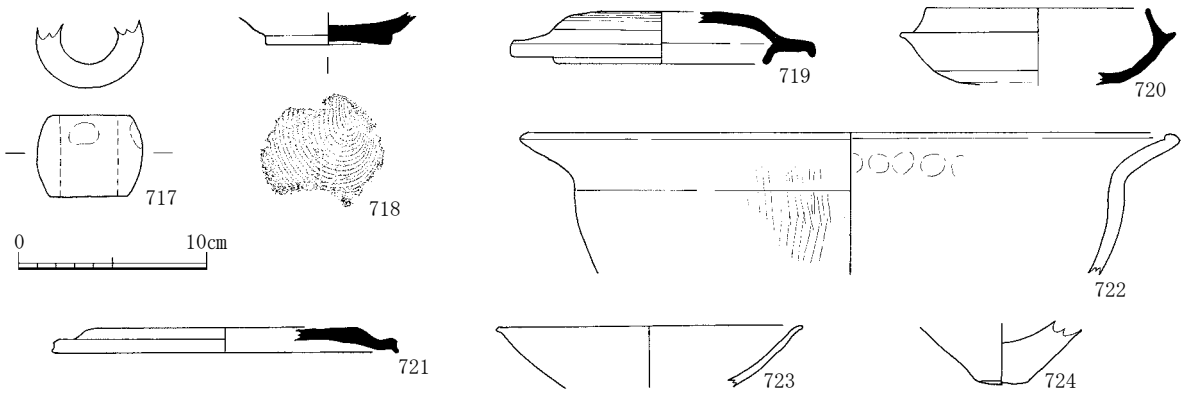
08－９区、12区、13区、15区、16区、17区出土遺物

08－９区出土遺物

711は須恵器杯蓋で、稜が形骸化した段階のもの。口縁部は僅かに開き、端部を丸くおさめる。712､713は坏の高台で､712は内端面が接地する。714は土師器の埦で摩耗が進んでいて調整は残っていない。715は甕口頸部で、胴部外面はハケメ調整である。716は埦で、口縁端部は内傾する面



第127図　08－９区出土遺物実測図



第128図　08－12区、15区、16区出土遺物実測図

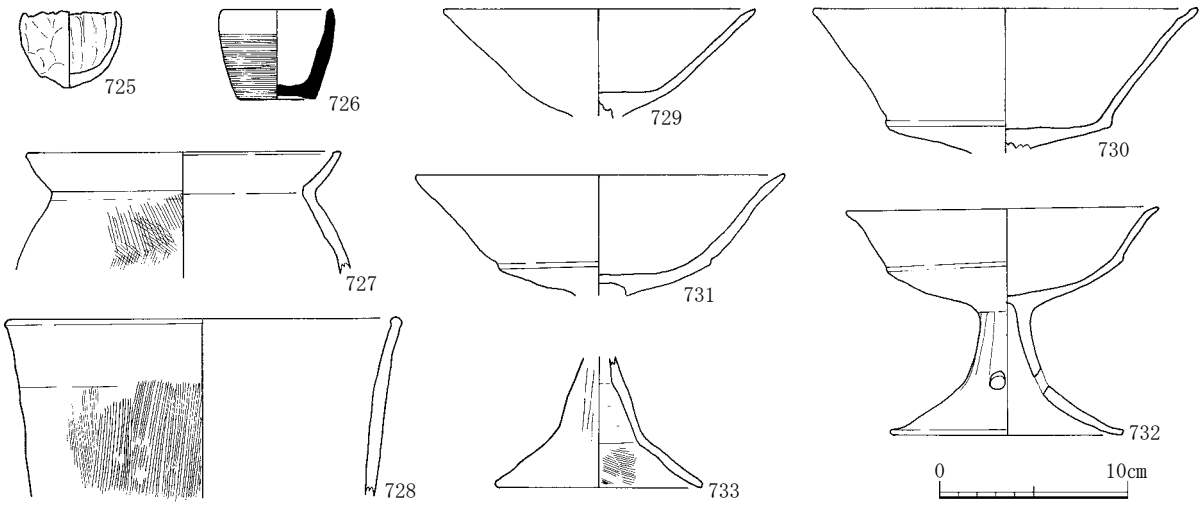
をつくるもの。

08－12区、15区、16区出土遺物（第128図）

717は土錘で、胴部に指頭痕が残る。器高4.3cm、腹径5.6cm、孔の径3.0cm。718～721は須恵器。718は底部で糸切り底である。719は杯蓋で、返りが口縁端部より下に伸びる段階のもの。720は杯身で、口縁部は内傾して立ち上がり、端部は内傾する面をつくる。底部外面は１/２近くまで回転ヘラケズリを施す。722は土師器で鉢で、大きく膨らむ胴部から水平近くまで開く口縁部の端部を僅かに摘みあげ、端部に外傾する面をつくる。平安時代のもの。721は須恵器の蓋で、天井部は平らで、口縁部はＳ字状に屈曲し端部を下に屈曲させる。４－３段階　723は白磁碗で、口縁端部を僅かに外反させておさめる。724は鉢か甕の底部である。717、718は08－12区、719、720、722は08－15区、721、723、724は08－16区出土。

08－17区出土遺物（第129図）

725は手捏ねの埦で、内外面に指頭痕が残る。726は須恵器の鉢で口縁部はナデ、胴部にカキメ調整である。727～733は土師器。727は内弯する甕の口縁部で、端部を内面に肥厚させる。胴部外面はハケメ調整である。728は甑で、口縁端部は僅かに外傾させる。口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ調整である。口径21cm。729～733は高坏で、729は小さな坏部から「ハ」字形に開く口



第129図　08－17区出土遺物実測図

縁部をつくる。730は平らな杯部から外弯気味に立ち上がる口縁部をつくる。731は杯部と口縁の境に段をつくる.732は内弯して開く杯部から外反気味に立ち上がる口縁を付けたもの。口縁端部を丸くおさめる。脚部に３孔を空ける。733は脚部で、屈折して開く裾部をつくる。部と口縁部の境に稜つくり、口縁部は「ハ」字形に開いて立ち上がる。

７．09区

09年（平成21年）はアンダーパス化の起点となる肥子池公園前の現道路部（09－１区）と南西側拡幅部で07－11区とは里道を挟んだ西側（09－２区）の２箇所で調査を実施した。

09－１区

肥子池公園北東の現道路部分である。長さ50ｍ、幅約12ｍの調査区で、下水や関電の高圧線、電話線等の埋管により攪乱されていた。

この調査区では舗装道路の下に旧肥子池の堤体が残っていた。この堤体土を除去した面で近世頃の耕作溝や井戸、近世面を薄く掘削した、T.P.16.7ｍ前後の黄褐色土上面で、弥生時代、古墳時代、中世の遺構を検出した。

近世の遺構

２ＳＥは調査区年南東部のＸ＝－167680ｍ、Ｙ＝－53136ｍ付近で検出した、長径3.2ｍ、短径2.5ｍを測る大型井戸である。ほぼ中央部に1.2ｍ×1.0ｍの木枠を据えている。深さは約２ｍで、木枠内外の褐灰色粘土や黄褐色粘土から近世後期頃の陶磁器類が多数出土している。

３ＳＥは２ＳＥの北西約30ｍ、Ｘ＝167661ｍ、Ｙ＝－53160ｍ付近で検出した。平面形は南北に長軸をもつ楕円形で、長辺約4.6ｍ、短辺4.2ｍを測る。中央やや北寄りに1.2ｍ×1.3ｍの木枠を据える。深さは２ｍ以上で、埋土内から完形を含む多数の陶磁器類が出土している。18世紀以降のものである。

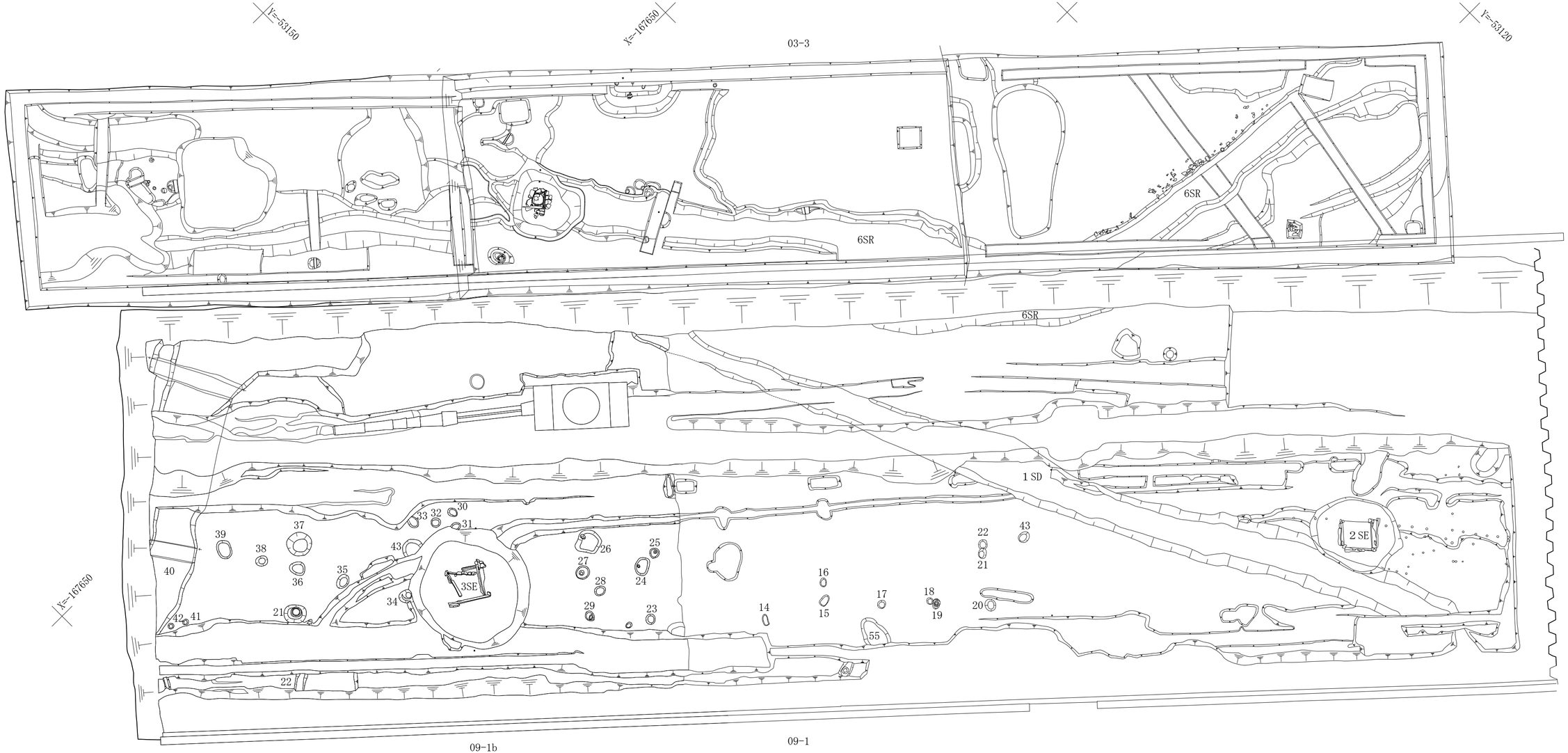
４ＳＤは調査区のほぼ中央、下水管の南西側で検出した溝である。ＳＥの西北からほぼ地割り通りに北西に向かい、３ＳＥの北西側で西に弧を描くように曲がっている。幅0.25ｍ～0.5ｍ、深さは0.1ｍ測る。埋土は褐灰色の砂や粘土で、遺物は出土しなかった。調査区南東部は築堤時堤体修復時に地山を削ったと思われ、溝の掘削痕を確認できない。小溝であるが、肥子池築造時の外郭溝として掘削されたと考えられる。

５ＳＤは４ＳＤの西南側にある溝で、幅0.5ｍ、深さ0.05～0.1ｍを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。06ＳＤは05ＳＤの南西２ｍにあり、平行して掘削されている。幅0.6～0.8ｍ、深さ0.1～0.15ｍを測る。２溝は３ＳＥの西側では観察されなかった。２ＳＥ、３ＳＥと同時期に機能していた溝であろう。

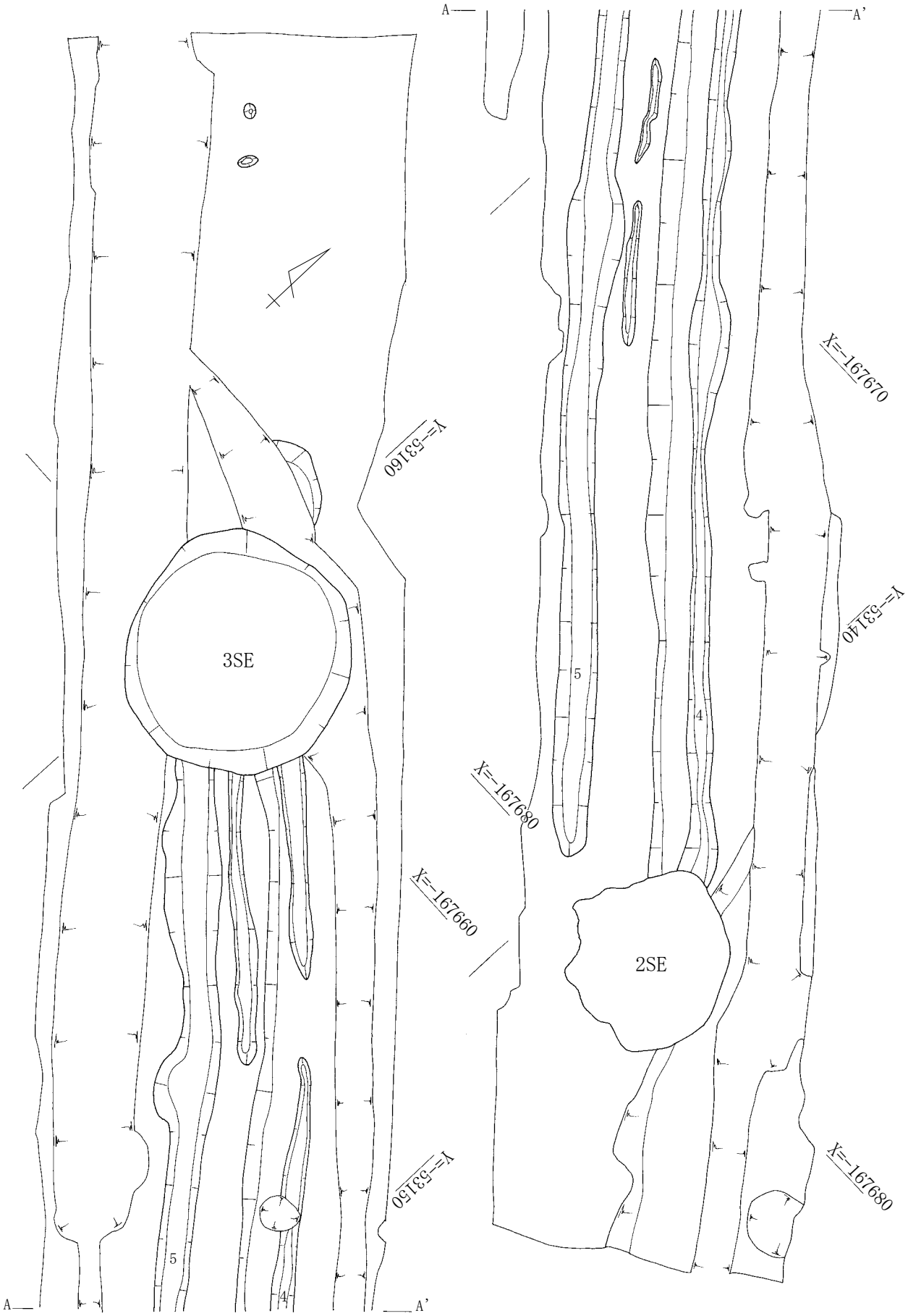
弥生時代から中世の遺構

この調査区では近世面を約0.1ｍ掘り下げた、T.P.16.65～16.7ｍの灰褐色土面で、弥生時代から中世までの遺構が観察される。時期的には弥生時代と古墳時代、鎌倉～室町時代のものがあり、国府が置かれていたとされる奈良時代～平安時代の遺構は確認できなかった。

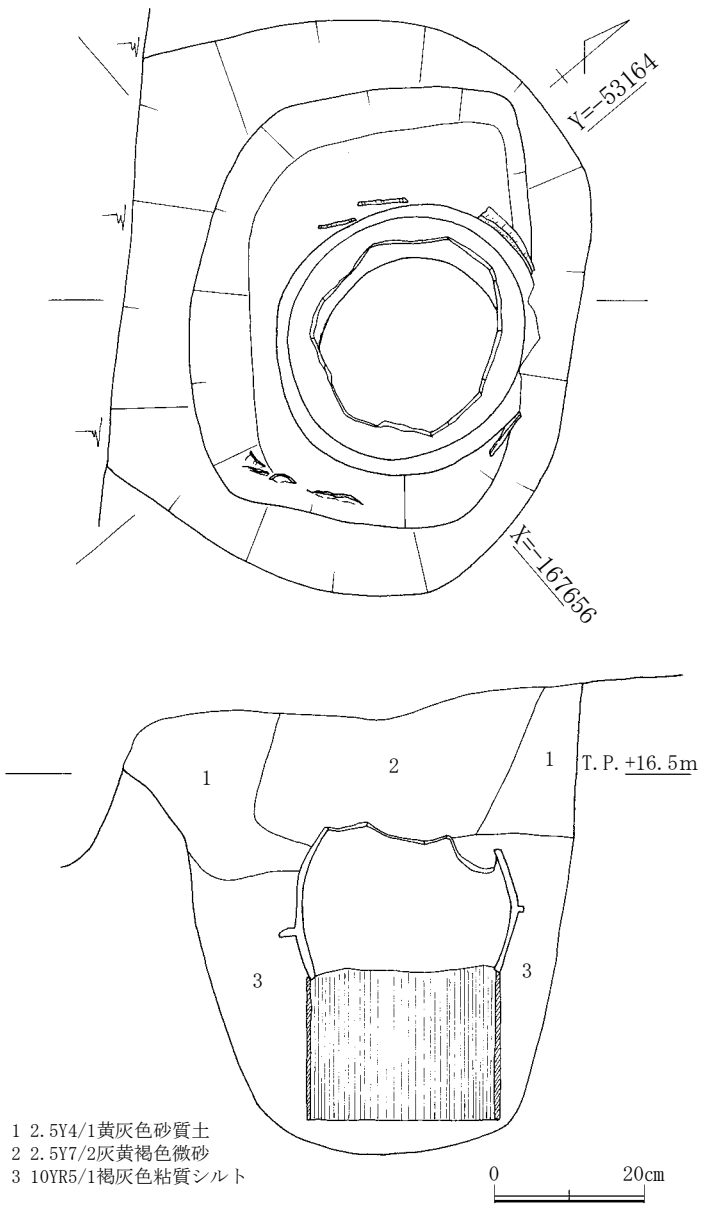
21ＳＥは近世の02ＳＥの西約５ｍで検出した中世の井戸である。平面形は楕円形で、西側は埋



第 130 図　09-1 区第 2 面・03-3 区平面図（S=1/100）



第131図　09－１区第１面平面図（S＝1/100）



第132図　09－１b区21ＳＥ平面・断面図

管により削られているが、長径0.8ｍ、短径0.65ｍ前後の楕円形で、深さ0.6ｍを測る。中央北東寄りに底板を抜いた曲物を据え、その上に底部を打ち欠いた土師質の羽釜を口縁部を下向きにして曲物と重ね、井戸枠としていた。曲物は直径0.3ｍ、高さ0.24ｍを測ったが、劣化が進んでおり、取り上げ時に分解してしまった。また、曲物との組み合わせのあやであろうが、底部を上にする羽釜井戸は珍しい。

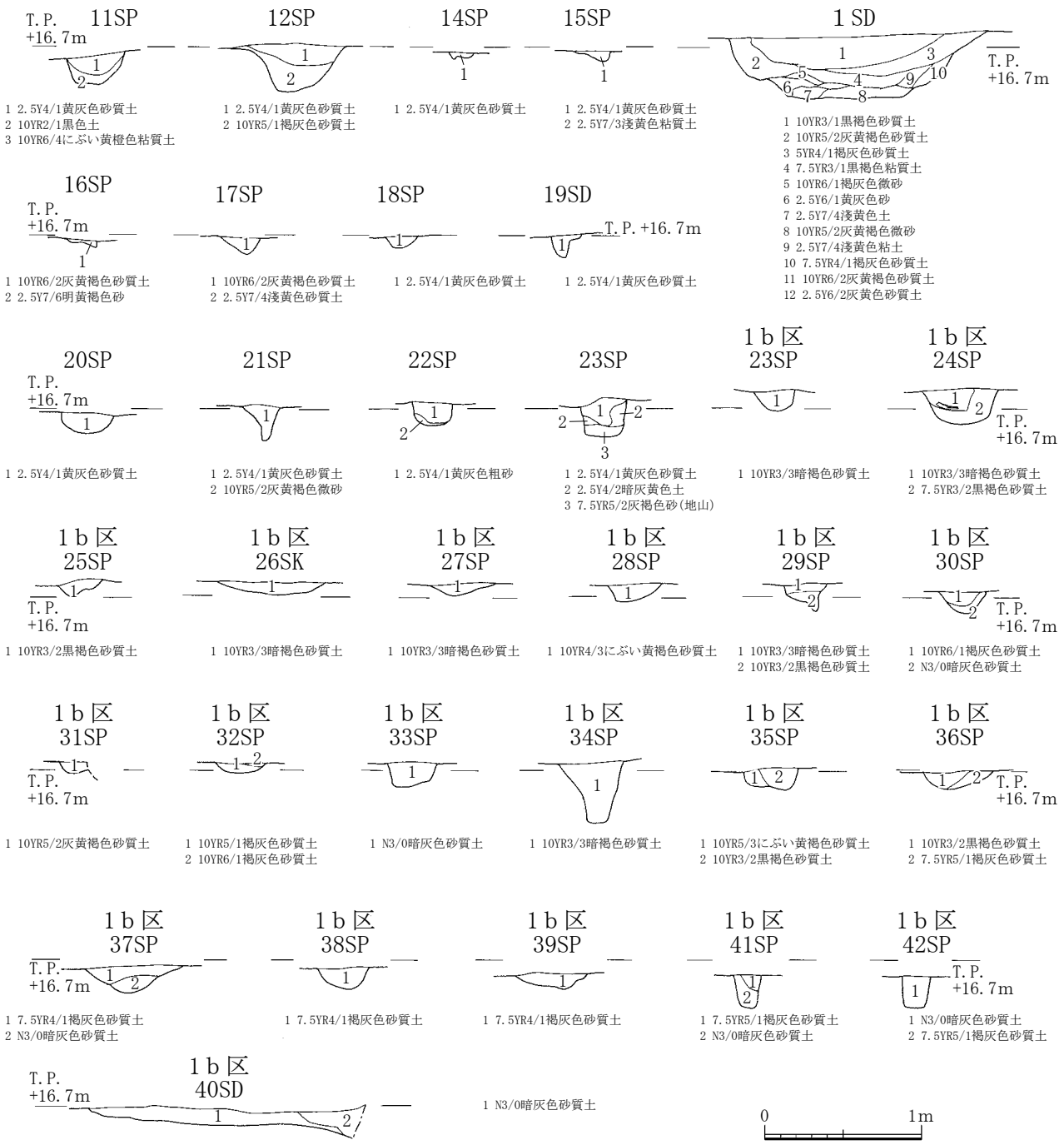
40ＳＤは調査区西北端で検出した、東西流する溝である。07－３区で検出した11ＳＤと同じように、傾斜変換点を利用して掘削されたのか、東側は1.3～２ｍの幅で、なだらかに0.2前後の深さまで掘削され、中央部は幅0.9ｍ、深さ0.3ｍに「Ｖ」字状に掘削されていた。埋土は上層が暗褐色から褐灰色砂礫混粘質土、下層は黒褐色粘土で、弥生時代中期から古墳時代前期頃の土器が出土している。

土坑、ピットは主に３ＳＥ周辺で約20箇の小土坑、ピットを検出している。ピットは径0.2ｍ～0.5ｍ、深さ0.1～0.4ｍを測る。埋土は主に褐灰色土で、柱痕を観察できるものもあったが、概して浅いピットが多かった。鎌倉～室町時代頃のものと考えている。15、17、18ＳＰのように約２ｍ間隔で並ぶものもあるが、この調査区は広く攪乱されており、建物を復元することはできなかった。

37ＳＫは0.90ｍ×0.85ｍを測る円形の土坑で、深さは径0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐灰色シルト質土である。26ＳＫは径0.8ｍ×0.8ｍを測る五角形に近い歪つな方形土坑で、深さ0.15ｍを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。

古墳時代の遺構

１ＳＤは、調査区南東端から北北西方向に流れる掘削断面が逆台形の溝である。幅1.6ｍ～1.9ｍ、深さ0.4ｍ前後を測る。６ＳＲは調査区の北東端で検出した河道で、Ｙ＝－53136ｍ～－



第133図　09－１区各遺構断面図（Ｓ＝1/40）

53142ｍまでの壁面際で観察された。深さは0.15ｍ以上を測る。河道の屈曲端が調査区内にかかっただけであるが、図面を接合した所、03－３区６ＳＲと対応する事が分かった。河道の掘削方法が異なったため肩の位置はやや異なる。古墳時代後期の須恵器や土師器片が出土している。

弥生時代の遺構

55ＳＫは南西側が壊されているが、長径１ｍ以上、短径0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る楕円形の土坑である。時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土が黒褐色土であり、弥生時代の遺構である。

22ＳＫは21ＳＥの南西約１ｍで検出した。埋管間の畦状に残された地山面で検出した遺構で、

長さ0.3ｍ以上、幅0.2ｍを測る。埋土は黒褐色土であった。32ＳＫは55ＳＫの南側、Ｘ＝－167671ｍ、Ｙ＝－53152ｍ付近の畦状に残った地山で検出した遺構で、長さ0.5ｍ以上、幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。土坑の中央に直径0.2ｍのピットが観察される。埋土は黒褐色土であった。これらの遺構は主に黒褐色土で充填されていることから弥生時代中期から後期のものと考えている。

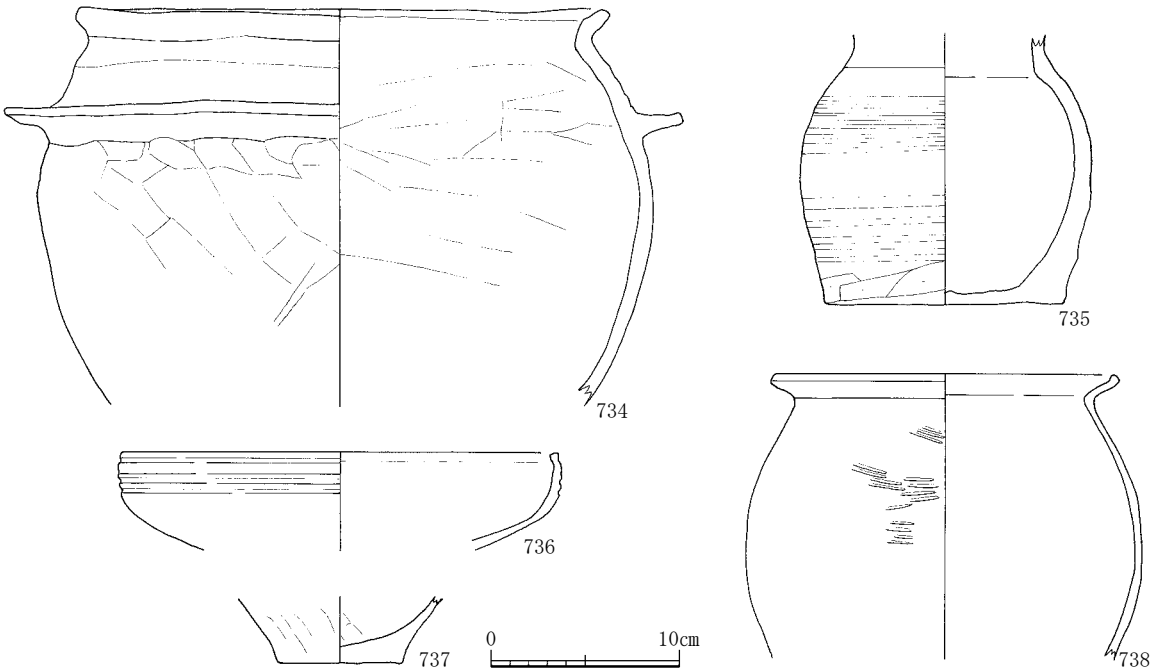
縄文時代の遺構

第２面の調査後、黄褐色土や黄灰色粘土を平面精査しながら徐々に掘り下げ、約0.2ｍ下がったT.P.16.6ｍ付近で２ヶ所の土坑を検出した。101はＸ＝－167672ｍ、Ｙ＝53143ｍ付近で検出した円形の土坑で、南側調査時には確認できず、破壊してしまったが、径1.1ｍ前後を測るほぼ円形の土坑で、深さは0.15ｍを測った。埋土は黄橙色粘土、黒色粘土、褐灰色粘土であった。遺物は出土しなかった。

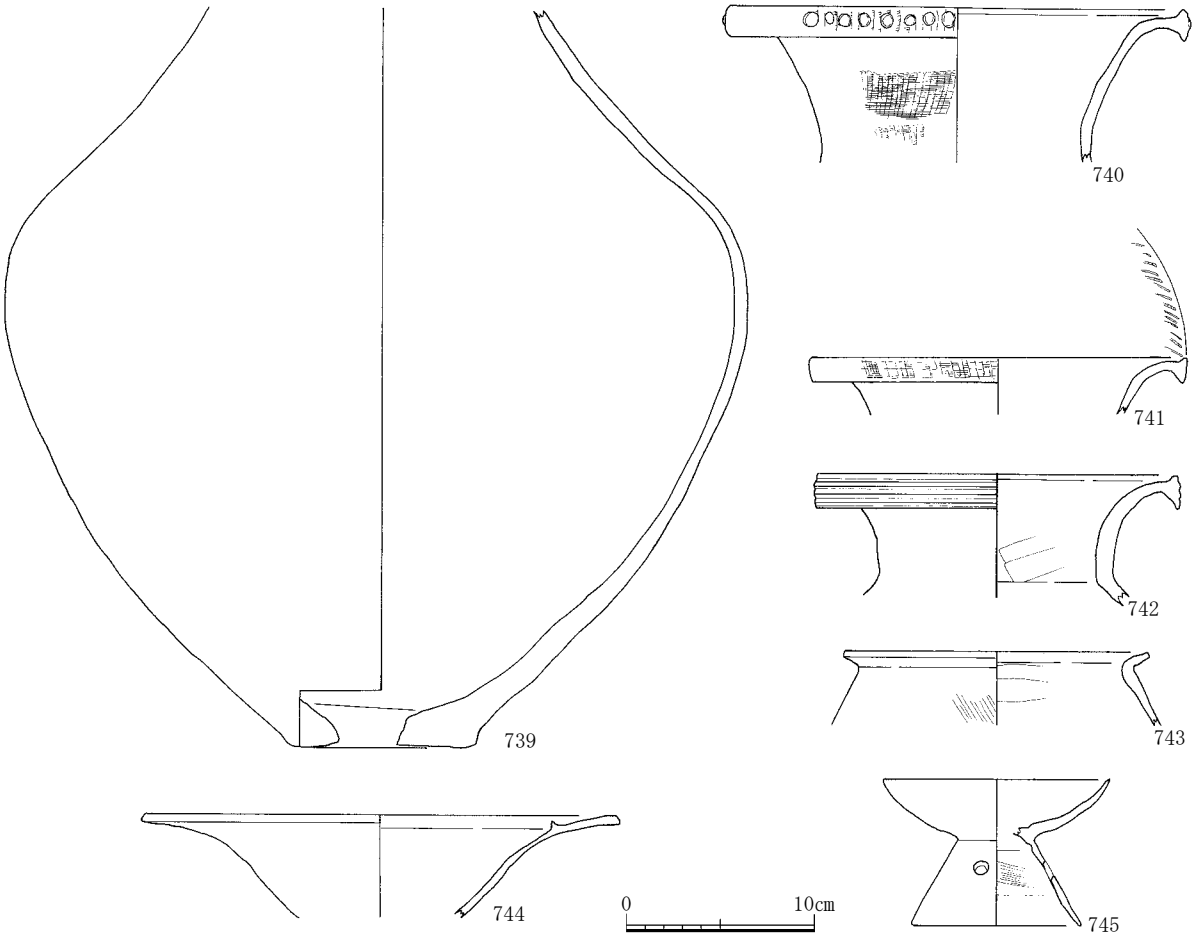
102ＳＫはＸ＝－167671ｍ、Ｙ＝－53134.5ｍ、T.P.16.35ｍ付近の黄灰色粘土層で検出した長径0.85ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る歪な形状の土坑である。埋土は黄灰色粘土で焼土塊を含んでいる。周辺の土中に炭化物粒が含まれていた。いずれも浅い土坑で図は省略した。

09－１b区　21ＳＥ、22ＳＤ、24ＳＤ出土遺物（第134図）

734は井戸枠に利用されていた土師質羽釜、球形の胴部に短く上反り気味に開く鍔を付ける。口縁部は「く」字形外反し、口縁端部は外傾する面を作る。胴部外面はヘラナデ。内面は口縁近くまでヘラナデで仕上げる。735は陶器の甕、大きな底面は無調整。底部はヘラケズリ。僅か



第134図　09－１b区21ＳＥ、22ＳＤ、24ＳＰ出土遺物実測図



第135図　09－１区包含層出土遺物実測図

に脹らむ胴部にカキメ状の浅い条痕が残るが胴部中央はナデで消している。底径12.6cm。備前系と思われるが焼成はあまい。

736は弥生時代中期後半の高坏。斜め上に開く杯部から、内傾気味に立ち上がる口縁部に２条、口縁端部直下に１条の凹線をめぐらせる。口縁端部は面をつくる。737は甕の底部。

738は弥生時代中期の甕、中央で脹らむ胴部から短く「く」の字形に外反する口縁部をつくる。口縁端部を摘まみ上げて外傾する面をつくる。

包含層出土遺物（第135図）

残りの良い弥生土器を中心に取り上げた。739は壺の胴部。近世の耕作土掘削中に、調査区西北端で出土した。上部は破壊されていたが、底面を穿孔しており、壺棺の可能性があるが、掘形は確認できなかった。弥生時代前期中段階頃の器形である。740～742は中期後半の壺口頸部で、外反する口縁端部を上下に拡張する。口縁部外面は２が円形浮文、741は簾状文、742は４条の凹線文をめぐらせる。741は口縁部内面に列点文で飾る。743は甕で中期後半のもの。744は高坏で、杯部と水平に開く口縁部の境に突帯を付けるもので、突帯が退化する時期のもの。745は古墳時代前期の器台。椀形の台部に「ハ」字形に開く脚部を付ける。外面は摩耗しているが、脚部内面

第136図　09－１区近世井戸出土遺物実測図

はハケメとナデが観察できる。３孔の透を開ける。

近世井戸

肥子池の堤体に取り込まれた井戸に投棄されていた陶磁器を３点あげた。746は堺焼き系の擂鉢か。747、748は染付碗で18～19世紀頃のものであろう。

09－２区

第１面

第１面は盛土および旧耕作土・床土の直下にあたり、標高はおおよそT.P.16.2ｍを測る。黄灰色砂質土がベース層である。北西－南東方向に長軸をとる耕作痕11条、土坑２基、小穴９基および不定形の落込み４基を検出した。幅狭い調査区において捉えただけで確定できないが、不定形の落込みは一方向以上が開口状態にあることから水田段差の可能性がある。

水田段差とみられる不定形の落込みからは17～18世紀代の磁器が出土している。また耕作痕のうちの１条からは一重網目文が描かれた磁器小杯が、別の１条からは19世紀代に下る磁器碗が出土している。したがって、第１面の遺構群は主として、近世を通じて形成された水田耕作地の痕跡と考えられる。

第２面

第２面は、第１面下約20cmのT.P.16.0ｍ程の面で、ベース層は褐灰色砂シルトである。検出遺構は、溝11条、畦２条、土坑６基、小穴４基である。10条の溝と畦２条は調査区と平行する北西－南東方向に長軸をとり、１条の溝はそれと直交した方向にある。

溝のうち、調査区のほぼ中央を走行する１条は幅2.0～2.5ｍ、深さ0.2ｍ程で、黄灰色砂シルト・砂質土で埋まっている。用水路の可能性が高い。さらに畦の側溝も存在するので、溝の多くは耕作地に関連したものと考えられる。

用水路と考えた溝からは15世紀前半を中心とする羽釜などの瓦質土器が出土している。遺物が出土した遺構の数は全体に少ないが、出土遺物は15世紀代が主体で、14世紀代と16世紀代のものも少量含まれている。ただし14世紀の遺物は、本来下層に伴うものである可能性は捨てきれない。したがって第２面は15世紀から、遅くとも16世紀にかけて形成された水田耕作地とである考えられる。

第３面（第139図）

第３面は、第２面下約20cmのT.P.15.8ｍ程にあたる。ベース層は、遺跡内外で広域にみられる黄褐色粘土である。第２面と第３面との間の堆積土からは、近世の磁器も少量出土してはいるが、大半は13～15世紀の瓦器、瓦質土器、土師器、土師質土器、瓦である。

第１・２面は近世・中世の水田耕作地であったが、この第３面では土地利用の様相がまったく異なっていた。また上の２面では、それぞれの面において近接した時期の遺構群であったが、第３面で検出された遺構の一部には、明らかに異なる時期のものが存在した。以下に主要遺構をとりあげる。

43ＳＤは調査区に直交する自然河道である。現状幅12.5ｍ、最大深度1.5ｍを測る。砂・砂シルト･砂質土と粘土･粘シルトが互層に堆積していて、緩急のある流水による堆積土の形成であったと推定される。出土遺物は須恵器、土師器、瓦器も少量含まれるが、弥生後期から庄内・布留式期の土器が大半であることから、布留式期に埋没したと考えられる。

出土遺物のうち28点を図示した（749～776）。749～759は弥生中期後半の土器。749・750は壺。751・752は高杯。753は脚付土器の脚部とみられる。754～759は甕。759の口縁部上辺には刻目が施されている。また胴部外面にはハケメが残る。

760・761は弥生後期の広口壺。762は外面をミガキ調整した高杯の脚部とみられる。763・764はＶ様式系甕。

765は胴部に縦位ミガキを施した直口壺。口縁部の開きはやや乏しい。庄内～布留式期。766は外面に縦位ハケメが残り、内面がヘラナデ・ユビナデ調整の甕。庄内式期に比定できよう。768も庄内式期の甕。767・769～771・774は布留式期の甕。772は高杯。庄内式期に遡る可能性もあるが、布留式期のものとみておく。773は庄内式期の鉢。胴部外面下半にヘラケズリを施している。775は鉢の底部。弥生後期～庄内式期。776は蛸壺。時期は不詳。

45ＳＤは調査区の南西辺に沿って延びる自然河道。過半が調査区外に延び出ているため、現状の最大幅は2.5ｍ、深度は0.3ｍを測るにすぎない。堆積土は灰色粘質土、黄灰色粘土を認めるが、これらは上層の状況を示しているにすぎない。

出土遺物は、少量の弥生中期後半の土器を除くと弥生後期の土器であり、その時期に埋没したと考えられる。43ＳＤとは重複関係をもち、この45ＳＤが切り込まれている。この点は出土遺物からみた埋没年代とも整合する。

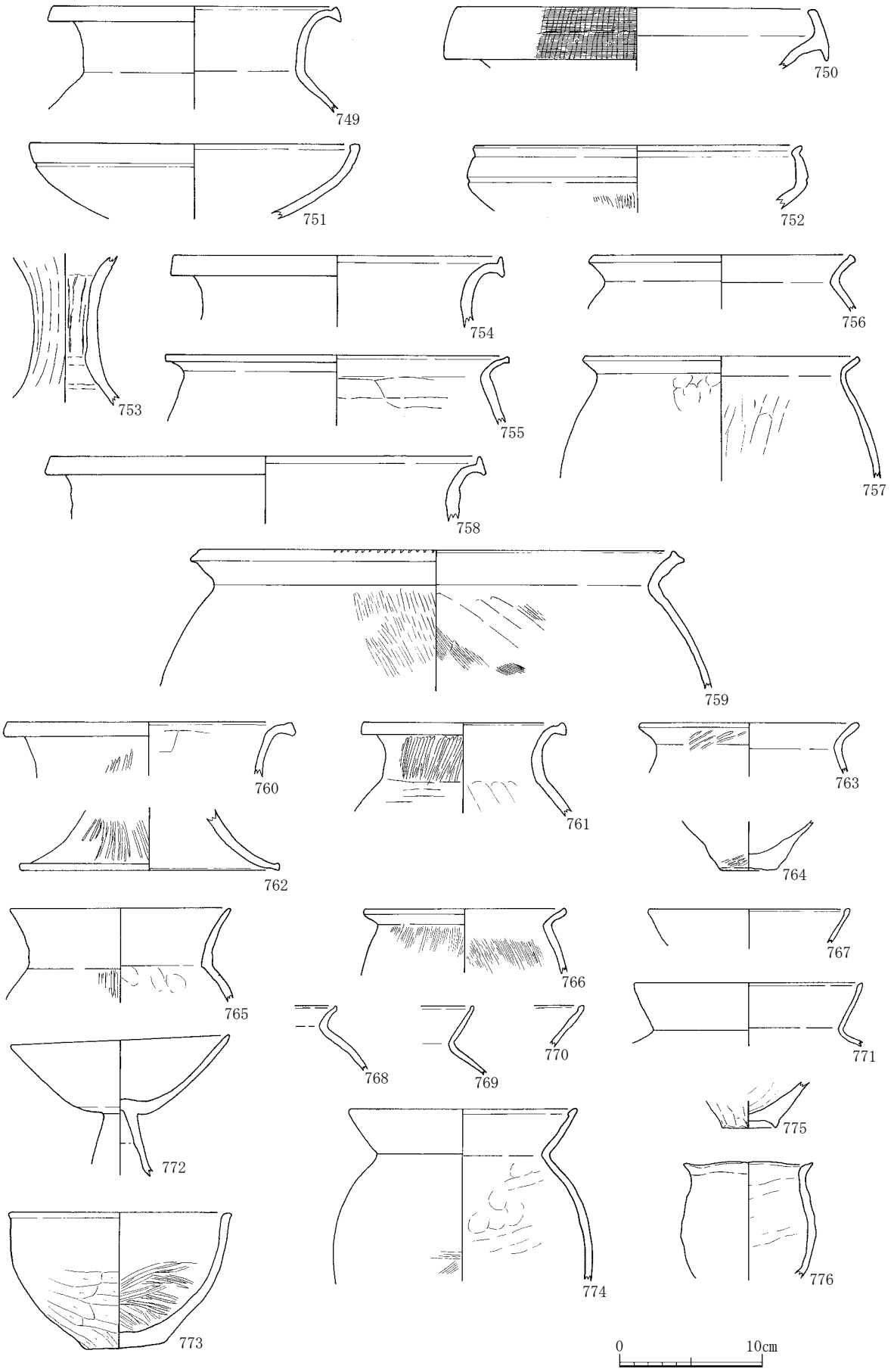
43・45ＳＤの２条の自然河道を除くと、一部古代に遡る可能性をもつ遺構もあるが、大半は中世のものであった。自然河道以外には、溝６条、土坑10基、小穴37基がある。

49ＳＤは調査区に平行して延び、調査区の中央付近で北東方向に直角に折れ曲がる。南東部分は調査区外に延び出ているため、全様は不明。北西－南東方向部分の長さは現状で22ｍを測る。溝幅は0.4～0.5ｍ、深さ0.1ｍで、堆積土は黄灰色砂シルトが主体。瓦質土器の甕が出土していて、14世紀後半～15世紀前葉の溝と考えられる。鍵手状に屈曲する溝の平面形状から、屋敷地の区画溝である可能性が高い。

この49ＳＤの南西先に位置する104ＳＤ、そして104ＳＤと直交方向にある100ＳＤもまた屋敷地区画の溝と考えられる。104ＳＤは幅0.4～0.5ｍ、最大深度0.07ｍで、堆積土は灰黄色砂シルト。また100ＳＤは最大幅0.3ｍ、最大深度0.05ｍで、堆積土は黄灰色砂シルトである。いずれの溝も深度が浅く、上部が削平されているとみられる。

104ＳＤからは少量の土師器皿や瓦質土器の捏鉢が出土していて、それらから14世紀代に時期を求めることができる。したがって49ＳＤとほぼ同時期に存在した区画溝だといえる。100ＳＤからの出土遺物はなかった。

なお、調査区の南東端には、49ＳＤと一部重複した36ＳＫが存在する。出土した遺物のうち東播系の須恵質土器の甕（800）はやや遡る可能性もあるが、瓦質土器の羽釜（801・802）からみと14世紀代の土坑とすることができる。検出状況にみられるように重複関係が確かにあるのか、それとも溝外に収まっていた掘方が後世の影響によって広がり溝を切り崩したのか、判断はでき



第137図　09－２区出土遺物１

ないが、ほぼ同時期の遺構であることは明らかである。なお最大深度は0.3ｍを測り、溝に比べて掘方が深い。

このように49ＳＤや100・104ＳＤによって区画される複数の屋敷地が存在していたと予測される一方で、49ＳＤにより切り崩された溝が存在する。調査区北東辺に沿った52ＳＤである。この溝の0.7ｍ北東には、溝と平行して並んだ小穴群（56・57・60・112・113ＳＰ）が存在している。56・57ＳＰでは土層断面において柱痕が明瞭に認められたので、柱穴であることはほぼ確実である。したがって、建物の柱穴である可能性は高いが、ただ柵列の可能性も否定できない。そして52ＳＤは、屋敷地の区画溝あるいは建物の雨落ち溝だと考えられる。溝の最大幅は0.4ｍ、最大深度は0.1ｍである。堆積土は黄灰色砂シルト。

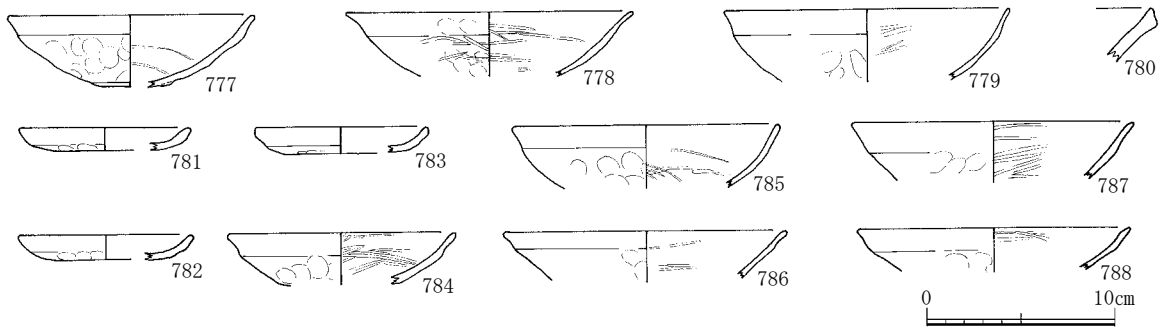
52ＳＤからは高台の作りが整っている土師器碗（805）が出土していて、13世紀の遺構と考えられる。また小穴群のうちの57ＳＰからも瓦器の破片（806）が出土している。口径はやや乏しいが、胴部に深さがありそうな点から12世紀代に収まるであろう。こうしたことから、49ＳＤなどで構成された屋敷地に先行して、（12世紀～）13世紀にも屋敷地が存在したとみられる。

この時期に比定できる遺構には土師器皿（789～792）や瓦器椀（793）が出土した46ＳＫとともに44ＳＤがある。

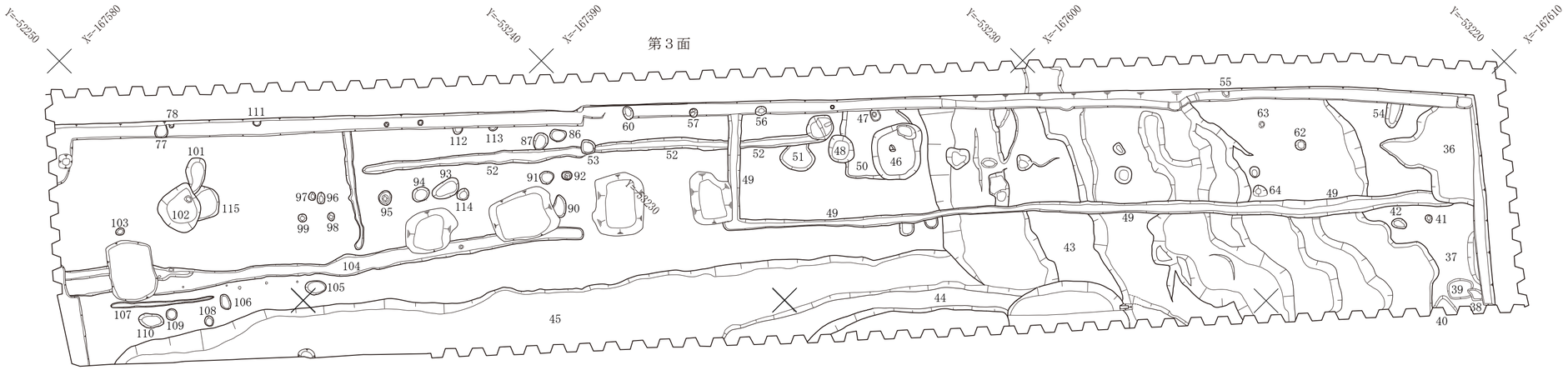
44ＳＤは調査区の南西辺に沿って位置していて、自然河道である45ＳＤを切り込んでいる。大半は調査区外に延び出ている。この溝の南東端には深い掘方があり、井戸とそれに付設された溝の組合せだとみられる。溝は幅約1.0ｍ、深さは最大0.4ｍである。溝底は西方に緩やかに下降していく。堆積土は灰色系の砂質土が主体で、黒色系粘土が若干介在している。井戸は現状最大幅3.5ｍを測る。深さは1.3ｍまで確認した。堆積土は灰色系の粘土・粘シルトが主体だが、掘方の壁際や最上層には砂質土が堆積している。

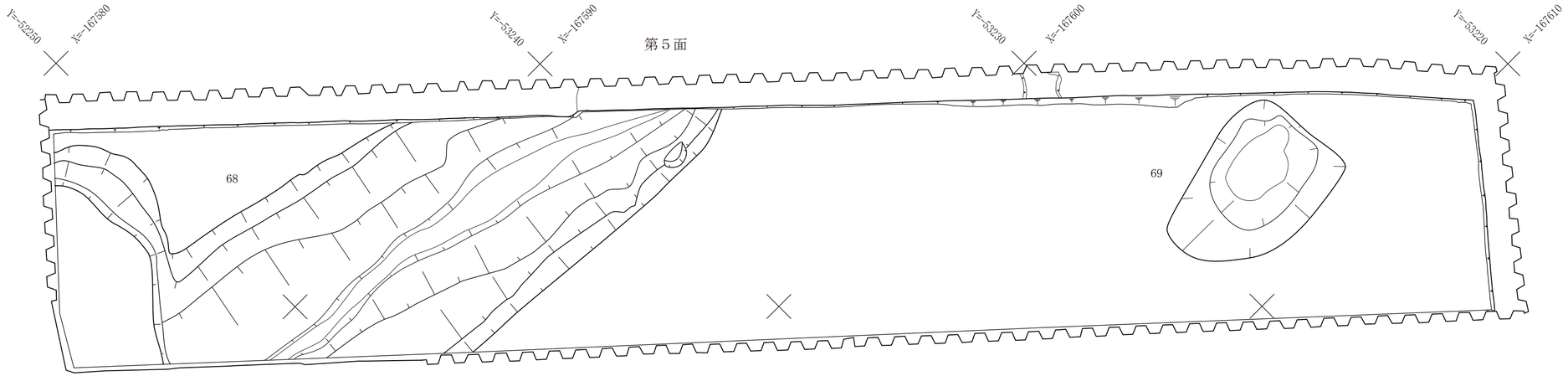
溝および井戸からの出土遺物は比較的多いが、弥生時代や古墳時代の土器も多く出土している。出土遺物のうち12点（777～788）を図示したが、須恵質土器の捏鉢（780）や浅い胴部に紐状に脆弱化した高台が付く瓦器椀（777）、胴部の浅い瓦器椀（786～788）に示されるように、44ＳＤは13世紀後葉に年代付けられ、52ＳＤなどと同時期といえる。

そして56ＳＰをはじめとする小穴群を建物跡とみて、52ＳＤを区画溝あるいは雨落ち溝とすれ



第138図　09－２区出土遺物２





第139図　09-2区第３面・第５面平面図

ば、井戸と溝からなる44ＳＤは屋敷地の南東外方に存在することになる。ところが小穴群が屋敷地を画する柵列とすれば、44ＳＤは屋敷地内に存在する可能性がでてくる。

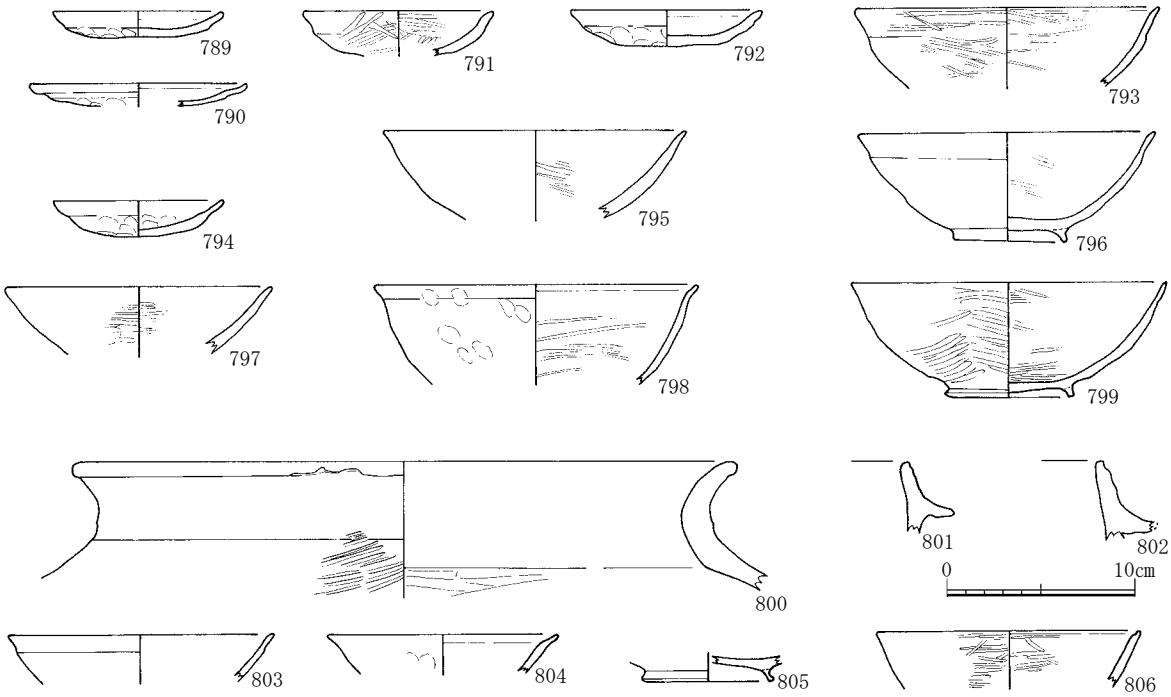
なお自然河道以外で13世紀頃の屋敷地に先行する遺構としては、調査区の北西寄りに位置する95ＳＰと43ＳＤの埋没後に建てられた掘立柱建物がある。

95ＳＰは直径0.5ｍ程の小穴で、深さは0.1ｍである。土師器椀（796）と瓦器（799）が正位状態で出土し、そのほか土師器皿（794）、土師器椀（795）、瓦器椀（797）そして黒色土器（798）の破片も含まれていた。瓦器椀（797）は口径がやや乏しく、胴部が直線的に立ち上がっていて、新しい様相を示しているが、その他の土師器や瓦器は11世紀代に収まろう。

掘立柱建物は55・62・63・64ＳＰからなる。現状１間×２間であるが、河道堆積土上に掘方を設けているため捉えきれなかった可能性はある。この建物は南北方向に主軸をとっていて、区画溝などの屋敷地の構造物の方向とは異なっている。出土遺物はなく、詳細な時期は不明だが、中世の遺構より先行すると考えられる。

第４面

第４面は、第３面下約10cmのT.P.15.7ｍ程にあたる。ベース層は明黄褐色粘土である。第３面で検出された自然河道などの浸食のため、調査区南東半分では遺構面の残りが悪い。調査区南東端で不定形の土坑状落ち込み２基と小穴状落ち込み１基、調査区北西半分で不定形土坑状落ち込み２基と小穴状落ち込み８基を検出したが、いずれも明瞭な掘方ではない。土坑状落ち込みの１基からサヌカイト剥片１点､小穴状落ち込みの１基から土器の小破片１点が出土したにすぎず、落ち込みや遺構検出面の年代を決めることはできない。



第140図　09－２区出土遺物実測図３

第５面（第139図）

第５面は、第４面の下約40cmのおおよそT.P.15.3ｍにあたる。青灰色粘土がベース層である。調査区の北西半分で自然河道（68ＳＤ）１条、南東端付近で土坑状の落ち込み（69ＳＫ）１基を検出した。

68ＳＤは現状の最大幅7.0ｍを測る。深さ1.6ｍまで掘り下げたが、さらに下がるため掘削を止めた。堆積土は、上層に灰色系の砂質土や砂シルトが20cmほどの厚さで認められるが、それ以下では黄色味のある灰色系の砂層であった。いずれの層にも礫が含まれている。

河道の南東岸で縄文時代中期後葉の土器が出土した。ただ、河道内からは土器の小破片が僅かに出土したにすぎないので、河道の埋没年代を中期後葉に求められる可能性は高いが、しかし決定することはできない。

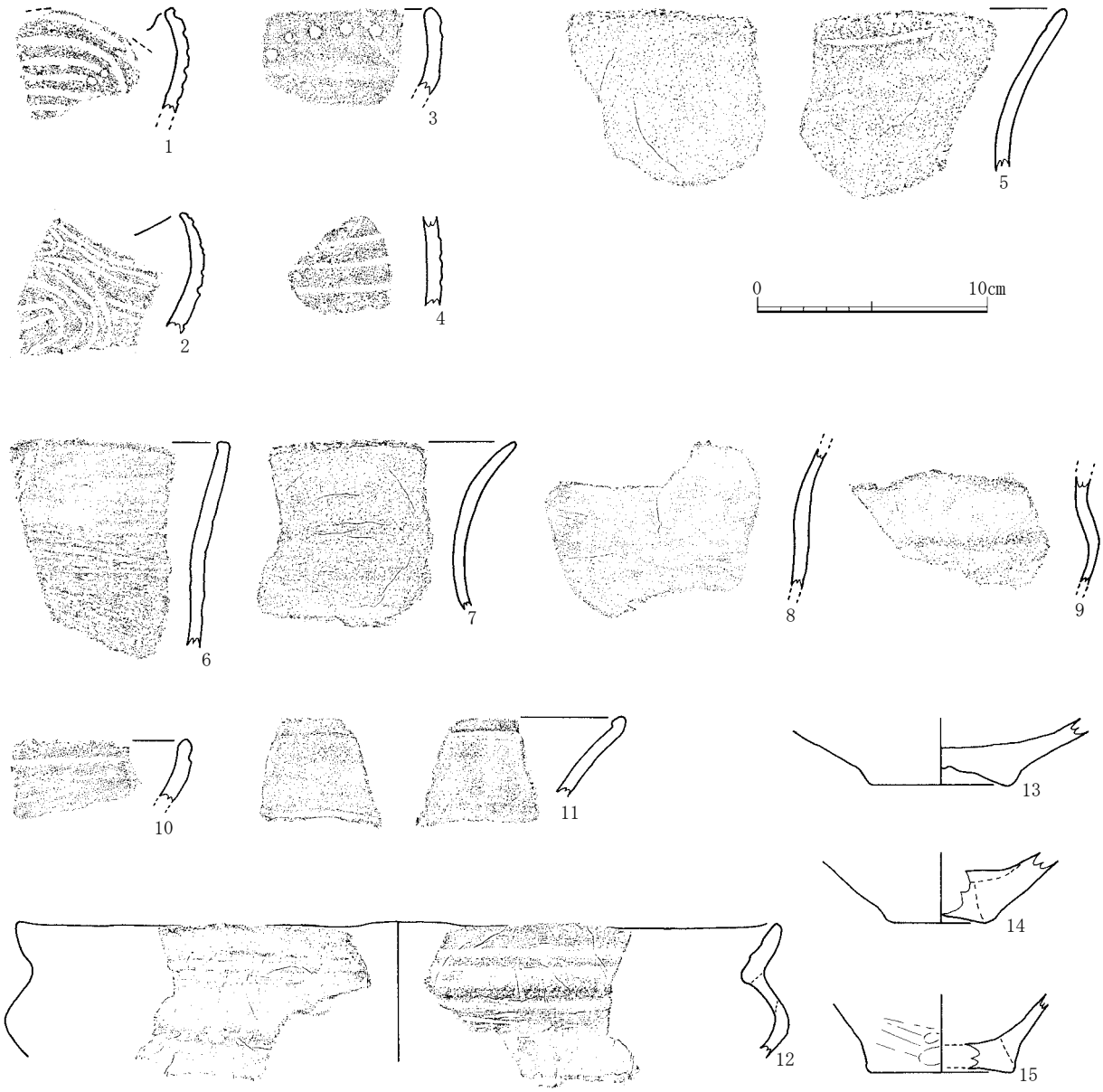
調査区南東端付近で検出された土坑状の落ち込みである69ＳＫは長径5.0ｍ、短径3.6ｍ、深さ0.3ｍ程を測る。堆積土は灰色系砂を基調としている。出土遺物はなく、時期は不明である。

第３節　縄文土器

１．03区（１～15）

03区は豊中遺跡および板原遺跡で2003年度に行った調査である。03－１区および03－２区（03－２－１区と03－２－２区に細分）が板原遺跡、03－３区が豊中遺跡に含まれる。以下に報告する土器のうち、（１～９・11～15）が03－２区出土、(10）が03－３区出土である。

（1・3）は中期後葉北白川Ｃ式深鉢Ａ類とみられるものである。（1）は波状口縁の波頂部で、波頂部に沿う２条の弧状沈線とその内側の短沈線で主文様を描く。短沈線の末端には刺突が認められる。（3）は口縁部に円形刺突文が上向き弧状に施文されている。また口縁部の下端付近にはごく浅い凹線がめぐるようである。口縁部文様が円形刺突文のみというのは類例がないが、こ



第141図　03区出土縄文土器実測図

こでは北白川Ｃ式と理解しておく。

（２・４・５）は後期前葉～中葉とみられるものである。（２）は後期中葉北白川上層式３期の波状口縁深鉢で、波頂下に稚拙な渦巻文を入れ、その脇に横に流れる沈線文を施文する。（４）は沈線が横位に展開するものである。あるいは90度回転させて垂下する沈線と見ることもできる。（５）は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、外面は無文、内面口縁部直下に１条の弧線を入れる。口縁部が微妙に肥厚しており後期前葉のものであろうか。

（６～12）はおおむね晩期中葉と考えられるものである。（６）は口頸部が軽く屈曲する深鉢で、口頸部外面を条痕ののち軽いナデ、胴部はケズリで仕上げる。（７）は口縁部が強く外反し、内外面を丁寧に仕上げていることから、鉢または浅鉢であろう。（８）は口頸部が緩やかに外反する深鉢で、口頸部内外面は二枚貝条痕ののちナデ、胴部外面はケズリである。（９～12）は浅鉢とみられるものである。（９）は頸部内外面を丁寧なナデで仕上げ、胴部内面には条痕が残る。(10)は口縁端部直下に１条の沈線をめぐらせる。内外面ともナデあるいはミガキで丁寧に仕上げており、精良な胎土で色調も灰黄色を呈する。(11) は口縁部が大きく開き、口縁端部が小さく立ち上がるものである。内外面とも磨きで丁寧に仕上げている。(12) はソロバン玉形の胴部に短い口縁部が取り付く浅鉢である。口縁端部にはごく小さな波頂部が認められる。口頸部外面には強いナデがめぐる。口縁部内面には浅い凹線状の施文がある。

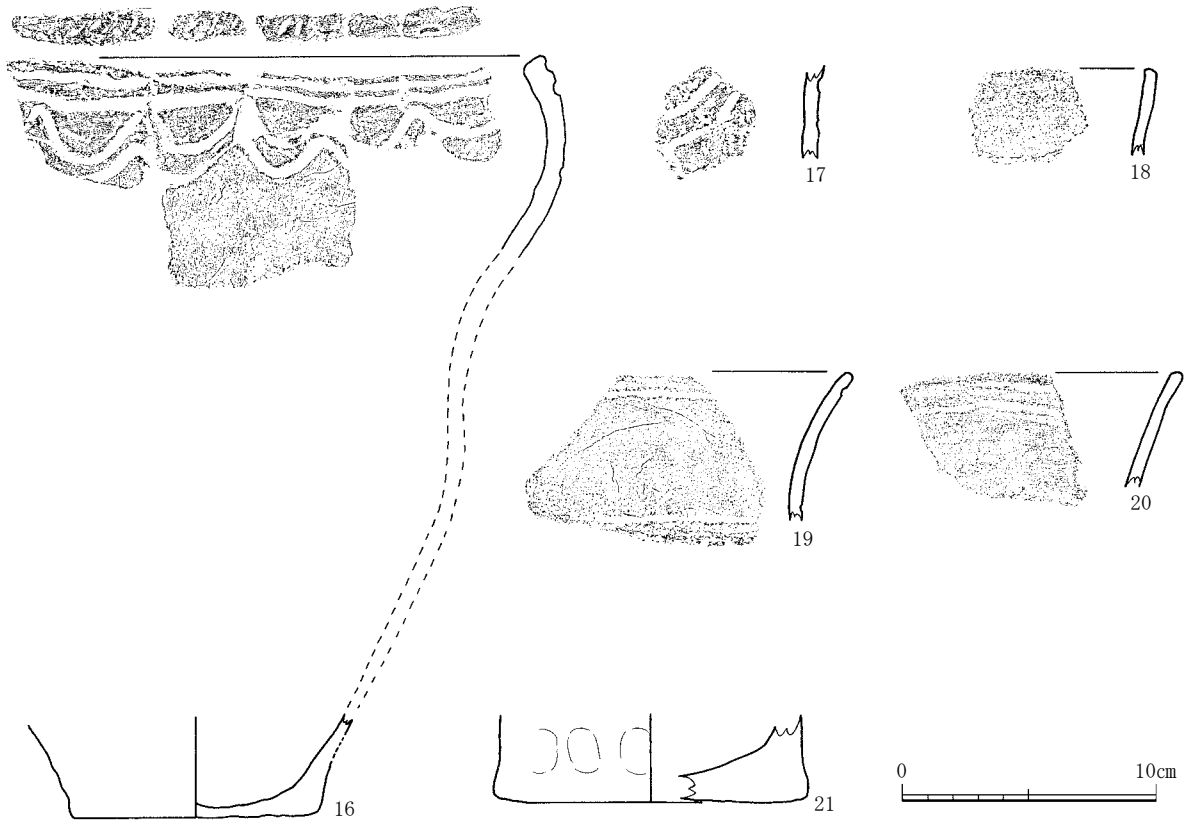
(13～15) は底部である。(14・15) は粘土接合痕が観察される。

２．04区（16～21）

04区は府中遺跡（04－１区・04－２区)、豊中遺跡（池の中につき調査不要)、板原遺跡（04－３区)で行った調査である。府中遺跡については阪和線以西の調査区を本報告書で報告している。

(16・17) は調査範囲北西端にあたる04－３区（板原遺跡）で出土したものである。(16) は土坑内からまとまって出土した土器である。破片数は多いが、小片に分かれ遺存状況も悪く、全形復元には及ばなかった。器形は、口縁部が内弯し、胴部で一旦くびれて胴部下半・底部に至るものと思われる。外面口縁部直下に２条の幅広沈線をめぐらせる。施文は稚拙で、２条の沈線が重複して１条になる部分も認められる。沈線直下には、２条１単位のU字状の連弧文を施文するが、これも稚拙である。この連弧文以下には、現状では文様は認められない。口唇部は軽く面取りし、斜めの軽い刻み目文を連続して施文する。中期後葉北白川Ｃ式深鉢Ａ類のなかのＡ４類（星田式系）としてよかろう。(17) は太い沈線で曲線的文様を描いたものである。土器胎土に砂粒を多く含み、中期後葉と考えておく。

(18～20) は04－１区（府中遺跡）出土で、晩期中葉前後とみられるものである。(18) は口縁部がほぼまっすぐ立ち上がる。(19) は口頸部が外反するもので、浅鉢であろう。口頸部の上端付近と下端付近にそれぞれ１条の沈線をめぐらせる。傾きは不確定である。(20) は口縁部がほぼまっすぐ外に開く。

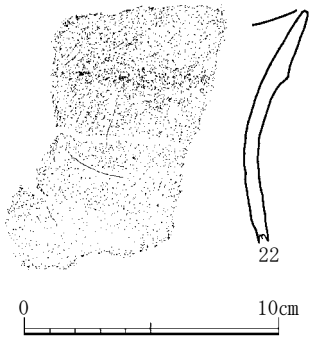


第142図　04区出土縄文土器実測図

(21) は04－２区（府中遺跡）出土である。大型の底部で、内底面に広い平坦部を有する。中期後葉とみてよかろう。

３．07－11区（22）

(22) は07－11区（板原遺跡）出土で、中期後葉北白川Ｃ式の深鉢Ａ類である。口頸部は大きく外に開き、口縁部は波状を呈する。口頸部界でごく軽く屈曲し、そこに隆帯をめぐらせる。口縁部外面にはLの縄文が施文されているが、表面の遺存状況が悪い。胴部にもLの縄文が縦方向に施文されているようだが、現状では十分には確認できない。



第143図　07－11区出土縄文土器

４．09区（23～39）

09区は豊中遺跡（09－１区）および板原遺跡（09－２区）で行った調査である。(23～31・33～36・38) が09－１区（豊中遺跡）出土、(32・37・39) が09－２区（板原遺跡）出土である。

(23～31) は前期の土器である。いずれも縄文施文が認められる。北白川下層Ⅱａ式と考えられる。

(23～27) は２段の縄がL撚りのものである。縄文原体は０段３本撚りで、３つの節のうち１

第144図　09区出土縄文土器実測図

つが大きく深く施文される。１段の縄は２本撚りである。(23・24) の縄文帯上部には結節が認められる。(25～27) も結節があるとみてもよかろう。いずれの土器も結節部を上に置いたが、(24・26・27) は天地逆かもしれない。

(28～30) は２段の縄がＲ撚りのものである。１段の縄は２本Ｌ撚りを確認できるが、０段の縄は３本撚りの可能性を認めるに留まる。いずれの土器も無文帯が上部にくるように置いたが、(29) は天地逆かもしれない。(28) は縄文帯上部に結節があり、無文帯の上はＬＲの縄文となるようだ。(30) も結節が認められる。

(31) は羽状縄文部である。上半がRL縄文、下半がLR縄文である。下半は遺存部分が少ないが、上半の縄文は０段３本撚りである。

これらの土器は色調に幾分かのバラツキがあるが、胎土はよく似ており、長石・石英の細粒を含む点でも共通していて、同一個体の可能性がある。ただしチャートについては認められるものとはっきりしないものがある。また繊維痕らしきものが（25・30）で認められる。

（32～35）は中期後葉北白川Ｃ式土器である。（32）は波状口縁を呈する深鉢Ａ類で、外反する頸部から反転して口縁部が内弯する器形を呈する。口縁端部に平行に幅広の沈線文をめぐらせ、波頂部には横長楕円形区画文を主文様として入れる。主文様の両脇にはやはり横長の区画文を配するようである。横長区画内には刺突文を入れているようにも見えるが、遺存状況が悪く、不確実である。遺存する範囲では頸胴部に文様は認められない。（33）も（32）と同様の土器である。主文様は、区画文の沈線が一部遺存するのみで、大部分が失われている。主文様の脇には横長区画文が施文されるが、主文様に向かってラッパ状に広がって取り付くようである。

（34・35）はまとまって出土しており、同一個体と思われるもので、山形口縁を呈する深鉢C類である。口縁部（34）は直接接合しない２片に分かれており、色調も若干異なるが、胎土や縄文が共通しており、同一個体と見てよかろう。口縁部外面にLR縄文を施文する。胴部（35）も２片に分かれている。胴部文様は屈曲の強い稚拙な波状文を垂下させ、その両側に、２条の沈線間にLR縄文を施文した縄文帯を垂下させて、１単位の文様としている。

（36～39）は底部である。いずれも内底部に広い平坦面を有しており、中期として矛盾ないものである。

参考文献

網谷克彦「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』３　雄山閣　1985

鈴木康二「北白川下層式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション　2008

泉 拓良「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　京都大学埋蔵文化財調査センター　1985

家根祥多「晩期の土器　近畿地方の土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣　1981

家根祥多「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土遺物の検討－」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成４年度科学研究費補助（総合Ａ）研究成果報告書　北海道大学文学部　1994

表１　縄文土器観察表１－１

遺物番号	挿図No.	図版No.	実測No.	登録No.	地区名	遺構層位	器種	法量 cm ( )は復元値				色調	胎土	備考
								口径	器高	底径	その他			
1			404	1020	03-2-2	砂礫層	深鉢					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐 10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石、石英、チャート（非河内）	
2			394	1006	03-2-2	砂礫層	深鉢					内：10YR3/1黒褐 外：10YR3/1黒褐 断：10YR4/1褐灰	長石、石英（河内？）	
3			115	947	03-2-2	砂礫層	深鉢				残 3.8cm	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、チャート（非河内）	
4			405	1020	03-2-1	砂礫層						内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、チャート（非河内）	
5			402	1042	03-2-1	砂礫層（縄文の川）	深鉢					内：2.5Y4/1黄灰 2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/2灰黄 断：2.5Y5/1黄灰	長石、石英、チャート（非河内）	
6			395	1009	03-2-2	砂礫層	深鉢					内：7.5Y3/1オリーブ黒 10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙 7.5YR6/6橙 断：2.5Y7/2灰黄	長石、石英、チャート（非河内）	
7			393	1010	03-2-2	砂礫層	鉢					内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白 断：2.5Y6/1黄灰	長石、石英、チャート（非河内）	
8			396	1009	03-2-1	砂礫層	深鉢					内：7.5Y3/1オリーブ黒 7.5YR5/4にぶい褐 10YR5/2灰黄褐 外：7.5Y5/3にぶい褐 断：2.5Y5/2暗灰黄 2.5Y4/1黄灰	長石、石英、角閃石（河内）	
9			114	944	03-2-2	河川ベース土、0.2ｍまで	浅鉢				残 4.8cm	内：10YR4/1褐灰 外：10YR4/1褐灰 断：2.5Y3/1黒褐	長石、石英、雲母、角閃石（河内）	
10			278	733	03-3	35SD	鉢					内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR7/3にぶい黄橙	長石、石英、チャート（非河内）	
11			403	1020	03-2-1		浅鉢					内：2.5Y3/1黒褐 外：N3/0暗灰 10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英	
12			116	955	03-2-2	不明	浅鉢	(33.0)	残 5.85			内：10YR3/2黒褐 外：10YR3/2黒褐 断：10YR5/2灰黄褐	長石、石英、角閃石？（河内？）	
13			407	992	03-2-1	砂礫層	（底部）		残2.6	6.0		内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/6橙 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、チャート、粗粒礫含む（非河内）	
14			406	1005	03-2-1	砂礫層	（底部）		残3.1	(4.0)		内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 5YR7/4にぶい橙 断：10YR4/1褐灰	長石、石英、チャート（非河内）	

表１　縄文土器観察表１－２

遺物番号	挿図No.	図版No.	実測No.	登録No.	地区名	遺構層位	器種	法量 cm ( )は復元値				色調	胎土	備考
								口径	器高	底径	その他			
15			392	1010	03-2-2	砂礫層	(底部)		残 3.4	(6.2)		内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR6/6橙 断：2.5Y4/1黄灰	長石、石英、チャート、粗粒礫含む（非河内）	
16			22	320, 322, 323, 324, 327, 334, 337, 344	04-3-3	3面 16ＳＫ	深鉢		残4.1	9.8		内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/2灰黄 5Y3/1オリーブ黒 断：5Y7/1灰白 内：2.5Y7/2灰黄 5Y5/1灰 外：2.5Y7/2灰黄 2.5Y4/1黄灰 断：2.5Y7/2灰 黄 粗（5㎜ 以下の礫含む）	長石、石英（非河内）	
17			62	353	04-3-3	足跡面	深鉢					内：7.5YR6/4にぶい橙 10YR6/2灰黄褐 外：7.5YR6/4にぶい橙 10YR6/2灰黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、チャート、粗粒礫含む（非河内）	
18			60	119	04-1	第１ベース土0.4m 付近	深鉢					内：2.5Y4/1黄灰 外：10YR4/1褐灰 断：10YR4/1褐灰	長石、石英、チャート？	
19			61	88	04-1	2面ピット内	深鉢					内：2.5Y6/2灰黄 7.5Y3/1オリーブ黒 外：10YR5/2灰黄褐 断：2.5Y6/2灰黄	長石、石英、雲母、角閃石（河内）	
20			59	121	04-1	第１ベース土0.2～0.3mまで	深鉢					内：5Y3/1オリーブ黒 外：5Y3/1オリーブ黒 10YR5/3にぶい黄褐 断：5Y3/0オリーブ黒	長石、石英、角閃石、粗粒礫含む（河内）	
21			58	127	04-2	近世（1.5面）流路内	底部		残3.5	(12.0)		内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/6橙 断：10YR7/3にぶい黄橙 7.5Y4/1灰	長石、石英、チャート、クサリ礫（非河内）	
22			193	198	07-11	135SR	深鉢					内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/2灰黄 断：2.5Y6/1黄灰	長石、石英、チャート、粗粒礫含む（非河内）	
23			83	216	09-2		深鉢？					内：10YR6/2灰黄褐 10YR4/1褐灰 外：5Y3/1オリーブ黒 断：5Y3/1オリーブ黒	長石、石英、チャート	23～31は同一固体か？
24			85	216	09-2		深鉢？					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：5Y3/1オリーブ黒 断：2.5Y6/2灰黄 2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、チャート	
25			84	216	09-2		鉢					内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/2にぶい黄橙 10YR4/1褐灰 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、チャート	繊維？
26			88	216	09-2		鉢					内：2.5Y7/2灰黄 外：10YR5/2灰黄褐 断：2.5Y7/2灰黄 10YR6/3にぶい黄橙	長石、石英	
27			89	216	09-2		鉢					内：2.5Y7/2灰黄 外：10YR5/2灰黄褐 断：2.5Y7/2灰黄	長石、石英	

表１　縄文土器観察表１－３

遺物番号	挿図No.	図版No.	実測No.	登録No.	地区名	遺構層位	器種	法量 cm ( )は復元値				色調	胎土	備考
								口径	器高	底径	その他			
28			87	216	09-2		鉢					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR4/1褐灰 断：10YR7/2にぶい黄橙	長石、石英、チャート	
29			91	216	09-2		鉢					内：10YR7/2にぶい黄橙 10YR5/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐 断：10Yr6/3にぶい黄橙	長石、石英、チャート	
30			86	216	09-2		鉢					内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR4/1褐灰 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英	繊維？
31			90	216	09-2		鉢					内：2.5Y8/2灰白 外：10YR4/2灰黄褐 断：2.5Y8/2灰白	長石、石英	
32			64	145	09-1	灰色砂礫	深鉢					内：10YR7/2にぶい黄橙 10YR4/1褐灰 外：10YR7/2にぶい黄橙 10YR4/1褐灰 断：10YR7/2にぶい黄橙 10YR4/1褐灰	長石、石英、チャート（非河内）	
33			65	212	09-2	68ＳＤ	深鉢					内：2.5Y灰黄 外：2.5Y7/1灰白 断：2.5Y7/1灰白	長石、石英、チャート（非河内）	
34			63	161	09-2	青灰色粘土	深鉢					内：2.5Y7/2灰黄 2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y4/1黄灰 10YR5/1褐灰 断：2.5Y6/1黄灰 2.5Y7/1灰白	長石、石英、チャート（非河内）	34,35は 同一個体か？
34			60	161	09-2	青灰色粘土	深鉢					内：2.5Y7/2灰黄 2.5Ｙ5/1黄灰 外：10YR5/2灰黄褐 10YR3/1黒褐 断：5Y5/1灰 2.5Y6/2灰黄	長石、石英、チャート（非河内）	34,35は 同一個体か？
35			62	151	09-2	43ＳＤ 黄灰色粘土	（底部）		残2.4	7.8		内：10YR4/1褐灰 外：7.5YR6/3にぶい褐 断：7.5YR4/1褐灰	長石、石英、角閃石（河内）	
36			66	144	09-1	灰色粗砂	（底部）		残3.7	(9.8)		内：2.5Y8/2灰白 外：5YR7/4にぶい橙 7.5YR8/3浅・黄橙 断：2.5Y7/1灰白	長石、チャート、クサリ礫（非河内）	
37			61	216	09-2	青灰色粘土	（底部）		残3.2	12.0		内：2.5Y8/1灰白 2.5Y6/1黄灰 外：10YR5/2灰黄褐 5Y8/2灰白 断：5Y5/1灰 2.5Y7/2灰黄	長石、石英	繊維、微小種子痕？
38			80	43	09-1	黒褐色土	（底部）		残 2.05	(9.2)		内：2.5Y4/1黄灰 外：10YR6/3にぶい黄橙 10YR3/1黒褐 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、角閃石（河内）	
39			80	43	09-1	黒褐色土	（底部）		残 2.05	(9.2)		内：2.5Y4/1黄灰 外：10YR6/3にぶい黄橙 10YR3/1黒褐 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、角閃石（河内）	

第４節　縄文時代のまとめ

本章では和泉中央線整備事業に伴う府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡（以下、３遺跡を併記する場合は府中・豊中・板原遺跡と表記する）発掘調査の、縄文時代にかかる調査成果をまとめておく。個々の内容は３冊の報告書『府中遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2010－５、2010年10月）、『府中遺跡Ⅱ』（大阪府埋蔵文化財調査報告2010－10、2011年３月）、『府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡』（本書）を参照されたい。土器型式については表２に掲げた。網掛したものは府中・豊中・板原遺跡で出土している土器型式である。また、表３にすべての調査区における縄文時代の調査概要を記した。調査概要が空白になっているものは、縄文時代の遺構遺物が確認されなかった調査区である。なお、本章での調査区表記は、調査番号を省略せず、08002－４区（『府中遺跡Ⅱ』では08－４区と表記）などとし、必要に応じて遺跡名を括弧書きした。

表２　縄文土器編年表

前　期	前葉	羽島下層Ⅱ式
		北白川下層Ⅰa式
		北白川下層Ⅰb式
	中葉	北白川下層Ⅱa式
		北白川下層Ⅱb式
		北白川下層Ⅱc式
	後葉	北白川下層Ⅲ式
		大歳山式
中　期	前葉	鷹島式
		船元Ⅰ式
	中葉	船元Ⅱ式
		船元Ⅲ式
	後葉	船元Ⅳ式
		里木Ⅱ･Ⅲ式
		北白川C式
後　期	前葉	中津Ⅰ･Ⅱ式
		福田KⅡ式
		四ツ池・芥川式
		北白川上層式1期
		北白川上層式2期
	中葉	北白川上層式3期
		一乗寺K式
		元住吉山Ⅰ式
	後葉	元住吉山Ⅱ式
		宮滝1･2式
		滋賀里Ⅰ式
晩　期	前葉	滋賀里Ⅱ式
		滋賀里Ⅲa式
	中葉	篠原式古段階
		篠原式中段階
		篠原式新段階
	後葉	滋賀里Ⅳ式
		口酒井、船橋式
		長原、水走式

（網掛は府中･豊中･板原遺跡出土型式）

１．縄文時代の遺構・遺物の検討

府中・豊中・板原遺跡における縄文時代遺構遺物について、時期的まとまりごとに概観していく。遺構の時期別分布については、①前期中葉及び中期前葉・中葉、②中期後葉、③後期中葉・後葉、④晩期前葉・中葉の４期に分けて第145図に示した。

草創期・早期

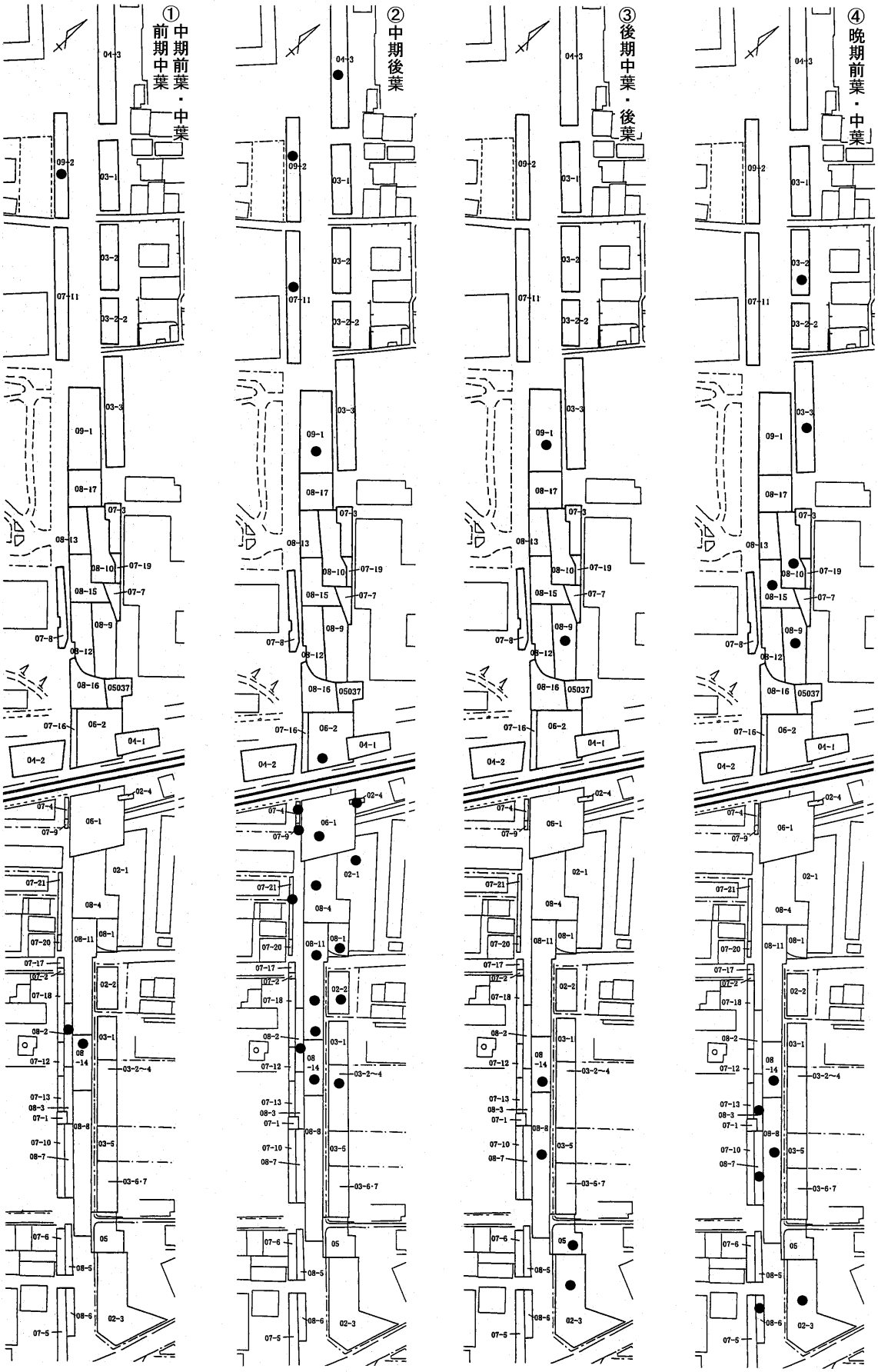
府中・豊中・板原遺跡では、現在のところ、草創期・早期の資料は認められない。周辺地域においても草創期の土器資料は皆無である。早期の土器は、槇尾川中流域の池田寺遺跡で山形押型文土器が１点、槇尾川上流域の仏並遺跡で繊維土器および関東系の鵜ヶ島台式土器が若干出土しているに留まる。石器では草創期と考えられる有舌尖頭器が点々と出土しているが、府中・豊中・板原遺跡では今のところ未見である。

前期

府中・豊中・板原遺跡で現在のところ最も時期の遡る縄文時代資料は前期のものである。それは09004－２区（板原遺跡）において出土した縄文時代前期の土器である。この調査区は府中・豊中・板原遺跡の一連の調査区の中では

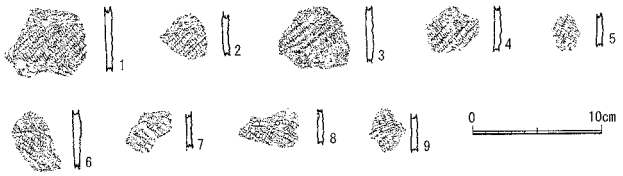
表３　和泉中央線関係調査区一覧表

年度	調査番号	調査区	担当者	報告書での調査区表記	遺跡名	調査概要	年報	報告書・概要
S59		Ⅰ区	高島　徹		府中			府中概要
		Ⅱ区	松村隆文			突帯文		
		Ⅲ区						
S61		第1調査区	藤澤眞依		府中			府中概要Ⅱ
		第2調査区				後期土器		
		第3調査区				晩期土器		
H13	01012	調査坑A～F	亀島重則	調査坑A	板原	（試掘確認調査）	年報6	年報のみ
				調査坑B～F	府中			
H14	02020	第1調査区	亀島重則	02020-1区	府中	土坑、北白川C	年報7	府中
		第2調査区		02020-2区		北白川C		
		第3調査区		02020-3区		土坑、宮滝、滋Ⅲb、滋Ⅳ、石皿、石棒、サヌカイト		
		第4調査区		02020-4区		土坑、北白川C		
H15	03017	A調査区	阿部幸一	03017-1区	府中		年報8	府中
		B調査区		03017-2区				
		C調査区		03017-3区				
		D調査区		03017-4区				
		E調査区		03017-5区				
		F調査区		03017-6区				
		G調査区		03017-7区				
	03020	第1調査区	亀島重則	03-1区	板原			府中豊中板原
		第2調査区		03-2区		縄文河川、北白川C、北白川上層、晩期中葉		
		第3調査区		03-3区	豊中	晩期中葉		
	03048	第1区	山田隆一		府中	縄文土器、サヌカイト		年報のみ
		第2区			（府道）	集石遺構		
H16	04017	第1調査区	亀島重則	04-1区	府中	土坑、小穴、焼土塊、炭粒、晩期中葉	年報9	府中豊中板原
		第2調査区		04-2区		中期後葉？、土坑・小穴		
		第3調査区		04-3区	板原	土坑内一括、北白川C		
		第4調査区			豊中	（池の中につき調査不要）		
H17	05027		藤澤眞依	05027区	府中	北白川上層3～一乗寺K、宮滝	年報10	府中
	05037		藤澤眞依	05037区	豊中			府中豊中板原
H18	06017	Ⅰ区	関　真一	06017-1区	府中	屋外炉（炭集積）、土器溜、焼土塊、北白川C	年報11	府中
		Ⅱ区		06-2区		炭集積		府中豊中板原
H19	07001	１区	阿部幸一	07-1区	府中		年報12	府中Ⅱ
		２区		07-2区				
		３区		07-3区	豊中			府中豊中板原
		４区		07-4区	府中			府中Ⅱ
		５区		07-5区				
		６区		07-6区				
		７区		07-7区	豊中			府中豊中板原
		８区		07-8区				
		９区		07-9区	府中	縄文中期～後期土器（年報12）		府中Ⅱ
		10区		07-10区				
		11区		07-11区	板原	北白川C		府中豊中板原
		12区		07-12区	府中			府中Ⅱ
		13区		07-13区				
		14区		07-14区	豊中	（立会）		府中豊中板原
		15区		07-15区		（立会）		
		16区		07-16区	府中	（立会）		府中Ⅱ
		17区		07-17区				
		18区		07-18区				
		19区		07-19区	豊中			府中豊中板原
		20区		07-20区	府中			府中Ⅱ
		21区		07-21区		北白川C		
H20	08002	１区	阿部幸一	08-1区	府中	北白川C	年報13	府中Ⅱ
		２区		08-2区		船元Ⅰ、北白川C		
		３区		08-3区		晩期中葉		
		４区		08-4区		貯蔵穴、北白川C		
		５区		08-5区		滋賀里Ⅳ		
		６区		08-6区		篠原		
		７区		08-7区		滋賀里Ⅲａ、篠原		
		８区		08-8区		縄文河川、元住Ⅰ・Ⅱ、宮滝1・2、滋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa、篠原、滋Ⅳ、長原		
		９区	竹原伸次	08-9区	豊中	宮滝、滋賀里Ⅱ・Ⅲa		府中豊中板原
		10区		08-10区		滋賀里Ⅱ・Ⅲａ		
		11区	阿部幸一	08-11区	府中	北白川C		府中Ⅱ
		12区	竹原伸次	08-12区	豊中			府中豊中板原
		13区		08-13区				
		14区	阿部幸一	08-14区	府中	船元Ⅱ、滋賀里Ⅰ、篠原		府中Ⅱ
		15区	竹原伸次	08-15区	豊中	篠原		府中豊中板原
		16区		08-16区				
		17区		08-17区				
H21	09004	第1調査区	阿部幸一	09-1区	豊中	北白川C、滋賀里Ⅰ（『府中Ⅱ』掲載）	年報14	府中豊中板原
		第2調査区	三木　弘	09-2区	板原	北白川下層Ⅱａ、北白川C		



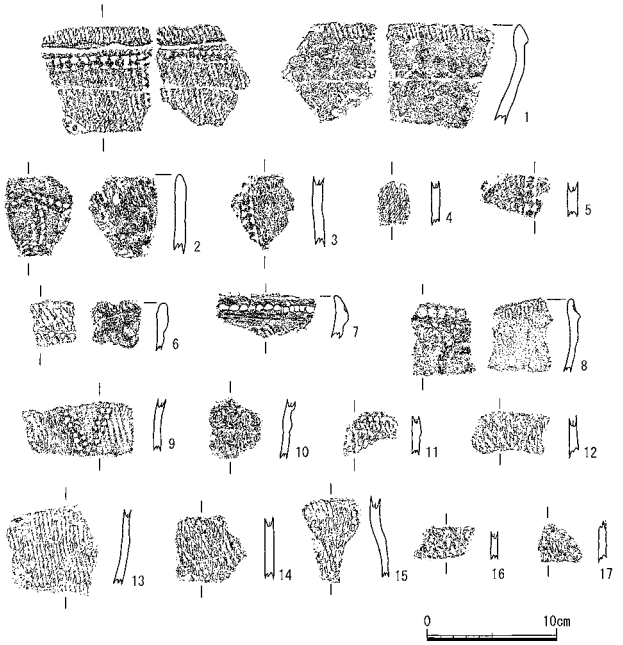
第145図　時期別遺構分布図（1/2500）

最も西側（海側）に位置する調査区の一つである。遺構に伴うものではないが、最下層の自然流路肩部から縄文土器がある程度まとまって出土している。土器は前期の北白川下層Ⅱａ式で、羽状縄文を施文した胴部片十数点であるが、同一個体の可能性が高い（第146図）。



第146図　北白川下層Ⅱａ式土器１～９：09004－２区

この土器の出土によって府中・豊中・板原遺跡の初源が縄文時代前期にまで遡ることが明らかになるとともに、府中・豊中・板原遺跡付近が、早い時期から槇尾川下流域における縄文時代の活動拠点であったと考えられるようになったのである。



第147図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器
１～５：08002－２区,６～17：08002－14区

中期前葉・中葉中期

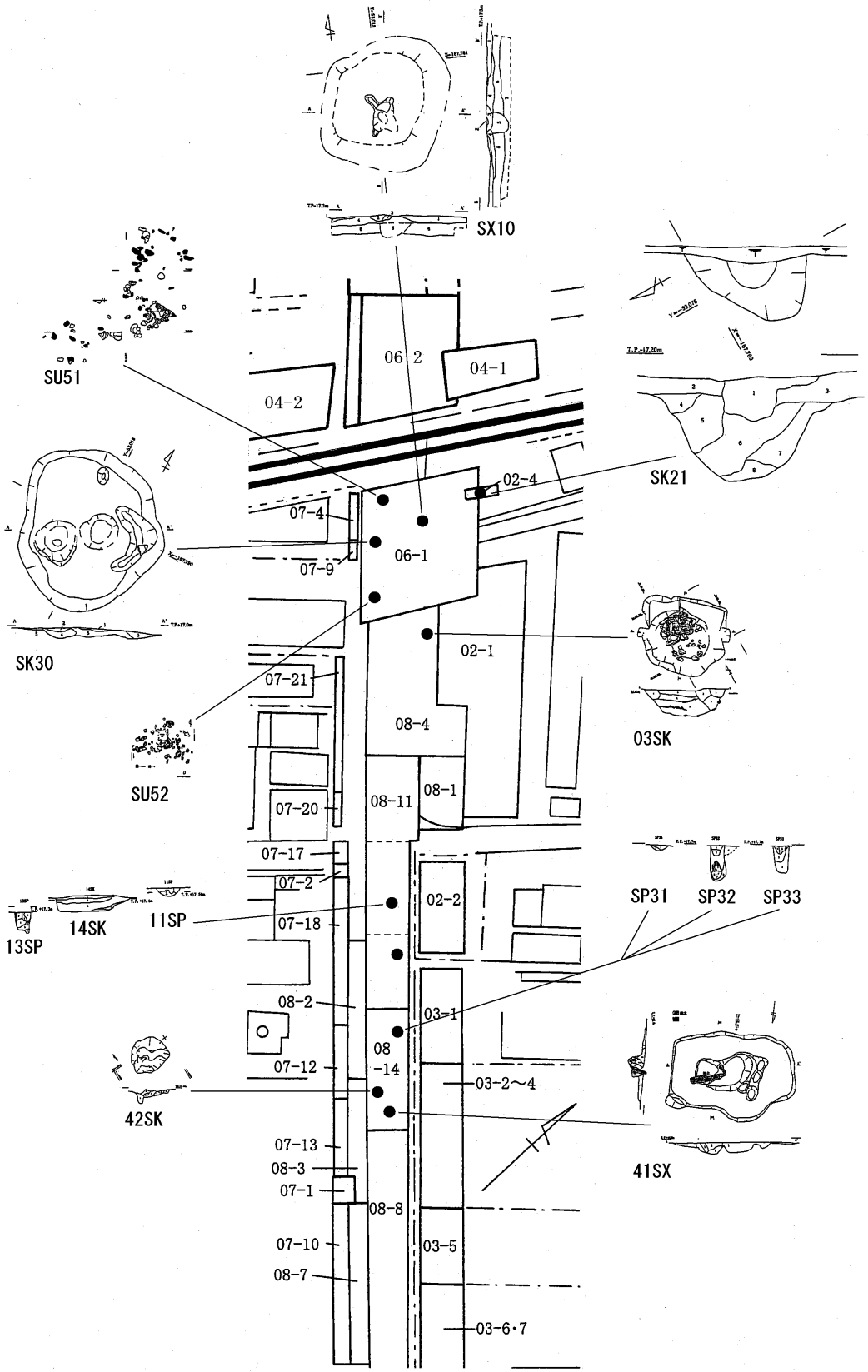
中期前葉・中葉では船元Ⅰ式土器・船元Ⅱ式土器が出土している。08002－２区（府中遺跡）では船元Ⅰ式～船元Ⅱ式土器が、08002－14区（府中遺跡）では船元Ⅱ式土器がまとまって出土している（第147図）。両地点は相隣接する調査区で、阪和線より東側の調査区のほぼ中央付近である。いずれも遺構に伴うものではない。また小片が多く型式認定に迷うものも多い。両地点の土器は一連のものと考えてよかろう。

縄文時代前期に引き続き中期前葉・中葉においても土器の出土が認められることは、縄文時代の活動拠点としての重要性が、断続的ながらも、持続していることを示していると考えられる。

中期後葉

府中・豊中・板原遺跡において縄文時代の遺構遺物が顕著に認められるようになるのは中期後葉北白川Ｃ式段階になってからである。北白川Ｃ式土器は、調査範囲南東端に近い08002－８区（府中遺跡）から、調査範囲北西端の04017－３区（板原遺跡）まで、ほぼ全域で出土しているが、遺構遺物が濃密に認められるのは、阪和線西側の06017－２区（府中遺跡）から東側200ｍほどの範囲で、すべて府中遺跡に含まれている（第148図）。中でも阪和線東側の06017－１区（府中遺跡）では中期後葉の遺構面が上下２面で確認されており、注目される。

この範囲では竪穴住居や確実な建物は確認されていないものの、柱根の遺存するものを含むピット群（08002－１区、08002－14区）、炉跡あるいは火処・炭集積・焼土塊（06017－１区、06017－２区、08002－14区）、貯蔵穴と見られる土坑（08002－４区）、土器溜あるいは土器がまとまって出土する土坑（02020－１区、02020－４区、06017－１区）などが集中しているのである。

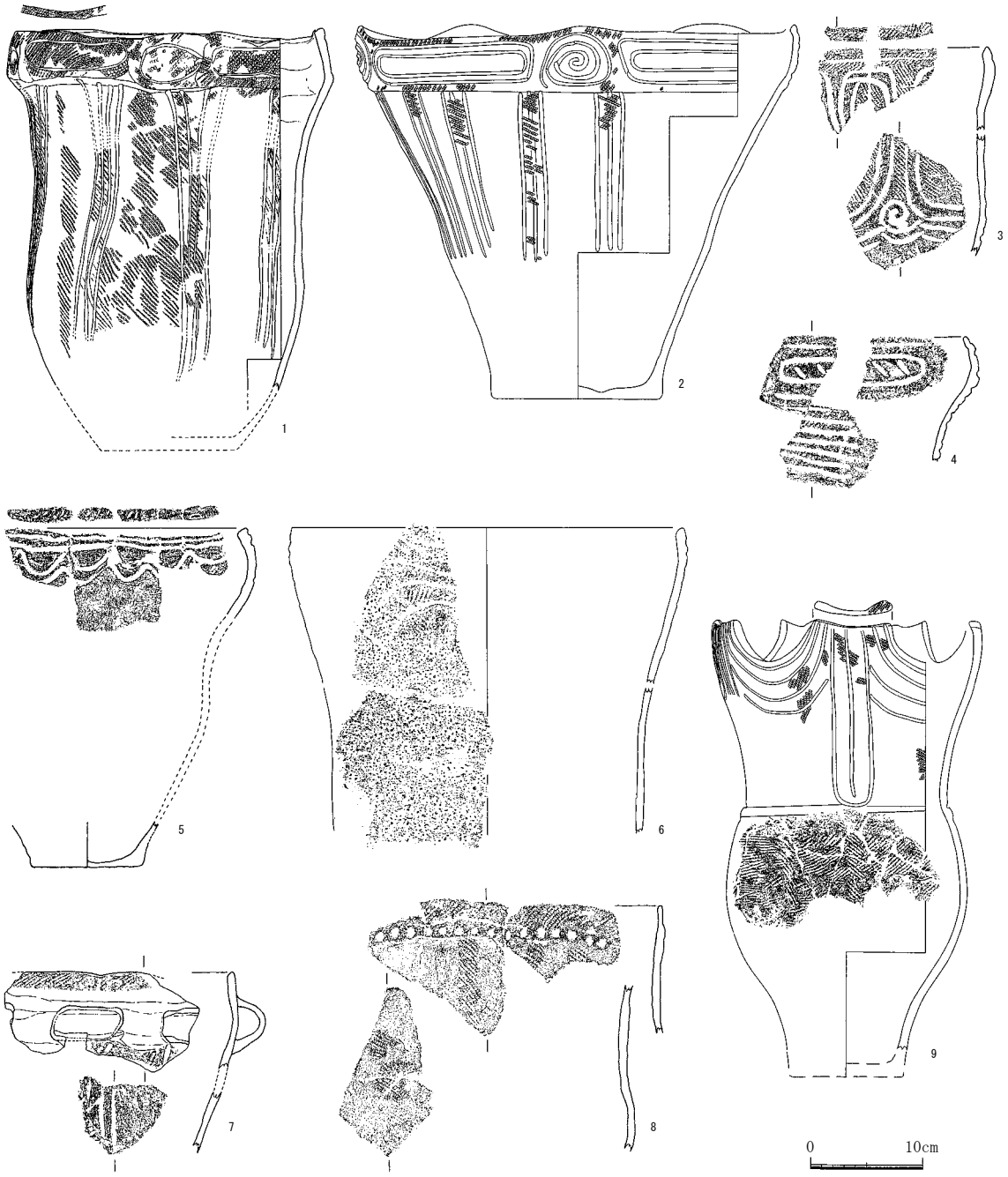


第148図　中期後葉の主要な遺構（地図：１/2500,遺構図１/100）

またこの範囲のほとんどの調査区から北白川Ｃ式土器が出土しており、その量はかなり多量である。これらの点から見て、北白川Ｃ式段階で一定の居住があったと想定してよかろう。

中期後葉は、近畿地方では縄文時代遺跡が急増する時期である。この時期は集落形成も活発で、府中・豊中・板原遺跡においても集落が営まれたと想定してもなんら不自然ではない。中期中葉以前が一時的な活動痕跡をとどめるのみであるのに対し、中期後葉以降は断続的な居住を含む継続利用が想定できるのである。

府中・豊中・板原遺跡で出土する北白川Ｃ式土器は（第149図）、泉拓良氏分類（註１）の深鉢Ａ類と深鉢Ｃ類が主で、深鉢Ｂ類ほかはごく少量である。深鉢Ａ類でも口縁部文様帯に、隆帯と沈線による渦巻区画文などを施文するものはほとんど認められない。



第149図　北白川C式土器
１･３：08022－４区03SK、４･７･８：08002－１区、５：04017－３区16SK、２：06017－１区SU52、６･７：06017－１区SU51

後期前葉

今回の府中・豊中・板原遺跡の調査では、後期前葉、土器型式では中津式～北白川上層式２期、は空白の時期である。土器が出土していないわけではないが極めて希薄である。中期後葉北白川Ｃ式以降、後期前葉は、近畿地方で縄文時代遺跡が最も増加する時期であり、その時期が空白の府中・豊中・板原遺跡は珍しい事例ともいえよう。

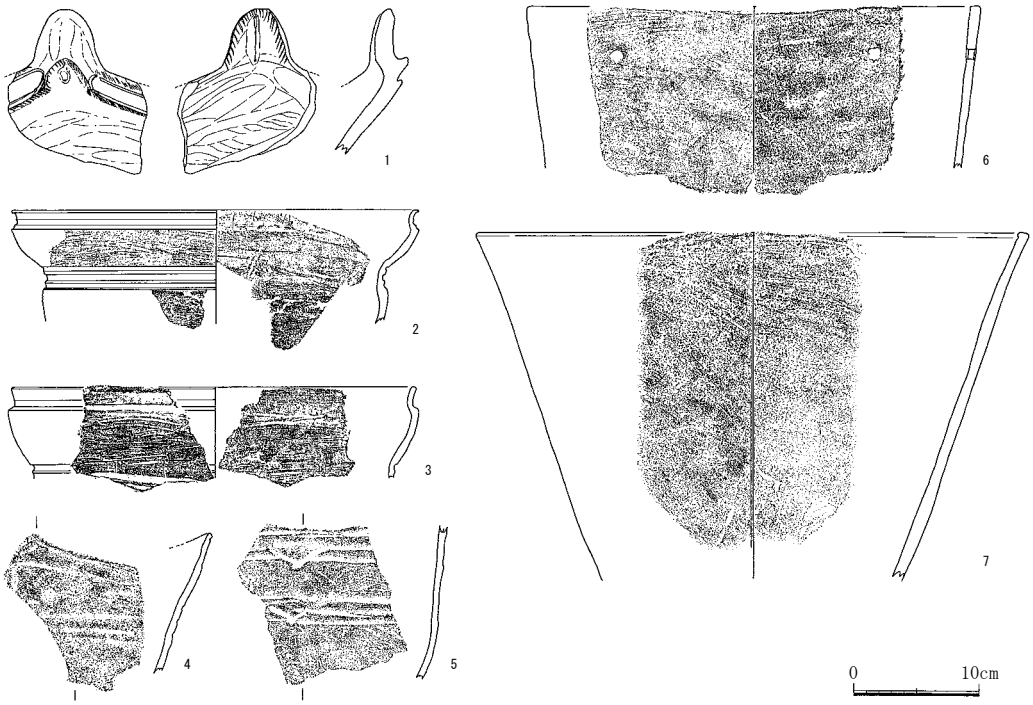
周辺地域で注目されるのは国道26号線（第二阪和国道）建設に伴う板原遺跡の発掘調査成果で、第二阪和板原遺跡では後期前葉の中津式土器がまとまって出土している（註２）。中津式期以外の時期の資料は府中・豊中・板原遺跡の近隣いずれかに存在するものと想像される。

後期中葉～後期後葉

後期中葉になると再び土器が増加してくる。そして後期中葉以降、晩期後葉まで、土器型式上は連続して土器が出土しているのである。

後期中葉～後期後葉の資料は主として調査範囲の東側で出土している。東端の02020－３区（府中遺跡）ほか、05027区（府中遺跡）、08002－８区（府中遺跡）、08002－14区（府中遺跡）で出土している。なかでも08002－８区の縄文河川02NRの資料がまとまっている。これら以外では、阪和線より西側の08002－９区（豊中遺跡）、09004－１区（豊中遺跡）で若干出土しているのみであり、分布が東側に偏っていることは認められよう。

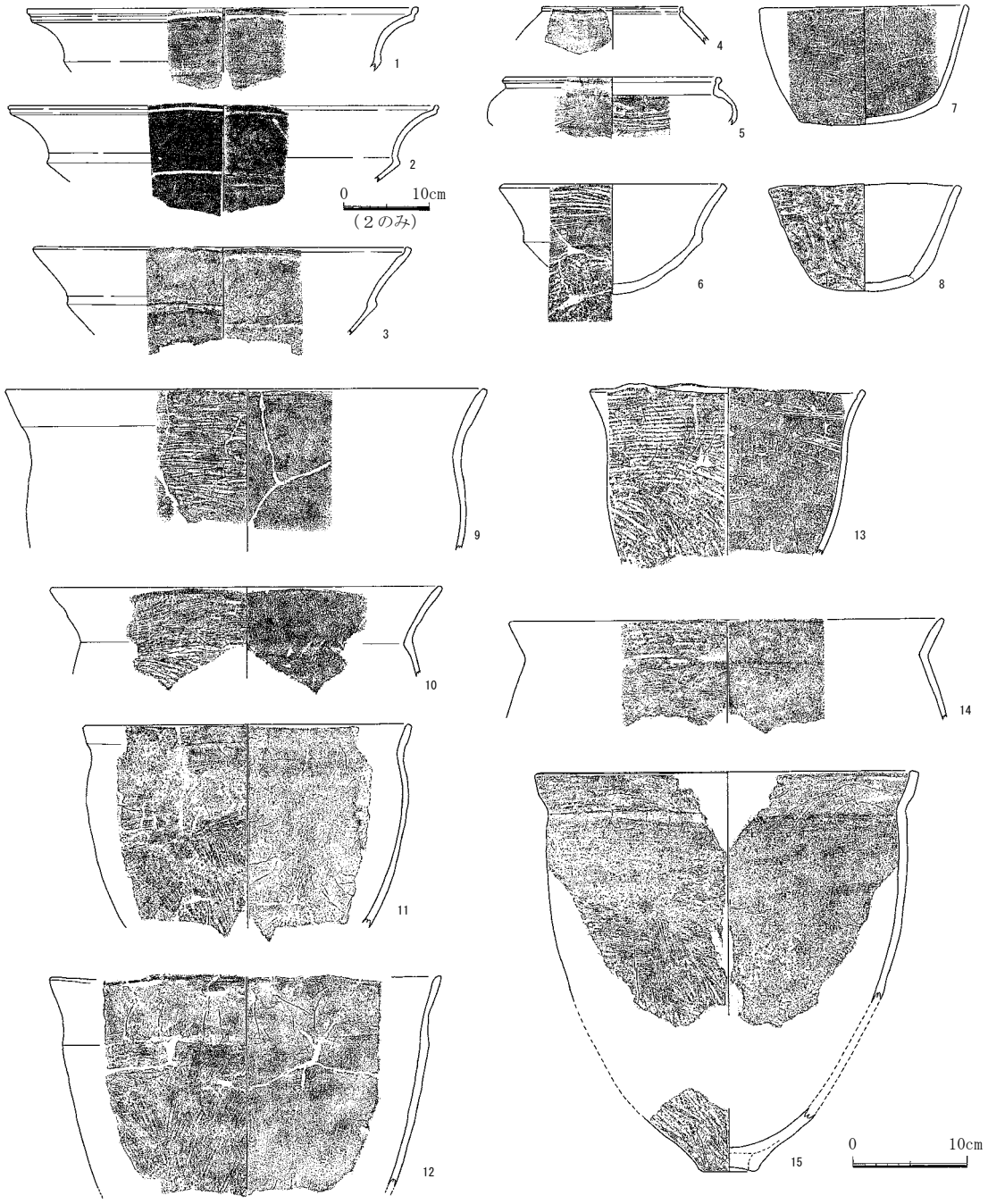
後期中葉北白川上層式３期の資料はわずかだが、一乗寺Ｋ式・元住吉山Ｉ式の資料は一定まとまったものがある。後期後葉では宮滝２式･滋賀里Ｉ式がやや多い。しかも、この時期の土器は、破片が大きく遺存状況も良好である（第150図）。この時期の遺構は検出していないが、近隣に遺構が存在した可能性は大きい。



第150図　元住吉山Ｉ式・宮滝式土器１～７：08002－８区02ＮＲ

晩期

晩期の資料は調査範囲の全域から出土しているが、大部分は08002－８区（府中遺跡）の縄文河川02NRから出土したものである。この河川からは後期中葉以降晩期後葉までの土器が出土しているが、主体となるのは晩期前葉滋賀里Ⅱ式・滋賀里Ⅲａ式・晩期中葉篠原式（古段階～新段階）である。晩期前葉・中葉の土器は破片も大きく遺存状況も良好である（第151図）。



第151図　晩期前葉・中葉土器

１～３・５～７・９～15：08002－８区02ＮＲ、４：08002－８区、８：08002－14区21ＮＲ

２．槇尾川流域の縄文時代遺跡

槇尾川流域の３遺跡群

槇尾川は和泉山地槇尾山中にその源を発し、和泉市域を北西に流れ、泉大津市域に入って牛滝川と合流、そこから大津川と名称を変えて大阪湾に注いでいる。

槇尾川流域には縄文時代遺跡が点々と確認されている。これらの縄文時代遺跡は不規則に分布するのではなく、一定のまとまりをもって分布している。具体的にみていくと、上流域（現大津川河口から直線距離で約13km）には仏並遺跡・福瀬遺跡、中流域（同約８km）には池田寺遺跡・池田下遺跡・万町北遺跡、下流域（同約3.5km）には府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡・虫取遺跡などがあり、それぞれ一定範囲内にまとまって群をなしているのである。これらの群に含まれず単独で存在する遺跡もあるが、槇尾川流域の縄文時代遺跡にいくつかの地理的まとまり、すなわち「群」が見出されるのである。

上流域群では仏並遺跡が注目される。仏並遺跡は横山谷とよばれる小盆地の槇尾川左岸河岸段丘上に立地しており、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて集落が営まれた。中期後葉北白川Ｃ式段階に初めて住居が営まれ、以後北白川上層式２期（～３期）に至るまで断続的回帰的に居住が繰り返された（註３）。

中流域群の池田寺遺跡・池田下遺跡・万町北遺跡も中期後葉に出現する遺跡である。土坑などが検出されているが、住居は明確ではない（註４）。

下流域群では府中・豊中・板原遺跡において中期後葉の居住が想定され、土器も多量に出土している。しかし後期以降の居住の具体像は不詳である。府中･豊中･板原遺跡よりさらに低地（海側）に立地する虫取遺跡は晩期後葉突帯文土器期の遺跡である（註５）。

以上に述べたように、槇尾川流域の縄文時代遺跡群の内容には不分明な点が多く、集落の内容を検討しうるのは上流域の仏並遺跡ただ１箇所にとどまるのであるが、出土遺物の時期等を勘案すれば、上流域・中流域・下流域のそれぞれに中期後葉以降の縄文集落が展開したと理解してもよかろう。

各遺跡群の領域と居住範囲

次に３つの遺跡群の位置関係に注目しよう。上流域群と中流域群は約５㎞、中流域群と下流域群は約4.5㎞の距離があり、各群の間は遺跡の空白地帯となっている。遺跡群のまとまりと空白地域の存在が常に有意のものとは限らないが、縄文時代集落においてはしばしば認められる事象である（註６）。

縄文時代集落の調査研究が進んでいる比叡山西南麓（註７）や生駒山西麓域（註８）においても遺跡群のまとまりと空白地帯が認められる。詳細は参考文献に譲るが、比叡山西南麓では、縄文時代集落の領域は径６㎞程度で、居住地はその領域の中心部に限られるとされているし、生駒山西麓域では南北25㎞の間に４つの縄文時代集落群が存在し、１群あたりの領域は５～６㎞程度となる。

このような事例と比較したとき、槇尾川流域の３遺跡群の分布はおよそ５㎞間隔であり、これは偶然の所産ではなく、有意なあり方と考えることが可能となってくる。すなわち縄文時代中期後葉以降、槇尾川流域にそれぞれの領域を有して３つの集団が居住し、その想定される領域が径５㎞前後であること、各群が占有する領域が径５㎞前後であっても、集落を営む場所は領域内の一定の範囲に限られていること、そしてこれらの結果、一定の間隔（槇尾川流域では約５㎞）をおいて遺跡が群在する状況が現れたと考えられるのである。

府中・豊中・板原遺跡は槇尾川流域の縄文時代遺跡群のなかでも、下流域を領域とする集団の居住範囲と考えられる。中期後葉には柱穴や炉跡が発見されており居住域の一部であったことは間違いないが、後期前葉以降は具体的な居住の痕跡を欠いている。周辺地域の今後の調査の進展に期待されるところである。

註

（1） 泉　拓良　1985 「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　京都大学埋蔵文化財調査センター

（2） 久米雅雄・藤澤眞依　1980 『第２阪和国道内遺跡発掘調査概報－板原遺跡－』大阪府教育委員会

（3） 大野　薫　2004 「仏並縄文集落の変遷」『市大日本史』第７号　大阪市立大学日本史学会

（4） 武内雅人　1991 『池田寺遺跡Ⅳ』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 71 輯　財団法人大阪府埋蔵文化財協会

白石耕治　1991 『池田下遺跡』和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅰ　和泉丘陵内遺跡調査会

森　　茂　1993 『万町北遺跡Ⅰ』和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅴ　和泉丘陵内遺跡調査会

（5） 坂口昌男・楠山亨司　1985 「虫取遺跡出土遺物」『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報３』泉大津市教育委員会

（6） 矢野健一　1997 「西日本の縄文集落」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会

（7） 泉　拓良　1985 「近畿地方の事例研究」『講座考古地理学』４　学生社

（8） 大野　薫　1997 「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』和泉書院

第５節　石製品

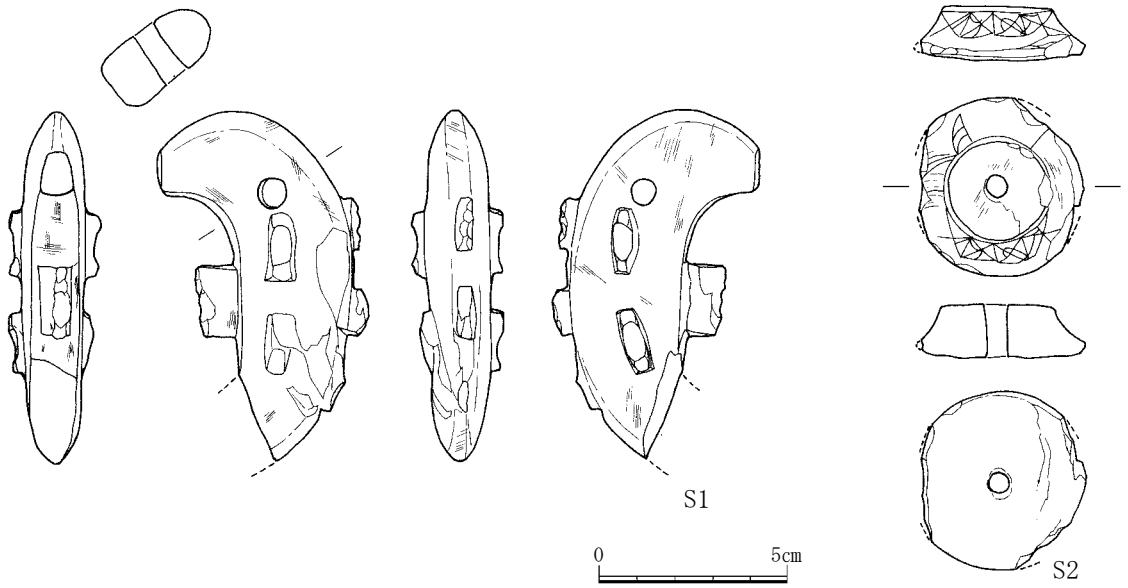
この報告書で取り上げた国道26号線穴田交差点からＪＲ阪和線までの区間では石鏃や石槍、石匙などのサヌカイト製の石製品は出土しなかった。石包丁片、滑石製の子持ち勾玉や紡錘車や有孔円盤、使用痕のある川原石が出土している。

Ｓ１は子持ち勾玉で08－10区から出土した。突起部を含めて全長9.3㎝、幅5.3㎝、厚さ2.4㎝を測る。紐孔はほぼ円形で口径は0.6㎝を測る。尖端は1.2㎝の平坦面をつくり背部は滑らかな円形に磨き上げている。突起は腹部に１カ所、背部に２カ所、胴部両面に２カ所づつで、すべての突起に破損が観察される。腹部の突起は基部で幅1.9㎝、厚さ0.8㎝、突出高は1.0㎝を測る。

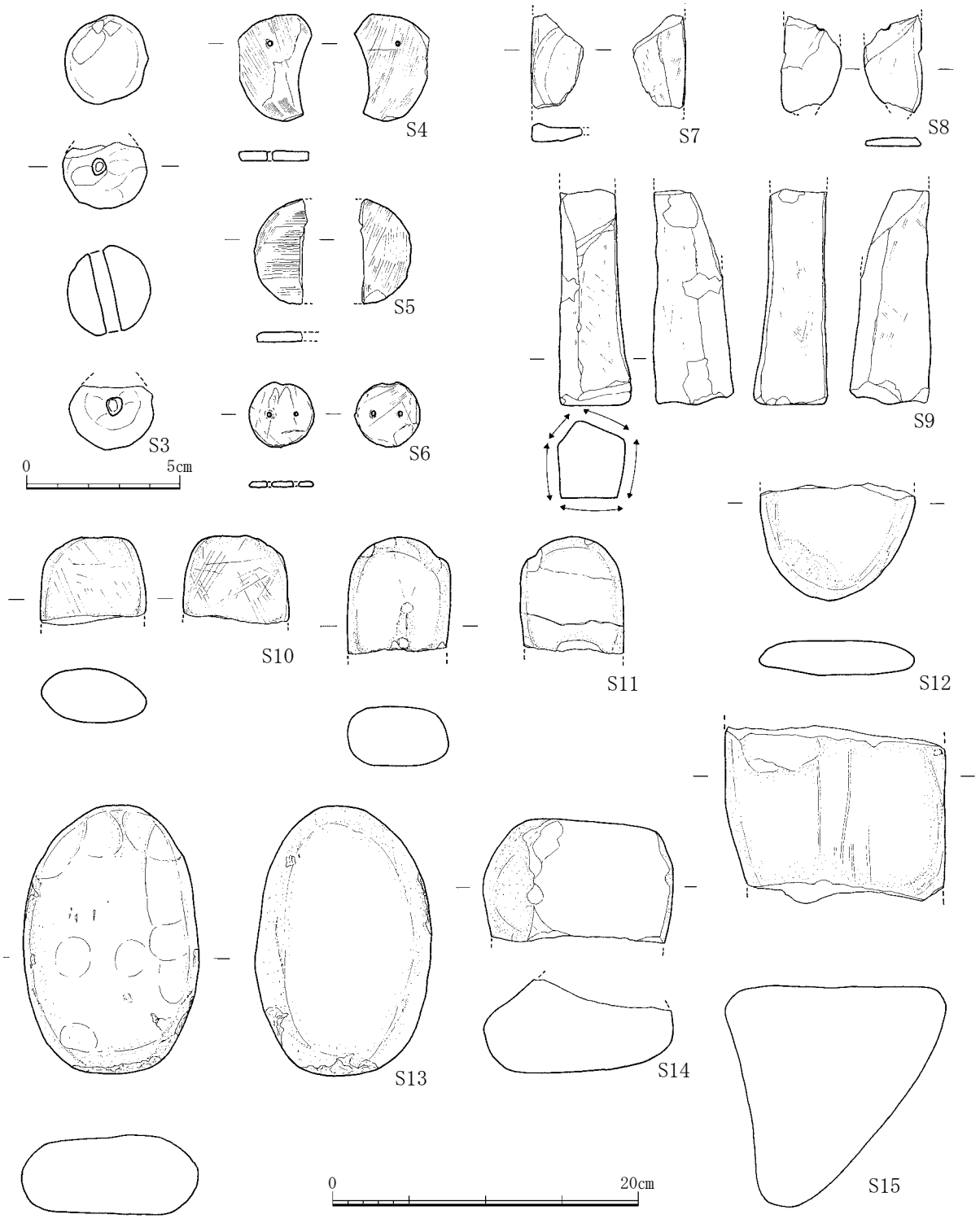
Ｓ２は滑石製の紡錘車である。底面は僅か欠損しているがほぼ円形で、直径4.5㎝、底部は側面は底面から0.5㎝まで外傾しており、最大径は側面にあって、直径4.7㎝を測る。底部から上部までは外弯ぎみに研磨され、底面からの高さ1.4㎝を測る。、上面は直径2.6㎝である。円孔は直径0.5㎝である。側面には細い線刻があり、三角形や鋸歯状に描かれている。08－15区出土。

Ｓ３は土玉で一部欠けているが直径2.8㎝、紐孔は直径0.5㎝を測る。Ｓ４～Ｓ６は有孔円盤である。Ｓ４は破損した側面を再度磨いて織、現状で長径3.5㎝、短径2.4㎝、厚さ0.35㎝を測る。円孔は直径0.2㎝を測る。Ｓ５はほぼ１/２が欠けているが、現況で長径3.4㎝、短径は1.4㎝、厚さ0.3㎝を測る。欠損部の上から0.9㎝に円孔の痕が残る。Ｓ６は円形で直径2.1㎝、厚さ0.2㎝を測る。円孔は２カ所で端から0.6㎝の位置に２カ所穿つ。Ｓ８は石包丁の破片で、紐穴の一部と刃部が残る。Ｓ７は３ミリ窪ませた中央を研磨した石製品で、硯かもしれないが、内側の面が荒れている。Ｓ９は砥石で４面とも使用されている。長さ13.9㎝、幅4.6㎝、高さ5.0㎝を測る。Ｓ３～Ｓ８は03区出土。

Ｓ10～Ｓ23は使用痕のある物。Ｓ10は両面に擦痕がある。Ｓ11は両面が平坦で、叩き台に使用

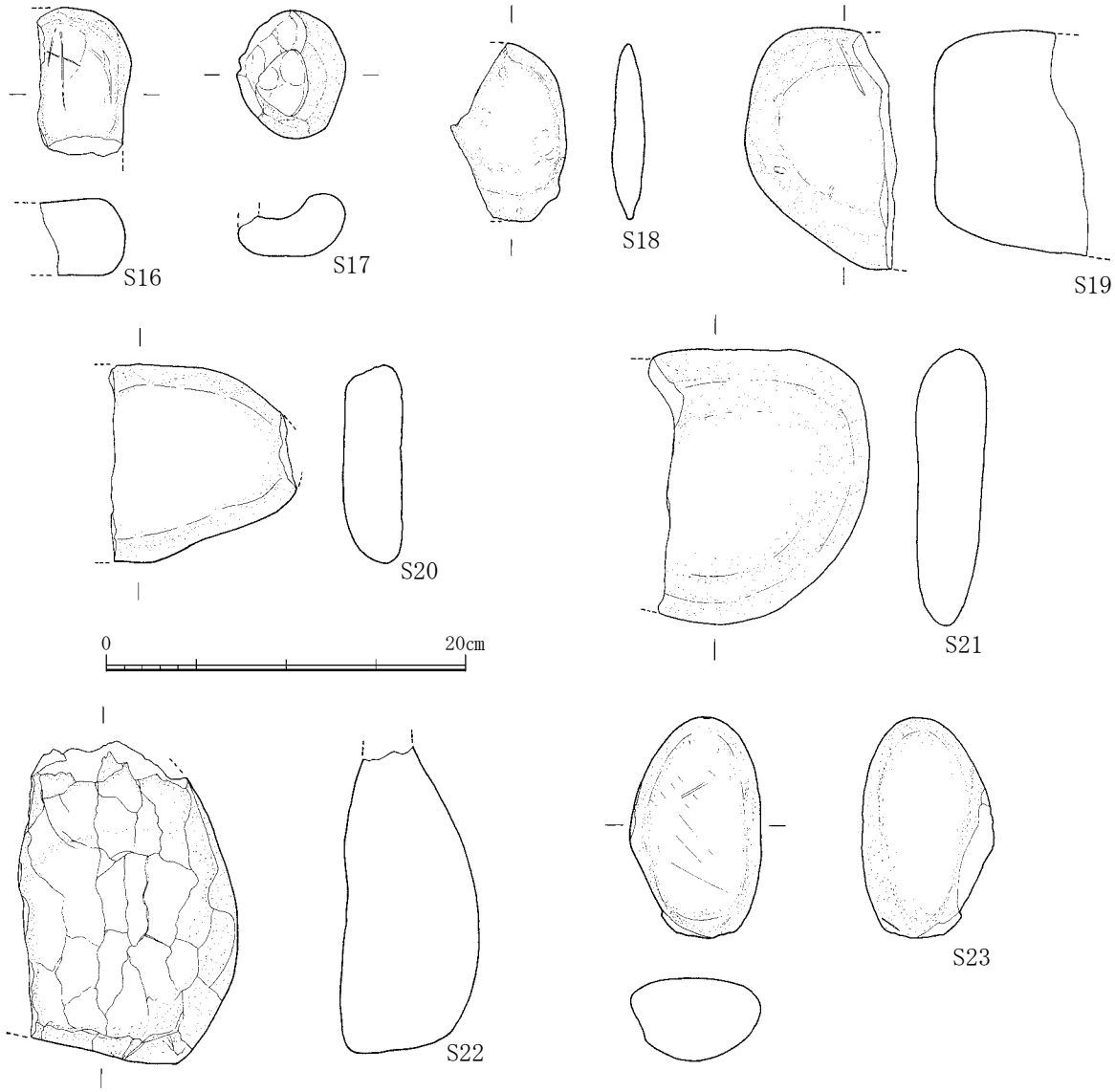


第152図　08区出土子持ち勾玉（Ｓ１）、紡錘車（Ｓ２）実測図



第153図　03・04・09区出土石製品実測図１

された物か。Ｓ12、Ｓ13は尖端に使用痕がある。Ｓ13は長径17.4㎝、幅11.2㎝、厚さ5.0㎝。Ｓ14は土坑から出土した物で、上面が不自然に欠けている。Ｓ15は上面が僅かに窪んでいる。Ｓ16は上面に細い線刻がある。Ｓ17は中央が窪んでいる。自然的要因かもしれないが掲載した。Ｓ18～Ｓ23は上面が浅く窪んでおり、叩き台か摺台に使用された可能性が高い。Ｓ23は上面に擦痕がのこる。Ｓ22は窪んだ表面に被熱によるヒビが縦横に観察される。



第154図　03・04・09区出土石製品実測図２

第４章　理化学分析

第１節　　豊中遺跡、板原遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．板原遺跡 03 － ３ － ２ 区の花粉分析

斉藤崇人・大嶋秀明

目　　次

はじめに・・165
１．試料・・・166
２．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
３．結果・・・166
４．考察・・・177
（１）　花粉帯の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177
（２）　植生変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・178
引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

図・表・図版目次

表４　１地点・２地点の花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
表５　３地点・４地点の花粉分析結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
表６　井戸曲物内・４ＳＫ・９ＳＤの花粉分析結果　・・・・・・・・・・・・・・・・170
第155図　03－３－２区の層序と分析層準採取位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
第156図　基本層序１地点における主要花粉化石群集の層位分布　・・・・・・・・・・・171
第157図　基本層序２地点における化石花粉群集の層位分布　・・・・・・・・・・・・・172
第158図　基本層序３地点における化石花粉群集の層位分布　・・・・・・・・・・・・・173
第159図　基本層序４地点における化石花粉群集の層位分布　・・・・・・・・・・・・・174
第160図　各遺構における主要花粉花粉群集の層位分布・・・・・・・・・・・・・・・・175
写真図版１　花粉化石（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
写真図版２　花粉化石（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183

はじめに

板原遺跡，豊中遺跡は大阪府泉大津市から和泉市にかけて所在し、大津川右岸の沖積扇状地上に立地する。日下（1980）では、板原遺跡や豊中遺跡、府中遺跡、池上曽根遺跡、七ノ坪遺跡などが立地する地形面を段丘化した扇状地と区分している。この地形面では、最終氷期に形成され

た低位段丘相当層の上部に５ｍ、谷部で８～10ｍの流路や氾濫原堆積物からなる完新統が累重していることが確認されている（古田,1990）。

今回の調査地点からは井戸・土坑・溝などの遺構が検出されており、トレンチでは縄文時代後期以前からの堆積物が確認されている。本報告では、トレンチ断面や各遺構より採取した土壌を用いて、縄文時代以降の植生変遷に関する情報を得ることを目的とし、花粉分析を実施する。

１．試料

試料採取を行った03－３－２区の層序および試料採取位置について第155図に示す。基本層序１地点から採取された試料は、縄文時代後期以前とされる試料番号11－８、古墳時代から中世とされる試料番号７－４、中世以降とされる試料番号３、近現代とされる試料番号２、１の計11点である。基本層序２地点からは試料番号17－２の計６点、基本層序３地点からは試料番号34－30の計５点、基本層序４地点からは試料番号27－24の計３点が採取されており、いずれも縄文時代後期以前とされている。

遺構から採取された試料は、弥生時代中期後半とされる09ＳＤ、古墳時代中期から後期とされる04ＳＫの試料番号１、２、鎌倉時代とされる井戸内堆積物の上層・下層の、計５点である。

以上の計30点について、花粉分析を実施する。

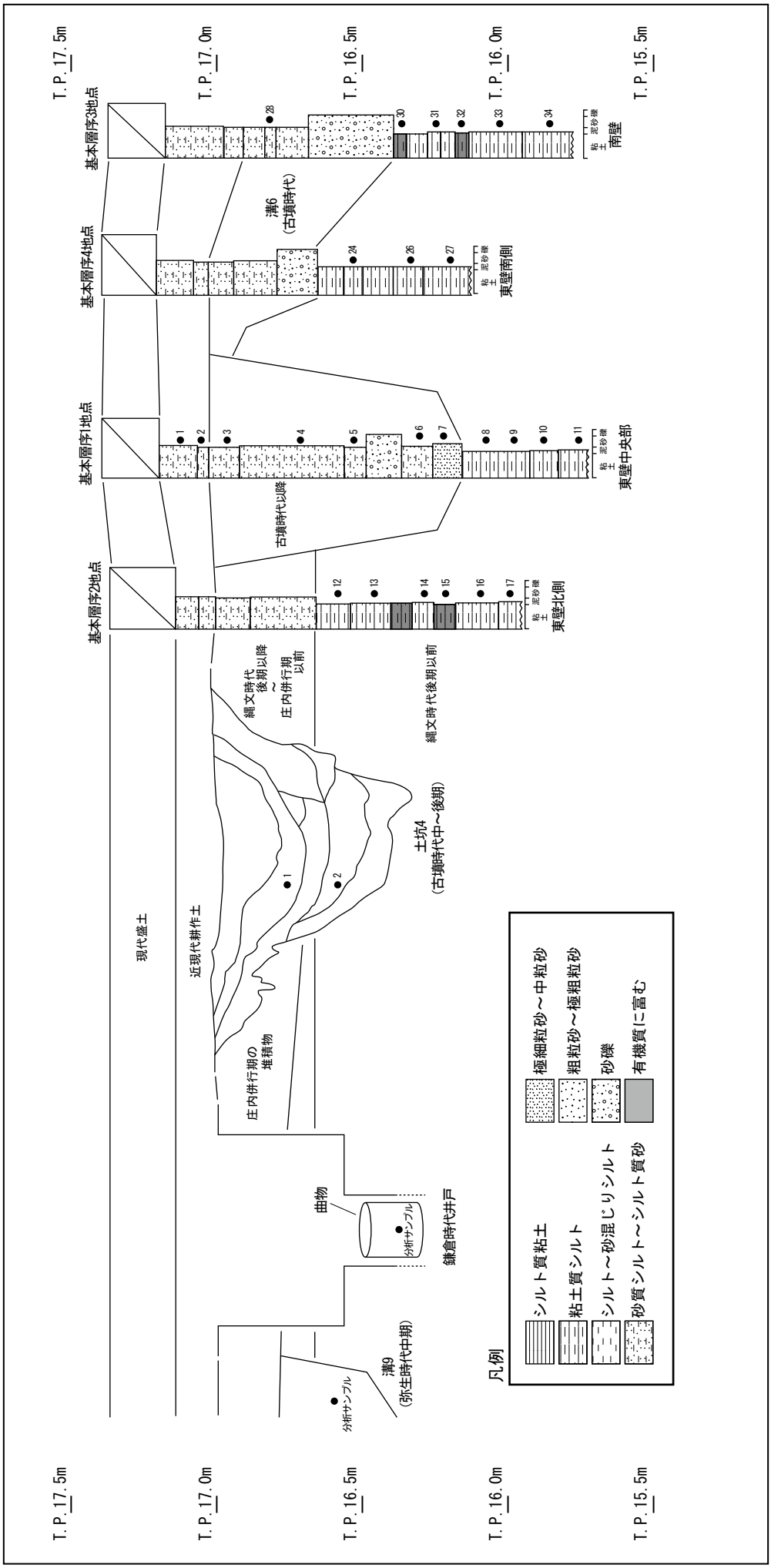
２．分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の工学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果の同定・計数結果の一覧表、および主要花粉石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

３．結果

結果を表・図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100箇未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。以下、地点ごとに結果を述べる。



第155図　03－３－２区層序と分析層準採取位置

表４　１地点・２地点の花粉分析結果

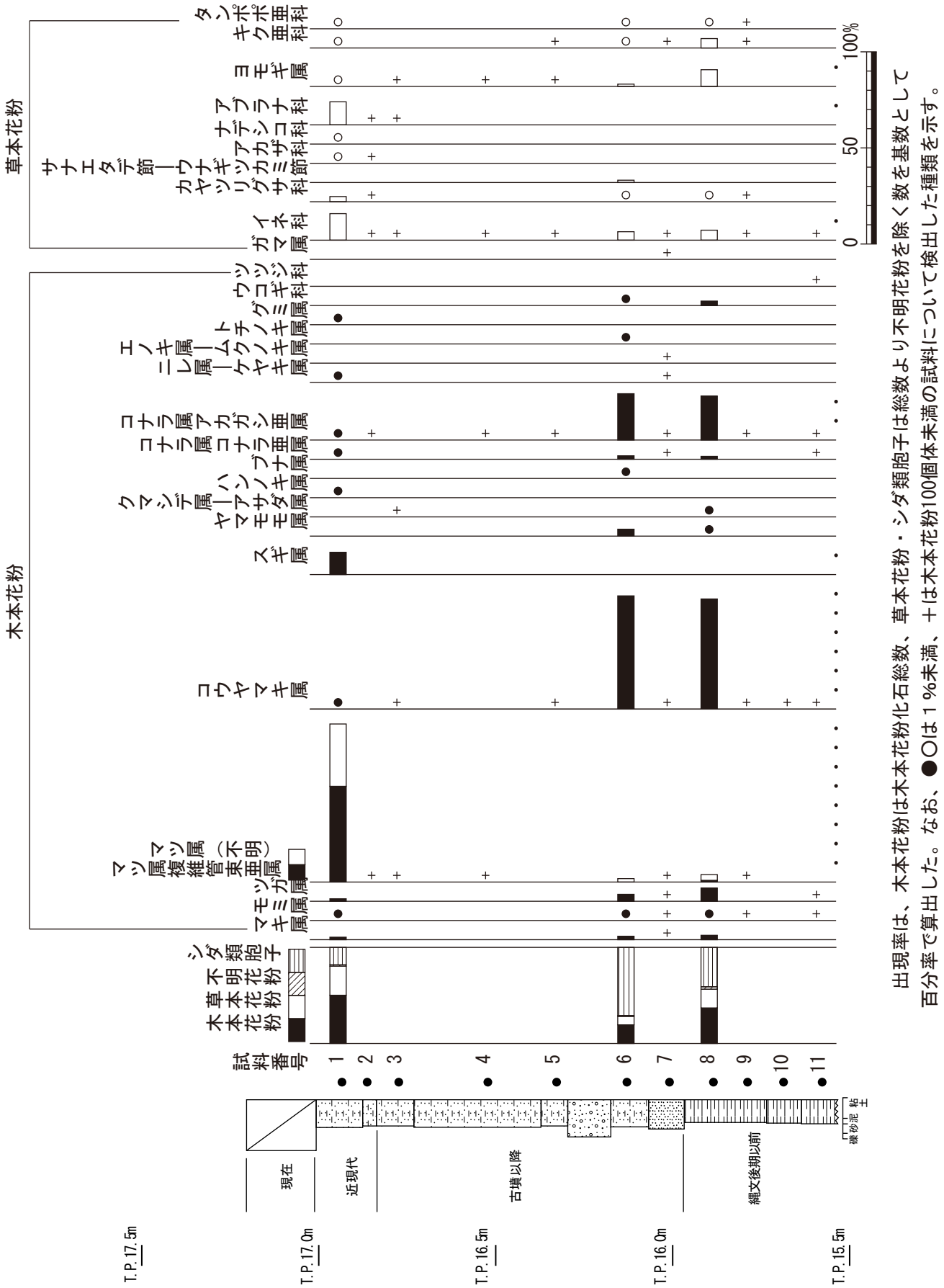
種　類	1地点											2地点					
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
木本花粉																	
マキ属	3	−	−	−	−	2	2	3	−	−	−	−	−	2	22	3	−
モミ属	1	−	−	−	−	1	1	1	1	−	1	−	−	2	15	1	−
ツガ属	3	−	−	−	−	4	2	9	−	−	1	1	1	5	19	4	2
トウヒ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
マツ属複維管束亜属	112	7	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	3	6	1	−
マツ属（不明）	73	4	−	1	−	2	1	4	1	−	−	−	−	1	11	4	−
コウヤマキ属	1	−	2	−	4	66	14	75	10	9	13	13	18	28	68	67	2
スギ属	26	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9	3	−
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
ヤマモモ属	−	−	−	−	−	4	−	1	−	−	−	−	−	3	−	−	−
クルミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	−	−	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	3	2	1	−
ハンノキ属	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−
ブナ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	10	3	−	−
コナラ属コナラ亜属	1	−	−	−	−	2	2	2	−	−	1	−	−	8	12	−	−
コナラ属アカガシ亜属	1	1	−	1	1	27	6	30	3	−	1	−	−	35	45	21	−
クリ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	1	−
シイノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ニレ属−ケヤキ属	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	2	2	−	−
エノキ属−ムクノキ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−
シラキ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アカメガシワ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−
カエデ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	2	−
トチノキ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ツタ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
シナノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−
グミ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	−	−	−	−	1	−	3	−	−	−	−	−	−	1	−	−
ツツジ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−
ハイノキ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イボタノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
テイカカズラ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ムラサキシキブ属近似種	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
草本花粉																	
ガマ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イネ科	61	6	2	1	1	25	2	18	3	−	3	−	2	16	54	24	1
カヤツリグサ科	12	2	−	−	−	5	−	2	1	−	−	−	−	−	2	−	−
クワ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	−	−	−	−	−	7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タデ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アカザ科	4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ナデシコ科	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キンポウゲ科	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	3	3	−
アブラナ科	53	25	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−
セリ科	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	2	−	2	1	1	7	−	30	−	−	−	6	2	6	10	15	−
キク亜科	1	−	−	−	1	5	1	17	2	−	−	−	−	3	12	4	−
タンポポ亜科	1	−	−	−	−	1	−	1	3	−	−	−	−	1	1	1	−
不明花粉	6	−	−	−	1	5	2	9	−	−	−	−	−	2	8	8	−
シダ類胞子																	
他のシダ類胞子	82	23	4	3	39	408	37	145	43	33	128	39	130	501	122	131	22
合　計																	
木本花粉	225	12	5	2	5	112	30	131	15	10	18	14	19	120	219	112	4
草本花粉	136	34	6	2	3	51	5	69	9	0	3	6	4	30	82	48	1
不明花粉	6	0	0	0	1	5	2	9	0	0	0	0	0	2	8	8	0
シダ類胞子	82	23	4	3	39	408	37	145	43	33	128	39	130	501	122	131	22
総計（不明を除く）	443	69	15	7	47	571	72	345	67	43	149	59	153	651	423	291	27

表５　３ 地点・４地点の花粉分析結果

種　　類	3地点					4地点		
試料番号	30	31	32	33	34	24	26	27
木本花粉								
マキ属	5	5	8	−	−	−	11	−
モミ属	11	5	5	1	−	−	3	−
ツガ属	18	24	5	2	−	−	7	1
トウヒ属	1	−	1	−	−	−	−	−
マツ属複維管束亜属	6	2	3	−	−	−	1	−
マツ属（不明）	7	8	6	1	−	−	2	−
コウヤマキ属	132	95	41	63	4	−	72	10
スギ属	1	−	7	2	−	1	4	1
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	−	−	5	1	−	−	2	−
ヤマモモ属	2	3	5	−	−	−	5	1
サワグルミ属	1	−	−	−	−	−	−	−
クルミ属	−	1	2	−	−	−	1	−
クマシデ属−アサダ属	1	2	5	2	−	−	1	−
ハンノキ属	−	−	−	−	−	−	1	−
ブナ属	2	−	−	1	−	−	1	−
コナラ属コナラ亜属	4	8	17	5	1	−	1	1
コナラ属アカガシ亜属	28	51	102	27	−	2	86	1
クリ属	−	−	3	−	−	−	−	−
シイノキ属	−	−	2	−	−	−	−	−
ニレ属−ケヤキ属	−	1	3	1	−	−	2	−
エノキ属−ムクノキ属	−	5	4	−	−	−	3	−
カエデ属	−	−	−	−	−	−	1	−
トチノキ属	−	−	1	1	−	−	−	−
グミ属	−	−	4	−	−	−	−	−
ツツジ科	−	−	−	−	−	−	1	−
イボタノキ属	1	−	−	−	−	−	−	−
テイカカズラ属	−	−	1	−	−	−	−	−
草本花粉								
ガマ属	17	51	−	−	−	−	−	−
イネ科	22	43	79	25	2	−	42	2
カヤツリグサ科	11	6	4	2	−	−	−	−
ギシギシ属	−	2	−	−	−	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	22	38	−	−	−	−	−	−
アカザ科	−	−	1	−	−	−	−	−
ナデシコ科	−	−	−	1	−	−	−	1
キンポウゲ科	−	2	13	2	−	−	5	−
アブラナ科	−	−	1	2	−	−	−	−
マメ科	−	−	−	−	−	−	1	−
セリ科	1	2	2	−	−	−	−	−
オミナエシ属	−	−	−	1	−	−	−	−
ヨモギ属	4	18	35	27	−	−	14	−
キク亜科	3	2	2	9	−	−	6	2
タンポポ亜科	3	−	−	−	−	−	4	−
不明花粉	2	−	26	13	−	−	6	−
シダ類胞子								
他のシダ類胞子	296	136	54	194	72	13	228	43
合　計								
木本花粉	220	210	230	107	5	3	205	15
草本花粉	83	164	137	69	2	0	72	5
不明花粉	2	0	26	13	0	0	6	0
シダ類胞子	296	136	54	194	72	13	228	43
総計（不明を除く）	599	510	421	370	79	16	505	63

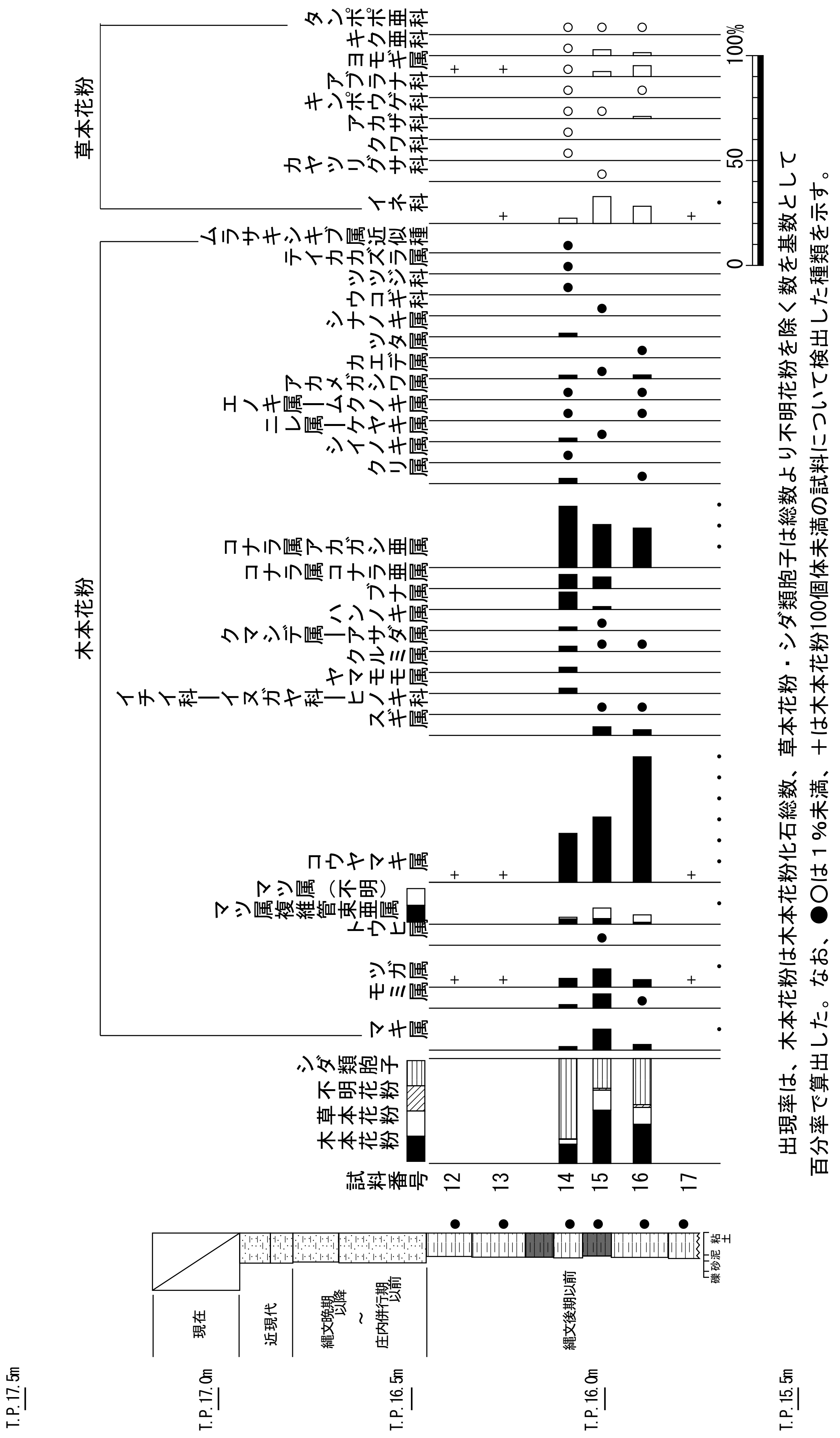
表６　井戸曲物内・04ＳＫ・09ＳＤの花粉分析結果

種　類	井戸曲物内		土坑4		溝9
試料番号	上層	下層	1	2	溝19
木本花粉					
マキ属	1	5	2	2	13
モミ属	2	4	4	5	5
ツガ属	21	17	7	5	9
トウヒ属	－	1	－	－	－
マツ属複維管束亜属	39	35	6	11	6
マツ属（不明）	20	23	11	5	9
コウヤマキ属	26	46	26	12	49
スギ属	17	29	48	34	17
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	9	9	12	16	14
マオウ属	1	－	－	－	－
ヤナギ属	4	2	－	－	－
ヤマモモ属	1	2	2	4	1
サワグルミ属	1	－	－	－	－
クルミ属	－	1	－	－	－
クマシデ属－アサダ属	8	7	3	5	－
ハシバミ属	1	1	－	－	－
ハンノキ属	2	1	1	1	－
ブナ属	1	－	－	1	4
コナラ属コナラ亜属	8	8	8	14	22
コナラ属アカガシ亜属	44	44	42	68	57
クリ属	2	－	9	10	5
シイノキ属	5	12	5	20	5
ニレ属－ケヤキ属	5	2	3	－	2
エノキ属－ムクノキ属	5	2	1	3	1
ユズリハ属	1	1	－	－	－
アカメガシワ属	－	1	－	－	－
シラキ属	－	－	－	－	1
カエデ属	－	－	－	－	1
トチノキ属	1	－	－	－	1
ブドウ属	1	－	16	－	3
カキ属	1	－	－	－	－
ハイノキ属	－	1	－	－	－
イボタノキ属	－	－	－	－	1
トネリコ属	－	－	－	－	1
ムラサキシキブ属近似種	－	－	－	－	1
ガマズミ属	2	－	－	－	－
スイカズラ属	3	－	－	－	－
草本花粉					
ガマ属	－	－	1	－	－
イネ科	303	251	176	190	81
カヤツリグサ科	41	37	20	6	8
ツユクサ属	－	－	1	1	－
ミズアオイ属	3	－	－	1	－
ユリ属	－	－	－	－	1
アヤメ科	－	－	－	－	4
クワ科	2	1	－	4	－
ギシギシ属	－	－	3	5	－
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	1	1	2	1
タデ属	3	4	－	－	1
ソバ属	1	2	－	－	－
アカザ科	5	3	8	46	－
ナデシコ科	6	3	4	4	－
カラマツソウ属	－	－	1	－	1
キンポウゲ科	－	－	－	2	1
アブラナ科	3	1	4	19	3
バラ科	2	－	－	4	－
ノアズキ属	1	－	－	－	－
マメ科	－	－	2	1	1
ツリフネソウ属	－	－	2	－	－
キカシグサ属	11	2	－	－	－
アリノトウグサ属	－	1	－	－	－
セリ科	1	3	35	3	11
ネナシカズラ属	－	－	－	－	4
ナス属近似種	2	－	－	－	－
オオバコ属	1	－	－	－	－
ゴキヅル属	－	－	1	－	－
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	－	－	－	－	1
ヨモギ属	14	10	103	41	53
オナモミ属	－	－	3	2	－
キク亜科	－	1	－	5	9
タンポポ亜科	－	2	－	1	3
不明花粉	24	31	17	14	35
シダ類胞子					
デンジソウ属近似種	－	1	－	－	－
サンショウモ	－	1	－	－	－
他のシダ類胞子	49	46	30	35	253
合　計					
木本花粉	232	254	206	216	228
草本花粉	400	322	365	337	183
不明花粉	24	31	17	14	35
シダ類胞子	49	48	30	35	253
総計（不明を除く）	681	624	601	588	664

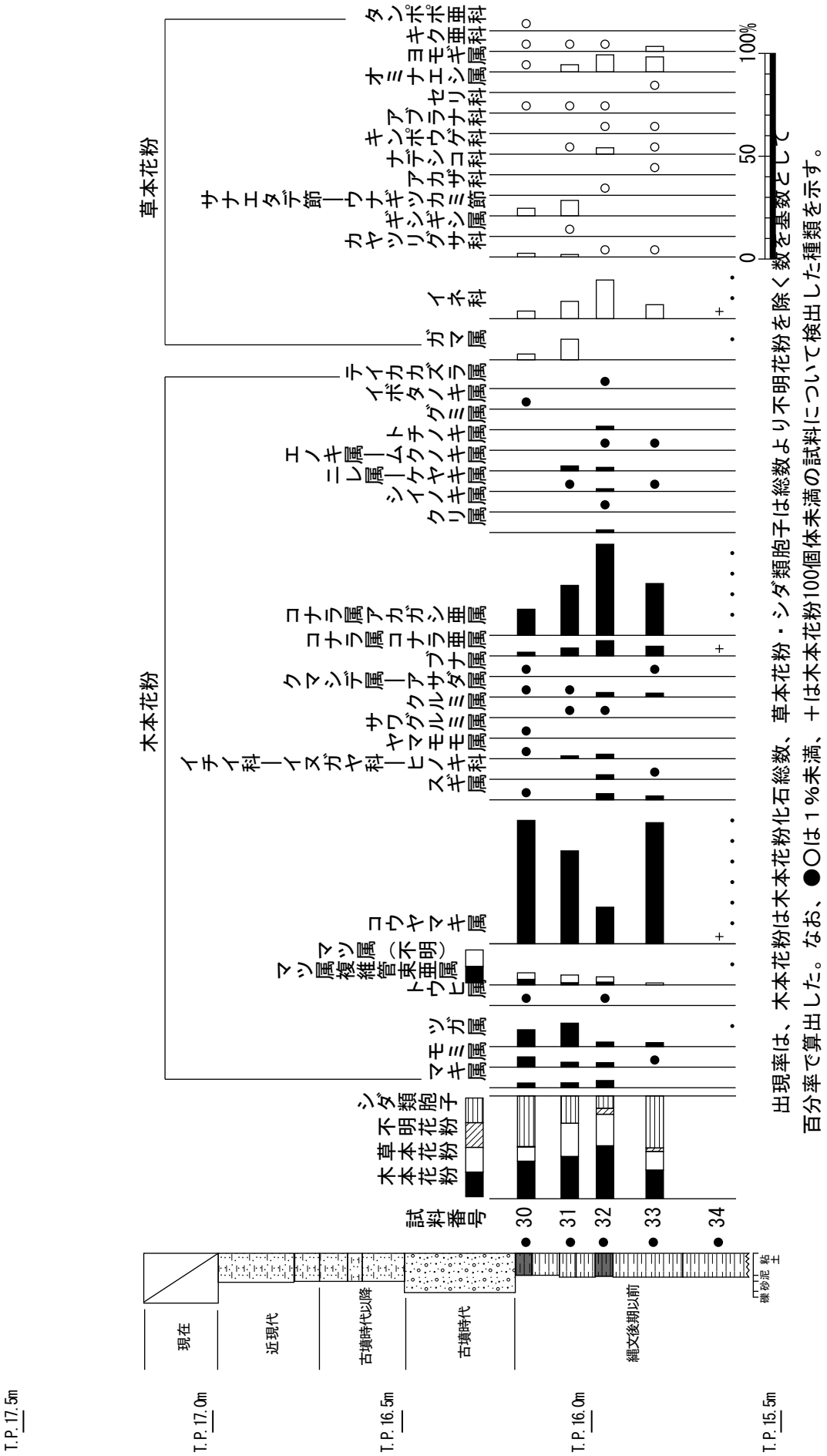


出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第156図　基本層序１地点における主要花粉群集の層位分布

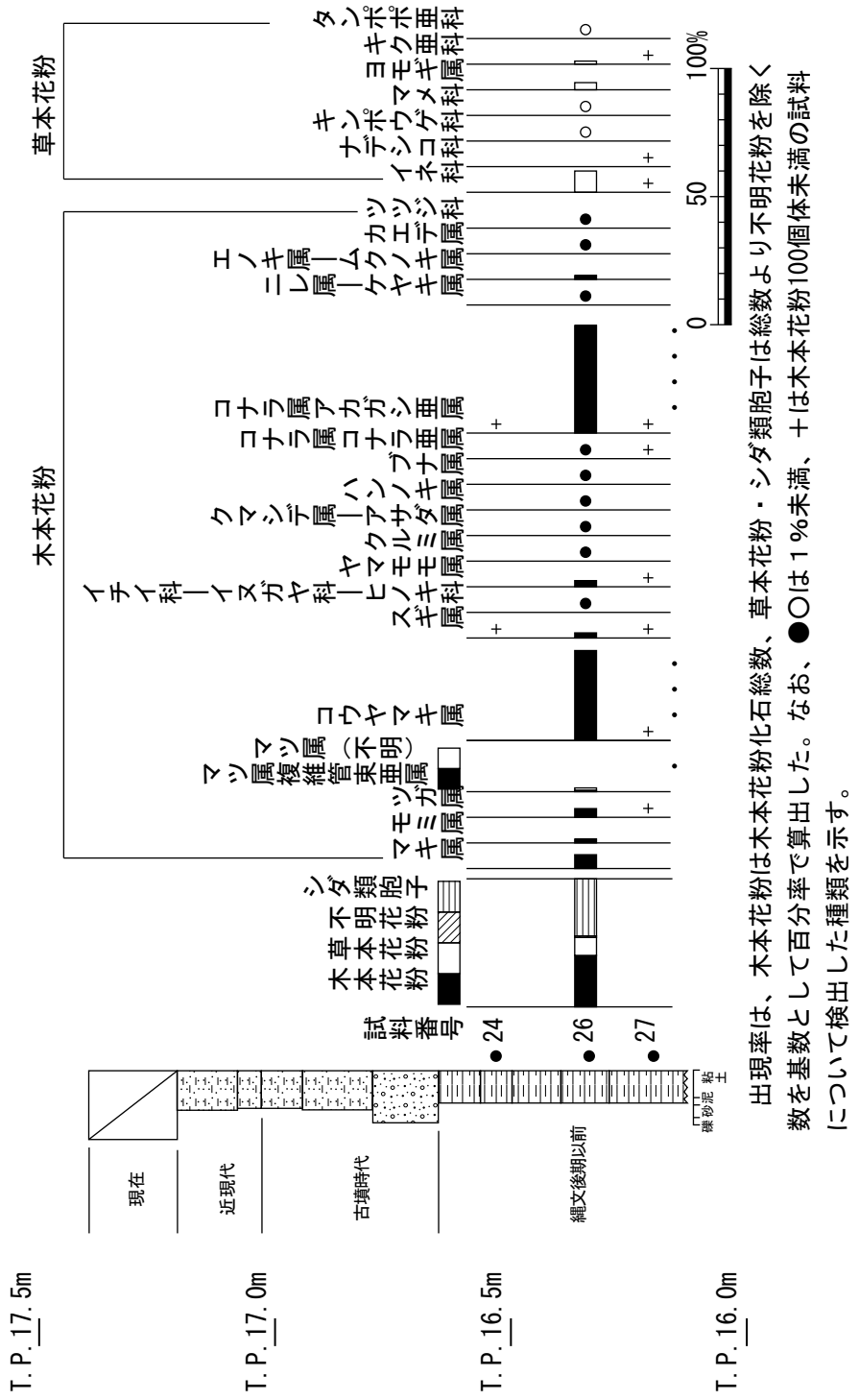


第157図　基本層序２地点における主要花粉群集の層位分布



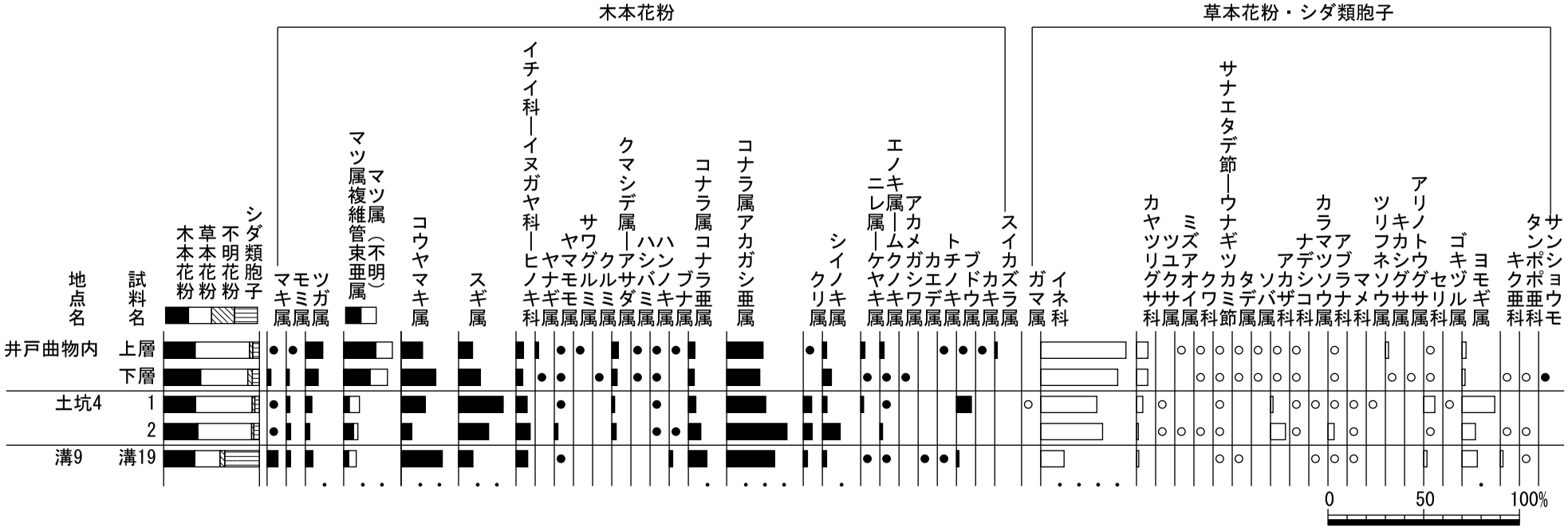
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第158図　基本層序３地点における主要花粉群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第159図　基本層序４地点における主要花粉群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

第160図　各遺構における主要花粉化石群集の層位分布

・基本層序１地点

試料番号11－１の11試料の内、試料番号11－２にかけては花粉化石の産出状況・保存状態とも悪く、かろうじて試料番号８および試料番号６において定量解析をできる程度の検出が認められた。この２試料の群集組成は類似しており、シダ類胞子が多産する。花粉群集組成は木本花粉の割合が高く、コウヤマキ属、コナラ属、アカガシ亜属が多産し、マキ属、ツガ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが認められる。

試料番号１では花粉化石が豊富に産出し、保存状態も良好である。木本花粉ではマツ属が優占し、次いでスギ属が多く認められる。この２属だけで木本花粉の90％以上を占める。その他ではマキ属、ツガ属、ハンノキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科、アブラナ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科などが認められる。

・基本層序２地点

試料番号17－12の６試料の内、定量解析が行える花粉量が検出されたのは試料番号16－14の３試料であり、全体的に保存状態は悪い。花粉群集についてみると、試料により産出量に差が認められるものの、群集組成はいずれも類似している。木本花粉ではコウヤマキ属とアカガシ亜属が多産し、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、キク亜科などが認められる。また、全体的にシダ類胞子が多く産出し、特に試料番号14ではイノモトソウ属などが多産する。

・基本層序３地点

試料番号34－30の５試料の内、試料番号34以外の４試料から花粉化石が検出された。花粉化石の検出数は多く認められるが、保存状態は良好ではない。花粉群集は試料により多産種が異なるものの、群集組成はいずれも類似している。木本花粉ではコウヤマキ属、アカガシ亜属が多産し、マキ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属などが認められる。草本間では、イネ科、ヨモギ属などが多く産出し、試料番号31，30ではガマ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節なども多く検出される。

・基本層序４地点

試料番号27－24の３試料の内、試料番号26からのみ花粉化石が豊富に産出するが、保存状態はやや悪い。群集組成は木本花粉の割合が高く、コウヤマキ属、アカガシ亜属が多産する。その他ではマキ属、ツガ属、ヤマモモ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多く認められる。

・各遺構

09ＳＤ、04ＳＫの試料番号１、２、井戸曲物内上層・下層の５試料のいずれからも、花粉化石が豊富に検出される。保存状態も基本層序試料と比べると良好である。９ＳＤについてみると、木本花粉ではコウヤマキ属、アカガシ亜属が多産し、マキ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多く産出される。

04ＳＫの試料番号１、２の群集組成は類似しており、草本花粉の割合が高い。花粉群集につい

てみると、木本花粉ではスギ属、アカガシ亜属が多く検出し、マツ属、コウヤマキ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、シイノキ属、ブドウ属などを伴う。草本花粉ではイネ科の割合が高く、次いでヨモギ属が多く認められる。その他ではアカザ科、セリ科などを伴う。

井戸曲物内上層・下層の群集組成も類似しており、草本花粉の割合が高い。花粉群集についてみると、木本花粉ではマツ属が最も多く産出し、次いでアカガシ亜属、コウヤマキ属、ツガ属、スギ属などが検出される。その他ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科､クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、シイノキ属などが認められる。草本花粉ではイネ科が優占し、草本花粉の75％以上を占める。その他ではカヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴い、栽培種であるソバ属の花粉も認められる。

４．考察

（１）花粉帯の検討

基本層序試料についてみると、１地点の試料番号１、２とそれ以外の試料で花粉群集組成が異なる。縄文時代後期以前とされる１地点の試料番号８、２地点の試料番号16－14、３地点の試料番号33－30、４地点の試料番号26、および古墳時代から中世とされる１地点の試料番号６では、花粉化石の保存状態が悪く、コウヤマキ属、コナラ属、アカガシ亜属が多産する。その他の種類ではマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹起源の花粉が多く認められる。また、上記以外の試料においては花粉化石がほとんど検出されなかった。一般的に花粉やシダ類胞子は風化に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村、1967；徳永・山内、1971)。今回の分析試料ではコウヤマキ属をはじめとする針葉樹起源の花粉が多く認められおり、シダ類胞子も多産する。また、他の地点にくらべ産出状況が比較的良好な３地点の試料についてみると、シダ類胞子化石は堆積時に取り込まれた花粉がその後の経年変化により風化をうけ、分解に強い針葉樹などの花粉が相対的に多く検出されている可能性がある。

これに対し、近現代とされる１地点試料番号１は花粉化石の保存状態が良く、マツ属が優占しスギ属、イネ科、アブラナ科が多産する。試料番号２は花粉の産出状況が悪かったが、マツ属、イネ科、アブラナ科などが多く認められることから、群集としては試料番号１と同じと考えられる。

このように、基本層序の分析結果は大きく２つに分けられるが、中世以前の試料については、先に述べたように堆積後の外的要因による影響が強いと判断され、当時の植生を正確に反映していない可能性があることから、花粉帯を設定することはあえて行わない。ただし、その影響を考慮してもコウヤマキ属、アカガシ亜属が多産することは明白である。

今回得られた結果と既存の研究結果を比較すると、陶邑北部の野々井遺跡や伏尾遺跡などからコウヤマキ属、アカガシ亜属が多産する群集が認められている（渡辺・古谷、1997)。よって、

今回縄文時代後期以前、および古墳時代から中世の試料は、渡辺・古谷（1997）のⅢe帯に対比される可能性がある。一方、マツ属が優占し、スギ属、イネ科、アブラナ科などが多産する群集は、同じく野々井遺跡や伏尾遺跡などから認められることから、近現代とされる１地点の試料番号２、１は渡辺・古谷（1997）のＩa帯に対比される。

各遺構の試料についてみると、弥生時代中期とされる09ＳＤの試料もコウヤマキ属、アカガシ亜属が多く産出することから、同じく渡辺・古谷（1997）のⅢe帯に対比される。

古墳時代中期から後期とされる04ＳＫでは草本類の割合が高く、イネ科、ヨモギ属が多産する。木本類ではアカガシ亜属、スギ属が多く産出し、マツ属、コウヤマキ属、シイノキ属、ブドウ属などが認められる。同様の花粉群集は七ノ坪遺跡や大庭寺遺跡、伏尾遺跡の古墳時代からも報告されており（渡辺・古谷、1997；渡辺2001)、渡辺・古谷のⅡ帯に対比される。

鎌倉時代の井戸曲物内堆積物でも草本類の割合が高く、イネ科により占められる。木本類では同じくスギ属、アカガシ亜属が多く認められるが、マツ属の割合が増加する。同様の群集は野々井遺跡、大庭寺遺跡、伏尾遺跡、平井遺跡などでも認められており、渡辺・古谷（1997）のＩe帯に対比される。

（２）植生変遷

縄文時代後期以前～弥生時代中期頃の層準では、アカガシ亜属とコウヤマキ属をはじめとする針葉樹起源の花粉化石が多産した。この内、アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、シイノキ属、ヤマモモ属などとともに林分を形成する。また、コウヤマキ属、マキ属、モミ属、ツガ属、スギ属などは温帯性針葉樹であり、しばしば照葉樹林に混じって林分を形成する。これらのことから、少なくとも当時の後背丘陵・後背山地にアカガシ亜属などの広葉樹林要素やコウヤマキ属、ツガ属などの針葉樹が生育していたと推定される。大阪平野における完新世の植生変遷は、大きくは7500－6000年前にナラ類からなる落葉広葉樹林からシイ、カシなどの照葉樹林へと変遷し、6000年前以降照葉樹林の安定時代にはいる。そして、約3000－2000年前にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加する（古谷、1979、前田、1984, 那須、1989　など)。これらの針葉樹は照葉樹林帯とそれより高い（あるいは北方の）山地にあるブナ帯の間を埋める温帯針葉樹林の構成要素であり、これらの要素が大阪平野周辺山地で増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味しているとされる（那須、1989)。今回得られた結果は保存状態などから正確な植生を反映していない可能性があるが、これらの既存の結果と大きく食い違うものではない。

古墳時代中期から後期頃になると、依然として針葉樹林を伴った照葉樹林が成立していたと考えられるが、草本類の割合が高くなり、イネ科、ヨモギ属などが多く認められ、アカザ科、アブラナ科なども伴う。これらの種類には開けた明るい場所を好む「人里植物」が多く含まれることから、該当期の遺跡周辺ではこれらの草本類が生育する草地が広がっていたと思われる。

鎌倉時代になると草本類はイネ科が優占し､木本類ではマツ属複維管束亜属の割合が増加する。

マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育適用範囲が広く、尾根筋や湿地周辺などの他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（たとえば波田、1987など）。大阪平野では約1500年前からマツ属の花粉化石が増加する傾向にあり、アカマツ二次林や植林が成立したとされる（那須、1980、前田、1984など）。今回の結果でも、イネ科の占める割合とともにマツ属の割合も高くなり、栽培種であるソバ属の花粉も検出される。これらのことから、稲作やソバ栽培などの活動が盛んになることにより、後背の丘陵縁辺などに植林や二次林としてのマツ林が増加したと考えられる。

近現代になるとマツ属が優占し、スギ属も多く認められる。これらは有用材として古くから人間に利用されてきたことから、植林などとして維持・管理された結果と思われる。

引用文献

波田善夫、1987、松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について－、資料集．日本自然保護協会、４－49.

古田　昇、1990、槇尾川（大津川）右岸の地形環境．『史跡池上曽根遺跡発掘調査概要　松ノ浜曽根線建設に伴う発掘調査』 大阪府教育委員会、３－24

古谷正和、1979、大阪周辺におけるウルム氷期以降の森林植生変遷．第４紀研究、18、121－14．日下　雅義、1980、歴史時代の地形環境．古今書院、392 p

前田保夫、1984、花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷．宮脇昭（編著）、日本植生誌　近畿．至文堂、87－99.

中村　純、1967、花粉分析．古今書院、232 p

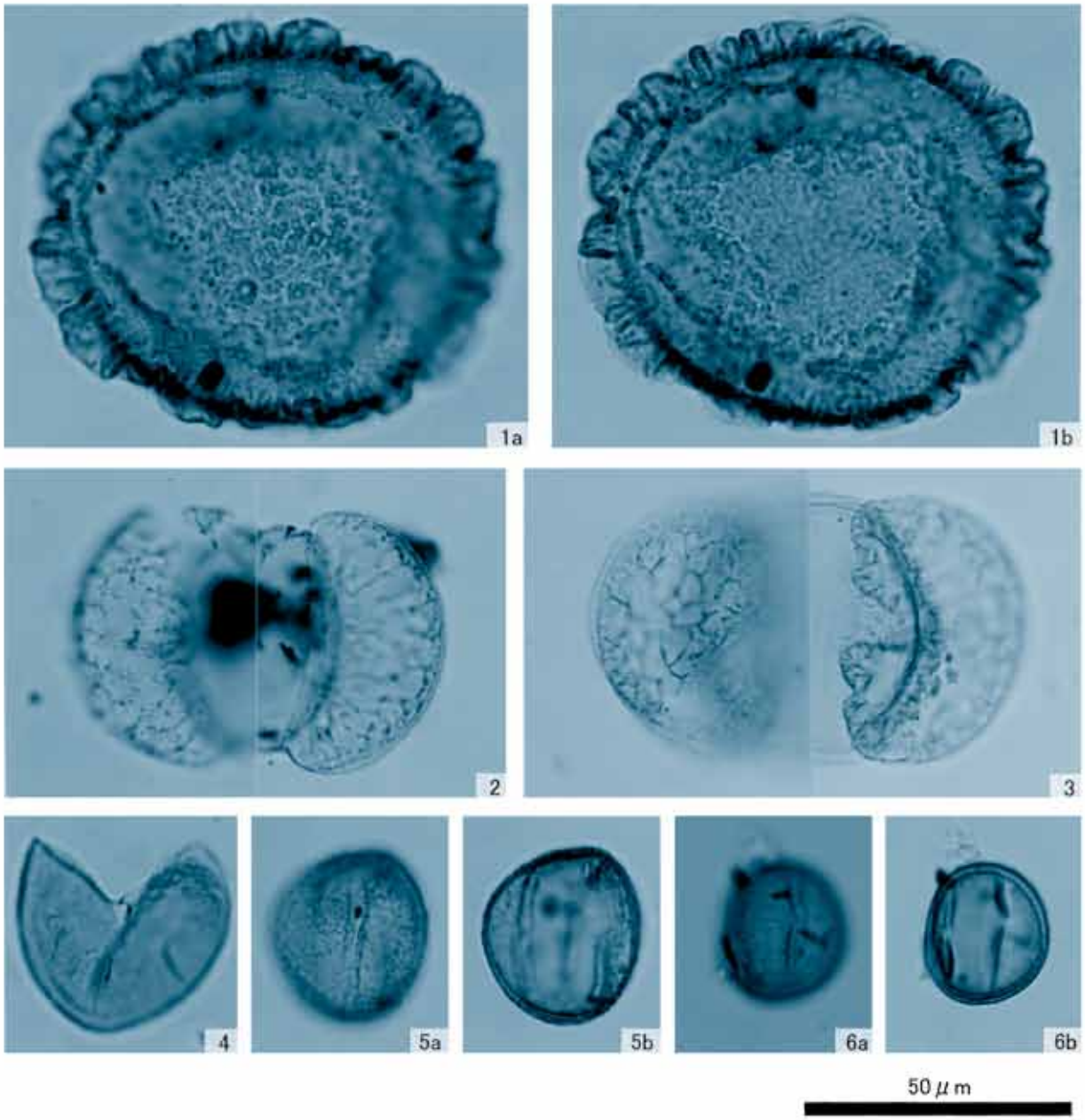
那須孝悌、１９８９、活動の舞台：概論．永井　昌文・那須　孝悌・金関　恕・佐原　真（編著）、弥生文化の研究１　弥生人とその環境、雄山閣出版、119－130。

徳永重元・山内　輝子、1971、花粉・胞子．化石の研究法、共立出版株式会社、50－73

渡辺正巳、2001、七ノ坪遺跡発掘調査に係わる花粉、プラント・オパール分析．大阪府文化財調査報告 2000－６　七ノ坪遺跡、大阪府教育委員会、11－15。

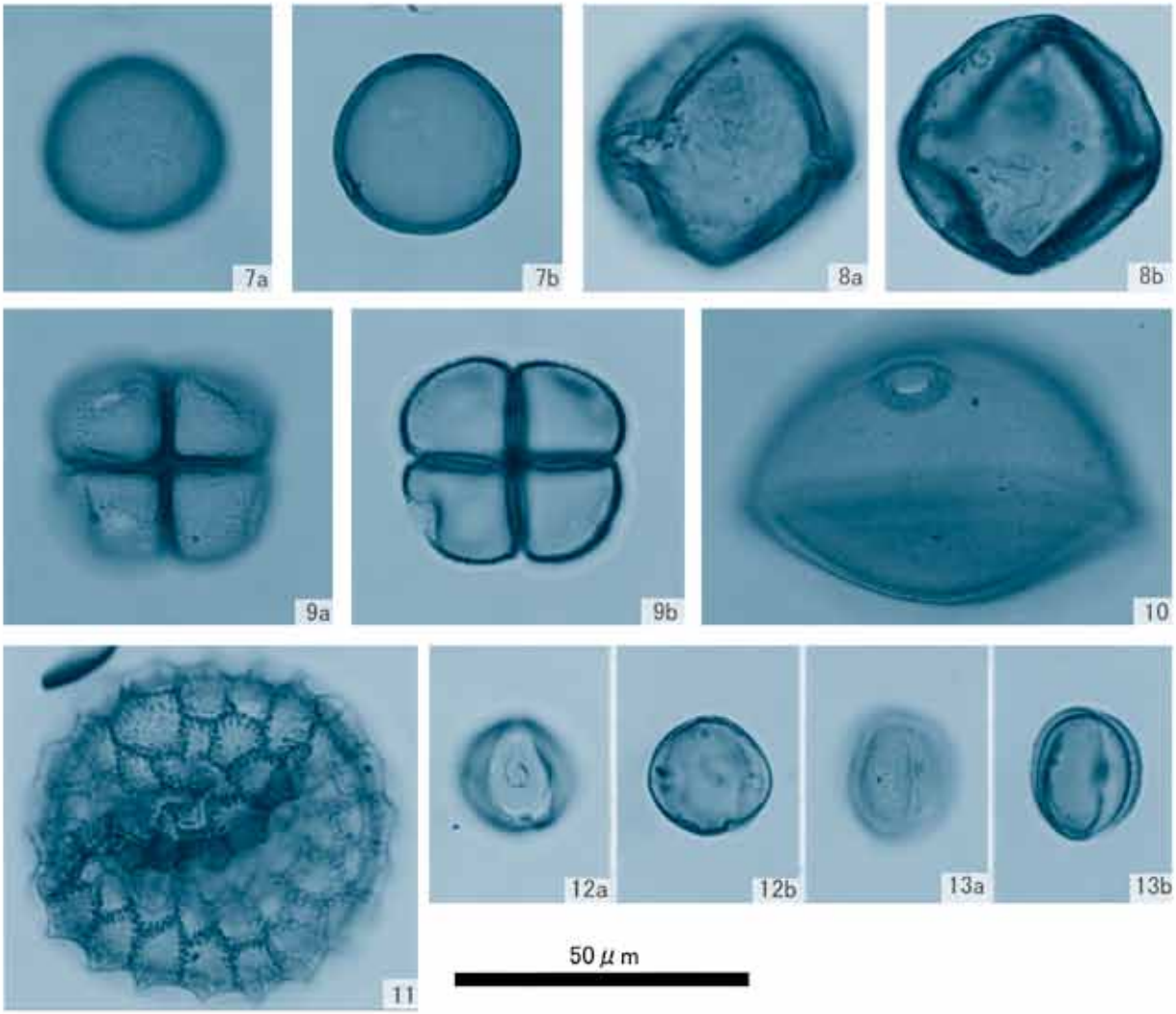
渡辺正巳、古谷正和、1997、陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷．　財団法人　大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第20－２集　野々井遺跡Ⅱ　近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書、財団法人　大阪府文化財調査研究センター、124－14．１

図版1　花粉化石(1)



1．ツガ属(井戸曲物内;下層)
2．マキ属(基本層序3地点;31)
3．マツ属複維管束亜属(基本層序1地点;1)
4．スギ属(基本層序1地点;1)
5．コナラ属コナラ亜属(井戸曲物内;下層)
6．コナラ属アカガシ亜属(井戸曲物内;下層)

図版2　花粉化石(2)



7．エノキ属－ムクノキ属(井戸曲物内;下層)
8．カキ属(井戸曲物内;下層)
9．ガマ属(基本層序3地点;31)
10．イネ科(井戸曲物内;下層)
11．サナエタデ節－ウナギツカミ節(基本層序3地点;31)
12．ブドウ属(土坑4;1)
13．ヨモギ属(土坑4;1)

２．豊中遺跡 04 －１区、板原遺跡 04 －３区の花粉分析

田中　義文

目　　　　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
１．試料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
２．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
３．結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
４．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
（１）　花粉帯の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
（２）　古植生変遷引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・189

図・表・図版　目次

表７　分析試料一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・192
表８　花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
第161図　分析試料採取層準 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190
第162図　花粉化石群集の層位分布 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・191
写真図版３　花粉化石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195

はじめに

豊中遺跡，板原遺跡は大阪府泉大津市から和泉市にかけて所在し、大津川右岸の沖積扇状地上に立地する。日下（1980）では、板原遺跡や豊中遺跡、府中遺跡、池上曽根遺跡、七ノ坪遺跡などが立地する地形面を段丘化した扇状地と区分している。この地形面では、最終氷期に形成された低位段丘相当層の上部に５ｍ、谷部で８～10ｍの流路や氾濫原堆積物からなる完新統が累重していることが確認されている（古田,1990)。

本報告では、トレンチ断面や各遺構より採取した土壌を用いて、縄文時代以降の植生変遷に関する情報を得ることを目的とし、花粉分析を実施する。

１．試料

分析試料の一覧を表７に示す。また、採取層準の柱状図および断面図を第161図に示す。04－３－１区北壁では、弥生時代、古代～中世の河川堆積物６点の分析を行う。04－３－１区南壁では縄文時代後期相当の堆積物３点の分析を実施する。04－１区南半部では、縄文時代後期の包含層３点､古墳時代前期～中期の溝３点の計６点について分析を実施する。04－３－２区北壁では、縄文時代後期?の流路充填堆積物２点、古墳時代前期の溝埋土２点、縄文時代後期の土坑埋土１点の計５点について分析を行う。04－２区北半部東壁では、７点の分析を行う。

２．分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９:濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

３．結果

結果を表８・第162図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的な誤差が大きくなるため、結果が歪曲する恐れがあることから、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。以下、地点ごとに結果を述べる。

・04－３－１区北壁

木本花粉は、いずれも同様な組成を示す。コナラ属アカガシ亜属の割合が高く、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、クリ属－シイノキ属などを伴う。草本花粉は試料番号６は出現率が低いが、試料番号１－５においてはイネ科が多くみられ、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出される。

・04－３－１区南壁

いずれの試料も花粉化石の保存状態が悪く、検出数も極めて少ない。

・１区南半部　東壁南端

全体的に保存状態が悪く、試料番号２を除いてはほとんど検出されない。試料番号２は、シダ類胞子の割合が高い。木本花粉では、マツ属、コウヤマキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多く検出される。

・04－３－２区北壁

下部ではシダ類胞子の割合が、上部では草本類と木本花粉の割合が高い。木本花粉組成は、アカガシ属の割合が高く、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が検出される。草本花粉は、試料番号３、４は低率であるが、試料番号１、２はイネ科、ヨモギ属が多く検出される。

・04－３－２区土坑

いずれの試料も花粉化石の保存状態が悪く、検出数も極めて少ない。

・２区北半部　東壁

いずれの試料も花粉化石の保存状態が悪く、検出数も極めて少ない。

４．考察

（１）花粉帯の検討

今回の結果をみると、04－３－１区北壁と04－３－２区北壁については、比較的多くの花粉化石が得られたが、その他の試料では花粉化石の保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971）。前報では、シダ類胞子と針葉樹花粉の増減が一致し、これらが植生変化に伴うのではなく、風化の程度によることを指摘したが、今回もこれと同様な傾向が認められる。すなわち、04－１区南半部の試料番号２や04－３－２区北壁の試料番号４は、風化作用により風化に強い針葉樹花粉やシダ類胞子が相対的に高くなっているのであり、周辺植生変化に由来するものではないと推定される。前報では、得られた花粉化石群集を渡辺・古谷（1997）の花粉帯と比較、検討していることから、今回も同様に行う。

04－３－２区の北壁の試料番号３、４や04－３－１区北壁の試料番号６で得られた群集は、陶邑北部の野々井遺跡や伏尾遺跡などでみられるコウヤマキ属、アカガシ亜属が多産する群集（渡辺・古谷,1997）と類似する。よって、これらの堆積物は、渡辺・古谷（1997）の花粉帯Ⅲe帯に対比される可能性がある。

一方、古墳時代とされる04－３－２区北壁の試料番号１、２、弥生時代中期、古代～中世とされる04－３－１区北壁の試料番号１～５では、草本類の割合が高く、イネ科、ヨモギ属が多産する。木本類ではアカガシ亜属が多く産出し、マツ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、シイノキ属などが認められる。同様の花粉群集は七ノ坪遺跡や大庭寺遺跡、伏尾遺跡の古墳時代層からも報告されており（渡辺・古谷,1997;川崎地質株式会社,2001）、渡辺・古谷（1997）のⅡ帯に対比される。

これらの群集は、いずれも前報で確認されており、それぞれ対比されていることから、前報と類似した花粉化石群集を示しているといえる。なお、今回の方が花粉化石の保存が悪い試料が多いが、前回の調査地点と比べ、好気的状況など風化を受けやすい環境であったためと推測される。

（２）古植生変遷

前報の結果も含め、古植生変遷について述べる。縄文時代後期以前～弥生時代中期頃では、アカガシ亜属とコウヤマキ属をはじめとする針葉樹起源の花粉化石が多産した。このうち、アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、シイノキ属、ヤマモモ属などとともに林分を形成する。また、コウヤマキ属、マキ属、モミ属、ツガ属、スギ属などは温帯性針葉樹であり、しばしば照葉樹林に混じって林分を形成する。これらのことから、少なくとも当時の後背丘陵・後背山地に、アカガシ亜属などの照葉樹林要素やコウヤマキ属、ツガ

属などの針葉樹が生育していたと推測される。大阪平野における完新世の植生変遷は、大きくは7500－6000年前にナラ類からなる落葉広葉樹林から、シイ、カシなどの照葉樹林へと変遷し、6000年前以降照葉樹林の安定時代にはいる。そして、約3000－2000年前にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加する（古谷,1979;前田,1984;那須,1989など）。これらの針葉樹は、照葉樹林帯とそれより高い（あるいは北方の）山地にあるブナ帯の間を埋める温帯針葉樹林の構成要素であり、これらの要素が大阪平野の周辺山地で増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味している（那須,1989）。今回得られた結果は保存状態などから正確な植生を反映していない可能性があるが、これらと概ね類似した結果である。なお、暖温帯林を構成する代表的な樹木として、タブノキやクスノキなどクスノキ科の植物があり、これらが当時シイやカシ類に混じって生育していた可能性がある。しかし、クスノキ科の花粉化石は膜が弱く化石としてはほとんど残らないため、花粉化石からクスノキ科が生育していたかどうかを推測することは難しい（Feagri and Iversen,1989）。樹木由来の植物珪酸体の中には、クスノキ科の葉にも作られるものもあることから（杉山,1999,2000など）、今後、植物珪酸体や種実などについても調査をしていく必要があろう。

古墳時代以降になると、依然として針葉樹林を伴った照葉樹林が成立していたと考えられるが、草本類の割合が高くなり、イネ科、ヨモギ属などが多く認められる。これらの種類には開けた明るい場所を好む「人里植物」が含まれることから、該当期の遺跡周辺ではこれらの草本類が生育する草地が広がったと思われる。この理由として、耕地拡大による森林の減少と草地の増加が考えられるが、このような傾向は近畿地方における当該期の花粉分析結果に、しばしば現れる傾向である。

今回の分析結果には該当する試料が存在しないが、前報の結果では、鎌倉時代になると草本類ではイネ科が優占し、木本類ではマツ属複維管束亜属の割合が増加する。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（たとえば波田,1987など）。大阪平野では、約1500年前からマツ属の花粉化石が増加する傾向にあり、アカマツ二次林や植林が成立したとされる（那須,1980;前田,1984など）。今回の結果でも、イネ科の占める割合とともにマツ属の割合も高くなり、栽培種であるソバ属の花粉も検出される。これらのことから、稲作やソバ栽培などの活動が盛んになることにより、後背の丘陵縁辺などに植林や二次林としてのマツ林が増加したと考えられる。

引用文献

古田　昇 ,1990, 槇尾川（大津川）右岸の地形環境 .「史跡池上曽根遺跡発掘調査概要 松ノ浜曽根線建設に伴う発掘調査」, 大阪府教育委員会 , ３－ 24.

Feagri K. and Iversen J.,1989,Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press,328p.

古谷正和 ,1979, 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷.　第四紀研究 ,18,121 － 141.

川崎地質株式会社 ,2001, 七ノ坪遺跡発掘調査に係わる花粉、プラント・オパール分析 . 大阪府文化財調査報告 2000 －６　七ノ坪遺跡 , 大阪府教育委員会 ,11 － 15.

日下雅義 ,1980, 歴史時代の地形環境 . 古今書院 ,392p.

前田保夫 ,1984, 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷 . 宮脇　昭（編著）, 日本植生誌　近畿 , 至文堂 ,87 － 99.

中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

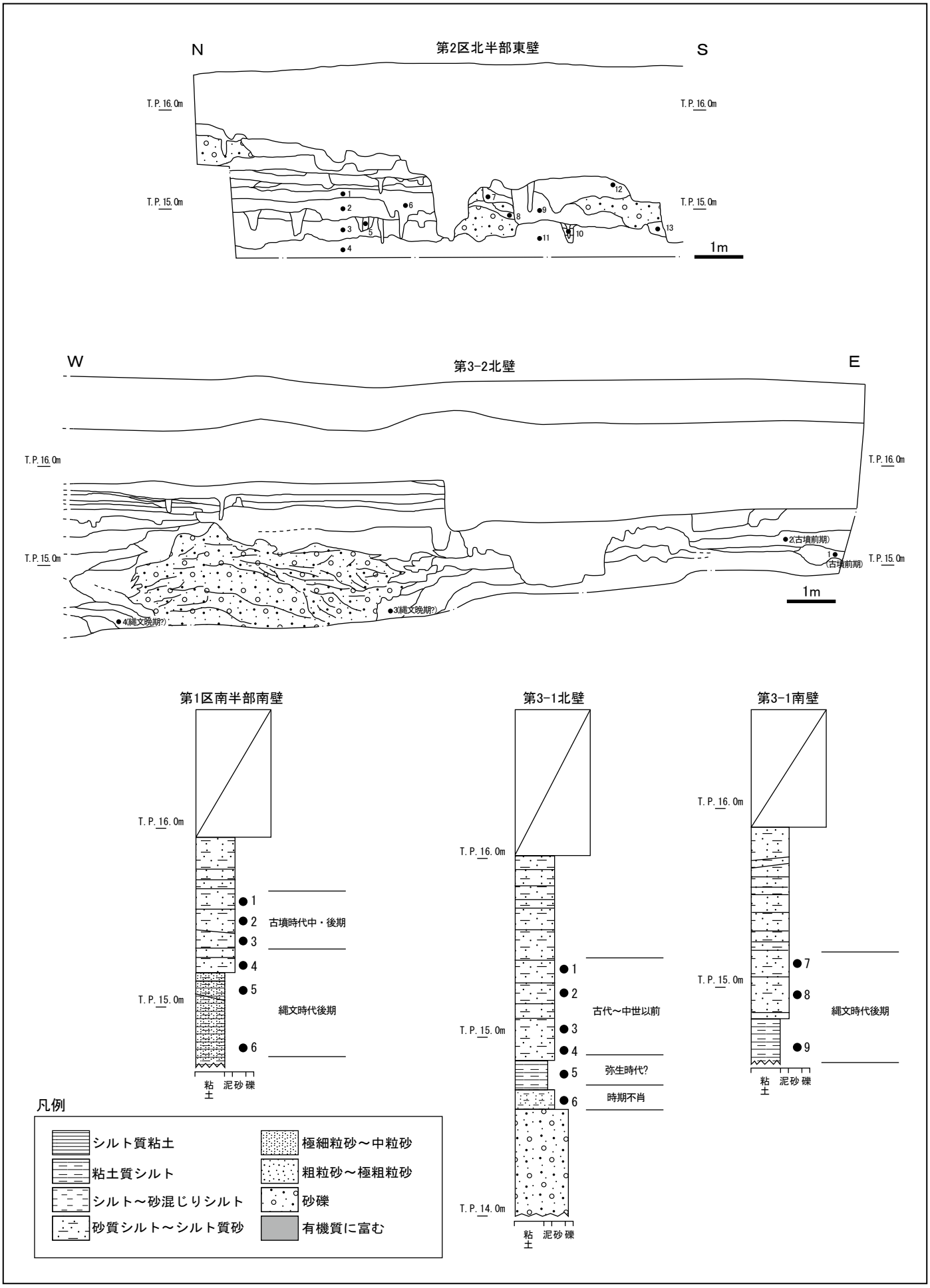
那須孝悌 ,1989, 活動の舞台：概論 . 永井　昌文・那須　孝悌・金　関恕・佐原　真（編著）, 弥生文化の研究１　弥生人とその環境 , 雄山閣出版 ,119 － 130.

杉山真二 ,1999, 植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史 , 第四紀研究 ,38,109 － 123.

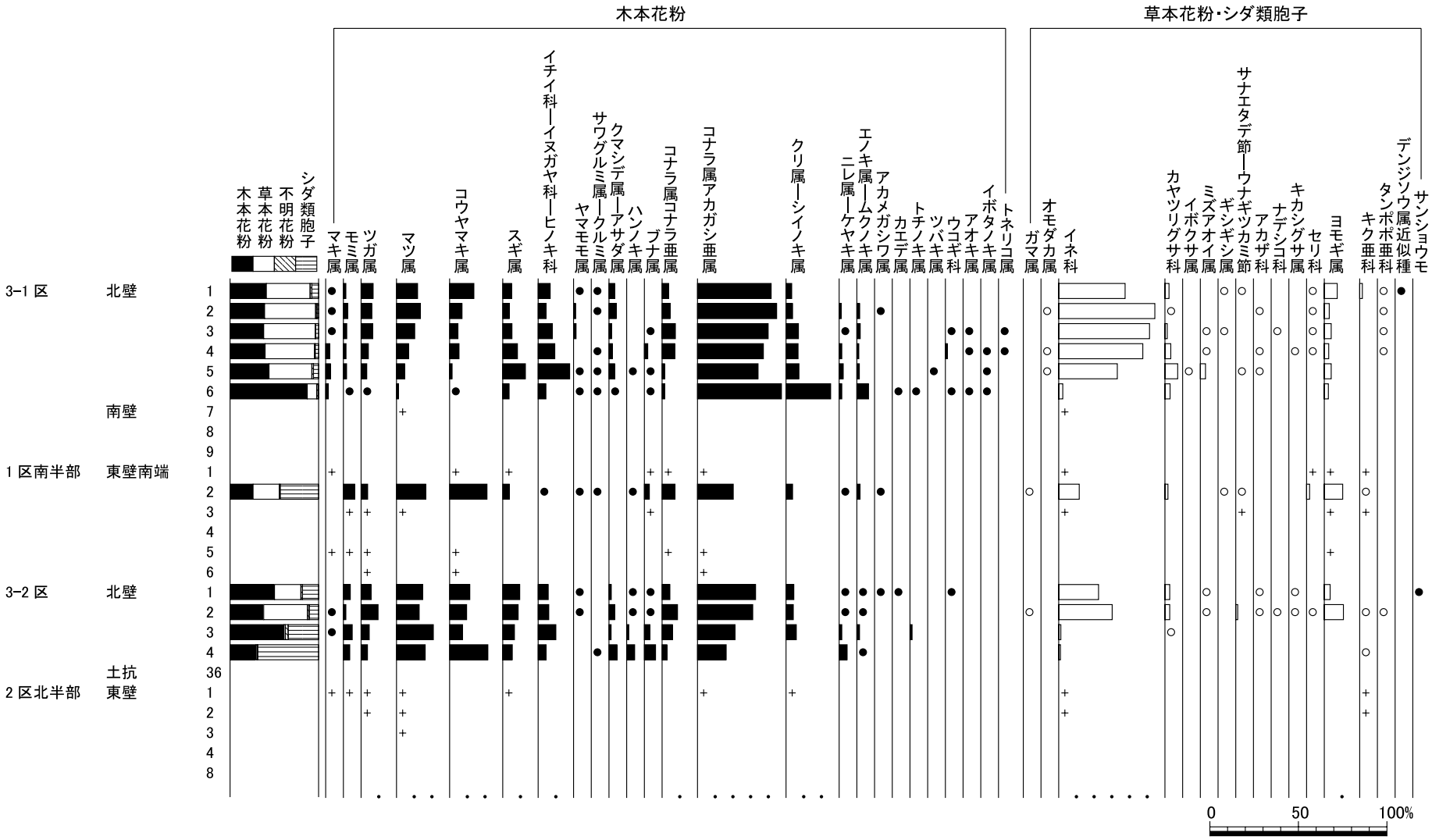
杉山真二 ,2000, 植物珪酸体（プラント・オパール）. 辻　誠一郎編著　考古学と自然科学３　考古学と植物学 , 同成社 ,189 － 213.

徳永重元・山内　輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50 － 73.

渡辺正巳・古谷正和 ,1997, 陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷 . 財団法人　大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第 20 －２集　野々井遺跡Ⅱ　近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書 , 財団法人　大阪府文化財調査研究センター ,124 － 141.



第161図　分析試料採取層準



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

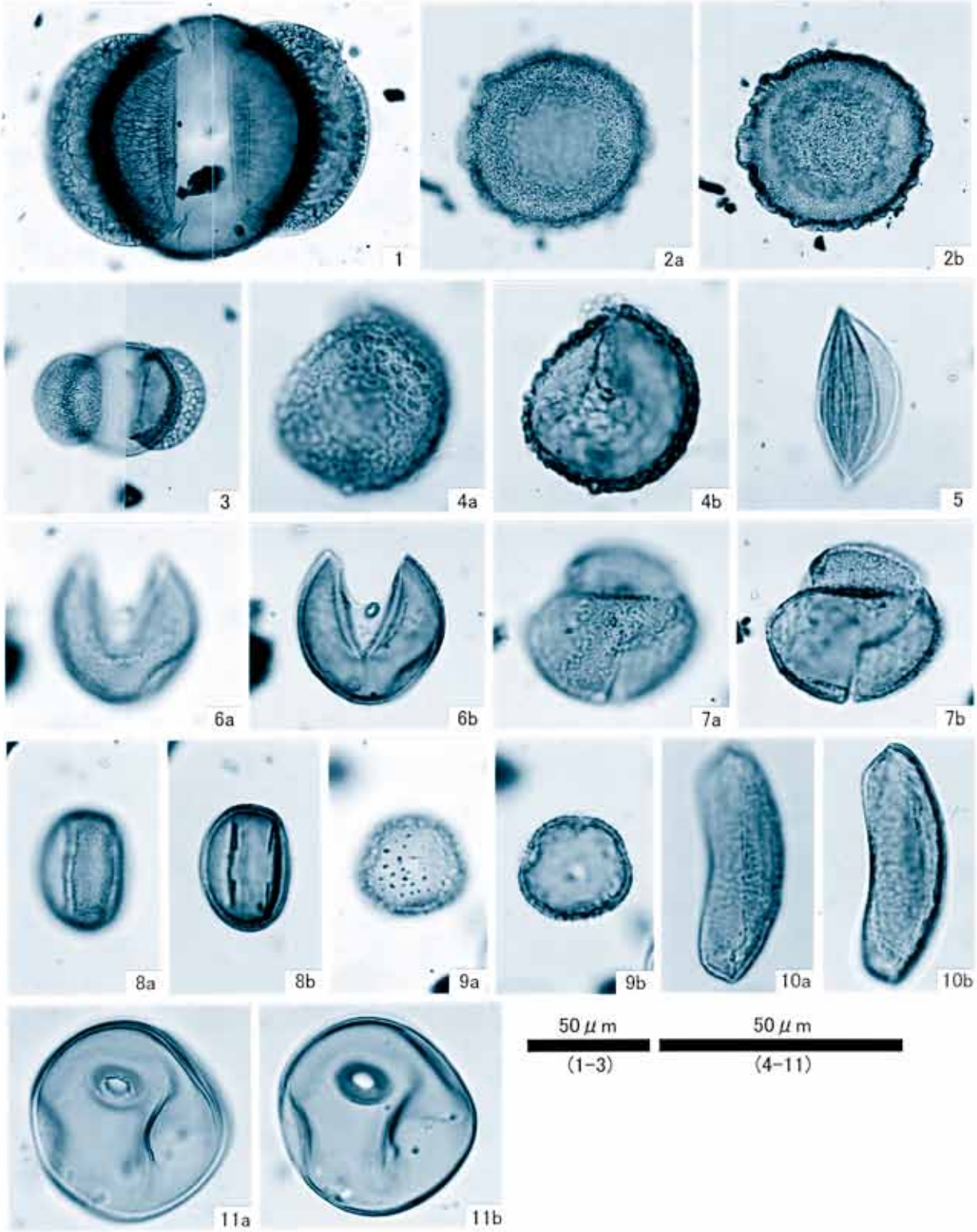
表７　04区分析試料一覧

調査区	断面	試料番号	時代	備考	分析の有:1無:0
3-1区	北壁	1	古代～中世	河川堆積物	1
		2			1
		3			1
		4			1
		5	弥生時代？		1
		6	？		1
	南壁	7	縄文後期相当		1
		8			1
		9			1
1区南半部	東壁南端	1	古墳前・中期	溝10埋土	1
		2			1
		3			1
		4	縄文後期（遺物出土）	包含層	1
		5		包含層.炭・炭粒混	1
		6		包含層：炭・炭粒・焼土塊含む	1
4区	南壁	1			0
		2			0
3-2区	北壁	1	古墳前期	溝1下層下部	1
		2		溝１下層上部、中期含む	1
		3	縄文後期？	河川埋土	1
		4		河川埋土	1
3-2区	土坑36		縄文後期		1
2区北半部	東壁	1			1
		2			1
		3			1
		4			1
		5		柱根埋土	0
		6	縄文後期		0
		7			1
		8			1
		9			1
		10			0
		11			0
		12			0
		13			0
合計点数					27

表８　04区花粉分析結果

種類	3-1区									1区南半部						3-2区					2区北半部				
	北壁						南壁			東壁南端						北壁				土坑	東壁				
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	36	1	2	3	4	8
木本花粉																									
マキ属	1	1	1	6	6	4	–	–	–	2	–	–	–	1	–	–	2	2	–	–	2	–	–	–	–
モミ属	3	6	4	4	4	1	–	–	–	–	7	4	–	1	–	9	3	13	4	–	1	–	–	–	–
ツガ属	15	15	14	11	7	2	–	–	–	–	4	1	–	1	1	13	21	12	4	–	3	1	–	–	–
トウヒ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	2	3	9	5	4	–	–	–	–	–	4	2	–	–	–	8	8	20	1	–	–	–	–	–	–
マツ属（亜属不明）	24	30	13	13	6	3	1	–	–	–	14	6	–	–	–	26	20	34	17	–	3	1	1	–	–
コウヤマキ属	30	17	10	14	3	2	–	–	–	2	23	–	–	4	3	26	21	19	24	–	–	–	–	–	–
スギ属	11	9	11	22	28	10	–	–	–	4	4	–	–	–	–	22	19	17	6	–	1	–	–	–	–
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	15	11	17	25	39	12	–	–	–	–	1	–	–	–	–	13	13	26	5	–	–	–	–	–	–
ヤマモモ属	2	3	3	–	1	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	1	–	–	–	–	–	–	–	–
ノグルミ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サワグルミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
クルミ属	2	1	–	1	1	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	7	10	3	5	7	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	7	3	5	–	–	–	–	–	–
カバノキ属	1	1	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ハンノキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	1	3	5	–	–	–	–	–	–
ブナ属	–	–	1	5	2	1	–	–	–	1	3	1	–	–	–	1	1	8	7	–	–	–	–	–	–
コナラ属コナラ亜属	8	11	16	19	3	4	–	–	–	4	8	–	–	1	–	10	19	15	3	–	–	–	–	–	–
コナラ属アカガシ亜属	91	109	85	99	75	130	–	–	–	1	22	–	–	3	2	75	68	55	18	–	5	–	–	–	–
クリ属－シイノキ属	7	9	15	18	16	69	–	–	–	–	4	–	–	–	–	10	9	15	–	–	1	–	–	–	–
ニレ属－ケヤキ属	–	3	1	4	5	4	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	1	4	5	–	–	–	–	–	–
エノキ属－ムクノキ属	–	4	4	3	3	18	–	–	–	–	2	–	–	–	–	1	2	4	1	–	–	–	–	–	–
ヤドリギ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イスノキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サンショウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ユズリハ属	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アカメガシワ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
シラキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
ウルシ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–
モチノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
カエデ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
トチノキ属	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–
ブドウ属	–	–	–	3	1	–	–	–	–	–	5	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
ツタ属	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
シナノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
ツバキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ウコギ科	–	–	1	3	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アオキ属	–	–	1	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ツツジ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ハイノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–	1	–	–	–	–	–	–	–
イボタノキ属	–	–	–	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
トネリコ属	–	–	1	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
テイカカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–
ガマズミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
スイカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
草本花粉																									
ガマ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
オモダカ属	–	1	–	5	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イネ科	196	335	287	317	162	7	2	–	–	11	48	1	–	–	–	101	170	5	4	–	4	1	–	–	–
カヤツリグサ科	12	4	7	22	35	9	–	–	–	–	7	–	–	–	–	12	15	2	–	–	–	–	–	–	–
イボクサ属	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ミズアオイ属	–	–	2	6	14	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
クワ科	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–	–	–	–	–	–	–	–
ギシギシ属	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	–	–	–	1	–	–	–	–	–	3	2	–	–	–	–	6	–	–	–	–	–	–	–	–
タデ属	–	–	–	–	–	5	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アカザ科	–	1	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
ナデシコ科	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
カラマツソウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
キンポウゲ科	–	–	–	2	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	5	–	–	–	–	–	–	–	–
アブラナ科	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	6	–	–	–	–	–	–	–	–
バラ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	6	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
マメ科	–	–	–	1	3	3	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
キカシグサ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
ミズユキノシタ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
セリ科	1	1	4	2	–	–	–	–	–	1	7	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
ネナシカズラ属	–	–	–	1	1	–	–	–	–	1	2	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヤエムグラ属－アカネ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
オミナエシ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ゴキヅル属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	6	–	–	–	–	–	–	–	–
ヨモギ属	38	17	22	17	19	7	–	–	–	3	43	1	–	1	–	15	61	–	–	–	–	–	–	–	–
キク亜科	8	–	–	–	–	–	–	–	–	1	3	2	–	–	–	–	1	–	1	–	3	1	–	–	–
タンポポ亜科	3	3	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
不明花粉	11	10	2	6	9	5	–	–	–	1	4	–	–	–	1	8	12	14	3	–	–	–	–	–	–
シダ類胞子																									
ヒカゲノカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	3	–	2	1	–	1	–	2	4	–	3	1	–	–	–
ゼンマイ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–
イノモトソウ属	–	–	2	–	3	–	–	–	–	1	34	5	1	23	5	5	4	31	56	–	14	11	3	3	9
デンジソウ属近似種	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サンショウモ	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
他のシダ類胞子	40	11	17	25	26	2	1	–	1	21	144	30	3	212	41	76	57	113	204	6	96	39	2	9	24
合　計																									
木本花粉	219	244	213	266	219	274	1	0	0	14	109	15	0	14	6	229	218	259	111	0	16	2	1	0	0
草本花粉	263	362	327	376	241	33	2	0	0	17	124	6	0	1	0	136	284	7	5	0	7	2	0	0	0
不明花粉	11	10	2	6	9	5	0	0	0	1	4	0	0	0	1	8	12	14	3	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	41	11	19	25	29	2	1	0	1	23	181	35	6	236	46	83	61	147	265	6	113	51	5	12	33
総計（不明を除く）	523	617	559	667	489	309	4	0	1	54	414	56	6	251	52	448	563	413	381	6	136	55	6	12	33

図版3　花粉化石（3）



1．モミ属(3-1区北壁;4)
2．ツガ属(3-1区北壁;3)
3．マツ属複維管束亜属(3-1区北壁;3)
4．コウヤマキ属(3-1区北壁;5)
5．イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科(3-1区北壁;4)
6．スギ属(3-1区北壁;4)
7．コナラ亜属(3-1区北壁;4)
8．アカガシ亜属(3-1区北壁;4)
9．オモダカ属(3-1区北壁;4)
10．ミズアオイ属(3-1区北壁;5)
11．イネ科(3-1区北壁;4)

第５章　まとめ

2002年から2009年まで実施した都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡の調査では多くの成果を上げることができた。ここで簡単に纏めておきたい。

縄文時代では、縄文土器の項でも纏められているように、板原遺跡で前期に遡る遺物が出土した。この時期のものは海岸線に近い地域では殆ど出土していない。これまでの調査は現耕作面から数10㎝で中世や古墳時代、弥生時代の遺構が検出されるので、この面で調査を終えていたことが多い。縄文時代の層は有機物が乏しく、明瞭な包含層を形成しないが、出土状況を見るとこの地域全体に広がっていると考えられる。制約も多いが、縄文層を意識した調査が必要であろう。

弥生時代では、前期の土器が豊中遺跡となる09－１区で土器が出土した。中期中頃以降になると、1985年に調査を実施した市役所北交差点の東側を含め、東西700ｍの全域で遺構や遺物が検出されている。85年調査では中期の住居跡３棟と後期の方形周溝墓、今回の調査では市役所北交差点の北側で、方形周溝墓が５基以上検出された。また、約40ｍ離れた南側の07－５・６区、08－５・６区でも、完形に近い土器を伴う溝や土坑が基検出されており、周溝墓が広がっていた可能性が高い。07年調査区に近接して、和泉市の調査で中期の竪穴住居跡が５基検出されている。また、詳細はまだ未公表であるが、今回の調査区の北東100ｍの府中駅前再開発地区でも中期の竪穴住居が10棟前後検出されている。一方、板原遺跡の07－11区や04－３区でも中期の土坑や溝が検出されている。後期では85年調査区で方形と円形の周溝墓、86年度調査の国府小学校側で後期後半の住居跡が２棟検出されている。また、市役所北交差点付近で溝や土坑が検出されているほか、板原遺跡になる調査区でも遺構は確認できなかったが遺物が散見される。このように、85年調査区を含め、東西750ｍのほぼ全区間で中期から後期の遺構、遺物が検出されており、北約３キロに所在する池上曽根遺跡のように集落範囲を明確に規定する環濠のような施設は見つかっていないが、池上曽根遺跡に劣らない規模の集落であった可能性が高い。

古墳時代では、府中駅に近い調査区で住居跡は未検出であるが、前期の土坑や溝、多くの遺物が検出されている。また、中後期では和泉府中駅に近い04－１区で掘立柱建物、豊中遺跡になる03－１～３区や04年区で土坑や土器集積（河道か）が確認されており、また、駅前再開発地区でも詳細は不明であるが掘立柱建物や河道から建物の部材が検出されており、調査地が集落の一画を占めていたことは確実であろう。

奈良、平安時代では、これまで度々指摘されてきたように、遺物は散見されるものの国府を推定させる遺構は未だに確認されていない。和泉府中駅前の調査でもこの時期の遺構は検出されていないようである。中世後期以降大規模な勧農政策ににによって土壌が削平された可能性も指摘されている。もしそうであれば、槇尾川右岸地域の郷や郡単位での勧農が勧められたことになる。

国衙の位置については歴史地理から、「大津」が国府に関わる港（外港）であり、大津からこの地域の海岸線を基線とする条理地割に従った直線道路（勅使街道）と熊野街道（小栗街道）が

交わる交通上の要衝であること。また「和泉」国の由来となった泉井上神社が所在し、「館」など国衙の所在を暗示する字名が残っていることなどが根拠となり、府中駅の東側で五町四方が推定されている。国府所在地としては泉井上神社を含めた地域で異論はないが、今後の駅前地区の調査を期待したい。

鎌倉から室町時代になると、07－11区、09－２区、03－１、２区など板原遺跡の調査区で、1/3町、約30ｍ間隔の規模で区画溝を検出し、井戸、廃棄土坑などが見つかっている。この区画溝は、肥子池を挟んだ東側の07－９区でも検出されており、溝は300ｍ以上直線的に延びている。現在の用水路もこの溝の位置をほぼ踏襲しており、里道の側溝が用水路として利用されていた可能性が高い。

30ｍを基準とする屋敷地は、約３キロ東の和気遺跡でも30ｍ×70ｍの屋敷区画が確認されている。また、泉佐野市の上町遺跡でも15世紀頃の約30ｍ×50ｍ規模の屋敷地で構成される集落が検出されている。今回は幅約８ｍの線状の調査で、屋敷地の規模を掴むことはできなかったので、屋敷の規模は不明であるが、室町時代の国人層か名主や本百姓などの有力農民層の屋敷地と考えて大過ないであろう。

中世後期から近世以降以降、今回の調査地は板原の集落域を含めてほぼ全域が水田化され、府中や穴田、板原など近世的な集村が形成される。また、槇尾川（大津川）にみられるように河口部を中心に河道が固定され井堰で河道を管理できない地域では各地でまず野井戸が掘削され、その後に平坦地ににも溜池が築造され、現代につながる景観が形づくられた。

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふちゅういせき・とよなかいせき・いたはらいせき
書名	府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡
副書名	都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０１１－９
編著者名	阿部幸一、大野薫、亀島重則、関真一、竹原伸次、藤澤眞依、三木弘
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL06－6941－0351（代表）
発行年月日	2012年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
府中遺跡 豊中遺跡 板原遺跡	和泉市 府中町 肥子町	27219	34 (府中) 29 (豊中) 30 (板原)	34° 28′ 35″	135° 25′ 35″	20030714～ 20040315	1020㎡	記録保存調査
						20040610～ 20050331	1230㎡	
						20050824～ 20051012	140㎡	
						20061101～ 20070323	850㎡	
						20070409～ 20080310	730㎡	
						20080403～ 20090328	1220㎡	
						20090401～ 20090930	850㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府中遺跡 豊中遺跡 板原遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 近　世	縄文時代の土坑 弥生時代の土坑・ピット 古墳時代の溝 鎌倉から室町時代の屋敷地･井戸･土坑	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 瓦器	弥生時代中期の遺構を各地区で検出 弥生時代後期から古墳時代初めの掘立柱建物や溝を検出 鎌倉から室町時代の集落を検出 縄文時代前期の土器が出土

要　約	都市計画道路和泉中央線のＪＲ阪和線から穴田交差点までの区間で調査を実施した。調査地は府中、豊中、板原の３遺跡が接して存在する。 調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の土坑、古墳時代の掘立柱建物、溝、土坑、鎌倉時代から室町時代の屋敷地区画溝、柱穴、井戸、土坑を検出した。 遺物は縄文時代前期、中期、後期の土器、弥生時代中期、後期の土器、古墳時代の土器、中世の瓦器、羽釜等が出土した。

大阪府埋蔵文化財調査報告２０１１－９

府中遺跡・豊中遺跡・板原遺跡

－都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成24年３月30日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号

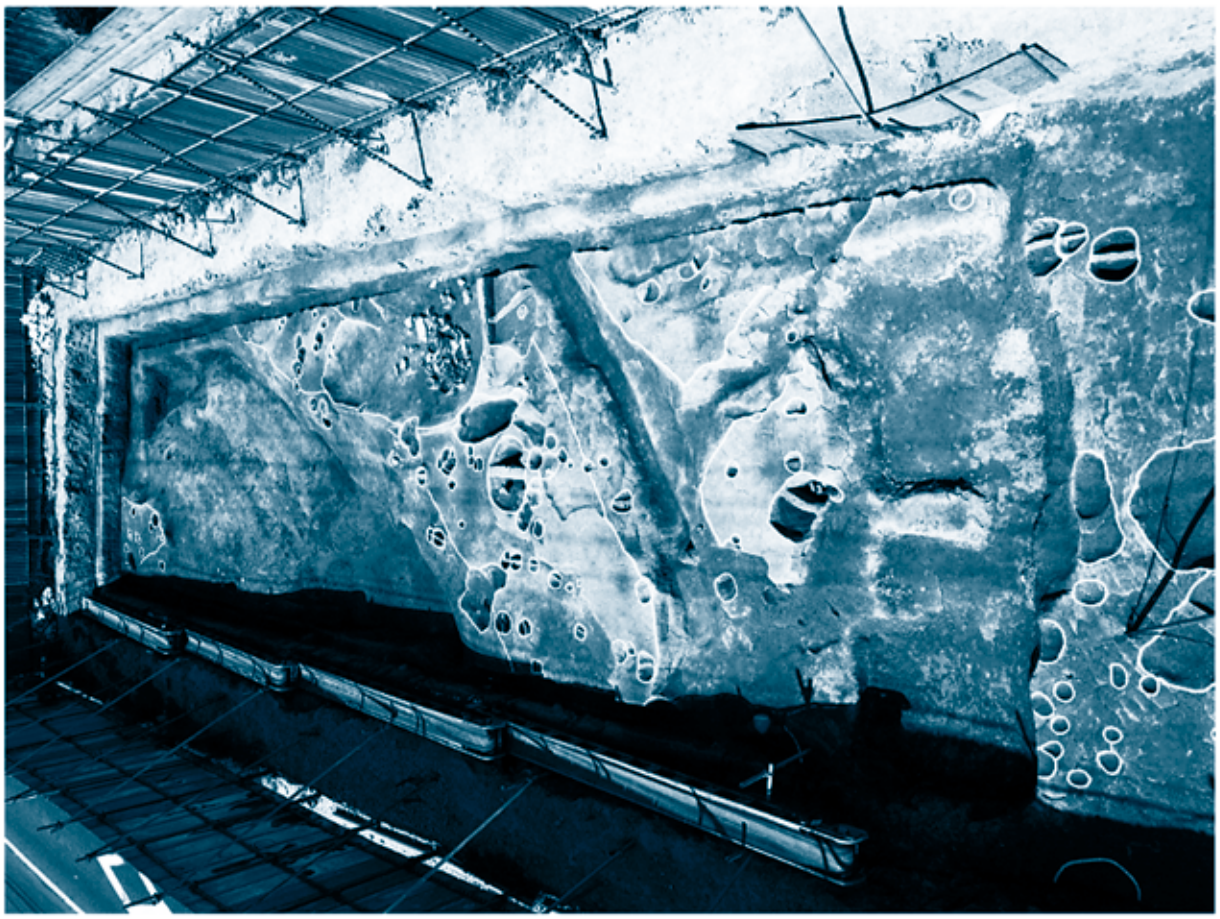
図　　版

07-11b 区 137SE 出土土器

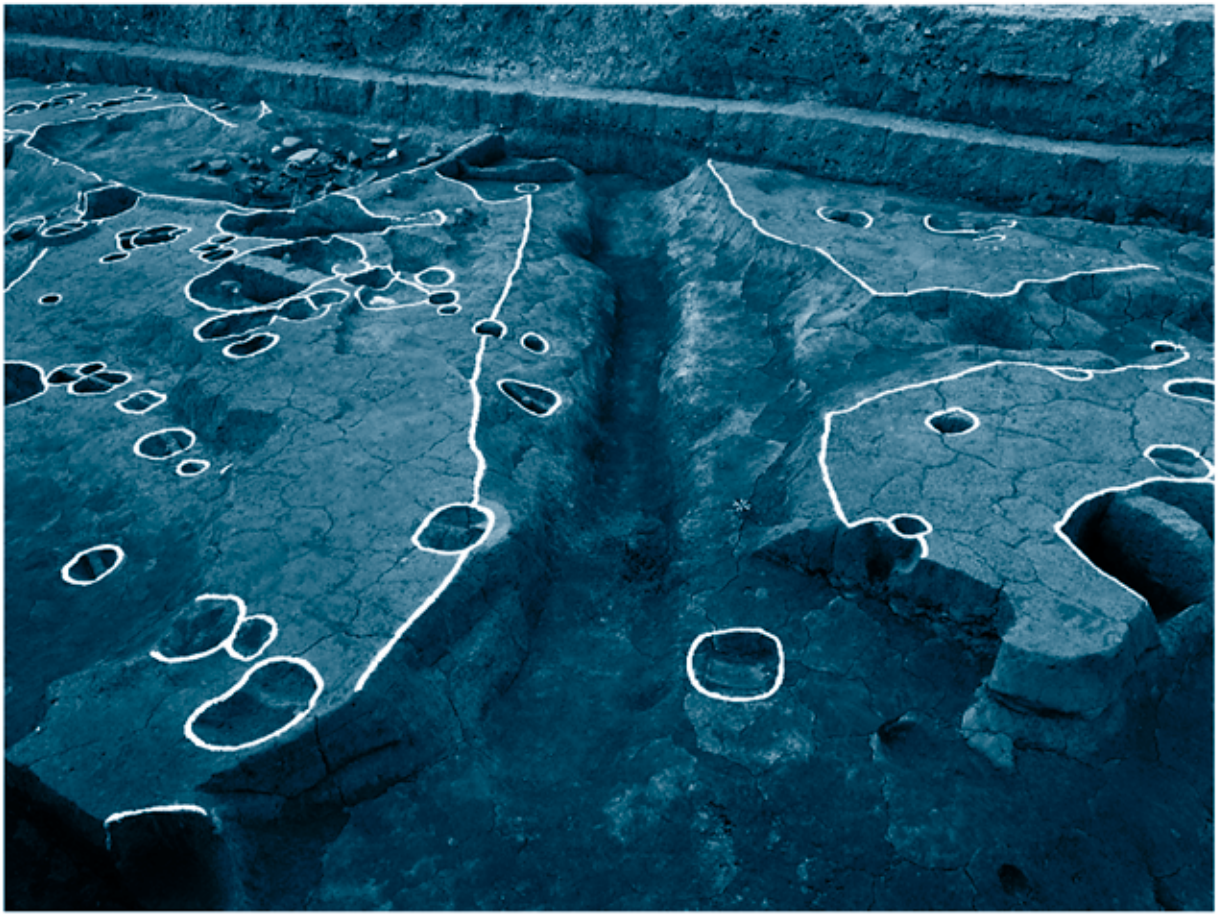
図版1

03-1区

第2面全景



第3面全景（北西から）



第3面溝 501SD

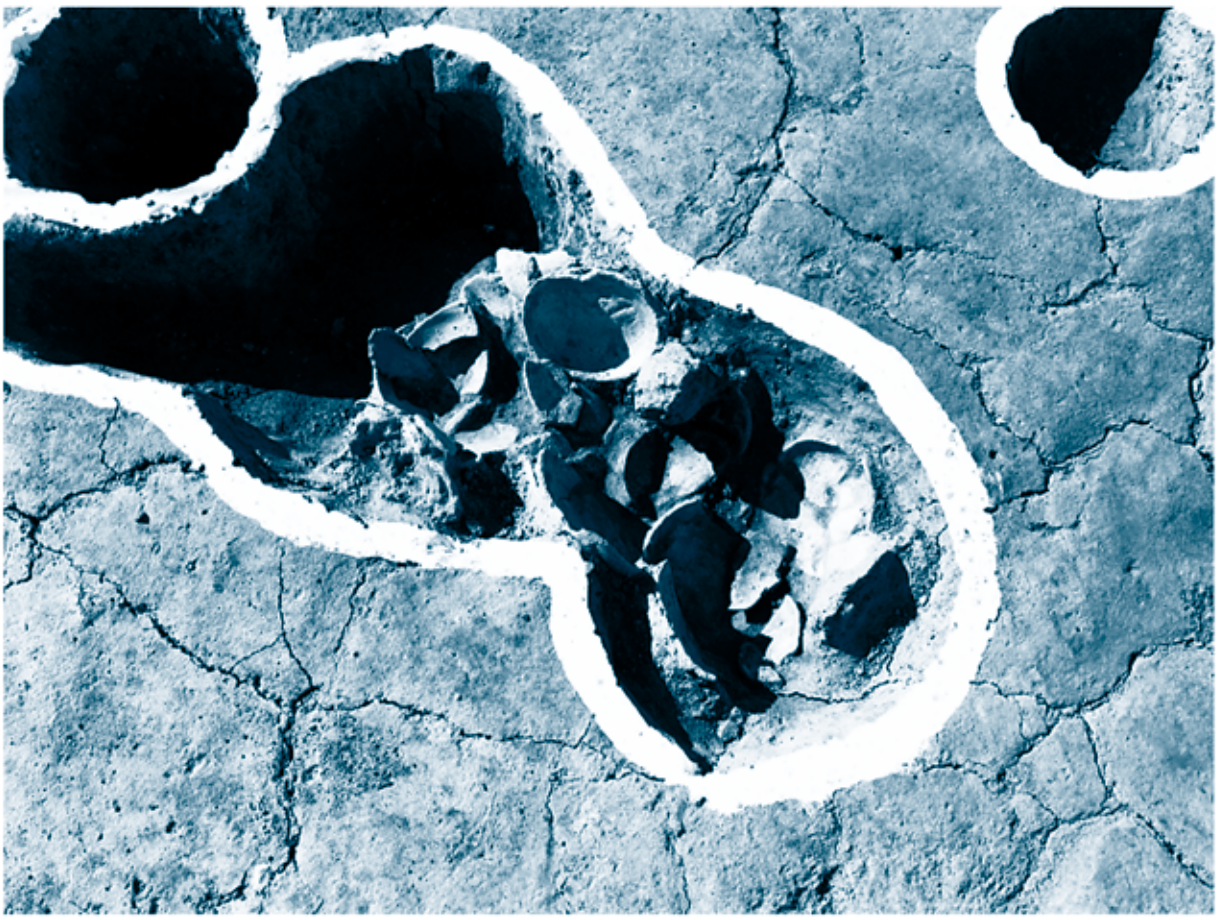
第2面井戸 158SE

図版3

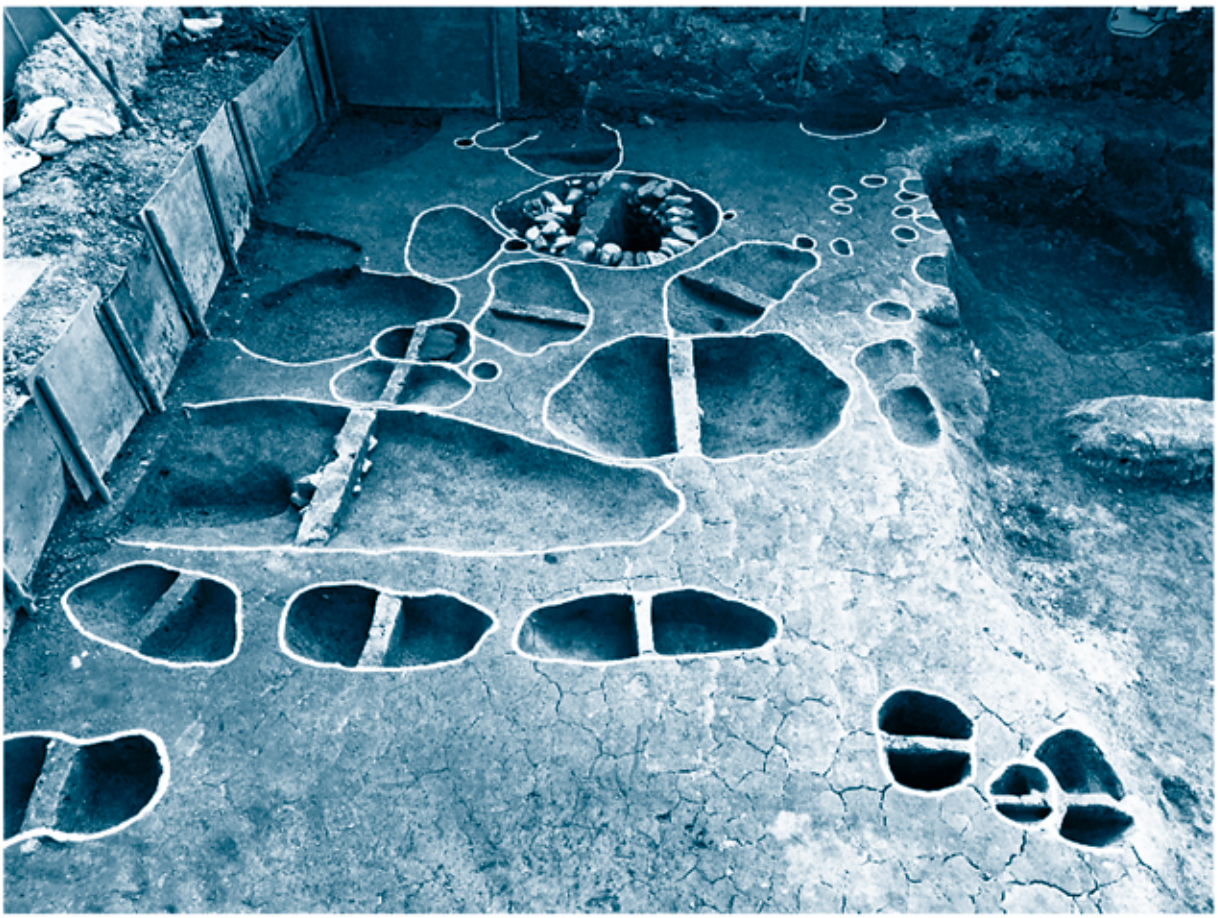
03-1区

井戸 158SE 断面

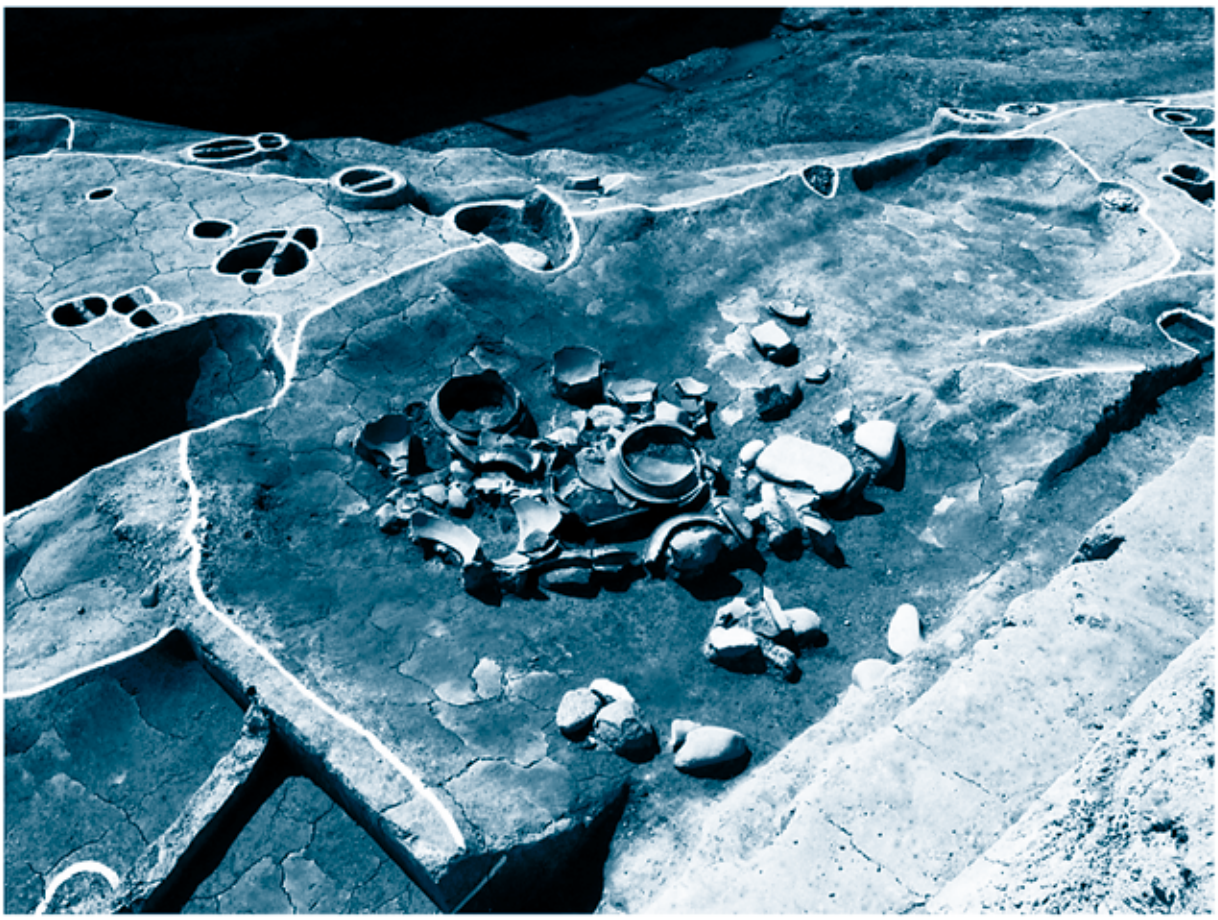
河道 5001SR 北西部（南東から）



80SK 遺物出土状況



1区2面南東部（北から）

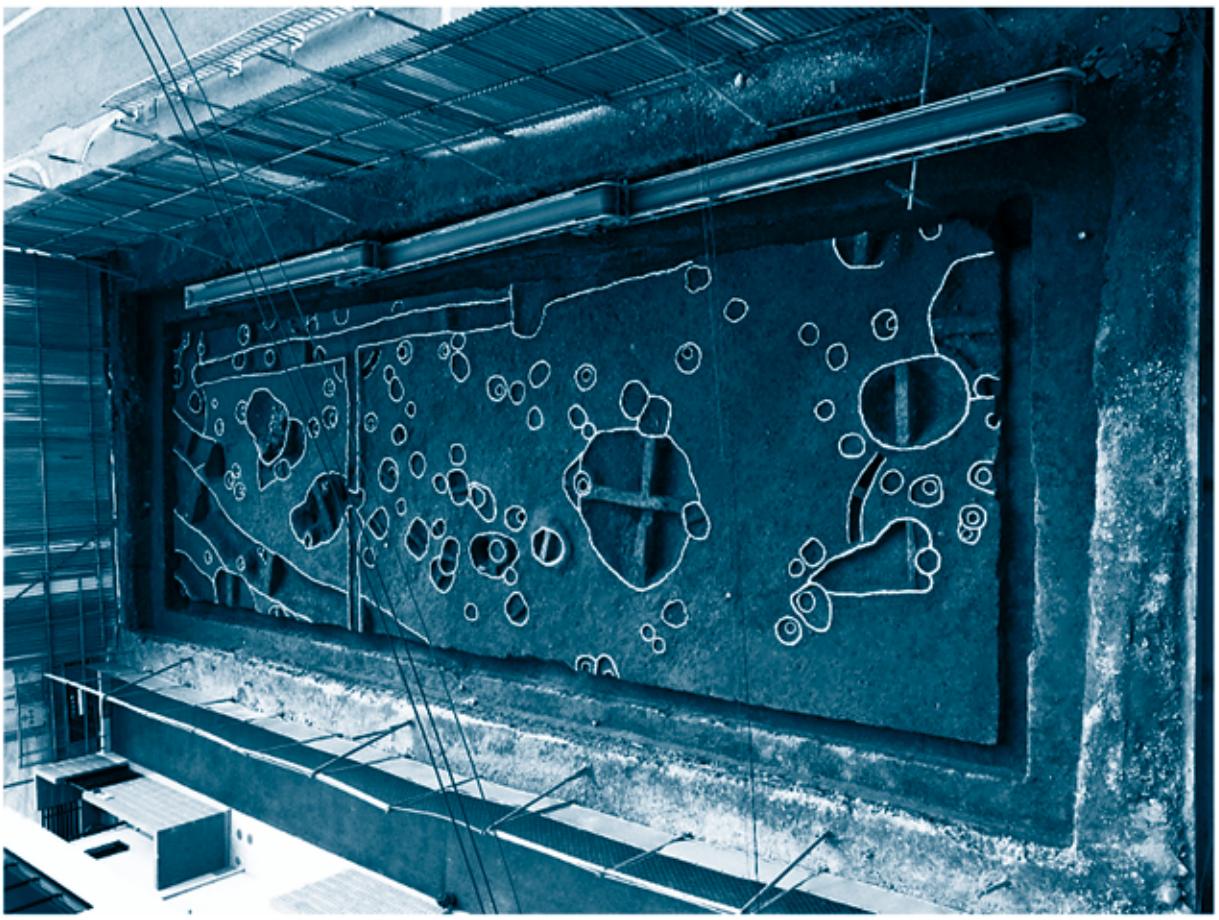


88 ＳＫ（北東から）

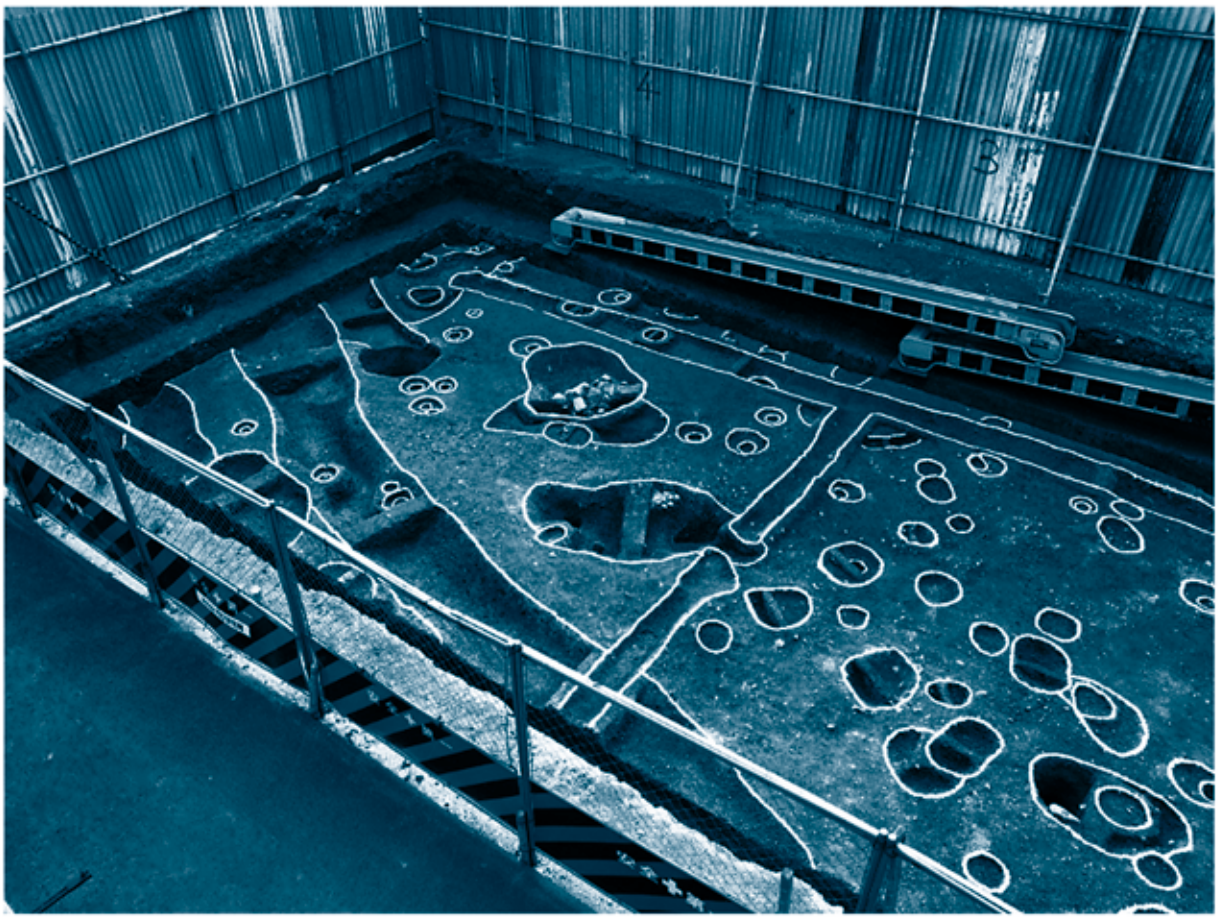
88 ＳＫ遺物出土状況

図版6

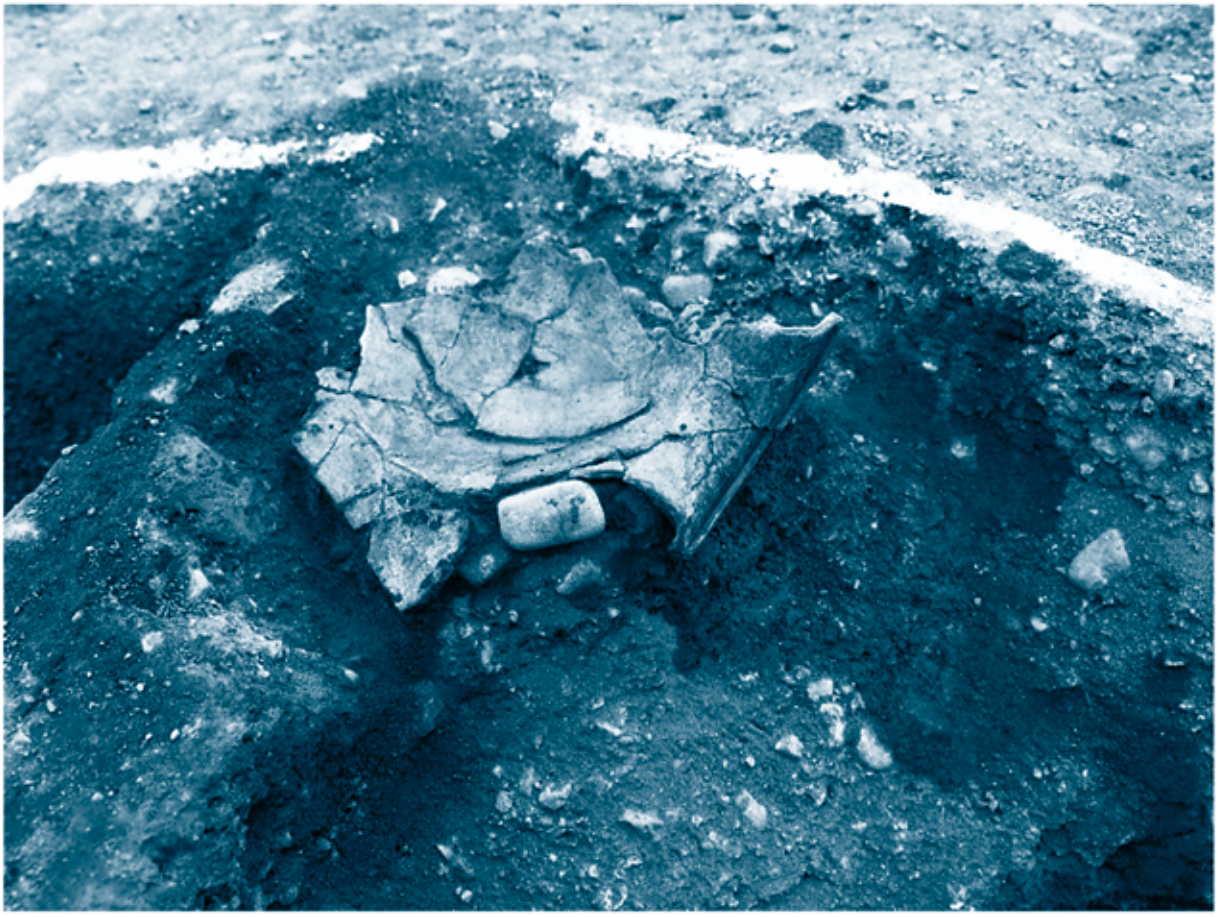
03-2-2区



全景（北西から）



南東部（北から）

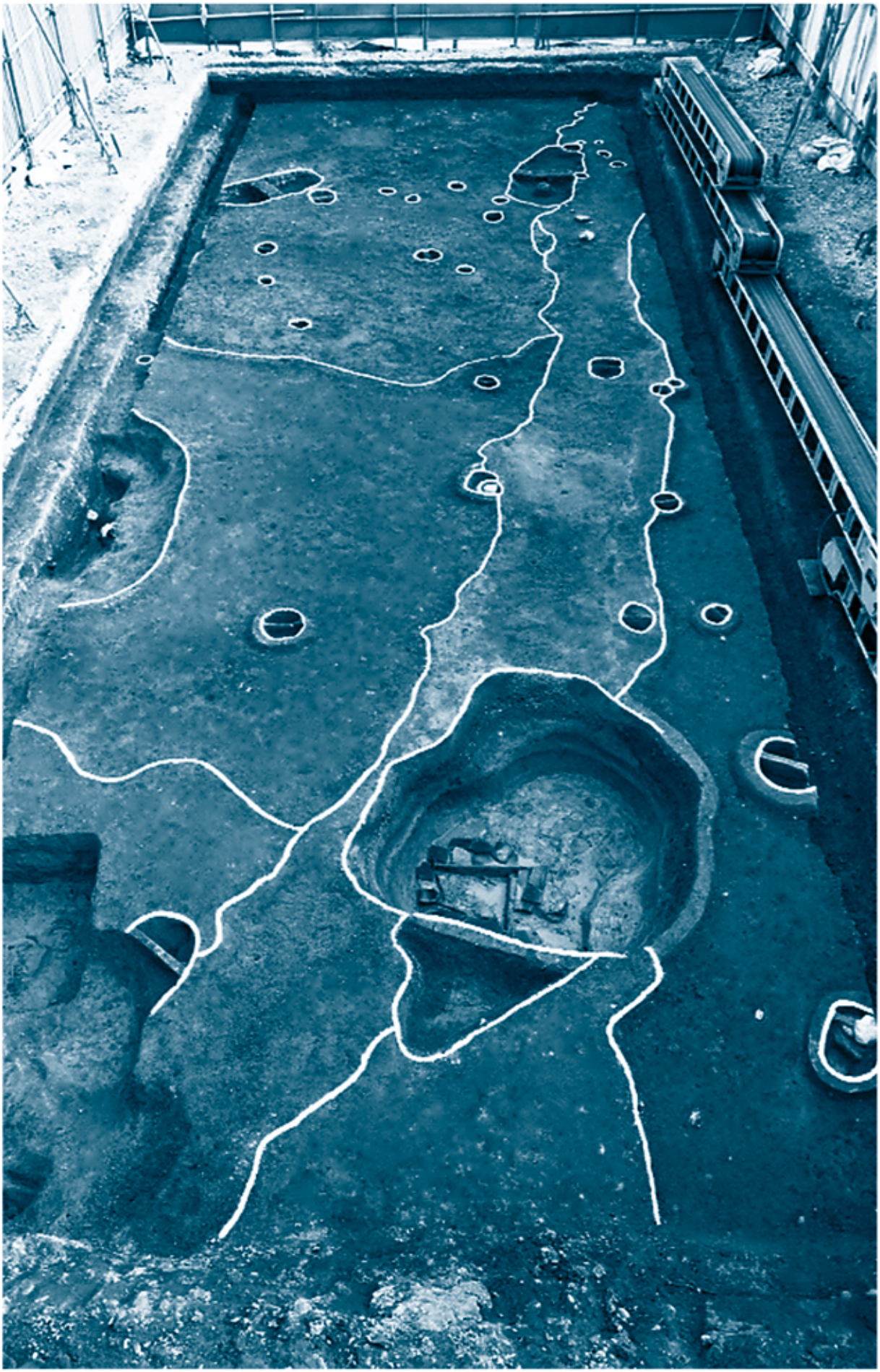


37SK 遺物出土状況

弥生土坑遺物出土状況

図版8

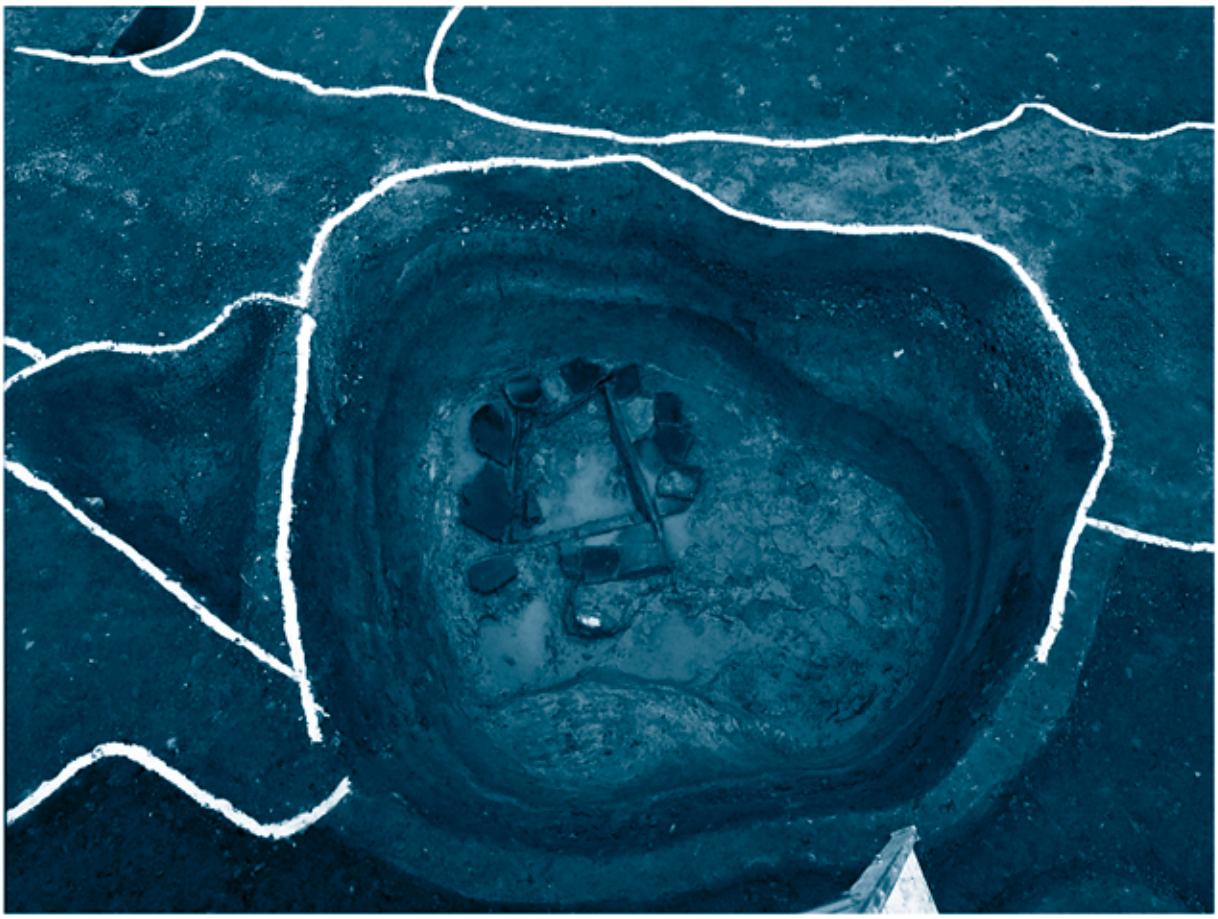
03-3-2区



全景（北西から）

図版9

03-3-2区



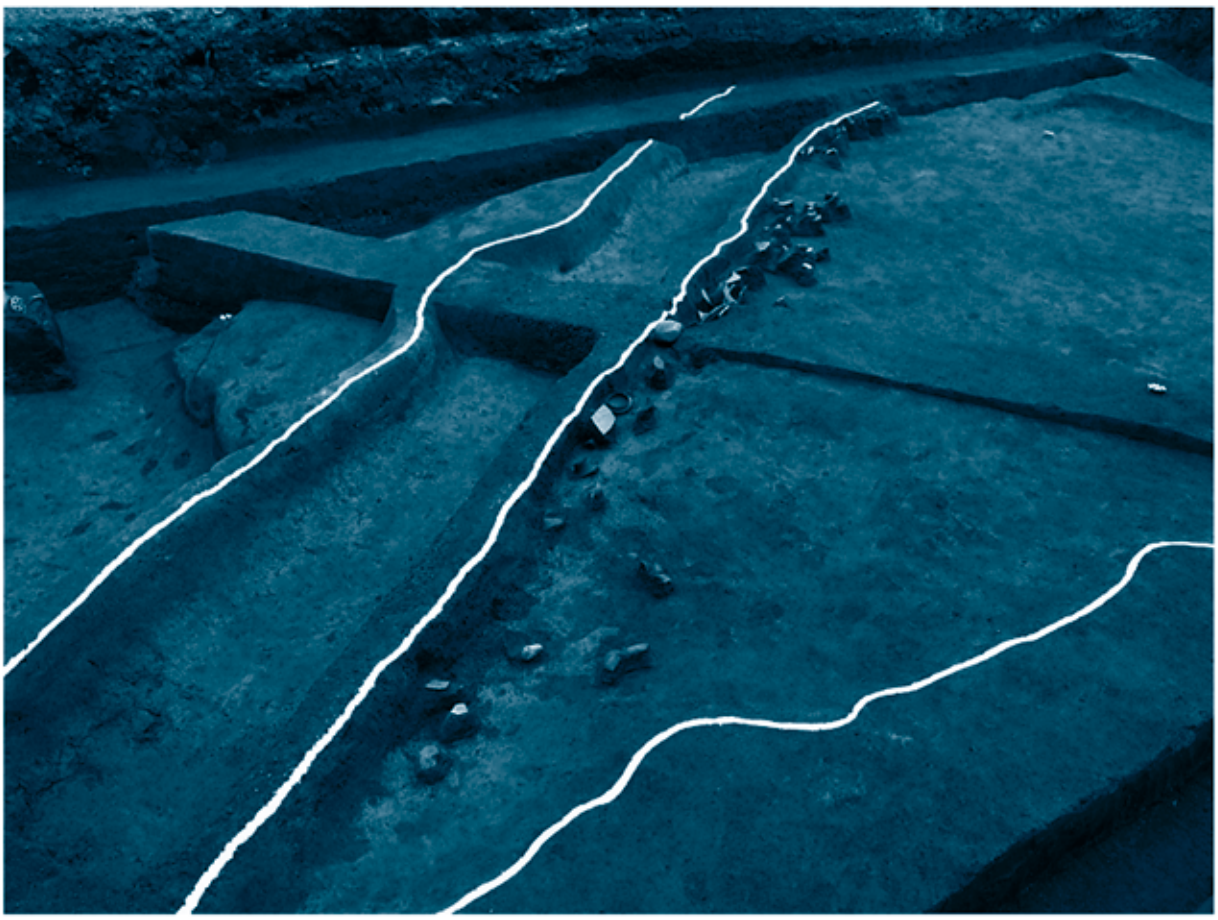
1SE 検出状況

1SE 遺物出土状況

図版10

03-3-3区

全景（北西から）



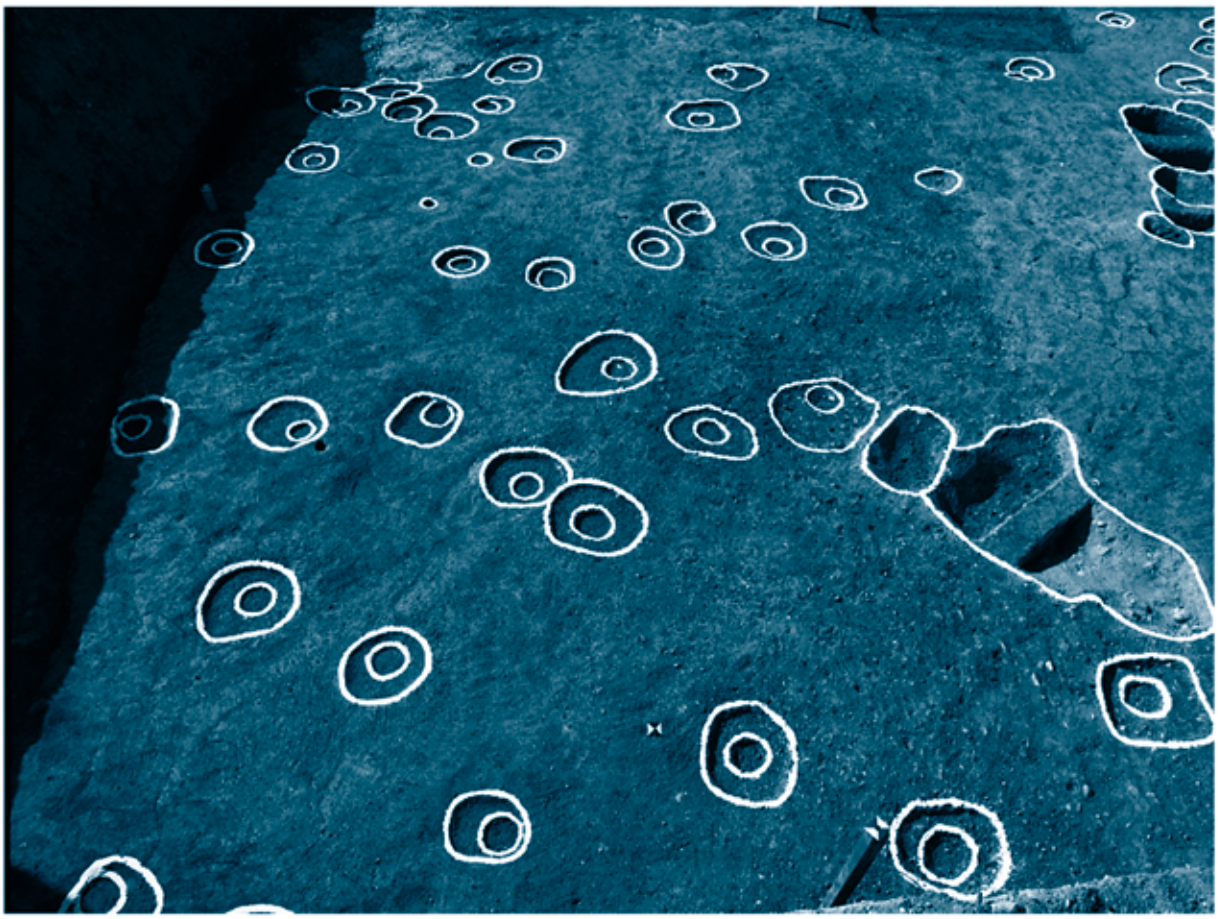
6SR 遺物出土状況

遺物（甑） 出土状況

図版12

04-1区

北半部全景（南から）

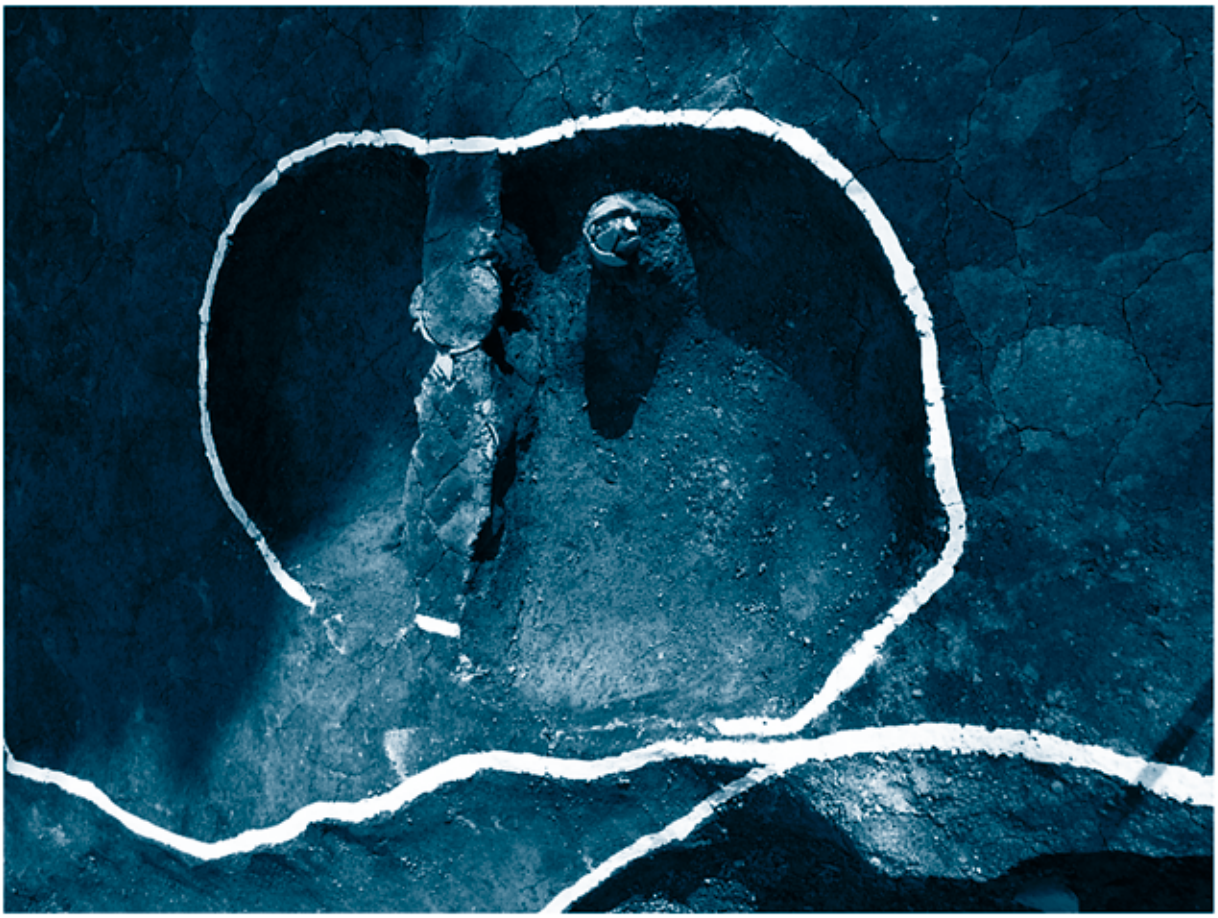


北半部全景（東から）

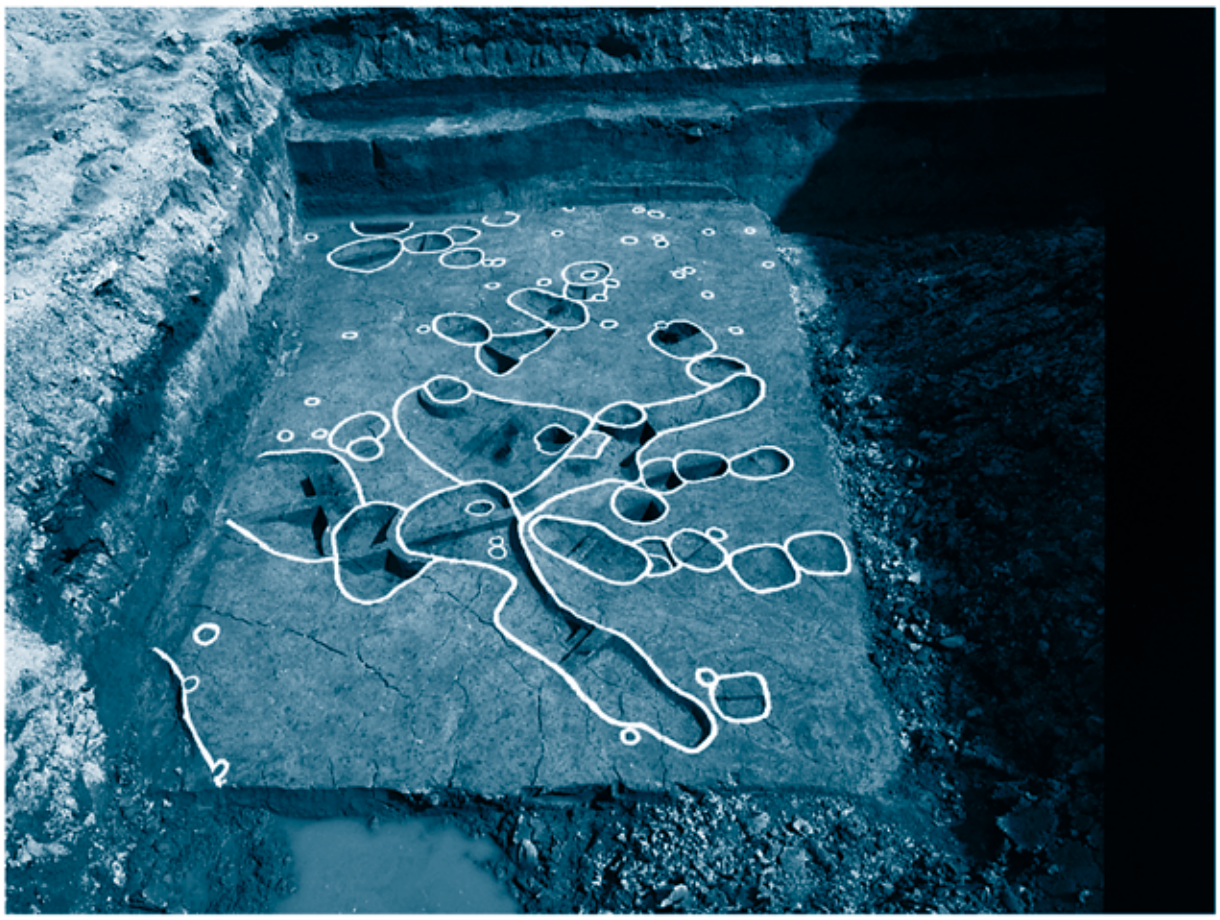
北半部 2 面

下層（縄文期）遺構検出状況

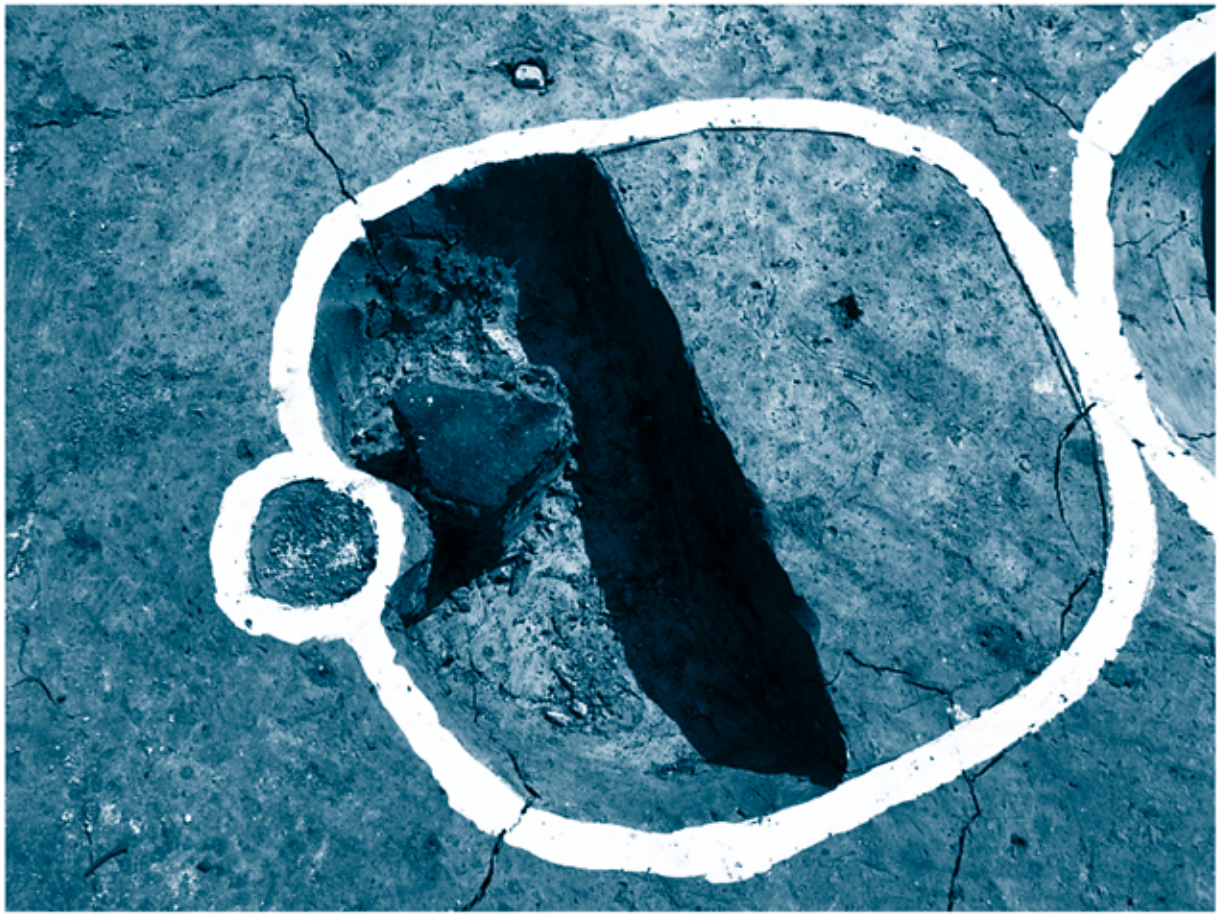
南半部全景（北から）



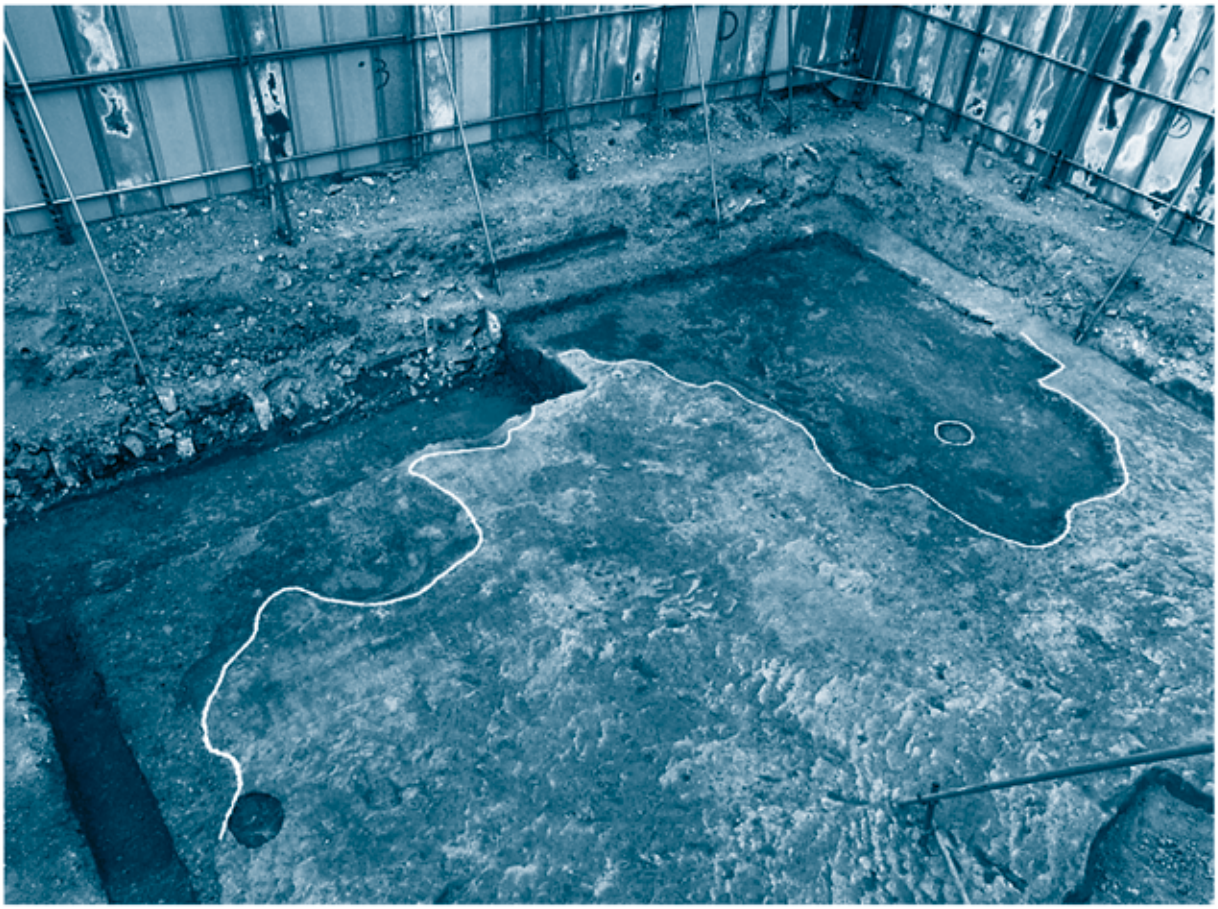
土坑（16SK）検出状況



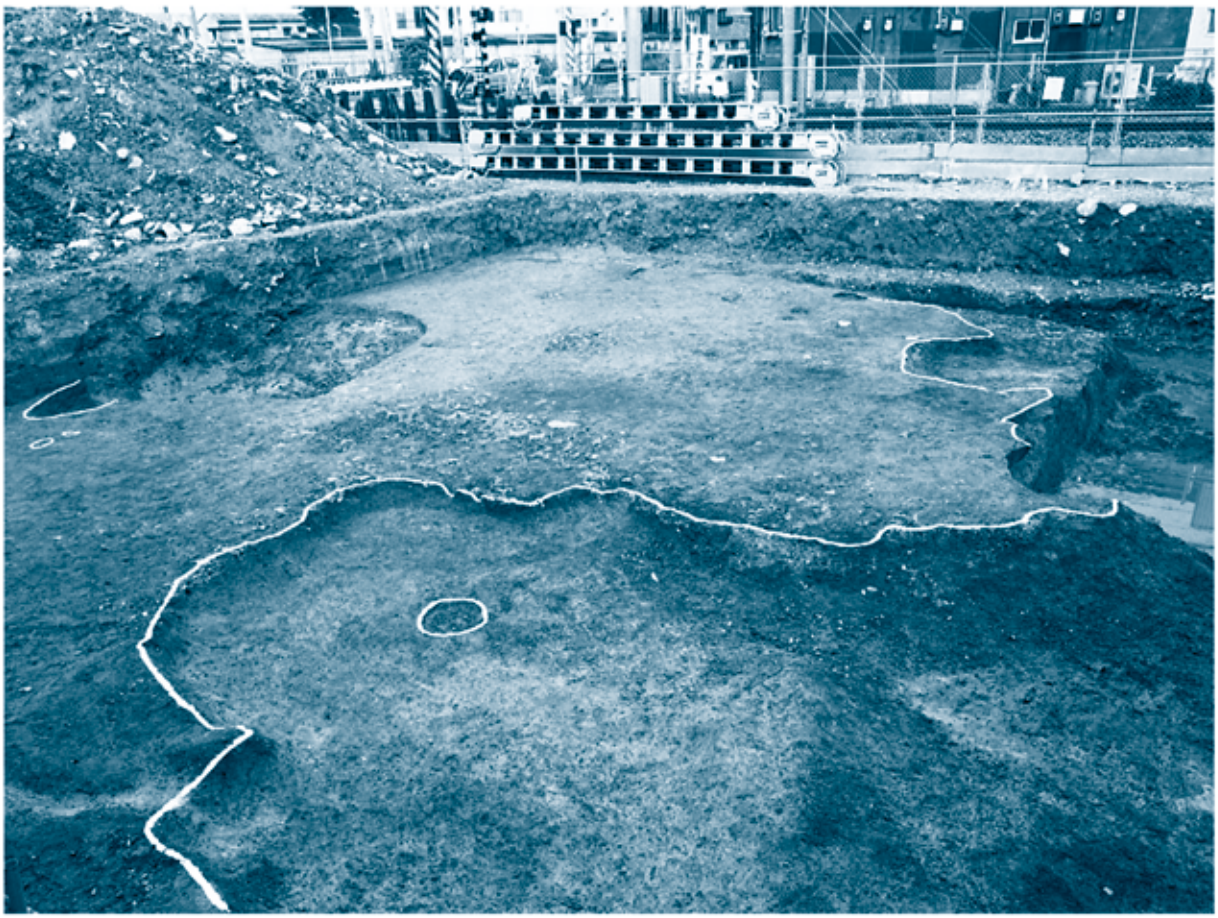
2 面中央部（南半分北部）



2 面土坑検出状況



南部全景（北から）

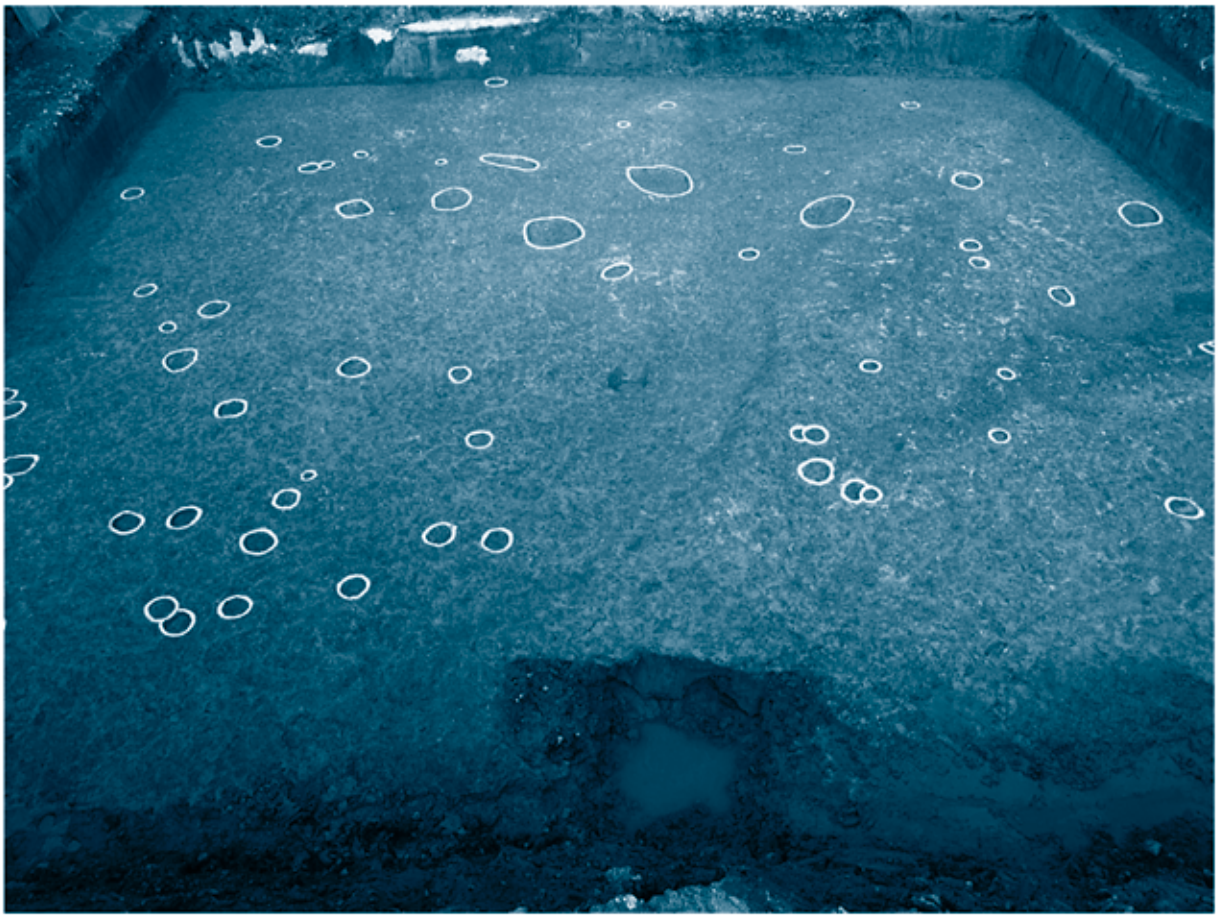


南部全景（南西から）

北半部全景（西から）

北半部全景（南から）

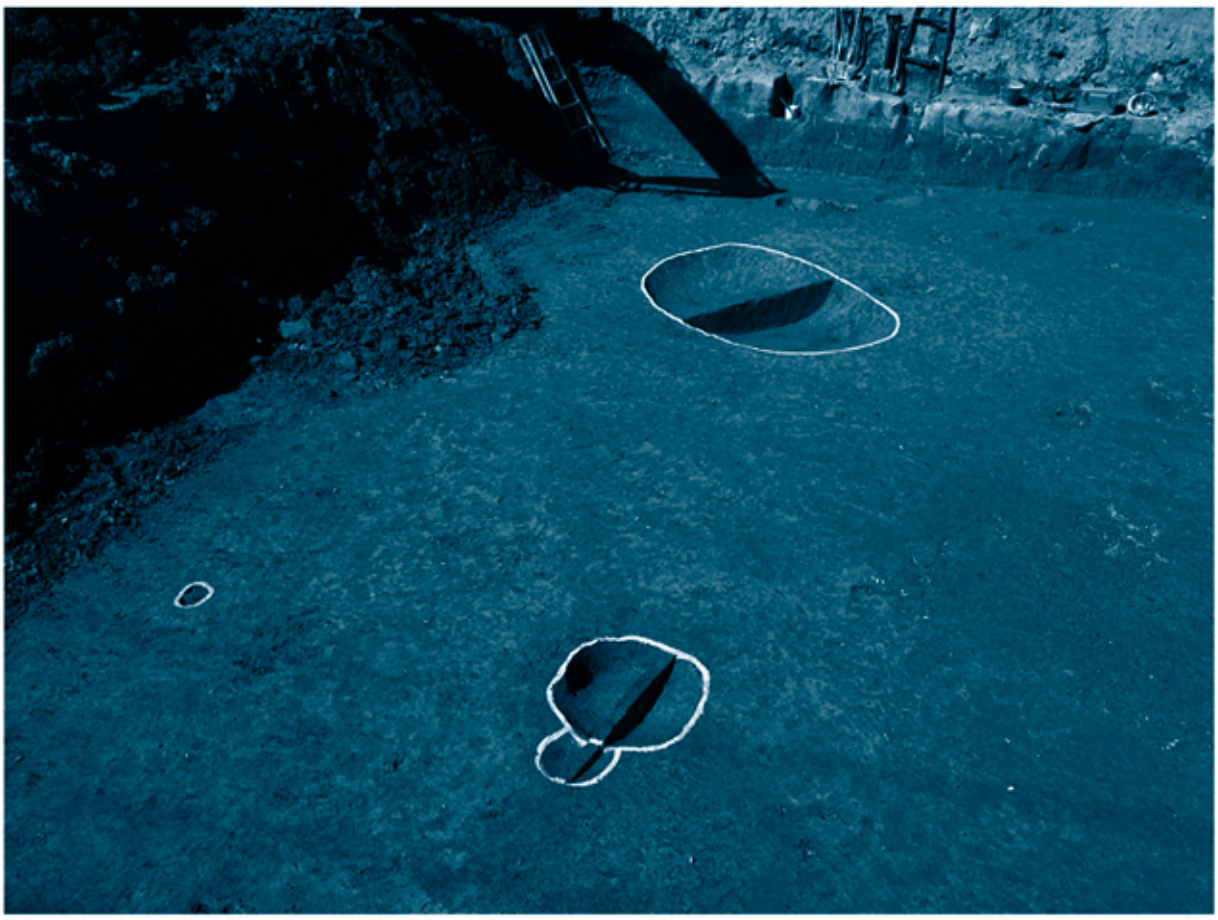
第２面（中央部）遺構検出状況



北半部２面

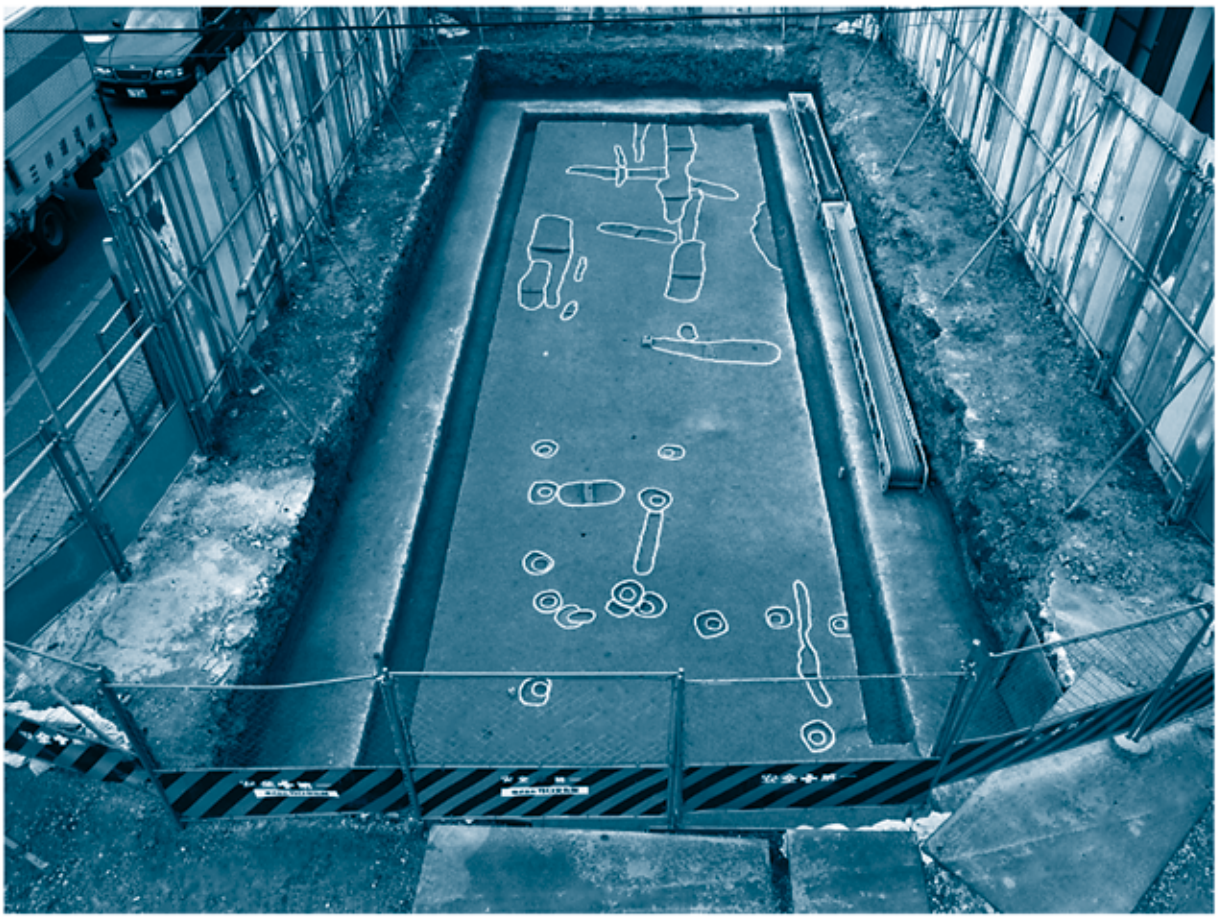
図版19

04-2区



北半部 3 面

04-3-1区



2 面全景（北西から）

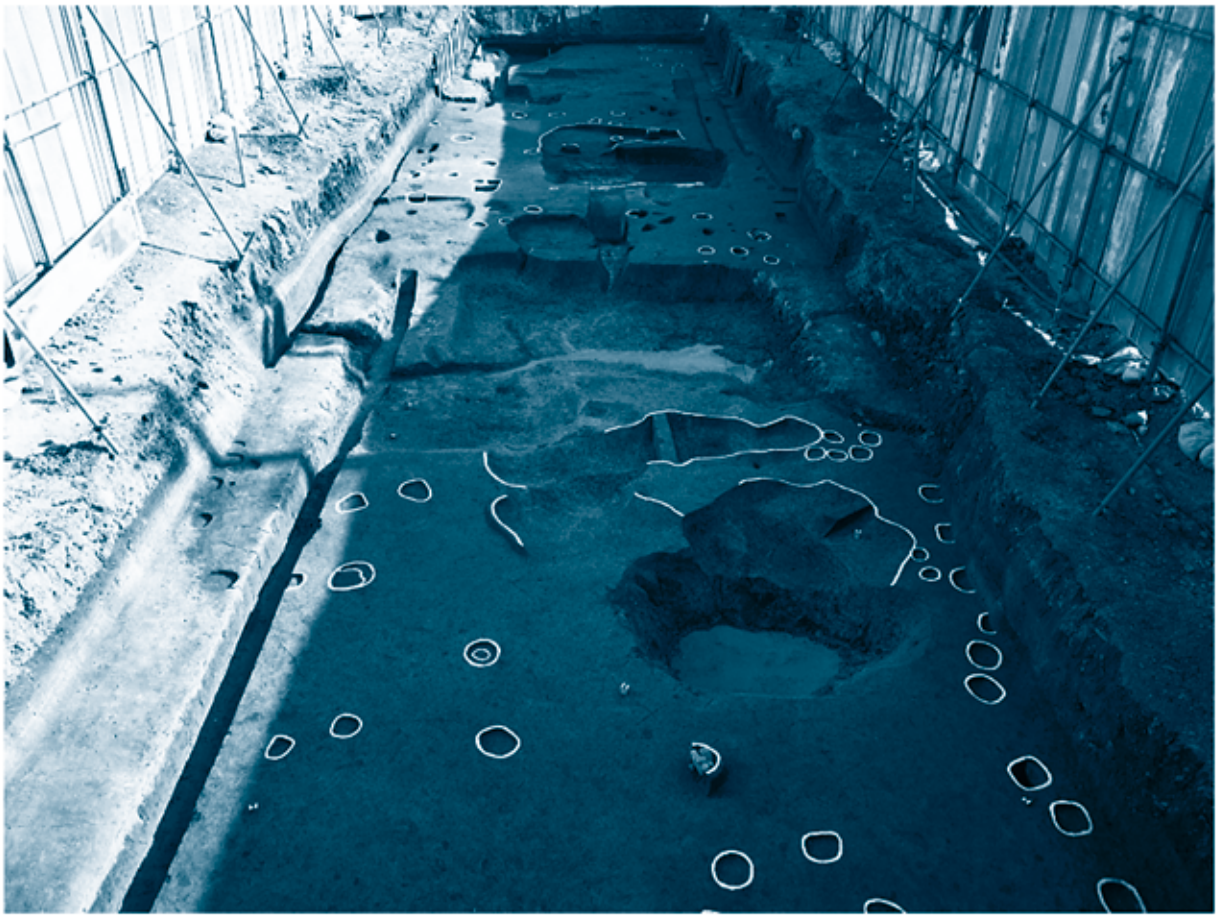
図版20

04-3-1区

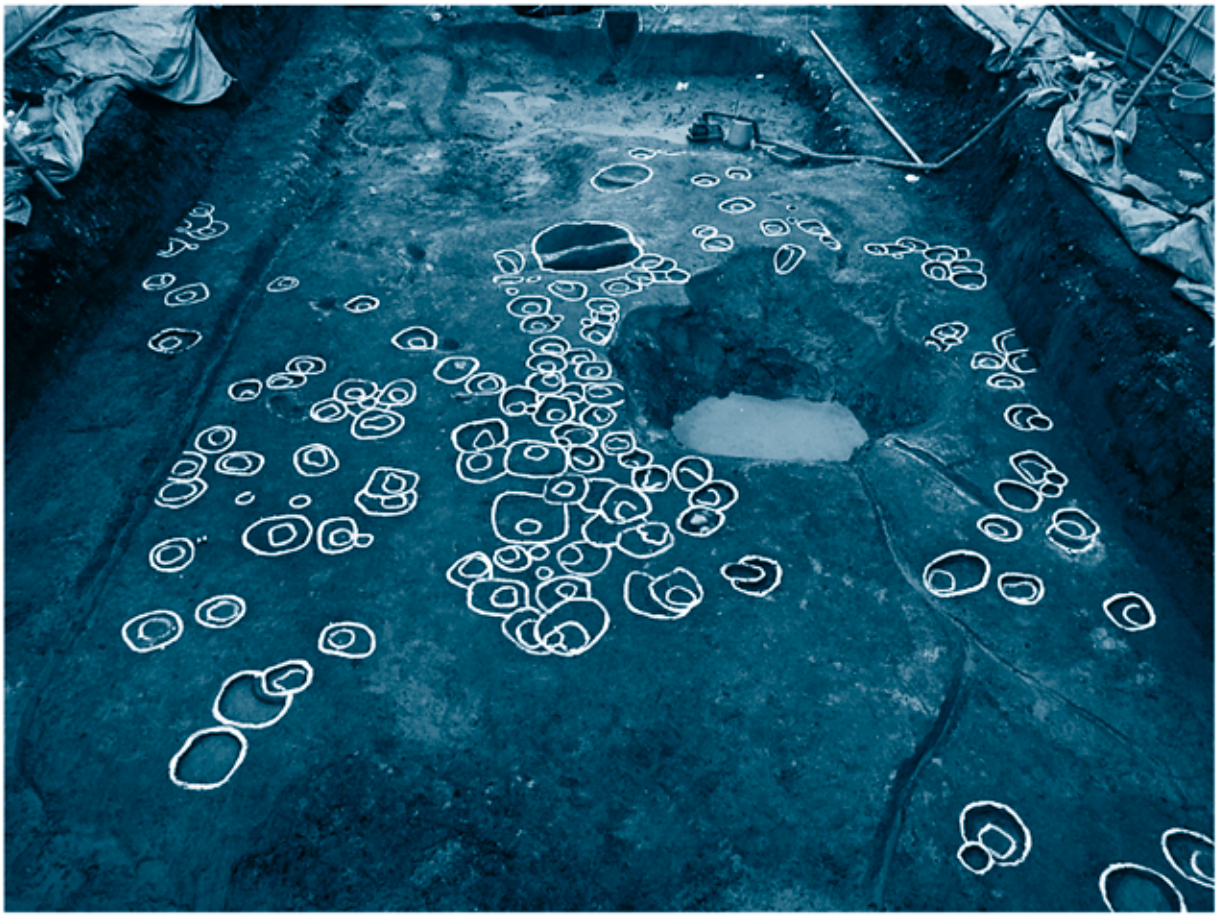
3 面全景

4 面全景

第１面全景（北西から）

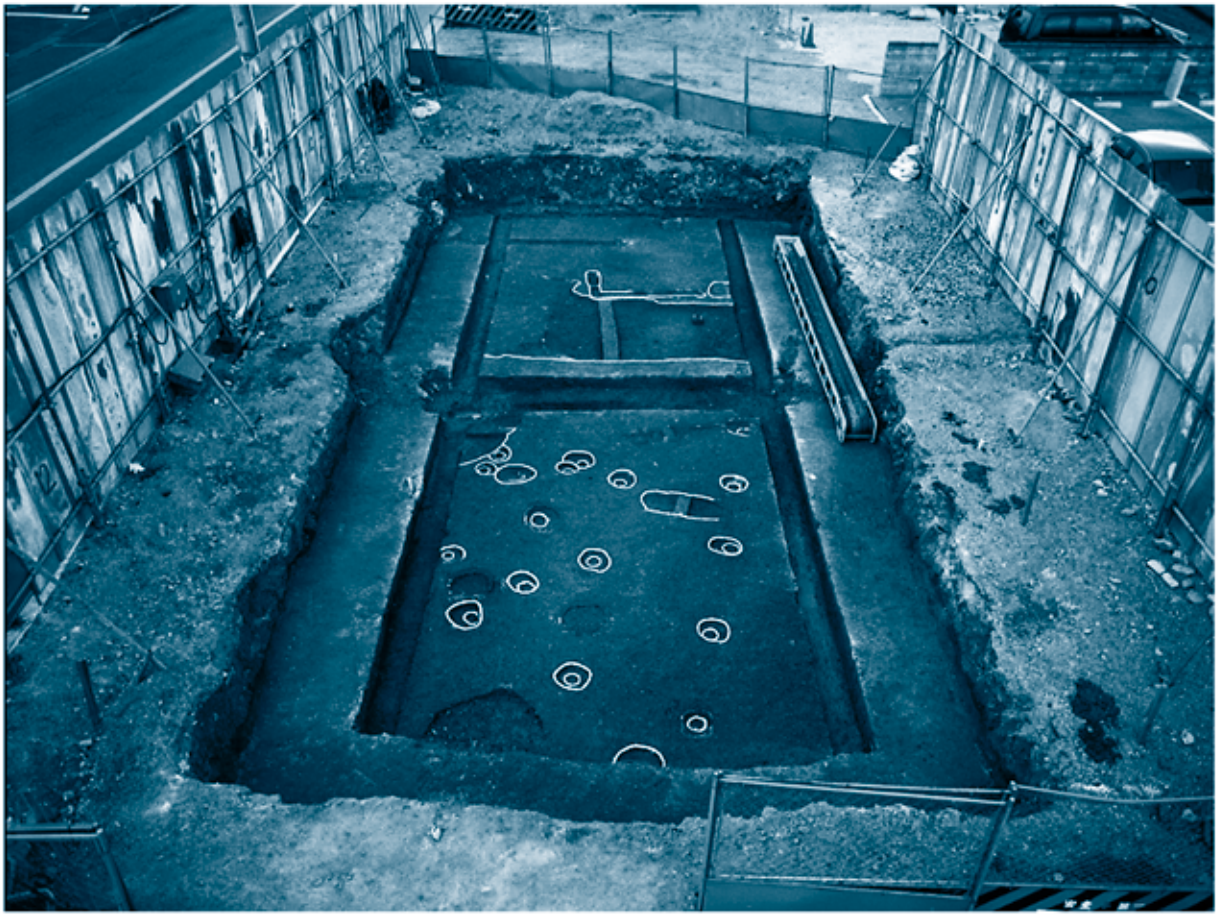


第１面全景（南東から）



第1面

165 SD



2面（南東から）

2面南東部（西から）

図版24

04-3-3区

3面全景

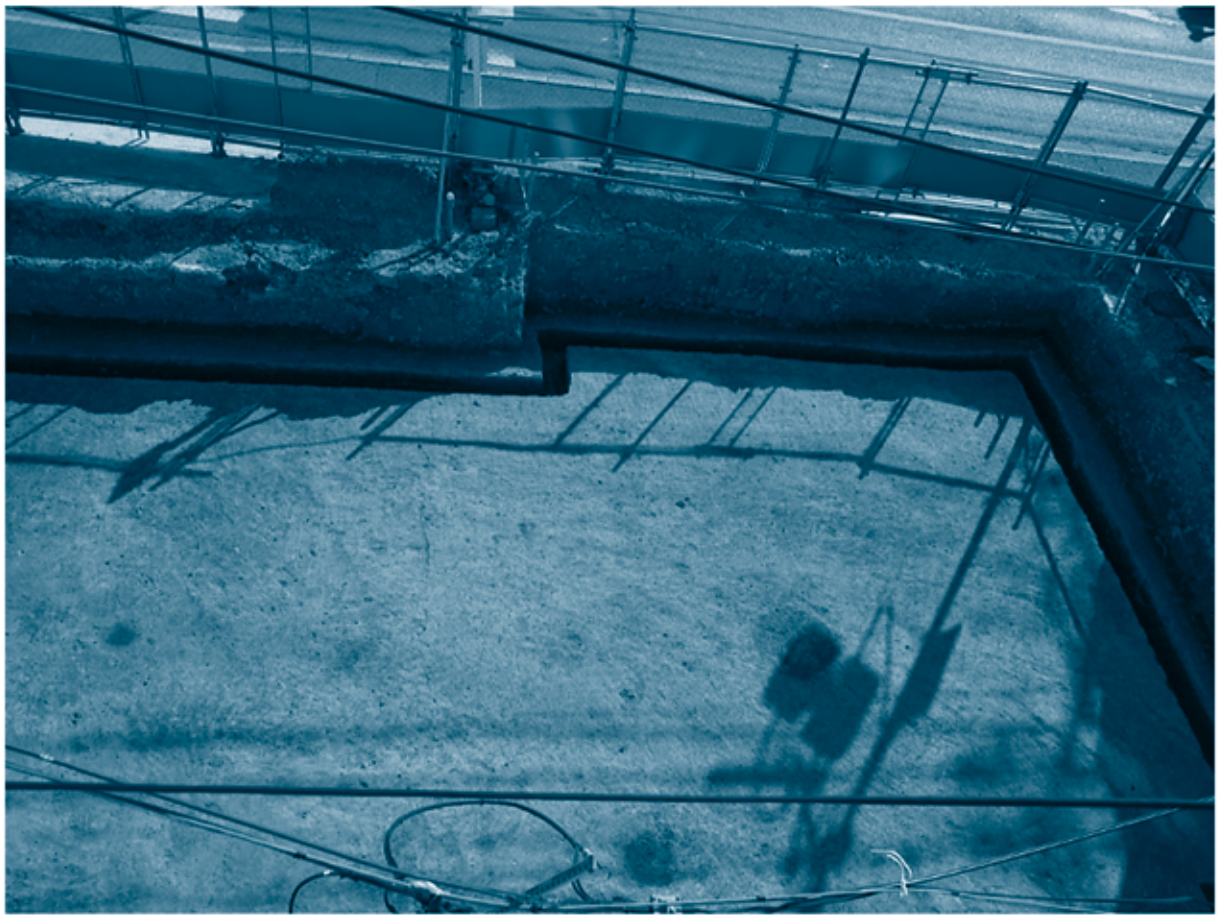
3面下層河川

図版25

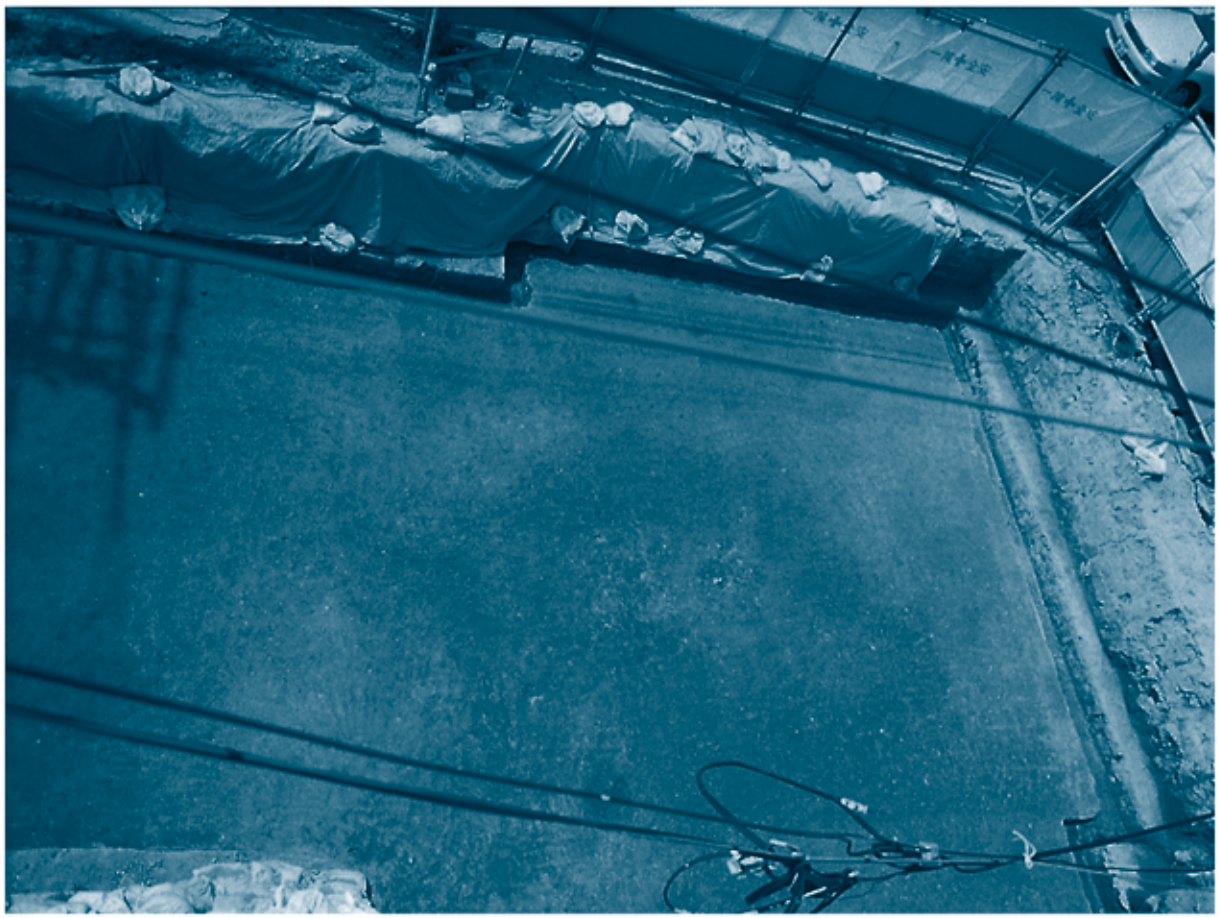
04-3-3区

弥生土器出土状況

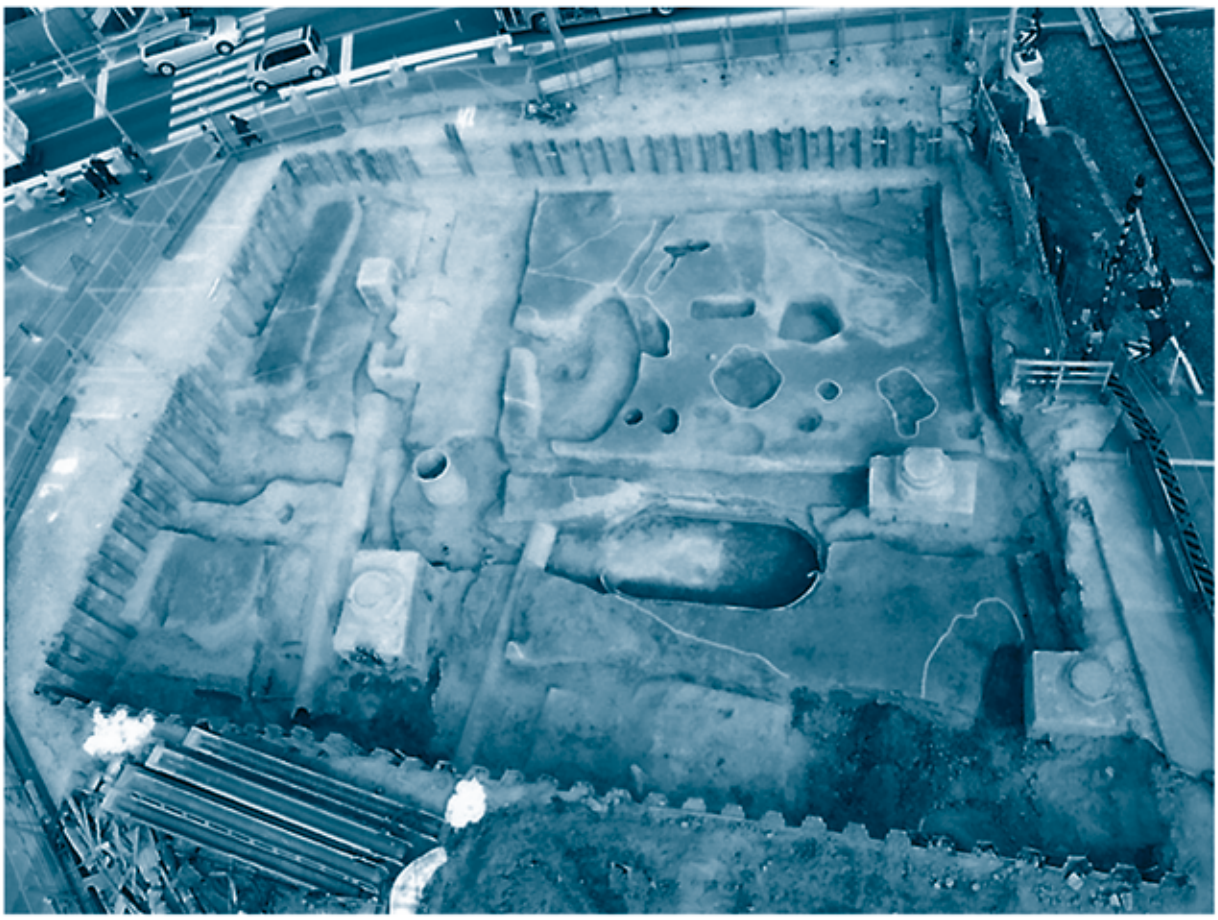
縄文土器出土状況



第1面全景（東北から）



第3面全景（東北から）



1面（南西から）

22・23SD（北東から）

25SK（南から）

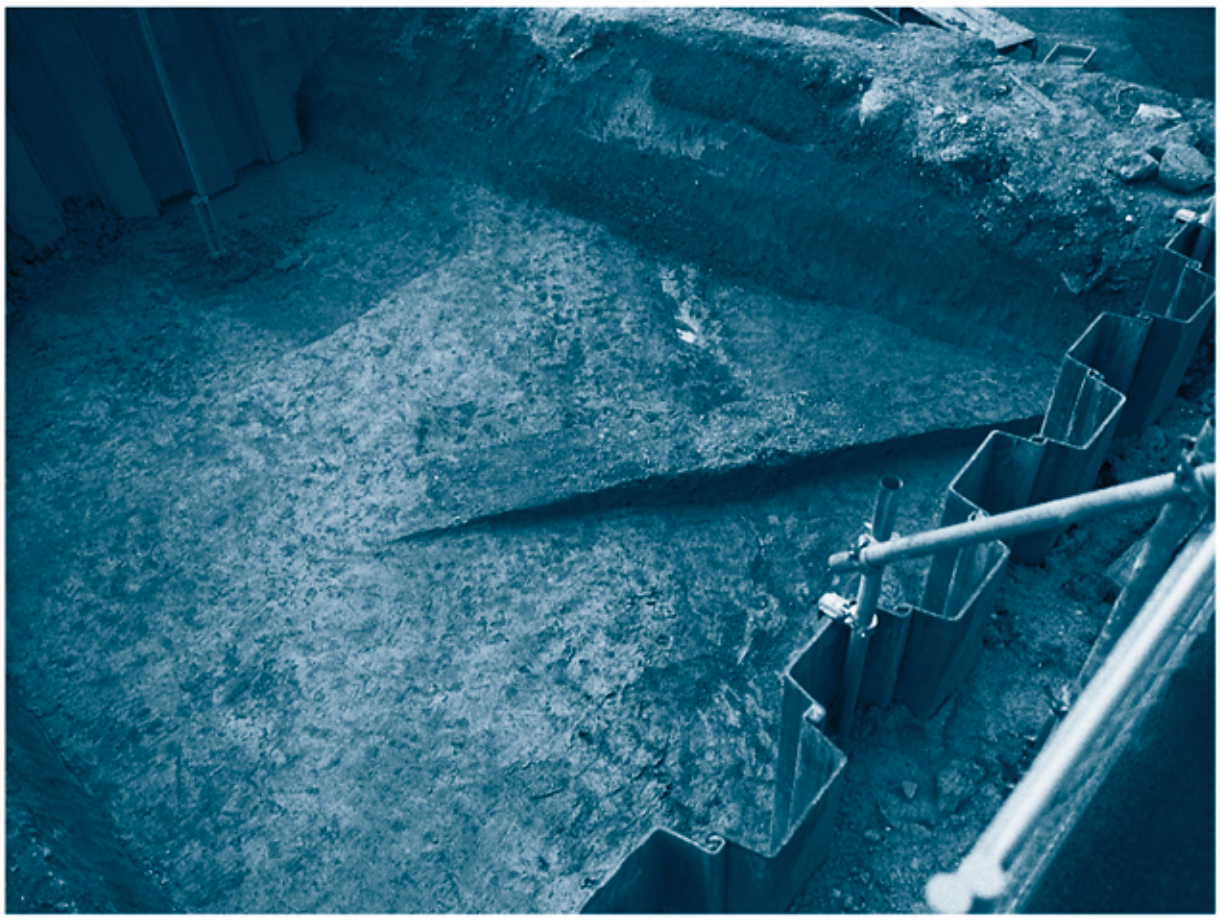
28SK（南から）

34SR 土器出土状況（北から）

34SR 完掘時状況（北から）

北西部１面（南西から）

北西部２面（東から）



北西部３面（東から）

中央部１面（東から）

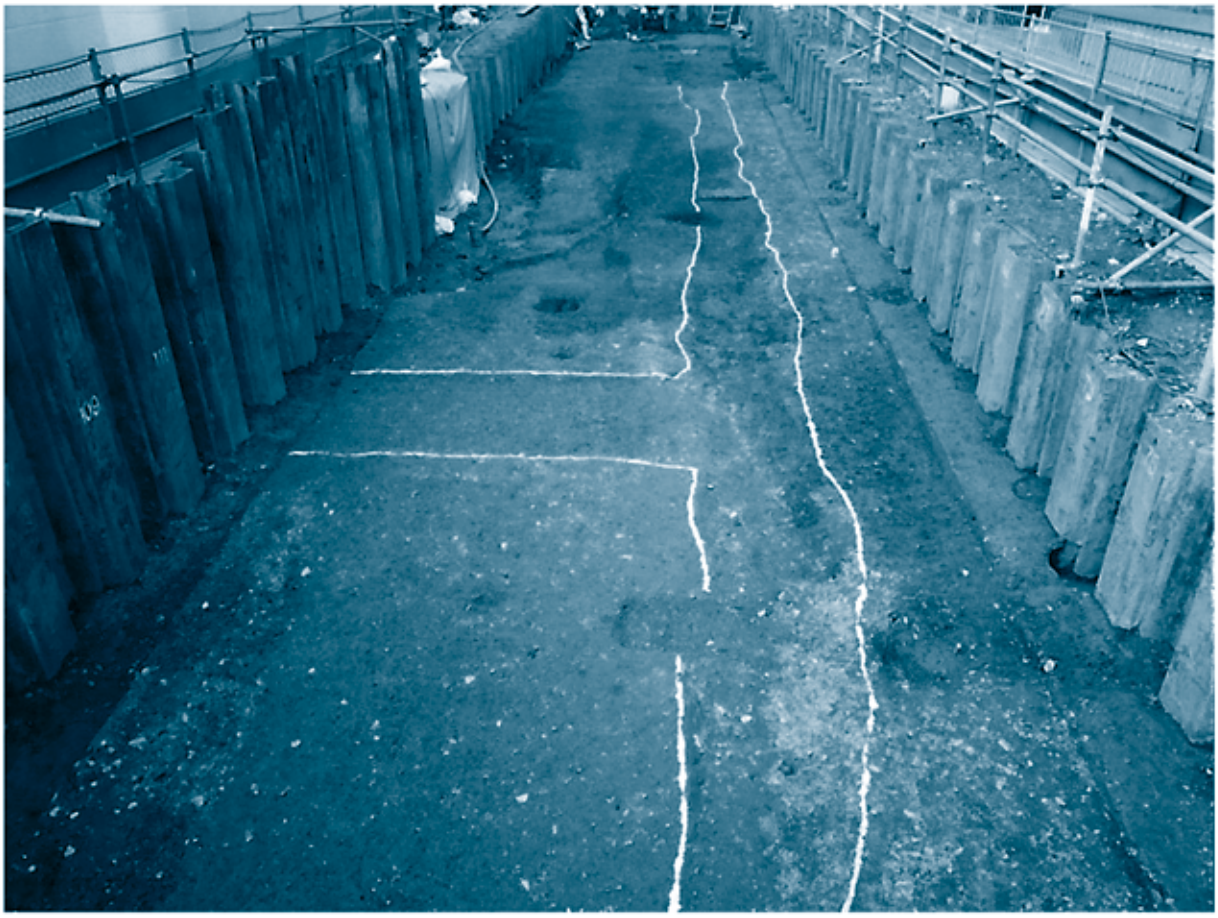
図版32

07－7区

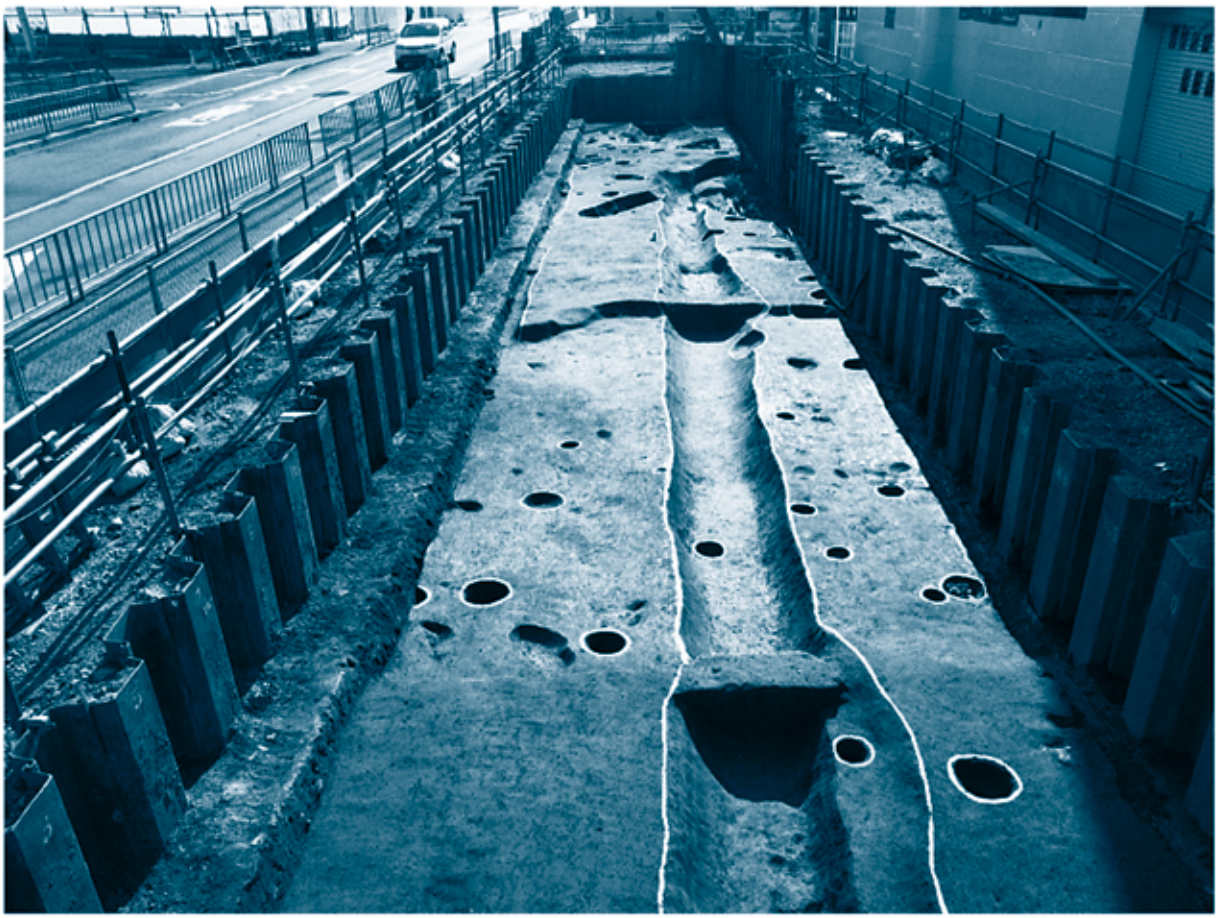
1面（北西から）

07－8区

1面（南東から）



上層遺構 1SD（南東から）

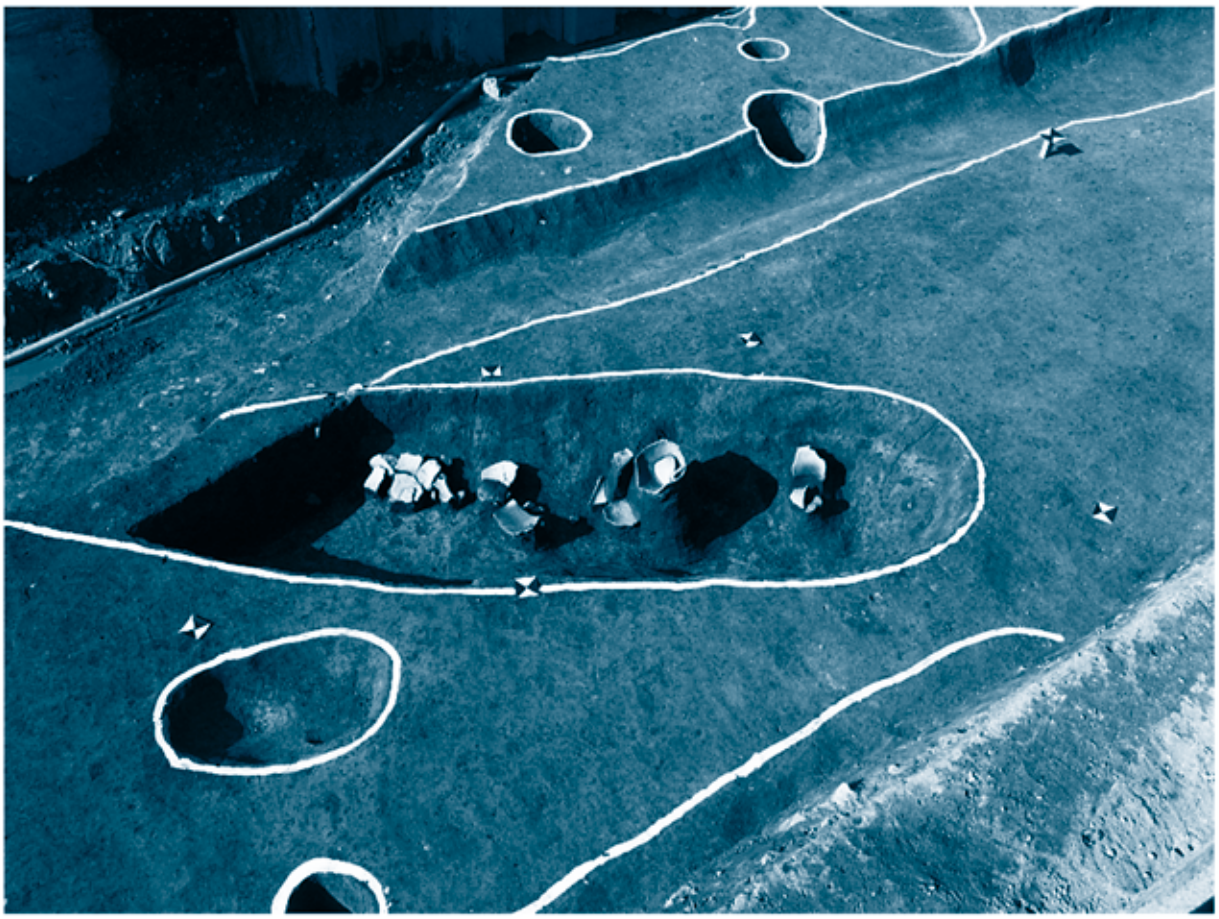


下層全景（北西から）

図版34

07-11a区

下層南東部（南東から）



33SK 東から

図版35

07-11b区

全景（北西から）

全景（南東から）

103SE（西から）

103SE 下段（西から）

図版37

07-11b区

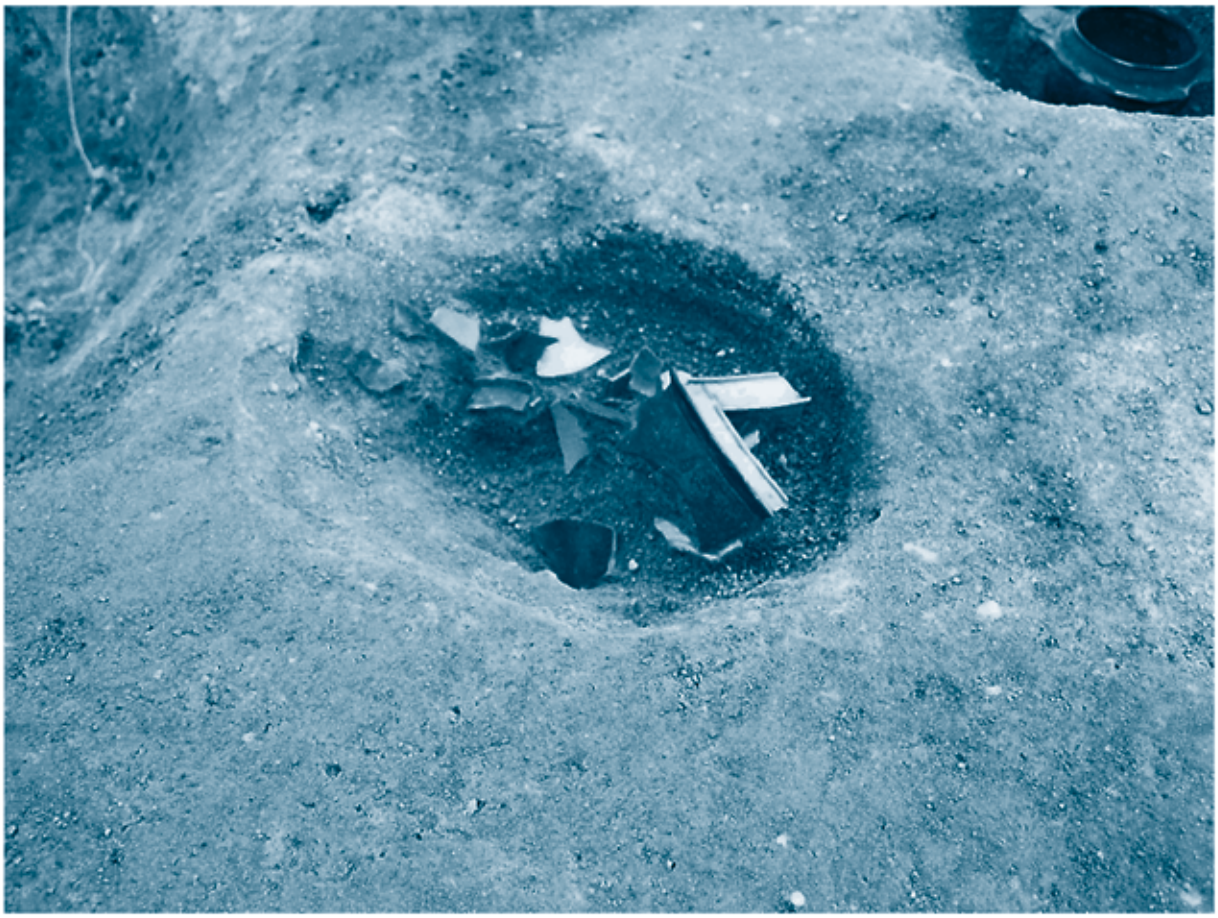
北西ピット群

136SE、137SE、138SE

図版38

07-11b区

137SE



138SE

図版39

07
-
11b
区

136SE

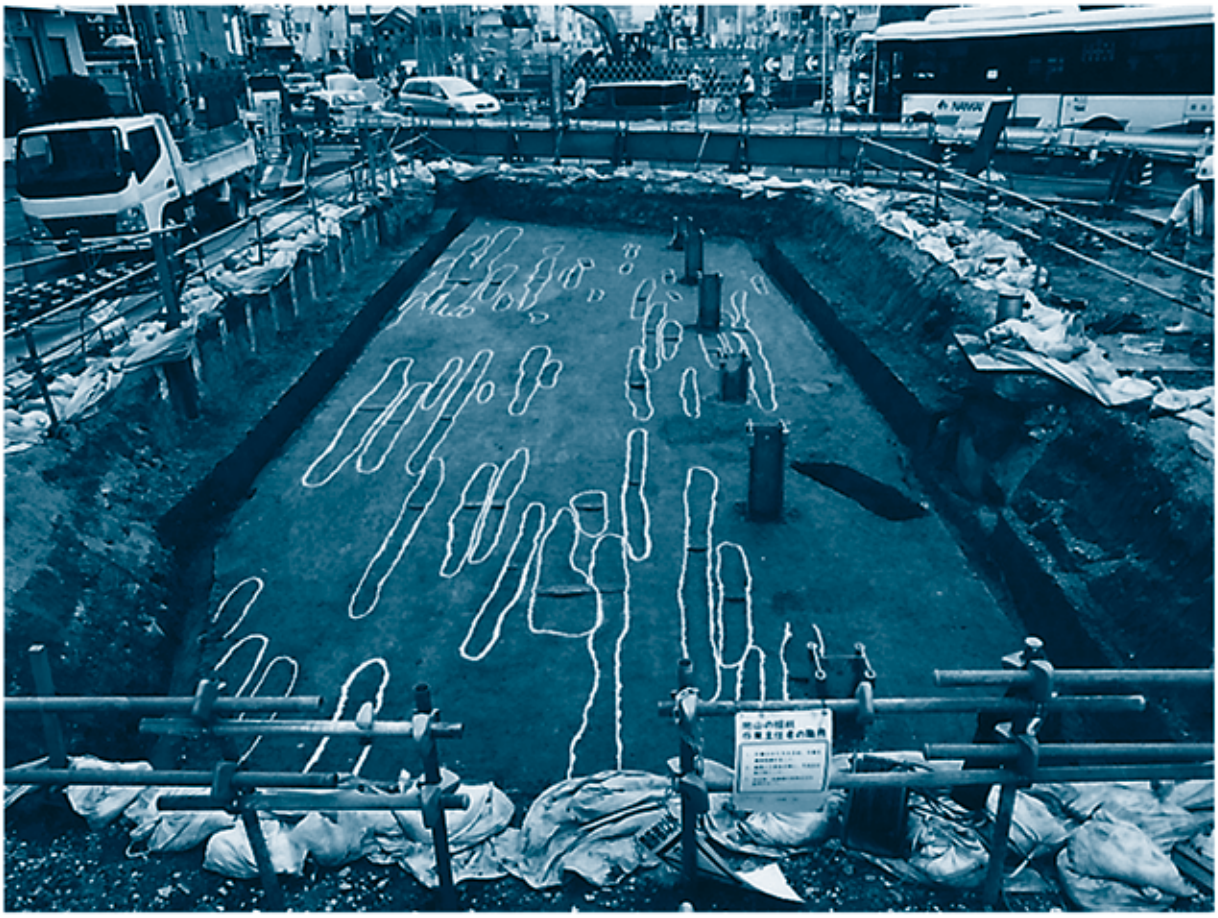
104SE（南東から）

135SR（南東から）

135SR（東から）

図版41

08-9区



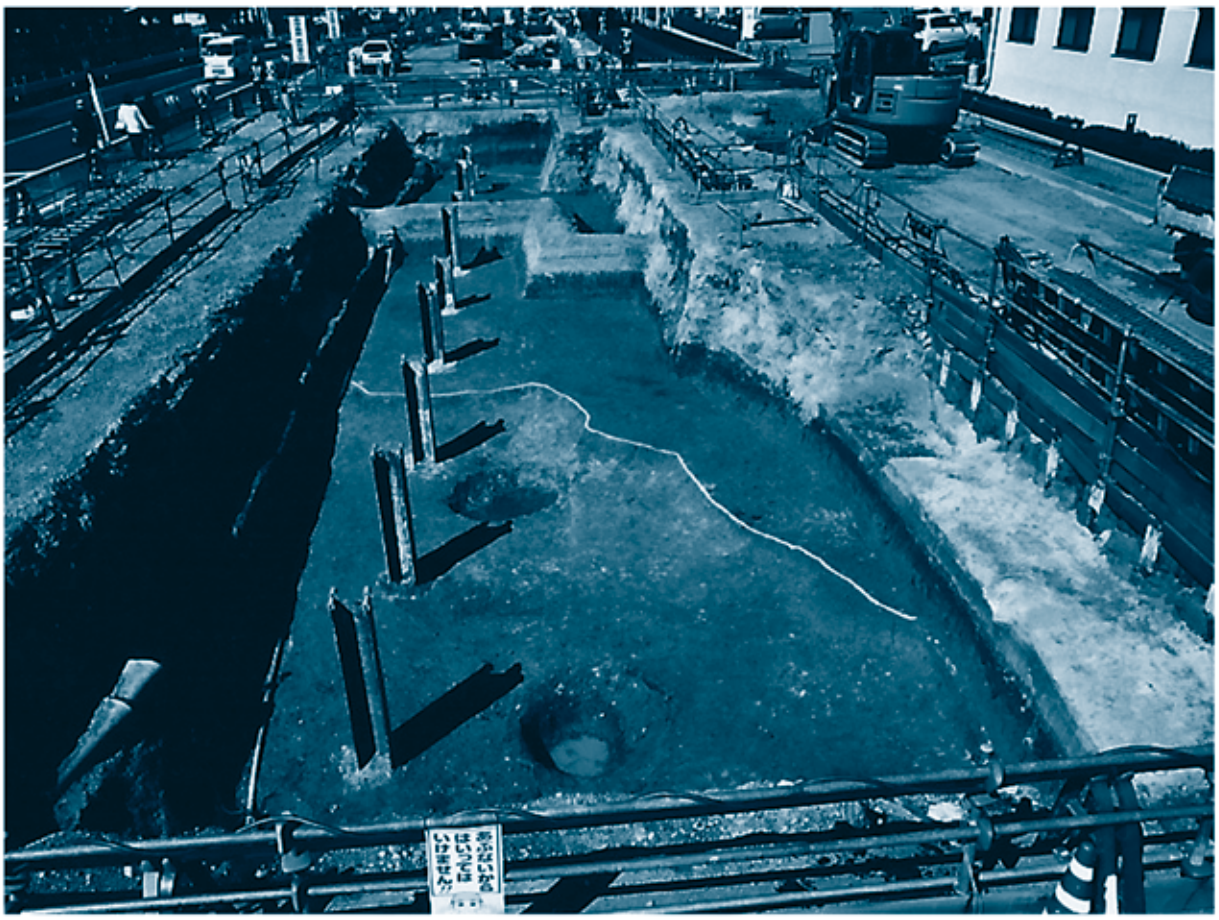
第1面（北西から）

08-9b区

第1面（北東から）

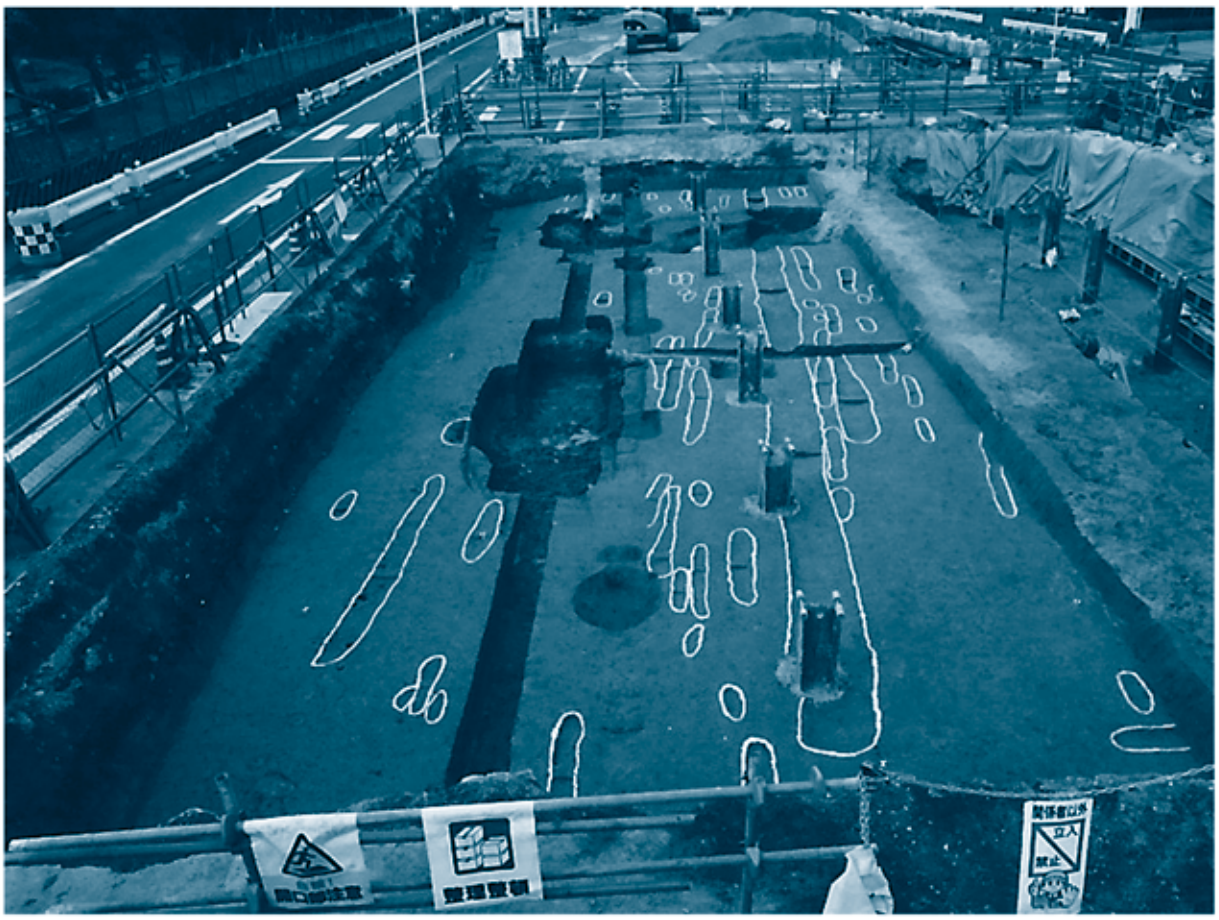
第１面（北西から）

勾玉出土状況

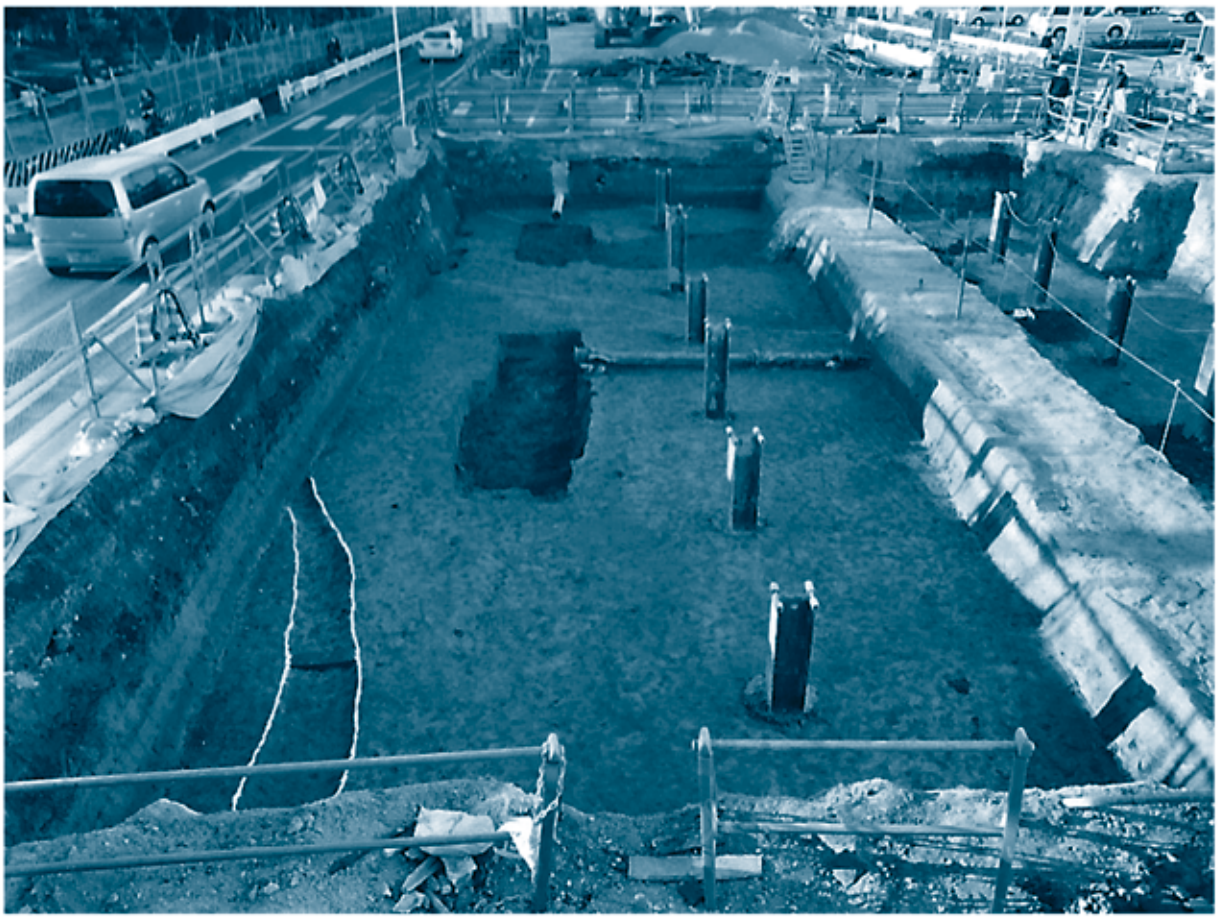


第3面（南東から）

第3面（西から）



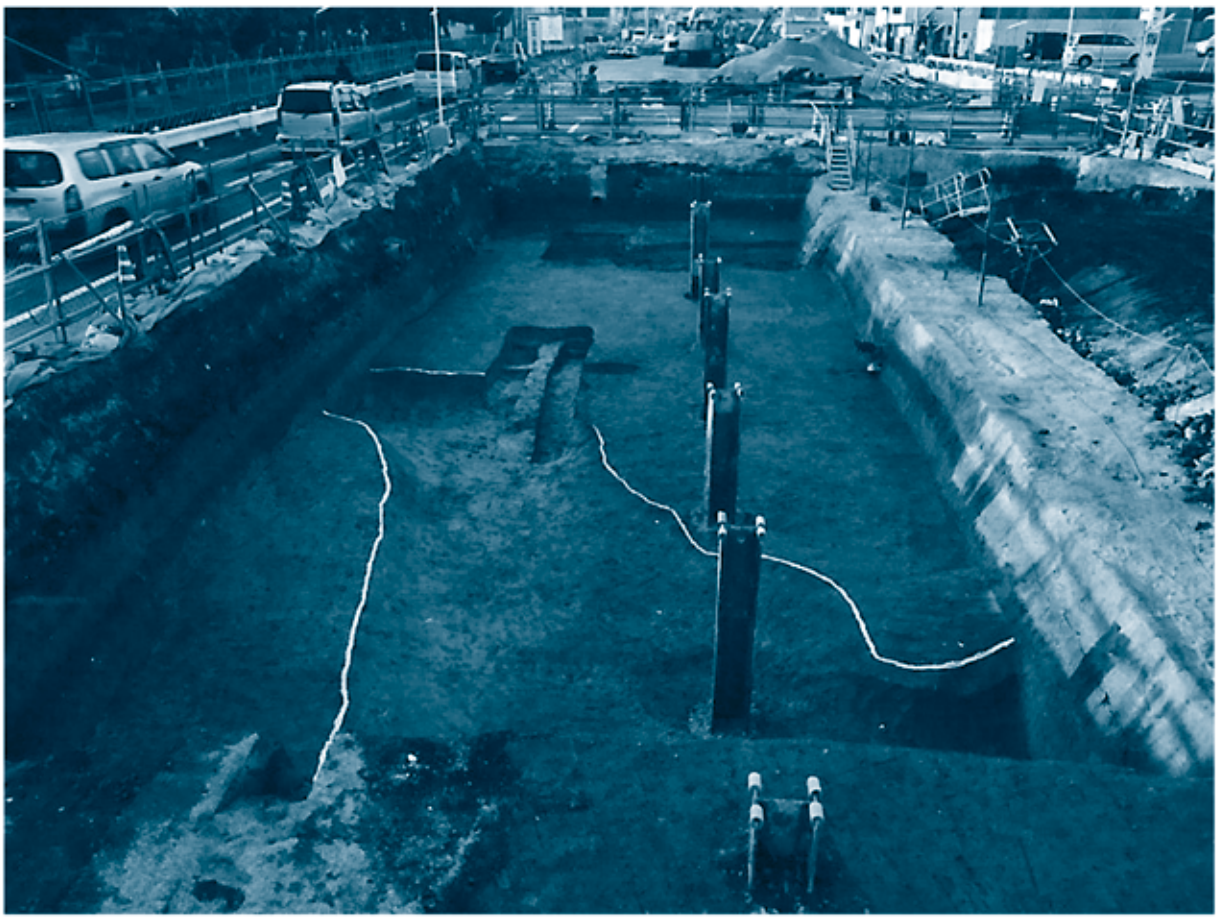
第１面（南東から）



第３面（南東から）

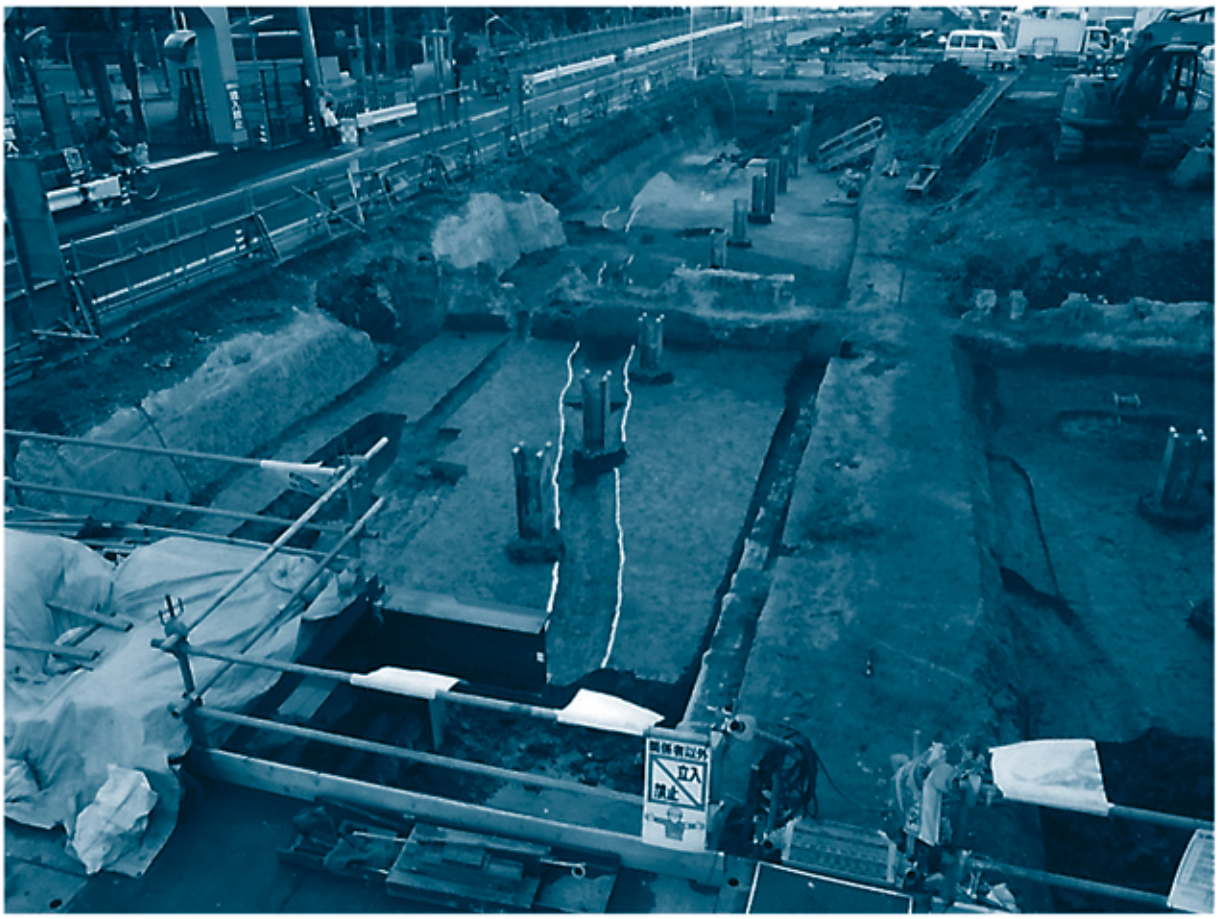
図版45

08-13区



第4面（南東から）

08-15区



第3面（南東から）

図版46

08-15区

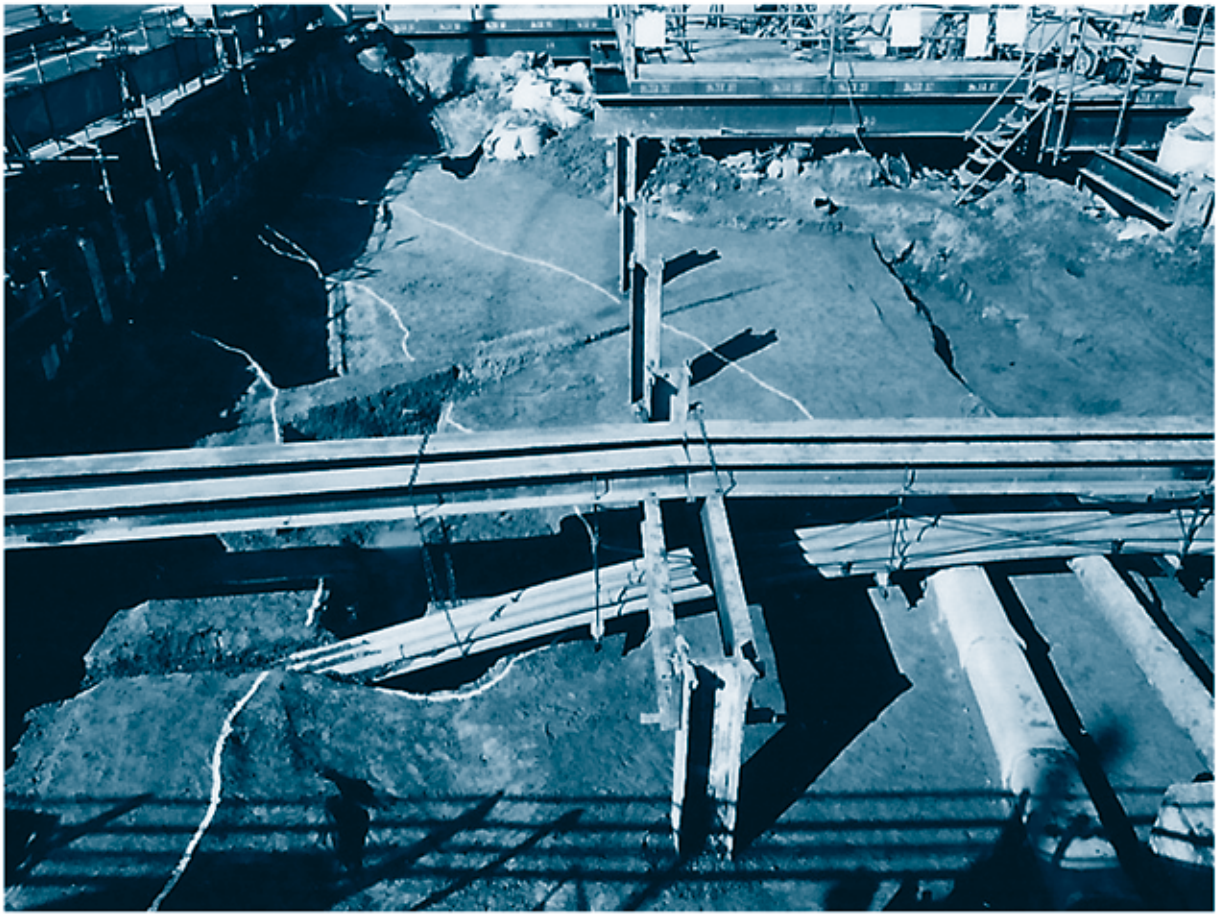
第4面（北西から）

08-16区

第3面（北西から）

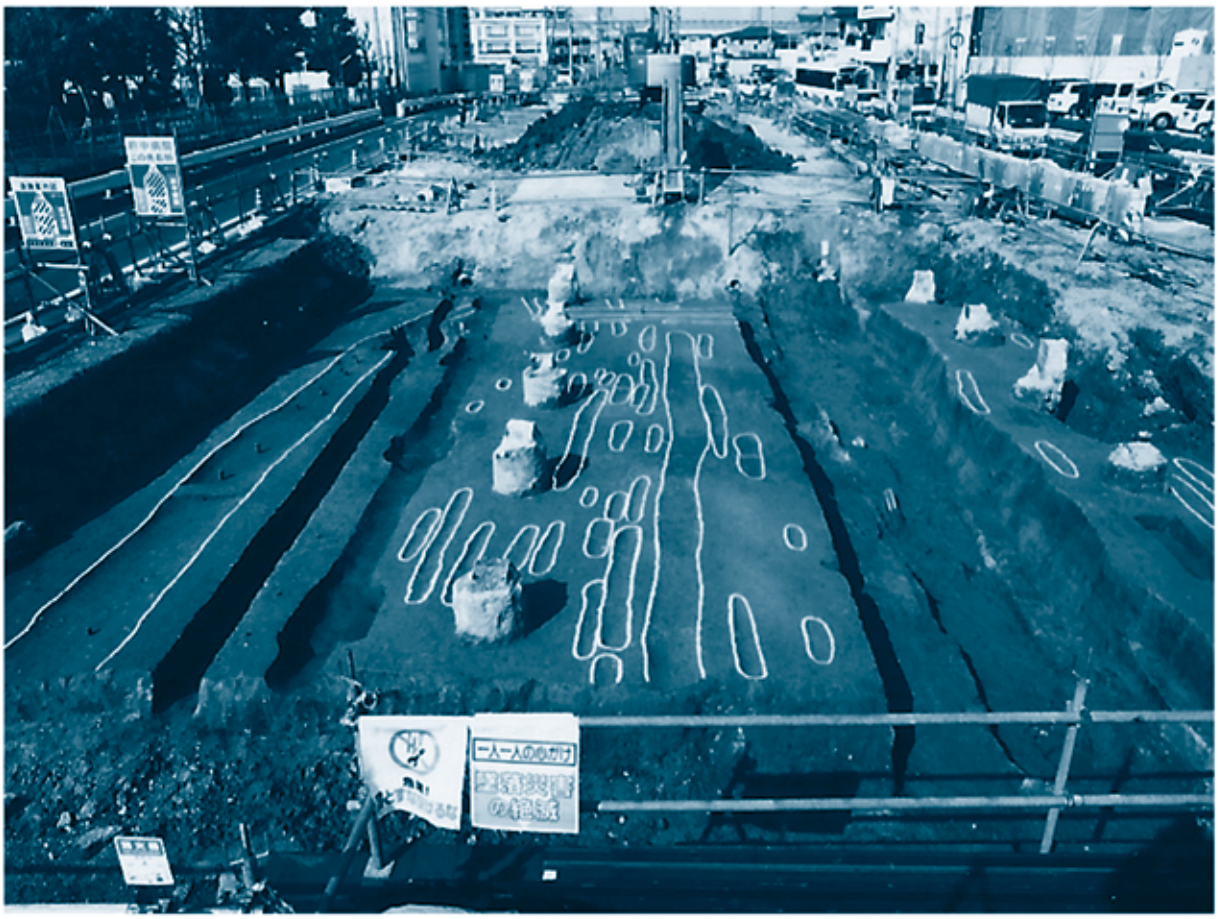
図版47

08-16区

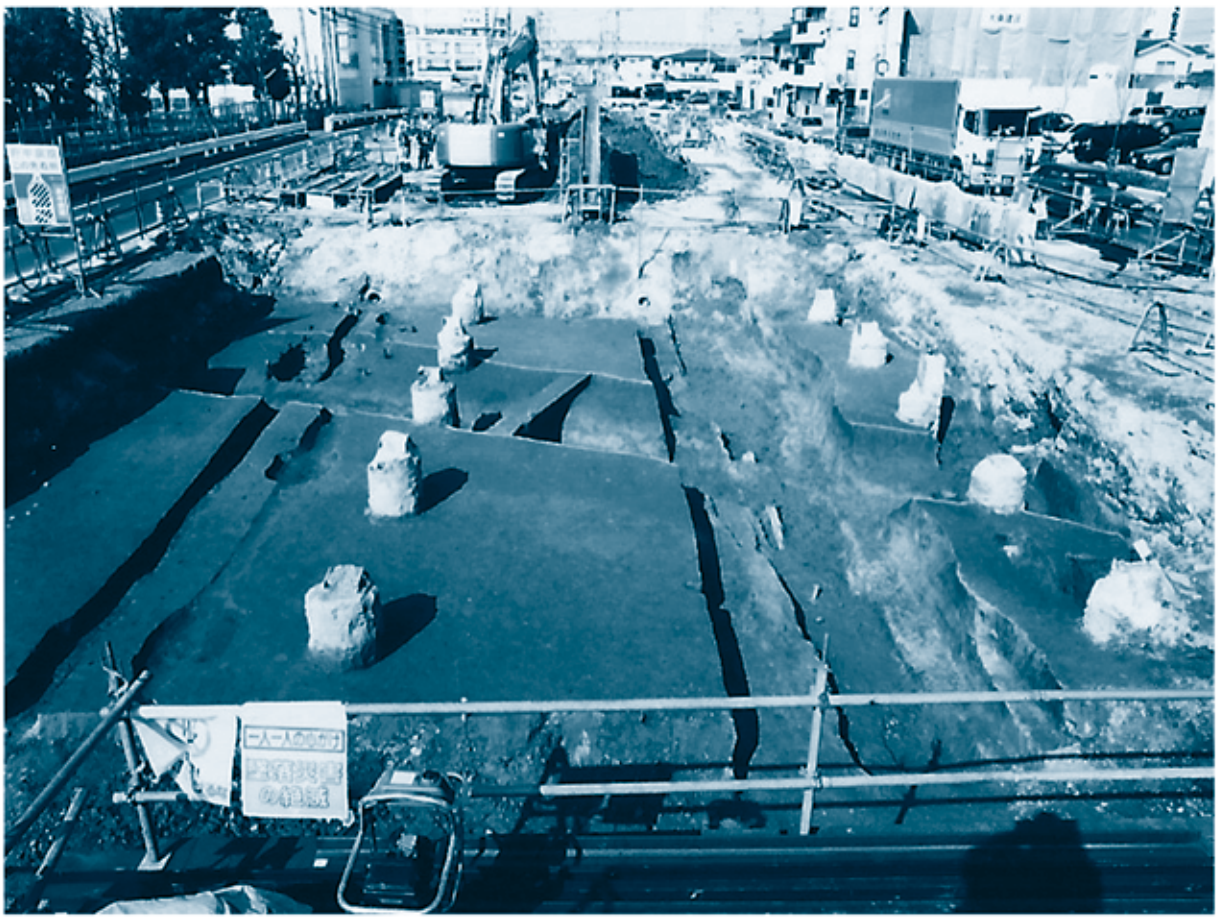


第4面（南東から）

08-17区



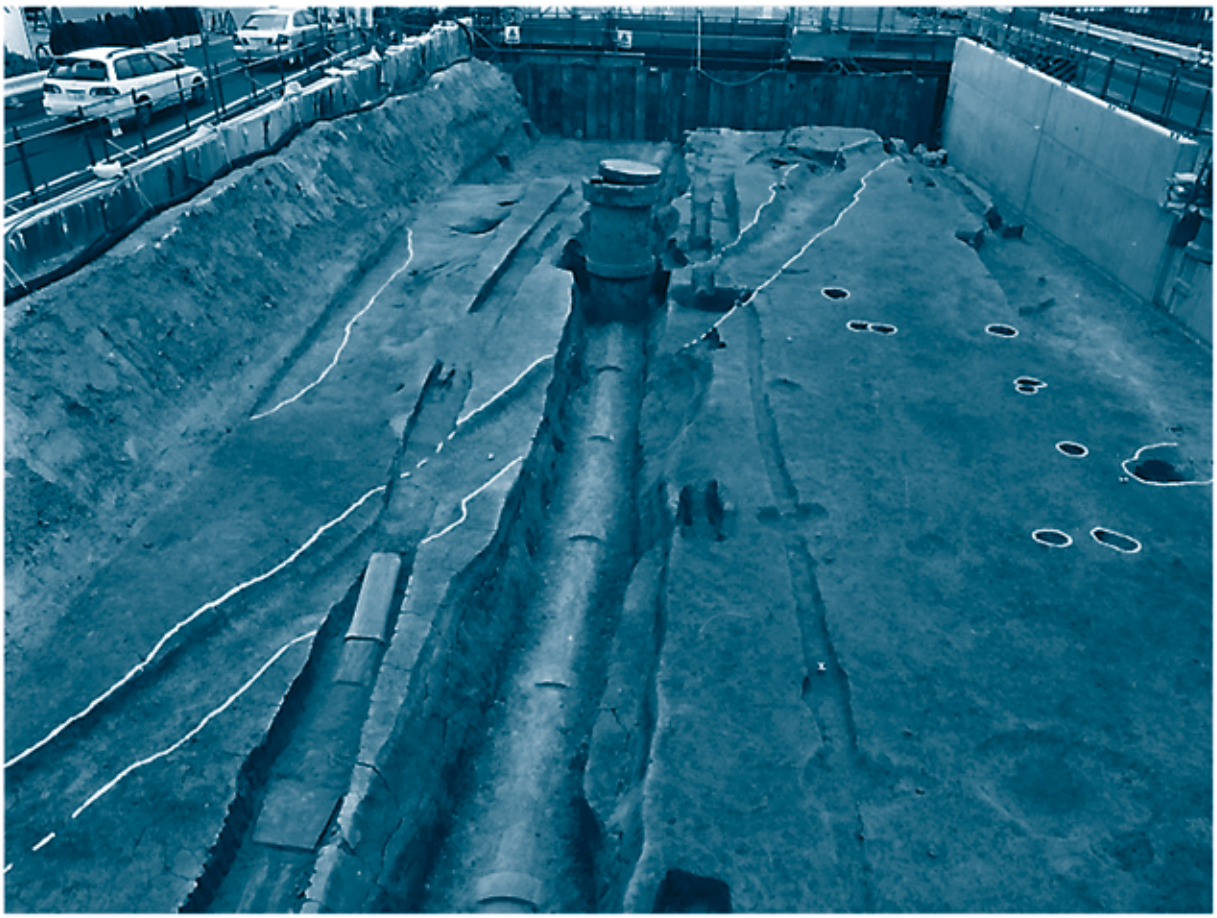
第1面（南東から）



第２面（南東から）

第４面（南東から）

上層第１面全景（肥子池堤体が残る。）（南東から）

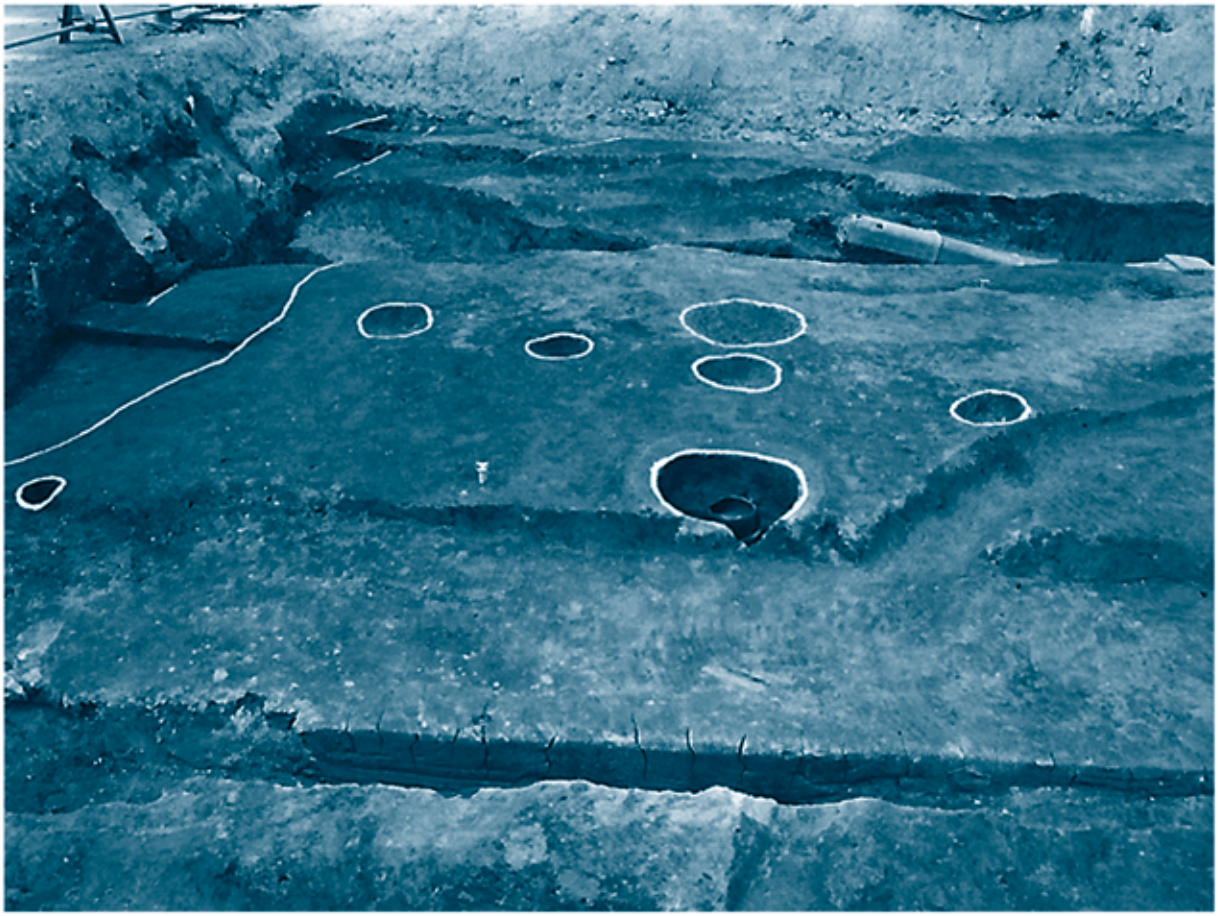


下層第２面全景（北西から）

図版50

09-1b区

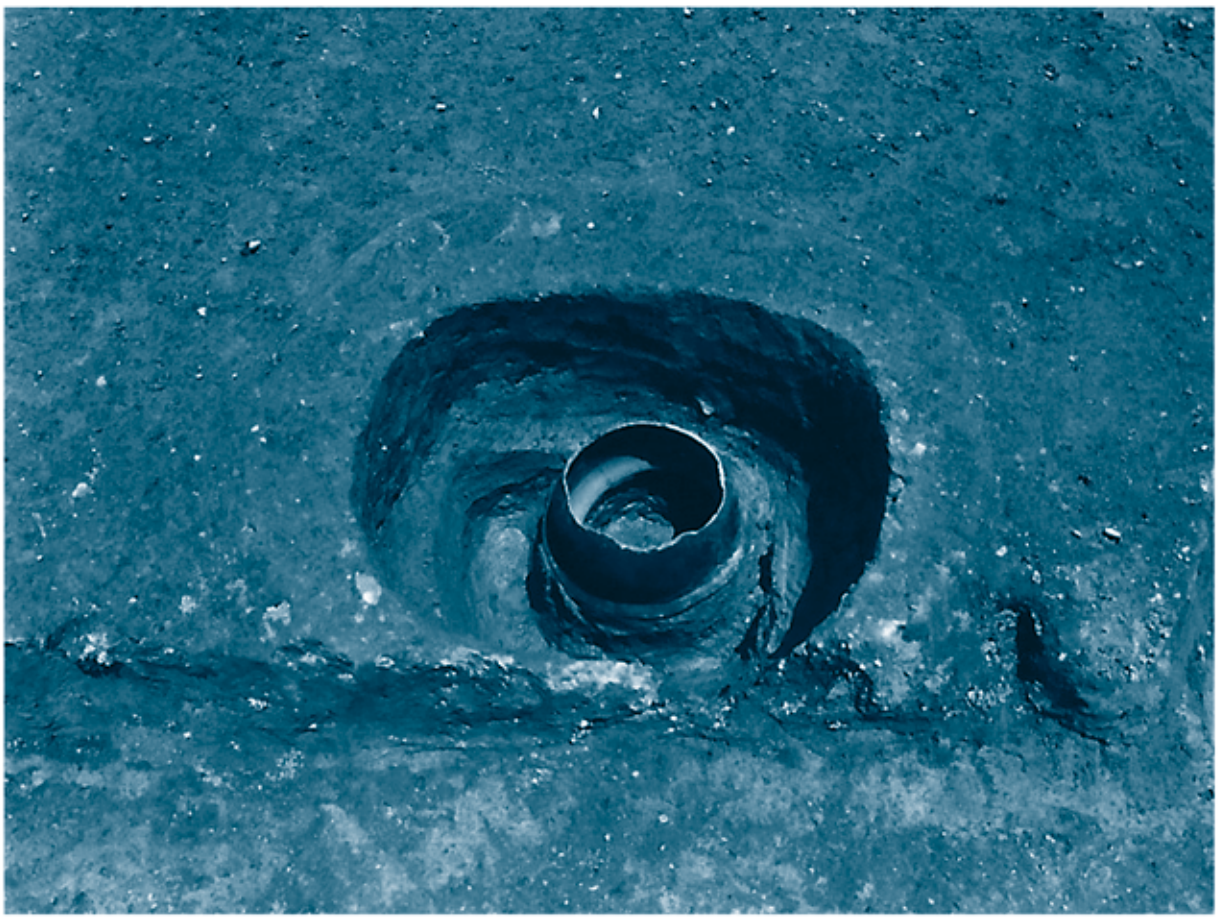
下層全景（南東から）



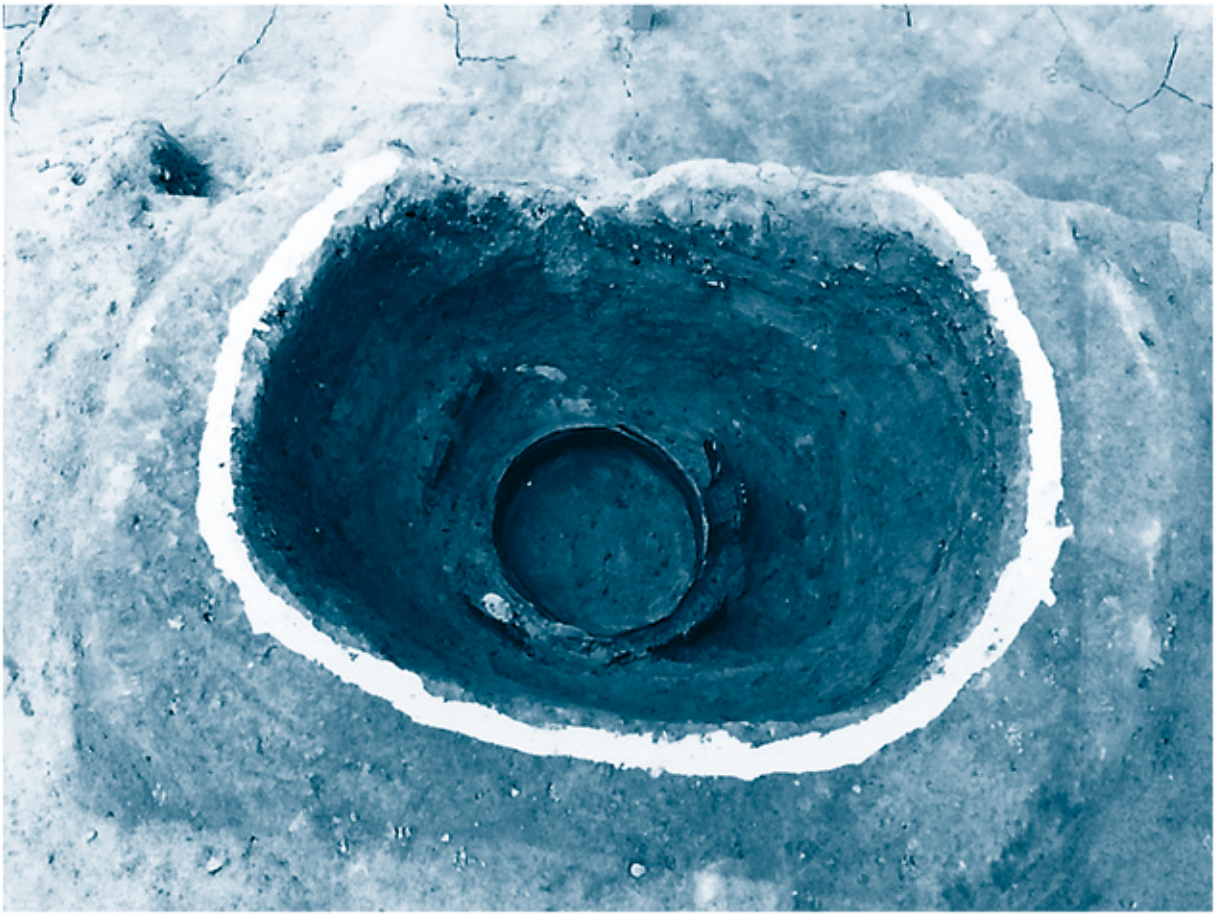
北西部遺構検出状況（南西から）

図版51

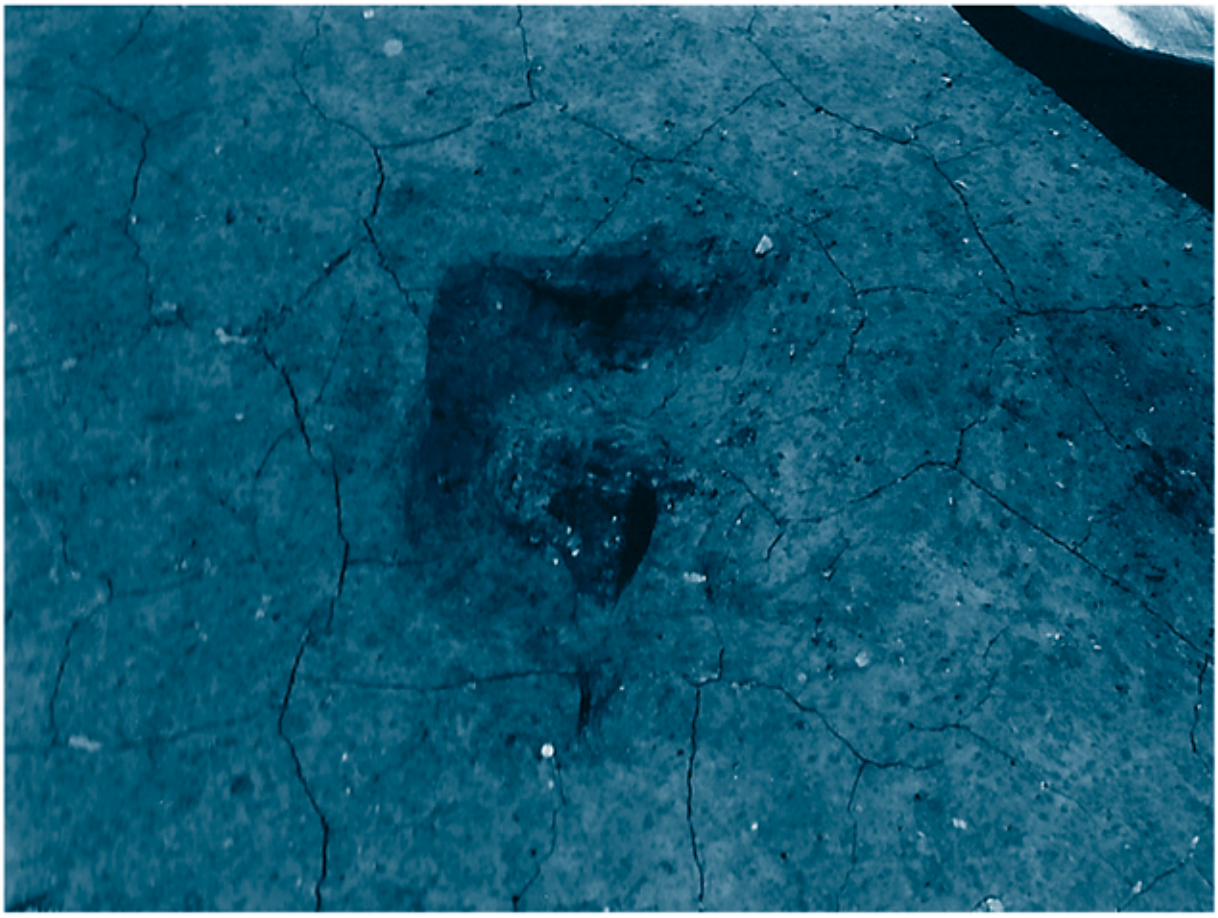
09-1b区



21SE



21SE（下段曲物）



縄文土坑

縄文土器出土状況

第 3 面全景（上が北東）

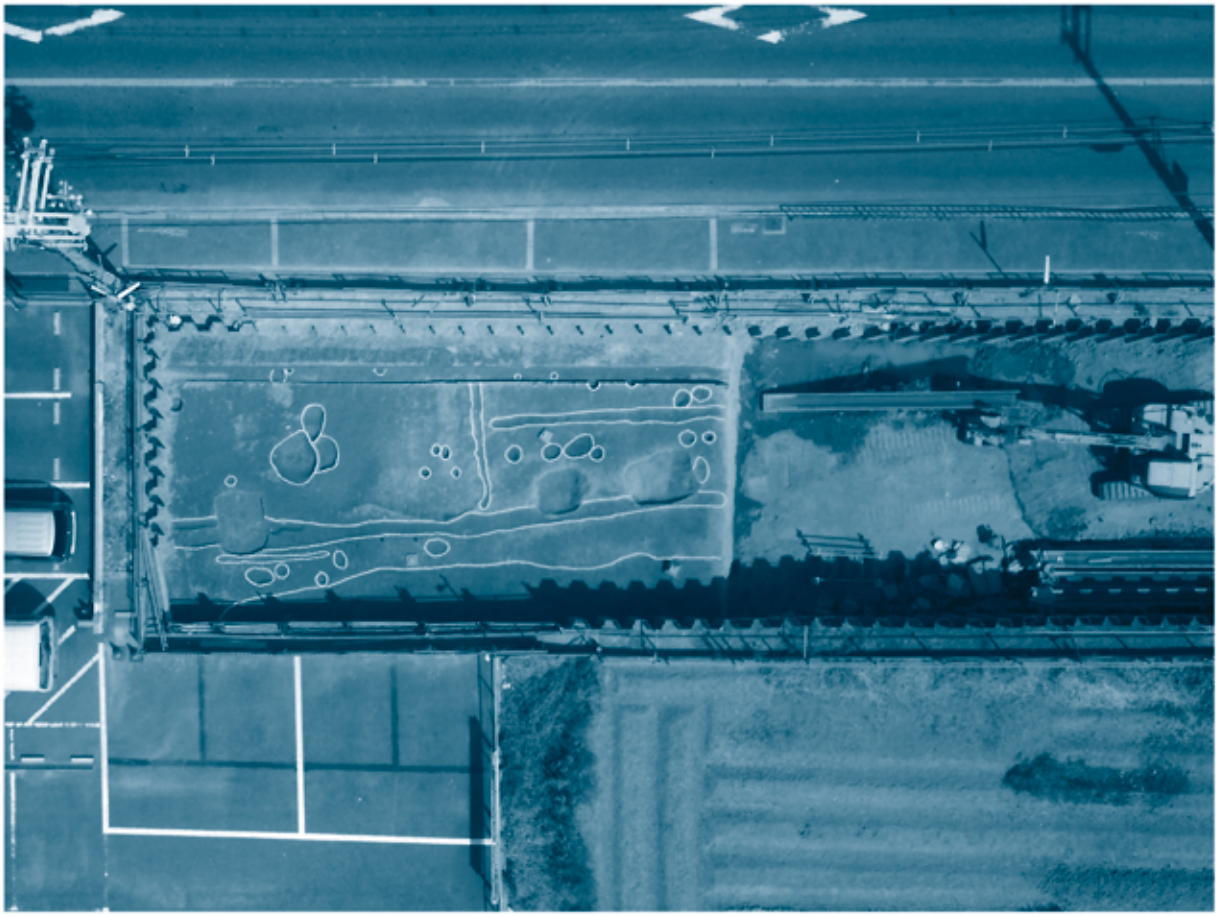
第 3 面（北西から）

図版54

09-2a区

全景（南東から）

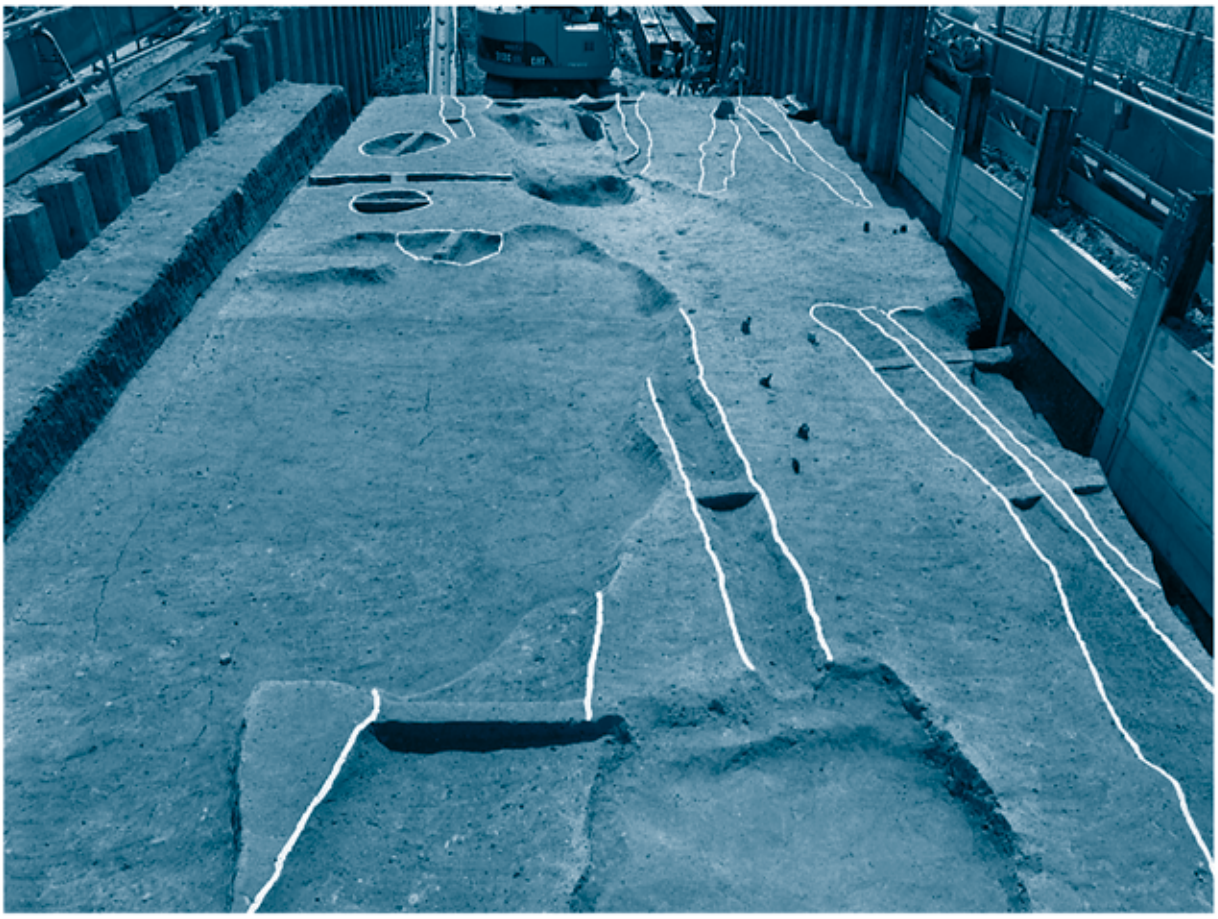
09-2b区



全景（上が北東）

図版55

09-2b区

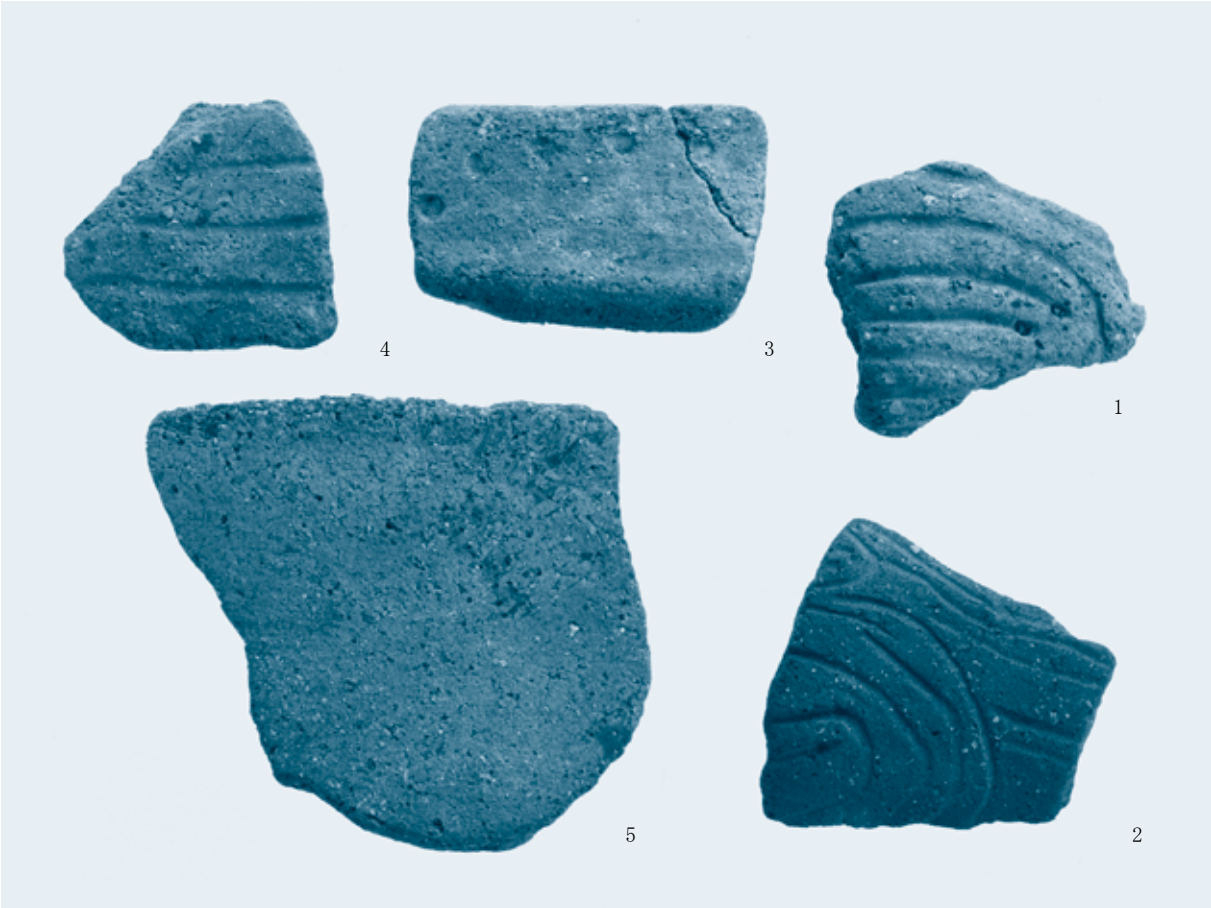


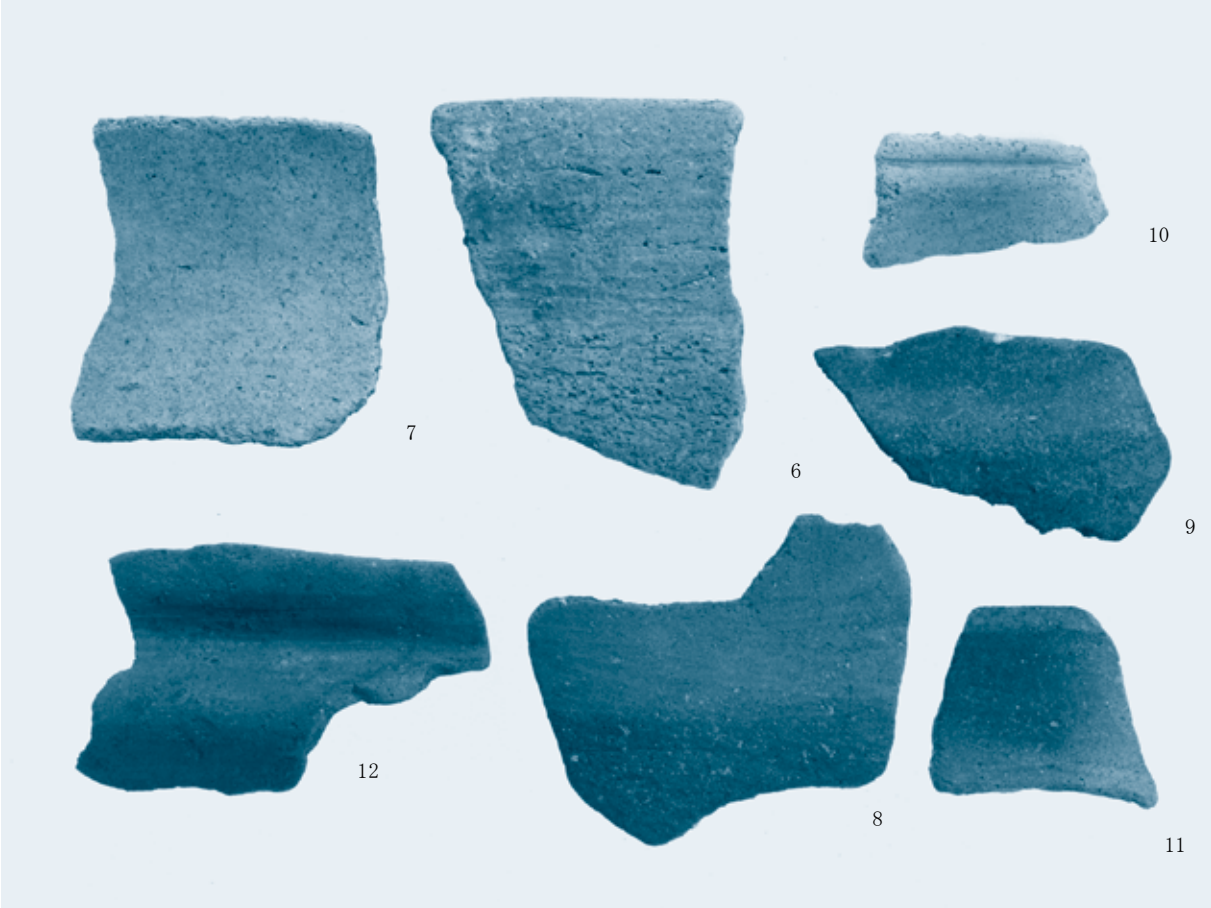
全景（東南から）

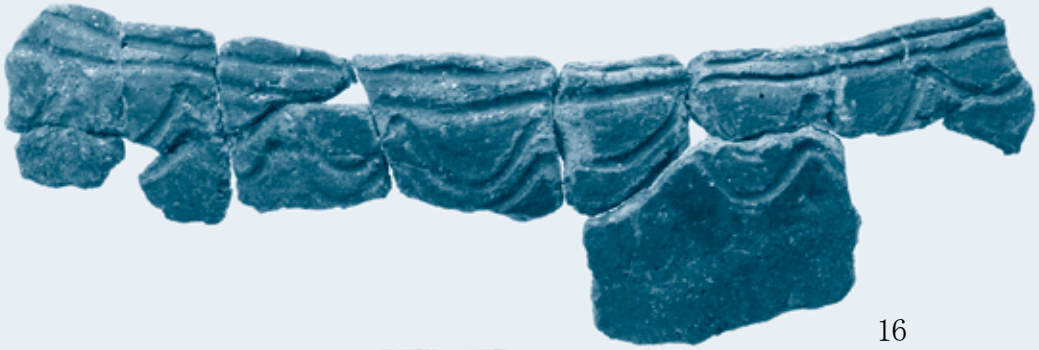
全景（北西から）

図版56

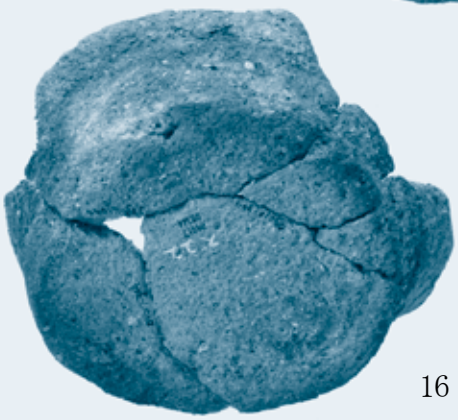
縄文時代の遺物 1







16

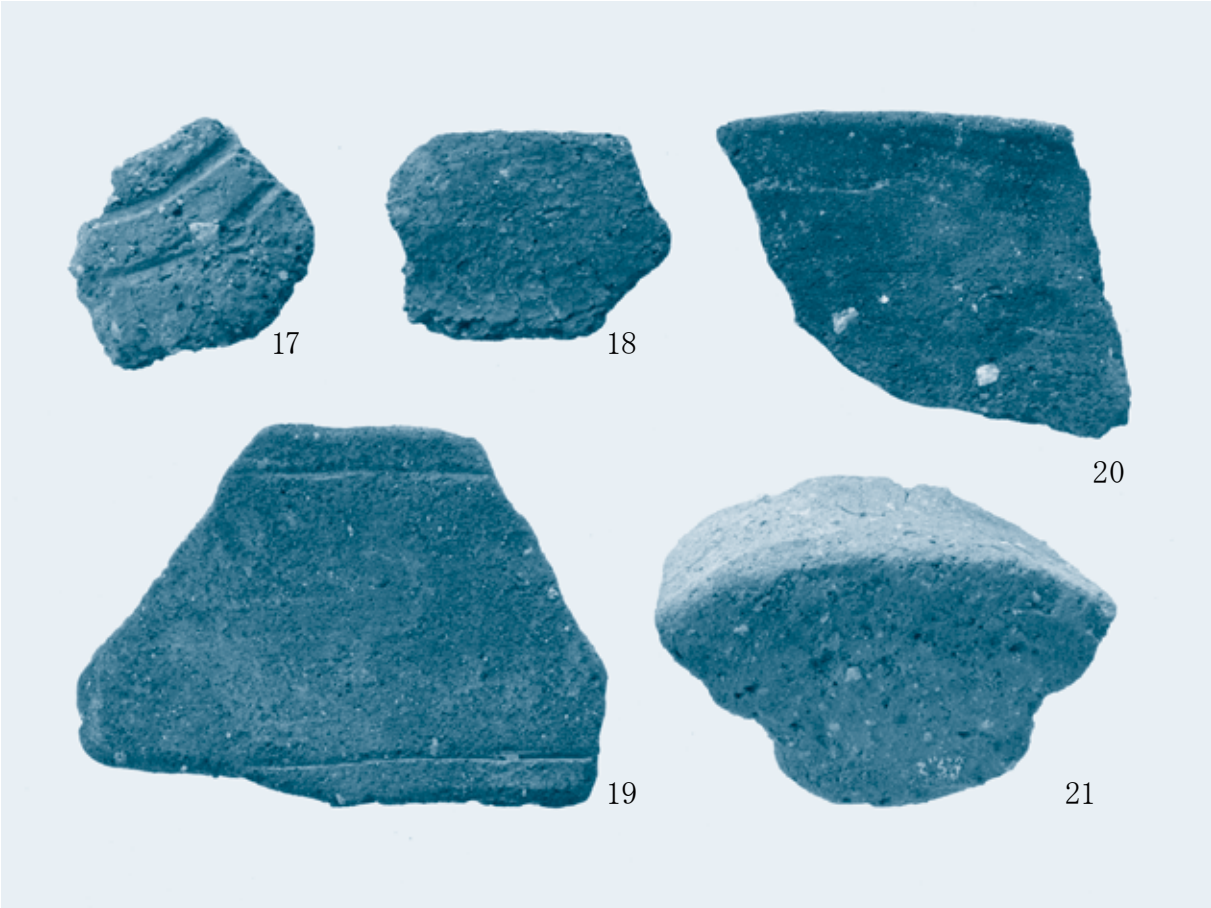


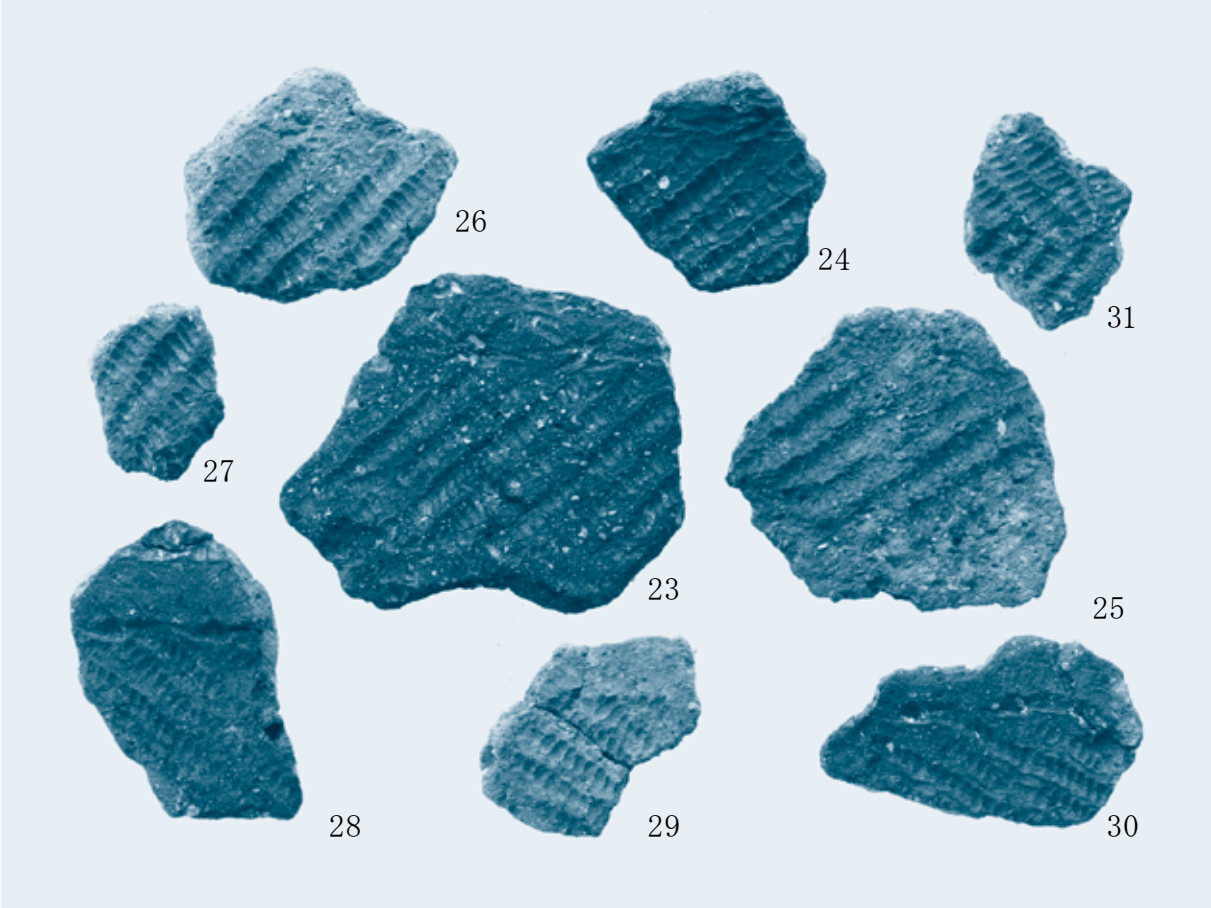
16

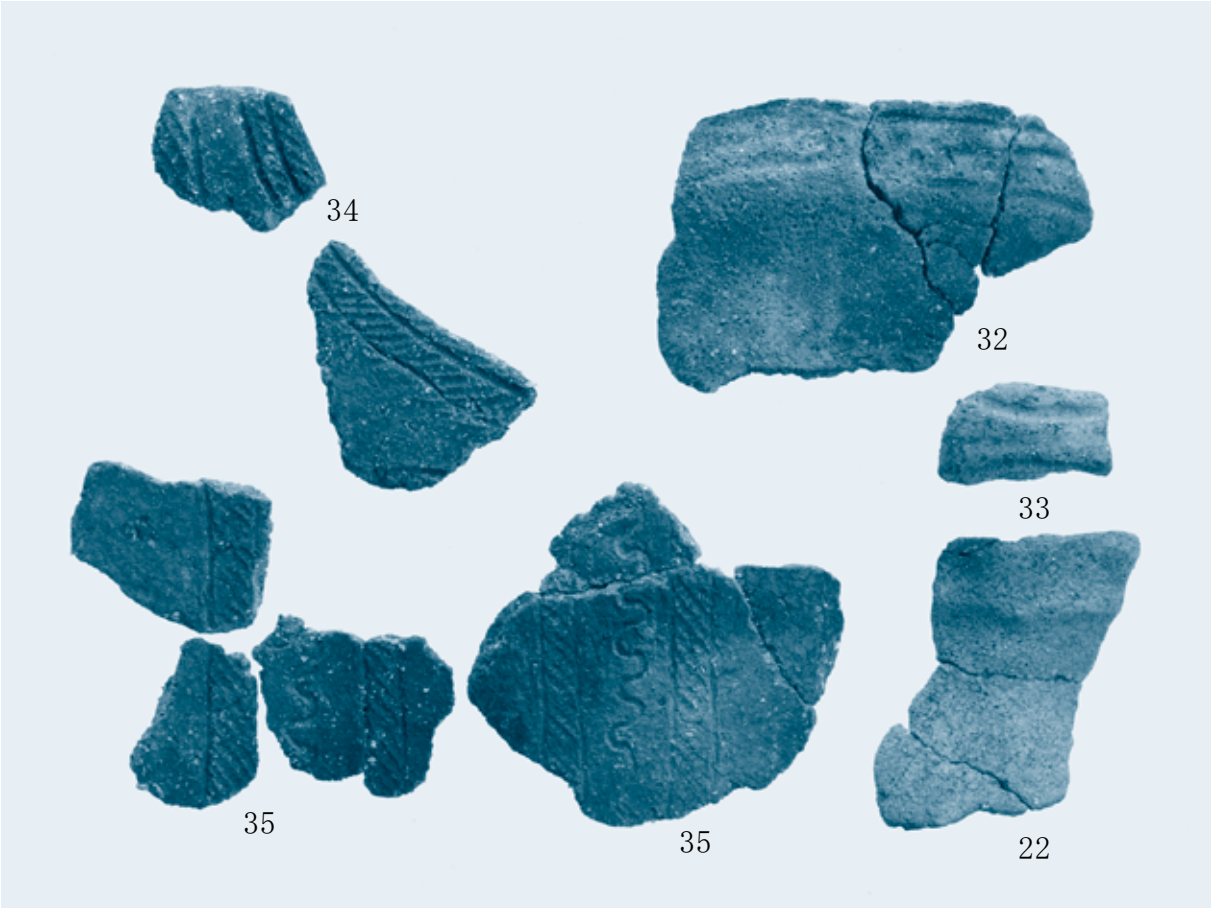
15

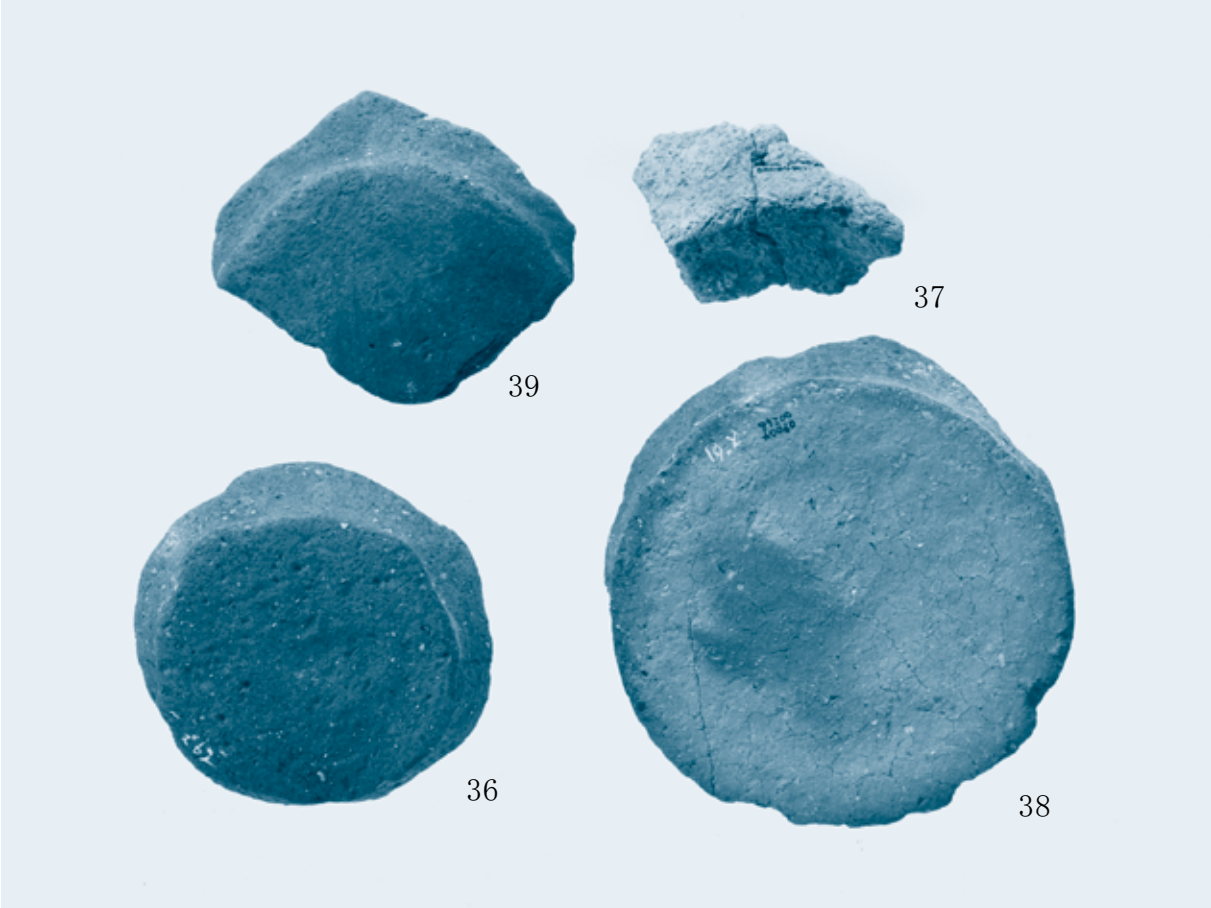
14

13


17
18
20
19
21


26
24
31
27
23
25
28
29
30

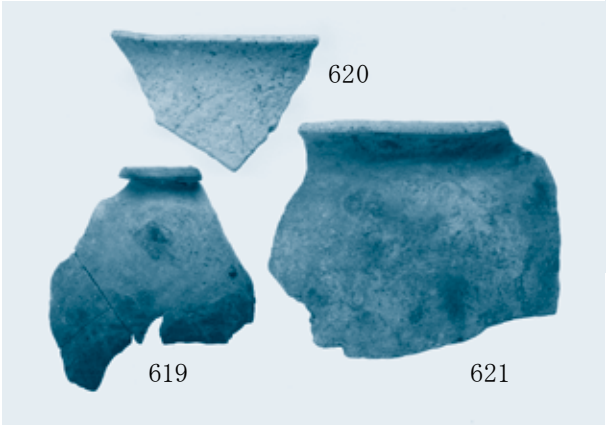

34
32
33
35
35
22

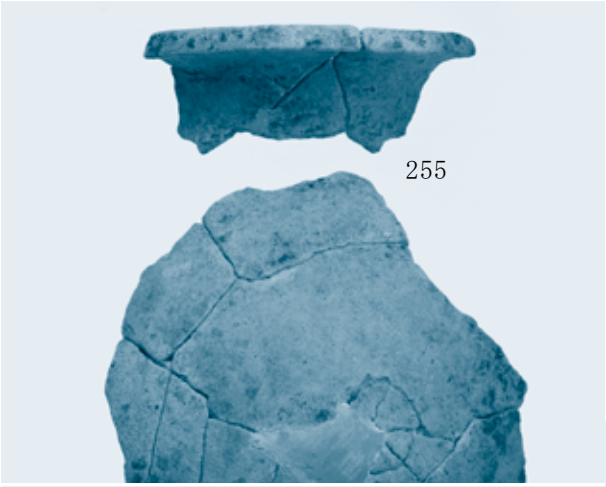

37
39
36
38

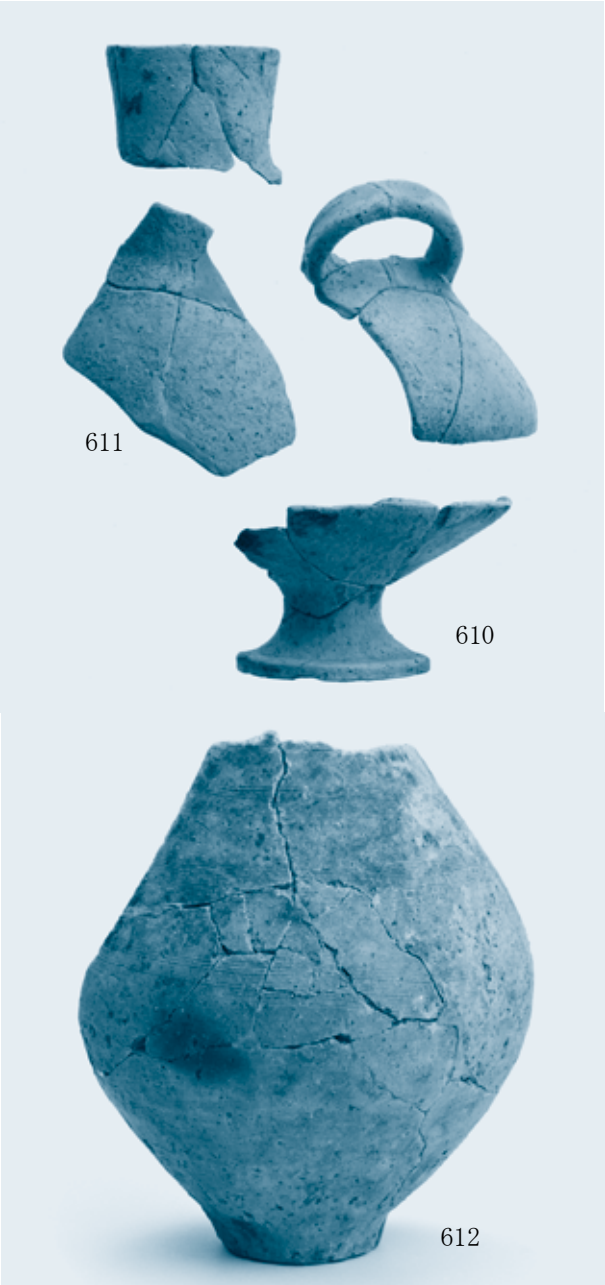
図版60

弥生時代の遺物

1

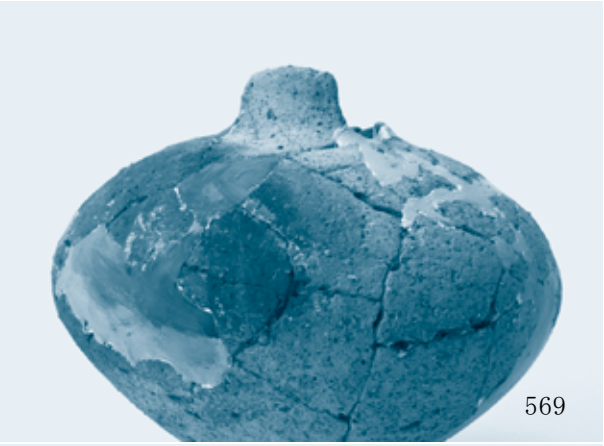


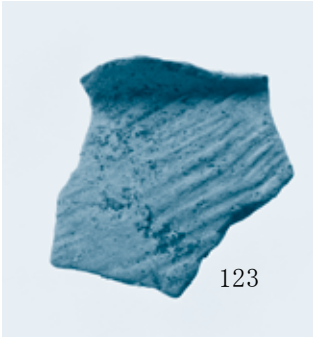


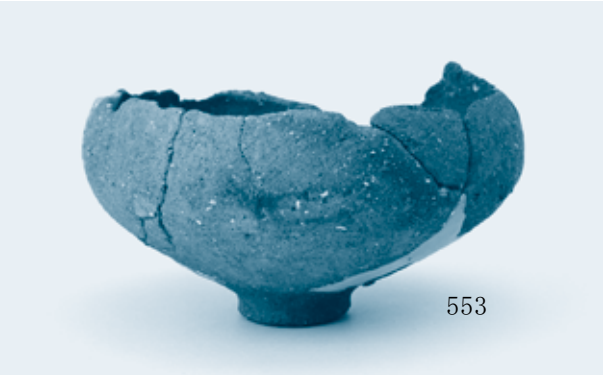


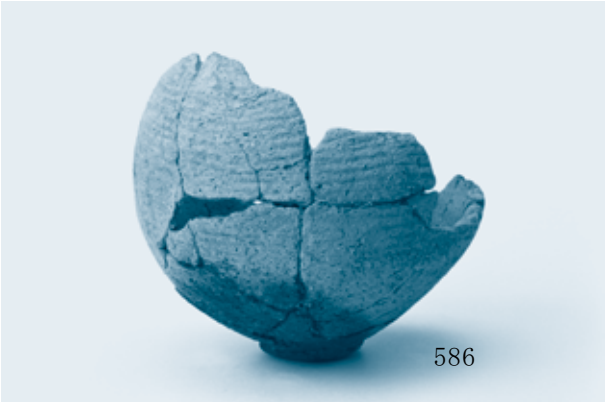
図版61

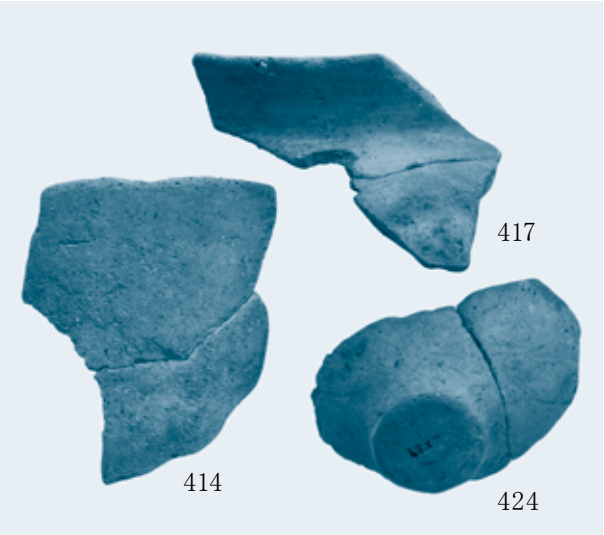
弥生時代の遺物 2

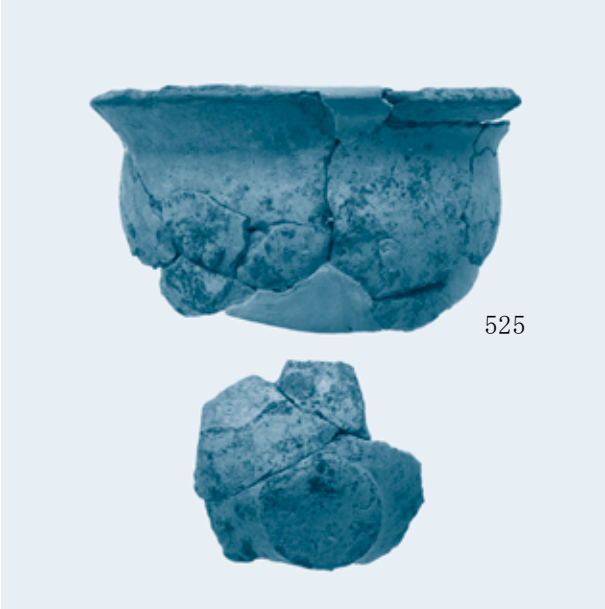




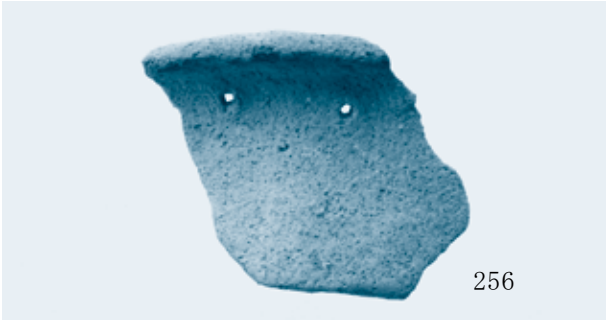


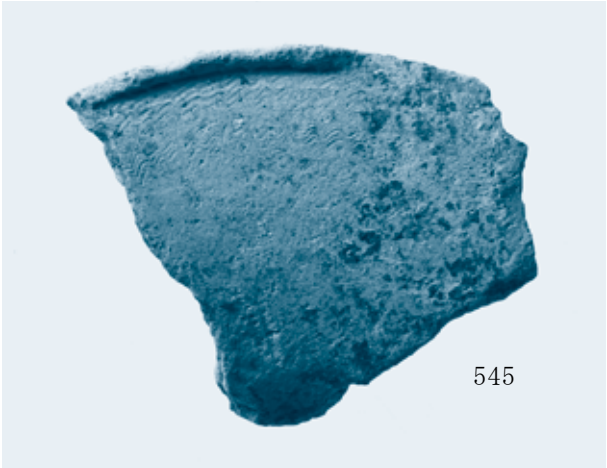




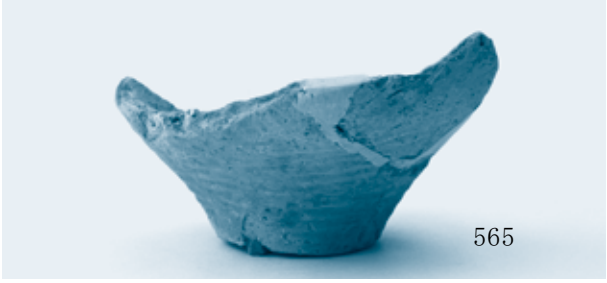


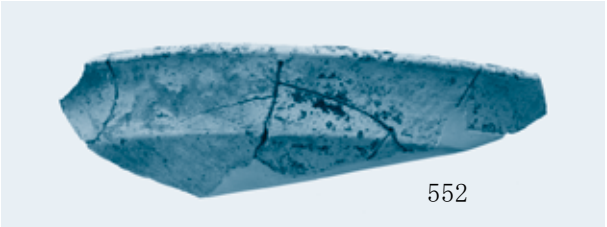
291

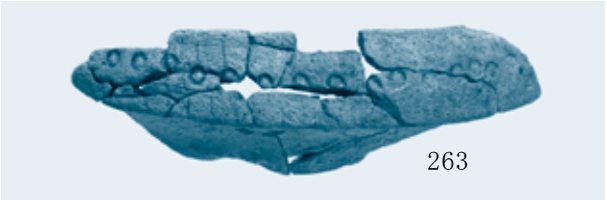

256

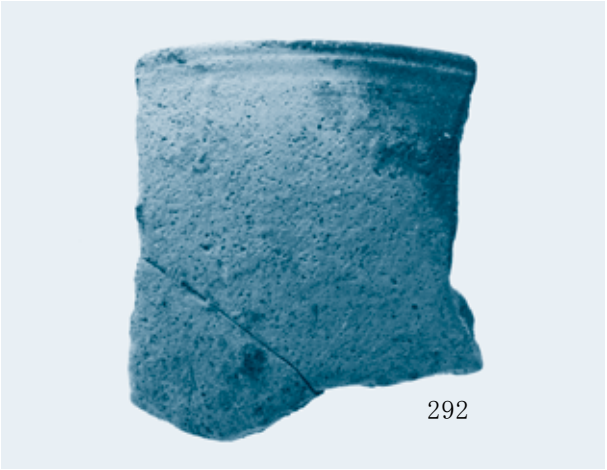

545

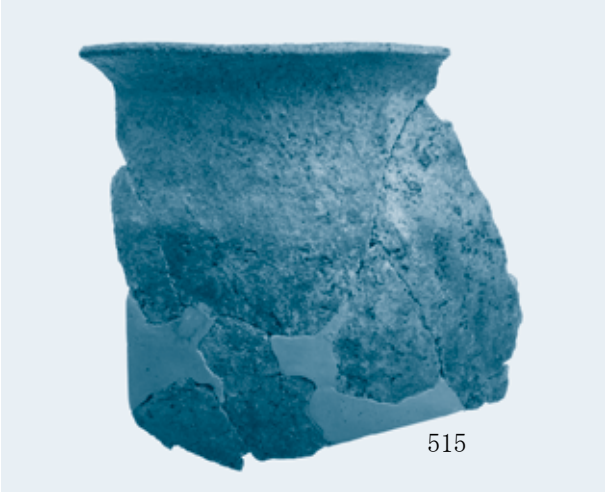
562

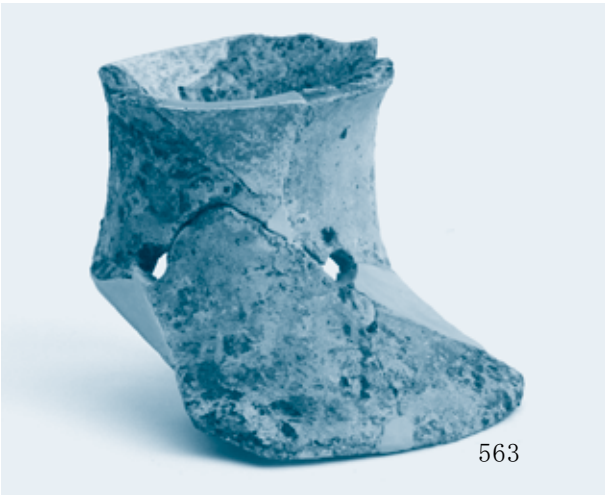

565

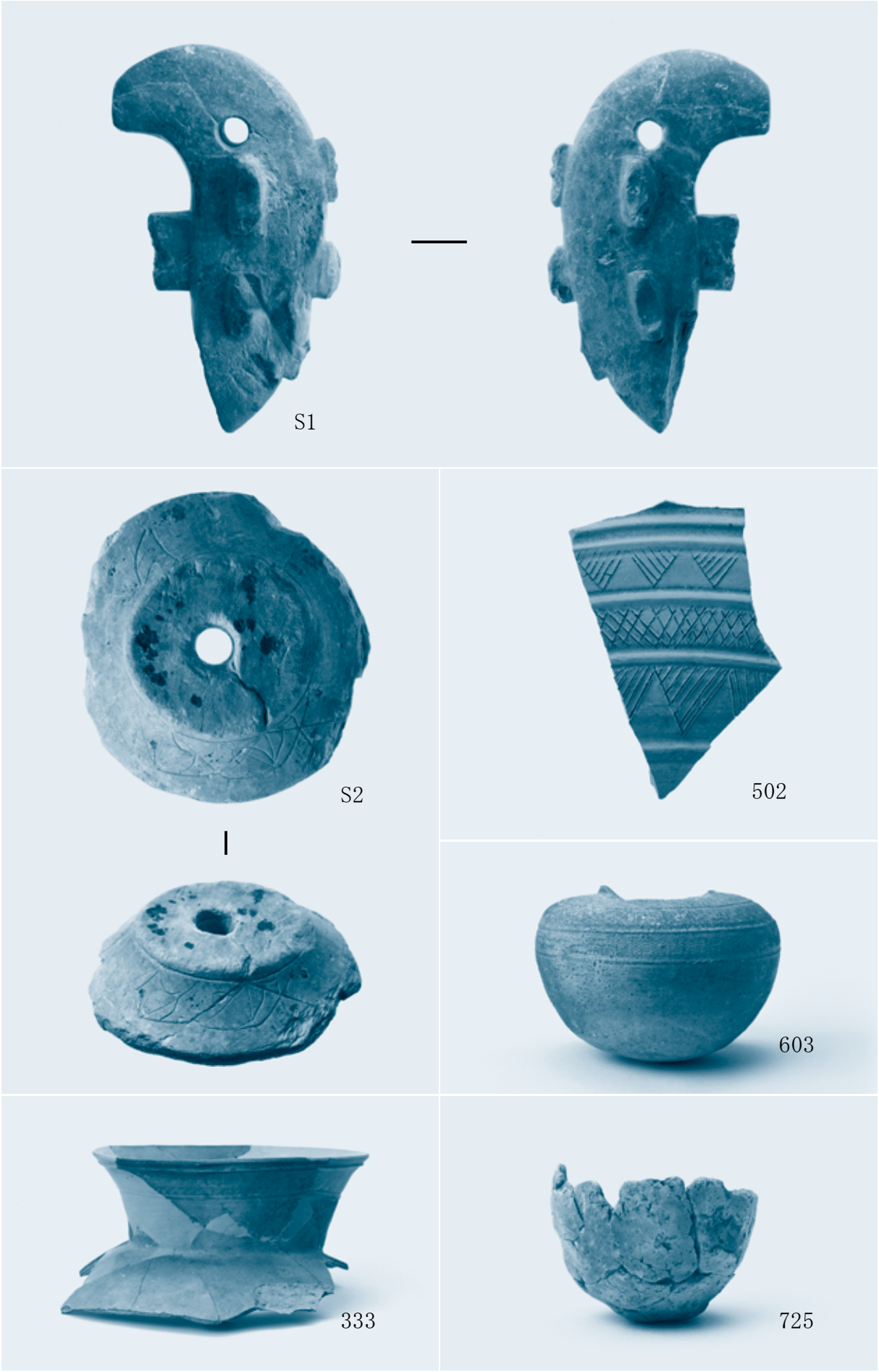

552


263


292


515


563


S1
S2
502
603
333
725

図版64　古墳時代の遺物　2

403

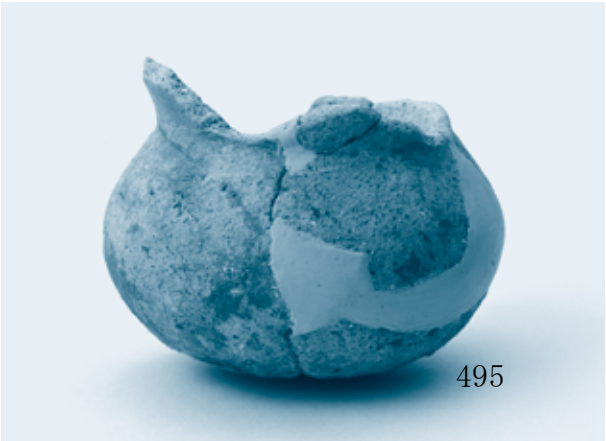
413

598

588

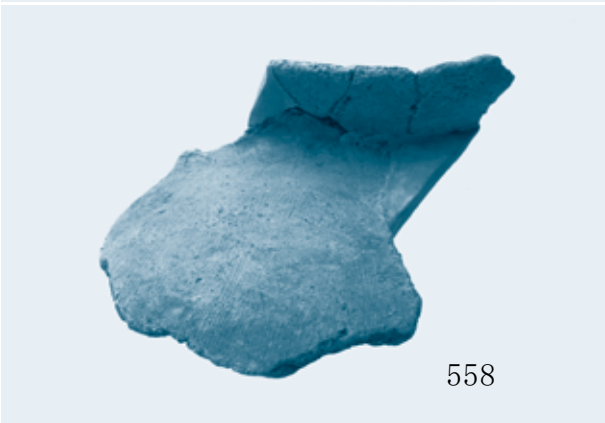
570

412

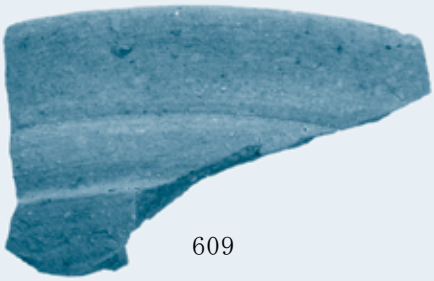

495

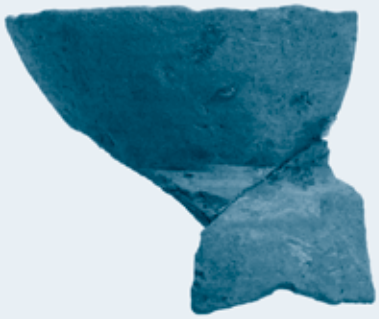
578

511


558

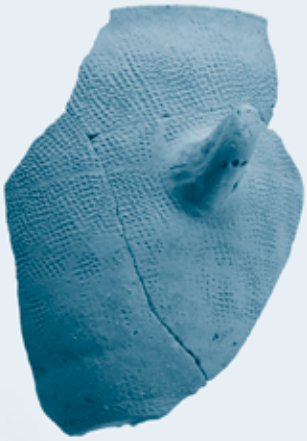
607


609


604

608

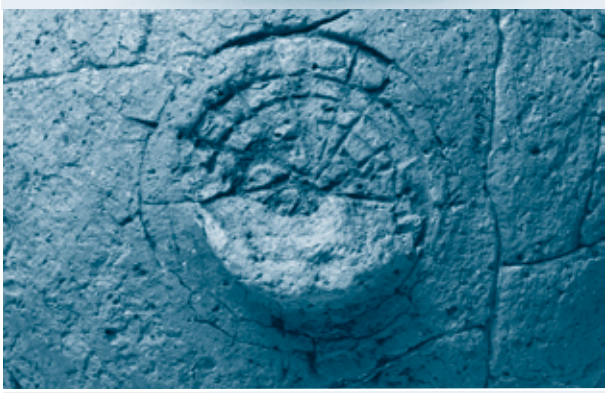
435

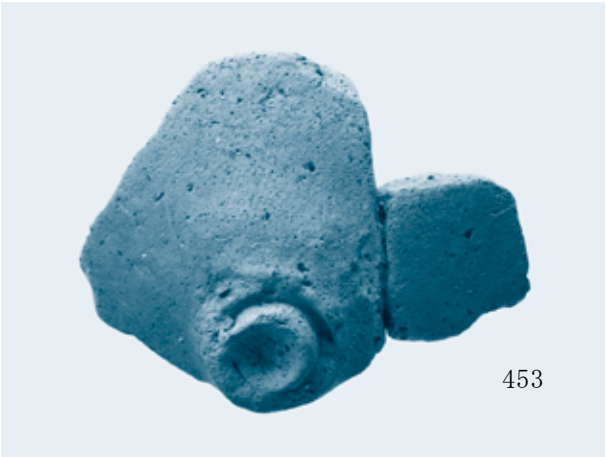

507

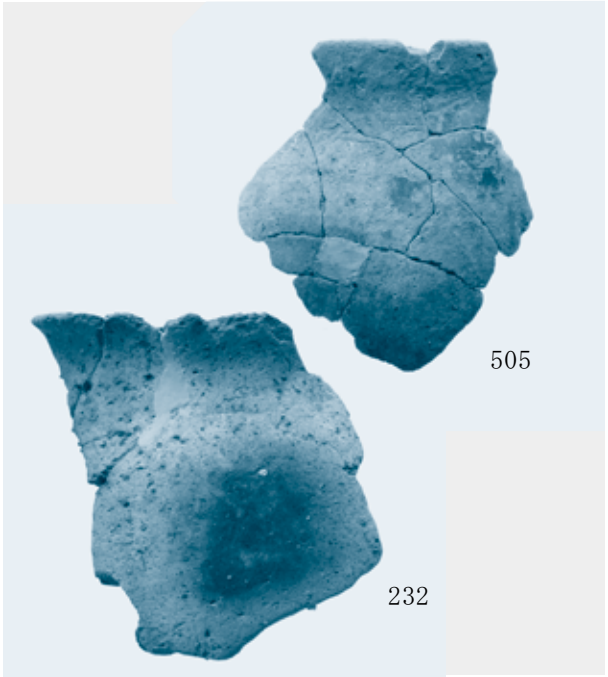
418

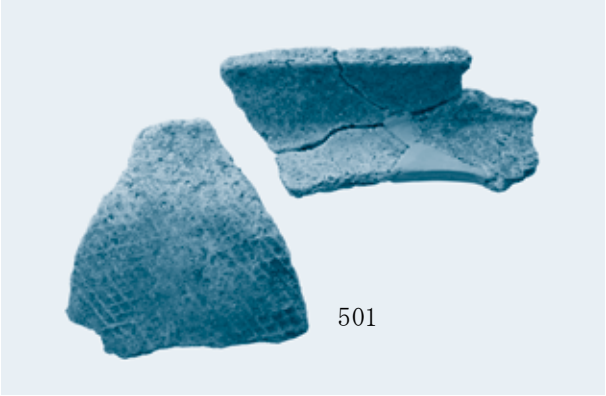
508

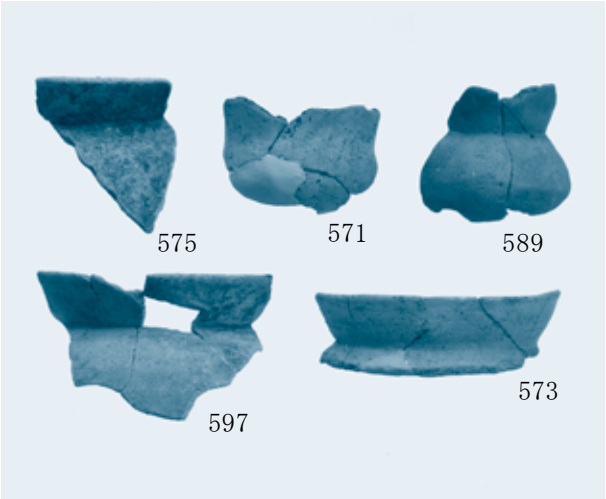
512

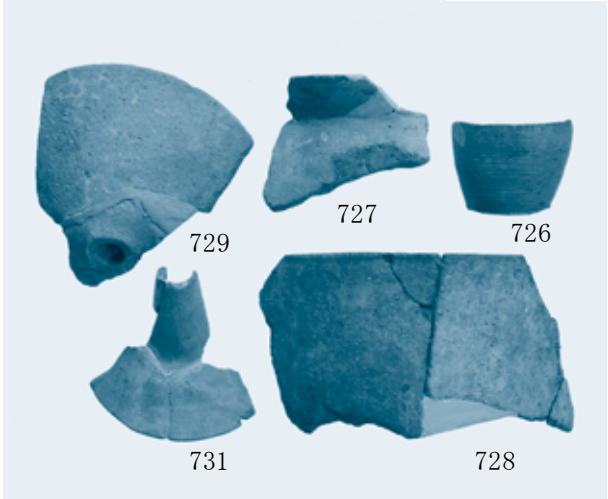


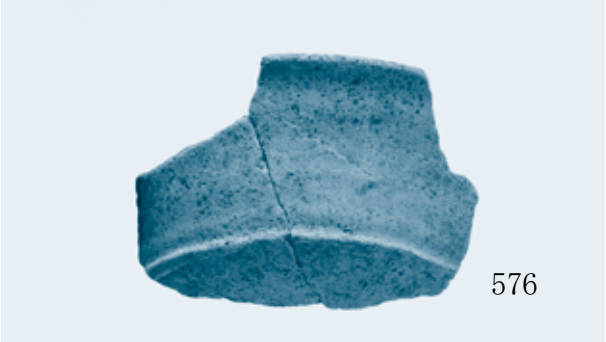

453


505
232


501


575
571
589
597
573


729
727
726
731
728


576

732

591

590

730

422

540

308

429
431
430

423
421
432
434

733

426

433

478

427

539

126

594

488

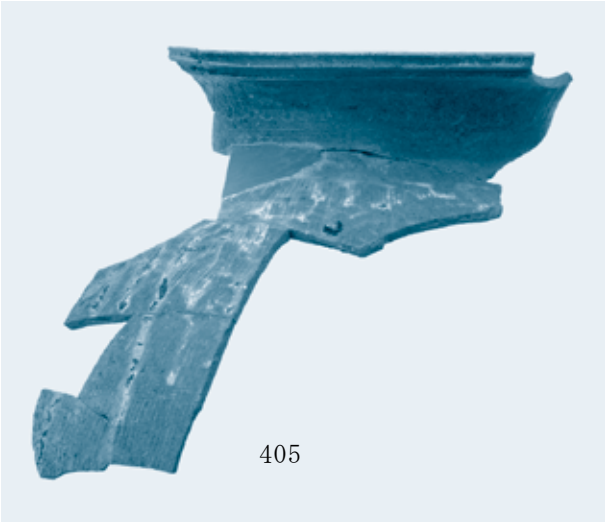
368

489

490

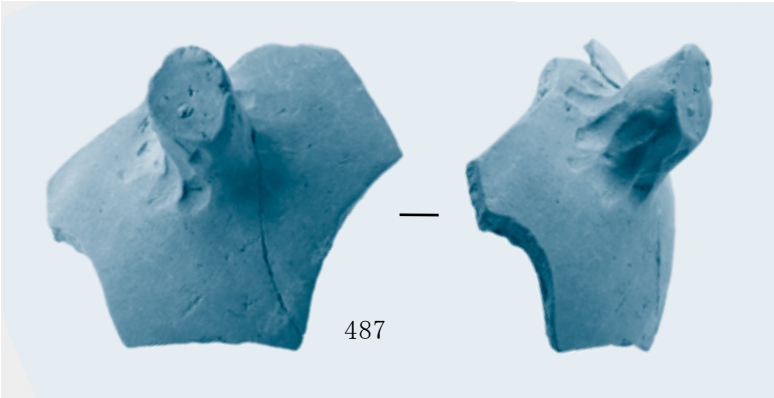
332

402


405

203

493


487

465

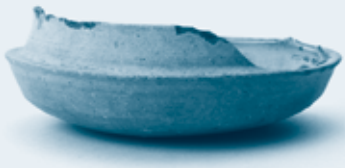
463

367

199

197

371

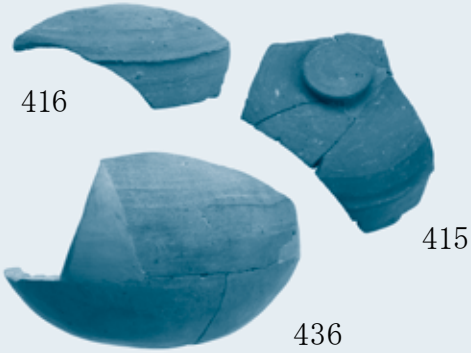

400

464

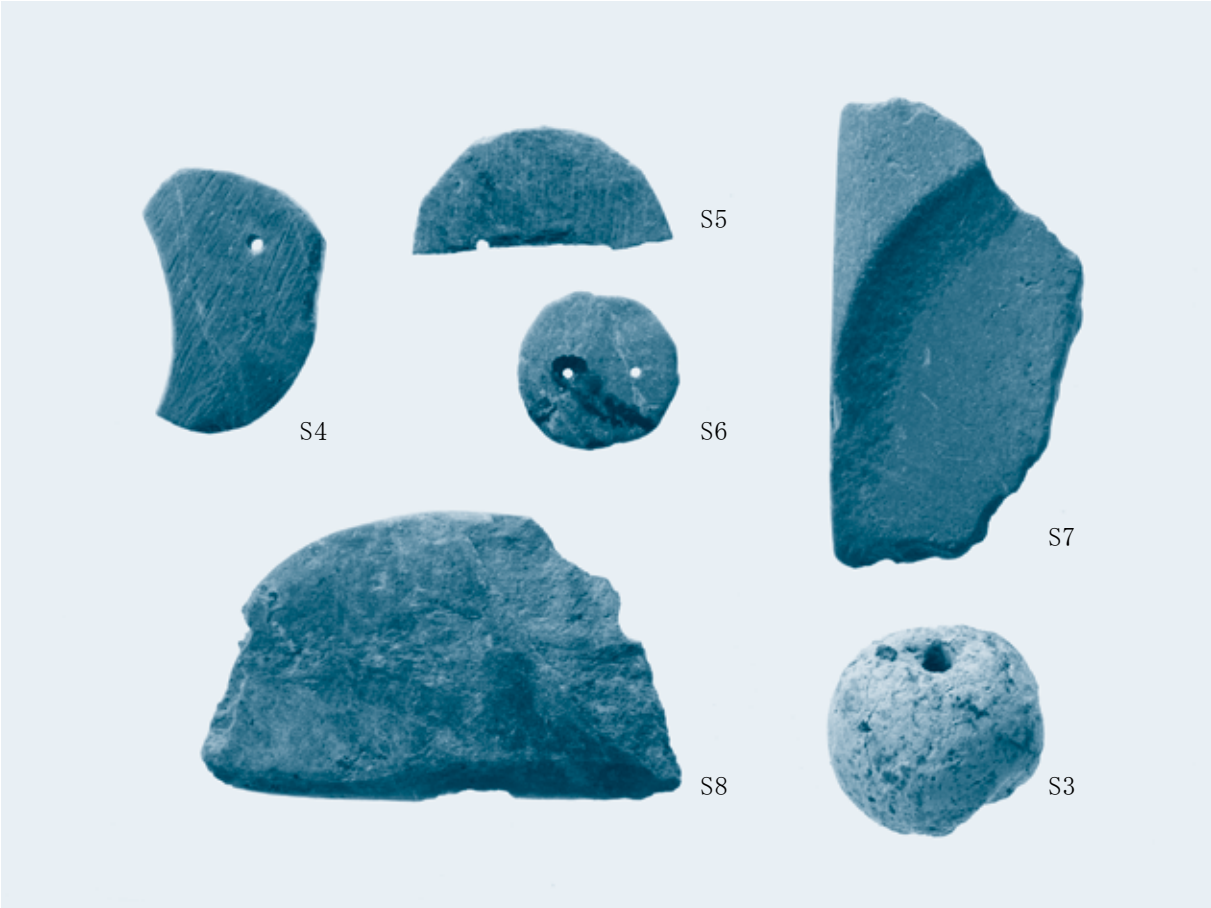
373

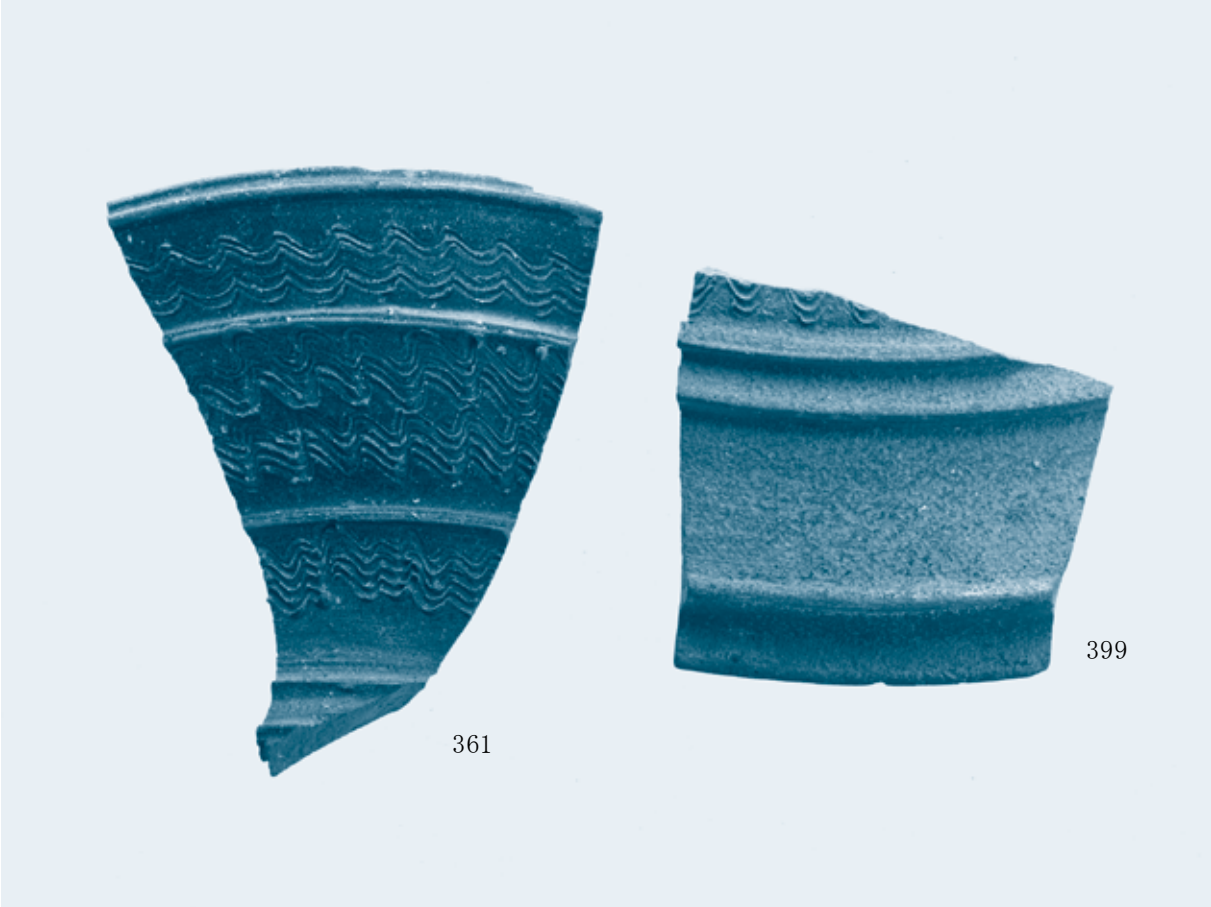
406

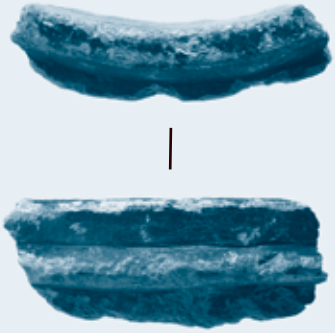
467


416
415
436

404


S5
S4
S6
S7
S8
S3

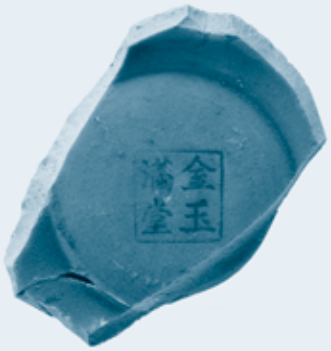

399
361



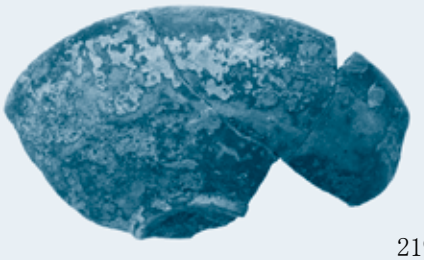
210

901

195

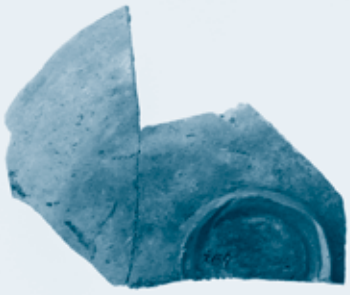


190

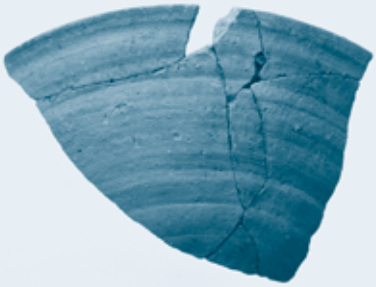


219

250



217

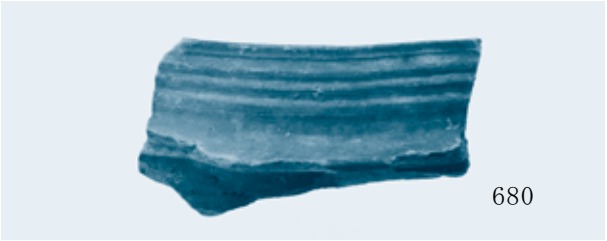


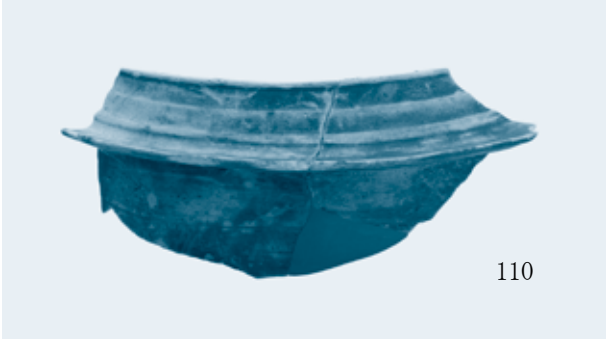
253

221

901は03－3－3区土器列出土

101


680


110

111

109

114

106

108

103

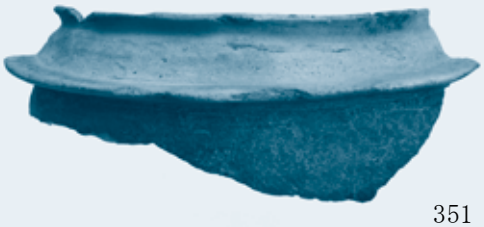
104

図版74

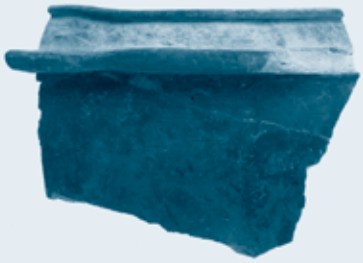
中世の遺物 3

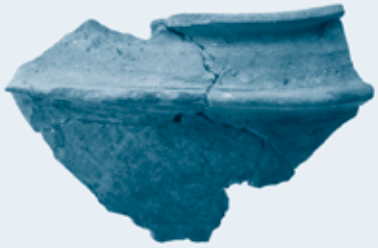
122

252


351

657

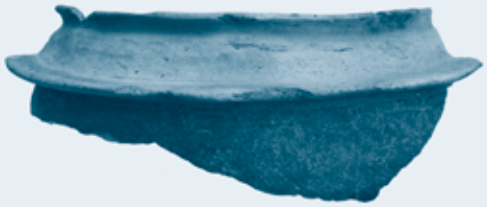

666

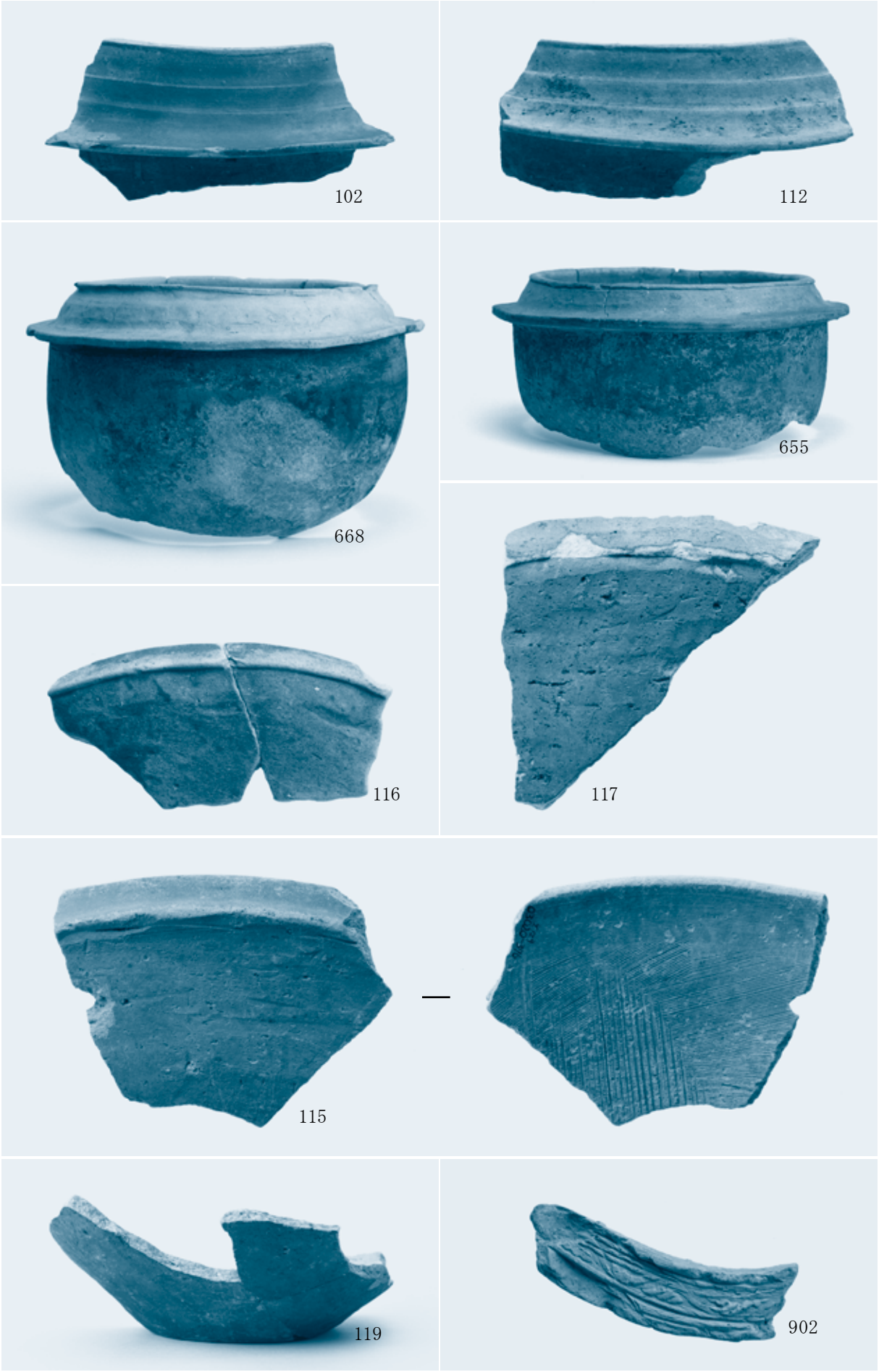

251

653

654

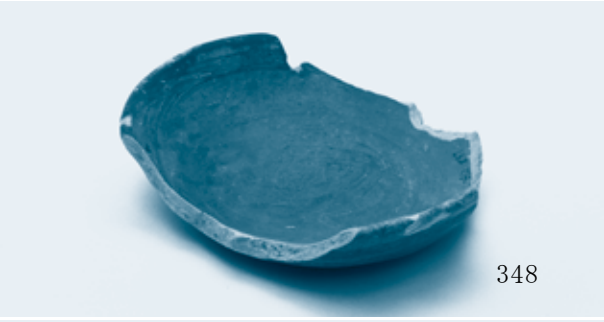
670


734



902 は 03 区包含層出土

350


348

274

334

346

344

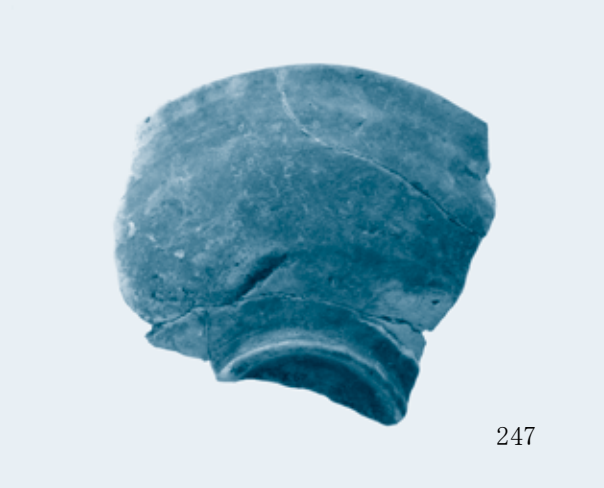
343

335

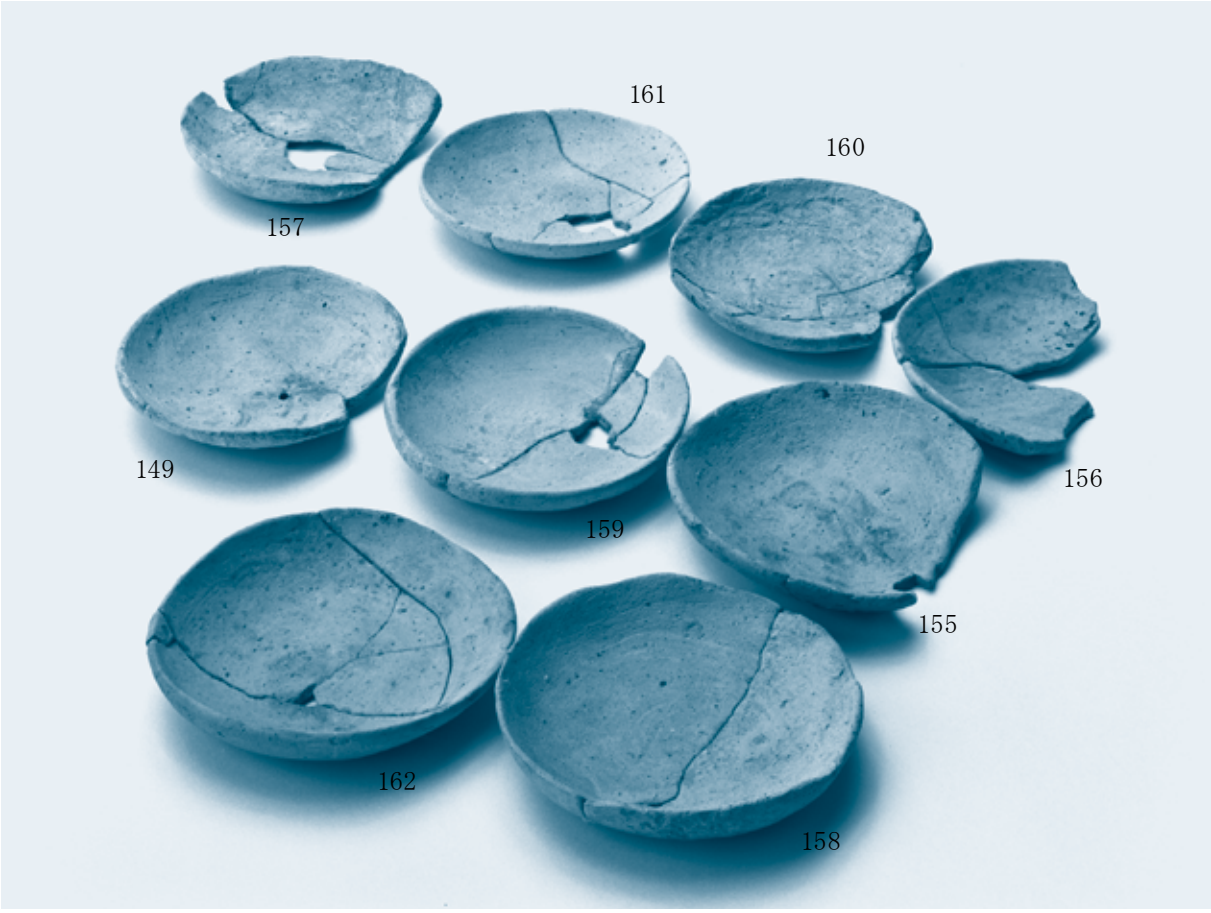
355

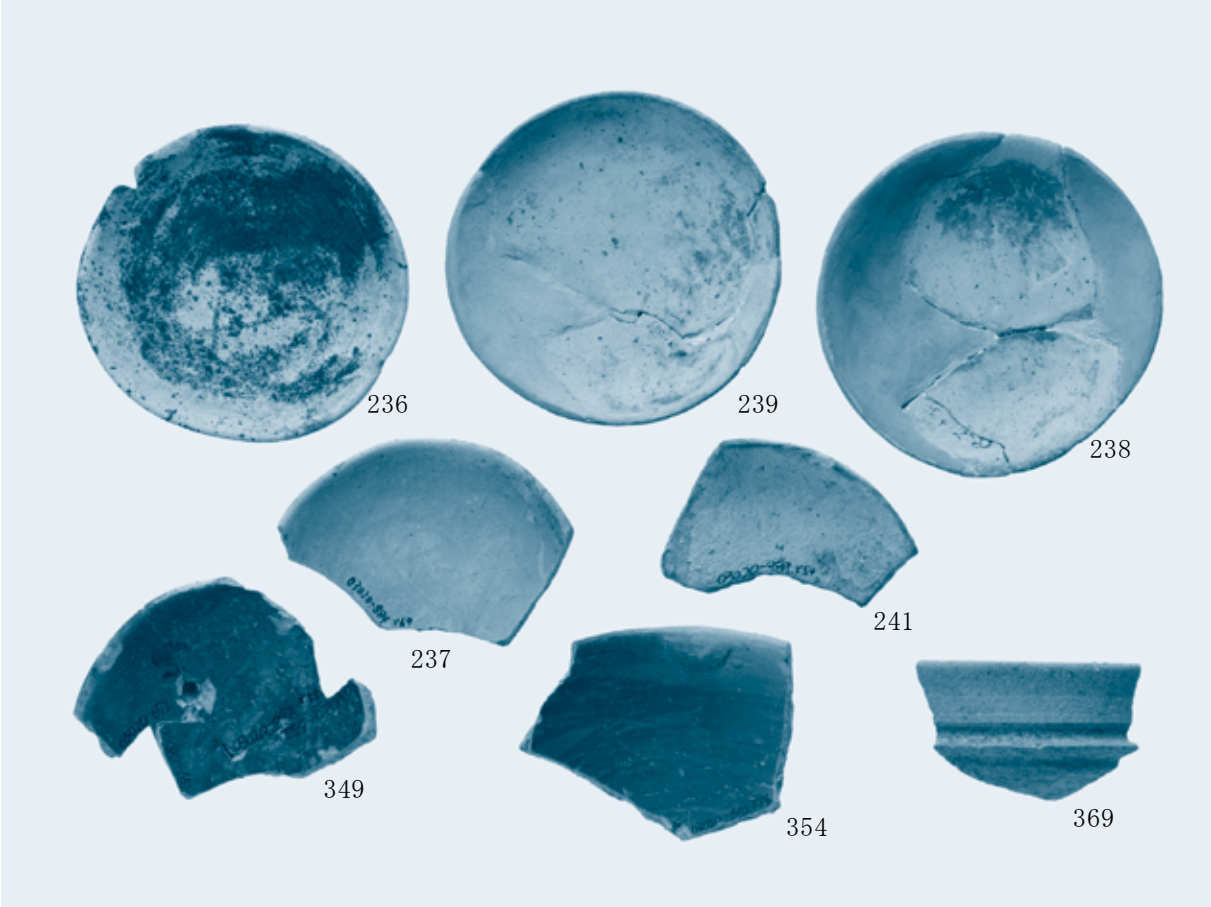
244

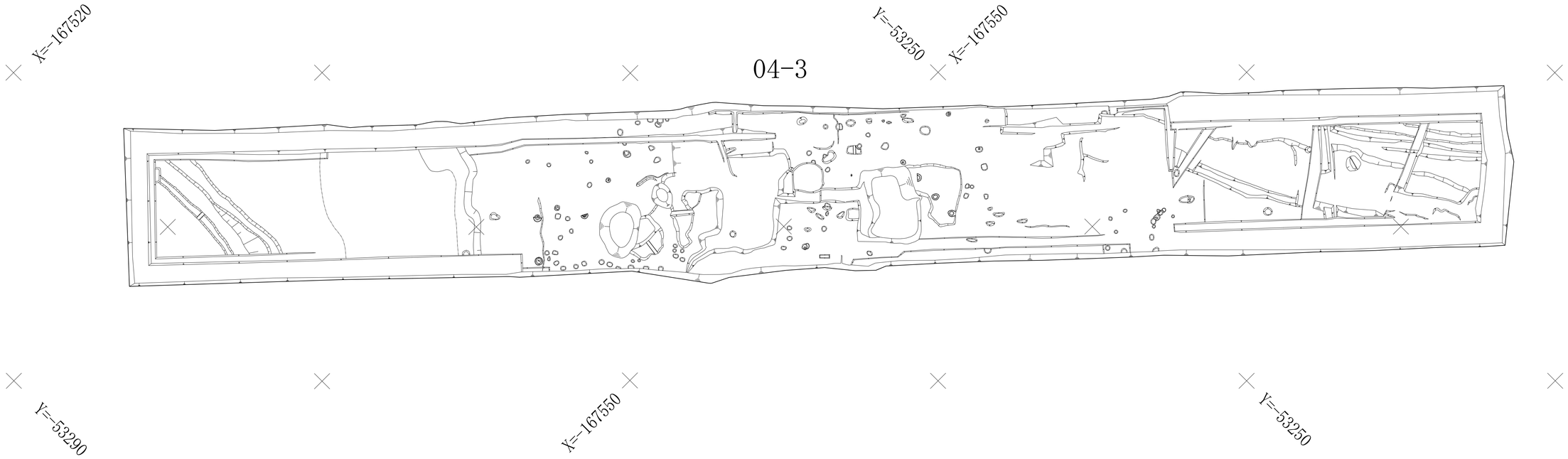
282


247

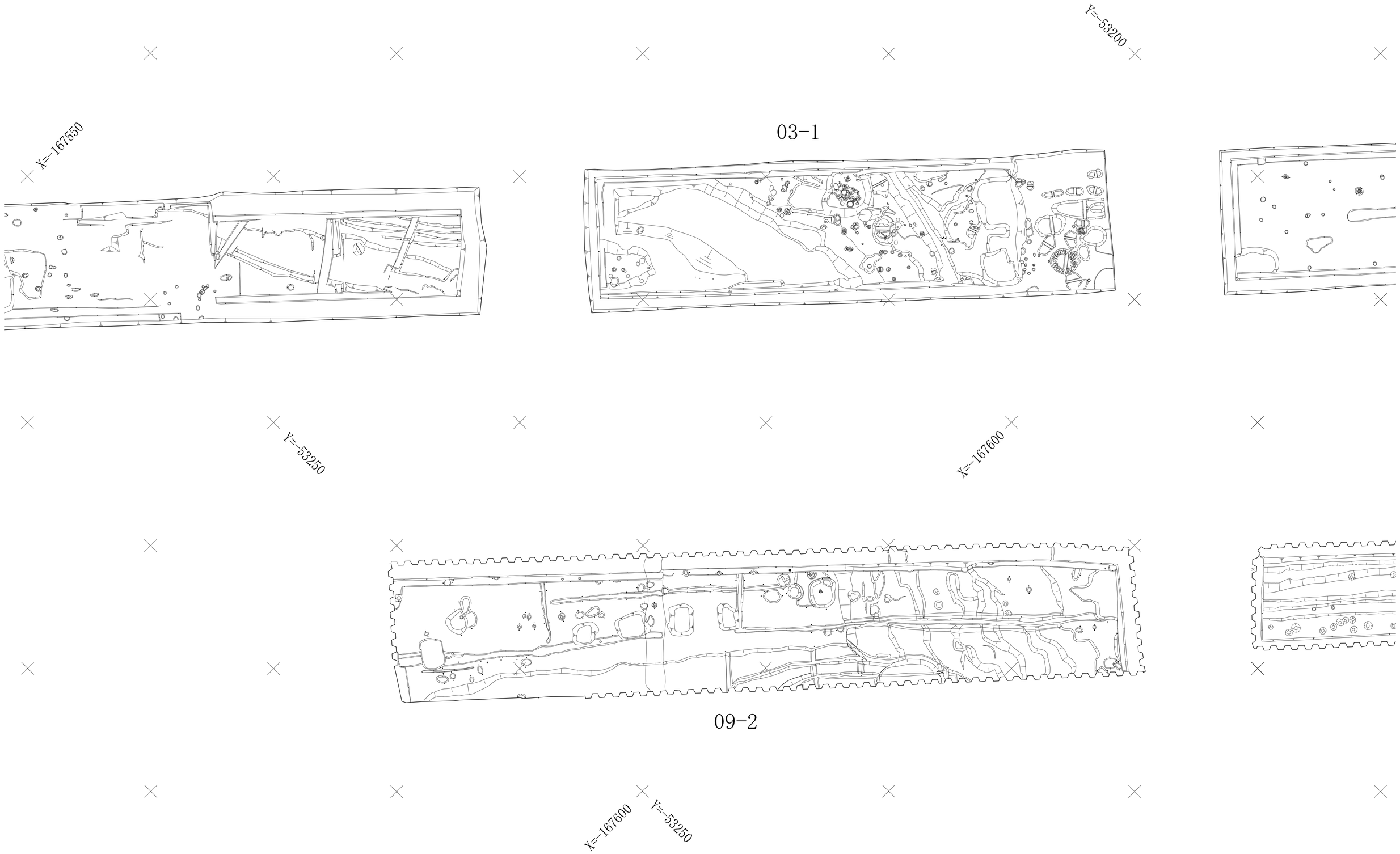
249


161
160
157
149
159
156
155
162
158

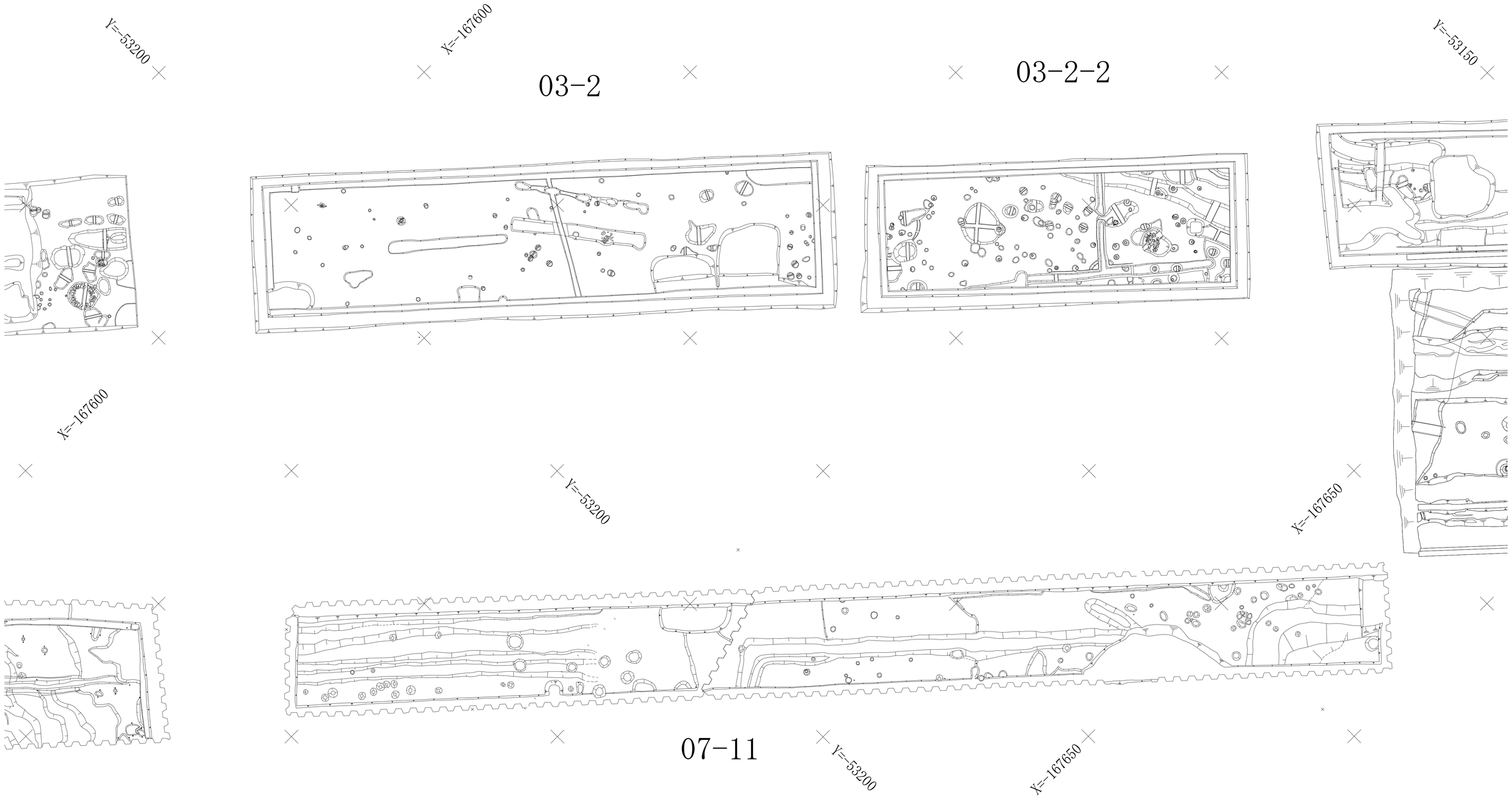

236
239
238
237
241
349
354
369



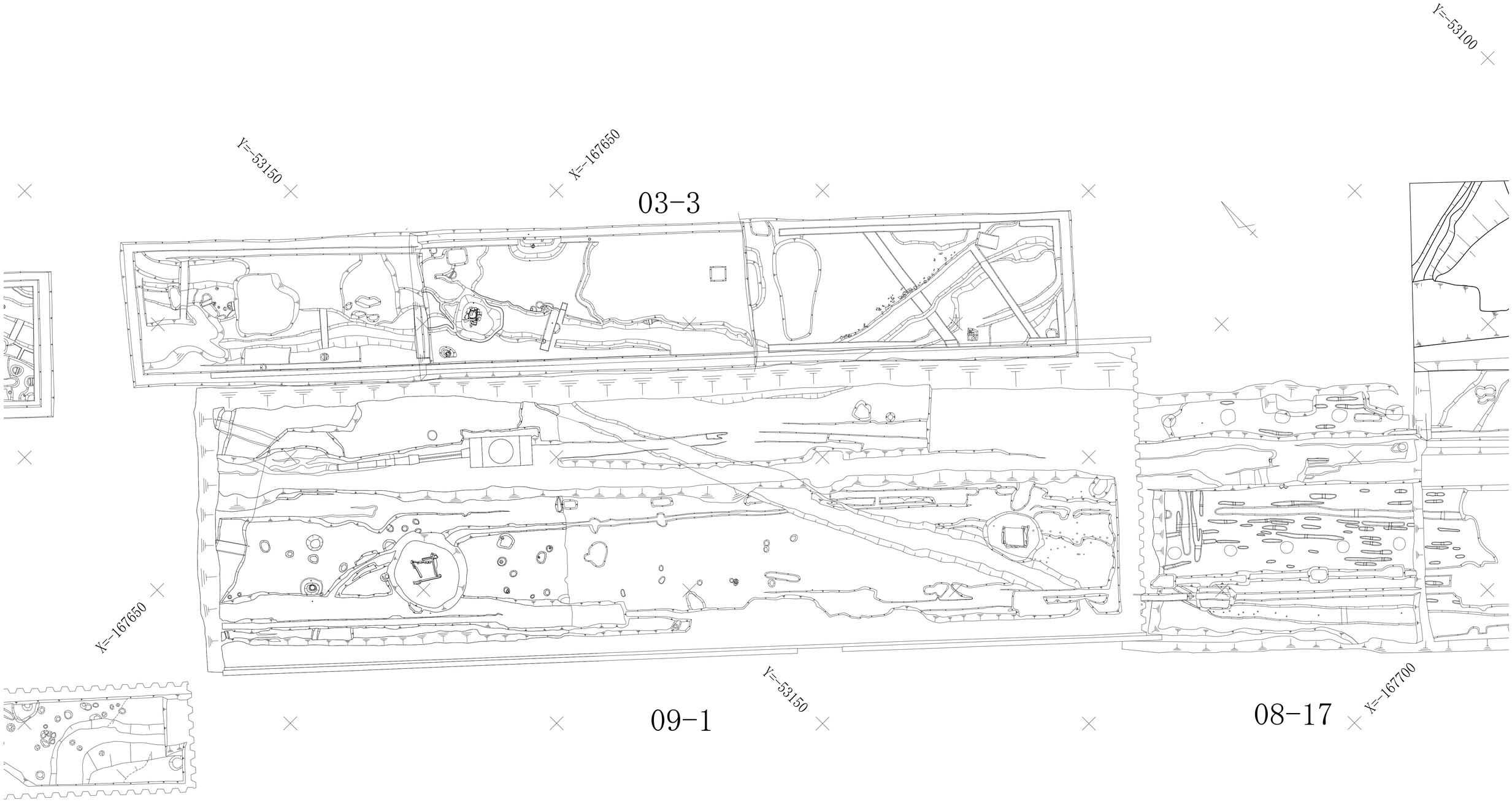
付図１　04-3 区平面図（S＝1/100）



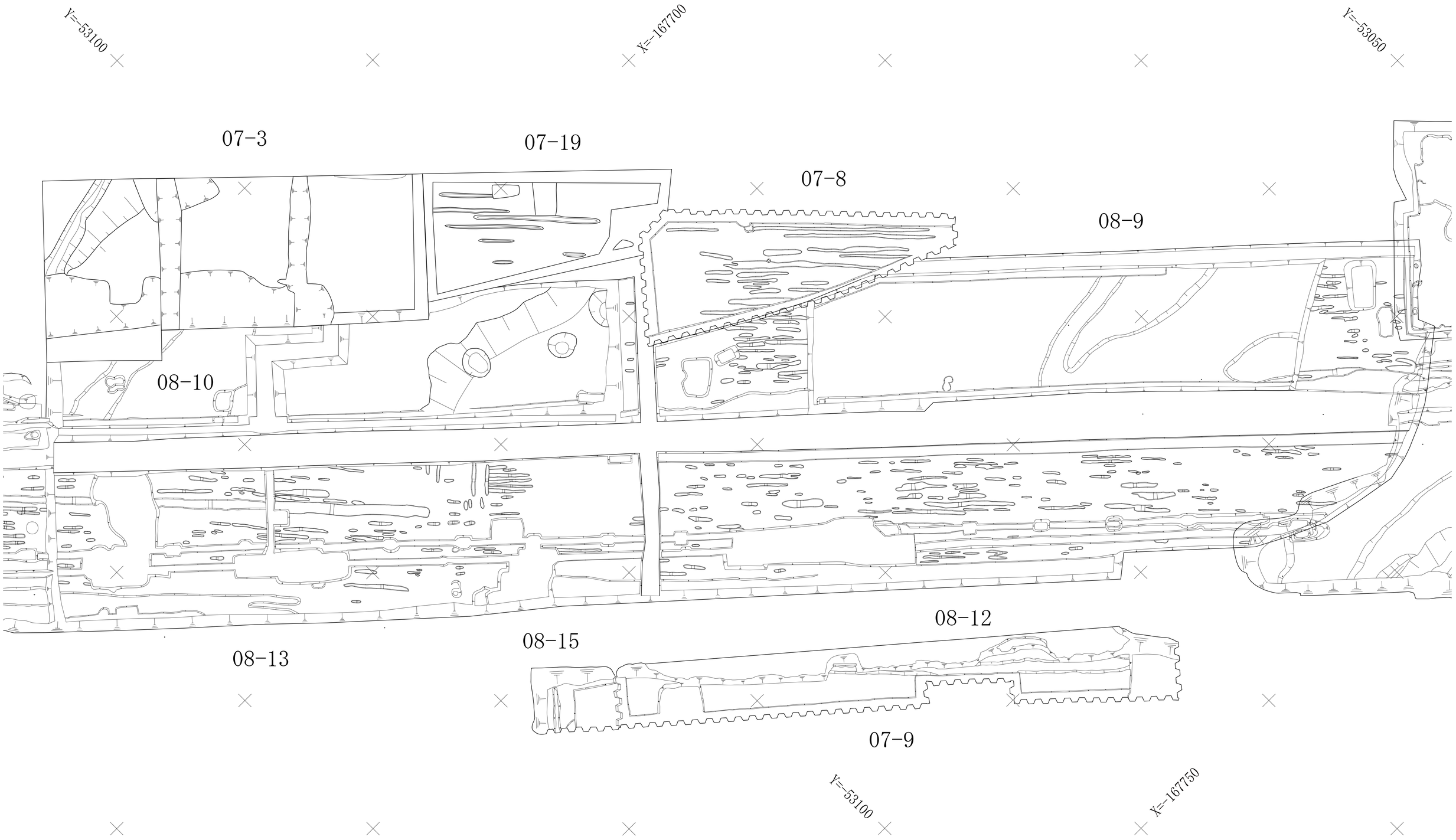
付図２　03-1 区・09-2 区平面図（S＝1/100）



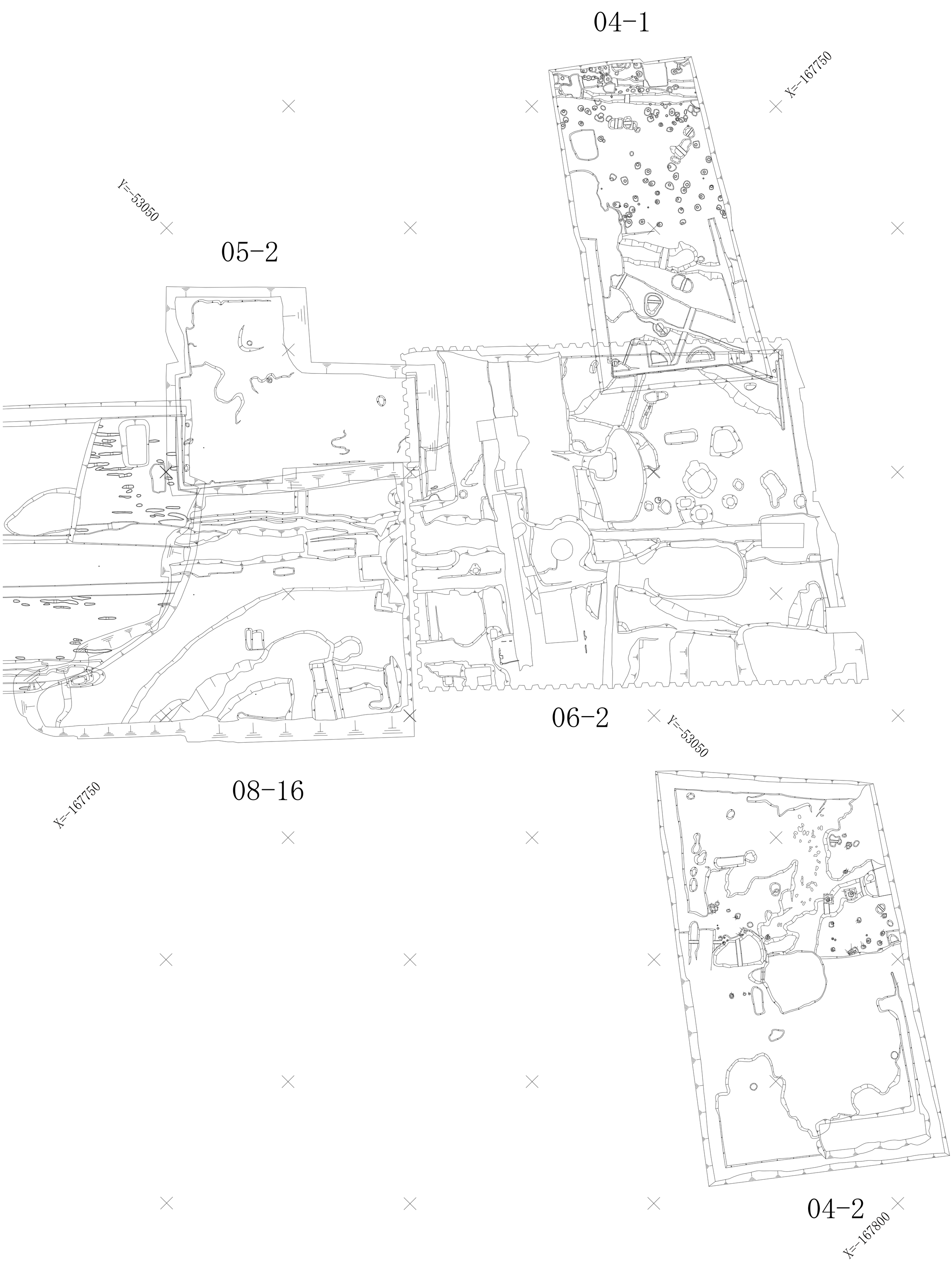
付図 3　03-2 区・03-2-2 区・07-11 区平面図（S＝1/100）



付図４　03-3 区・08-17 区・09-1 区平面図（S＝1/100）



付図５　07-3 区・07-8 区・07-9 区・07-19 区・08-9 区・08-10 区・08-12 区・08-13 区・08-15 区平面図（S＝1/100）



付図 6　04-1・04-2 区・05-2 区・06-2 区・08-16 区平面図（S＝1/100）